

Collaboration - File Sharing システム管
理者ガイド

解説・手引・操作書

3020-3-H13-A0

■ 対象製品

P-2446-5U64 Groupmax Collaboration - File Server 07-90 (適用 OS : Windows Server 2012^{*}, Windows Server 2012 R2^{*}, Windows Server 2008 R2^{*}, Windows Server 2008 x64^{*}, Windows Server 2008 x86)

P-2646-6364 Groupmax Collaboration Portal 07-91 (適用 OS : Windows Server 2012^{*}, Windows Server 2012 R2^{*}, Windows Server 2008 R2^{*}, Windows Server 2008 x64^{*}, Windows Server 2008 x86)

P-2746-E364 Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-91 (適用 OS : Windows Server 2012^{*}, Windows Server 2012 R2^{*}, Windows Server 2008 R2^{*}, Windows Server 2008 x64^{*}, Windows Server 2008 x86)

注※ WOW64 環境だけで使用できます。

■ 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

■ 商標類

Borland のブランド名および製品名はすべて、米国 Borland Software Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

CORBA は、Object Management Group が提唱する分散処理環境アーキテクチャの名称です。

GIF は、米国 CompuServe Inc.が開発したフォーマットの名称です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Internet Information Services は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft および Excel は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Office Word は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

Visual C++ は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows NT は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Vista は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他記載の会社名、製品名は、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

This product includes software developed by Greg Stein <gstein@lyra.org> for use in the mod_dav module for Apache (http://www.webdav.org/mod_dav/).

■ マイクロソフト製品の表記について

このマニュアルでは、マイクロソフト製品の名称を次のように表記しています。

表記	製品名
Internet Explorer	Microsoft ^(R) Internet Explorer
	Windows ^(R) Internet Explorer ^(R)
Internet Information Services	Microsoft ^(R) Internet Information Services
Excel	Microsoft ^(R) Office Excel
Word	Microsoft ^(R) Office Word

表記		製品名
VC++		Microsoft ^(R) Visual C++ ^(R)
Windows 7		Microsoft ^(R) Windows ^(R) 7 Enterprise 日本語版 (32 ビット版)
		Microsoft ^(R) Windows ^(R) 7 Enterprise 日本語版 (64 ビット版)
		Microsoft ^(R) Windows ^(R) 7 Professional 日本語版 (32 ビット版)
		Microsoft ^(R) Windows ^(R) 7 Professional 日本語版 (64 ビット版)
		Microsoft ^(R) Windows ^(R) 7 Ultimate 日本語版 (32 ビット版)
		Microsoft ^(R) Windows ^(R) 7 Ultimate 日本語版 (64 ビット版)
Windows Server 2008 x86		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2008 Enterprise 32-bit 日本語版
		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2008 Standard 32-bit 日本語版
Windows Server 2008 x64		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2008 Enterprise 日本語版
		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2008 Standard 日本語版
Windows Server 2008 R2		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2008 R2 Enterprise 日本語版
		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2008 R2 Standard 日本語版
Windows Vista	Windows Vista Business	Microsoft ^(R) Windows Vista ^(R) Business 日本語版 (32 ビット版)
		Microsoft ^(R) Windows Vista ^(R) Business 日本語版 (64 ビット版)
	Windows Vista Enterprise	Microsoft ^(R) Windows Vista ^(R) Enterprise 日本語版 (32 ビット版)
		Microsoft ^(R) Windows Vista ^(R) Enterprise 日本語版 (64 ビット版)
	Windows Vista Ultimate	Microsoft ^(R) Windows Vista ^(R) Ultimate 日本語版 (32 ビット版)
		Microsoft ^(R) Windows Vista ^(R) Ultimate 日本語版 (64 ビット版)
Windows Server 2012		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2012 Datacenter 日本語版
		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2012 Standard 日本語版
Windows Server 2012 R2		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2012 R2 Datacenter 日本語版
		Microsoft ^(R) Windows Server ^(R) 2012 R2 Standard 日本語版
Windows 8.1		Windows ^(R) 8.1 Pro 日本語版 (32 ビット版)
		Windows ^(R) 8.1 Enterprise 日本語版 (32 ビット版)
		Windows ^(R) 8.1 Pro 日本語版 (64 ビット版)
		Windows ^(R) 8.1 Enterprise 日本語版 (64 ビット版)

このマニュアルでは、特に断りのない場合は、Windows 7、Windows Server 2008 x86、Windows Server 2008 x64、Windows Server 2008 R2、Windows Vista、Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2、および Windows 8.1 を総称して Windows と表記しています。

■ 発行

2015年4月 3020-3-H13-A0

■ 著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2004, 2015, Hitachi, Ltd.

変更内容

変更内容 (3020-3-H13-A0) Groupmax Collaboration - File Server 07-90, Groupmax Collaboration Portal 07-91, Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-91

追加・変更内容	変更箇所
次の OS を対象製品の適用 OS に追加しました。 • Windows Server 2012 R2	—

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

このマニュアルは、File Sharing の機能、環境設定ならびに運用方法について説明したものです。

■ 対象読者

File Sharing の環境を管理および運用するシステム管理者またはシステムインテグレーターを対象としています。なお、次に示す項目を熟知していることを前提としています。

- 使用する OS (Operating System) および Web ブラウザの操作
- [ファイル共有] ポートレットの各機能および操作 (マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」をお読みください)
- 使用するデータベース (HiRDB) の操作

■ 読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて次の個所をお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的		記述箇所
File Sharing の概要について知りたい		1.1 節
File Sharing のシステム構成、および File Sharing サーバのプロセス構成について知りたい		1.2 節, 1.3 節
環境設定の方法を知りたい	環境設定の流れ	2.1 節
	各種リソースの見積もり方法	2.2 節, 2.3 節, 2.4 節
	システム管理者の決定方法	2.5 節
	File Sharing サーバのインストール手順	2.6 節
	インストール時のトラブル対処方法	付録 C
	File Sharing サーバシステムの環境設定方法	3 章
	File Sharing クライアントシステムの環境設定方法	4 章
	環境設定で使用するファイル	5 章
	運用開始前の準備	6 章
	システム導入支援機能を使用しない場合の設定方法	付録 D
	文書空間の文字コード種別を UTF-8 に変更する手順	付録 E
運用方法を知りたい	運用作業でできること	7.1 節
	File Sharing サーバの起動と終了の方法	7.2 節
	ファイル転送サービスの開始と停止の方法	7.3 節
	データベースの運用方法	7.4 節
	ファイルシステムの運用方法	7.5 節
	個人フォルダとコミュニティフォルダの運用方法	7.6 節
	グループフォルダの運用方法	7.7 節

マニュアルを読む目的		記述箇所
運用方法を知りたい	運用開始後の割り当て条件の設定	7.8 節, 7.9 節
	アクセス履歴を取得する運用方法	7.10 節
	監査ログの運用方法	7.11 節
	クラスタリングシステムでの運用方法	付録 B
コマンドについて知りたい		8 章
障害対策について知りたい		9 章
File Sharing サーバと File Sharing クライアントのディレクトリ構成について知りたい		付録 A
File Sharing のファイルをエクスポートする際に使用するファイルについて知りたい		付録 F
File Sharing サーバプロセス数の設定について知りたい		付録 G
旧バージョンから移行する手順について知りたい		付録 H, 付録 I, 付録 J, 付録 K, 付録 L, 付録 M, 付録 N
このマニュアルを読むに当たっての参考情報について知りたい		付録 O
File Sharing に関する用語について知りたい		付録 P

■ 構文の説明で使用する記号

このマニュアルでは、次に示す記号を使用して構文を説明しています。

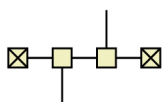
記号	意味
	横に並べられた複数の項目に対する項目間の区切りを示し、「または」の意味を表します。 (例) A B A または B を指定することを示します。
—	括弧で囲まれた複数項目のうち 1 項目に対して使用され、括弧内のすべてを省略した場合にシステムが取る標準値を示します。 (例) [A B] 何も指定しない場合は A が指定されます。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから一つを選択することを意味します。項目が横に並べられ、記号 で区切られている場合は、そのうちの一つを選択します。 (例) {A B C} A, B, または C のどれかを指定することを示します。
[]	この記号で囲まれている項目は省略してよいことを意味します。複数の項目が横に並べて記述されている場合は、すべてを省略するか、記号{ }と同じくどれか一つを選択します。 (例 1) [A] 「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。 (例 2) [B C] 「何も指定しない」か「B または C を指定する」ことを示します。
< >	この記号で囲まれている項目は、該当する要素を指定することを示します。 (例) <プロパティ>

記号	意味
< >	プロパティを記述します。
::=	この記号の左にあるものを右にあるもので定義することを示します。 (例) A ::= B 「A とは B である」と定義することを示します。
...	この記号の直前の項目を繰り返し、複数個指定できることを示します。 (例) A... A を複数個指定できることを示します。

■ 図中で使用する記号

このマニュアルの図中で使用する記号を、次のように定義します。

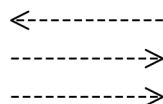
● ネットワーク
(LAN)



● データの流れ



● 制御の流れ



目次

1	File Sharing の概要	1
1.1	File Sharing とは	2
1.1.1	File Sharing の機能	2
1.1.2	File Sharing で管理するファイルとフォルダ	3
1.1.3	File Sharing のクライアントとサーバ	4
1.2	File Sharing のシステム構成	8
1.2.1	File Sharing を構成するプログラムと前提プログラム	8
1.2.2	前提 OS	10
1.2.3	File Sharing で利用できる Web ブラウザ	10
1.3	File Sharing サーバのプロセス構成	11
1.3.1	基本プロセス構成	11
1.3.2	プロセスの関連	12
2	File Sharing の環境設定の準備	15
2.1	File Sharing の環境設定の流れ	16
2.2	パーソナライズ情報の見積もり	19
2.3	メモリ所要量とディスク占有量の見積もり	20
2.3.1	メモリ所要量の見積もり	20
2.3.2	ディスク占有量の見積もり	21
2.4	データベース容量の見積もり	24
2.4.1	データベース容量の見積もり方法	24
2.4.2	ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり	24
2.4.3	ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり例	30
2.4.4	データベース容量の見積もり時の注意事項	35
2.5	システム管理者の決定	36
2.6	インストールとアンインストール	37
2.6.1	File Sharing サーバのインストール	37
2.6.2	File Sharing サーバのリモートインストール	38
2.6.3	File Sharing サーバのアンインストール	38
2.6.4	File Sharing クライアントのインストールとアンインストール	40
3	File Sharing サーバシステムの設定	41
3.1	File Sharing サーバシステムの設定手順	42
3.2	TPBroker での環境設定	44
3.3	文書空間識別子の定義	45
3.4	文書空間の定義	46

3.4.1	文書空間を定義する前の準備	46
3.4.2	文書空間定義時の注意事項	47
3.5	アクセス制御機能に関する設定	48
3.5.1	セキュリティ運用者の決定	48
3.5.2	セキュリティ管理者の定義	48
3.6	ユーザ認証に関する設定	49
3.7	データベースサーバでの環境設定	50
3.7.1	HiRDB の環境設定の準備	50
3.7.2	HiRDB の環境設定	50
3.7.3	HiRDB のユーザ権限の設定	53
3.7.4	データベースサーバ設定時の注意事項	53
3.8	データベースサーバを使用するための設定	54
3.8.1	HiRDB クライアントの設定	54
3.9	文書空間の構築	55
3.9.1	文書空間の構築コマンドの実行	55
3.10	ファイルシステムを使用するための設定	56
3.10.1	ファイル実体の格納先の確保	56
3.10.2	ファイル実体の格納先のアクセス権限の設定	58
3.10.3	ネットワーク上のマシンの共有ディスクを使用する場合の設定	58
3.11	File Sharing サーバのサービスプロセスの設定	60
3.12	複数の実行環境を構築する場合の設定	61

4

File Sharing クライアントシステムの設定		63
4.1	File Sharing クライアントシステムの設定手順	64
4.2	TPBroker での環境設定	66
4.3	File Sharing クライアントの実行環境の作成	67
4.4	ファイル転送機能を使用する場合の設定	69
4.4.1	ファイル転送機能の概要	69
4.4.2	ファイル転送機能のための File Sharing クライアントでの環境設定	72
4.4.3	ファイル転送機能のための File Sharing サーバでの環境設定	73
4.5	ポートレット機能の設定	75
4.5.1	ポートレット機能を使用するためのアプリケーションサーバの設定	75
4.5.2	ポートレット機能を使用するための File Sharing クライアントの設定	76
4.6	アクセス履歴を取得するための設定	77
4.7	オブジェクト操作ツールの設定	78
4.7.1	オブジェクト操作ツールの実行ユーザについて	78
4.7.2	環境変数の設定	78
4.7.3	オブジェクト操作ツールの実行環境のセットアップ	78
4.7.4	実行環境制御ファイルの編集	79
4.7.5	クラス定義情報ファイルの取得	79

4.7.6	オブジェクト操作ツールの実行環境の更新	80
5	File Sharing の環境設定に必要なファイル	81
5.1	ファイルの種類	82
5.2	File Sharing サーバで使用するファイル	86
5.2.1	System Object INI ファイル (slocalreg.ini)	86
5.2.2	オブジェクト定義ファイル (edms.ini)	86
5.2.3	DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)	86
5.2.4	セキュリティ定義ファイル (docaccess.ini)	95
5.2.5	ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini)	96
5.2.6	メタ情報ファイル	105
5.2.7	定義情報ファイル	105
5.2.8	RD エリア定義情報ファイル	106
5.2.9	インデクス情報ファイル	107
5.2.10	サービスプロセス定義ファイル (process.ini)	108
5.2.11	ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini)	109
5.2.12	File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)	112
5.2.13	見積もり情報定義ファイル	113
5.2.14	文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt)	121
5.2.15	見積もり基礎情報ファイル	127
5.3	File Sharing クライアントで使用するファイル	131
5.3.1	クラス定義情報ファイル	131
5.3.2	ファイル転送サービス環境定義ファイル (ftpsv.ini)	131
5.3.3	レンディション定義ファイル (mime.properties)	133
5.3.4	動作環境定義ファイル (conf.properties)	134
5.3.5	環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)	137
5.3.6	実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini)	152
5.3.7	クライアントアプリケーション動作定義ファイル (application.ini)	157
5.3.8	File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)	158
5.3.9	組織/ユーザ情報ファイル	158
6	File Sharing の運用開始前の準備	163
6.1	運用開始までの流れ	164
6.2	ファイルシステムの運用方法の検討	166
6.2.1	ベースパス情報の検討	166
6.2.2	最大許容サイズ情報の検討	168
6.2.3	ファイルシステムの運用の考え方	170
6.2.4	ファイルシステムの運用例	171
6.3	ファイルシステムの見積もり	182
6.3.1	最大予約可能容量の見積もり	182

6.3.2	最大使用可能容量またはファイルシステムのディスク容量の見積もり	184
6.3.3	ファイルシステムの見積もり例	185
6.3.4	最大許容サイズを設定しない運用の場合のファイルシステムの容量の見積もり	188
6.4	デフォルトのベースパス情報の登録	189
6.5	デフォルトの最大許容サイズ情報の登録	192
6.6	運用開始前のベースパス情報の設定	194
6.7	運用開始前の最大許容サイズ情報の設定	198

7

File Sharing の運用	203
7.1 File Sharing の運用作業	204
7.2 File Sharing サーバの起動と終了	206
7.2.1 File Sharing サーバの起動方法	206
7.2.2 File Sharing サーバの終了方法	208
7.3 ファイル転送サービスの開始と停止	209
7.3.1 ファイル転送サービスの開始方法	209
7.3.2 ファイル転送サービスの停止方法	209
7.4 データベースの運用	211
7.4.1 データベースのバックアップとリストア	211
7.4.2 ジャーナルファイルの運用	213
7.4.3 データベースのレプリケーション	214
7.5 ファイルシステムの運用	215
7.5.1 ベースパス情報の最大予約可能容量の見積もり (最大使用可能容量よりも大きな値を設定する場合)	215
7.5.2 ベースパス情報の使用量の監視	217
7.5.3 ファイル実体の格納先ディレクトリの運用方法	220
7.5.4 ファイルシステムのバックアップとリストア	220
7.6 個人フォルダとコミュニティフォルダの運用	222
7.6.1 個人ルートフォルダの削除	223
7.6.2 コミュニティルートフォルダの削除	225
7.7 グループフォルダの運用	229
7.7.1 グループフォルダの運用例	229
7.7.2 グループフォルダを運用するための作業の一覧	231
7.7.3 グループルートフォルダの作成	232
7.7.4 グループルートフォルダの情報の参照	232
7.7.5 グループフォルダの利用者の設定	233
7.7.6 グループフォルダの運用者の設定	233
7.7.7 グループルートフォルダの非表示化	233
7.7.8 グループルートフォルダの削除	234
7.7.9 グループフォルダ運用時の注意事項	236
7.8 運用開始後のベースパス情報の設定	237
7.9 運用開始後の最大許容サイズ情報の設定	238

7.10	ごみ箱の設定	239
7.10.1	ごみ箱を使用する設定に変更する	239
7.10.2	ごみ箱を使用しない設定に変更する	239
7.11	アクセス履歴の取得	240
7.11.1	アクセス履歴ファイルの出力先ディレクトリとファイル名	241
7.11.2	アクセス履歴として取得できる情報	242
7.11.3	アクセス履歴の運用例	246
7.11.4	注意事項	248
7.12	監査ログの運用	249
7.12.1	File Sharing で出力される監査ログの流れ	249
7.12.2	File Sharing の監査ログの取得対象となる監査事象	249
7.12.3	監査ログが出力される操作	250
7.12.4	監査ログに出力されるオブジェクト情報と動作情報	254
7.12.5	監査ログを出力するための設定	257
7.12.6	監査ログの出力項目と出力形式	257
7.12.7	監査ログの運用時の注意事項	259
8	File Sharing のコマンド	261
8.1	File Sharing サーバのコマンドの概要	262
8.1.1	File Sharing サーバのコマンド一覧	262
8.1.2	File Sharing サーバのコマンドの形式	263
8.2	File Sharing サーバのコマンドの詳細	266
	EDMAddMeta (メタ情報の追加)	266
	EDMBuildDocSpace (文書空間の構築)	267
	EDMDefDocSpace (文書空間の定義)	269
	EDMChkTbl (データベースの表・列の確認)	271
	EDMCrtSimMeta (クラス定義情報ファイルの作成)	272
	EDMCrtSql (File Sharing 用データベース定義文の作成)	273
	EDMDelMeta (メタ情報の削除)	274
	EDMGetRas (File Sharing サーバの障害情報の取得)	275
	EDMInitMeta (メタ情報の初期設定)	277
	EDMPrintMeta (メタ情報ファイルの出力)	279
	EDMRefresher (サービスプロセスのリフレッシュ)	279
	EDMRegEnvId (File Sharing サーバ実行環境の情報の登録)	280
	EDMStart (File Sharing サーバの起動)	282
	EDMStop (File Sharing サーバの終了)	282
	EDMUsrView (文書空間に接続しているユーザー一覧出力)	283
8.3	File Sharing クライアントのコマンドの概要	287
8.3.1	File Sharing クライアントのコマンド一覧	287
8.3.2	File Sharing クライアントのコマンドの形式	287

8.4	File Sharing クライアントのコマンドの詳細	288
	EDMGetRasCL (File Sharing クライアントの障害情報の取得)	288
	FtpSvStart (ファイル転送サービスの開始)	291
	FtpSvStop (ファイル転送サービスの停止)	291
8.5	オブジェクト操作ツールのコマンドの概要	293
8.5.1	オブジェクト操作ツールのコマンド一覧	293
8.5.2	オブジェクト操作ツールのコマンドの形式	293
8.6	オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細	297
	dbrcrtdata (独立データの作成)	297
	dbrdelacl (パブリック ACL の削除)	297
	dbrdelcntr (フォルダの削除)	298
	dbrdeldata (独立データの削除)	299
	dbrexquery (問い合わせの実行)	300
	dbrgetprop (プロパティの取得)	301
	dbrsetprop (プロパティの設定)	301
	dbrtoolsetup (実行環境のセットアップ)	302
8.7	File Sharing クライアント運用コマンドの概要	304
8.7.1	File Sharing クライアント運用コマンドの一覧	304
8.7.2	File Sharing クライアント運用コマンドの形式	304
8.8	File Sharing クライアント運用コマンドの詳細	307
	cfsaddgrpmngr (グループフォルダの運用者の追加)	307
	cfsaddgrpprm (グループフォルダのアクセス権の追加)	308
	cfschgcode (ファイルの文字コードセットの変換)	310
	cfschggrpfldr (グループルートフォルダの非表示化)	311
	cfschkusdspc (ベースパス情報の使用量の確認)	312
	cfsctgrpfldr (グループルートフォルダの作成)	313
	cfsdelgrpmngr (グループフォルダの運用者の削除)	316
	cfsdelgrpprm (グループフォルダのアクセス権の削除)	318
	cfsexpfile (ファイルのエクスポート)	320
	cfslstad (ベースパス情報の取得)	324
	cfslstfldr (ルートフォルダの情報の一覧表示)	327
	cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得)	328
	cfslstqt (最大許容サイズ情報の取得)	331
	cfsmodgrpprm (グループフォルダのアクセス権の変更)	334
	cfsoid2name (アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換)	336
9	File Sharing の障害対策	339
9.1	障害発生時に利用できる情報	340
9.1.1	メッセージ	340
9.1.2	File Sharing クライアントの詳細メッセージ	340

9.1.3	トレースファイル	340
9.1.4	RAS 収集	347
9.1.5	文書空間へのアクセスログ	348
9.1.6	エラーログ	350
9.1.7	オブジェクト操作ツールのコマンド実行ログ	351
9.2	障害発生個所による対処	355
9.2.1	File Sharing サーバシステムでの障害	355
9.2.2	データベースでの障害	355
9.2.3	ファイルシステムでの障害	356
9.2.4	セッション障害	356
9.2.5	定義情報の障害	357
9.2.6	ログの障害	357
9.2.7	File Sharing サーバでの障害	358
9.3	障害情報の取得	359
9.3.1	File Sharing サーバで発生した障害情報の取得	359
9.3.2	File Sharing クライアントで発生した障害情報の取得	360

付録 363

付録 A	ディレクトリ構成	364
付録 A.1	File Sharing サーバのディレクトリ構成	364
付録 A.2	File Sharing クライアントのディレクトリ構成	365
付録 B	クラスタリングシステムでの運用	368
付録 B.1	Microsoft Cluster Server を使用したクラスタリングシステムでの運用	368
付録 B.2	クラスタリングシステムで運用するための環境設定	369
付録 B.3	クラスタリングシステムでの File Sharing サーバの起動と終了	373
付録 C	インストール時のトラブル	374
付録 C.1	媒体からのインストール時のトラブル	374
付録 C.2	リモートインストール時のトラブル	378
付録 D	システム導入支援機能を使用しない場合の設定	380
付録 D.1	ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり	380
付録 D.2	HiRDB の環境設定	390
付録 D.3	データベースサーバを使用するための File Sharing サーバの設定	392
付録 E	文書空間の文字コード種別を Shift-JIS から UTF-8 に変更する手順	396
付録 F	ファイルのエクスポートコマンド (cfsexpfile) で使用するファイル	410
付録 F.1	コンテンツデータファイル	410
付録 F.2	コンテンツ	412
付録 F.3	アクセス権一覧ファイル	412
付録 G	File Sharing サーバプロセス数の設定	414
付録 H	File Sharing 01-10 からの移行手順	416

付録 I File Sharing 01-20 からの移行手順	424
付録 I.1 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を設定する場合	424
付録 I.2 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定する場合	448
付録 J File Sharing 01-30 からの移行手順	456
付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順	460
付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順	463
付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順	467
付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順	468
付録 O このマニュアルの参考情報	481
付録 O.1 関連マニュアル	481
付録 O.2 このマニュアルでの表記	484
付録 O.3 英略語	485
付録 O.4 KB (キロバイト) などの単位表記について	486
付録 P 用語解説	487

索引

493

1

File Sharing の概要

この章では、File Sharing の概要、システム構成および File Sharing サーバのプロセス構成について説明します。

1.1 File Sharing とは

File Sharing は、Collaboration のユーザがファイルとフォルダを共有するための製品です。

ここでは、File Sharing の機能、File Sharing で管理するファイルとフォルダ、および File Sharing を構成するクライアントとサーバについて説明します。

1.1.1 File Sharing の機能

Collaboration は、組織階層を超えた情報共有・協働作業を支援する企業ポータルです。ビジネスに効果的なさまざまなコラボレーションを実現します。File Sharing は、Collaboration のシステムの中で、個人が所有するファイルやコミュニティで共有するフォルダやファイル、および組織単位やユーザ単位で共有するファイルやフォルダを、Web ブラウザを通して共有、操作するためのコンポーネントです。

File Sharing を利用することによって、次のようなファイル共有を実現できます。

- **物理的な格納場所を意識しないファイルの共有を実現**

File Sharing は、uCosminexus Portal Framework を基盤としたポータル画面上でのファイル共有を実現します。これによって、ファイルの物理的な格納場所を意識しないで、インターネットおよびイントラネット上の任意のクライアントマシンから、Web ブラウザを使用してファイルに適宜アクセスできます。

- **ほかのユーザからの上書きの防止**

ファイルをロック（ファイルロック機能を使用）することによって、ロックしたユーザだけがファイルを編集できるようになります。これによって、ほかのユーザからの上書きを防止できます。

- **ファイルやフォルダに対するきめ細やかなアクセス権の設定**

ユーザ、組織、役割など、さまざまな単位に細分化してアクセス権を設定できます。これによって、ファイルやフォルダに対する不正なアクセスを防止して、機密保護を実現できます。

- **ファイルやフォルダに対してユーザが実行した操作の履歴を取得**

ファイルまたはフォルダに対して、「いつ」、「だれが」、「どんな操作をしたか」をアクセス履歴として取得できます。これによって、File Sharing の利用状況を確認できます。

- **利用者による各種操作の履歴を監査ログとして取得**

File Sharing のポートレットに対する操作、コマンド実行による操作の履歴を監査ログとして取得できます。監査者は、監査ログを調査することで、「いつ」、「だれが」、「何をしたか」を確認できます。

- **運用性の高いシステムの構築**

ファイルやフォルダの属性情報はデータベースで、ファイルの実体はファイルシステムで管理します。これによって、大容量基幹システムでファイルの共有を実現する場合にも、運用開始後のファイル実体格納先の移行や拡張などを柔軟に実現できるようになります。

- **Collaboration のほかのコンポーネントとの連携**

Collaboration のほかのコンポーネントとスムーズな連携ができます。

- ファイルの格納先を示す URL を、[メール] ポートレットのメールまたは [電子会議室] ポートレットの発言にドラッグ&ドロップで記載できます。
- ファイル実体を、[メール] ポートレット、[電子会議室] ポートレットまたは [電子掲示板] ポートレットの添付ファイルにドラッグ&ドロップで設定できます。
- [ファイル共有] ポートレットでは、画面に表示されるユーザ名のアンカーを右クリックすると、右クリックメニューが表示されます。右クリックメニューの項目を選択して、メールを送信したり、スケジュールを表示したりできます。

- [メール] ポートレットで送受信したメールを、振り分けルールの設定によって [ファイル共有] ポートレットのフォルダに格納して管理できます。

1.1.2 File Sharing で管理するファイルとフォルダ

File Sharing で管理するファイルとフォルダについて説明します。

ファイル

File Sharing で管理するファイルは、概念的なファイルです。ファイル実体に加えて、File Sharing で管理するために必要な属性情報もファイルの一部として管理します。

ファイル実体と属性情報について説明します。

- **ファイル実体**

Collaboration のユーザが共有する、ファイルそのものです。File Sharing では、テキストファイル、画像ファイル、Word などのアプリケーションで作成したファイルなど、任意の形式のファイル実体を共有、管理できます。

ファイル実体は、ファイルシステムに格納されます。

- **属性情報**

File Sharing でファイルを共有、管理するためにファイルに付ける属性情報です。属性情報には、ファイルの名前、種類、作成者など、ファイルのプロパティとして使用する情報のほか、ファイル実体の格納先など、ファイルを管理するためにシステムで使用する情報も含まれます。また、アクセス制御に使用する情報も、属性情報として管理されています。

属性情報は、データベースに格納されます。

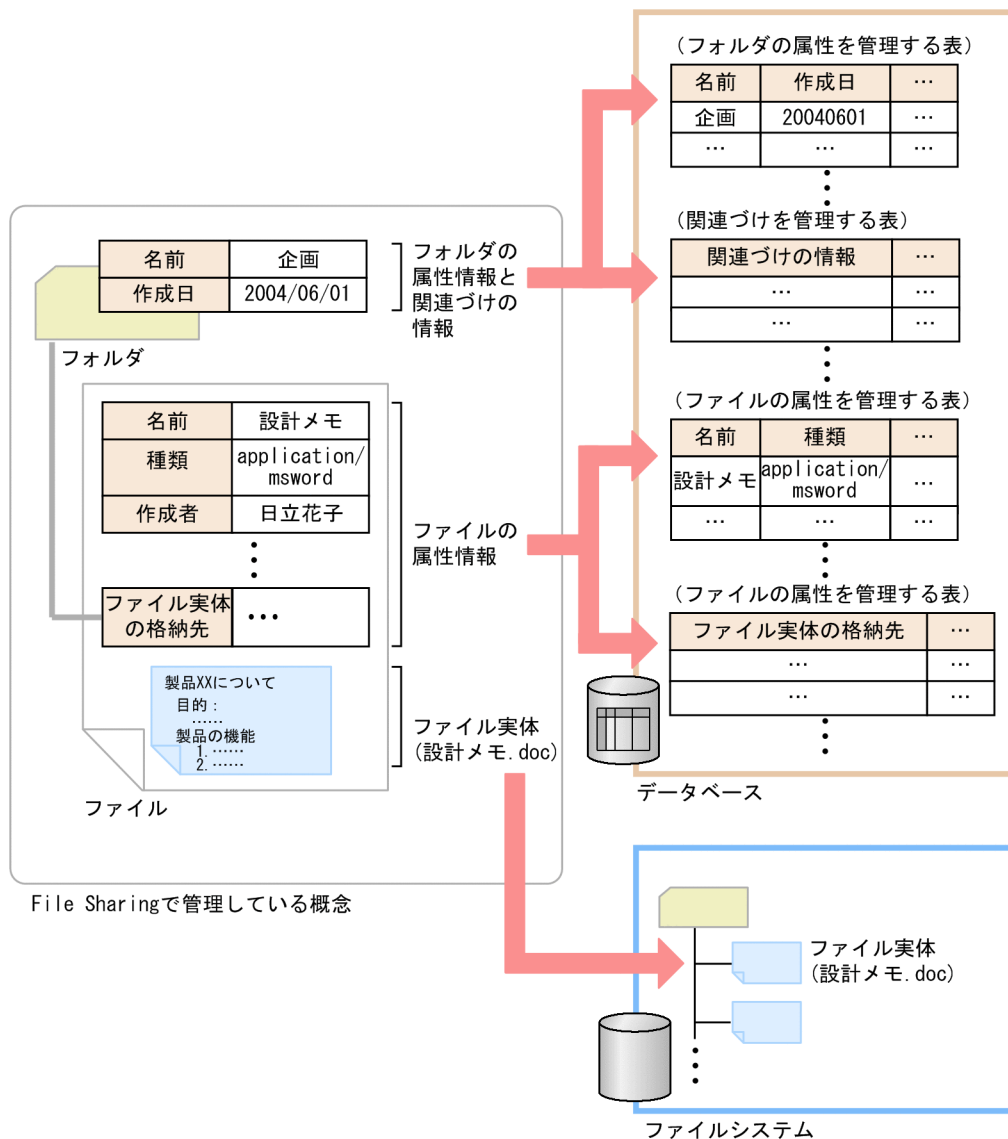
フォルダ

フォルダの属性情報と、フォルダに格納するファイルとの関連づけの情報で構成されます。これらの情報は、すべてデータベースに格納されます。

なお、File Sharing で管理するフォルダには、個人フォルダ、コミュニティフォルダ、およびグループフォルダがあります。個人フォルダ、コミュニティフォルダ、およびグループフォルダの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

File Sharing でのフォルダとファイルの管理方法の概要を、次の図に示します。

図 1-1 File Sharing でのファイルとフォルダの管理方法の概要



1.1.3 File Sharing のクライアントとサーバ

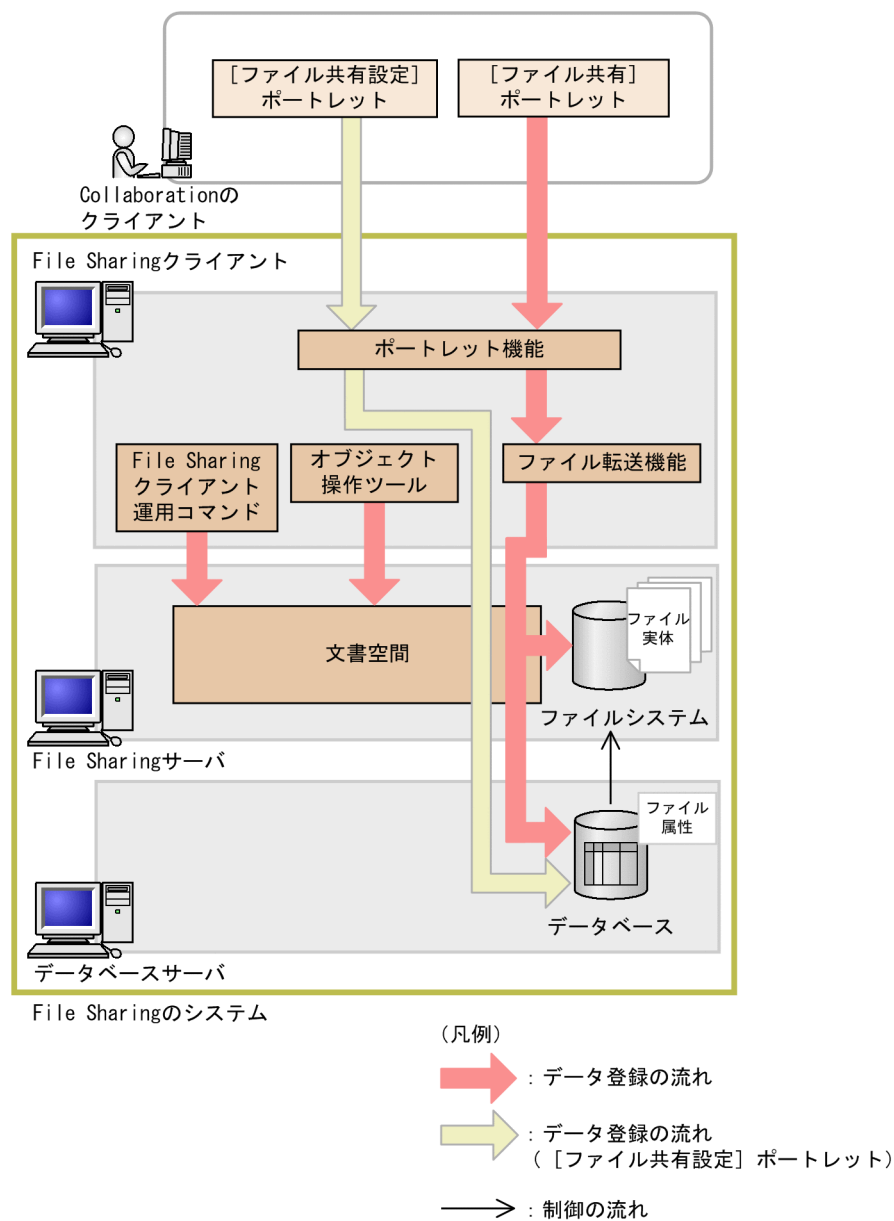
ここでは、File Sharing のクライアントとサーバについて説明します。

File Sharing で構築するシステムは、File Sharing クライアント、File Sharing サーバおよびデータベースサーバで構成されます。このシステムに対して、インターネットまたはイントラネット上の Collaboration のクライアントからアクセスします。

Collaboration のクライアントからファイルとフォルダを操作するには、[ファイル共有] ポートレットを使用します。また、Collaboration のクライアントからファイル実体の格納先であるファイルシステムの情報を設定するためには、[ファイル共有設定] ポートレットを使用します。File Sharing で管理するファイルとフォルダ、ならびにその操作方法の詳細は、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

File Sharing のクライアントとサーバの位置づけとデータおよび制御の流れを次の図に示します。

図 1-2 File Sharing のクライアントとサーバの位置づけとデータおよび制御の流れ



(1) File Sharing を構成するクライアントとサーバ

File Sharing を構成するクライアントとサーバについて説明します。なお、これらのクライアントとサーバは、システムの規模や用途に応じて、同じマシンまたは別のマシンに配置できます。

Collaboration のクライアント

Collaboration のユーザが操作するクライアントです。Web ブラウザを使用して、File Sharing システムにアクセスします。

File Sharing クライアント

File Sharing のクライアントです。また、Collaboration のクライアントに対しては、サーバ (Collaboration のサーバ) に当たります。

File Sharing クライアントには、次に示す機能があります。

- ポートレット機能
File Sharing で管理されるファイルとフォルダを [ファイル共有] ポートレットで操作する機能です。また、ファイル実体を格納するファイルシステムの情報を [ファイル共有設定] ポートレットから設定する機能もあります。
- ファイル転送機能
File Sharing サーバと File Sharing クライアントが異なるマシン上に存在する場合に、File Sharing サーバと File Sharing クライアントの間のファイル転送を実現する機能です。
- オブジェクト操作ツール
File Sharing のメンテナンス用のコマンドです。ベースパス情報や最大許容サイズ情報を設定したり、ルートフォルダを削除したりするときに使用します。
- File Sharing クライアント運用コマンド
File Sharing のメンテナンス用のコマンドです。グルーブルートフォルダを作成したり、グループフォルダの運用者やアクセス権を設定したりするときに使用します。

File Sharing サーバ

File Sharing のサーバです。File Sharing を使用して共有するフォルダとファイルを管理します。

File Sharing を使用して共有するファイルの実体は、File Sharing サーバから接続可能なファイルシステムに格納されます。File Sharing サーバは、ファイルとフォルダの管理に使用する文書空間を管理し、アクセス制御機能および運用コマンドを提供します。

データベースサーバ

File Sharing では、データベースサーバとして HiRDB を使用します。データベースには、Collaboration システムの中でファイルとフォルダを管理するために必要な、ファイルとフォルダの属性情報が格納されます。

参考

データベースに格納されたファイルとフォルダの属性情報は、オブジェクト指向のクラスおよびプロパティの概念を使用して管理されます。

クラスは、ファイルまたはフォルダの種類に対応した属性情報を作成するためのひな形です。それぞれのクラスには、ファイルとフォルダの管理に必要な個々の情報を格納するためのプロパティが定義されています。File Sharing でファイルやフォルダを登録すると、クラスを基に、ファイルやフォルダの属性情報を表すオブジェクトが作成されます。データベース上では、クラスは HiRDB の表に、プロパティは HiRDB の表の列に、それぞれ対応しています。オブジェクトは、HiRDB の表の行に対応しています。このため、[ファイル共有] ポートレットからファイルやフォルダを操作すると、ファイルやフォルダの属性情報を格納した表内の、該当する行のデータが更新されます。

ただし、File Sharing では、運用上必要なクラスやプロパティの詳細情報、定義情報、インデクス情報などを記述した定義ファイルを提供しています。これらの定義ファイルをそのまま使用できるため、ユーザがデータベースの表や列を意識して、個別にクラスやプロパティについて設計したり、追加したりする必要はありません。

(2) アクセスの流れ

Collaboration のクライアントから File Sharing のシステムへのアクセスは、[ファイル共有] ポートレット、または [ファイル共有設定] ポートレットから実行します。各ポートレットからの処理要求は、File Sharing クライアントのポートレット機能が受け付けます。

処理要求を受け付けた File Sharing クライアントによって、File Sharing サーバへのアクセスが実行されます。なお、File Sharing クライアントと File Sharing サーバが別マシンにある場合には、ファイル実体の転送に、ファイル転送機能を使用する必要があります。

File Sharing サーバでは、File Sharing のファイルやフォルダを操作するためのメモリ空間である、**文書空間**を管理しています。File Sharing クライアントから要求されたファイルやフォルダの操作は、**文書空間上**で実行されます。

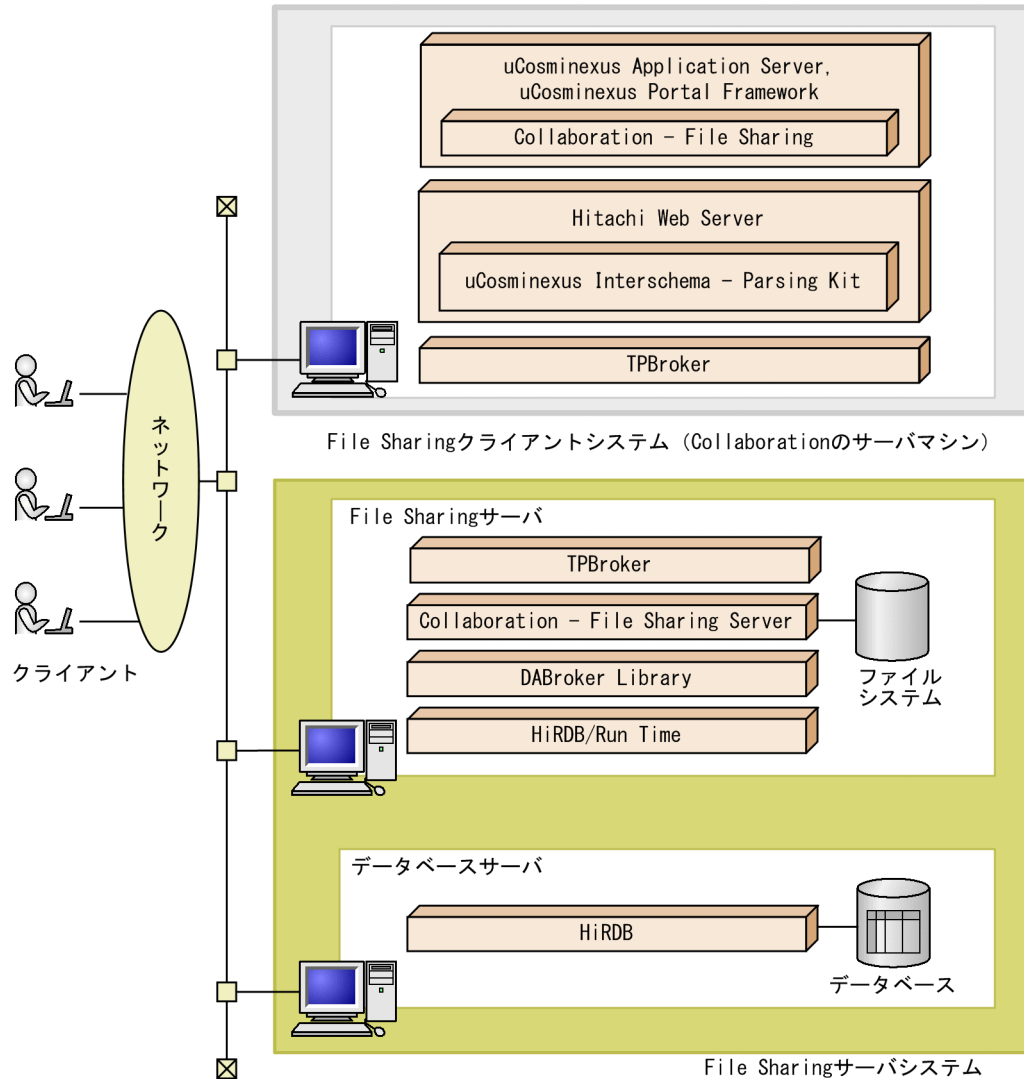
File Sharing サーバの文書空間上での操作結果は、ファイル実体と属性情報の格納先である、ファイルシステムおよびデータベースに反映されます。

1.2 File Sharing のシステム構成

ここでは、File Sharing のシステム構成について説明します。

File Sharing のシステム構成例を次の図に示します。

図 1-3 File Sharing のシステム構成例



なお、この構成例では、File Sharing サーバとファイルシステムを同じマシン上に構築していますが、ファイルシステムをネットワーク上の異なるマシン上に構築することもできます。

1.2.1 File Sharing を構成するプログラムと前提プログラム

ここでは、File Sharing を構成するプログラムと、File Sharing の前提プログラムについて説明します。

(1) File Sharing を構成するプログラム

File Sharing クライアントおよび File Sharing サーバを構成するプログラムについて説明します。

File Sharing クライアントを構成するプログラム

File Sharing クライアントを構成するプログラムは、次のとおりです。これらのプログラムのうち、どちらかを File Sharing クライアントを配置するマシンにインストールする必要があります。

- Groupmax Collaboration Portal, または Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing

File Sharing サーバを構成するプログラム

File Sharing サーバを構成するプログラムは、次のとおりです。次のプログラムを、File Sharing サーバを配置するマシンにインストールする必要があります。

- Groupmax Collaboration - File Server

(2) File Sharing の前提プログラム

File Sharing で使用する、File Sharing クライアント、File Sharing サーバ、データベースサーバのそれぞれの前提プログラムについて説明します。

表 1-1 File Sharing の前提プログラム

配置	前提プログラム
File Sharing クライアント	<ul style="list-style-type: none"> • uCosminexus Application Server • uCosminexus Portal Framework
File Sharing サーバ	<ul style="list-style-type: none"> • TPBroker • DABroker • DABroker for C++ • HiRDB/Run Time[※]
データベースサーバ	<ul style="list-style-type: none"> • HiRDB/Single Server または HiRDB/Parallel Server

注※

File Sharing サーバとデータベースサーバを別のマシンで運用する場合だけ必要です。

(3) 前提プログラムについての留意点

ここでは、前提プログラムについての留意点について説明します。

(a) uCosminexus Application Server の構成ソフトウェアとの関係

File Sharing クライアントのポートレット機能の前提プログラムである uCosminexus Application Server は、複数の構成ソフトウェアで構成されています。File Sharing サーバとポートレット機能を使用する File Sharing クライアントを同じマシンで運用する場合、uCosminexus Application Server には、File Sharing サーバの前提プログラムとして使用できる構成ソフトウェアが含まれています。この場合、前提プログラムを個別にインストールする必要はありません。

次に、File Sharing サーバの前提プログラムと uCosminexus Application Server の関係について説明します。

File Sharing サーバの前提プログラムと uCosminexus Application Server の関係

File Sharing サーバの前提プログラムのうち、uCosminexus Application Server に含まれるのは、次のプログラムです。

- TPBroker

(b) ポートレット機能を使用する File Sharing クライアントと File Sharing サーバを同じマシンに構築する場合の注意事項

ポートレット機能を使用する File Sharing クライアントと File Sharing サーバを同じマシンに構築する場合、前提プログラムをインストールするときに注意が必要です。

ポートレット機能の前提プログラムである uCosminexus Application Server には、構成ソフトウェアとして Cosminexus DABroker Library が含まれます。ただし、Cosminexus DABroker Library は、File Sharing サーバの前提として使用する DABroker としては使用できません。また、Cosminexus DABroker Library は、DABroker と同じマシンにインストールすることはできません。

このため、File Sharing サーバを構築するマシンには、必ず DABroker をインストールしてください。File Sharing サーバを構築するマシンに DABroker および DABroker for C++をインストールするときの手順を次に示します。

1. File Sharing サーバを構築するマシンに、uCosminexus Application Server をインストールします。
2. インストールした uCosminexus Application Server のうち、Cosminexus DABroker Library をアンインストールします。
このとき、「DAB」を削除しますか? という問い合わせに対しては、「いいえ」を選択してください。
3. DABroker をインストールします。
インストール先には、手順 2. でアンインストールした Cosminexus DABroker Library と同じフォルダを指定してください。
4. DABroker for C++をインストールします。

1.2.2 前提 OS

File Sharing サーバおよび File Sharing クライアントの前提 OS を次に示します。

- Windows Server 2008 R2
- Windows Server 2008 x64
- Windows Server 2008 x86
- Windows Server 2012
- Windows Server 2012 R2

1.2.3 File Sharing で利用できる Web ブラウザ

File Sharing で利用できる Web ブラウザについては、マニュアル「Collaboration ユーザーズガイド」を参照してください。

[ファイル共有] ポートレットおよび [ファイル共有設定] ポートレットで利用できる Web ブラウザについては、マニュアル「Collaboration ユーザーズガイド」を参照してください。

1.3 File Sharing サーバのプロセス構成

ここでは、File Sharing サーバのプロセス構成について説明します。

1.3.1 基本プロセス構成

File Sharing サーバの基本プロセス構成を次の表に示します。

表 1-2 File Sharing サーバの基本プロセス構成

プロセス名		機能概要
サービス起動制御プロセス	EDMSrvCtrl.exe	サーバ監視プロセスを起動または停止します。
起動プロセス	EDMStart.exe	File Sharing サーバを起動します。
停止プロセス	EDMStop.exe	File Sharing サーバを停止します。
サーバ監視プロセス	EDMDaemon.exe	File Sharing サーバを監視します。
サービスプロセス監視プロセス	EDMSrvMgr.exe	サービスプロセスの動作を監視します。
サービスプロセス	EDMService.exe	File Sharing クライアントへ文書空間のサービスを供給します。

各プロセスについて説明します。

(1) サービス起動制御プロセス (EDMSrvCtrl.exe)

サーバ監視プロセスを制御するプロセスです。

コントロールパネルの [管理ツール] - [サービス] の [サービス] ダイアログで、サービス [Collaboration - File Sharing Server] を開始することによって生成され、サーバ監視プロセスを生成します。

また、サービス [Collaboration - File Sharing Server] を停止することによって終了し、終了時に、サーバ監視プロセスに対して終了を要求します。

(2) 起動プロセス (EDMStart.exe)

File Sharing サーバを起動するプロセスです。システム管理者が File Sharing サーバを起動した (EDMStart コマンドの実行) 時点で生成されます。起動プロセスは、サービス起動制御プロセスに対して、File Sharing サーバの起動を要求します。

(3) 停止プロセス (EDMStop.exe)

File Sharing サーバを終了するプロセスです。システム管理者が File Sharing サーバを終了した (EDMStop コマンドの実行) 時点で生成されます。停止プロセスは、サービス起動制御プロセスに対して、File Sharing サーバの終了を要求します。

(4) サーバ監視プロセス (EDMDaemon.exe)

File Sharing サーバを監視するプロセスです。サービスプロセス監視プロセスの動作状況を監視して、サービスプロセス監視プロセスが終了した場合は、このプロセスが監視しているサービスプロセスをすべて強制終了させてから、サービスプロセス監視プロセスの再起動を実行します。このとき、強制終了したサービスプロセスに接続していたクライアントにはエラーが返却されて、サービスの提供を受けられなくなります。

サーバ監視プロセスは、サービス起動制御プロセスによって生成され、サービス起動制御プロセスからの終了要求によってサービスプロセス監視プロセスへ停止要求を通知します。

(5) サービスプロセス監視プロセス (EDMSrvMgr.exe)

定義されている数だけサービスプロセスを生成して、そのサービスプロセスの状態を管理するプロセスです。サービスプロセスの動作状況も監視して、サービスプロセスが終了した場合は、サービスプロセスを再起動します。サービスプロセス監視プロセスは、サーバ監視プロセスによって生成され、サーバ監視プロセスからの停止要求によってサービスプロセスへ停止要求を通知します。

(6) サービスプロセス (EDMService.exe)

クライアントへ文書空間のサービスを供給するプロセスです。サービスプロセスは、DocumentSpace 構成定義ファイルに指定されている数だけサービスプロセス監視プロセスによって生成されます。システム管理者が File Sharing サーバを終了 (EDMStop コマンドの実行) した場合、またはサービス [Collaboration - File Sharing Server] を停止した場合は、サービスプロセス監視プロセスからの停止要求によって、すべてのサービスプロセスは終了します。また、障害などによってサービスプロセスが終了した場合は、サービスプロセス監視プロセスによって再起動されます。

サービスプロセスは、1 プロセス当たり複数クライアントに対してサービスを供給できます。ただし、サービスプロセスがダウンした場合、ダウンしたプロセスに接続していたクライアントにはエラーが返却されて、接続できなくなります。したがって、クライアントからの再接続が必要となります。

File Sharing サーバを長時間連続して運転すると、サービスプロセスのサイズが大きくなり、メモリ不足による障害などが起きるおそれがあります。このため、File Sharing サーバでは、サービスプロセスをリフレッシュするコマンド (EDMRefresher) を提供しています。リフレッシュとは、File Sharing サーバを停止することなく、File Sharing クライアントからの要求に対して文書空間へのサービスを供給しながら、サービスプロセスを順次再起動することです。Windows の AT コマンドなどを利用して、このコマンドを定期的に行うことで、File Sharing サーバを連続して運転できます。

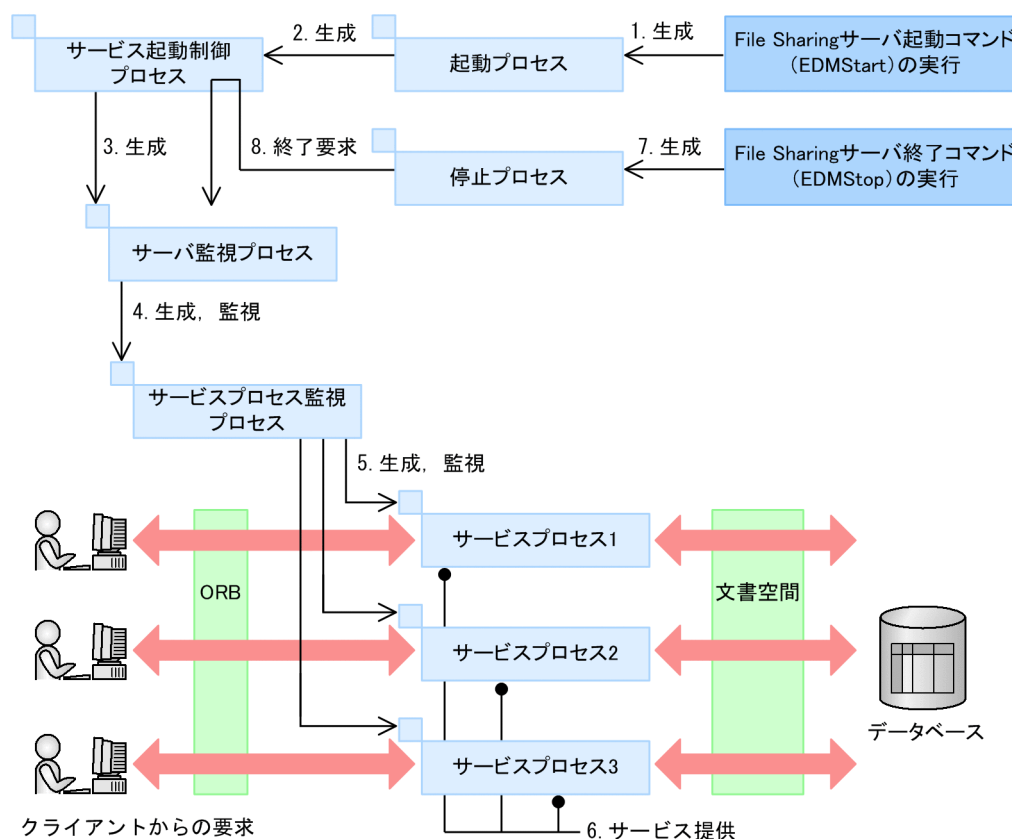
EDMRefresher コマンドの詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMRefresher (サービスプロセスのリフレッシュ)」を参照してください。

1.3.2 プロセスの関連

File Sharing サーバのコマンドを実行した場合のプロセスの関連と、[サービス] ダイアログで実行した場合のプロセスの関連についてそれぞれ説明します。

(1) File Sharing サーバのコマンドを実行した場合

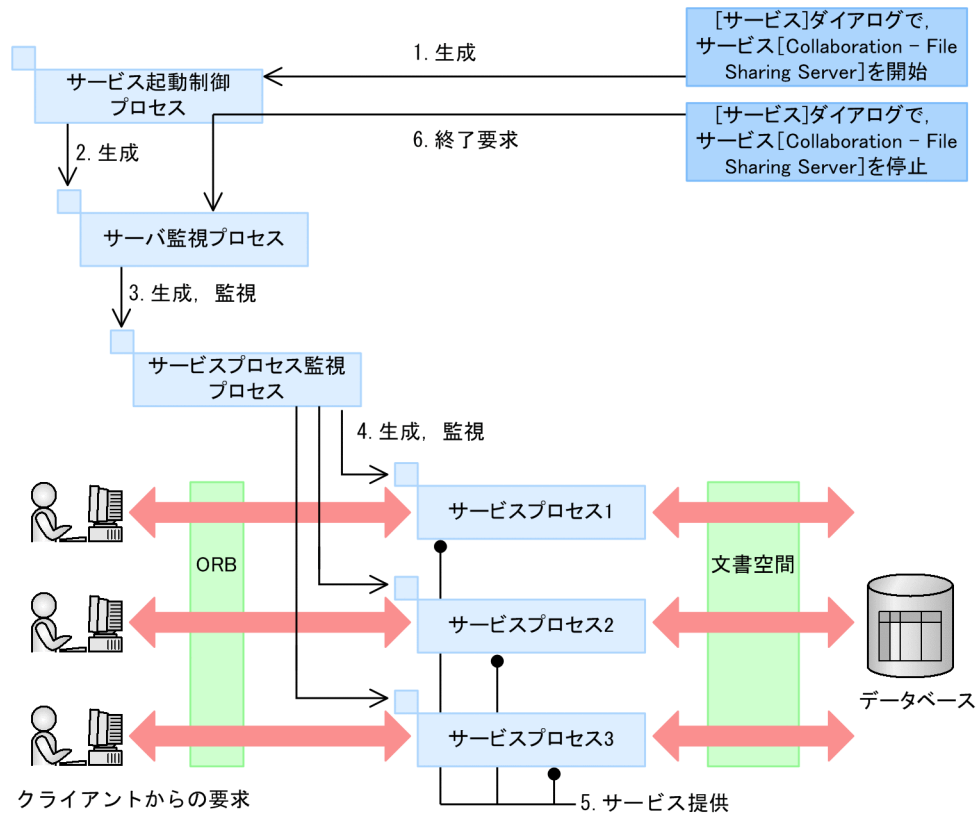
図 1-4 基本プロセスの関連 (File Sharing サーバのコマンドを実行した場合)



1. File Sharing サーバの開始要求によって、起動プロセスが生成されます。
2. 起動プロセスは、サービス起動制御プロセスを生成します。
3. サービス起動制御プロセスは、サーバ監視プロセスを生成します。
4. サーバ監視プロセスは、サービスプロセス監視プロセスを生成して、その状態を監視します。
5. サービスプロセス監視プロセスは、定義されている数だけサービスプロセスを生成して、その状態を監視します。
6. サービスプロセスは、File Sharing クライアントからの要求に対して、文書空間へのサービスを供給します。
7. File Sharing サーバの停止要求によって、停止プロセスが生成されます。
8. 停止プロセスは、サービス起動制御プロセスに対して終了を要求します。これによって、サービス起動制御プロセスは、サーバ監視プロセスに対して終了を要求します。

(2) [サービス] ダイアログで実行した場合

図 1-5 基本プロセスの関連 ([サービス] ダイアログで実行した場合)



1. File Sharing サーバの開始要求によって、サービス起動制御プロセスが生成されます。
2. サービス起動制御プロセスは、サーバ監視プロセスを生成します。
3. サーバ監視プロセスは、サービスプロセス監視プロセスを生成して、その状態を監視します。
4. サービスプロセス監視プロセスは、定義されている数だけサービスプロセスを生成して、その状態を監視します。
5. サービスプロセスは、File Sharing クライアントからの要求に対して、文書空間へのサービスを供給します。
6. File Sharing サーバの停止要求によって、サービス起動制御プロセスに対して終了を要求します。これによって、サービス起動制御プロセスは、サーバ監視プロセスに対して終了を要求します。

2

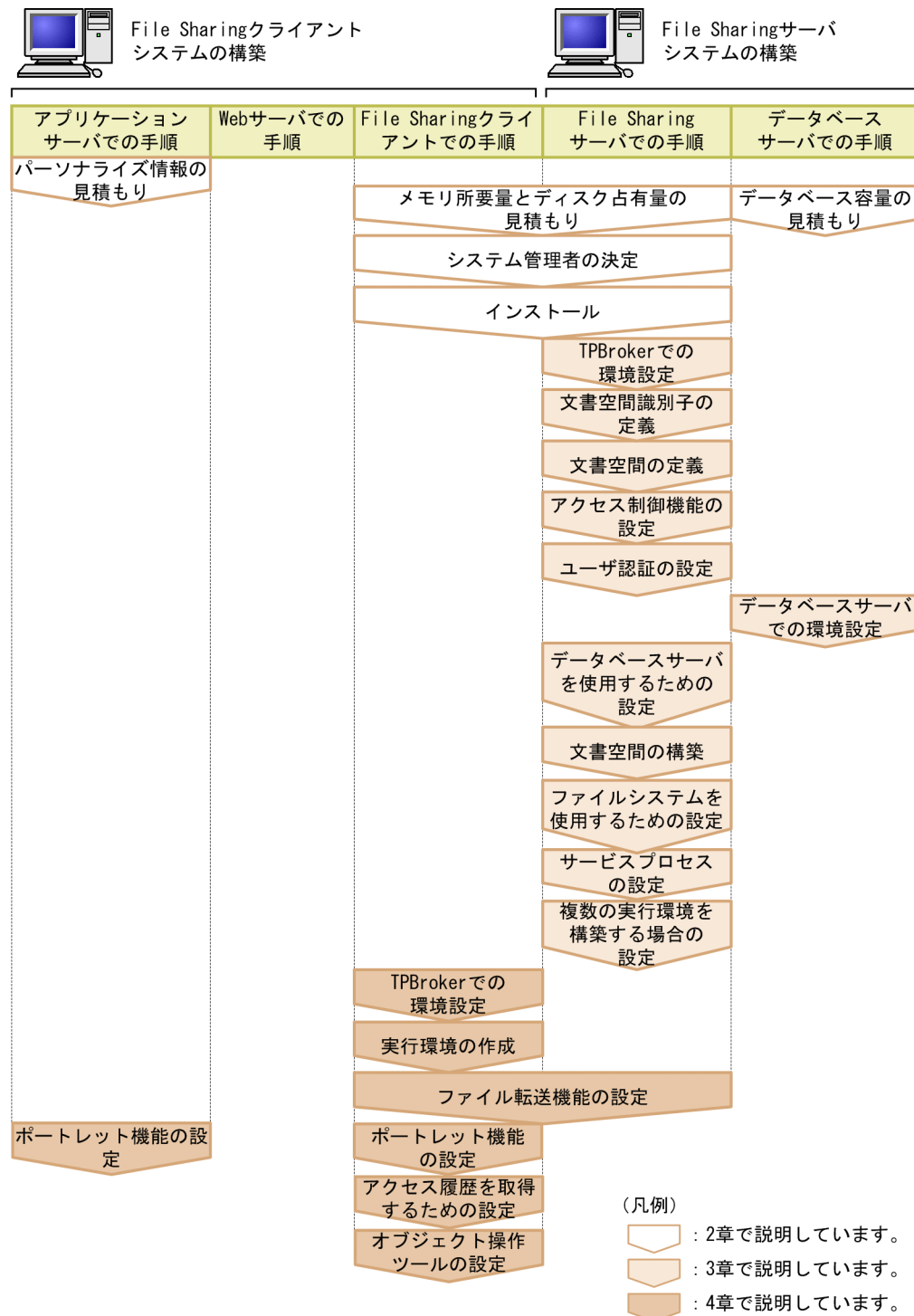
File Sharing の環境設定の準備

この章では, File Sharing の環境設定をする前に必要な準備について説明します。

2.1 File Sharing の環境設定の流れ

ここでは、File Sharing の環境設定の流れについて説明します。File Sharing の環境を設定する手順を次の図に示します。

図 2-1 File Sharing の環境設定の流れ



File Sharing の環境設定には各種定義ファイルを使用します。File Sharing の環境を設定する手順と使用する定義ファイルを次の表に示します。

表 2-1 File Sharing の環境設定手順と使用する定義ファイル

種別	環境設定の手順		使用する定義ファイル			
	手順	参照先	名称	使用	編集	参照先
環境設定の準備	パーソナライズ情報の見積もり	2.2	—	—	—	—
	メモリ所要量とディスク占有量の見積もり	2.3	—	—	—	—
	データベース容量の見積もり	2.4	見積もり情報定義ファイル (CfsEstimatedef_UTF-8.csv または CfsEstimatedef_SJIS.csv)	◎	○	5.2.13
			文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt)	◎	○	5.2.14
			見積もり基礎情報ファイル (EDMestimate.csv)	◎	—	5.2.15
	システム管理者の決定	2.5	—	—	—	—
File Sharing サーバのインストール*	2.6	—	—	—	—	
File Sharing サーバシステムでの設定	TPBroker での環境設定	3.2	—	—	—	—
	文書空間識別子の定義	3.3	System Object INI ファイル (slocalreg.ini)	◎	○	5.2.1
			オブジェクト定義ファイル (edms.ini)	◎	○	5.2.2
	文書空間の定義	3.4	DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)	◎	○	5.2.3
	アクセス制御機能に関する設定	3.5	セキュリティ定義ファイル (docaccess.ini)	◎	○	5.2.4
	ユーザ認証に関する設定	3.6	ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini)	◎	○	5.2.5
	データベースサーバでの環境設定	3.7	—	—	—	—
	データベースサーバを使用するための設定	3.8	—	—	—	—
	文書空間の構築	3.9	—	—	—	—
	ファイルシステムを使用するための設定	3.10	ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini)	△	○	5.2.11
	File Sharing サーバのサービスプロセスの設定	3.11	サービスプロセス定義ファイル (process.ini)	△	○	5.2.10

2 File Sharing の環境設定の準備

種別	環境設定の手順		使用する定義ファイル			
	手順	参照先	名称	使用	編集	参照先
File Sharing サーバシステムでの設定	複数の実行環境を構築する場合の設定	3.12	—	—	—	—
File Sharing クライアントシステムでの設定	TPBroker での環境設定	4.2	—	—	—	—
	File Sharing クライアントの実行環境の作成	4.3	—	—	—	—
	ファイル転送機能を使用する場合の設定	4.4	ファイル転送サービス環境定義ファイル (ftpsv.ini)	△	○	5.3.2
	ポートレット機能の設定	4.5	レンディション定義ファイル (mime.properties)	△	○	5.3.3
			動作環境定義ファイル (conf.properties)	◎	○	5.3.4
			環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)	◎	○	5.3.5
	アクセス履歴を取得するための設定	4.6	環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)	◎	○	5.3.5
オブジェクト操作ツールの設定	4.7	実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini)	◎	○	5.3.6	
		クラス定義情報ファイル (文書空間識別子.ini)	◎	×	5.3.1	

(凡例)

- ：該当しません。
- ◎：必ず使用するファイルです。
- △：必要に応じて使用するファイルです。
- ：File Sharing で提供するファイルを実行環境に応じて編集する必要があります。
- ×：File Sharing で提供するファイルをそのまま使用します（編集不可）。

注※

File Sharing クライアントのインストール手順については、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

なお、File Sharing サーバをクラスタリングシステムで運用する場合の環境設定については、「付録 B クラスタリングシステムでの運用」を参照してください。

2.2 パーソナライズ情報の見積もり

File Sharing はユーザ単位に [ファイル共有] ポートレットの表示項目をカスタマイズできます。カスタマイズした結果は、パーソナライズ情報として uCosminexus Portal Framework 上で管理されます。

File Sharing のパーソナライズ情報を管理するために必要なデータ量の見積もり式を次に示します。

見積もり式

ユーザ数 × (28 + (674 × 1 ユーザ当たりの平均利用ワークスペース数))
(単位: バイト)

フォルダへのショートカットを使用する場合は、上記の見積もり式で算出したデータ量に加えて、ショートカット情報分のデータ量も必要です。ショートカット情報のデータ量の見積もり式を次に示します。

ショートカット情報のデータ量の見積もり式

ユーザ数 × (27 + (188 × 1 ユーザ当たりの平均利用ショートカット数))
(単位: バイト)

パーソナライズ情報の設定の詳細については、マニュアル「uCosminexus Portal Framework システム管理者ガイド」を参照してください。

2.3 メモリ所要量とディスク占有量の見積もり

ここでは、File Sharing のメモリ所要量とディスク占有量の見積もりについて説明します。

2.3.1 メモリ所要量の見積もり

メモリ所要量は、ここで示す計算式で算出してください。なお、メモリが不足すると、動作が不安定になり異常終了することがありますので必要量を確保してください。

(1) File Sharing サーバのメモリ所要量

File Sharing サーバのメモリ所要量は次に示す計算式で算出してください（単位：MB）。

$$17 + r + (14 + r) \times p + (0.02 + 2 + b + 4 \times s) \times U$$

計算式中の b は、HiRDB の繰り返し列格納による仮想メモリ所要量です（単位：バイト）。

$$b = 79,040 + (l + 29) \times (m + n)$$

メモリの計算式に使用する変数のうち、b 以外の変数に設定する値を次の表に示します。

表 2-2 File Sharing サーバのメモリの計算式の変数に設定する値

変数	設定する値
r	メタ情報管理用に確保するメモリマップトファイルサイズ (DocumentSpace 構成定義ファイルの XdkShmemSize エントリの指定値は、4,000,000 バイト)
p	サービスプロセス数
l	次に示すすべての ID 長の平均値 <ul style="list-style-type: none"> 個人フォルダ：ユーザ ID 長 コミュニティフォルダ：コミュニティ ID 長 (最大 40 バイト) + 役割 ID 長 (最大 16 バイト) + 1 グループフォルダ：グループ ID 長 (16 バイト)
m	次に示すすべてのアクセス権設定数の平均値 <ul style="list-style-type: none"> 個人フォルダ：参照権の設定数 コミュニティフォルダ：更新権および作成/削除権の設定数 グループフォルダ：参照権、作成権、更新権および削除権の設定数 グループフォルダの運用者の設定数
n	次に示す設定数の平均値 <ul style="list-style-type: none"> アクセス権変更権の設定数 グループフォルダの運用者の設定数
s	文書空間で管理する最大ファイルサイズ
U	同時接続ユーザ数

(2) File Sharing クライアントのメモリ所要量

File Sharing クライアントのメモリ所要量を次に示します。

- ファイル転送機能を使用しないとき（単位：MB）

$$15.5 + 0.5 \times U$$

- ファイル転送機能を使用するとき（単位：MB）
 $(15.5 + 0.5 \times U) + (3 + 2 \times p + (0.02 + 4 \times s) \times u)$

メモリの計算式で使用する変数に設定する値を次の表に示します。

表 2-3 File Sharing クライアントのメモリの計算式の変数に設定する値

変数	設定する値
U	同時接続ユーザ数
p	ファイル転送サービスプロセス数
s	文書空間で管理する最大ファイルサイズ
u	同時実行ファイル操作ユーザ数

2.3.2 ディスク占有量の見積もり

ここでは、File Sharing のディスク占有量の見積もりについて説明します。

なお、監査ログを出力する運用にする場合のディスク占有量の見積もりについては、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

(1) File Sharing サーバのディスク占有量

File Sharing では、フォルダとファイルの属性情報をデータベースシステムである HiRDB に格納します。File Sharing サーバのディスク占有量として、HiRDB でデータベースシステムを構築するために必要なデータベースの容量、プログラムファイルの容量、およびファイル実体を格納するファイルシステムの容量を合計した量を確保してください。

プログラムファイルの容量

各プログラムファイルのディスク占有量を確保してください。

データベースの容量

「2.4 データベース容量の見積もり」に従って値を算出してください。

ファイルシステムの容量

「6.3 ファイルシステムの見積もり」に従って値を算出してください。

(2) File Sharing クライアントの一時ディレクトリディスク容量

File Sharing クライアントがファイルシステムに格納したりファイルシステムから取得したりするファイル実体は、一時的に File Sharing クライアントの一時ディレクトリに作成されます。したがって、File Sharing クライアントのディスク占有量として、次に示す各一時ディレクトリのディスク容量を確保します。

- ポートレット機能使用時のダウンロード用一時ディレクトリディスク容量
- コンポーネント間データ転送時のダウンロード用一時ディレクトリディスク容量

それぞれの一時ディレクトリディスク容量の概算は、次に示す計算式で算出してください。

ポートレット機能使用時のダウンロード用一時ディレクトリディスク容量

平均ファイルサイズ×(ポートレット機能のファイル転送同時実行数+ポートレット間連携によるファイル転送同時実行数)

コンポーネント間データ転送時のダウンロード用一時ディレクトリディスク容量

平均ファイルサイズ×コンポーネント間データ転送でのファイル転送同時実行数

作成されたファイルは、一時ディレクトリに残る場合があります。この場合は、[ファイル共有] ポートレットを利用するユーザが該当ファイルを参照していないときに、一時ディレクトリからファイルを削除できます。なお、アプリケーションサーバまたは Web サーバにエラーが発生しているときは、各サーバを一時停止してから一時ディレクトリおよびファイルを削除してください。

一時ディレクトリが作成される場所を次に示します。

ポートレット機能使用時のダウンロード用一時ディレクトリ

環境設定用プロパティファイルの `hptl_clb_cfs_DownloadDocDir` プロパティで指定します。デフォルトは、「{Cosminexus のインストールディレクトリ}¥CC¥server¥public¥ejb¥J2EE サーバ名称¥コンテキストルート名称¥temp」です。

[J2EE サーバ名称] は使用する J2EE サーバの名称のディレクトリ、「コンテキストルート名称」は J2EE サーバのコンテキストルート名称のディレクトリです。

環境設定用プロパティファイルの詳細は、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

コンポーネント間データ転送時のダウンロード用一時ディレクトリ

環境設定用プロパティファイルの `hptl_clb_cfs_ReadFileDir` プロパティで指定します。デフォルトは、「{Cosminexus のインストールディレクトリ}¥CC¥server¥public¥ejb¥J2EE サーバ名称¥コンテキストルート名称¥temp」です。

[J2EE サーバ名称] は使用する J2EE サーバの名称のディレクトリ、「コンテキストルート名称」は J2EE サーバのコンテキストルート名称のディレクトリです。

環境設定用プロパティファイルの詳細は、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

(3) アクセス履歴を取得する場合のディスク容量

アクセス履歴を取得する場合は、アクセス履歴ファイルを格納するためのディスクを確保します。

File Sharing では、アクセス履歴として [ファイル共有] ポートレットのファイル、フォルダに対して、ユーザが実行した操作の履歴を記録した情報を出力します。アクセス履歴ファイルに出力します。

アクセス履歴ファイルは、環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) で設定したディレクトリに出力します。

アクセス履歴を取得するためのディスク容量は、何日分のアクセス履歴を保存するかを考慮して確保します。例えば、1 週間分のアクセス履歴を保存する運用の場合は、1 週間分のアクセス履歴を保存できるディスク容量を確保する必要があります。1 日当たりのアクセス履歴のサイズの見積もりを参考にして、必要な日数分のアクセス履歴を保存できるディスク容量を準備してください。

1 日当たりのアクセス履歴のサイズを算出するために、まず、1 操作当たりのアクセス履歴のサイズを算出します。

1 操作当たりのアクセス履歴のサイズは、アクセス履歴として出力される情報のサイズを基に次の式から算出します。

1 操作当たりのアクセス履歴のサイズ (単位：バイト)

$$= 90 + \text{アプリケーションサーバ識別子} + \text{コミュニティ ID} + \text{ワークスペース ID} + \text{ユーザ ID} + \text{操作識別子} + \text{操作元識別子} + \text{グループ ID} + \text{付加情報 1} + \text{付加情報 2} + \text{付加情報 3} + \text{区切り文字}$$

変数に設定する値は、アクセス履歴として取得する情報や使用する環境に合わせて設定してください。変数に設定できる値の範囲を次の表に示します。

表 2-4 1 操作当たりのアクセス履歴のサイズの見積もり式に設定できる値の範囲

変数	設定できる値の範囲 (単位：バイト)
アプリケーションサーバ識別子	3~258
コミュニティ ID	最大 40
ワークスペース ID	最大 16
ユーザ ID	1~254
操作識別子	5~11
操作元識別子	1
グループ ID	16
付加情報 1	2~1,026
付加情報 2	0~52
付加情報 3	0~52
区切り文字	7~9

算出した 1 操作当たりのアクセス履歴のサイズを基に、次の式から 1 日当たりのアクセス履歴のサイズを算出します。

1 日当たりのアクセス履歴のサイズ (単位：バイト)

$$= 1 \text{ 操作当たりのアクセス履歴のサイズ} \times 1 \text{ 日当たりの 1 ユーザの操作回数の平均} \times \text{利用ユーザ数}$$

算出した 1 日当たりのアクセス履歴のサイズを考慮して、ディスク容量を確保してください。

参考 1 日当たりのアクセス履歴サイズの見積もり例

1 操作当たりのアクセス履歴のサイズが 1,024 バイト、1 日当たりの 1 ユーザの操作回数の平均が 100 回、利用ユーザ数が 500 人の場合、1 日当たりのアクセス履歴のサイズは次のように見積もることができます。

1 日当たりのアクセス履歴のサイズ

$$= 1,024 \text{ バイト} \times 100 \text{ 回} \times 500 \text{ 人}$$

$$= 51,200,000 \text{ バイト}$$

したがって、1 日当たりのアクセス履歴のサイズは約 50MB となります。

アクセス履歴を取得するための設定については「4.6 アクセス履歴を取得するための設定」を、アクセス履歴の運用方法については「7.11 アクセス履歴の取得」を参照してください。

2.4 データベース容量の見積もり

ここでは、File Sharing のデータベース容量の見積もりについて説明します。

2.4.1 データベース容量の見積もり方法

HiRDB でデータベースシステムを構築するために必要なデータベース容量として、次の容量を確保してください。

データベース容量 = RD エリアの容量 + システムファイルの容量

RD エリアは、HiRDB が管理する表およびインデックスを格納する論理的なエリアのことです。File Sharing で使用する RD エリアを次の表に示します。

表 2-5 File Sharing で使用する RD エリア

分類	RD エリアの種類	説明
システム用 RD エリア	マスタディレクトリ用 RD エリア	データベースシステムの情報を格納します。
	データディレクトリ用 RD エリア	
	データディクショナリ用 RD エリア	
ユーザ用 RD エリア	ユーザ表用 RD エリア	File Sharing が管理するフォルダとファイルの属性情報、および File Sharing のメタ情報を格納します。
	ユーザインデックス用 RD エリア	

このマニュアルでは、ユーザ用 RD エリアの容量の算出方法について説明します。

システム用 RD エリアの容量およびシステムファイルの容量の算出方法については、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照してください。

なお、このほか、格納するデータはありませんが、ユーザ LOB 用 RD エリアを作成する必要があります。ユーザ LOB 用 RD エリアについては、「2.4.4 データベース容量の見積もり時の注意事項」を参照してください。

2.4.2 ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり

ここでは、File Sharing で使用するユーザ用 RD エリアの容量の見積もりについて、見積もるための準備、および見積もり方法を説明します。ユーザ用 RD エリアの容量の見積もりには、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) を実行して出力される見積もり基礎情報ファイルを用います。

参考

ここでは、システム導入支援機能を使用したユーザ用 RD エリアの容量の見積もり方法を説明しています。システム導入支援機能とは、ユーザ用 RD エリアの容量の見積もりおよび新規に文書空間を構築するための設定を支援する機能です。システム導入支援機能を使用すると、システム導入支援機能を使用しない場合に比べて、設定の手順を減らすことができます。システム導入支援機能を使用しない場合の設定方法については、「付録 D システム導入支援機能を使用しない場合の設定」を参照してください。

(1) File Sharing で使用するユーザ用 RD エリア

File Sharing で使用するユーザ用 RD エリアを次の表に示します。

表 2-6 File Sharing で使用するユーザ用 RD エリア

ユーザ用 RD エリアの種類	説明
ユーザ表用 RD エリア	次の情報を格納します。 <ul style="list-style-type: none"> • クラス※に対応する表 • File Sharing のメタ情報
ユーザインデクス用 RD エリア	次の情報を格納します。 <ul style="list-style-type: none"> • クラス※に対応する表のインデクス • File Sharing のメタ情報のインデクス

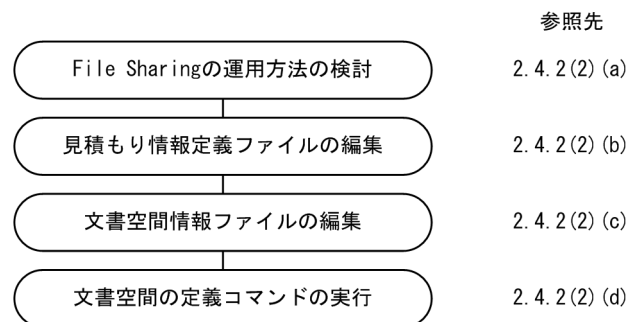
注※ File Sharing でフォルダやファイルなどの属性情報を格納する表を作成するためのひな形です。

ユーザ用 RD エリアには、表とそのインデクス、および File Sharing のメタ情報とそのインデクスを格納します。これらの容量は、File Sharing が管理するフォルダとファイルの数などから算出します。

(2) ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるための準備

ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるための準備について説明します。ユーザ用 RD エリアを見積もるための準備の手順を、次の図に示します。

図 2-2 ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるための準備



各手順の詳細について説明します。

(a) File Sharing の運用方法の検討

次のことを検討してください。検討した内容を基に、見積もり情報定義ファイルおよび文書空間情報ファイルを編集します。

- **【ファイル共有】ポートレットで使用する言語**
 【ファイル共有】ポートレットで日本語および英語だけを使用する運用か、日本語および英語以外の言語も使用する運用かを検討してください。
 【ファイル共有】ポートレットで日本語および英語だけを使用する運用の場合、文書空間の文字コード種別は UTF-8（推奨）または Shift-JIS になります。また、日本語および英語以外の言語も使用する運用の場合、文書空間の文字コード種別は UTF-8 になります。
- **ルートフォルダ単位に使用できるサイズを制限するかどうか**
 ルートフォルダ単位に使用できるサイズ（最大許容サイズ）を制限するかどうかは、運用の考え方によって決めてください。
- **管理するファイル、フォルダおよび情報の数**
 次の項目について、それぞれ検討してください。

2 File Sharing の環境設定の準備

- ユーザ総数（個人ルートフォルダの総数）
 - 個人フォルダで管理するファイルの総数
 - 個人フォルダで管理するフォルダの総数
 - 個人フォルダで管理するファイルに参照権を設定する平均ユーザ数
 - 個人フォルダで管理するほかのユーザに参照権を設定するファイルの総数
 - 個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数
 - コミュニティ総数（コミュニティルートフォルダの総数）
 - コミュニティフォルダで管理するファイルの総数
 - コミュニティフォルダで管理するフォルダの総数
 - コミュニティフォルダで更新権および作成／削除権を設定する平均役割数
 - コミュニティフォルダでアクセス権変更権を設定する役割数の全体の平均
 - グループルートフォルダの総数
 - グループフォルダで管理するファイルの総数
 - グループフォルダで管理するフォルダの総数
 - フォルダごとに格納するフォルダの平均数
 - グループフォルダで管理するフォルダに参照権、作成権、更新権および削除権を設定するユーザ数と組織数の平均
 - グループフォルダの運用者に設定するユーザ数と組織数の平均
 - グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数
 - File Sharing で管理する全ルートフォルダからの平均階層数
 - 平均ファイルサイズ
 - ベースパス情報（ファイル実体の格納先パス情報）の設定数
 - 最大許容サイズ情報の設定数（最大許容サイズを設定する運用の場合）
 - ユーザ ID の平均文字列長
 - コミュニティ ID の平均文字列長（最大 40 バイト）
 - グループ ID の平均文字列長（16 バイト）
 - コメントの平均文字列長
 - ファイル名の平均文字列長
 - フォルダ名の平均文字列長
 - ベースパスの平均文字列長
 - 最大許容サイズ情報の条件値の平均文字列長（最大許容サイズを設定する運用の場合）
 - ベースパス情報の名称の平均文字列長
 - ベースパス情報の条件値の平均文字列長
- 複数の実行環境を配置したシステムにするかどうか
複数の実行環境を配置したシステムにするかどうかは、運用の考え方によって決めてください。

(b) 見積もり情報定義ファイルの編集

データベース容量を見積もるために、ファイル、フォルダや文字列長などの見積もり情報を定義するファイルを見積もり情報定義ファイルといいます。システム管理者は、見積もり情報定義ファイルの内容を、検討した運用方法に合わせて編集します。編集には Microsoft(R) Excel などを使用して、CSV 形式で保存してください。

見積もり情報定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。なお、見積もり情報定義ファイルは、文書空間の文字コード種別に指定する文字コードによって、使用するファイルが異なります。指定する文字コードに合わせたファイルを編集してください。

- 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsEstimatedef_UTF-8.csv

- 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsEstimatedef_SJIS.csv

見積もり情報定義ファイルの詳細については、「5.2.13 見積もり情報定義ファイル」を参照してください。

(c) 文書空間情報ファイルの編集

文書空間の定義および構築に必要な情報を定義するファイルを見積もり情報ファイルといいます。システム管理者は、文書空間情報ファイルの内容を、検討した運用方法に合わせて編集します。編集にはテキストエディタを使用して、TXT 形式で保存してください。

文書空間情報ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsDocinfo.txt

文書空間情報ファイルの詳細については、「5.2.14 文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt)」を参照してください。

(d) 文書空間の定義コマンドの実行

見積もり情報定義ファイルと文書空間情報ファイルの編集が完了したあと、編集したファイルを入力として、文書空間の定義コマンド (EDMCDDefDocSpace) を実行します。

コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMCDDefDocSpace -f {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsEstimatedef_UTF-8.csv
                  -s {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsDocinfo.txt
```

コマンドを実行すると、{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env に、見積もり基礎情報ファイル「EDMestimate.csv」が出力されます。出力された見積もり基礎情報ファイルを基に、ユーザ用 RD エリアの容量を見積もります。

見積もり基礎情報ファイルの詳細については、「5.2.15 見積もり基礎情報ファイル」を参照してください。

(3) ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり方法

ユーザ用 RD エリアの容量を見積もる方法について説明します。文書空間の定義コマンド (EDMCDDefDocSpace) で出力された見積もり基礎情報ファイルを基にして、実際に使用する RD エリアの容量を算出してください。RD エリアの容量の算出方法については、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照してください。

見積もり基礎情報ファイルには、次の値が出力されます。

(a) 各表に格納するレコードの総数

見積もり基礎情報ファイルの Record Count エントリに、表に格納するレコードの総数が出力されます。

ただし、表 edmClass_VTCRelationship については、Record Count エントリに出力された値に関係なく、レコード総数を 0 として計算してください。

また、表 edmClass_ACL および表 edmClass_PublicACL については、次に示す式からレコード数を見積もってください。

表 edmClass_ACL のレコード数

$$= \text{個人フォルダで管理するほかのユーザに参照権を設定するファイルの総数} + \text{コミュニティルートフォルダの総数} \times 2 + \text{グループルートフォルダの総数}$$

表 edmClass_PublicACL のレコード数

$$= \text{個人ルートフォルダの総数} + \text{個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数} + \text{コミュニティルートフォルダの総数} + \text{グループルートフォルダの総数} \times 3 + \text{グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数}$$

(b) 各表に定義する列の総数

見積もり基礎情報ファイルの Column Count エントリに、表に定義する列の総数が出力されます。

(c) 各列のデータサイズ

見積もり基礎情報ファイルの Record Length エントリに、レコードのデータサイズが出力されます。

ただし、次の表に示す表については、見積もり式からレコードのデータサイズを見積もってください。

表 2-7 レコードのデータサイズの見積もり式

表名	レコードのデータサイズの見積もり式
edmClass_ACL	$84 + 263 \times (m + n)$ 上限値：33,748, 下限値：84
	$347 \times p$
edmClass_PublicACL	$344 + 780 + 263 \times (m + n) + 1$ 上限値：35,824, 下限値：2,148
cfsClass_Folder	$3,995 + 1 \times 4 + o$
cfsClass_File_CH	$4,299 + 1 \times 4 + o$
cfsClass_File_DV	$3,604 + 1 \times 4$
cfsClass_Personal	$2,066 + 1$
cfsClass_Community	$2,322 + 1$
cfsClass_Group	$2,066 + 1$
cfsClass_Quota	$1,546 + 1$
cfsClass_AssignableDrive	$2,582 + 1$

表名	レコードのデータサイズの見積もり式
cfsClass_Parameter	1,548

(凡例)

p:

- 最大値は 1 です。
- ごみ箱の利用率 (%) です。算出時は百分率を割合で表した値を指定します。ごみ箱を使用しない場合は 0 です。

l:

- 文書空間の文字コード種別が UTF-8 の場合は 1,024 です。
- 文書空間の文字コード種別が Shift-JIS の場合は 512 です。

m:

上限値は 64 です。

- 個人フォルダの場合は、参照権を設定するユーザ数の平均です。
- コミュニティフォルダの場合は、更新権または作成／削除権を設定する役割数の全体の平均です。
- グループフォルダの場合は、参照権、作成権、更新権または削除権を設定する組織数とユーザ数の平均です。

n:

上限値は 64 です。

- 個人フォルダの場合は 1 です。
- コミュニティフォルダの場合は、アクセス権変更権を設定する役割数の全体の平均です。
- グループフォルダの場合は、アクセス権変更権を設定する組織数とユーザ数の平均と、グループフォルダの運用者数の平均の和です。

o:

- 文書空間の文字コード種別が UTF-8 の場合は 10,304 です。
- 文書空間の文字コード種別が Shift-JIS の場合は 5,152 です。

(d) インデクス

見積もり基礎情報ファイルの Column Length エントリに出力された列の定義長と、AvColumn Length エントリに出力された列の平均文字列長を基に、インデクスのキー長を算出してください。

なお、EDMS_META_で始まる名称の表には、次に示す複数列インデクスが一つ定義されます。

- UNIQUE 指定あり
- キー長 (136)

EDMSMETAREGENVID の表には、次に示す単一列インデクスが一つ定義されます。

- UNIQUE 指定あり
- キー長 (2)

EDMSMETAclassdef の表および EDMSMETAdocinfo の表には、次に示す単一列インデクスが一つ定義されます。

- UNIQUE 指定あり
- キー長 (4)

これを考慮してインデクスを算出してください。

2.4.3 ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり例

ここでは、ユーザ用 RD エリアの容量を見積もる例について説明します。

見積もり例では、文書空間の文字コード種別が UTF-8 の場合の見積もり情報定義ファイルのデフォルト値および文書空間情報ファイルのデフォルト値を前提としています。各ファイルのデフォルト値については、「5.2.13(1) 見積もり情報定義ファイルの想定値」および「5.2.14(1) 文書空間情報ファイルの想定値」を参照してください。

見積もりの前提とする値を見積もり情報定義ファイルおよび文書空間情報ファイルに指定して、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) を実行します。文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) の実行で出力された見積もり基礎情報ファイルから、ユーザ用 RD エリアに必要な容量を求めます。

なお、ユーザ用 RD エリアは、ユーザ表用 RD エリアとユーザインデクス用 RD エリアから構成されます。ここでは、ユーザ表用 RD エリアに格納する、クラスに対応する表と File Sharing のメタ情報に対応する表の容量を算出します。それぞれの表のインデクスの容量については、見積もり基礎情報ファイルに出力された内容を基に、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照して算出してください。

(1) クラスに対応する表の容量の算出

クラスに対応する表の容量は、「dmaClass」または「edmClass」で始まる表の容量と「cfsClass」で始まる表の容量の和で求められます。

ここで示す見積もり例では、「dmaClass」または「edmClass」で始まる表の容量が 463,541,608 バイト、「cfsClass」で始まる表の容量が 3,287,195,648 バイトとなり、クラスに対応する表としては 3,750,737,256 バイト (約 3,577MB) の容量が必要なことがわかります。

(a) 「dmaClass」または「edmClass」で始まる表の容量

「dmaClass」または「edmClass」で始まる表の容量は、見積もり情報定義ファイルで、Kind エントリが「SystemTable」の行の値から求めます。また、Record Length エントリにデータサイズが、Record Count エントリにレコード数が出力されます。表ごとの容量として、データサイズとレコード数の積を算出します。

算出例を次の表に示します。

表 2-8 Kind エントリの SystemTable に出力された結果と算出例

表名 (Table Name エントリの値)	データサイズ (Record Length エントリの値 (バイト))	レコード数 (Record Count エントリの値)	容量 (データサイズ×レコード数 (バイト))
edmClass_OIID※1	20	1	20
dmaClass_ConfigHistory	930	0	0

表名 (Table Name エントリの値)	データサイズ (Record Length エントリ の値 (バイト))	レコード数 (Record Count エント リの値)	容量 (データサイズ×レコー ド数 (バイト))
dmaClass_VerDescription	180	192,200	34,596,000
dmaClass_Rendition	380	0	0
dmaClass_ContentReference	596	0	0
dmaClass_ContentTransfer	605	0	0
dmaClass_Container	878	0	0
dmaClass_DCRelationship	172	229,400	39,456,800
dmaClass_RCRelationship	172	0	0
edmClass_IndPersistence	774	0	0
edmClass_ContainerVersion	882	0	0
edmClass_VTCRelationship	280	0 ^{*2}	0
edmClass_SgmlComponentInfo	1,308	0	0
edmClass_VTContainer	878	0	0
edmClass_Relationship	176	0	0
edmClass_VTRelationship	496	0	0
edmClass_ContentReference	1,112	192,200	213,726,400
edmClass_ACL ^{*3}	見積もりに使用しません。	見積もりに使用しま せん。	見積もり式から算出しま す。
edmClass_PublicACL ^{*3}	見積もりに使用しません。	見積もりに使用しま せん。	見積もり式から算出しま す。
edmClass_BindRelationship	68	424,086	28,837,848
dmaClass_DocVersion	1,275	0	0
edmClass_VTDocVersion	1,275	0	0
edmClass_CompoDocVersion	1,275	0	0
edmClass_VTCompoDocVersion	1,275	0	0
dmaClass_VersionSeries	656	192,200	126,083,200
edmClass_ConceptSgmlDoc	641	0	0

注※1

実行環境の情報を格納するための表に必要な容量を算出します。算出方法は、「データサイズ×実行環境の数」です。ここでは、実行環境が一つの場合を想定します。20 バイト×1 = 20 バイトが必要な容量になります。

注※2

表 edmClass_VTCRelationship は、Record Count エントリに出力された値に関係なく、0として計算してください。

注※3

表 edmClass_ACL および表 edmClass_PublicACL については、レコード数を「2.4.2(3)(a) 各表に格納するレコードの総数」に示した見積もり式から、またデータサイズを「2.4.2(3)(c) 各列のデータサイズ」に示した見積もり式から計算して、容量を算出してください。

表 edmClass_ACL および表 edmClass_PublicACL の算出例

表 edmClass_ACL および表 edmClass_PublicACL のデータサイズは個人フォルダ単位、コミュニティフォルダ単位およびグループフォルダ単位で算出します。「2.4.2(3)(c) 各列のデータサイズ」で示した式を基にしたフォルダの種別ごとの算出例を次に示します。

• 個人フォルダの場合

m は参照権を設定するユーザ数です。ここでは、16 とします。n は 1 (固定) です。

これによって、個人フォルダのアクセス制御情報を格納する表 edmClass_ACL のデータサイズは、 $84 + 263 \times (16 + 1) = 4,555$ バイトになります。表 edmClass_PublicACL のデータサイズは、 $344 + 780 + 263 \times (16 + 1) + 1,024 = 6,619$ バイトになります。

• コミュニティフォルダ

m は更新権または作成/削除権を設定する役割数の全体の平均です。ここでは、16 とします。n は、アクセス権変更権を設定する役割数の全体の平均になります。ここでは、2 とします。

これによって、コミュニティフォルダのアクセス制御情報を格納する表 edmClass_ACL のデータサイズは、 $84 + 263 \times (16 + 2) = 4,818$ バイトになります。表 edmClass_PublicACL のデータサイズは、 $344 + 780 + 263 \times (16 + 2) + 1,024 = 6,882$ バイトになります。

• グループフォルダ

m は参照権、作成権、更新権または削除権を設定する組織数およびユーザ数の平均です。ここでは、16 とします。n は、アクセス権変更権を設定する組織数とユーザ数の平均と、グループフォルダの運用者数の平均の和になります。ここでは、5 とします。

これによって、グループフォルダの表 edmClass_ACL のデータサイズは、 $84 + 263 \times (16 + 5) = 5,607$ バイトになります。表 edmClass_PublicACL のデータサイズは、 $344 + 780 + 263 \times (16 + 5) + 1,024 = 7,671$ バイトになります。

また、表 edmClass_ACL および表 edmClass_PublicACL の容量を算出するために必要な見積もり値と、この例で使用する値を次に示します。

- 個人フォルダで管理するほかのユーザに参照権を設定するファイルの総数：500
- コミュニティルートフォルダの総数：200
- グループルートフォルダの総数：40
- 個人ルートフォルダの総数：1,000
- 個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数：1,000
- グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数：240

フォルダごとに算出したデータサイズと見積もり値を基に、容量を算出します。表 edmClass_ACL および表 edmClass_PublicACL の容量の算出例を次の表に示します。

表 2-9 表 edmClass_ACL の容量の算出例

フォルダの種類	見積もり方法	見積もり式	容量 (バイト)
個人フォルダ	データサイズ×個人フォルダで管理するほかのユーザに参照権を設定するファイルの総数	4,555×500	2,277,500
コミュニティフォルダ	データサイズ×コミュニティルートフォルダの総数	4,818×200	963,600
グループフォルダ	データサイズ×グループルートフォルダの総数	5,607×40	224,280

合計は、3,465,380 バイトになります。

- ごみ箱を使う場合

p はごみ箱の利用率 (%) です。ここでは、0.1 とします。

これによって、グループフォルダの表 edmClass_ACL のデータサイズは、 $347 \times 0.1 = 35$ バイト増加になります。

ごみ箱を使う場合、合計は、3,465,415 バイトになります。

表 2-10 表 edmClass_PublicACL の容量

フォルダの種類	見積もり方法	見積もり式	容量 (バイト)
個人フォルダ	データサイズ× (個人ルートフォルダの総数+個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数)	6,619× (1,000+1,000)	13,238,000
コミュニティフォルダ	データサイズ×コミュニティルートフォルダの総数	6,882×200	1,376,400
グループフォルダ	データサイズ× (グループルートフォルダの総数×3 + グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数)	7,671×(40×3 + 240)	2,761,560

合計は、17,375,960 バイトになります。

「dmaClass」または「edmClass」で始まる表の容量の合計は、463,541,608 バイト (約 442MB) になります。これが「dmaClass」または「edmClass」で始まる表に必要な容量です。

(b) 「cfsClass」で始まる表の容量

「cfsClass」で始まる表の容量は、見積もり式から求めたデータサイズと、見積もり情報定義ファイルのレコード数から求めます。表ごとにデータサイズとレコード数の積から容量を求め、各表の容量を合計することで、「cfsClass」で始まる表の容量を求められます。

データサイズの見積もり式については、「2.4.2(3)(c) 各列のデータサイズ」を参照してください。

レコード数は、見積もり情報定義ファイルの Kind エントリが「UserTable」の行の、Record Count エントリに出力された値を使用します。

算出例を次の表に示します。

表 2-11 Kind エントリの UserTable に出力された結果と算出例

表名 (Table Name エントリの値)	データサイズ		レコード数 (Record Count エントリの値)	容量 (データサイズ×レコー ド数 (バイト))
	見積もり式	値 (バイト)		
cfsClass_Folder	3,995 + 1,024× 4 + 10,304	18,395	38,440	707,103,800
cfsClass_File_CH	4,299 + 1,024× 4 + 10,304	18,699	192,200	3,593,947,800
cfsClass_File_DV	3,604 + 1,024× 4	7,700	192,200	1,479,940,000
cfsClass_Personal	2,066 + 1,024	3,090	1,000	3,090,000
cfsClass_Community	2,322 + 1,024	3,346	200	669,200
cfsClass_Group	2,066 + 1,024	3,090	40	123,600
cfsClass_Quota	1,546 + 1,024	2,570	3	7,710
cfsClass_AssignableDrive	2,582 + 1,024	3,606	3	10,818
cfsClass_Parameter	1,548	1,548	1	1,548

合計は、5,784,894,476 バイト (約 5,517MB) になります。これが「cfsClass」で始まる表に必要な容量です。

(2) File Sharing のメタ情報に対応する表の容量の算出

File Sharing のメタ情報に対応する表の容量は、見積もり情報定義ファイルで、Kind エントリが「MetaTable」の行の値から求めます。Record Length エントリにデータサイズが、Record Count エントリにレコード数が出力されます。表ごとの容量として、データサイズとレコード数の積を算出します。

算出例を次の表に示します。

表 2-12 Kind エントリの MetaTable に出力された結果と算出例

表名 (Table Name エントリの値)	データサイズ (Record Length エントリ の値 (バイト))	レコード数 (Record Count エントリ の値)	容量 (データサイズ×レコー ド数 (バイト))
EDMS_METAINI	158	2,436	384,888
EDMS_META_edms	527	971	511,717
EDMS_META_edmsys	527	100	52,700
EDMS_META_ssysobj	527	50	26,350
EDMS_META_edmnmclass	527	108	56,916
EDMS_META_edmnmprop	527	236	124,372
EDMS_META_dsclass	527	1,566	825,282

表名 (Table Name エントリの値)	データサイズ (Record Length エントリ の値 (バイト))	レコード数 (Record Count エントリ の値)	容量 (データサイズ×レコー ド数 (バイト))
EDMS_META_dmaclass	527	1,800	948,600
EDMS_META_edmclass	527	1,519	800,513
EDMS_META_dsqop	527	1,500	790,500
EDMS_META_edmqop	527	600	316,200
EDMS_META_edmsysclass	527	400	210,800
EDMS_META_dsprop	527	1,500	790,500
EDMS_META_dmaprop	527	3,200	1,686,400
EDMS_META_edmprop	527	3,548	1,869,796
EDMS_META_dmaproto	527	500	263,500
EDMS_META_edmsysprop	527	200	105,400
EDMS_METAMETA	33	1	33
EDMSMETAdocinfo	260	21	5,460
EDMSMETAclassdef	260	1,180	306,800
EDMSMETAREGENVID*	558	見積もりに使用しません。	見積もり式から算出します。

注※

実行環境の情報を格納するためのメタ情報に対応する表に必要な容量を算出します。算出方法は、「データサイズ×実行環境の数」です。ここでは、実行環境が一つの場合を想定します。558 バイト×1 = 558 バイトが必要な容量になります。

メタ情報に対応する表の総容量は、10,077,285 バイトになり、約 9.6MB になります。

2.4.4 データベース容量の見積もり時の注意事項

データベースに、次に示す表のためのユーザ LOB 用 RD エリアを必ず作成してください。実際に格納するデータはありませんが、RD エリアを確保する必要があります。

- dmaClass_ContentTransfer
- edmClass_SgmlInterpretation

2.5 システム管理者の決定

File Sharing を運用および管理するシステム管理者には、Windows の Administrators 権限を持つユーザを割り当てます。運用コマンドは、システム管理者だけが実行できます。

[ファイル共有設定] ポートレットを使用する場合、File Sharing のシステム管理者をポータル管理グループに登録する必要があります。また、登録したポータル管理グループにだけ [ファイル共有設定] ポートレットが表示されるように、アクセス権を設定してください。ポータル管理グループの登録および [ファイル共有設定] ポートレットを表示させる設定の詳細については、マニュアル「uCosminexus Portal Framework 運用管理者ガイド」を参照してください。

File Sharing クライアントと File Sharing サーバを同じマシン上で動作させる場合、システム管理者は一致させておいてください。また、File Sharing は、OS のファイルシステムにアクセスする場合、File Sharing のシステム管理者の権限でアクセスします。File Sharing に対して認証したユーザの権限ではアクセスしないのでご注意ください。

また、セキュリティに関する運用管理のためにセキュリティ運用者を指定する必要があります。セキュリティ運用者については、「3.5.1 セキュリティ運用者の決定」を参照してください。

2.6 インストールとアンインストール

ここでは、File Sharing のインストールとアンインストールについて説明します。

2.6.1 File Sharing サーバのインストール

File Sharing サーバは、File Sharing サーバのインストーラからインストールします。File Sharing サーバのインストール手順について説明します。File Sharing サーバをインストールする場合は、必ずシステム管理者（Administrators）の権限を持つユーザ ID でログインして実施してください。

インストールの手順

1. File Sharing サーバのインストーラを開始します。

インストール開始画面が表示されます。

2. [次へ] ボタンをクリックします。

ユーザ情報の設定画面が表示されます。

インストールをキャンセルしたい場合は、[キャンセル] ボタンをクリックします。

3. ユーザ名および会社名を入力し、[次へ] ボタンをクリックします。

インストール先の選択画面が表示されます。

4. インストール先を指定し、[次へ] ボタンをクリックします。

デフォルトのインストール先は、使用している OS によって次のように異なります。

- Windows Server 2008 R2, Windows Server 2008 x64, Windows Server 2012, Windows Server 2012 R2 の場合

{OS (Windows) のインストールドライブ};%Program Files(x86)%Hitachi%Collaboration%filessharing

- そのほかの OS (Windows) を使用している場合

{OS (Windows) のインストールドライブ};%Program Files%Hitachi%Collaboration%filessharing

別のフォルダにインストールしたい場合は、[参照] ボタンをクリックしてフォルダを選択します。

5. セットアップタイプを選択し、[次へ] ボタンをクリックします。

セットアップタイプとして、「標準」または「カスタム」のどちらかを選択します。

- 標準

プログラムは一般的なオプションでインストールされます。ほとんどのユーザにお勧めします。

- カスタム

プログラムおよび HTML マニュアルの各コンポーネントをインストールするかどうかを選択するダイアログが表示されます。プログラムは必ず選択してください。インストールするコンポーネントをチェックし、[次へ] ボタンをクリックします。

6. スタートメニューのプログラムに登録するプログラムフォルダを選択し、[次へ] ボタンをクリックします。

デフォルトのフォルダ名は、「Collaboration%Collaboration - File Sharing%Server」です。別のフォルダにしたい場合は、任意のフォルダ名を入力します。

7. インストール情報を確認します。

現在の設定内容が表示されます。設定を変更したい場合は、[戻る] ボタンをクリックして、設定を変更してください。[次へ] ボタンをクリックすると、各コンポーネントのインストーラが呼び出され、

インストールの進捗状況が表示されます。インストールが完了すると、インストールが完了したことを知らせるダイアログが表示されます。

8. [完了] ボタンをクリックします。

[はい、今すぐ Read Me ファイルを表示します。] チェックボックスをチェックしていた場合は、Readme が表示されます。

[はい、今すぐコンピュータを再起動します。] チェックボックスをチェックしていた場合は、コンピュータが再起動されます。

更新インストールの場合

更新インストールは、Windows の [コントロール パネル] - [アプリケーションの追加と削除] で実施します。[アプリケーションの追加と削除] ダイアログで Collaboration - File Sharing Server を選択すると、更新インストールの開始画面が表示されます。

この画面で「変更」を選択すると、コンポーネントを追加したり削除したりできます。

「修正」を選択すると、すでにインストールされているコンポーネントすべてが再インストールされます。

「削除」を選択すると、すべてのコンポーネントがアンインストールされます。

必要に応じて「変更」、「修正」または「削除」を選択し、[次へ] ボタンをクリックします。

なお、更新インストールの場合、(File Sharing サーバのインストールディレクトリ)¥Server¥etc 以下のファイルは上書きされません。

エラーメッセージ

インストール中にエラーが発生した場合は、表示されたメッセージを基に対策してください。詳細は、「付録 C.1 媒体からのインストール時のトラブル」を参照してください。

2.6.2 File Sharing サーバのリモートインストール

File Sharing サーバは、JP1/NETM/DM を利用してリモートインストールできます。JP1/NETM/DM の運用は、マニュアル「JP1/NETM/DM システム運用」を参照してください。

リモートインストールでのインストール時に、インストールが中断した場合、File Sharing サーバのインストーラは JP1/NETM/DM の終了コードを返します。詳細は、「付録 C.2 リモートインストール時のトラブル」を参照してください。

2.6.3 File Sharing サーバのアンインストール

File Sharing サーバのアンインストール時の注意事項とアンインストール手順について説明します。なお、ここでは、例として、Windows Server 2008 x86 の場合の手順を示します。

(1) File Sharing サーバのアンインストール時の注意事項

サービスの停止

File Sharing サーバをアンインストールする前に、サービス [Collaboration - File Sharing Server] を停止してください。

削除されないディレクトリおよびファイル

次に示すディレクトリおよびファイルは、アンインストール時に削除されません。必要に応じて削除してください。

- VC++ランタイムライブラリ

- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥aru 以下のディレクトリおよびファイル
- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env 以下のディレクトリおよびファイル
- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc 以下のディレクトリおよびファイル
- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥spool 以下のディレクトリおよびファイル
- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥tmp 以下のディレクトリおよびファイル

また、上記以外のディレクトリ以下にユーザがファイルを作成した場合も、該当するディレクトリと作成したファイルは削除されません。

削除されない情報

次に示す情報は、アンインストール時に削除されません。必要に応じて削除してください。

ユーザ環境変数「Path」の情報

ユーザ環境変数「Path」に設定されているのは次の情報です。

- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥lib

システム環境変数「Path」の情報

システム環境変数「Path」に設定されているのは次の情報です。

- {OS がインストールされたドライブ}:¥Program Files¥Common Files¥Hitachi

レジストリ情報

レジストリに設定されているのは次の情報です。

- HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥Eventlog¥Application
¥Collaboration - File Sharing Server

(2) File Sharing サーバのアンインストール手順

File Sharing サーバをアンインストールする場合は、必ずシステム管理者 (Administrators) の権限を持つユーザ ID でログインして実施してください。

1. Windows のスタートメニューから [コントロール パネル] - [プログラムのアンインストール] をダブルクリックします。
[プログラムのアンインストール] ダイアログが表示されます。
2. Collaboration - File Sharing Server を選択します。
3. [変更と削除] ボタンをクリックします。
更新インストールの開始画面が表示されます。
4. [削除] を選択して [次へ] ボタンをクリックします。
ファイルの削除を確認するダイアログが表示されます。
5. [OK] ボタンをクリックします。
アンインストールが実行されます。
アンインストールを中止したい場合は、[キャンセル] ボタンをクリックします。
6. [完了] ボタンをクリックします。

アンインストールが完了します。

2.6.4 File Sharing クライアントのインストールとアンインストール

File Sharing クライアントのインストールとアンインストールについて説明します。

(1) File Sharing クライアントのインストール

File Sharing クライアントは統合インストーラからインストールします。File Sharing クライアントのインストールの詳細は、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

更新インストールも、統合インストーラから実行します。詳細は、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。なお、更新インストールする場合、更新インストールの前に、Hitachi Web Server およびファイル転送サービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を停止してください。

なお、更新インストールの場合、{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc 以下のファイルは上書きされません。

(2) File Sharing クライアントのアンインストール

File Sharing クライアントをアンインストールする場合、アンインストールの前に、Hitachi Web Server およびファイル転送サービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を停止してください。

なお、次に示すディレクトリおよびファイルは、アンインストール時に削除されません。必要に応じて削除してください。

- ユーザが作成したディレクトリおよびファイル
- {File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc 以下のディレクトリおよびファイル
- {File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥spool 以下のディレクトリおよびファイル
- {File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥tmp 以下のディレクトリおよびファイル

3

File Sharing サーバシステムの設定

この章では、File Sharing サーバシステムの環境設定について説明します。

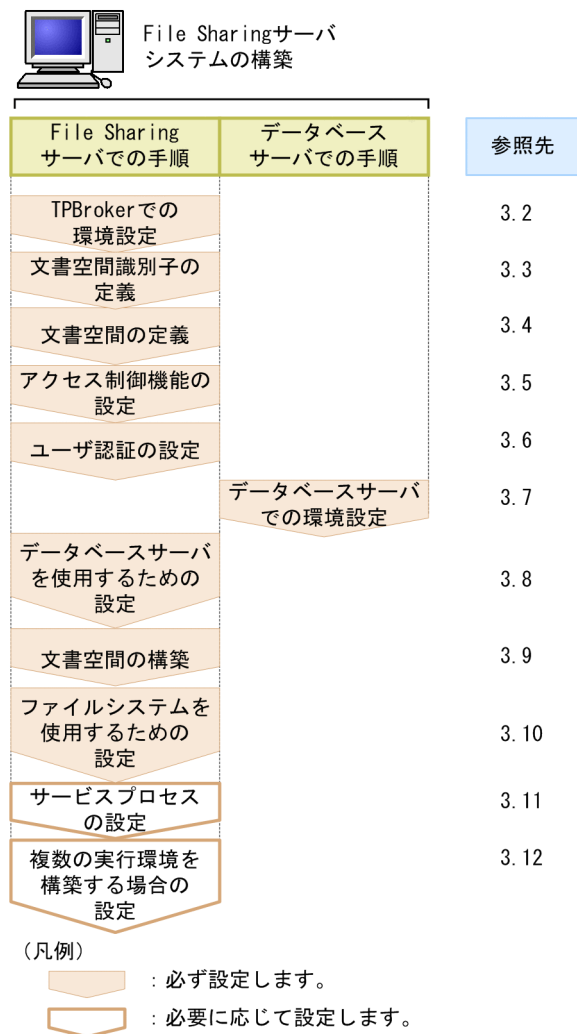
3.1 File Sharing サーバシステムの設定手順

ここでは、File Sharing サーバシステムの設定手順について説明します。

File Sharing サーバシステムは、File Sharing サーバとデータベースサーバで構成されます。これらのサーバは、同じマシンに構築しても異なるマシンに構築してもかまいません。なお、異なるマシンに構築する場合は、File Sharing サーバを構築するマシンに HiRDB Run Time をインストールする必要があります。

File Sharing サーバシステムの設定手順を次の図に示します。

図 3-1 File Sharing サーバシステムの設定手順



- TPBroker での環境設定

File Sharing サーバと File Sharing クライアント間での通信をするために必要な前提プログラムである、TPBroker の環境を設定します。

- 文書空間識別子の定義

データベースで管理されるクラスやプロパティなどに付与するユニークな識別子を、DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)、System Object INI ファイル (slocalreg.ini)、オブジェクト定義ファイル (edms.ini) に定義します。

- 文書空間の定義

File Sharing サーバで管理する文書空間の構成を、DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini) に定義します。

- **アクセス制御機能の設定**

File Sharing サーバで管理する文書空間のセキュリティ運用者とセキュリティ管理者を決定して、セキュリティ管理者をセキュリティ定義ファイル (docaccess.ini) に定義します。

- **ユーザ認証の設定**

File Sharing サーバのユーザ認証ライブラリを使用するための接続データベースの接続情報を、ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini) に定義します。

- **データベースサーバでの環境設定**

HiRDB の環境設定とユーザ権限の設定をします。

- **データベースサーバを使用するための設定**

データベースサーバを使用するために必要な設定をします。

- **文書空間の構築**

文書空間を構築します。

- **ファイルシステムを使用するための設定**

ファイル実体の格納先としてファイルシステムを使用するために必要な設定をします。

- **サービスプロセスの設定**

サービスプロセスを複数起動したい場合に、各サービスプロセスの動作を設定します。必要に応じて設定してください。

- **複数の実行環境を構築する場合の設定**

複数の実行環境を構築する場合に、それぞれの実行環境の環境構築に必要な設定をします。必要に応じて設定してください。

! 注意事項

環境変数 PATH について

環境変数 PATH に次のディレクトリパスを指定しないでください。

ディレクトリパス

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥server¥bin

3.2 TPBroker での環境設定

ここでは、File Sharing サーバの前提プログラムである TPBroker で必要な環境設定について説明します。ただし、すでに TPBroker のシステムを構築している場合は、ここで説明する設定は不要です。

(1) TPBroker システムの構築

File Sharing は CORBA 仕様に基づいた ORB である TPBroker を利用した CORBA 通信を利用します。したがって、File Sharing の環境を設定する前に、TPBroker のシステムを構築しておいてください。TPBroker システムの構築については、マニュアル「TPBroker ユーザーズガイド」を参照してください。

(2) スマートエージェントの設定

スマートエージェントは、ネットワーク上で使用できるオブジェクトを管理し、クライアントからサーバオブジェクトへのアクセスを実現します。File Sharing を使用するためには、ネットワーク内に少なくとも一つのホスト上でスマートエージェントを開始しておく必要があります。スマートエージェントに関する設定や開始方法については、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) デベロッパーズガイド」、またはマニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。

(3) 環境変数またはプロパティの設定

次に示すどちらかの方法で、環境変数またはプロパティを設定してください。なお、環境変数とプロパティの両方を設定した場合は、プロパティの設定が有効になります。

(a) 環境変数の設定

環境変数「HVI_NCATCHALL」に「true」を設定してください。

(b) プロパティの設定

環境変数「VBROKER_ADM」で設定されているディレクトリのファイル「htc.props」に、次の設定を追加してください。

追加する設定

```
vbroker_orb.htc.ncatchall=true
```

3.3 文書空間識別子の定義

文書空間識別子は、データベースで管理されるクラス、プロパティなどに与えるユニークな識別子です。

文書空間識別子の形式

XXXXXXXX-XXXX-XXXX-XXXX-XXXXXXXXXXXX (8けた-4けた-4けた-4けた-12けた)

Xは、0~9およびa~f (小文字) で表される16進数です。

次に示すファイルには、必ず DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini) で指定する文書空間識別子と同じ内容を定義してください。

- System Object INI ファイルの ServiceObjectID エントリ
格納先: {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥slocalreg.ini
- オブジェクト定義ファイルの dmaProp_DocSpaceId エントリ
格納先: {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥edms.ini

それぞれの定義ファイルの詳細は、「5.2.1 System Object INI ファイル (slocalreg.ini)」、 「5.2.2 オブジェクト定義ファイル (edms.ini)」 および 「5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)」を参照してください。

3.4 文書空間の定義

ここでは、File Sharing クライアントから接続する File Sharing サーバの文書空間の構成を定義する方法を説明します。

File Sharing サーバの文書空間は、DocumentSpace 構成定義ファイル（{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}*\Server*etc*\docspace.ini）で定義します。DocumentSpace 構成定義ファイルの詳細は、「5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル（docspace.ini）」を参照してください。

3.4.1 文書空間を定義する前の準備

DocumentSpace 構成定義ファイルを作成する前に、次に示す点について決定してください。

(1) サービスプロセス数の決定

DocumentSpace 構成定義ファイルには、サービスプロセス監視プロセスが作成するサービスプロセスの数を指定します。

サービスプロセスは、1 プロセス当たり複数の File Sharing クライアントを対象としてサービスを提供できます。ただし、サービスプロセスがダウンした場合、ダウンしたプロセスに接続していたすべてのユーザがサービスを受けられなくなります。したがって、メモリの使用効率と障害が発生した場合の影響を考慮してサービスプロセス数を決定してください。

(2) DB コネクションプールの管理方法の決定

File Sharing サーバは、データベースのメモリのオーバーヘッド削減および接続時のオーバーヘッド削減のために DB コネクションプール機能を提供しています。

(a) DB コネクションプール機能の概要

File Sharing サーバを起動したとき、データベースに対する複数のコネクションをサービスプロセス単位にプールします。File Sharing クライアントからの接続要求時やトランザクションの開始要求時に、プールされている DB コネクションを動的に割り当てます。

(b) DB コネクションのプール管理方法について

DB コネクションのプール管理方法について説明します。

1. File Sharing サーバを起動したときに、サービスプロセス単位に設定したコネクションプール数だけデータベースとコネクションを確立して、そのコネクションをプールします。
2. File Sharing クライアントからの接続要求時やトランザクションの開始要求時に、DB コネクションプールからコネクションを取得します。プールされているコネクションがすべて使われている場合は、一時コネクションを動的に作成します。一時コネクション数が上限に達している場合は、コネクション待ち合わせキューにキューイングされます。
 - 一時コネクションの割り当て
一時コネクションは、プール数とは別に定義した最大値まで、動的にデータベースに接続します。トランザクション終了時に、コネクションの空きを待っているユーザがいる場合に割り当てます。コネクションの空きを待っているユーザがいなければ、データベースとのコネクションを切断します。
 - DB コネクション割り当て待ち時間の監視

プールされた DB コネクションがすべて使用されている場合に、一時的に DB コネクションの最大要求数を越えたトランザクションの要求が発生したときの File Sharing サーバの動作として、空きコネクションが発生したときに割り当てるように設定しているとき、割り当て待ち時間に設定したタイマ監視機能を使用できます。このとき、設定した待ち時間を越えたタイムアウトを検知すると、エラーメッセージを出力して DB コネクション割り当て待ちリストから要求を削除するとともに、File Sharing クライアントにエラーの戻り値を返却します。

3. File Sharing クライアントからの解放要求時やトランザクションの終了要求時に、コネクションを DB コネクションプールに戻します。コネクション待ち合わせキューにコネクション待ちのユーザがいれば、このコネクションを割り当てます。

これらの動作は、DocumentSpace 構成定義ファイルの[Entry0001]セクションを構成する次のエントリで指定します。

- DBConnectionPoolCount エントリ
- DBConnectionPoolDynamic エントリ
- DBConnectionPoolTiming エントリ
- DBConnectionPoolOver エントリ
- DBConnectionScope エントリ
- DBConnectionPoolWaitTimeOut エントリ

DB コネクションプールの管理方法に従って、最適な設定をしてください。各エントリの指定方法については、「5.2.3(3) DocumentSpace 構成定義ファイルの詳細」を参照してください。

(c) 文書空間の定義と DB コネクションの関係

File Sharing サーバから File Sharing で使用するデータベースサーバに接続する場合の最大コネクション数は、次の式で算出できます。

$(\text{DBConnectionPoolCountエントリの値} + \text{DBConnectionPoolDynamicエントリの値}) \times \text{Processエントリの値}$

このため、File Sharing で使用するデータベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義で指定する pd_max_users には、この式で算出した値よりも大きな値を指定してください。

なお、File Sharing サーバが複数存在する場合は、その合計値よりも大きな値を指定してください。

3.4.2 文書空間定義時の注意事項

DocumentSpace 構成定義ファイルで文書空間の構成を変更する場合の注意事項について説明します。

File Sharing サーバの運用を開始してから、セッションタイムアウト時間の変更などによって、文書空間の構成を変更するような場合が考えられます。このような場合は、次の手順で文書空間の構成を変更してください。

1. File Sharing サーバを終了します。
2. 文書空間の構成定義を変更します。
3. File Sharing サーバを再起動します。

なお、File Sharing サーバの起動と終了については、「7.2 File Sharing サーバの起動と終了」を参照してください。

3.5 アクセス制御機能に関する設定

ここでは、アクセス制御機能のための管理者の設定について説明します。

3.5.1 セキュリティ運用者の決定

セキュリティ運用者とは、アクセス制御機能の運用情報を定義するセキュリティ定義ファイルを運用・管理するユーザです。セキュリティ定義ファイル (docaccess.ini) を更新することで、セキュリティ管理者を定義したり、ユーザの権限を定義したり変更したりします。

File Sharing サーバをインストールした直後は、システム管理者がセキュリティ運用者の役割も持ちます。システム管理者が持っているセキュリティ定義ファイルの更新権を、セキュリティ運用者に所有者を変更することで、セキュリティに関する運用を明確に分けることができます。

3.5.2 セキュリティ管理者の定義

セキュリティ管理者は、文書空間のすべてのアクセス制御対象オブジェクトに対してフルコントロールのアクセス権を持つユーザです。セキュリティ管理者は、Collaboration を利用できるユーザから選択してセキュリティ定義ファイルに定義します。ただし、セキュリティ管理者には兼任ユーザを指定しないでください。

セキュリティ管理者は必ず指定してください。なお、セキュリティ管理者の定義については、「5.2.4 セキュリティ定義ファイル (docaccess.ini)」を参照してください。

3.6 ユーザ認証に関する設定

File Sharing のユーザ認証は、Collaboration - Online Community Management およびディレクトリサーバから取得するユーザ情報に基づいて、File Sharing サーバが提供するユーザ認証ライブラリを用いて実施します。このユーザ認証ライブラリを使用するためには、ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini) で Collaboration - Online Community Management の接続データベースへの接続情報、およびディレクトリサーバへの接続情報を定義しておく必要があります。

定義方法については、「5.2.5 ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini)」を参照してください。

3.7 データベースサーバでの環境設定

ここでは、File Sharing のシステム構築の前提となるデータベースサーバ（データベースシステムは HiRDB）で必要な環境設定について説明します。

3.7.1 HiRDB の環境設定の準備

File Sharing が管理するフォルダとファイルの属性情報はデータベースに格納されます。

File Sharing で使用できるデータベースは HiRDB だけです。したがって、File Sharing の環境を設定する前に、HiRDB のシステムを構築しておく必要があります。HiRDB の環境設定の準備として、HiRDB のインストールまでは終わらせておいてください。HiRDB のシステム構築の流れおよびインストール方法については、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照してください。

また、HiRDB の環境設定を始める前に、File Sharing で利用する RD エリアについては、ファイル数やフォルダ数を考慮して見積もってください。File Sharing で利用する RD エリアの見積もり方法については、「2.4 データベース容量の見積もり」を参照してください。

3.7.2 HiRDB の環境設定

File Sharing を運用するために必要な RD エリアなどを作成します。HiRDB の環境設定については、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照してください。なお、ユーザ用 RD エリアについては、「2.4 データベース容量の見積もり」で算出した値に従って作成してください。

RD エリアを確保するには、HiRDB のデータベース構成変更ユーティリティ (pdmod) を使用します。コマンドの形式を次に示します。

形式

```
pdmod -a 制御文を記述したファイル名
```

次に、コマンドの引数に指定するファイル（制御文を記述したファイル）の記述例を示します。この記述例は、HiRDB/Single Server を使用する場合の例です。また、File Sharing が使用する RD エリアの容量を約 200MB と想定しています。この容量には、HiRDB のシステムで使用する RD エリアの容量は含まれません。

この記述例を使用する場合は、実行環境に応じて次に示す個所の変更が必要です。

- RD エリア名
- ページ長
- セグメントサイズ
- HiRDB ファイルシステム領域名
- HiRDB ファイル名
- HiRDB ファイル内セグメント数

記述例

```
create rdarea CFS_METATBL for user used by PUBLIC
page 30720 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_METATBL¥CFS_METATBL"
initial 50 segments
```

```

;
create rdarea CFS_METAIDX for user used by PUBLIC
page 16384 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_METAIDX¥CFS_METAIDX"
initial 50 segments
;

create rdarea CFS_SYSTBL for user used by PUBLIC
page 16384 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_SYSTBL1¥CFS_SYSTBL1"
initial 4000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_SYSTBL2¥CFS_SYSTBL2"
initial 4000 segments
;

create rdarea CFS_SYSIDX for user used by PUBLIC
page 8192 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_SYSIDX1¥CFS_SYSIDX1"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_SYSIDX2¥CFS_SYSIDX2"
initial 8000 segments
;

create rdarea CFS_USRTBL for user used by PUBLIC
page 8192 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_USRTBL1¥CFS_USRTBL1"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_USRTBL2¥CFS_USRTBL2"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_USRTBL3¥CFS_USRTBL3"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_USRTBL4¥CFS_USRTBL4"
initial 8000 segments
;

create rdarea CFS_USRIDX for user used by PUBLIC
page 8192 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_USRIDX1¥CFS_USRIDX1"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_USRIDX2¥CFS_USRIDX2"
initial 8000 segments
;

create rdarea CFS_DOC01 for LOB used by PUBLIC
file name "C:¥DB¥CFS_BLOB¥CFS_DOC01"
initial 10 segments
;

create rdarea CFS_SGML01 for LOB used by PUBLIC
file name "C:¥DB¥CFS_BLOB¥CFS_SGML01"
initial 10 segments
;

```

参考

例に示した制御文を記述した場合、次の表に示す構成で RD エリアが作成されます。

表 3-1 記述例で作成する RD エリアの構成

RD エリア名	ページ長 (バイト)	セグメン トサイズ	HiRDB ファイルシステム領 域名	HiRDB ファイル名	HiRDB ファ イル内セグ メント数
CFS_METATBL	30,720	20	C:¥DB¥CFS_METATBL	CFS_METATBL	50
CFS_METAIDX	16,384	20	C:¥DB¥CFS_METAIDX	CFS_METAIDX	50
CFS_SYSTBL	16,384	20	C:¥DB¥CFS_SYSTBL1	CFS_SYSTBL1	4,000
			C:¥DB¥CFS_SYSTBL2	CFS_SYSTBL2	4,000

RD エリア名	ページ長 (バイト)	セグメント サイズ	HiRDB ファイルシステム領 域名	HiRDB ファイル名	HiRDB ファ イル内セグ メント数
CFS_SYSIDX	8,192	20	C:%DB%CFS_SYSIDX1	CFS_SYSIDX1	8,000
			C:%DB%CFS_SYSIDX2	CFS_SYSIDX2	8,000
CFS_USRTBL	8,192	20	C:%DB%CFS_USRTBL1	CFS_USRTBL1	8,000
			C:%DB%CFS_USRTBL2	CFS_USRTBL2	8,000
			C:%DB%CFS_USRTBL3	CFS_USRTBL3	8,000
			C:%DB%CFS_USRTBL4	CFS_USRTBL4	8,000
CFS_USRIDX	8,192	20	C:%DB%CFS_USRIDX1	CFS_USRIDX1	8,000
			C:%DB%CFS_USRIDX2	CFS_USRIDX2	8,000
CFS_DOC01	—	—	C:%DB%CFS_BLOB	CFS_DOC01	10
CFS_SGML01	—	—	C:%DB%CFS_BLOB	CFS_SGML01	10

(凡例) —：指定しません。

この例では、それぞれの RD エリアが、次の用途で使用されることを想定しています。

- CFS_METATBL
メタ情報の表を格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、文書空間情報ファイルの[RdAreaName]セクションの MetaTblName エントリに指定します。
- CFS_METAIDX
メタ情報の表に定義するインデクスを格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、文書空間情報ファイルの[RdAreaName]セクションの MetaIdxName エントリに指定します。
- CFS_SYSTBL
システムが定義する表を格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、文書空間情報ファイルの[RdAreaName]セクションの SysTblName エントリに指定します。
- CFS_SYSIDX
システムが定義する表に定義するインデクスを格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、文書空間情報ファイルの[RdAreaName]セクションの SysIdxName エントリに指定します。
- CFS_USRTBL
ファイルやフォルダの属性情報などの表を格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、文書空間情報ファイルの[RdAreaName]セクションの UsrTblName エントリに指定します。
- CFS_USRIDX
ファイルやフォルダの属性情報などの表に定義するインデクスを格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、文書空間情報ファイルの[RdAreaName]セクションの UsrIdxName エントリに指定します。
- CFS_DOC01
dmaClass_ContentTransfer クラスのために確保する RD エリアです。実際に格納するデータはありません。ここで作成した RD エリアの名称を、文書空間情報ファイルの[RdAreaName]セクションの DocTblName エントリに指定します。
- CFS_SGML01
edmClass_SgmlInterpretation クラスのために確保する RD エリアです。実際に格納するデータはありません。ここで作成した RD エリアの名称を、文書空間情報ファイルの[RdAreaName]セクションの SgmlTblName エントリに指定します。

文書空間情報ファイルでの RD エリア名の指定については、「5.2.14 文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt)」を参照してください。

3.7.3 HiRDB のユーザ権限の設定

File Sharing で使用するデータベースを定義する場合、HiRDB に対して接続する必要があります。したがって、データベースを作成するユーザに対して、CONNECT 権限を付与してください。また、スキーマを定義する必要もあるので、スキーマ定義権限も付与してください。なお、ここで CONNECT 権限やスキーマ定義権限を付与するユーザを、DocumentSpace 構成定義ファイルの [Entry0001] セクションで、PdUser エントリに指定してください。DocumentSpace 構成定義ファイルについては、「5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)」を参照してください。

HiRDB のユーザ権限は、定義系 SQL の GRANT 文を使用して与えます。CONNECT 権限とスキーマ定義権限を与える GRANT 文の例を次に示します。

例

ユーザ (ユーザ名: USER01 パスワード: PASS01) に CONNECT 権限とスキーマ定義権限を与える場合は、次のように記述します。

```
GRANT CONNECT TO USER01 IDENTIFIED BY PASS01
GRANT SCHEMA TO USER01
```

HiRDB のユーザ権限の付与については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」を参照してください。GRANT 文の文法および詳細な注意事項などについては、マニュアル「HiRDB SQL リファレンス」を参照してください。

3.7.4 データベースサーバ設定時の注意事項

(1) システム管理者に関する注意事項

File Sharing サーバとデータベースサーバを同一のマシンで運用する場合、File Sharing サーバのシステム管理者と HiRDB 管理者を同一のユーザとすることをお勧めします。

(2) 使用できる文字コード

文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合、File Sharing のデータベースとして使用できる文字コードはシフト JIS 漢字コードだけです。そのため、Shift-JIS を指定するときは、uCosminexus Portal Framework, Collaboration - Online Community Management, および Collaboration - Forum とは別のデータベースシステムを構築してください。

(3) pd_indexlock_mode オペランドについての注意事項

HiRDB のシステム共通定義の pd_indexlock_mode オペランドには、NONE を指定してください。

3.8 データベースサーバを使用するための設定

ここでは、File Sharing でデータベースサーバを使用するために必要な設定について説明します。

データベースサーバを使用するために必要な設定を File Sharing サーバで実行します。File Sharing サーバは、データベースサーバに対する HiRDB クライアントに当たります。

なお、HiRDB クライアントとは、File Sharing サーバからデータベースサーバを使用するためのクライアント機能のことです。File Sharing サーバとデータベースサーバを同じマシンに構築する場合は、HiRDB/Single Server または HiRDB/Parallel Server によって提供される機能の中に含まれます。File Sharing サーバとデータベースサーバを異なるマシンに構築する場合は、File Sharing サーバと同じマシンにインストールしている、HiRDB Run Time によって提供されます。

3.8.1 HiRDB クライアントの設定

HiRDB クライアントの設定の詳細については、マニュアル「HiRDB UAP 開発ガイド」を参照してください。ここでは、File Sharing サーバから使用する場合に注意する点について説明します。

(1) クライアント環境定義 PDISLLVL の設定

クライアント環境定義 PDISLLVL に 2 が設定されていることを確認してください。

データベースサーバの構築を HiRDB が提供するバッチファイル (SPSetup.bat) を使用して実行した場合、クライアント環境定義 PDISLLVL に 0 が設定されます。この場合、クライアント環境定義 PDISLLVL に 2 を設定し直してください。

(2) クライアント環境定義 PDSWATCHTIME の設定

HiRDB クライアントからデータベースサーバに対して一定時間処理要求をしないと、タイムアウトが発生して接続が切断されます。このタイムアウト時間は、クライアント環境定義 PDSWATCHTIME に適切な値を設定することで制御できます。PDSWATCHTIME は、データベースサーバが HiRDB クライアントからの要求に対する応答を返してから、次に HiRDB クライアントから要求が来るまでの最大待ち時間を指定する環境定義です。File Sharing の場合、File Sharing クライアントのポートレット機能を使用して File Sharing サーバにアクセスしてから、次にアクセスするまでの最大待ち時間 (File Sharing サーバの最大待ち時間) を考慮して決定してください。

設定する値は、次のように決定します。

File Sharingサーバの最大待ち時間 + α

例えば、File Sharing システムの運用時間が 8:00 から 22:00 の場合、22:00 から翌日の 8:00 までを最大待ち時間と推定できます。これに α を加えた時間を、秒数に換算してクライアント環境定義 PDSWATCHTIME に設定します。

なお、File Sharing からアクセスしようとした場合にタイムアウトによって接続が切断されていたときは、File Sharing によって自動的に接続が確立され、処理が実行されます。

(3) クライアント環境定義設定時の注意事項

文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合、クライアント環境定義 PDCLTCNVMODE を設定しないでください。

3.9 文書空間の構築

文書空間を構築する方法について説明します。

なお、文書空間を構築する前に、データベースサーバを使用するための設定を終わらせておいてください。データベースサーバを使用するための設定については、「3.8 データベースサーバを使用するための設定」を参照してください。

参考

文書空間の構築では、システム導入支援機能を使用した文書空間の構築方法を説明しています。システム導入支援機能とは、ユーザ用 RD エリアの容量の見積もりおよび新規に文書空間を構築するための設定を支援する機能です。システム導入支援機能を使用すると、システム導入支援機能を使用しない場合に比べて、設定の手順を減らすことができます。システム導入支援機能を使用しない場合の設定方法については、「付録 D システム導入支援機能を使用しない場合の設定」を参照してください。

3.9.1 文書空間の構築コマンドの実行

「2.4.2(2)(d) 文書空間の定義コマンドの実行」で作成された定義情報を基に、文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) を実行して、新規に文書空間を構築します。コマンドを実行するときは、HiRDB を起動し、スキーマを作成しておいてください。

文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) の実行例を次に示します。

実行例

```
EDMCBuildDocSpace -m exec
```

文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) の詳細は、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCBuildDocSpace (文書空間の構築)」を参照してください。

3.10 ファイルシステムを使用するための設定

ここでは、File Sharing で管理するファイルのファイル実体をファイルシステムで管理するために必要な設定について説明します。

3.10.1 ファイル実体の格納先の確保

ファイルシステム上に、ファイル実体の格納先を確保します。

(1) ファイル実体の格納先に指定できるファイルシステム

ファイル実体の格納先ディレクトリには、次のどちらかのファイルシステムを指定してください。

- File Sharing サーバ上のローカルディスクまたは共有ディスク
- ネットワーク上のマシンの共有ディスク

なお、複数の実行環境を構築する場合は、共有ディスクを指定してください。

(2) ベースパスに設定するディレクトリの作成

ファイル実体は、個人ルートフォルダ、ワークスペースルートフォルダ、またはグループルートフォルダごとに、対応するファイルシステム上のディレクトリに格納されます。個人ルートフォルダ、ワークスペースルートフォルダ、またはグループルートフォルダに対応するディレクトリの基点になるパスを、**ベースパス**といいます。また、ベースパスについて設定した情報を、**ベースパス情報**といいます。ベースパス情報は、File Sharing のシステムの運用を開始する前に設定する必要があります。詳細は、「6.4 デフォルトのベースパス情報の登録」を参照してください。

なお、ベースパスとして設定するディレクトリは、あらかじめファイルシステム上に作成しておく必要があります。

ディレクトリ作成時には、次の点を考慮してください。

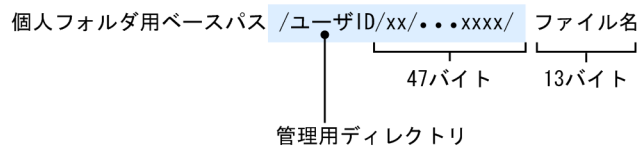
- **ベースパスの長さ**

ベースパスとして指定したディレクトリ下には、**管理用ディレクトリ**が作成され、その下にファイル実体が格納されます。

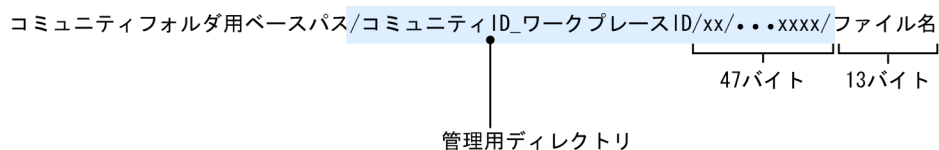
個人フォルダ、コミュニティフォルダ、およびグループフォルダで管理するファイルのファイル実体の格納先を、次の図に示します。

図 3-2 個人フォルダ，コミュニティフォルダ，およびグループフォルダで管理するファイルのファイル実体の格納先

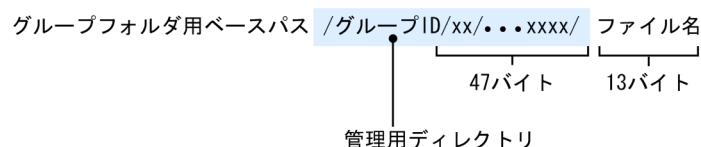
●個人フォルダの場合



●コミュニティフォルダの場合



●グループフォルダの場合



ファイル実体の格納先のベースパス，管理用ディレクトリパス，およびファイル名の長さの和が OS の最大パス長を超えないように考慮してください。なお，ファイル名は，13 バイト固定です。

• ベースパス情報の設定単位に応じたディレクトリの作成

設定するベースパス情報ごとに，対応するディレクトリを作成します。

ベースパス情報は，次の単位で設定します。

• フォルダ種別単位

個人ルートフォルダ，ワークスペースルートフォルダ，およびグループルートフォルダで，異なるベースパスを設定します。

• Collaboration - Directory Access から取得できる所属組織単位，役職単位または組織 ID 単位

個人ルートフォルダおよびワークスペースルートフォルダの場合は所属する組織単位またはユーザの役職単位に，グループルートフォルダの場合は組織 ID 単位に，ベースパスを設定できます。

なお，個人ルートフォルダおよびワークスペースルートフォルダの場合，一つのフォルダ種別に対して設定できるのは，所属組織単位または役職単位のどちらかだけです。Collaboration - Directory Access については，マニュアル「Collaboration - Directory Access ユーザーズガイド」を参照してください。

• ルートフォルダ単位の最大許容サイズに応じたディスク容量の確保（最大許容サイズを設定する運用の場合）

ベースパス下に作成するルートフォルダ数と最大許容サイズから必要な容量を算出して，ディスク容量を確保します。

File Sharing のシステムでは，個人ルートフォルダ，ワークスペースルートフォルダ，およびグループルートフォルダに対して最大許容サイズを設定できます。また，個人ルートフォルダを使用するユーザ，コミュニティを作成するユーザ，またはグループフォルダを使用する組織やユーザに応じた最大許容サイズを設定できます。

ベースパスに対応するディレクトリを作成するときには、ベースパス情報と最大許容サイズ情報の組み合わせを考慮して、そのベースパス下に必要な容量を確保してください。

また、ネットワーク上のマシンの共有ディスクをファイル実体の格納先として使用する場合は、File Sharing サーバからファイルシステムがあるマシンにアクセスするための設定が必要です。設定方法については、「3.10.3 ネットワーク上のマシンの共有ディスクを使用する場合の設定」を参照してください。

このほか、複数の実行環境を構築する場合は、「3.12(4) ファイル実体の格納先についての留意点」を参照してください。

3.10.2 ファイル実体の格納先のアクセス権限の設定

ファイル実体の格納先に指定するディレクトリには、Administrators グループに対してだけフルコントロールの設定をしてください。そのほかのグループまたはユーザに対して操作可能な権限を設定すると、ファイル不整合の原因となります。

3.10.3 ネットワーク上のマシンの共有ディスクを使用する場合の設定

ここでは、File Sharing サーバとは異なるネットワーク上のマシンの共有ディスクを使用してファイル実体を格納する場合に必要な設定について説明します。

ネットワーク上のマシンの共有ディスクを使用する場合、ベースパスは、次の 2 種類のどちらかの方法で指定できます。UNC 形式で指定することをお勧めします。

- UNC 形式での指定
- ネットワークドライブからのフルパス指定

指定方法によって、File Sharing サーバがファイルシステムにアクセスするために必要な設定が異なります。

(1) ベースパスを UNC 形式で指定する場合に必要な設定

ファイルシステムにアクセスするための情報を、ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini) に設定します。

ネットワークリソース情報ファイルには、ネットワーク接続の接続期間と、接続するコンピュータ名、接続に使用するユーザ名およびパスワードを指定します。また、必要に応じて、ファイル転送のチューニングに必要な情報も設定します。

File Sharing サーバとファイルシステムとの接続は、File Sharing サーバを起動した時に確立され、File Sharing サーバの停止時に切断されます。

ネットワークリソース情報ファイルの指定方法については、「5.2.11 ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini)」を参照してください。

(2) ベースパスをネットワークドライブからのフルパスで指定する場合に必要な設定

File Sharing サーバを起動する前に、次の準備が必要です。

- ファイルシステムに対して、ファイルシステムが含まれるドメインの Administrators 権限でログインするため、あらかじめ、File Sharing サーバとファイルシステムを同一ドメインまたは信頼関係を持つドメイン間で構成しておきます。

- ベースパス情報に設定した共有名と同じ共有名で、ファイルシステムにネットワークドライブを割り当てておきます。

ファイルシステムへの接続は、File Sharing サーバを起動する時のログオン設定で実行します。起動方法については、「7.2.1 File Sharing サーバの起動方法」を参照してください。

3.11 File Sharing サーバのサービスプロセスの設定

サービスプロセスごとに動作を定義することで、ポート番号を指定して、サービスプロセスを複数起動できるようになります。なお、サービスプロセスの設定は任意です。必要に応じて設定してください。

サービスプロセス定義ファイルについては、「5.2.10 サービスプロセス定義ファイル (process.ini)」を参照してください。

3.12 複数の実行環境を構築する場合の設定

ここでは、複数の実行環境を構築する方法について説明します。File Sharing では、使用ユーザ数や単位時間当たりのトランザクション数の増加などによるシステム負荷を軽減するために、一つのデータベースに複数の File Sharing サーバの実行環境を配置したシステム構成を構築できます。これによって、システム全体の負荷分散が実現できます。

また、ここでは、ファイル実体の格納先についての留意点も説明します。

(1) 新規に実行環境を構築する場合の手順

複数の実行環境から同一文書空間にアクセスするために、新規に実行環境を構築する手順を次に示します。なお、次の手順では、接続する文書空間にアクセスする実行環境が構築されていることが前提です。

1. File Sharing サーバをインストールして、新規に File Sharing サーバの実行環境を作成します。

File Sharing サーバのインストール方法については、「2.6.1 File Sharing サーバのインストール」を参照してください。

2. System Object INI ファイルおよび DocumentSpace 構成定義ファイルを設定します。

このとき、同一文書空間として使用したい実行環境の DocumentSpace 構成定義ファイルの SerialId エントリと同じ値を、次のエントリに指定します。

- ServiceObjectID エントリ (System Object INI ファイル)
- SerialId エントリ (DocumentSpace 構成定義ファイルの [Entry0001] セクション)

System Object INI ファイルについては「5.2.1 System Object INI ファイル (slocalreg.ini)」を、DocumentSpace 構成定義ファイルについては「5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)」を参照してください。

3. メタ情報ファイルの出力コマンド (EDMPrintMeta -F) を実行します。

メタ情報ファイルの出力コマンドについては、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMPrintMeta (メタ情報ファイルの出力)」を参照してください。

4. File Sharing サーバ実行環境の情報の登録コマンド (EDMRegEnvId -r) を実行します。

File Sharing サーバ実行環境の情報の登録コマンドについては、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMRegEnvId (File Sharing サーバ実行環境の情報の登録)」を参照してください。

これによって、新規に構築した実行環境から同一文書空間にアクセスできるようになります。

(2) 実行環境を変更する場合の手順

別マシンへの実行環境の移動や、実行環境ディレクトリのパスの変更によって実行環境を変更する場合の手順を次に示します。

変更する実行環境の実行環境識別子の値によって、手順が一部異なります。実行環境識別子は、File Sharing サーバ実行環境の情報の登録コマンド (EDMRegEnvId -l) で確認してください。

また、別マシンに実行環境を移動する場合と、同一マシンの実行環境を変更する場合とで、変更前の File Sharing サーバのアンインストールを実施する順序が異なります。別マシンの場合は以降説明する手順の最後 (手順 4.のあと) に、同一マシンの場合は手順の最初 (手順 1.の前) にアンインストールを実施してください。アンインストールの方法については、「2.6.3 File Sharing サーバのアンインストール」を参照してください。

1. 変更後の File Sharing サーバの実行環境を作成します。

2. 変更前の「[File Sharing サーバのインストールディレクトリ]¥Server¥etc」に格納されているファイルを、変更後の「[File Sharing サーバのインストールディレクトリ]¥Server¥etc」に移動します。
3. 変更後の実行環境で、メタ情報ファイルの出力コマンド (EDMPrintMeta -F) を実行します。
メタ情報ファイルの出力コマンドについては、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMPrintMeta (メタ情報ファイルの出力)」を参照してください。
4. 実行環境識別子が 1~254 の場合、File Sharing サーバ実行環境の情報の登録コマンド (EDMRegEnvId -u) を実行します。
File Sharing サーバ実行環境の情報の登録コマンドについては、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMRegEnvId (File Sharing サーバ実行環境の情報の登録)」を参照してください。
実行環境識別子が「0」の場合、この作業は必要ありません。

(3) 実行環境を削除する場合の手順

実行環境を削除する手順を次に示します。

1. File Sharing サーバ実行環境の情報の登録コマンド (EDMRegEnvId -d) を実行します。
File Sharing サーバ実行環境の情報の登録コマンドについては、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMRegEnvId (File Sharing サーバ実行環境の情報の登録)」を参照してください。

ただし、削除しようとする実行環境で、すでに OIID (プロパティとして付けられている識別子) が割り当てられているオブジェクトが作成されていた場合、実行環境は削除できません。

(4) ファイル実体の格納先についての留意点

複数の File Sharing サーバで構成する複数実行環境を運用する場合、すべての File Sharing サーバの実行環境からファイル実体の格納先ディレクトリにアクセスできるように設定してください。このとき、ファイル実体の格納先には、File Sharing サーバを運用するマシンの共有ディスクを使用することをお勧めします。File Sharing サーバの各マシンのローカルディスクをファイル実体の格納先とする場合、ファイルやフォルダの登録時の File Sharing サーバと、参照・更新時の File Sharing サーバが異なると、参照・更新の操作がエラーとなるためです。

なお、複数の文書空間で同一のファイルシステムを格納先とする場合、ファイル実体の格納先パスは各文書空間で重複しないようにしてください。同一の格納先を複数の文書空間で使用した場合、ファイル破壊の原因となります。

4

File Sharing クライアントシステムの設定

この章では, File Sharing クライアントシステムの環境設定について説明します。

4.1 File Sharing クライアントシステムの設定手順

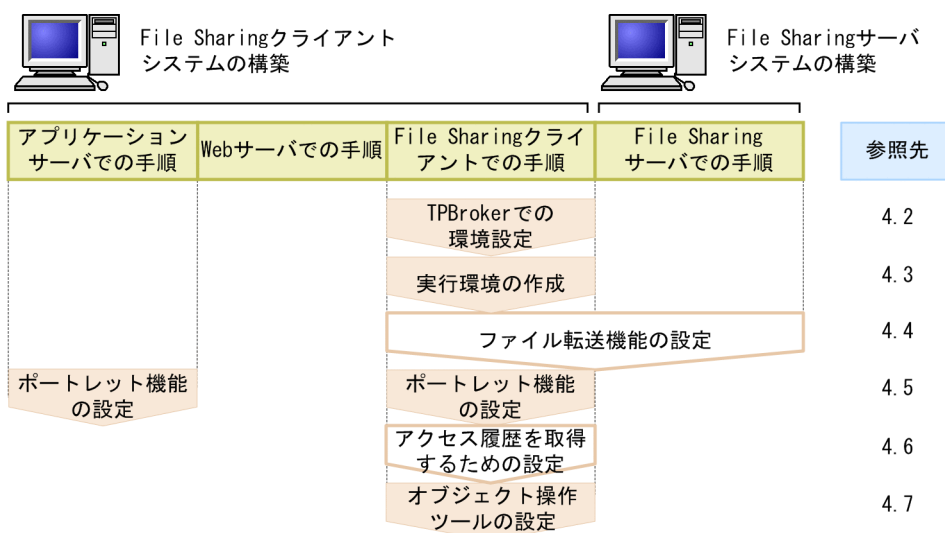
ここでは、File Sharing クライアントシステムの設定手順について説明します。

File Sharing クライアントシステムは、アプリケーションサーバ、Web サーバおよび File Sharing クライアントで構成されます。アプリケーションサーバ、Web サーバ（Hitachi Web Server）および File Sharing クライアントは、同じマシンに配置します。

また、File Sharing クライアントは、File Sharing サーバやデータベースサーバと同じマシンに構築することもできます。

File Sharing クライアントシステムは、次の手順で設定します。

図 4-1 File Sharing クライアントシステムの設定手順



(凡例)

- : 必ず設定します。
- : 必要に応じて設定します。

- **TPBroker での環境設定**

File Sharing サーバと File Sharing クライアント間での通信をするために必要な前提プログラムである、TPBroker の環境を設定します。

- **実行環境の作成**

File Sharing クライアントの実行に必要な環境変数を設定します。

- **ファイル転送機能の設定**

File Sharing サーバと File Sharing クライアントを別マシンで動作させる場合に、ファイル転送機能を実行するための環境を設定します。それぞれのマシンで設定してください。

- **ポートレット機能の設定**

ポートレット機能を使用するために、アプリケーションサーバの設定をします。

なお、ポートレット機能は、次の二つです。

- File Sharing が管理するフォルダとファイルを [ファイル共有] ポートレットで操作する機能
- ファイル実体を格納するファイルシステムの情報を [ファイル共有設定] ポートレットで設定する機能

- **アクセス履歴を取得するための設定**

アクセス履歴を取得するための設定をします。アクセス履歴を取得しない運用の場合、この設定は不要です。

- **オブジェクト操作ツールの設定**

File Sharing の運用作業で使用するオブジェクト操作ツールの設定をします。

4.2 TPBroker での環境設定

File Sharing クライアントの前提プログラムである TPBroker で必要な環境設定は、File Sharing サーバシステムでの設定と同様に行う設定と、File Sharing クライアントでだけ行う設定があります。

File Sharing サーバシステムと同様に設定する TPBroker での環境設定の方法については、次の個所を参照してください。

- 「3.2(1) TPBroker システムの構築」
- 「3.2(2) スマートエージェントの設定」

ここでは、File Sharing クライアントでだけ行う設定について説明します。

(1) 環境変数の設定

環境変数「HVI_CTRLHANDLER_NOCLEANUP」には、「true」を設定してください。

環境変数「HVI_CTRLHANDLER_NOCLEANUP」の設定の詳細については、TPBroker の「コントロールハンドラ内でおこなう ORB の終了処理の有無指定機能」を参照してください。

4.3 File Sharing クライアントの実行環境の作成

File Sharing クライアントを使用するために必要な環境変数を次の表に示します。

表 4-1 File Sharing クライアントの環境変数一覧

環境変数名	内容	必須/任意
DBR_CONNECTSV_ENVID	接続先の実行環境識別子	同一文書空間に複数の実行環境を構築する場合だけが必要です。
DBR_CON_TIMEOUT	File Sharing サーバへの接続要求に対する File Sharing クライアントでの接続確立待ち時間	設定は任意です。
DBR_DETAIL_ERRORLOG	詳細メッセージ取得の有無	設定は任意です。
DBR_DETAIL_ERRORLOG_DIR	詳細エラーログファイルの出力先パス名	設定は任意です。
DBR_DETAIL_ERRORLOG_NUM	ラップアラウンドする詳細エラーログファイルの個数	設定は任意です。
DBR_DETAIL_ERRORLOG_SIZE	詳細エラーログファイルの容量の上限値	設定は任意です。
EDMCLASSDEFPATH	クラス定義情報ファイルの格納先	設定が必要です。

次に、環境変数の詳細を示します。

- **DBR_CONNECTSV_ENVID**

環境変数「DBR_CONNECTSV_ENVID」には、接続先の実行環境識別子を設定します。同一文書空間に実行環境が複数作成されていて、それらが同時に稼働している File Sharing サーバに接続する場合に、File Sharing クライアントで接続先を選択するときに設定します。

設定できる値は、0～254 です。

同一文書空間の実行環境として複数の File Sharing サーバが存在している場合で、この環境変数を設定しないときは、File Sharing クライアントで接続する File Sharing サーバを選択しません。設定できる値以外の値を設定した場合は、値が設定されていないものとして動作します。

File Sharing クライアントで接続先を選択する場合は、接続先の DocumentSpace 構成定義ファイルの SelectServerInMultiServer エントリに Yes を指定しておく必要があります。

- **DBR_CON_TIMEOUT**

環境変数「DBR_CON_TIMEOUT」には、File Sharing サーバへの接続要求に対する File Sharing クライアントでの接続確立待ち時間（秒）を設定します。

設定できる値は、0～2,147,483,647 です。

0 を設定した場合、TCP/IP で固有のサーバへの接続確立待ち時間（秒）が設定されます。

設定できる値以外の値を設定した場合は、0 が仮定されます。

- **DBR_DETAIL_ERRORLOG**

環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG」は、詳細メッセージを取得する場合に指定します。詳細メッセージを取得する場合には、ON を指定してください。

- **DBR_DETAIL_ERRORLOG_DIR**

環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG_DIR」には、詳細メッセージを取得する場合に詳細エラーログファイルを出力するためのパス名を指定します。詳細エラーログファイルは、指定したパス名のディ

レクトリ下に、EDMErrTraceCLXXXXX_1.log (XXXXXX はプロセス ID 番号) のファイル名で出力されます。

なお、詳細エラーログファイルにはエラーが発生していない場合もログが出力されるので、必要に応じて詳細エラーログファイルを削除するようにしてください。

詳細エラーログファイルに出力される内容については、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

• DBR_DETAIL_ERRORLOG_NUM

環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG_NUM」には、詳細メッセージを取得する場合に使用する、ラップアラウンドする詳細エラーログファイルの個数を指定します。2,147,483,647 以下の値を指定してください。デフォルト値は 2 です。また、2 未満の値を指定した場合も、2 が仮定されます。

• DBR_DETAIL_ERRORLOG_SIZE

環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG_SIZE」には、詳細メッセージを取得する場合に使用する詳細エラーログファイルの容量の上限値 (バイト) を指定します。2,147,483,647 以下の値を指定してください。デフォルト値は 10,000 です。

0 以下の値を設定した場合、または 1 回の出力データ量よりも小さい値を指定した場合には、詳細メッセージは出力されません。

• EDMCLASSDEFPATH

環境変数「EDMCLASSDEFPATH」には、クラス定義情報ファイルの格納先を指定します。File Sharing クライアントのインストール時には、この環境変数の値として「{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc」が設定されています。クラス定義情報ファイルの詳細は、「5.3.1 クラス定義情報ファイル」を参照してください。

! 注意事項

環境変数の値と詳細エラーログファイルのラップアラウンド処理

1 プロセスで長時間に及ぶ処理を実行する場合、出力される詳細エラーログファイルの容量が過剰に大きくなるおそれがあります。

詳細エラーログファイルが必要以上の容量に増加するのを防ぐため、詳細エラーログファイルはラップアラウンド処理されます。詳細エラーログファイルの容量が環境変数で指定した最大容量に達した場合、ラップアラウンド処理されて、詳細メッセージのログは最初の詳細エラーログファイルに出力されます。

最大容量は、次の計算式で計算します。

(詳細エラーログファイルのサイズ (DBR_DETAIL_ERRORLOG_SIZE の指定値)) × (詳細エラーログファイルの個数 (DBR_DETAIL_ERRORLOG_NUM の指定値))

詳細エラーログファイルの出力処理は、次のようになります。

1. 環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG_DIR」に指定したディレクトリに、次の名称で詳細エラーログファイルが作成されます。

EDMErrTraceCLXXXXX_N.log

(XXXXXX はプロセス ID, N はプロセス内のファイル番号)

2. ファイルの容量が環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG_SIZE」で指定した容量になったら、次の詳細エラーログファイルが作成されます。
 3. 環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG_NUM」に指定した個数のファイルがすべて最大容量になったら、ラップアラウンドして再び先頭のファイルにログが出力されます。
-

4.4 ファイル転送機能を使用する場合の設定

ここでは、File Sharing クライアントで動作させるファイル転送機能の設定方法について説明します。

4.4.1 ファイル転送機能の概要

File Sharing サーバに接続する File Sharing クライアントが異なるマシン上に存在する場合、File Sharing サーバと File Sharing クライアントの間のファイル転送には、ファイル転送機能を使用する必要があります。例えば、ユーザが [ファイル共有] ポートレットからファイル进行操作すると、File Sharing クライアントは、File Sharing サーバが管理しているファイルシステムに格納されているファイル実体の取得や登録を行います。このとき、File Sharing クライアントと File Sharing サーバの間でファイル転送が発生します。

ファイル転送機能は、File Sharing クライアントで開始したファイル転送サービスが提供しています。ファイル転送サービスを使用するには、File Sharing クライアントと File Sharing サーバの両方で環境設定が必要です。

(1) ファイル転送サービス開始モード

ファイル転送サービスには、次の二つの開始モードがあります。

- 静的モード
- 動的モード

(a) 静的モード

File Sharing クライアントがファイル転送サービスを使用する前に、ファイル転送サービスをコマンドによって明示的に開始するモードです。

静的モードでファイル転送サービスを開始する方法には、スタートアップの種類の設定によって、「手動」または「自動」の二つの方法があります。静的モードのファイル転送サービスを「手動」または「自動」で開始する方法については、「7.3.1 ファイル転送サービスの開始方法」を参照してください。

(b) 動的モード

File Sharing クライアントで最初にファイル転送サービスを使用する時点で、ファイル転送サービスが自動的に開始されるモードです。

このモードでは、J2EE サーバの起動後、初めてファイル転送サービスが利用されるときにファイル転送プロセスが起動されます。その後、J2EE サーバを停止するまでプロセスは起動されています。そのため、J2EE サーバの起動後の最初のファイル転送サービス利用時は、File Sharing クライアントの処理時間が多く掛かります。

(2) ファイル転送サービスのプロセス構成

ファイル転送サービスのプロセス構成を次の表に示します。なお、「(静的モードの場合)」とあるプロセスは、開始モードが静的モードの場合だけ使用するプロセスです。

表 4-2 ファイル転送サービスのプロセス構成

プロセス名		機能概要
ファイル転送サービス開始	FtpSvStart.exe	ファイル転送サービスを開始します（静的モードの場合）。
ファイル転送サービス監視	FtpSvMng.exe	ファイル転送サービスを監視します（静的モードの場合）。
ファイル転送サービス	FtpSv.exe	ファイル転送サービスを提供します。
ファイル転送サービス停止	FtpSvStop.exe	ファイル転送サービスを停止します（静的モードの場合）。
ファイル転送サービス開始制御	FtpSvSvc.exe	ファイル転送サービスを開始および停止します（静的モードの場合）。

(a) ファイル転送サービス開始プロセス（静的モードの場合）

ファイル転送サービスを、静的モードで開始するプロセスです。

このプロセスは、静的モードのファイル転送サービス開始コマンド（FtpSvStart）を実行したときに生成され、ファイル転送サービス開始制御プロセスを起動します。

(b) ファイル転送サービス監視プロセス（静的モードの場合）

静的モードで開始されたファイル転送サービスプロセスを管理するプロセスです。

静的モードのファイル転送サービス開始コマンド（FtpSvStart）で指定した数のファイル転送サービスプロセスを起動します。そのあと、ファイル転送サービスプロセスの動作状況を監視して、ファイル転送サービスプロセスが終了した場合は再起動します。さらに、ファイル転送サービスを使用する File Sharing クライアントに対して、最適なファイル転送サービスプロセスを割り当てます。

このプロセスは、ファイル転送サービス開始制御プロセスによって生成されます。ファイル転送サービス開始制御プロセスからの終了要求メッセージを受信すると、ファイル転送サービスプロセスに終了要求メッセージを通知し、ファイル転送サービスプロセスの終了を確認すると停止します。

(c) ファイル転送サービスプロセス

ファイル転送サービスを提供するプロセスです。

このプロセスは、同時に複数実行できます。

開始モードが静的モードの場合

ファイル転送サービスプロセスは、静的モードのファイル転送サービス開始コマンド（FtpSvStart）を実行したときに、このコマンドで指定した数だけファイル転送サービス監視プロセスによって生成されます。このプロセスは、File Sharing クライアントに対して文書空間への接続単位（セッション単位）に割り当てられます。File Sharing クライアントでファイル転送を要求すると、ファイル転送サービスプロセスの中から、割り当て数が最も少ないプロセスが割り当てられます。また、静的モードのファイル転送サービス停止コマンド（FtpSvStop）を実行したとき、またはサービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を停止したときに、ファイル転送サービス監視プロセスから終了要求メッセージを受信し、すべてのファイル転送サービスプロセスが終了します。

静的モードで開始されたファイル転送サービスプロセスは、File Sharing クライアント上で動作するすべてのプロセスの、すべてのセッションに対してサービスを提供できます。ただし、ファイル転送サービスプロセスがダウンした場合、ダウンしたプロセスに割り当てられていたセッションを使用しファイル転送を要求すると、その要求したセッションに対してエラーが返却されます。この場合、ファイル転

送の失敗でエラーが発生した処理を再度実行してファイル転送を要求すると、新たなファイル転送サービスプロセスが割り当てられます。

開始モードが動的モードの場合

ファイル転送サービスプロセスは、File Sharing クライアントのプロセス内で最初にファイル転送サービスを利用するときに、File Sharing クライアントのプロセスによって生成されます。したがって、ファイル転送サービスを利用する File Sharing クライアントのプロセスの数だけファイル転送サービスプロセスが生成されます。また、起動した File Sharing クライアントのプロセスが終了すると、停止します。

動的モードで開始されたファイル転送サービスプロセスは、そのプロセスを起動した File Sharing クライアントのプロセス内で動作するセッションに対してだけ、サービスを提供できます。ただし、ファイル転送サービスプロセスがダウンした場合、ダウンしたプロセスを生成した File Sharing クライアントのプロセスがファイル転送を要求すると、エラーが返却されます。この場合、ファイル転送の失敗でエラーが発生した処理を再度実行してファイル転送を要求すると、新たなファイル転送サービスプロセスが生成され、サービスが提供されます。

(d) ファイル転送サービス停止プロセス（静的モードの場合）

静的モードで開始されたファイル転送サービスを停止するプロセスです。

このプロセスは、静的モードのファイル転送サービス停止コマンド (FtpSvStop) を実行したときに生成され、ファイル転送サービス開始制御プロセスに対して終了要求メッセージを送信します。ファイル転送サービス監視プロセスからの終了完了メッセージの応答を確認すると終了します。

(e) ファイル転送サービス開始制御プロセス（静的モードの場合）

ファイル転送サービスの開始モードが静的モードの場合に、ファイル転送サービスを開始および停止するプロセスです。このプロセスは、コントロールパネルの [管理ツール] - [サービス] の [サービス] ダイアログで、サービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を開始することによって生成され、ファイル転送サービス監視プロセスに対して起動要求をします。また、サービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を停止することによって終了し、終了時に、ファイル転送サービス監視プロセスに対して終了要求をします。

(3) 静的モードと動的モードの違い

静的モードと動的モードの違いを次の表に示します。

表 4-3 静的モードと動的モードの違い

項目	静的モード	動的モード
開始方法および停止方法	手動または自動で、ファイル転送サービスを開始および停止します。	J2EE サーバの起動後、初めてファイル転送サービスが利用されるときに自動的に開始され、J2EE サーバの停止時にファイル転送サービスが自動的に停止されます。
ファイル転送サービスプロセス割り当て単位	文書空間への接続単位	File Sharing クライアントのプロセス単位
File Sharing サーバが管理しているファイルシステムにアクセスするときのアクセス権	ファイル転送サービス開始実行ユーザのアクセス権	File Sharing クライアントのプロセス実行ユーザのアクセス権

項目	静的モード	動的モード
File Sharing サーバから転送されるファイル実体の所有者	ファイル転送サービス開始実行ユーザ	File Sharing クライアントのプロセス実行ユーザ

4.4.2 ファイル転送機能のための File Sharing クライアントでの環境設定

ここでは、ファイル転送機能を使用するための、File Sharing クライアントの環境設定について説明します。次に示す手順で環境設定をしてください。

(1) ファイル転送サービスの登録

ファイル転送サービスの登録について説明します。ファイル転送サービスは、プログラムをインストールしたときに、インストーラによって [Collaboration - File Sharing FTP Service] というサービス名で登録されます。スタートアップの種類は、インストール時には「手動」で登録されます。「自動」にする場合は、コントロールパネルの [管理ツール] - [サービス] の [サービス] ダイアログで変更してください。

(2) 環境変数の設定

ファイル転送サービスを使用するために、File Sharing クライアントの実行環境とファイル転送サービス実行環境に必要な環境変数を設定してください。設定が必要な環境変数について、次に説明します。

- **_HIEDMS_FTPDIR**

File Sharing クライアントのインストールディレクトリが設定されているかどうかを確認してください。

- **PATH**

次の値を追加します。

;File Sharing クライアントのインストールディレクトリ\%bin

- **_HIEDMS_FTPMODE**

使用するファイル転送サービスの開始モードを指定します。次のどれかを指定してください。なお、この環境変数は、File Sharing クライアントの実行環境だけに必要です。

STATIC

静的モードで開始されたファイル転送サービスを使用します。

DYNAMIC

動的モードで開始されたファイル転送サービスを使用します。

NONE

ファイル転送サービスを使用しません。

この環境変数の設定を省略した場合、NONE が仮定されます。

- **_HIEDMS_FTPVB_PROPERTY**

動的モードで開始されるファイル転送サービスプロセスに固有の VisiBroker プロパティを指定します。この環境変数は、File Sharing クライアントの実行環境だけに必要です。

この環境変数の設定を省略した場合に仮定される値はありません。VisiBroker プロパティ以外の値を指定した場合、ファイル転送サービスプロセスの起動に失敗します。

動的モードで開始されるファイル転送サービスプロセスの VisiBroker プロパティは、ファイル転送サービス環境定義ファイルの[FtpService]セクションの FtpProcessVBProperty エントリの値と、この環境変数に設定した値を連結した値になります。

なお、静的モードで開始する場合、この環境変数を設定しても無視されます。静的モードで開始する場合は、ファイル転送サービス環境定義ファイルの[FtpProcessXXXX]セクション（XXXX は 0001～0020）の VBProperty エントリに設定してください。

(3) ファイル転送サービス環境定義ファイルの設定

ファイル転送機能を使用するためには、ファイル転送サービス環境定義ファイルの定義が必要になります。ファイル転送サービス環境定義ファイルの詳細は、「5.3.2 ファイル転送サービス環境定義ファイル (ftpsv.ini)」を参照してください。

(4) ファイル転送サービスのメモリ所要量の見積もり

ファイル転送サービスを使用する場合のメモリ所要量を算出します。計算式を次に示します。

計算式 (単位: MB)

$$3 + 2 \times p + (0.02 + d) \times u$$

ただし、 $d = (4 \times s)$

p, u, および s に設定する値の説明を次の表に示します。

表 4-4 ファイル転送サービスの所要メモリの計算式で使用する変数と設定する値

変数	指定する値
p	ファイル転送サービスプロセス数
u	同時にファイル転送するセッション数
s	文書空間で管理する最大文書サイズ (MB)

(5) ファイル転送サービスの開始モードの設定

File Sharing クライアントでの環境設定の際に、ファイル転送サービスの開始モードとして、「静的モード」または「動的モード」のどちらかを設定する必要があります。開始モードは、環境変数「_HIEDMS_FTPMODE」で設定します。環境変数「_HIEDMS_FTPMODE」の詳細は、「(2) 環境変数の設定」を参照してください。

4.4.3 ファイル転送機能のための File Sharing サーバでの環境設定

ここでは、ファイル転送機能を使用するための、File Sharing サーバの環境設定について説明します。

(1) 環境変数の設定

ファイル転送機能を使用するために、File Sharing サーバ側で次の環境変数を設定します。

- `_HIEDMS_CON_TIMEOUT`

ファイル転送サービスへの接続要求に対して、サービスプロセスで接続を確立するまでの待ち時間を、秒で設定します。設定できる値は、0～2,147,483,647 です。0 を指定した場合、TCP/IP で固有の、サーバへの接続を確立するまでの待ち時間が設定されます。

範囲外の値を指定した場合、または環境変数を設定しない場合、0 が仮定されます。

(2) ファイル分割転送機能の設定

指定したデータ転送サイズにファイルを分割して転送する、ファイル分割転送機能を使用する場合は、DocumentSpace 構成定義ファイルの FtpBufferSize エントリにデータ転送サイズを指定します。FtpBufferSize エントリの詳細は、「5.2.3(3) DocumentSpace 構成定義ファイルの詳細」を参照してください。

ファイル分割転送機能の特長は、この機能を使用しない場合と比べて、File Sharing サーバおよび File Sharing クライアントのメモリ所要量を削減できることです。ファイル分割転送機能を使用しない場合は、転送するファイルの容量の大小に関係なく、1 回にファイルサイズ分のデータを転送します。一方、ファイル分割転送機能を使用する場合は、転送するファイルの容量が指定したデータ転送サイズを超えていれば、指定したデータ転送サイズにファイルを分割して転送します。このように、ファイル分割転送機能を使用すると、データ転送サイズよりも容量の大きいファイルは分割して転送するため、この機能を使用しない場合と比べて、ファイル転送時に使用するメモリ容量は少なくなります。ただし、ファイル転送回数の増加によって、処理性能が劣化するおそれがあります。

File Sharing サーバおよび File Sharing クライアントのメモリ容量、ならびに処理性能のバランスを考慮して、データ転送サイズを決定してください。なお、ファイル分割転送機能を使用しない場合の File Sharing クライアントのメモリ所要量については、「4.4.2(4) ファイル転送サービスのメモリ所要量の見積もり」を参照してください。

4.5 ポートレット機能の設定

ポートレット機能は、File Sharing が管理するフォルダとファイルを [ファイル共有] ポートレットで操作できるようにする機能です。また、ファイル実体を格納するファイルシステムの情報を [ファイル共有設定] ポートレットで設定できるようにする機能もあります。ポートレット機能は File Sharing クライアントシステムで動作します。

ポートレット機能を使用するためには、File Sharing クライアントを運用するマシンにアプリケーションサーバを構築しておく必要があります。アプリケーションサーバの構築方法の詳細は、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

ここでは、アプリケーションサーバの構築手順のうち、File Sharing 固有の内容を示します。また、ポートレット機能を使用するために必要な File Sharing クライアントでの環境設定について説明します。

4.5.1 ポートレット機能を使用するためのアプリケーションサーバの設定

ここでは、アプリケーションサーバの構築手順のうち、File Sharing クライアント固有の内容を示します。

(1) J2EE サーバの VM 起動オプションの指定

J2EE サーバの VM 起動オプションを `usrconf.cfg` に指定します。

`usrconf.cfg` の格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{Cosminexus のインストールディレクトリ}¥CC¥server¥usrconf¥ejb¥サーバ名称¥usrconf.cfg
```

`usrconf.cfg` の `add.class.path` に File Sharing クライアントの jar ファイルのファイルパスを、`add.library.path` に File Sharing クライアントのライブラリ格納ディレクトリのパスを指定します。

`usrconf.cfg` の記述例を次に示します。記述例の太字の個所は、実行環境に応じて編集してください。

記述例

```
add.class.path=C:¥Program Files¥Hitachi¥Collaboration¥filesharing¥Client¥lib¥DJLib.jar
add.library.path=C:¥Program Files¥Hitachi¥Collaboration¥filesharing¥Client¥lib
```

(2) ユーザ定義ファイル (`usrconf.properties`) の編集

`usrconf.properties` の `ejbserver.application.InitTermProcessClasses` キーに、コンテナ拡張ライブラリのサーバ起動・停止フックのクラスを指定します。指定する値は、`jp.co.Hitachi.soft.docbroker.client.DbjInitTermCompoContainerEx` です。

また、`webserver.container.servlet.default_mapping.enabled` キーに、サーブレットのデフォルトマッピングを有効にする `true` を指定します。

`usrconf.properties` の格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{Cosminexus のインストールディレクトリ}¥CC¥server¥usrconf¥ejb¥サーバ名称
¥usrconf.properties
```

`usrconf.properties` に、次の記述を追加してください。

```
ejbserver.application.InitTermProcessClasses=jp.co.Hitachi.soft.docbroker.client.DbjInitTermCompoContainerEx  
webserver.container.servlet.default_mapping.enabled=true
```

4.5.2 ポートレット機能を使用するための File Sharing クライアントの設定

ポートレット機能を使用するための File Sharing クライアントの設定項目には、レンディションの定義、デフォルトの文書空間識別子の定義およびトレースファイルに関する定義があります。使用する定義ファイルと設定内容の詳細は、「5.3.3 レンディション定義ファイル (mime.properties)」および「5.3.4 動作環境定義ファイル (conf.properties)」を参照してください。

また、File Sharing のプロパティファイルにも、ポートレット機能に関する設定が必要です。詳細は、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

さらに、クラス定義情報ファイルを環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーする必要があります。環境変数「EDMCLASSDEFPATH」の詳細は「4.3 File Sharing クライアントの実行環境の作成」を、クラス定義情報ファイルの詳細は「5.3.1 クラス定義情報ファイル」を参照してください。

4.6 アクセス履歴を取得するための設定

ここでは、アクセス履歴を取得するための設定について説明します。アクセス履歴の運用方法については、「7.11 アクセス履歴の取得」を参照してください。

File Sharing では、[ファイル共有] ポートレットでのユーザの操作をアクセス履歴ファイルに出力します。アクセス履歴を取得するための設定は、環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のキーの指定方法に依存します。アクセス履歴を取得するには、次のキーを指定してください。

- hptl_clb_cfs_AccessData
- hptl_clb_cfs_AccessDataPath
- hptl_clb_cfs_AccessDataSize
- hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption
- hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption2
- hptl_clb_cfs_AccessDataStartMode

アクセス履歴の運用に従って、最適な設定をしてください。各キーの指定方法については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

4.7 オブジェクト操作ツールの設定

オブジェクト操作ツールは、File Sharing のシステムの運用・保守のために使用するツールです。オブジェクト操作ツールのコマンドを使用して、File Sharing サーバで管理している文書空間、およびデータベースに格納されているオブジェクト（フォルダ、ユーザ情報など）を直接操作します。

ここでは、オブジェクト操作ツールの環境設定について説明します。

4.7.1 オブジェクト操作ツールの実行ユーザについて

オブジェクト操作ツールの実行ユーザは、セキュリティ管理者だけに限定する必要があります。そのため、オブジェクト操作ツールの実行環境を定義するために使用する「実行環境制御ファイル」には、必ずセキュリティ管理者のユーザ名を記述してください。

実行環境制御ファイルの詳細は、「5.3.6 実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini)」を参照してください。

4.7.2 環境変数の設定

オブジェクト操作ツールを使用するためには、環境変数の設定が必要です。環境変数は、コントロールパネルの [システム] - [詳細設定] タブで設定します。

全ユーザで共通の値にする場合は、「システム環境変数」に設定してください。ログインユーザごとに設定する場合は、「ユーザ環境変数」に設定してください。

- PATH

環境変数「PATH」には、オブジェクト操作ツールのインストールディレクトリを追加します。オブジェクト操作ツールは、「{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}\%Client%\tools」ディレクトリにインストールされます。したがって、環境変数「PATH」には、次の値を追加してください。

```
;{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}\%Client%\tools
```

- DBRTOOLS DIR

環境変数「DBRTOOLS DIR」には、オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリを設定してください。

- DBR_DETAIL_ERRORLOG (詳細メッセージを標準エラー出力に出力する場合)

環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG」は、詳細メッセージを取得する場合に指定します。詳細メッセージを取得する場合に設定する値は ON です。

環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG」に ON が設定されている場合、オブジェクト操作ツール実行時の詳細メッセージが標準エラー出力および詳細エラーログファイルに出力されます。

この環境変数を省略した場合、または値に ON 以外を指定した場合は、詳細メッセージは標準エラー出力および詳細エラーログファイルのどちらにも出力されません。

出力される詳細メッセージの内容については、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

4.7.3 オブジェクト操作ツールの実行環境のセットアップ

オブジェクト操作ツールが提供している実行環境セットアップコマンド (dbrtoolsetup) を実行します。形式を次に示します。

形式

```
dbrtoolsetup -x CREATE 実行環境ディレクトリ
```

実行環境ディレクトリには、環境変数「DBRTOOLS DIR」に設定したディレクトリを指定します。

なお、dbrtoolsetup コマンドの詳細は、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」の「dbrtoolsetup (実行環境のセットアップ)」を参照してください。

4.7.4 実行環境制御ファイルの編集

実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini) は、オブジェクト操作ツールの実行環境を定義するファイルです。実行環境セットアップコマンド (dbrtoolsetup) を実行すると、次に示すディレクトリにサンプルファイルがコピーされます。

```
{オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリ}¥etc
```

オブジェクト操作ツールの実行環境に合わせて、このサンプルファイルを編集してください。なお、ユーザ名には、必ずセキュリティ管理者のユーザ名を記述してください。

実行環境制御ファイルの詳細は、「5.3.6 実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini)」を参照してください。

4.7.5 クラス定義情報ファイルの取得

実行環境セットアップコマンド (dbrtoolsetup) を実行すると、「{オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリ}¥etc」にクラス定義情報ファイルのサンプルがコピーされます。ただし、実行環境セットアップコマンド (dbrtoolsetup) の実行によってコピーされたファイルに記述されているのは、オブジェクト操作ツールが動作するための最低限の情報だけです。このため、接続先の File Sharing サーバの情報に記述されているクラス定義情報ファイルを取得する必要があります。

クラス定義情報ファイルは、文書空間を構築する際に実行する文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) によって出力されます。文書空間の構築については、「3.9.1 文書空間の構築コマンドの実行」を参照してください。

クラス定義情報ファイルは、接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で、次に示すディレクトリに出力されます。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env¥文書空間識別子.ini
```

クラス定義情報ファイル (文書空間識別子.ini) の詳細は、「5.3.1 クラス定義情報ファイル」を参照してください。文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCBuildDocSpace (文書空間の構築)」を参照してください。

このクラス定義情報ファイルを、環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーしてください。なお、File Sharing クライアントのインストール時は、環境変数「EDMCLASSDEFPATH」には「{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc」が設定されています。

参考

システム導入支援機能を使用しない場合、クラス定義情報ファイルは、File Sharing サーバが提供しているクラス定義情報ファイル出力コマンド (EDMCrtSimMeta コマンド) によって取得します。

クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) の実行例を次に示します。

実行例

EDMCrtSimMeta

クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) でクラス定義情報ファイルを取得した場合、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\%Server%\etc\%meta_files%\文書空間識別子.ini

クラス定義情報ファイルの作成コマンドの詳細は、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCrtSimMeta (クラス定義情報ファイルの作成)」を参照してください。

4.7.6 オブジェクト操作ツールの実行環境の更新

実行環境制御ファイルを編集し、クラス定義情報ファイルを取得・コピーしたあとは、実行環境セットアップコマンド (dbrtoolsetup) を再実行して、オブジェクト操作ツールの実行環境を更新します。

また、File Sharing クライアントをバージョンアップした場合も、必ず実行環境セットアップコマンド (dbrtoolsetup) を再実行して、オブジェクト操作ツールの実行環境を更新してください。

形式を次に示します。

形式

dbrtoolsetup -x UPDATE 実行環境ディレクトリ

実行環境ディレクトリには、環境変数「DBRTOOLS DIR」に設定したディレクトリを指定します。なお、dbrtoolsetup コマンドの詳細は、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」の「dbrtoolsetup (実行環境のセットアップ)」を参照してください。

5

File Sharing の環境設定で必要な ファイル

この章では、File Sharing の環境設定で必要なファイルについて説明します。

5.1 ファイルの種類

File Sharing の環境設定で必要なファイルの一覧を次の表に示します。

表 5-1 環境設定で必要なファイル

種別	名称	内容	作成/編集時期	参照先
File Sharing サーバで使用するファイル	System Object INI ファイル (slocalreg.ini) ※1	DocumentSpace 構成定義ファイルで指定する文書空間識別子を設定します。	文書空間識別子を定義するとき	5.2.1
	オブジェクト定義ファイル (edms.ini) ※1	DocumentSpace 構成定義ファイルで指定する文書空間識別子を設定します。	文書空間識別子を定義するとき	5.2.2
	DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini) ※1	文書空間の構成を定義します。	文書空間を定義するとき	5.2.3
	セキュリティ定義ファイル (docaccess.ini) ※1	文書空間のセキュリティについて定義します。	アクセス制御機能に関する設定をするとき	5.2.4
	ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini) ※1	ユーザ認証に必要な情報を定義します。	ユーザ認証に関する設定をするとき	5.2.5
	メタ情報ファイル ※1 ※3	File Sharing が利用するクラス、プロパティなどの詳細情報が定義されています。 システム導入支援機能を使用しない場合の設定で使用します。	編集不可	5.2.6
定義情報ファイル ※2 ※3		File Sharing が利用するクラスおよびプロパティの定義情報が定義されています。	システム導入支援機能を使用する場合 文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) で出力される。 編集不可。	5.2.7(1)
			システム導入支援機能を使用しない場合 編集不可	5.2.7(2)
RD エリア定義情報ファイル ※2 ※3		File Sharing が使用する表およびインデックスを、どの RD エリアに格納するか定義します。	システム導入支援機能を使用する場合 文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) で出力される。 編集不可。	5.2.8(1)

種別	名称	内容	作成/編集時期	参照先
File Sharing サーバで使用するファイル	RD エリア定義情報ファイル ※2※3	File Sharing が使用する表およびインデクスを、どの RD エリアに格納するか定義します。	システム導入支援機能を使用しない場合 File Sharing サーバで、データベースシステムを使用するための設定を始める前	5.2.8(2)
	インデクス情報ファイル※2 ※3	プロパティのインデクス情報が定義されています。	システム導入支援機能を使用する場合 文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) で出力される。 編集不可。	5.2.9(1)
			システム導入支援機能を使用しない場合 編集不可	5.2.9(2)
	サービスプロセス定義ファイル (process.ini) ※1	サービスプロセスごとに動作を定義します。	サービスプロセスごとに動作を定義するとき	5.2.10
	ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini) ※1	ファイル実体の格納先としてネットワーク上の共有ディスクを指定する場合に、File Sharing サーバからアクセスするための情報を定義します。	ファイルシステムを使用するための設定をするとき	5.2.11
	File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini) ※1	取得する File Sharing サーバの障害情報の種類をカスタマイズします。	File Sharing サーバの障害情報の取得コマンド (EDMGetRas) でデフォルトで取得する情報以外に取得したい情報があるとき	5.2.12
	見積もり情報定義ファイル (CfsEstimatedef_UTF-8.csv または CfsEstimatedef_SJIS.csv) ※2	文書空間を構築するためのデータベース容量を見積もるときに使用する情報を定義します。	ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるとき	5.2.13
	文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt) ※2	文書空間の定義および構築で使用する情報を定義します。	ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるとき	5.2.14
見積もり基礎情報ファイル (EDMestimate.csv)	文書空間を構築するためのデータベース容量を見積もるために使用する行の数などの基礎情報が出力されます。	ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるとき	5.2.15	
File Sharing クライアントで使用するファイル	クラス定義情報ファイル	File Sharing サーバで定義されているクラス名やプロパ	編集不可	5.3.1

5 File Sharing の環境設定に必要なファイル

種別	名称	内容	作成/編集時期	参照先
File Sharing クライアントで使用するファイル	クラス定義情報ファイル	ティ名が、ユニークな識別子と対応づけられています。	編集不可	5.3.1
	ファイル転送サービス環境定義ファイル (ftpsv.ini) ※4	ファイル転送機能で使用する環境を定義します。	ファイル転送機能を使用するための設定をするとき	5.3.2
	レンディション定義ファイル (mime.properties) ※4	File Sharing に登録するファイルの拡張子とレンディションタイプを対応づけます。	ポートレット機能の環境設定をするとき	5.3.3
	動作環境定義ファイル (conf.properties) ※4	ポートレット機能の動作環境を定義します。	ポートレット機能の環境設定をするとき	5.3.4
	環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) ※5	Collaboration のシステムの中で File Sharing クライアントが動作するのに必要な設定をします。	ポートレット機能の環境設定をするとき	5.3.5
	実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini)	オブジェクト操作ツールの実行環境を定義します。	オブジェクト操作ツールの実行環境を作成するとき	5.3.6
	クライアントアプリケーション動作定義ファイル (application.ini)	File Sharing クライアントの動作を定義します。	File Sharing クライアントの動作を定義するとき	5.3.7
	File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini) ※4	取得する File Sharing クライアントの障害情報の種類をカスタマイズします。	File Sharing クライアントの障害情報の取得コマンド (EDMGetRasCL) でデフォルトで取得する情報以外に取得したい情報があるとき	5.3.8
組織/ユーザ情報ファイル	グループフォルダの運用者、およびグループフォルダを利用する組織 ID またはユーザ ID とそのアクセス権を定義します。	File Sharing クライアント運用コマンドでグループフォルダの運用者、およびグループフォルダを利用する組織 ID またはユーザ ID とそのアクセス権を定義するとき	5.3.9	

注※1

このファイルは、次の場所に提供されています。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\%Server%etc

注※2

このファイルは、次の場所に提供されています。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\%Server%sample

注※3

システム導入支援機能を使用しない場合の設定で使用するファイルです。

システム導入支援機能とは、ユーザ用 RD エリアの容量の見積もりおよび新規に文書空間を構築するための設定を支援する機能です。システム導入支援機能を使用すると、システム導入支援機能を使用しない場合に比べて、設定の手

順を減らすことができます。システム導入支援機能を使用しない場合の設定方法については、「付録 D システム導入支援機能を使用しない場合の設定」を参照してください。

注※4

このファイルは、次の場所に提供されています。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc

注※5

このファイルは、次の場所に提供されています。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥conf

5.2 File Sharing サーバで使用するファイル

ここでは、File Sharing サーバの環境設定に必要なファイルについて説明します。

5.2.1 System Object INI ファイル (slocalreg.ini)

System Object INI ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\Server\etc\slocalreg.ini
```

このファイルの ServiceObjectID エントリには、DocumentSpace 構成定義ファイルで指定する文書空間識別子と同じ内容を記述してください。

System Object INI ファイルの記述例を次に示します。記述例の太字の個所を変更してください。

```

:
[a8f7f3c1-5645-11d1-8587-00a024506a3e]
ServiceObjectID=text=6a30ca86-8039-11d6-87df-0060b0ea6863
ServiceObjectTypeID=text=236b6b11-a096-11d0-88fe-00a024e8a766
Profile=text=edms.ini
ModuleTypeID=text=07a17523-a626-11d0-b11f-0020af27a837
ModuleLocation=text=.\¥.¥.¥.¥.¥lib\edmdocspace.dll
CharSetEncodingID=text=17
:

```

5.2.2 オブジェクト定義ファイル (edms.ini)

オブジェクト定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\Server\etc\edms.ini
```

このファイルの dmaProp_DocSpaceId エントリには、DocumentSpace 構成定義ファイルで指定する文書空間識別子と同じ内容を記述してください。

オブジェクト定義ファイルの記述例を次に示します。記述例の太字の個所を変更してください。

```

:
[dmaClass_DocSpace]
dmaProp_0IID=text=
dmaProp_ClassDescription=obj=dsclass.ini@dmaClass_DocSpace
dmaProp_This=obj=Self
### dmaProp_CreatePending=bool=0
### dmaProp_UpdatePending=bool=0
### dmaProp_DeletePending=bool=0
dmaProp_DisplayName=text=Hitachi DocSpace
dmaProp_DescriptiveText=text=Hitachi Document Space, a DMA shim on top of Document Broker
dmaProp_ClassDescriptions=obj=dmaClass_DocSpace/dmaProp_ClassDescriptions
dmaProp_LocaleName=text=jp
dmaProp_LocaleNames=obj=dmaClass_DocSpace/dmaProp_LocaleNames
dmaProp_DocSpaceId=guid=6a30ca86-8039-11d6-87df-0060b0ea6863
### dmaProp_InitialContainers=obj=NULL
### dmaProp_DocSpaceCapabilities=obj=NULL
:

```

5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)

DocumentSpace 構成定義ファイルは、文書空間の構成を定義するファイルです。システム管理者がテキストエディタなどを使用して編集してください。

DocumentSpace 構成定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\¥Server¥etc¥docspace.ini

(1) DocumentSpace 構成定義ファイルのエントリー一覧

DocumentSpace 構成定義ファイルで指定するエン트리を示します。各エントリの詳細は、「(3) DocumentSpace 構成定義ファイルの詳細」を参照してください。

(a) [DocSpace]セクション

文書空間の共通定義を指定します。[DocSpace]セクションを構成する各エント리를次の表に示します。

表 5-2 [DocSpace]セクションのエントリー一覧

種類	設定項目	エン트리	指定内容	指定方法
文書空間の共通定義	文書空間の数	Count	File Sharing サーバが提供する文書空間の数	固定
	VisiBroker プロパティ	DocSpaceVBProperty	サービスプロセス監視プロセスに対する VisiBroker プロパティ	任意
	エラーログ	ErrLogFileCount	エラーログを取得するファイル数	任意
		ErrLogFileSize	エラーログファイルのサイズ	任意

(凡例)

固定：DocumentSpace 構成定義ファイルに記述されているデフォルト値を変更してはならない項目です（必須）。

任意：任意で指定する項目です（省略可）。

(b) [Entry0001]セクション

文書空間の詳細を定義します。[Entry0001]セクションを構成する各エント리를次の表に示します。

表 5-3 [Entry0001]セクションのエントリー一覧

種類	設定項目	エン트리名	指定内容	指定方法
サービス	文書空間	SerialId	文書空間の識別子	変更要
	プロセス設定	Process	サービスプロセス数	変更要
		SessionMax	File Sharing サーバに同時に接続できる最大数	任意
		SessionTimeOut	セッションアイドル時間の最大値	任意
	ProcessVBProperty	全プロセス共通の VisiBroker プロパティ	任意	
ユーザ認証	ユーザ認証	UserAuthentication	ユーザ認証方式	固定
	ユーザ認証ライブラリの設定	UOCLibrary	ユーザ認証ライブラリの絶対パス	変更要
データベース	接続するデータベースの設定	DbType	データベースの種別	固定
HiRDB	接続設定	PdHost	サーバのホスト名	変更要
		PdNamePort	サーバのポート番号	変更要

5 File Sharing の環境設定に必要なファイル

種類	設定項目	エントリ名	指定内容	指定方法
HiRDB	接続設定	PdUser	データベースにアクセスするための File Sharing 用のユーザ名とパスワード	変更要
	コネクションプールの設定	DBConnectionPool Count	サービスプロセス当たりの DB コネクションプール数	任意
		DBConnectionPool Dynamic	サービスプロセス当たりの一時コネクションの最大数	任意
		DBConnectionPool Timing	プールする DB コネクション作成のタイミング	任意
		DBConnectionPool Over	プールしている DB コネクションがすべて使用中, かつ一時コネクションが最大数に達している場合の動作	任意
		DBConnectionScope	DB コネクション割り当て期間	任意
		DBConnectionPool WaitTimeOut	DB コネクション割り当て待ち時間	任意
アクセスログ	アクセスログの設定	AcLogUse	アクセスログの取得の有無	任意
		AcLogLevel	アクセスログに出力するアクセスレベル	任意
		AcLogFileCount	AcLogFileSize エントリに指定した上限値を超えた場合, 切り替えるファイル数	任意
		AcLogFileSize	アクセスログファイルのサイズ	任意
メタ情報	共有メモリの設定	XdkShmemManage	システムが使用する値	固定
		XdkShmemSize	メタ情報管理用に確保するメモリマップトファイルのサイズ	固定
ファイル分割転送機能	データ転送サイズの設定	FtpBufferSize	データ転送サイズ	任意
複数の実行環境	サーバの選択	SelectServerInMulti Server	接続する File Sharing サーバ	任意
その他		VarrayElementCheck	システムが使用する値	固定
		ErrChkFlagOfObjectOperation	システムが使用する値	固定
		EnbFncFlagOfObjectOperation	システムが使用する値	固定

(凡例)

固定：DocumentSpace 構成定義ファイルに記述されているデフォルト値を変更してはならない項目です (必須)。

変更要：DocumentSpace 構成定義ファイルに記述されているデフォルト値を実行環境に応じて変更する項目です (必須)。

任意：任意で指定する項目です (省略可)。

(2) DocumentSpace 構成定義ファイルの記述形式

[セクション名]
 エン트리名 = 値

- セクション名は, [] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは, セクション名を指定してから, 次のセクション名を指定するまで, またはファイルの終端までの範囲です。
- エントリは, 「エン트리名 = 値」の形式で指定します。

(3) DocumentSpace 構成定義ファイルの詳細

DocumentSpace 構成定義ファイルは, 次に示す二つのセクションと各セクションに指定するエントリによって構成されます。

- [DocSpace]セクション
- [Entry0001]セクション

以降, DocumentSpace 構成定義ファイルを構成する各セクションとセクションごとに指定するエントリについて説明します。

(a) [DocSpace]セクション

文書空間の共通定義を指定します。[DocSpace]セクションを構成する各エントリは次のとおりです。

Count エントリ

File Sharing サーバが提供する文書空間の数を指定します。1 を指定してください。なお, このエントリの指定は省略できません。

DocSpaceVBProperty エントリ

文書空間のサービスプロセスの状態を監視するサービスプロセス監視プロセスに対して VisiBroker プロパティを指定します。指定を省略した場合, 「-Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.manager.type=Socket -Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.dispatcher.threadMax=64」が仮定されます。指定できる VisiBroker プロパティについては, マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。

ErrLogFileCount エントリ

エラーログを取得するファイル数を 2~16 で指定します。出力ファイル名は EDMError_%d.log で, [%d] は出力ファイル通番を示します。出力ファイル通番とは, 1~ErrLogFileCount エントリに指定した数 (出力ファイル数) です。

エラーログは, 出力ファイル通番が 1 のファイルから順番に出力されます。あるファイルにエラーログを出力する場合に, ファイルサイズが ErrLogFileSize エントリに指定した出力ファイルサイズよりも大きくなると, 出力ファイル通番が一つ大きいファイルに出力します。例えば, 出力ファイル通番が 1 であるファイルにエラーログを出力する場合に, このファイルのサイズの最大量を超えてしまうときは, ファイル出力通番が 2 のファイルにログを出力します。

ErrLogFileCount エントリに指定した最大のファイル通番のファイルにエラーログを出力しようとして, そのファイルのファイルサイズが ErrLogFileSize エントリに指定した出力ファイルサイズよりも大きくなってしまふ場合, 出力ファイル通番が 1 のファイルを初期化してログの出力を継続します。

指定を省略した場合および範囲外の値を指定した場合, 2 が仮定されます。

ErrLogFileSize エントリ

エラーログファイルのサイズを 4,096~2,147,483,647 (バイト) で指定します。エラーログの出力が指定されたサイズを超える場合, 次の通番のファイルへ出力を切り替えます。また, カレントファイル

出力中に異常（入出力エラーなど）が発生した場合も、次のファイルへ出力を切り替えます。ただし、切り替えは 1 回だけ実行します。

指定を省略した場合および範囲外の値を指定した場合、1,048,576（1MB）が仮定されます。エラーログとして得られる情報の詳細については、「9.1.6 エラーログ」を参照してください。

(b) [Entry0001]セクション

文書空間の詳細を定義します。[Entry0001]セクションを構成する各エントリは次のとおりです。

SerialId エントリ

文書空間の識別子を指定します。System Object INI ファイル（{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥localreg.ini）の ServiceObjectID エントリと同じ値を指定してください。なお、このエントリの指定は省略できません。

また、オブジェクト定義ファイル（{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥edms.ini）の [dmaClass_DocSpace] セクションの [dmaProp_DocSpaceId] エントリの値を同じ値に変更したあと、メタ情報を初期設定する必要があります。

Process エントリ

文書空間が提供するサービスプロセスの数を指定します。1～20 の間で指定してください。なお、このエントリの指定は省略できません。

SessionMax エントリ

File Sharing サーバに同時に接続できる最大数を指定します。

1～1,000 の間で指定してください。指定を省略した場合、64 が仮定されます。

SessionTimeOut エントリ

セッションアイドル時間の最大値を分単位で指定します。0～120（分）の間で指定してください。0 を指定した場合、セッション監視機能を使用しません。指定を省略した場合、0 が仮定されます。

ProcessVBProperty エントリ

文書空間のサービスを供給する全プロセスに共通する VisiBroker プロパティを指定します。指定を省略した場合、「-Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iioptp.manager.type=Socket -Dvbroker.se.iioptp.scm.iioptp.dispatcher.threadMax=64」が仮定されます。指定できる VisiBroker プロパティについては、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。

UserAuthentication エントリ

文書空間で使用するユーザ認証方式を指定します。

ユーザ認証には、File Sharing サーバが提供するユーザ認証ライブラリを使用します。したがって、必ず「UOC」を指定してください。

UOCLibrary エントリ

ユーザ認証ライブラリのファイル名を絶対パスで指定します。このエントリの指定は省略できません。デフォルトで「{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥lib¥cfsauth_UTF-8.dll」が設定されています。文書空間の文字コード種別に応じて、次のどちらかの値を指定してください。

- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥lib¥cfsauth_UTF-8.dll
文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合に指定します。
- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥lib¥cfsauth.dll
文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合に指定します。

DbType エントリ

文書空間が接続するデータベース種別を指定します。使用できるデータベースシステムは HiRDB です。したがって、このエントリには「HIRDB」と指定してください。なお、このエントリの指定は省略できません。

PdHost エントリ

データベースを構築しているサーバのホスト名を指定します。使用できるデータベースシステムは HiRDB です。したがって、このエントリには HiRDB サーバのホスト名を指定してください。なお、このエントリの指定は省略できません。

PdNamePort エントリ

データベースを構築しているサーバのポート番号を指定します。使用できるデータベースシステムは HiRDB です。したがって、このエントリには HiRDB サーバのポート番号を指定してください。なお、このエントリの指定は省略できません。

PdUser エントリ

データベースにアクセスするための File Sharing 用のユーザ名とパスワードを指定します。使用できるデータベースシステムは HiRDB です。したがって、HiRDB のユーザ権限で CONNECT 権限およびスキーマ定義権限を付与したユーザを指定してください。指定方法を次に示します。

"ユーザ名"/"パスワード"

HiRDB のユーザ権限については、「3.7.3 HiRDB のユーザ権限の設定」を参照してください。なお、このエントリの指定は省略できません。

DBConnectionPoolCount エントリ

サービスプロセス当たりの DB コネクションプール数を指定します。0~64 の間で指定してください。0 を指定した場合、プールされずに、要求ごとに DB コネクションを確立します。指定を省略した場合、4 が仮定されます。

ただし、DBConnectionPoolCount エントリに指定した値と、次に説明する DBConnectionPoolDynamic エントリに指定した値を合わせて、1 以上になるように設定してください。

DBConnectionPoolDynamic エントリ

サービスプロセス当たりの一時的コネクションの最大数を指定します。0~64 の間で指定してください。0 を指定した場合、一時的コネクションは確立されません。指定を省略した場合、4 が仮定されます。

ただし、上記で説明した DBConnectionPoolCount エントリに指定した値と、DBConnectionPoolDynamic エントリに指定した値を合わせて、1 以上になるように設定してください。

DBConnectionPoolTiming エントリ

プールする DB コネクション作成のタイミングを指定します。

- **Static**
静的 (File Sharing サーバの起動時) にプールするすべてのコネクションを作成します。
- **Dynamic**
動的 (コネクション解放時) にプールします。

指定を省略した場合、「Static」が仮定されます。

DBConnectionPoolOver エントリ

プールしている DB コネクションがすべて使用中、かつ一時的コネクションが最大数に達している場合の動作を指定します。

- **Error**

クライアントにエラーの戻り値を返却します。

- FIFO

コネクション待ち行列に入れ、空きコネクションが発生したときに割り当てます。

指定を省略した場合、「Error」が仮定されます。

DBConnectionScope エントリ

DB コネクション割り当て期間を指定します。

- Connection

文書空間への接続単位に割り当てます。文書空間への接続時に割り当て、文書空間への接続解除時に解放します。

- Transaction

トランザクション単位に割り当てます。トランザクション開始時に割り当て、トランザクション終了時に解放します。

指定を省略した場合、「Transaction」が仮定されます。

DBConnectionPoolWaitTimeOut エントリ

DBConnectionPoolOver エントリに FIFO を指定している場合、DB コネクション割り当て待ち時間を 0~7,200,000 (ミリ秒) の範囲で指定します。

0 を指定した場合、コネクション割り当て待ち時間が無制限になります。

このエントリの指定によってタイムアウトが発生した場合、エラーメッセージを出力して、DB コネクション割り当て待ちリストから削除します。このとき、File Sharing クライアントには、戻り値として DMARC_LOST_CONNECTION を返却します。指定を省略した場合、0 (ミリ秒) が仮定されます。

AcLogUse エントリ

アクセスログの取得の有無を指定します。

- Yes

アクセスログを取得します。

- No

アクセスログを取得しません。

指定を省略した場合、「No」が仮定されます。

AcLogLevel エントリ

出力レベル (アクセスログに出力するアクセスレベル) を指定します。指定した出力レベルによってアクセスログに出力する出力ログ情報を調節します。

取得される情報の詳細については、「9.1.5 文書空間へのアクセスログ」を参照してください。なお、指定を省略した場合、「Write」が仮定されます。

出力レベルによる出力ログ情報を次の表に示します。

表 5-4 アクセスログの出力レベルと出力ログ情報

出力レベル	出力ログ情報
Write	<ul style="list-style-type: none"> • セッションの確立・切断 • オブジェクトの作成・削除 • プロパティの設定 • フォルダによるオブジェクト間の関連づけと関連づけの解除 • ファイルのアップロード

出力レベル	出力ログ情報
Read	<ul style="list-style-type: none"> 出力レベルが「Write」の場合の出力ログ情報 プロパティの取得 ファイルのダウンロードまたは取得 一覧の取得 問い合わせの実行および結果の取得
Error	<ul style="list-style-type: none"> 出力レベルが「Read」の場合の出力ログ情報 エラー

AcLogFileCount エントリ

アクセスログを取得しているファイルのサイズが、AcLogFileSize エントリに指定した上限値を超えた場合に、切り替えるファイル数を 2~16 の間で指定します。出力ファイル名は EDMAccess_NO.log で、「NO」は出力ファイル通番を示します。出力ファイル通番とは、1~AcLogFileCount エントリに指定した数（出力ファイル数）です。

アクセスログは、出力ファイル通番が 1 のファイルから順番に出力されます。あるファイルにアクセスログを出力する場合に、ファイルサイズが AcLogFileSize エントリに指定した出力ファイルサイズよりも大きくなると、出力ファイル通番が一つ大きいファイルに出力します。例えば、出力ファイル通番が 1 であるファイルにアクセスログを出力する場合に、このファイルのサイズの最大量を超えてしまうときは、ファイル出力通番が 2 のファイルにログを出力します。

AcLogFileCount エントリに指定した最大のファイル通番のファイルにアクセスログを出力しようとして、そのファイルのファイルサイズが AcLogFileSize エントリに指定した出力ファイルサイズよりも大きくなってしまった場合、出力ファイル通番が 1 のファイルを初期化してログの出力を継続します。

指定を省略した場合、2 が仮定されます。

AcLogFileSize エントリ

アクセスログファイルのサイズを、4,096~2,147,483,647（バイト）で指定します。アクセスログの出力が指定されたサイズを超える場合、次の通番のファイルへ出力を切り替えます。また、カレントファイル出力中に異常（入出力エラーなど）が発生した場合も、次の通番のファイルへ出力を切り替えます。ただし、切り替えは 1 回だけ実行します。

指定を省略した場合、1,048,576（1MB）が仮定されます。

XdkShmemManage エントリ

システムが使用する値です。DocumentSpace 構成定義ファイルに記述されているデフォルトの指定値を変更しないでください。

XdkShmemSize エントリ

メタ情報管理用に確保するメモリマップトファイルのサイズを指定するエントリです。

DocumentSpace 構成定義ファイルに記述されているデフォルトの指定値を変更しないでください。

なお、OS のページングファイルサイズの値には、このメモリマップトファイルが確保できる十分なサイズを指定してください。

メモリマップトファイルは OS のページングファイルサイズの制限を受けるため、メタ情報管理用に確保するメモリマップトファイルがこの制限を超えると、メモリマップトファイルを確保できないことがあります。コントロールパネルの [システム] - [詳細設定] タブ - [パフォーマンスオプション] ダイアログの仮想メモリを確認してください。このメモリマップトファイルを確保できない場合は、File Sharing サーバが停止します。このとき、KMBR02004-E のメッセージが出力されます。メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

FtpBufferSize エントリ

ファイル分割転送機能を使用してファイル転送する場合の、データ転送サイズを指定します。指定できる値の範囲は、4,096~2,147,483,647 (バイト) です。

このエントリの記述を省略した場合は、ファイル分割転送機能を使用しないでファイル転送を実行します。なお、ファイル分割転送機能については、「4.4.3(2) ファイル分割転送機能の設定」を参照してください。

SelectServerInMultiServer エントリ

複数の実行環境から、同じ文書空間にアクセスする運用形態の場合に、File Sharing クライアント側で接続する File Sharing サーバを選択するかどうかを指定します。

- Yes

File Sharing クライアント側で接続する File Sharing サーバを選択します。

- No

File Sharing クライアント側で接続する File Sharing サーバを選択しません。

Yes を指定した場合、File Sharing クライアント側で、接続する File Sharing サーバの実行環境識別子を指定する必要があります。

上記以外の値を指定した場合、File Sharing サーバの起動時にエラーが発生します。指定を省略した場合、「No」が仮定されます。

なお、同じ文書空間にアクセスするすべての実行環境で SelectServerInMultiServer エントリの値を同じにしてください。

VarrayElementCheck エントリ

システムが使用する値です。DocumentSpace 構成定義ファイルに記述されているデフォルトの指定値を変更しないでください。

ErrChkFlagOfObjectOperation エントリ

システムが使用する値です。DocumentSpace 構成定義ファイルに記述されているデフォルトの指定値を変更しないでください。

EnbFncFlagOfObjectOperation エントリ

システムが使用する値です。DocumentSpace 構成定義ファイルに記述されているデフォルトの指定値を変更しないでください。

(4) DocumentSpace 構成定義ファイルの記述例

DocumentSpace 構成定義ファイルの次に示すエントリ (記述例の太字の箇所) は、実行環境に応じて必ず変更してください。

- SerialId
- PdHost
- PdNamePort
- PdUser
- UOCLibrary

DocumentSpace 構成定義ファイルの記述例を次に示します。

```
[DocSpace]
Count      = 1

[Entry0001]
Process    = 1
SerialId   = 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d
```



```

DbType      = HIRDB
PdHost      = hostname
PdNamePort  = 20550
PdUser      = "user"/"pass"
XdkShmemManage = NORMAL
XdkShmemSize = 4000000
VarrayElementCheck = Yes
ErrChkFlagOfObjectOperation = 0x0000007f
EnbFncFlagOfObjectOperation = 0x000000ff

UserAuthentication = UOC
UOCLibrary      = C:%Program Files%Hitachi%Collaboration%filesharing%Server%Lib
%cfspath%UTF-8.dll

```

(5) DocumentSpace 構成定義ファイルの注意事項

DocumentSpace 構成定義ファイルを直接編集して、文書空間を定義する場合の注意事項について説明します。

(a) 文書空間の構成を変更する場合の注意事項

File Sharing の運用を開始してから、セッションタイムアウト時間の変更などによって、文書空間の構成を変更するような場合が考えられます。このような場合は、次の手順で文書空間の構成を変更してください。

1. File Sharing サーバを終了します。
2. 文書空間の構成定義を変更します。
3. File Sharing サーバを再起動します。

なお、File Sharing サーバの起動と終了については、「7.2 File Sharing サーバの起動と終了」を参照してください。

5.2.4 セキュリティ定義ファイル (docaccess.ini)

セキュリティ定義ファイルでは、[Security]セクションの SecurityAdmin エントリを変更してセキュリティ管理者を定義します。それ以外の項目は変更しないでください。セキュリティ管理者については、「3.5.2 セキュリティ管理者の定義」を参照してください。

セキュリティ定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}%Server%etc%docaccess.ini

(1) セキュリティ定義ファイルの記述形式

```
[セクション名]
  エントリ名 = 値
```

- セクション名は、[] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定してから、次のセクション名を指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- エントリは、「エントリ名 = 値」の形式で指定します。
- エントリは 1 行 2,048 バイト以内で指定してください。

(2) セキュリティ定義ファイルの詳細

セキュリティ定義ファイルで変更する必要がある[Security]セクションの SecurityAdmin エントリについて説明します。

SecurityAdmin エントリ

文書空間のすべてのアクセス制御対象オブジェクトに対してフルコントロールのアクセス権を持つユーザ（セキュリティ管理者）を指定します。Collaboration を利用できるユーザから選択してください。

セキュリティ管理者名には、ユーザ識別子を指定してください。ユーザ識別子は、「"」（引用符）で囲んで指定します。セキュリティ管理者を複数指定する場合は、「"」（引用符）で囲んだユーザ識別子を「,」（コンマ）で区切って指定します。セキュリティ管理者の人数に制限はありませんが、エントリの定義に従って 1 行 2,048 バイト以内で指定してください。

なお、このエントリの指定は省略できません。

！ 注意事項

兼任ユーザのユーザ識別子を指定しないでください。兼任ユーザのユーザ識別子を指定した場合の動作は保証しません。

記述例

```
SecurityAdmin = "ユーザ識別子1","ユーザ識別子2"
```

(3) セキュリティ定義ファイルの記述例

セキュリティ定義ファイルの SecurityAdmin エントリ（記述例の太字の個所）は、実行環境に応じて必ず変更してください。

セキュリティ定義ファイルの記述例を次に示します。

```
[Security]
SecurityAdmin      = "admin_user1"

[Entry0001]
;UserPermDefFile  = userperm.ini
DefaultACFlagOwner = READ
DefaultACFlagGroup = NONE
DefaultACFlagEveryone = NONE
```

5.2.5 ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル（cfsauth.ini）

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルは、File Sharing サーバのユーザ認証ライブラリを使用するために必要な情報を定義するファイルです。

このファイルは、File Sharing サーバのサービス起動時に参照されます。このファイルの指定内容が不正な場合は、File Sharing サーバのサービスの起動に失敗します。

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥cfsauth.ini
```

(1) ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルのエントリ一覧

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルで指定するエントリを示します。各エントリの詳細は、「(3) ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの詳細」を参照してください。

(a) [CCM]セクション

Collaboration - Online Community Management のデータベースサーバへの接続情報を指定します。[CCM]セクションを構成する各エントリを次の表に示します。

表 5-5 [CCM]セクションのエントリー一覧

種類	エントリ	指定内容	指定内容
Collaboration - Online Community Management のデータベースサーバへの接続情報	Host	データベースサーバのホスト名または IP アドレス	変更要
	Port	データベースサーバのポート番号	変更要
	Schema	データベースサーバのスキーマ名	変更要
	User	データベースサーバへの接続ユーザのユーザ ID	変更要
	Password	データベースサーバへの接続ユーザのパスワード	変更要

(凡例)

変更要：実行環境に応じて変更する項目です（必須）。

(b) [DIRECTORY]セクション

ディレクトリサーバへの接続情報を指定します。[DIRECTORY]セクションを構成する各エントリを次の表に示します。

表 5-6 [DIRECTORY]セクションのエントリー一覧

種類	エントリ	指定内容	指定内容
ディレクトリサーバへの接続情報	NumOfConnect	コネクション数	変更要
	OperationTimeout	LDAP オペレーションのタイムアウト時間	変更要
	SearchTimeout	LDAP の検索タイムアウト時間	変更要
	TraceFileSize	組織情報取得ライブラリのトレースファイルのサイズ	変更要
	TraceNumFiles	組織情報取得ライブラリのトレースファイルの面数	変更要
	TraceLevel	組織情報取得ライブラリのトレースレベル	変更要
	TraceFileName	組織情報取得ライブラリのトレースファイル名	変更要
	Server	ディレクトリサーバのホスト名または IP アドレス	変更要
	Port	ディレクトリサーバのポート番号	変更要
	BindDn	ディレクトリサーバにバインドする際の DN	任意
	BindPwd	ディレクトリサーバにバインドする際のパスワード	任意
	UserBaseDn	ユーザ検索時に使用するベース DN	変更要
	UserObjectClass	ユーザを示すディレクトリサーバ上のオブジェクトクラス	変更要
UserScope	ユーザ検索時に使用するスコープ	変更要	

種類	エントリ	指定内容	指定内容
ディレクトリサーバへの 接続情報	UserKeyAttr	オブジェクトクラスでキーとなる属性名	変更要
	UserIdAttr	ユーザ ID を表す属性名	変更要
	BelongOrgAttr	ユーザの所属組織を表す属性名	変更要
	TypeOfBelongOrgAttr	所属組織の格納方法	変更要
	OrgBaseDn	組織検索時に使用するベース DN	変更要
	OrgObjectClass	組織を示すディレクトリサーバ上のオブジェクトクラス	変更要
	OrgScope	組織検索時に使用するスコープ	変更要
	OrgKeyAttr	オブジェクトクラスでキーとなる属性名	変更要
	OuAttr	組織単位を表す属性名	変更要
	TypeOfOu	組織単位の格納方法	変更要
	ParentOrgAttr	上位組織を表す属性名	変更要
	TypeOfParentOrgAttr	上位組織の格納方法	変更要
	AdditionalPostMode	ユーザ検索時の兼任ユーザの情報取得	任意
	MainPostUidAttr	主体ユーザの属性名	変更要※
	NumOrgSearchUnit	ディレクトリサーバへのアクセスで取得する組織情報数	任意

(凡例)

変更要：実行環境に応じて変更する項目です（必須）。

任意：任意で指定する項目です（省略可）。

注※

AdditionalPostMode エントリおよび[COMMON]セクションの AdditionalPostCheckMode エントリに「link」を指定した場合だけ、変更が必要です。

(2) ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの記述形式

[セクション名]
エントリ名 = 値

- セクション名は、[] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定してから、次のセクション名を指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- セクションの記述行には[セクション名]以外の文字は指定できません。
- エントリは、「エントリ名 = 値」の形式で指定します。
- エントリは、その値が数値か文字列かによって記述方法が異なります。
 - 数値の場合
任意の 10 進数を -2,147,483,648 ~ 2,147,483,647 の間で記述します。
 - 文字列の場合

指定する文字列にサイズの指定がない場合は、1,055 バイト未満の文字列を記述します。半角スペースまたは「=」（イコール）を含む場合は、「'」（シングルクォーテーション）または「"」（引用符）で囲んで記述します。

- 値の後ろには、半角の空白以外は記述できません。
- 同一名のセクションまたはエントリを複数指定した場合、最初に指定したセクションが有効になります。
- 「(3) ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの詳細」で示すセクション名またはエントリ名以外は指定できません。指定した場合はエラーとなります。
- 印刷可能な ASCII コードで記述してください。
- 「;」（セミコロン）または「#」（シャープ）で始まる行は、コメント行と見なされます。
- 空白行は無視されます。
- 行の終端は改行コードまたは EOF です。なお、改行コードは CR+NL (0x0d+0x0a) です。
- ファイルの終端は EOF です。

(3) ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの詳細

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルは、次に示すセクションとセクションに指定するエントリによって構成されます。

- [CCM]セクション
- [DIRECTORY]セクション

以降、ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルを構成するセクションと指定するエントリについて説明します。

(a) [CCM]セクション

Collaboration - Online Community Management のデータベースサーバへの接続情報を指定します。[CCM]セクションを構成する各エントリは次のとおりです。

Host エントリ

Collaboration - Online Community Management のデータベースサーバのホスト名または IP アドレスを 32 バイト以内で指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「hostname」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

Port エントリ

Collaboration - Online Community Management のデータベースサーバのポート番号を 5,001～65,535 の範囲で指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 20,000 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

Schema エントリ

Collaboration - Online Community Management のデータベースサーバのスキーマ名を指定します。このエントリを指定すると、Collaboration - Online Community Management のデータベースを検索する SQL 文中のテーブル名およびテーブルの列項目にスキーマを付加します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「CLBCCM」です。

User エントリ

Collaboration - Online Community Management のデータベースサーバへの接続ユーザのユーザ ID を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「CLBCCM」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

Password エントリ

Collaboration - Online Community Management のデータベースサーバへの接続ユーザのパスワードを指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「CLBCCM」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

(b) [DIRECTORY]セクション

ディレクトリサーバへの接続情報を指定します。[DIRECTORY]セクションを構成する各エントリは次のとおりです。

NumOfConnect エントリ

ユーザ認証ライブラリからディレクトリサーバに接続するコネクション数を、1~100 の範囲で指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 10 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

NumOfConnect エントリの値は次の式で見積もります。

$X = \text{DocumentSpace構成定義ファイルのDBConnectionPoolCountエントリの値} + \text{DocumentSpace構成定義ファイルのDBConnectionPoolDynamicエントリの値}$
 $Y = \text{DocumentSpace構成定義ファイルのSessionMaxエントリの値} \div \text{DocumentSpace構成定義ファイルのProcessエントリの値}$

$X < Y$ の場合、 X を NumOfConnect エントリの値とします。

$X \geq Y$ の場合、 Y を NumOfConnect エントリの値とします。

なお、このエントリには、64 以下の値を指定することを推奨します。

なお、File Sharing サーバからディレクトリサーバに接続する最大コネクション数は次の式で算出できます。

最大コネクション数

$= \text{NumOfConnect エントリの値} \times \text{DocumentSpace 構成定義ファイルの Process エントリの値}$

OperationTimeout エントリ

LDAP オペレーションのタイムアウト時間を、0~3,600,000 の範囲で指定します。単位はミリ秒です。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 10,000 です。0 を指定した場合、タイムアウトしません。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

SearchTimeout エントリ

LDAP の検索タイムアウト時間を、1~3,600,000 の範囲で指定します。単位はミリ秒です。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 10,000 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

タイムアウト発生時は、LDAP コネクションを再接続します。

TraceFileSize エントリ

組織情報取得ライブラリのトレースファイルのサイズを、4,096 (4KB) ~2,147,483,647 (2GB) の範囲で指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 18,874,368 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

TraceNumFiles エントリ

組織情報取得ライブラリのトレースファイルの面数を、1~16 の範囲で指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 4 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

TraceLevel エントリ

組織情報取得ライブラリのトレースレベルを、0~30 の範囲で指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 10 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

TraceFileName エントリ

組織情報取得ライブラリのトレースファイル名のプリフィックス文字列をフルパスで指定します。インストール先に合わせて変更します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は、使用している OS によって次のように異なります。

- Windows Server 2008 R2, Windows Server 2008 x64, Windows Server 2012, Windows Server 2012 R2 の場合
{OS (Windows) のインストールドライブ}:%Program Files(x86)%Hitachi%Collaboration%clb_home%log%hptl_clb_ccu_getou
- そのほかの OS (Windows) を使用している場合
{OS (Windows) のインストールドライブ}:%Program Files%Hitachi%Collaboration%clb_home%log%hptl_clb_ccu_getou

実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

Server エントリ

ディレクトリサーバのホスト名または IP アドレスを 1,024 バイト以内で指定します。uCosminexus Portal Framework の Portal Manager の、「接続情報」－「接続先 URL」のアドレス部と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「localhost」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

Port エントリ

ディレクトリサーバのポート番号を、1～65,535 の範囲で指定します。uCosminexus Portal Framework の Portal Manager の、「接続情報」－「接続先 URL」のポート番号と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 389 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

BindDn エントリ

ディレクトリサーバにバインドする際の DN を 1,024 バイト以内で指定します。uCosminexus Portal Framework の Portal Manager の、「接続情報」－「接続先ユーザ名」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「cn=Directory Manager」です。

BindDn エントリと BindPwd エントリの両方の指定を省略した場合は、ディレクトリサーバへ匿名でアクセスします。

BindPwd エントリ

ディレクトリサーバにバインドする際のパスワードを 1,024 バイト以内で指定します。uCosminexus Portal Framework の Portal Manager の、「接続情報」－「接続先パスワード」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「directorymanager」です。

BindDn エントリと BindPwd エントリの両方の指定を省略した場合は、ディレクトリサーバへ匿名でアクセスします。

UserBaseDn エントリ

ユーザ検索時に使用するベース DN を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_userBaseDn」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「ou=PEOPLE,o=HITACHI,c=JP」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

UserObjectClass エントリ

ユーザを示すディレクトリサーバ上のオブジェクトクラスを 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_userObjectClass」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「hptlUser」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

UserScope エントリ

ユーザ検索時に使用するスコープを次の数字で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_userScope」の指定が「onelevel」の場合は 1 を、「subtree」の場合は 2 を指定します。

- 1：ベース DN の 1 階層下のレベルだけを検索対象とします。
- 2：ベース DN とその配下のすべてのレベルを検索対象とします。

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 1 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

UserKeyAttr エントリ

オブジェクトクラスでキーとなる属性名を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_uid」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「uid」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

UserIdAttr エントリ

ユーザ ID を表す属性名を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_uid」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「uid」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

BelongOrgAttr エントリ

ユーザの所属組織を表す属性名を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_belongOrgDn」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「hptlDepartmentDN」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

TypeOfBelongOrgAttr エントリ

所属組織の格納方法を次の数字で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_belongOrgDn」の指定した属性のデータ型が文字列型の場合は 1 を、DN 型の場合は 2 を指定します。

- 1：文字列型
- 2：DN 型

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 2 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

OrgBaseDn エントリ

組織検索時に使用するベース DN を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_orgBaseDn」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「ou=department,o=HITACHI,c=JP」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

OrgObjectClass エントリ

組織を示すディレクトリサーバ上のオブジェクトクラスを 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_orgObjectclass」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「hptlOrganizationalUnit」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

OrgScope エントリ

組織検索時に使用するスコープを次の数字で指定します。TypeOfParentOrgAttr エントリの指定と同じ値を指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_orgSchema」の指定値が「logical」の場合は 1 を、「physical」の場合は 2 を指定します。

- 1：1 レベルを検索対象とします。
- 2：サブツリーを検索対象とします。

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 1 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

OrgKeyAttr エントリ

オブジェクトクラスでキーとなる属性名を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_orgId」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「ou」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

OuAttr エントリ

組織単位を表す属性名を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_orgId」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「ou」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

TypeOfOu エントリ

組織単位の格納方法を次の数字で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_orgId」に指定した属性のデータ型が「文字列型」の場合は 1 を、「DN型」の場合は 2 を指定します。

- 1：文字列型
- 2：DN 型

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 1 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

ParentOrgAttr エントリ

上位組織を表す属性名を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_parentOrgAttr」と同じ値を指定します。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「hptlDepartmentDN」です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

TypeOfParentOrgAttr エントリ

上位組織の格納方法を次の数字で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_parentOrgAttr」に指定した属性のデータ型が「文字列型」の場合は 1 を、「DN 型」の場合は 2 を指定します。

- 1：文字列型
- 2：DN 型

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 2 です。実行環境に応じた内容を必ず指定してください。

AdditionalPostMode エントリ

ユーザ検索時に兼任ユーザの情報を取得するかどうかを指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_user_in_additional_post」と同じ値を指定します。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- none：兼任ユーザの情報を取得しません。
- link：主体ユーザのユーザ ID と MainPostUidAttr エントリに指定した属性の値が一致する情報を、兼任ユーザの情報として取得します。

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「none」です。次の場合は「none」が仮定されます。

- エントリの指定を省略した場合

- エントリの値の指定を省略した場合
- 不正な値を指定した場合

MainPostUidAttr エントリ

主体ユーザを表す属性名を 1,024 バイト以内で指定します。Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_user_in_main_post」と同じ値を指定します。

AdditionalPostMode エントリおよび[COMMON]セクションの AdditionalPostCheckMode エントリに「link」を指定した場合、このエントリは必ず指定してください。

AdditionalPostMode エントリおよび[COMMON]セクションの AdditionalPostCheckMode エントリに「none」を指定した場合、このエントリの指定は不要です。

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は「hptlActualUid」です。

NumOrgSearchUnit エントリ

ディレクトリサーバへの 1 回のアクセスで取得する組織情報数を 1~5,000 の範囲で指定します。

Collaboration - Directory Access のプロパティ「hptl_clb_cum_request_org_size」と同じ値を指定します。

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの初期設定値は 10 です。次の場合は 10 が仮定されます。

- エントリの指定を省略した場合
- エントリの値の指定を省略した場合
- 不正な値を指定した場合

(4) ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの記述例

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの記述例を次に示します。記述例の太字の個所を実行環境に応じて変更してください。

```
[CCM]
Host           = hostname
Port           = 20000
Schema         = "CLBCCM"
User           = "CLBCCM"
Password       = "CLBCCM"

[DIRECTORY]
NumOfConnect   = 10
OperationTimeout = 10000
SearchTimeout  = 10000
TraceFileSize  = 18874368
TraceNumFiles  = 4
TraceLevel     = 10
TraceFileName  = "C:\Program Files\Hitachi\collaboration\clb_home\log\hptl_clb_ccu_getou"
Server         = localhost
Port           = 389
BindDn         = "cn=Directory Manager"
BindPwD        = directorymanager
UserBaseDn     = "ou=PEOPLE,o=HITACHI,c=JP"
UserObjectClass = hptlUser
UserScope      = 1
UserKeyAttr    = uid
UserIdAttr     = uid
BelongOrgAttr  = hptlDepartmentDN
TypeOfBelongOrgAttr = 2
OrgBaseDn     = "ou=department,o=HITACHI,c=JP"
OrgObjectClass = hptlOrganizationalUnit
OrgScope      = 1
OrgKeyAttr    = ou
OuAttr        = ou
TypeOfOu      = 1
ParentOrgAttr  = hptlDepartmentDN
TypeOfParentOrgAttr = 2
AdditionalPostMode = none
```

```
MainPostUidAttr    = hptlActualUid
NumOrgSearchUnit  = 10
```

(5) 注意事項

- File Sharing サーバでは、DocumentSpace 構成定義ファイルの Process エントリに指定したサービスプロセス数分の DB コネクションを使用して Collaboration - Online Community Management のデータベースに接続します。このため、Collaboration - Online Community Management のデータベースのシステム定義で指定する pd_max_users には、DocumentSpace 構成定義ファイルの Process エントリに指定した値を加えて指定してください。なお、File Sharing サーバが複数存在する場合は、それぞれに指定した Process エントリの合計値を加えて指定してください。
- File Sharing サーバでは、一つのサービスプロセスにつき NumOfConnect エントリに指定したコネクション数分のディレクトリサーバのコネクションを使用してディレクトリサーバに接続します。このため、ディレクトリサーバで指定する最大コネクション数には、NumOfConnect エントリの値×DocumentSpace 構成定義ファイルの Process エントリの値で算出した値を加えて指定してください。なお、File Sharing サーバが複数存在する場合は、File Sharing サーバごとに NumOfConnect エントリの値×DocumentSpace 構成定義ファイルの Process エントリの値を算出し、算出した値を合計します。その合計値を最大コネクション数に加えて指定してください。

5.2.6 メタ情報ファイル

メタ情報ファイルは、システム導入支援機能を使用しない場合の設定で使用するファイルです。

File Sharing で使用するクラスやプロパティなどについての定義情報をメタ情報といいます。このメタ情報は、メタ情報ファイルという初期設定用のファイルに記述されています。File Sharing サーバは、このメタ情報を基にデータベース定義文を出力します。

メタ情報ファイルの格納ディレクトリを次に示します。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc
```

データベースを初期設定するときには、このメタ情報ファイルをデータベースに登録します。同時に、次に示すディレクトリには、File Sharing サーバを起動するとき参照する「動作環境メタ情報ファイル」が出力されます。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files
```

メタ情報ファイルの記述内容は変更しないでください。提供されるファイルをそのまま使用してください。

システム導入支援機能を使用しない場合の設定については、「付録 D システム導入支援機能を使用しない場合の設定」を参照してください。

5.2.7 定義情報ファイル

定義情報ファイルは、オブジェクトを定義するファイルです。

(1) システム導入支援機能を使用する場合

このファイルは、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) の実行後に出力されます。出力された定義情報ファイルの内容が、文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) を実行するときに使用されます。出力されたファイルの記述内容は変更しないでください。

定義情報ファイルが出力されるディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env¥EDMdefine.txt

(2) システム導入支援機能を使用しない場合

システム導入支援機能を使用しない場合、定義情報ファイルをメタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の `-f` オプションで指定すると、メタ情報として追加されます。

定義情報ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

- 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsMeta_UTF-8.ini
- 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsMeta_SJIS.ini

このファイルの記述内容は変更しないでください。提供されるファイルをそのまま使用してください。

システム導入支援機能を使用しない場合の設定については、「付録 D システム導入支援機能を使用しない場合の設定」を参照してください。

5.2.8 RD エリア定義情報ファイル

RD エリア定義情報ファイルは、データベース定義文中の RD エリア名を、ユーザが指定した RD エリア名で出力させるためのファイルです。

(1) システム導入支援機能を使用する場合

このファイルは、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) の実行後に出力されます。出力された定義情報ファイルの内容が、文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) を実行するときに使用されます。出力されたファイルの記述内容は変更しないでください。

定義情報ファイルが出力されるディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env¥EDMrdarea.txt

(2) システム導入支援機能を使用しない場合

このファイルは、データベース定義文中の RD エリア名を、ユーザが指定した RD エリア名で出力させるために作成するファイルです。

作成したファイルは、File Sharing 用データベース定義文の作成コマンド (EDMCrtSql) の `-r` オプションで指定します。指定したファイルの内容が、`-o` オプションで指定したデータベース定義文格納ファイル中の RD エリア名に反映されます。これによって、File Sharing 用データベース定義文の作成コマンド (EDMCrtSql) で出力されるデータベース定義文中の RD エリアの手動による変更が不要になります。

RD エリア定義情報ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsRdarea.ini

このファイルに記述されている RD エリア名を実行環境に応じて変更して使用してください。

システム導入支援機能を使用しない場合の設定については、「付録 D システム導入支援機能を使用しない場合の設定」を参照してください。

(a) RD エリア定義情報ファイルの記述例

RD エリア定義情報ファイルの記述例を次に示します。記述例の太字の個所だけを、実行環境に応じて変更してください。

RD エリアは、HiRDB の環境設定時に、HiRDB のデータベース構成変更ユーティリティ (pdmod) の -a オプションに指定した制御文の内容に従って作成されています。制御文については、「付録 D.2 HiRDB の環境設定」を参照してください。

作成した RD エリアの名称に合わせて記述例の太字の個所を編集してください。

```

:
[TableArea]
class=dmaClass_ConfigurationHistory,area=CFS_SYSTBL
class=dmaClass_Container,area=CFS_SYSTBL
class=dmaClass_ContentReference,area=CFS_SYSTBL
:
[IndexArea]
class=edmClass_OIID,prop=edmProp_AppId,prop=edmProp_EnvId,area=CFS_SYSIDX
class=dmaClass_ConfigurationHistory,prop=dmaProp_OIID,area=CFS_SYSIDX
class=dmaClass_ConfigurationHistory,prop=dmaProp_This,area=CFS_SYSIDX
:
[LobArea]
class=dmaClass_ContentTransfer,prop=edmProp_Content,area=CFS_DOC01
class=edmClass_ConceptualSgmlDocument,prop=edmProp_Content,area=CFS_SGML01

```

(b) RD エリア定義情報ファイルの注意事項

指定された RD エリア名が HiRDB に定義されているかどうかについてはチェックしません。

5.2.9 インデクス情報ファイル

インデクス情報ファイルは、プロパティに定義したインデクスの情報が記述されるファイルです。

(1) システム導入支援機能を使用する場合

このファイルは、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) を実行後に出力されます。出力された定義情報ファイルの内容が、文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) を実行するときに使用されます。出力されたファイルの記述内容は変更しないでください。

インデクス情報ファイルが出力されるディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env¥EDMindex.txt
```

(2) システム導入支援機能を使用しない場合

このファイルは、File Sharing 用データベース定義文の作成コマンド (EDMCrtSql) の -i オプションで指定します。指定したファイルの内容が、-o オプションで指定したデータベース定義文格納ファイル中のインデクスに反映されます。

インデクス情報ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsIndex.ini
```

このファイルの記述内容は変更しないでください。提供されるファイルをそのまま使用してください。

システム導入支援機能を使用しない場合の設定については、「付録 D システム導入支援機能を使用しない場合の設定」を参照してください。

5.2.10 サービスプロセス定義ファイル (process.ini)

サービスプロセス定義ファイルは、サービスプロセスごとに動作を定義するファイルです。例えば、サービスプロセスごとにポート番号を指定して、起動できるようになります。

なお、サービスプロセスごとに動作を定義しない場合、サービスプロセス定義ファイルを編集する必要はありません。また、サービスプロセス定義ファイルが存在しない場合、File Sharing サーバは、サービスプロセスごとに動作を定義しないものとして動作します。

サービスプロセス定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\¥Server¥etc¥process.ini

(1) サービスプロセス定義ファイルの記述形式

[セクション名]
エントリ名 = 値

- セクション名は、[] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定してから、次のセクション名を指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- 同一名のセクションを複数指定した場合、最初に指定したセクションが有効になります。
- 指定できないセクションを指定した場合、その指定は無視されます。
- エントリは、「エントリ名 = 値」の形式で指定します。
- 各セクション内で同一名のエントリを複数指定した場合、最初に指定したエントリが有効になります。
- 各エントリの値として指定できるのは、1,023 バイトまでです。

(2) サービスプロセス定義ファイルの詳細

サービスプロセス定義ファイルは、次に示す二つのセクションとセクションに指定するエントリによって構成されます。

- [Entry0001]セクション
- [ProcessXXXX]セクション

以降、サービスプロセス定義ファイルを構成する各セクションとセクションごとに指定するエントリについて説明します。

(a) [Entry0001]セクション

エントリはありません。ただし、このセクション名は必ず記述してください。このセクションは、[ProcessXXXX]セクションより前に記述してください。

(b) [ProcessXXXX]セクション

XXXX は、0001~0020 を示します。[ProcessXXXX]セクションでは、各サービスプロセスに固有の動作を定義します。

DocumentSpace 構成定義ファイルの Process エントリに指定した数までのセクションが有効になります。例えば、Process エントリに 2 を指定した場合、[Process0001]セクションおよび[Process0002]セクションの定義内容が有効になります。

[ProcessXXXX]セクションでは、次のエントリを指定できます。

VBProperty エントリ

各サービスプロセスに固有の VisiBroker プロパティを指定します。指定を省略した場合に仮定される値はありません。VisiBroker プロパティ以外の値を指定した場合、File Sharing サーバの起動に失敗します。DocumentSpace 構成定義ファイルの ProcessVBProperty エントリの値と、このエントリの値を連結した値が、VisiBroker プロパティになります。指定できる VisiBroker プロパティについては、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。

(3) サービスプロセス定義ファイルの記述例

DocumentSpace 構成定義ファイルの Process エントリに 2 を指定し、個々のサービスプロセスに POA が使用するポート番号を定義する場合の、サービスプロセス定義ファイルの記述例を次に示します。

```
[Entry0001]
```

```
[Process0001]
```

```
VBProperty = -Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=14005
```

```
[Process0002]
```

```
VBProperty = -Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=14006
```

5.2.11 ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini)

ネットワークリソース情報ファイルは、ネットワーク上のファイルシステムにファイル実体を格納する場合に、格納先のベースパスを UNC 形式で指定してアクセスするための情報を定義するファイルです。ベースパスを UNC 形式で指定すると、それぞれのマシンでネットワークドライブを割り当てる必要がありません。

また、ネットワークリソース情報ファイルには、ファイル実体を格納しているマシンにログインするためのユーザ ID とパスワードを指定します。このため、このファイルのセキュリティは確実に管理してください。

なお、ファイル実体の格納先を UNC 形式で指定しない場合、このファイルを編集する必要はありません。ネットワークリソース情報ファイルが存在しない場合、またはネットワークリソース情報ファイルに[コンピュータ名]セクションが存在しない場合、File Sharing サーバは、UNC 形式で指定されていないものとして動作します。

ネットワークリソース情報ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥netaccess.ini
```

(1) ネットワークリソース情報ファイルの記述形式

```
[セクション名]
```

```
    エントリ名 = 値
```

- セクション名は、[] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定してから、次のセクション名を指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- 指定できないセクションを指定した場合、その指定は無視されます。
- エントリは、「エントリ名 = 値」の形式で指定します。
- 各セクション内で同一名のエントリを複数指定した場合、最初に指定したエントリが有効になります。

(2) ネットワークリソース情報ファイルの詳細

ネットワークリソース情報ファイルは、次に示す 2 種類のセクションとセクションに指定するエントリによって構成されます。

- [Network]セクション
- [コンピュータ名]セクション

以降、ネットワークリソース情報ファイルを構成する各セクションとセクションごとに指定するエントリについて説明します。

(a) [Network]セクション

ネットワークリソース情報で共通の情報を指定します。1 行 2,047 バイト以内で指定してください。

[Network]セクションを構成する各エントリは次のとおりです。

ConnectionScope エントリ

ネットワークへの接続期間を指定します。Service を指定します。ネットワークリソース情報ファイルに記述されているデフォルトは「Service」です。

- Service

File Sharing サーバの起動時にネットワークリソースに接続します。接続は、File Sharing サーバの停止時に切断されます。

BufferSize エントリ

File Sharing サーバのマシンとファイルシステムが存在するマシン間のファイル転送で使用するデータ転送サイズを指定します。指定できる値の範囲は、4,096~2,147,483,647 バイトです。

このエントリの記述を省略した場合は、ファイルを分割しないで転送します。

このエントリは、ファイル操作の負荷が高くなったときに、ネットワーク接続による性能劣化をチューニングするために使用します。

(b) [コンピュータ名]セクション

セクション名には、ネットワークリソースとして使用する共有名に該当するコンピュータ名または IP アドレスを指定します。255 バイト以内で指定してください。

このセクションで指定した定義は、セクション名で示すコンピュータの共有名がベースパス情報として設定された場合に有効になります。

[コンピュータ名]セクションを構成する各エントリは次のとおりです。

UserName エントリ

セクション名で指定したコンピュータの共有名に接続してファイルを操作するユーザのユーザ名を、「"」（引用符）で囲んで指定します。セクション名で記述したコンピュータにログインできるユーザ名、かつ使用する共有名にアクセスできるユーザ名を指定してください。

[コンピュータ名]セクションを指定した場合、このエントリの指定は省略できません。省略すると、[Collaboration - File Sharing Server] サービスを起動するときに、ネットワークリソース情報ファイルの読み込みでエラーになります。

認証するドメイン名を指定する場合、ドメイン名とユーザ名の間を 1 バイトの「¥」で区切って、「ドメイン名¥ユーザ名」のように指定してください。なお、使用している OS が Windows Server 2008 x86、Windows Server 2008 x64 および Windows Server 2008 R2 以降の場合、ドメイン名またはコンピュータ名を必ず指定してください。

Password エントリ

UserName エントリで指定したユーザ名でネットワークリソースに接続するためのパスワードを、「」(引用符)で囲んで指定します。指定を省略した場合は、パスワード指定なしでネットワーク接続処理が実行されます。

(c) ネットワークリソース情報ファイルの記述例

ネットワークリソース情報ファイルの記述例を次に示します。この例の場合は、ネットワークリソースへの接続および接続の切断が、File Sharing サーバが起動または停止したときに実行されます。また、ファイルシステムとして「Server1」というコンピュータ名のマシンと「10.210.64.99」という IP アドレスを持つマシンに接続します。Server1 にはユーザ名「domain¥user」、パスワード「password」でログインします。10.210.64.99 には、ユーザ名「Guest」、パスワード指定なしでログインします。

```
[Network]
ConnectionScope = Service
BufferSize = 4096
```

```
[Server1]
UserName = "domain¥user"
Password = "password"
```

```
[10.210.64.99]
UserName = "Guest"
```

(d) ネットワークリソース情報ファイルの注意事項

ネットワークリソース情報ファイルを編集して、ネットワークリソースに接続する場合の注意事項を次に示します。

- ネットワークリソース情報ファイルは、ネットワークコンピュータにアクセスするための情報を格納するファイルです。該当するネットワークコンピュータへのユーザ名とパスワードを指定します。このため、システム管理者以外のユーザが参照、更新などの操作ができないように、ファイルに適切なアクセス権を設定して管理してください。
- [Network]セクションは、ファイル内の先頭のセクションとして記述してください。二つ目以降のセクションとして[Network]セクションを指定した場合、「Network」というコンピュータ名の[コンピュータ名]セクションとして扱われます。
- 複数の[コンピュータ名]セクションに同一コンピュータ名を指定した場合は、先に指定したセクションが有効になります。
- [コンピュータ名]セクションに指定するコンピュータ名の表記は、ベースパス情報として設定する UNC 形式のコンピュータ名と一致させてください。File Sharing サーバでは、コンピュータ名と IP アドレスの変換、および指定の正当性のチェックはしません。例えば、コンピュータ名が Server2 で IP アドレスが 10.210.64.99 のマシンに対して、ネットワークリソース情報ファイルの[コンピュータ名]セクションを[Server2]と指定して、ベースパス情報として「¥¥10.210.64.99¥data」と設定した場合、接続はできません。
- [コンピュータ名]セクションに指定するコンピュータ名には、File Sharing サーバから認識できるネットワーク構成のマシンのコンピュータ名を指定してください。
- File Sharing サーバを起動したあとで UserName エントリのユーザ名を変更する場合は、ネットワークリソース情報ファイルの UserName エントリを編集したあとで、File Sharing サーバを再起動してください。
- [コンピュータ名]セクションに指定したコンピュータ名に該当する共有名のディレクトリには、適切なアクセス権限の設定が必要です。詳細は、「3.10.2 ファイル実体の格納先のアクセス権限の設定」を参照してください。

- File Sharing サーバでは、[コンピュータ名]セクションに指定したネットワークリソースに対して、指定されたユーザで接続します。このとき、有効になる[コンピュータ名]セクションの指定ごとに、ライセンスユーザ数は 1 になります。接続先コンピュータのライセンスユーザ数に注意してください。
- File Sharing サーバのマシンと[コンピュータ名]セクションで指定したマシン間でネットワーク障害が発生した場合に原因を究明するために使用する障害情報として、File Sharing サーバマシンでネットワークモニタによってトレース情報を取得しておくことをお勧めします。
- File Sharing サーバマシンで使用している Windows のバージョンに対して、[コンピュータ名]セクションで指定するマシンの Windows のバージョンは、同一バージョン以上になるようにしてください。例えば、File Sharing サーバマシンで Windows Server 2008 R2 を使用している場合は、[コンピュータ名]セクションで指定したマシンでは Windows Server 2008 R2、Windows Server 2008 x64、Windows Server 2008 x86、Windows Server 2012 または Windows Server 2012 R2 を使用している必要があります。
- File Sharing サーバサービスを停止時に、ネットワークリソース情報ファイルで定義したコンピュータに対するネットワークコネクションが切断されます。File Sharing サーバサービス停止後、Windows システム上、一定時間接続が保持されます。この接続が保持されている一定時間内に、File Sharing サーバサービスの起動・停止を繰り返すと、ネットワークリソース情報で定義したコンピュータに対する接続ユーザ数が上限に達します。上限に達するとファイル操作時にエラーとなり、詳細メッセージ KMBR24009-E が出力されます。この場合、ファイルの操作は一定時間後に実行してください。メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。時間については、Windows の net コマンドの説明を参照してください。

5.2.12 File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)

File Sharing サーバについて取得する障害情報の種類をカスタマイズする場合は、File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイルを編集します。

File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\%Server%etc\getrascustom.ini

(1) File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイルの記述形式

[セクション名]
 エントリ名 = 値

- セクション名は、[] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定してから、次のセクション名を指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- 同一名のセクションを複数指定した場合、最初に指定したセクションが有効になります。
- 指定できないセクションを指定した場合、その指定は無視されます。
- エントリは、「エントリ名 = フルパス」の形式で指定します。
- エントリ名は、32 バイト以内の文字列で指定します。
- 各エントリの値として指定できるエントリ値の長さは、1,023 バイトまでです。
- 「;」で始まる行はコメント行として扱われます。

(2) File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイルの詳細

File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイルは、次に示すセクションとセクションに指定するエントリによって構成されます。

- [Path]セクション

以降、File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイルを構成するセクションとセクションに指定するエントリについて説明します。

(a) [Path]セクション

File Sharing サーバの障害情報の取得コマンド (EDMGetRas) で、デフォルトで取得する情報以外に取得したい情報がある場合に指定します。デフォルトで取得する情報については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMGetRas (File Sharing サーバの障害情報の取得)」を参照してください。

指定したパスがファイルの場合は、そのファイルだけを収集します。ディレクトリの場合は、そのディレクトリを階層ごと収集します。

[Path]セクションで指定した情報は、次のディレクトリの下に格納されます。

コマンド実行時にオプションとして指定した出力先ディレクトリ¥EDM_コンピュータ名_YYYYMMDDhhmmss
ディレクトリ¥others¥エントリ名

5.2.13 見積もり情報定義ファイル

見積もり情報定義ファイルは、文書空間を構築するためのデータベース容量を見積もるとき、および文書空間を新規に構築するときに使用する情報を定義するためのファイルです。作成したファイルは、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) の-f オプションで指定します。システム管理者が、Excel などを使用して編集して、CSV 形式で保存してください。

見積もり情報定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。なお、見積もり情報定義ファイルは、文書空間の文字コード種別に指定する文字コードによって、使用するファイルが異なります。指定する文字コードに合わせたファイルを編集してください。

- 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsEstimatedef_UTF-8.csv
- 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsEstimatedef_SJIS.csv

(1) 見積もり情報定義ファイルの想定値

見積もり情報定義ファイルの初期設定値は、次の表に示す想定値を前提として設定されています。この表の値を参考に、運用環境に合わせた値を設定してください。

表 5-7 見積もり情報定義ファイルの初期設定値の前提

項目	想定値	
	UTF-8	Shift-JIS
ユーザ総数	1,000	1,000
コミュニティ総数	200	200
グループルートフォルダの総数	40	40

項目	想定値	
	UTF-8	Shift-JIS
フォルダごとに格納するフォルダの平均数	5	5
File Sharing で管理する全ルートフォルダからの平均階層数	2	2
ファイル総数	192,200	192,200
平均ファイルサイズ (バイト)	716,800	716,800
ベースパス情報の設定数	3	3
最大許容サイズ情報の設定数	3	3
ユーザ ID の平均文字列長 (バイト)	255 (上限値)	255 (上限値)
コメントの平均文字列長 (バイト)	1,024 (上限値)	512 (上限値)
ファイル名の平均文字列長 (バイト)	1,024 (上限値)	512 (上限値)
フォルダ名の平均文字列長 (バイト)	1,024 (上限値)	512 (上限値)
ベースパスの平均文字列長 (バイト)	1,024 (上限値)	512 (上限値)
最大許容サイズ情報の条件値の平均文字列長 (バイト)	1,024 (上限値)	512 (上限値)
ベースパス情報の名前の平均文字列長 (バイト)	1,024 (上限値)	512 (上限値)
ベースパス情報の条件値の平均文字列長 (バイト)	1,024 (上限値)	512 (上限値)
パラメタ管理キー数	1	1
ごみ箱の利用率 (%)	10	10

(凡例)

UTF-8：文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合の値です。

Shift-JIS：文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合の値です。

(2) 見積もり情報定義ファイルのエントリー一覧

見積もり情報定義ファイルで指定するエンTRIESを次の表に示します。各エンTRIESの詳細は、「(5) 見積もり情報定義ファイルの詳細」を参照してください。

表 5-8 見積もり情報定義ファイルのエントリー一覧

種類	エンTRIES	指定内容	指定方法
見積もり情報の定義	InstanceCount	オブジェクト数	変更要
	RootCntrCount	ルートフォルダ数	変更要
	AvCntrCountPerCntr	フォルダごとに格納するフォルダの平均数	変更要
	AvCntrTreeHeight	ルートフォルダからの階層の平均数	変更要
	AvContentSize	ファイルの平均サイズ	変更要
	AvLength	文字列の平均長	変更要

(凡例)

変更要：見積もり情報定義ファイルに記述されている初期設定値を実行環境に応じて変更する項目です（必須）。

(3) 見積もり情報定義ファイルの記述形式

見積もり情報定義ファイルは、ヘッダ、ボディ、およびコメントによって構成されます。ヘッダ、ボディ、およびコメントの形式について説明します。

ヘッダ

ヘッダは、エントリ名が列記されている行です。それぞれのエントリの詳細は、「(5) 見積もり情報定義ファイルの詳細」を参照してください。

ヘッダは、ボディより前の行に 1 行だけ記述されています。

ボディ

ボディは、設定する値の定義を記述する行です。

ボディは、ヘッダのエントリ名に対応して指定します。

コメント

コメントは、注釈を記述できる行です。次の場合、コメントとなります。

- # (シャープ) で始まる行
- ; (セミコロン) で始まる行
- 行は、印刷できる ASCII コードで記述します。
- 行の終わりは、<EOF>または行末文字です。
- 行末文字は、<CR>+<LF>です。
- Excel で編集する場合、各エントリ値の先頭には、「"」(引用符)、「,」(コンマ) およびセルの先頭に「'」(シングルクォーテーション) を使用できません。
- 行には、ヘッダ、ボディ、およびコメントがあります。値が設定されていない行 (コンマだけが続く行) や、行の終わりだけの行は無視します。

(4) 見積もり情報定義ファイルの編集方法

見積もり情報定義ファイルは、Excel などを使用して編集して、CSV 形式のファイルとして保存します。

また、見積もり情報定義ファイルで値を設定する個所を特定するには、「(5) 見積もり情報定義ファイルの詳細」の表 5-10～表 5-14 および表 5-16 の「設定個所」に示す情報を使用してください。

表 5-10～表 5-14 および表 5-16 の「設定個所」は、値を設定する個所を特定するためのエントリとそのエントリに設定されている値を示しています。

値を設定する個所には、「CHANGE=< File Sharing での初期設定値>」が記述されています。この「CHANGE=< File Sharing での初期設定値>」部分を環境に合わせた値に書き換えます。また、初期設定値を使用する場合は、「CHANGE=」を削除します。

値を設定する場合も、初期設定値を使用する場合も、必ず「CHANGE=」を削除してください。

「CHANGE=」を削除しないと、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) 実行時に KMBR16821-E または KMBR16822-E でエラーとなって、コマンドの処理は中止されます。

例えば、表 5-10 の InstantCount エントリにファイル総数「1000」を設定する場合、次に示す手順で値を設定します。

1. 表 5-10 の「設定個所」から値を設定する個所を特定します。

次に示す条件を基に値を設定する個所を特定します。

- ObjType エントリの値：Class
- AclibClassName エントリの値：cfsClass_File
- TargetType エントリの値：CH

値を設定する個所には、「CHANGE=192200」が記述されています。

ヘッダ	ObjType	...	AclibClassName	...	TargetType	...	InstantCount	...
ボディ
	Class	...	cfsClass_File	...	CH	...	CHANGE=192200	...

●
値を設定する個所

2. 「CHANGE=192200」を「1000」に書き換えます。

設定する値を初期設定値と同じにする場合も、必ず「CHANGE=」の部分を削除してください。

ヘッダ	ObjType	...	AclibClassName	...	TargetType	...	InstantCount	...
ボディ
	Class	...	cfsClass_File	...	CH	...	1000	...

(5) 見積もり情報定義ファイルの詳細

見積もり情報定義ファイルのエントリについて説明します。

InstanceCount エントリ

オブジェクト数を 1~2,147,483,647 の範囲で指定します。対象クラスによって指定する内容が異なります。

InstanceCount エントリの設定個所と内容を次の表に示します。

表 5-9 InstanceCount エントリの設定個所と内容

設定個所			内容	初期設定値
ObjType エントリ	AclibClassName エントリ	TargetType エントリ		
Class	cfsClass_File	CH	ファイル総数	CHANGE=192200
	cfsClass_Personal	—	ユーザ総数	CHANGE=1000
	cfsClass_Community	—	コミュニティ総数	CHANGE=200
	cfsClass_Group	—	グループルートフォルダの総数	CHANGE=40
	cfsClass_Quota	—	最大許容サイズ情報の設定数	CHANGE=3
	cfsClass_AssignableDrive	—	ベースパス情報の設定数	CHANGE=3

(凡例)

—：該当しません。

RootCntrCount エントリ

ルートフォルダ数を 1~2,147,483,647 の範囲で指定します。
RootCntrCount エントリの設定個所と内容を次の表に示します。

表 5-10 RootCntrCount エントリの設定個所と内容

設定個所		内容	初期設定値
ObjType エントリ	AclibClassName エントリ		
Class	cfsClass_Folder	ユーザ総数, コミュニティ総数, グループルートフォルダの総数の合計	CHANGE=1240

AvCntrCountPerCntr エントリ

フォルダごとに格納するフォルダの平均数を 1~2,147,483,647 の範囲で指定します。
AvCntrCountPerCntr エントリの設定個所と内容を次の表に示します。

表 5-11 AvCntrCountPerCntr エントリの設定個所と内容

設定個所		内容	初期設定値
ObjType エントリ	AclibClassName エントリ		
Class	cfsClass_Folder	フォルダごとに格納するフォルダの平均数	CHANGE=5

AvCntrTreeHeight エントリ

ルートフォルダからの階層の平均数を 1~2,147,483,647 の範囲で指定します。
AvCntrTreeHeight エントリの設定個所と内容を次の表に示します。

表 5-12 AvCntrTreeHeight エントリの設定個所と内容

設定個所		内容	初期設定値
ObjType エントリ	AclibClassName エントリ		
Class	cfsClass_Folder	全ルートフォルダからの平均階層数	CHANGE=2

AvContentSize エントリ

ファイルの平均サイズを 0~2,147,483,647 (バイト) の範囲で指定します。バイト単位で指定します。
AvContentSize エントリの設定個所と内容を次の表に示します。

表 5-13 AvContentSize エントリの設定個所と内容

設定個所			内容	初期設定値
ObjType エントリ	AclibClassName エントリ	TargetType エントリ		
Class	cfsClass_File	CH	平均ファイルサイズ (バイト)	CHANGE=192200

AvLength エントリ

次の文字列の平均長をバイト単位で指定します。

- ユーザ ID

- コミュニティ ID
- グループ ID
- コメント
- ファイル名
- フォルダ名
- ベースパス
- 最大許容サイズ情報の条件値
- ベースパス情報の名称
- ベースパス情報の条件値
- 削除元のフォルダパス

AvLength エントリへの指定値と指定できる値の範囲を次の表に示します。

表 5-14 AvLength エントリへの指定値と指定できる値の範囲

指定値	指定できる値の範囲 (バイト)	
	UTF-8	Shift-JIS
ユーザ ID の平均文字列長	1~255	1~255
コミュニティ ID の平均文字列長	1~40	1~40
グループ ID の平均文字列長	1~16	1~16
コメントの平均文字列長	1~1,024	1~512
ファイル名の平均文字列長	1~1,024	1~512
フォルダ名の平均文字列長	1~1,024	1~512
ベースパスの平均文字列長	1~1,024	1~512
最大許容サイズ情報の条件値の平均文字列長	1~1,024	1~512
ベースパス情報の名称の平均文字列長	1~1,024	1~512
ベースパス情報の条件値の平均文字列長	1~1,024	1~512
削除元のフォルダパスの平均文字列長	ごみ箱を使用する場合 1~10,304 ごみ箱を使用しない場合 0	ごみ箱を使用する場合 1~5,152 ごみ箱を使用しない場合 0

(凡例)

UTF-8 : 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合の値の範囲です。

Shift-JIS : 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合の値の範囲です。

AvLength エントリの設定個所と内容を次の表に示します。

表 5-15 AvLength エントリの設定個所と内容

設定個所				内容	初期設定値	
ObjType エントリ	AclibClass Name エントリ	TargetType エントリ	PropertyName エントリ		UTF-8	Shift-JIS
Prop	cfsClass_ Folder	-	cfsProp_ Creator	ユーザ ID の平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=255	CHANG E=255
			cfsProp_ Modifier			
			cfsProp_ Accessor			
			cfsProp_ CheckoutUser			
			cfsProp_ Comment	コメントの平均文字列 長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512
			cfsProp_ DisplayName	フォルダ名の平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512
			cfsProp_ DisplayName_E n			
			cfsProp_ EntityName			
	cfsProp_ OriginalFolderP ath	ごみ箱の利用率 (%) × (10+ (フォルダ名の平 均文字列長 (バイト) +1) ×ルートフォルダ からの階層平均数)	CHANG E=206	CHANG E=104		
	cfsClass_ File	CH	cfsProp_ Creator	ユーザ ID の平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=255	CHANG E=255
cfsProp_ Modifier						
cfsProp_ Accessor						
cfsProp_ CheckoutUser						
cfsProp_ Identifier			ユーザ ID, コミュニ ティ ID およびグルー プ ID の平均文字列長 (バイト)	CHANG E=255	CHANG E=255	
cfsProp_ Comment	コメントの平均文字列 長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512			

5 File Sharing の環境設定に必要なファイル

設定箇所				内容	初期設定値			
ObjType エントリ	AclibClass Name エントリ	TargetType エントリ	PropertyName エントリ		UTF-8	Shift-JIS		
Prop	cfsClass_ File	CH	cfsProp_ DisplayName	ファイル名の平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512		
			cfsProp_ DisplayName_E n					
			cfsProp_ EntityName					
					cfsProp_ OriginalFolderP ath	ごみ箱の利用率 (%) × (10+ (フォルダ名の平 均文字列長 (バイト) +1) ×ルートフォルダ からの階層平均数)	CHANG E=206	CHANG E=104
		VR	cfsProp_ Creator	ユーザ ID の平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=255	CHANG E=255		
			cfsProp_ Modifier					
			cfsProp_ Accessor					
			cfsProp_ Comment	コメントの平均文字列 長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512		
			cfsProp_ DisplayName	ファイル名の平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512		
	cfsProp_ DisplayName_E n							
	cfsProp_ EntityName							
	cfsClass_ Personal	-	cfsProp_ UseId	ユーザ ID の平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=255	CHANG E=255		
			cfsProp_ ContentBasePat h	ベースパスの平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512		
cfsClass_ Community	-	cfsProp_ ContentBasePat h	ベースパスの平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512			
cfsClass_ Group	-	cfsProp_ ContentBasePat h	ベースパスの平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512			

設定箇所				内容	初期設定値	
ObjType エントリ	AclibClass Name エントリ	TargetType エントリ	PropertyName エントリ		UTF-8	Shift-JIS
Prop	cfsClass_ Group	—	ContentBasePat h	ベースパスの平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512
	cfsClass_ Quota	—	cfsProp_ ParameterValue	最大許容サイズ情報の 条件値の平均文字列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512
	cfsClass_ AssignableDrive	—	cfsProp_ Path	ベースパスの平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=1024	CHANG E=512
			cfsProp_ Name	ベースパス情報の名称 の平均文字列長 (バイ ト)	CHANG E=1024	CHANG E=512
			cfsProp_ ParameterValue	ベースパス情報の条件 値の平均文字列長 (バイ ト)	CHANG E=1024	CHANG E=512
	edmClass_ PublicACL	—	cfsProp_ Name	ユーザ ID の平均文字 列長 (バイト)	CHANG E=255	CHANG E=255
			cfsProp_ Creator			
			cfsProp_ Modifier			

(凡例)

UTF-8：文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合の値です。

Shift-JIS：文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合の値です。

—：該当しません。

5.2.14 文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt)

文書空間情報ファイルは、文書空間の定義および構築で使用する情報を定義するファイルです。作成したファイルは、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) の -s オプションで指定します。システム管理者がテキストエディタなどを使用して編集して、TXT 形式で保存してください。

文書空間情報ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsDocinfo.txt

(1) 文書空間情報ファイルの想定値

文書空間情報ファイルの初期設定値は、次の表に示す想定値を前提として設定されています。この表の値を参考に、運用環境に合わせた値を設定してください。

表 5-16 文書空間情報ファイルの初期設定値の前提

項目	想定値
ユーザ総数	1,000
コミュニティ総数	200
グループルートフォルダの総数	40
フォルダの総数	38,440
ファイルの総数	192,200
個人フォルダで管理するファイルの総数	100,000
最大許容サイズ情報の設定数	3
ベースパス情報の設定数	3
個人フォルダで管理するファイルに参照権を設定する平均ユーザ数	16
個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数	1,000
コミュニティフォルダで更新権、作成権／削除権を設定する平均役割数	16
グループフォルダの運用者に設定するユーザ数と組織数の平均値	2
グループフォルダで管理するフォルダに参照権、作成権、更新権および削除権を設定するユーザ数と組織数の平均値	16
グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数	240

(2) 文書空間情報ファイルのエントリー一覧

文書空間情報ファイルで指定するエントリーを示します。各エントリーの詳細は、「(4) 文書空間情報ファイルの詳細」を参照してください。

(a) [System]セクション

システム全体のパラメタを定義します。[System]セクションを構成する各エントリーを次の表に示します。

表 5-17 [System]セクションのエントリー一覧

設定項目	エントリー	指定内容	指定方法
アクセス制御機能の使用の有無	AccessControl	アクセス制御機能の使用の有無	固定
パブリック ACL	PublicACLCount	パブリック ACL の作成オブジェクト数	変更要
	AvBindPublicACLCount	パブリック ACL の平均バインド数	固定
ローカル ACL	AvLocalACECount	ローカル ACL の ACE 数	変更要
セキュリティ ACL	AvSecurityACECount	セキュリティ ACL の平均 ACE 数	固定

設定項目	エントリ	指定内容	指定方法
リファレンス ファイル管理機 能の使用の有無	ReferenceFile	リファレンスファイル管理機能 の使用の有無	固定
文書空間の文字 コード種別	DocSpaceCharacterSet	文書空間の文字コード種別	変更要

(凡例)

固定：文書空間情報ファイルの初期設定値を変更してはならない項目です（必須）。

変更要：文書空間情報ファイルの初期設定値を実行環境に応じて変更する項目です（必須）。

(b) [RdAreaName]セクション

RD エリア名を定義します。[RdAreaName]セクションを構成する各エントリを次の表に示します。

表 5-18 [RdAreaName]セクションのエントリ一覧

設定項目	エントリ	指定内容	指定方法
メタ情報格納用の RD エリア	MetaTblName	メタ情報の表を格納する RD エリアの RD エ リア名	任意
	MetaIdxName	メタ情報の表に定義されるインデクスを格納 する RD エリアの RD エリア名	任意
システム用 RD エリア	SysTblName	システムが定義する表を格納する RD エリア の RD エリア名	任意
	SysIdxName	システムが定義する表に定義されるインデク スを格納する RD エリアの RD エリア名	任意
ユーザ用 RD エリア	UsrTblName	ユーザが定義する表を格納する RD エリアの RD エリア名	任意
	UsrIdxName	ユーザが定義する表に定義されるインデクス を格納する RD エリアの RD エリア名	任意
LOB 列格納用 RD エリ ア	DocTblName	文書用 LOB エリアを格納する RD エリアの RD エリア名	任意
	SgmlTblName	SGML 用 LOB エリアを格納する RD エリア の RD エリア名	任意

(凡例)

任意：任意で指定する項目です（省略可）。

(3) 文書空間情報ファイルの記述形式

[セクション名]
エントリ名 = 値

- セクション名は、[]（角括弧）で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定して
から、次のセクションを指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- エントリは、「エントリ名=値」の形式で指定します。
- セクション名およびエントリ名は 127 バイト以内、値は 1,023 バイト以内で指定します。
- 指定できないセクションを指定した場合、指定したセクションはすべて無視されます。

- セクションを重複して記述している場合、エラーになります。
- セクション内でエントリを重複して記述している場合、エラーになります。
- 指定できないエントリを指定した場合、エラーになります。
- エントリの指定を無視する場合にも、値をチェックします。

(4) 文書空間情報ファイルの詳細

文書空間情報ファイルは、次に示す二つのセクションと各セクションに指定するエントリによって構成されます。

- [System]セクション
- [RdAreaName]セクション

以降、文書空間情報ファイルを構成する各セクションとセクションごとに指定するエントリについて説明します。

(a) [System]セクション

システム全体のパラメタを定義します。[System]セクションを構成する各エントリは次のとおりです。

AccessControl エントリ

アクセス制御機能の使用の有無を指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「ON」（アクセス制御機能を使用する）です。この値は変更しないでください。

PublicACLCount エントリ

パブリック ACL を作成するオブジェクト数を 0~2,147,483,647 の範囲で指定します。文書空間情報ファイルの初期設定値は 3,560 です。

オブジェクト数は次の計算式で求めます。

オブジェクト数

$$= \text{ユーザ総数} \times 2 + \text{個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数} + \text{コミュニティ総数} + \text{グループルートフォルダの総数} \times 3 + \text{グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数}$$

AvBindPublicACLCount エントリ

パブリック ACL の平均バインド数を指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は 1 です。この値は変更しないでください。

AvLocalACECount エントリ

ローカル ACL の平均 ACE 数を 0~64 の範囲で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は 4 です。

ローカル ACL の平均 ACE 数は次の計算式で求めます。

ローカル ACL の平均 ACE 数

$$= ((A + 9) \times B + C + D \times E + F \times G + I \times (J + K) + L \times J) \div (B \times 2 + C \times 3 + H + I \times 4 + L + M + N \times 2 + O + P)$$

変数の意味を次に示します。

変数	意味
A	コミュニティで更新権または作成／削除権を設定する平均役割数

変数	意味
B	コミュニティ総数
C	ユーザ総数
D	個人フォルダで管理するファイルの総数
E	個人フォルダで管理するファイルに参照権を設定する平均ユーザ数
F	個人フォルダで管理するフォルダの総数
G	個人フォルダで管理するフォルダに参照権を設定する平均ユーザ数
H	個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数
I	グループルートフォルダの総数
J	グループフォルダで参照権, 作成権, 更新権および削除権を設定するユーザ数と組織数の平均
K	グループフォルダに設定する運用者のユーザ数と組織数の平均
L	グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数
M	フォルダの総数
N	ファイルの総数
O	ベースパス情報の設定数
P	最大許容サイズ情報の設定数

AvSecurityACECount エントリ

セキュリティ ACL の平均 ACE 数を指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は 1 です。この値は変更しないでください。

ReferenceFile エントリ

リファレンスファイル管理機能の使用の有無を指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「ON」(リファレンスファイル管理機能を使用する) です。この値は変更しないでください。

DocSpaceCharacterSet エントリ

文書空間の文字コード種別を指定します。

[ファイル共有] ポートレットで日本語および英語だけを使用する運用の場合は、文書空間の文字コード種別を UTF-8 (推奨) または Shift-JIS としてください。また、日本語および英語以外の言語も使用する運用の場合は、文書空間の文字コード種別を UTF-8 としてください。

- UTF-8

文書空間の文字コード種別を UTF-8 とします。

- SJIS

文書空間の文字コード種別を Shift-JIS とします。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「UTF-8」です。エントリの指定を省略した場合、「SJIS」が仮定されます。

(b) [RdAreaName]セクション

RD エリア名を定義します。[RdAreaName]セクションを構成する各エントリは次のとおりです。

MetaTblName エントリ

メタ情報の表（「EDMS_META」で始まる表）を格納する RD エリアの RD エリア名を、1～23（バイト）の文字列で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「CFS_METATBL」です。

エントリの指定を省略した場合、「METATBL」が仮定されます。

MetaldxName エントリ

メタ情報の表（「EDMS_META」で始まる表）に定義されるインデックスを格納する RD エリアの RD エリア名を、1～23（バイト）の文字列で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「CFS_METAIDX」です。

エントリの指定を省略した場合、「METAIDX」が仮定されます。

SysTblName エントリ

「dmaClass」または「edmClass」で始まる表を格納する RD エリアの RD エリア名を、1～23（バイト）の文字列で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「CFS_SYSTBL」です。

エントリの指定を省略した場合、「SYSTBL」が仮定されます。

SysIdxName エントリ

「dmaClass」または「edmClass」で始まる表に定義されるインデックスを格納する RD エリアの RD エリア名を、1～23（バイト）の文字列で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「CFS_SYSIDX」です。

エントリの指定を省略した場合、「SYSIDX」が仮定されます。

UsrTblName エントリ

「cfsClass」で始まる表を格納する RD エリアの RD エリア名を、1～23（バイト）の文字列で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「CFS_USRTBL」です。

エントリの指定を省略した場合、「USRTBL」が仮定されます。

UsrIdxName エントリ

「cfsClass」で始まる表に定義されるインデックスを格納する RD エリアの RD エリア名を、1～23（バイト）の文字列で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「CFS_USRIDX」です。

エントリの指定を省略した場合、「USRIDX」が仮定されます。

DocTblName エントリ

文書用 LOB エリアを格納する RD エリアの RD エリア名を、1～23（バイト）の文字列で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「CFS_DOC01」です。

エントリの指定を省略した場合、「DOC」が仮定されます。

SgmlTblName エントリ

SGML 用 LOB エリアを格納する RD エリアの RD エリア名を、1～23（バイト）の文字列で指定します。

文書空間情報ファイルの初期設定値は「CFS_SGML01」です。

エントリの指定を省略した場合、「SGML」が仮定されます。

注意

- RD エリア名には、すでに使われている RD エリア名を指定しないでください。
すでに使われている RD エリア名を指定した場合も、エラーかどうかはチェックされません。

- RD エリア名には、空白または「-」（ハイフン）を含む名称は指定しないでください。
空白を含む RD エリア名を指定した場合、文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) 実行時に KMBR16920-E のメッセージ（要因コード：rc=5）または KMBR10226-W のメッセージが出力されてエラーとなるか、またはデータベース定義ユーティリティ実行時にデータベースのエラーとなります。
「-」（ハイフン）を含む RD エリア名を指定した場合、文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) 実行時、または HiRDB のデータベース定義ユーティリティ実行時にデータベースのエラーとなります。
- DocTblName エントリと SgmlTblName エントリには、重複しない RD エリア名を指定してください。

(5) 文書空間情報ファイルの記述例

文書空間情報ファイルの次に示すエントリ（記述例の太字の箇所）を、実行環境に応じて変更してください。

- PublicACLCount
- AvLocalACECount
- DocSpaceCharacterSet
- MetaTblName
- MetaIdxName
- SysTblName
- SysIdxName
- UsrTblName
- UsrIdxName
- DocTblName
- SgmlTblName

文書空間情報ファイルの記述例を次に示します。

```
[System]
AccessControl = ON
PublicACLCount = 1560
AvBindPublicACLCount = 1
AvLocalACECount = 4
AvSecurityACECount = 1
ReferenceFile = ON
DocSpaceCharacterSet = UTF-8

[RdAreaName]
MetaTblName = CFS_METATBL
MetaIdxName = CFS_METAIDX
SysTblName = CFS_SYSTBL
SysIdxName = CFS_SYSIDX
UsrTblName = CFS_USRTBL
UsrIdxName = CFS_USRIDX
DocTblName = CFS_DOC01
SgmlTblName = CFS_SGML01
```

5.2.15 見積もり基礎情報ファイル

見積もり基礎情報ファイルは、文書空間を構築するためのデータベース容量を見積もるのに使用する行の数などの基礎情報を、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) で出力するファイルです。出力され

たファイルを基にして、実際に使用する RD エリアの容量を見積もってください。RD エリアの見積もり方法については、「2.4.2 ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり」を参照してください。

見積もり基礎情報ファイルが出力されるディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\¥Server¥env¥EDMestimate.csv

なお、このファイルに出力される情報は、文書クラス定義ファイルおよび文書空間情報ファイルの値を基に決定されます。この値からデータベースの容量を見積もる場合、容量に対しての安全率を考慮してください。

(1) 見積もり基礎情報ファイルの出力形式

見積もり基礎情報ファイルの出力形式を次に示します。

見積もり基礎情報ファイルは、ヘッダおよびボディによって構成されます。ヘッダおよびボディの形式について説明します。

ヘッダ

ヘッダは、エントリ名が列記されている行です。それぞれのエントリの詳細は、「(2) 見積もり基礎情報ファイルの出力情報の詳細」を参照してください。

ヘッダは、ボディより前の行に 1 行だけ記述されています。

ボディ

ボディは、出力された値が記述されている行です。ボディは、ヘッダのエントリ名に対応しています。

(2) 見積もり基礎情報ファイルの出力情報の詳細

見積もり基礎情報ファイルの出力情報のうち、ユーザ用 RD エリアの容量の算出に必要なエントリを次に示します。

Kind エントリ

次に示す表の種別が出力されます。

- MetaTable：メタ情報を格納する表（「EDMS_META」で始まる表）
- SystemTable：「dmaClass」または「edmClass」で始まる表
- UserTable：「cfsClass」で始まる表
- MetaIndex：「EDMS_META」で始まる表に定義されるインデクス
- SystemIndex：「dmaClass」または「edmClass」で始まる表に設定されるインデクス
- UserIndex：「cfsClass」で始まる表に設定されるインデクス
- BLOb：BLOB 列が定義された表
- Disk：ファイル実体格納用のディスク容量

Table Name エントリ

データベースに定義される表の名前が出力されます。

Index Name エントリ

データベースに定義されるインデクスの名前が出力されます。

Record Count エントリ

表に格納するレコードの総数が出力されます。

Record Length エントリ

レコードのデータサイズが出力されます。

Column Count エントリ

表に定義する列の総数が出力されます。

Key Kind エントリ

キー種別として、次のどちらかの値が出力されます。

- 1 : UNIQUE キー
- 0 : 重複キー

AvContent Size エントリ

登録するファイルのファイル実体の平均サイズが出力されます。

Area Name エントリ

表やインデクスなどが格納される RD エリア名が出力されます。

Column Name エントリ

可変長文字列型で平均文字列長が 256 バイト以上の列の名前、またはインデクスを定義する列の名前が出力されます。

Data Type エントリ

列のデータ型として、次のどれかが出力されます。

- INT : 整数
- CHAR : 固定長文字列
- VARCHAR : 可変長文字列
- MVARCHAR : 可変長混在文字列

Column Length エントリ

列の定義長が出力されます。

「2.4.2(3)(d) インデクス」の算出に使用します。インデクスのキー長は、システム管理者が算出してください。

AvColumn Length エントリ

可変長文字列型の列の平均文字列長が出力されます。

「2.4.2(3)(d) インデクス」の算出に使用します。インデクスのキー長は、システム管理者が算出してください。

(3) 見積もり基礎情報ファイルの出力例

見積もり基礎情報ファイルの出力例を次に示します。

```
; Estimate Basic Information File,,,,,,,,,,,,,
; 2006/02/02 21:56:29,,,,,,,,,,,,,

Kind,Table Name,Index Name,Record Count,Record Length,Column Count,Key Kind,AvContent
Size,Area Name,Column Name,Data Type,Column Length,AvColumn Length
MetaTable,EDMS_METAINI,,2436,158,3,,,CFS_METATBL,,,,,
MetaTable,EDMS_META_edms,,971,527,5,,,CFS_METATBL,,,,,
MetaTable,EDMS_META_edmsys,,100,527,5,,,CFS_METATBL,,,,,
MetaTable,EDMS_META_ssysobj,,50,527,5,,,CFS_METATBL,,,,,
:
SystemTable,edmClass_OIID,,1,20,3,,,CFS_SYSTBL,,,,,
SystemTable,dmaClass_ConfigHistory,,0,930,13,,,CFS_SYSTBL,,,,,
SystemTable,dmaClass_VerDescription,,192200,180,6,,,CFS_SYSTBL,,,,,
SystemTable,dmaClass_Rendition,,0,380,6,,,CFS_SYSTBL,,,,,
:
```

5 File Sharing の環境設定に必要なファイル

```
UserTable, cfsClass_Folder, , 38440, 3471, 30, , , CFS_USRTBL, , , ,
UserTable, cfsClass_Folder, , , , , , CFS_USRTBL, cfsProp_Comment, MVARCHAR, 1024, 1024
UserTable, cfsClass_Folder, , , , , , CFS_USRTBL, cfsProp_DisplayName, MVARCHAR, 1024, 1024
UserTable, cfsClass_Folder, , , , , , CFS_USRTBL, cfsProp_DisplayName_En, MVARCHAR, 1024, 1024
:
MetaIndex, EDMS_META_edms, , , , , 1, , CFS_METAIDX, SECTION_NAME, VARCHAR, 128,
MetaIndex, EDMS_META_edms, , , , , 1, , CFS_METAIDX, OCCUR, INT, 4,
MetaIndex, EDMS_META_edmsys, , , , , 1, , CFS_METAIDX, SECTION_NAME, VARCHAR, 128,
MetaIndex, EDMS_META_edmsys, , , , , 1, , CFS_METAIDX, OCCUR, INT, 4,
:
SystemIndex, edmClass_OIID, edmClass_OIIDAp, , , , , 1, , CFS_SYSIDX, edmProp_AppId, CHAR, 2,
SystemIndex, edmClass_OIID, edmClass_OIIDAp, , , , , 1, , CFS_SYSIDX, edmProp_EnvId, CHAR, 2,
SystemIndex, dmaClass_ConfigHistory, dmaClass_ConfigHistoryId, , , , , 1, , CFS_SYSIDX, dmaProp_OIID, CHAR,
16,
SystemIndex, dmaClass_ConfigHistory, dmaClass_ConfigHistoryPc, , , ,
0, , CFS_SYSIDX, dmaProp_ParentContainer, CHAR, 52,
:
UserIndex, cfsClass_Folder, cfsClass_FolderId, , , , , 1, , CFS_USRIDX, dmaProp_OIID, CHAR, 16,
UserIndex, cfsClass_Folder, cfsClass_FolderPc, , , , , 0, , CFS_USRIDX, dmaProp_ParentContainer, CHAR, 52,
UserIndex, cfsClass_Folder, cfsClass_FolderTh, , , , , 0, , CFS_USRIDX, dmaProp_This, CHAR, 52,
UserIndex, cfsClass_Folder, cfsClass_FolderOd, , , , , 0, , CFS_USRIDX, edmProp_OwnerId, MVARCHAR, 255,
:
SystemIndex, edmClass_PublicACL, edmClass_PublicACL01, , , , , 0, , CFS_SYSIDX, cfsProp_Name, MVARCHAR,
1024, 255
SystemIndex, edmClass_PublicACL, edmClass_PublicACL02, , , , , 0, , CFS_SYSIDX, cfsProp_Type, INT, 4,
BLOB, dmaClass_ContentTransfer, , , , , , 0, CFS_DOC01, , , ,
BLOB, edmClass_ConceptSgmlDoc, , , , , , 0, CFS_SGML01, , , ,
Disk, edmClass_ContentReference, , , , , , 716800, , , , ,
```

5.3 File Sharing クライアントで使用するファイル

ここでは、File Sharing クライアントの環境設定で必要なファイルについて説明します。

5.3.1 クラス定義情報ファイル

クラス定義情報ファイルは、File Sharing サーバで定義されているクラス名やプロパティ名とユニークな識別子とを対応づけるファイルです。

このファイルは、File Sharing サーバで文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) を実行することで作成されます。このファイルは、接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env¥文書空間識別子.ini

上記に作成されたファイルの記述内容は変更しないでください。提供されるファイルをそのまま File Sharing クライアントの環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーして使用してください。なお、File Sharing クライアントのインストール時は、環境変数「EDMCLASSDEFPATH」には「{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc」が設定されています。

参考

クラス定義情報ファイルは、File Sharing サーバでクラス定義情報ファイル作成コマンド (EDMCrtSimMeta) を実行しても作成できます。

クラス定義情報ファイル作成コマンド (EDMCrtSimMeta) を実行した場合のファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files¥文書空間識別子.ini

接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で出力されます。

5.3.2 ファイル転送サービス環境定義ファイル (ftpsv.ini)

File Sharing サーバに接続する File Sharing クライアントが異なるマシン上に存在する場合、File Sharing サーバと File Sharing クライアントの間のファイル転送には、ファイル転送機能を使用する必要があります。

ファイル転送サービス環境定義ファイルは、同時に割り当て可能な File Sharing クライアントの数の最大値など、ファイル転送機能を使用するために必要な環境を定義するファイルです。

ファイル転送サービス環境定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc¥ftpsv.ini

(1) ファイル転送サービス環境定義ファイルの記述形式

[セクション名]
エントリ名 = 値

- セクション名は、[] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定してから、次のセクション名を指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- 同一名のセクションを複数指定した場合、最初に指定したセクションが有効になります。
- 指定できないセクションを指定した場合、その指定は無視されます。
- エントリは、「エントリ名 = 値」の形式で指定します。

- 各セクション内で同一名のエントリを複数指定した場合、最初に指定したエントリが有効になります。
- 各エントリの値として指定できるのは、1,023 バイトまでです。

(2) ファイル転送サービス環境定義ファイルの詳細

ファイル転送サービス環境定義ファイルは、次に示す二つのセクションと各セクションに指定するエントリによって構成されます。

- [FtpService]セクション
- [FtpProcessXXXX]セクション

以降、ファイル転送サービス環境定義ファイルを構成する各セクションとセクションごとに指定するエントリについて説明します。

(a) [FtpService]セクション

FtpSessionMax エントリ

File Sharing サーバに同時に接続できる最大数を、1~1,024 の値で指定してください。静的モードの場合は、ファイル転送サービス起動コマンドで起動したすべてのファイル転送サービスプロセスで、同時に接続できる最大数を指定してください。動的モードの場合は、一つのファイル転送サービスプロセスで同時に接続できる最大数を指定してください。

このエントリを省略した場合、またはエントリに不正な値を指定した場合は、64 が仮定されます。

FtpVBProperty エントリ

ファイル転送サービス監視プロセスの VisiBroker プロパティを指定します。指定を省略した場合、[-Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iioptp.manager.type=Socket -

Dvbroker.se.iioptp.scm.iioptp.dispatcher.threadMax=64] が仮定されます。VisiBroker プロパティ以外の値を指定した場合、ファイル転送サービス監視プロセスの起動に失敗します。指定できる VisiBroker プロパティについては、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。

FtpProcessVBProperty エントリ

すべてのファイル転送サービスプロセスに共通する VisiBroker プロパティを指定します。指定を省略した場合、[-Dvbroker.se.iioptp.scm.iioptp.manager.type=Socket -

Dvbroker.se.iioptp.scm.iioptp.dispatcher.threadMax=64] が仮定されます。VisiBroker プロパティ以外の値を指定した場合、ファイル転送サービスプロセスの起動に失敗します。指定できる VisiBroker プロパティについては、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。

(b) [FtpProcessXXXX]セクション

XXXX は、0001~0020 を示します。[FtpProcessXXXX]セクションでは、静的モードで開始される各ファイル転送サービスプロセスに固有の動作を定義します。

ファイル転送サービス開始コマンド (FtpSvStart) の -n オプションに指定した数までのセクションが有効になります。ファイル転送サービスプロセスごとに動作を定義することで、ポート番号を指定してファイル転送サービスプロセスを複数起動できます。例えば、ファイル転送サービス開始コマンドの -n オプションに 2 を指定した場合、[FtpProcess0001]セクションおよび[FtpProcess0002]セクションの定義内容が有効になります。

[FtpProcessXXXX]セクションでは、次のエントリを指定できます。

VBProperty エントリ

各ファイル転送サービスプロセスに固有の VisiBroker プロパティを指定します。指定を省略した場合は仮定される値はありません。VisiBroker プロパティ以外の値を指定した場合、ファイル転送サービスプロセスの起動に失敗します。

[FtpService]セクションの FtpProcessVBProperty エントリの値と、このエントリの値を連結した値が、VisiBroker プロパティになります。指定できる VisiBroker プロパティについては、マニュアル「Borland(R) Enterprise Server VisiBroker(R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。

(3) ファイル転送サービス環境定義ファイルの記述例

ファイル転送サービス環境定義ファイルの記述例を示します。

ファイル転送サービス開始コマンドの -n オプションに 2 を指定し、個々のファイル転送サービスプロセスに POA が使用するポート番号を定義する場合の、ファイル転送サービス環境定義ファイルの記述例を次に示します。

```
[FtpProcess0001]
VBProperty = -Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=14005
```

```
[FtpProcess0002]
VBProperty = -Dvbroker.se.iiop_tp.scm.iiop_tp.listener.port=14006
```

5.3.3 レンディション定義ファイル (mime.properties)

レンディション定義ファイルは、ファイルを登録するときに、登録するファイルの拡張子からレンディションタイプ (MIME 形式) を自動的に設定するために使用するファイルです。

レンディション定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc¥mime.properties

レンディション定義ファイルは、必要に応じてカスタマイズして使用できます。ただし、レンディション定義ファイルをカスタマイズした場合は、その内容を反映するためにアプリケーションサーバの再起動が必要です。

また、レンディション定義ファイルの内容は、添付ファイル操作機能用プロパティファイルの設定内容と合わせてください。添付ファイル操作機能用プロパティファイルの詳細については、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

なお、レンディション定義ファイルに定義していない拡張子を持つファイルを登録する場合、または拡張子を持たないファイルを登録する場合は、「application/octet-stream」が適用されます。

(1) レンディション定義ファイルの記述形式

拡張子 = レンディションタイプ

- レンディションタイプは、MIME 形式で指定します。ただし、先頭の「MIME::」省略して指定してください。
- 複数の拡張子に同じレンディションタイプを割り当てる場合も、拡張子ごとに 1 列ずつ、同じレンディションタイプを指定してください。
- Java のプロパティファイルの記述形式に従います。
- Unicode 文字で記述してください。

(2) レンディション定義ファイルの記述例

```
txt = text/plain  
htm = text/html  
html = text/html
```

(3) レンディション定義ファイルの注意事項

複数の File Sharing クライアントでシステムを構築する場合、すべての File Sharing クライアントでレンディション定義ファイルの内容を一致させておく必要があります。レンディション定義ファイルの内容が不一致の場合、File Sharing サーバに登録されるファイルの形式に関する情報が、使用する File Sharing クライアントごとに異なってしまいます。

5.3.4 動作環境定義ファイル (conf.properties)

File Sharing クライアントの動作については、動作環境定義ファイルに定義します。動作環境定義ファイルには、デフォルトの文書空間識別子およびトレースファイルに関する情報が定義できます。

動作環境定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc¥conf.properties

動作環境定義ファイルは、環境に応じて編集してください。なお、動作環境定義ファイルは J2EE サーバの起動時に一度だけ参照されます。ポートレットの動作中に動作環境定義ファイルを編集した場合は、その内容をポートレットに反映するために J2EE サーバを再起動してください。

(1) 動作環境定義ファイルの記述形式

キー名称 = 値

- Java のプロパティファイルの記述形式に従います。
- Unicode 文字で記述してください。ただし、ディレクトリのパスを指定する個所では、印刷可能な ASCII コードで記述してください。

(2) 動作環境定義ファイルの詳細

以降、動作環境定義ファイルに指定するプロパティについて説明します。

(a) File Sharing サーバへの接続時に必要な文書空間識別子 (DefaultDocSpaceId)

File Sharing サーバへの接続時に必要な文書空間識別子を、8 けた-4 けた-4 けた-4 けた-12 けたの文字列で指定します。指定を省略した場合、「673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d」が仮定されます。

(b) トレース出力ディレクトリのパス (TracePath)

トレース出力ディレクトリのパスを、印刷可能な ASCII コードで指定します。

指定を省略した場合、「{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥log」が仮定されます。

なお、トレースファイル名は「DBJComTrace0xPID_NO.log」です。「PID」はプロセス識別子で、「NO」はファイル通番です。

(c) トレースの切り替えファイル数 (TraceNumber)

トレースファイルのサイズが上限を超えた場合に、切り替えるファイルの数を 1~16 の範囲の数値で指定します。切り替えるファイルの数の上限を超えると、最初のファイルに戻って出力されます。このとき、ファイルは上書きされます。

指定を省略した場合、2 が仮定されます。

(d) トレースファイルの最大サイズ (TraceSize)

トレースファイルの最大サイズを 4,096~2,147,483,647 (バイト) の範囲の数値で指定します。

指定を省略した場合、1,000,000 が仮定されます。

(e) AP トレースおよびコマンドトレースの出力ディレクトリのパス (APTracePath)

次に示すトレースおよびエラーログが出力されるディレクトリのパスを指定します。印刷可能な ASCII コードで、260 バイト以内で指定してください。

- [ファイル共有] ポートレットおよび [ファイル共有設定] ポートレットが出力する AP トレースおよび AP エラーログ
- File Sharing クライアント運用コマンドが出力するコマンドトレースおよびコマンドエラーログ

指定を省略した場合、または不正なパスが指定された場合は、「{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥log」が仮定されます。

トレースまたはエラーログのファイル名は次のとおりです。「PID」はプロセス識別子、「NO」はファイル通番を示します。

- AP トレース：CfsAPTrase0xPID_NO.log
- AP エラーログ：CfsAPTraseErr0xPID_NO.log
- コマンドトレース：CfsCMDTracePID_NO.log
- コマンドエラーログ：CfsCMDTraceErrPID_NO.log

(f) AP トレースおよびコマンドトレースの出力レベル (APTraceLevel)

次に示す出力情報の出力レベルを 0~30 の範囲の数値で指定します。

- [ファイル共有] ポートレットおよび [ファイル共有設定] ポートレットが出力する AP トレース
- File Sharing クライアント運用コマンドが出力するコマンドトレース
- J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力

[ファイル共有] ポートレットおよび [ファイル共有設定] ポートレットが出力する AP トレースと、File Sharing クライアント運用コマンドが出力するコマンドトレースの出力レベルの指定は共通です。

指定を省略した場合、または不正な値が指定された場合は、10 が仮定されます。

出力レベルと出力情報を次の表に示します。

表 5-19 AP トレースの出力レベルと出力情報

種別	APTraceLevel の 指定値	トレースレ ベル	出力情報
AP トレースおよ びコマンドトレ ース	0~9	ERROR	<ul style="list-style-type: none"> すべてのエラー
	10~19	MANAGE	<ul style="list-style-type: none"> トレースレベルが「ERROR」の場合の出力情報 内部処理の呼び出し/リターン 重要な内部メソッドの入口/出口
	20~29	HINT	<ul style="list-style-type: none"> トレースレベルが「MANAGE」の場合の出力情報 下位の内部メソッドのエラー 外部から与えられたデータ 重要な引数
	30	DEBUG	<ul style="list-style-type: none"> トレースレベルが「HINT」の場合の出力情報 内部メソッドの入口・出口 引数
J2EE サーバの起 動プロセス標準出 力または標準エ ラー出力	0~9	ERROR	<ul style="list-style-type: none"> [ファイル共有] ポートレットの開始/終了 [ファイル共有] ポートレットのユーザが対処できないエラー
	10~19	MANAGE	<ul style="list-style-type: none"> トレースレベルが「ERROR」の場合の出力情報
	20~29	HINT	<ul style="list-style-type: none"> トレースレベルが「MANAGE」の場合の出力情報 重要な内部メソッドの入口/出口 外部から与えられたデータ
	30	DEBUG	<ul style="list-style-type: none"> トレースレベルが「HINT」の場合の出力情報

(g) AP トレースおよびコマンドトレースの切り替えファイル数 (APTraceNumber)

[ファイル共有] ポートレットおよび [ファイル共有設定] ポートレットが出力する AP トレースファイルのサイズ、および File Sharing クライアント運用コマンドが出力するコマンドトレースファイルのサイズが上限を超えた場合に、切り替えるファイルの数を 0~16 の範囲の数値で指定します。

0 を指定した場合は、AP トレースおよびコマンドトレースは出力されません。切り替えるファイルの数の上限を超えると、最初のファイルに戻って出力されます。このとき、ファイルは上書きされます。

指定を省略した場合、または不正な値が指定された場合は、2 が仮定されます。

(h) AP トレースファイルおよびコマンドトレースファイルの最大サイズ (APTraceSize)

[ファイル共有] ポートレットおよび [ファイル共有設定] ポートレットが出力する AP トレースファイル、および File Sharing クライアント運用コマンドが出力するコマンドトレースファイルの最大サイズを 4,096~2,147,483,647 (バイト) の範囲の数値で指定します。

指定を省略した場合、または不正な値が指定された場合は、1,000,000 が仮定されます。

(i) AP エラーログおよびコマンドエラーログの切り替えファイル数 (APErrorLogNumber)

[ファイル共有] ポートレットおよび [ファイル共有設定] ポートレットが出力する AP エラーログ、および File Sharing クライアント運用コマンドが出力するコマンドエラーログのファイルサイズが上限を超え

た場合に、切り替えるファイルの数を 1～16 の範囲の数値で指定します。切り替えるファイルの数の上限を超えると、最初のファイルに戻って出力されます。このとき、ファイルは上書きされます。

指定を省略した場合、または不正な値が指定された場合は、2 が仮定されます。

(j) AP エラーログおよびコマンドエラーログの最大サイズ (APErrorLogSize)

[ファイル共有] ポートレットおよび [ファイル共有設定] ポートレットが出力する AP エラーログ、および File Sharing クライアント運用コマンドが出力するコマンドエラーログの最大サイズを 4,096～2,147,483,647 (バイト) の範囲の数値で指定します。

指定を省略した場合、または不正な値が指定された場合は、1,000,000 が仮定されます。

(k) J2EE サーバの起動プロセス標準出力および標準エラー出力の出力先 (PromptOutput)

J2EE サーバの起動プロセス標準出力の出力先を指定します。

- STDOUT
標準出力に出力されます。
- STDERR
標準エラー出力に出力されます。

指定を省略した場合、または「STDOUT」、「STDERR」以外の値が指定された場合は、「STDOUT」が仮定されます。

5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)

環境設定用プロパティファイルは、Collaboration システムの中で File Sharing クライアントのポートレット機能が動作するために必要なファイルです。

環境設定用プロパティファイルには、File Sharing 固有のプロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) と共通プロパティファイル (hptl_clb_ccu.properties) の 2 種類があります。ここでは、File Sharing 固有のプロパティファイルについて説明します。共通プロパティファイルについては、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

環境設定用プロパティファイルは J2EE サーバの起動時に一度だけ参照されます。ポートレットの動作中にプロパティファイルを変更する場合は、その内容をポートレットに反映するために J2EE サーバを再起動してください。

File Sharing 固有のプロパティファイルのサンプルファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥conf¥hptl_clb_cfs.properties

このファイルを編集したあと、次に示すディレクトリにコピーして使用してください。

{Collaboration Portal インストールディレクトリ}¥clb_home¥conf

(1) 環境設定用プロパティファイルの記述形式

キー名称 = 値

- Java のプロパティファイルの記述形式に従います。

- Unicode 文字で記述してください。ただし、ディレクトリのパスを指定する箇所では、印刷可能な ASCII コードで記述してください。
- 行の終端は改行コードです。
- # (シャープ) で始まる行は、コメント行と見なされます。
- 値が存在しない行を指定した場合、その行は無視されます。
- 値の後ろには、空白やコメントなどの文字列を追加できません。追加した場合、不正な値と解釈されます。
- プロパティファイルにパスを指定する方法については、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

(2) 環境設定用プロパティファイルの詳細

以降、環境設定用プロパティファイルに指定するプロパティについて説明します。

(a) セキュリティ管理者 (hptl_clb_cfs_SecurityAdministratorID)

セキュリティ管理者の権限を持つユーザ ID、つまり、セキュリティ定義ファイルで定義しているユーザ ID を 254 バイト以内で指定します。セキュリティ定義ファイルについては、「5.2.4 セキュリティ定義ファイル (docaccess.ini)」を参照してください。

この指定は省略できません。

セキュリティ管理者の権限を持つユーザ ID が複数ある場合は、そのうちの一つを選択して指定します。なお、指定したユーザ ID がセキュリティ管理者の権限を持つかどうかはチェックされません。セキュリティ管理者の詳細は、「3.5.2 セキュリティ管理者の定義」を参照してください。

また、このキーに兼任ユーザのユーザ ID を指定しないでください。兼任ユーザのユーザ ID を指定した場合の動作は保証しません。

ここに指定したユーザ ID で、次に示す操作を実行します。

- コミュニティルートフォルダおよびワークプレースルートフォルダの作成・削除
- File Sharing クライアント運用コマンド

(b) ファイル/フォルダ一覧などのページ当たりの表示件数 (hptl_clb_cfs_numOfObjectList)

次に示す一覧の 1 ページ当たりの表示件数を 5~100 の範囲の数値で指定します。

- ファイル/フォルダ一覧
- ベースパス情報一覧
- 最大許容サイズ情報一覧
- ロックファイル一覧

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は 20 です。この指定は省略できません。範囲外の値を指定すると、1 ページ当たり 20 件で一覧表示されます。

なお、この指定値は、Collaboration を利用する全ユーザに適用されます。表示件数をユーザごとに設定することはできません。

(c) コンポーネント間データ転送時のダウンロード用一時ディレクトリ (hptl_clb_cfs_ReadFileDir)

コンポーネント間データ転送時のダウンロード用一時ディレクトリを、印刷可能な ASCII コードで指定します。

指定したディレクトリを作成できない場合、または指定を省略した場合は、「{Cosminexus のインストールディレクトリ}¥CC¥server¥public¥ejb¥J2EE サーバ名称¥コンテキストルート名称¥temp」が仮定されます。

このキーの指定値は、J2EE サーバの起動時、およびコンポーネント間のデータ転送時に参照されます。

(d) ポートレット機能使用時のダウンロード用一時ディレクトリ (hptl_clb_cfs_DownloadDocDir)

ポートレット機能使用時のダウンロード用一時ディレクトリを、印刷可能な ASCII コードで指定します。

指定したディレクトリを作成できない場合、または指定を省略した場合は、「{Cosminexus のインストールディレクトリ}¥CC¥server¥public¥ejb¥J2EE サーバ名称¥コンテキストルート名称¥temp」が仮定されます。

このキーの指定値は、J2EE サーバの起動時、およびポートレット機能を使用したファイルのダウンロード時に参照されます。

(e) ベースパス情報の空き容量がない場合の動作 (hptl_clb_cfs_AssignmentModeForNoFreeSpace)

最大許容サイズを設定した運用で、デフォルト以外のベースパス情報を設定するルートフォルダを作成しようとした場合に、ベースパス情報の最大予約可能容量に対する空き容量がないときの動作を指定します。

次のどちらかを指定してください。

- default

最大予約可能容量に対する空き容量がないときに、デフォルトのベースパス情報を設定します。

- alert

最大予約可能容量に対する空き容量がないときはエラーになり、ルートフォルダを作成できません。

「alert」を設定した場合に出力されるメッセージについて、次に示します。

- 個人ルートフォルダの場合、KDCF00029-E のメッセージが出力されます。
- ワークプレースルートフォルダの場合、KDCF00028-E のメッセージが出力されます。
- グループルートフォルダの場合、KDCF20008-E のメッセージが出力されます。

キーの指定を省略した場合、またはキーに対する設定値を省略した場合は、「default」が設定されます。

「default」および「alert」以外を指定した場合、エラーとなり、ルートフォルダは作成できません。エラーになる場面と出力されるメッセージについて、次に示します。

- J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。
- 個人ルートフォルダまたはコミュニティルートフォルダを作成しようとしたとき、KDCF00032-E のメッセージが出力されます。
- グループルートフォルダを作成しようとしたとき、KDCF20041-E のメッセージが出力されます。

最大許容サイズを設定した運用については、「6.2.3(1) 最大許容サイズを設定した運用の考え方」を参照してください。メッセージの詳細について、メッセージ ID が「KDCF000」で始まるメッセージについては、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。また、メッセージ

ID が「KDCF200」で始まるメッセージについては、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

(f) 使用するベースパス情報の使用数が上限値の場合の動作
(hptl_clb_cfs_AssignmentModeForUsedCountMax)

ルートフォルダを作成しようとしたときに、ベースパスを設定するデフォルト以外のベースパス情報で、使用数が上限値に達しているときの動作を指定します。

次のどちらかを指定してください。

- default

使用数が上限値に達している場合に、デフォルトのベースパス情報を設定します。

- alert

使用数が上限に達している場合はエラーになり、ルートフォルダを作成できません。「alert」を設定した場合に出力されるメッセージについて、次に示します。

- 個人ルートフォルダの場合、KDCF00029-E のメッセージが出力されます。
- ワークプレースルートフォルダの場合、KDCF00028-E のメッセージが出力されます。
- グループルートフォルダの場合、KDCF20008-E のメッセージが出力されます。

キーの指定を省略した場合、またはキーに対する設定値を省略した場合は、「default」が設定されます。

「default」および「alert」以外を指定した場合、エラーとなり、ルートフォルダは作成できません。エラーになる場面と出力されるメッセージについて、次に示します。

- J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。
- 個人ルートフォルダまたはコミュニティルートフォルダを作成しようとしたとき、KDCF00032-E のメッセージが出力されます。
- グループルートフォルダを作成しようとしたとき、KDCF20041-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細について、メッセージ ID が「KDCF000」で始まるメッセージについては、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。また、メッセージ ID が「KDCF200」で始まるメッセージについては、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

(g) ファイル/フォルダ一覧などの表示結果の取得件数 (hptl_clb_cfs_FetchModeForTotalObjectList)

ファイル/フォルダ一覧、ベースパス情報一覧、最大許容サイズ情報一覧、ロックファイル一覧および検索結果一覧に表示される結果を、すべて取得するかどうかを指定します。

次のどちらかを指定してください。

- all

一覧に表示されるすべての結果を取得します。

- defined

一覧に表示される結果を 200 件まで取得します。取得できる結果が 200 件以上ある場合、一覧で 201 件目以上を参照できません。

キーの指定を省略した場合、またはキーに対する設定値を省略した場合は、「defined」が設定されます。

「all」および「defined」以外を指定した場合は、「defined」が設定されます。ただし、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(h) ベースパス情報の最大使用可能容量のしきい値 (hptl_clb_cfs_ADThresholdForMaxUsableSpace)

ベースパス情報の最大使用可能容量のしきい値となる割合を 1~100 の範囲の数値で指定します。指定する数値の単位は%です。

ベースパス情報に対する使用量が、指定したしきい値を超えている場合は、[プロパティ設定] 画面を表示したとき、ベースパス情報の取得コマンド (cfslstad) を実行したとき、またはベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) を実行したときに、警告が表示されます。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は 100 です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、100 が仮定されます。

ただし、範囲外の値を指定した場合は、エラーとなります。エラーになる場面と出力されるメッセージについて、次に示します。

- J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。
- ベースパス情報の取得コマンド (cfslstad) またはベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) を実行したとき、KDCF20041-E のメッセージが出力されます。

(i) 検索結果のページ当たりの表示件数 (hptl_clb_cfs_numOfObjectListForSearchWindow)

検索結果一覧の 1 ページ当たりの表示件数を 5~200 の範囲の数値で指定します。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は 100 です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、1 ページ当たり 100 件で一覧表示されます。

ただし、範囲外の値を指定した場合は、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

なお、この指定値は、Collaboration を利用する全ユーザに適用されます。表示件数をユーザごとに設定することはできません。

(j) 検索のタイムアウト時間 (hptl_clb_cfs_searchTimeOut)

検索処理のタイムアウト時間を 0~180,000 の範囲で指定します。指定する数値の単位はミリ秒です。

検索の実行中にタイムアウト時間に達した場合は、検索が中断され、中断するまでの検索結果が検索結果一覧に表示されます。

タイムアウトしないように設定する場合は、0 を指定します。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は 8,000 です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、8,000 が仮定されます。

ただし、範囲外の値を指定した場合は、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(k) [ファイル共有] ポートレットでの [ファイルの新規登録] および [ファイルの更新] の操作で扱えるファイルサイズの上限 (hptl_clb_cfs_UploadMaxFileSize)

[ファイル共有] ポートレットでの [ファイルの新規登録] および [ファイルの更新] の操作で扱えるファイルサイズの上限を、1~512 の範囲の整数値で指定します。単位は MB です。

このキーに指定する値は、キー「hptl_clb_cfs_CheckPointOfFileSize」に「before」または「after」のどちらを指定するか考慮して決めてください。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は 100 です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、100 が仮定されます。

ただし、範囲外の値を指定した場合は、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(l) [ファイル共有] ポートレットでの [ファイルの新規登録] および [ファイルの更新] の操作時にファイルサイズをチェックするタイミング (hptl_clb_cfs_CheckPointOfFileSize)

[ファイル共有] ポートレットでの [ファイルの新規登録] および [ファイルの更新] の操作時に、ファイルサイズが上限値を超えていないかどうかをチェックするタイミングを指定します。

次のどちらかを指定してください。指定値の大文字・小文字は区別されません。

- before

アプリケーションサーバが [ファイル共有] ポートレットからファイルデータを受信する前に、ファイルサイズを含めたリクエストのメッセージボディのサイズをチェックします。ファイルデータを受信する前にチェックすることで、「after」を指定した場合に比べて、ユーザに対して早くエラーを通知できます。

- after

アプリケーションサーバが [ファイル共有] ポートレットからファイルデータを受信したあとに、ファイルサイズをチェックします。ファイルデータを受信したあとにチェックすることで、ファイルサイズだけをチェックします。ただし、「before」を指定した場合に比べて処理時間が長くなります。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「before」です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「before」が仮定されます。ただし、「before」および「after」以外の値を指定した場合は、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

なお、アプリケーションサーバで使用する Web サーバとして Internet Information Services を使用している場合は、「after」を指定することを推奨します。

(m) アクセス履歴の出力 (hptl_clb_cfs_AccessData)

[ファイル共有] ポートレットのアクセス履歴を出力するかどうかを指定します。

次のどちらかを指定してください。指定値の大文字・小文字は区別されません。

- on
アクセス履歴を出力します。
- off
アクセス履歴を出力しません。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「off」です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「off」が仮定されます。ただし、「on」および「off」以外の値を指定した場合は、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(n) アクセス履歴ファイルの出力先ディレクトリ (hptl_clb_cfs_AccessDataPath)

[ファイル共有] ポートレットのアクセス履歴について、アクセス履歴ファイルの出力先ディレクトリのパスを印刷可能な ASCII コードで指定します。指定したディレクトリが存在しない場合は、ディレクトリが作成されます。

このキーは、キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合だけ有効になります。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値はありません。

キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合、このキーの指定を省略したとき、キーに対する設定値を省略したとき、または指定したディレクトリが作成できないときは、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00101-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(o) アクセス履歴ファイルが使用できるディスク容量 (hptl_clb_cfs_AccessDataSize)

[ファイル共有] ポートレットのアクセス履歴について、アクセス履歴ファイルが使用できるディスク容量のサイズを 10,485,760 (10MB) ~ 2,147,483,647 (2GB) の範囲の数値で指定します。指定する数値の単位はバイトです。

このキーは、キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合だけ有効になります。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は 10,485,760 です。

キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合、このキーの指定を省略したとき、キーに対する設定値を省略したとき、または範囲外の値を指定したときは、10,485,760 が仮定されます。

(p) アクセス履歴を出力するユーザの操作 (hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption)

[ファイル共有] ポートレットのアクセス履歴について、アクセス履歴を出力するユーザの操作およびシステムの処理を指定します。

このキーは、キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合だけ有効になります。

このキーに指定できる値を次に示します。複数の値を組み合わせるには、半角の「|」（ストローク）で値を区切ります。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- ALL
ユーザのすべての操作を出力対象にします。次のように指定した場合と同じになります。
CT_FR_REF | CT_FL_REF | CT_FR_MOD | CT_FL_MOD
- CT_FR_REF
フォルダの参照系の操作を出力対象にします。
- CT_FL_REF
ファイルの参照系の操作を出力対象にします。
- CT_FR_MOD
フォルダの更新系の操作を出力対象にします。
- CT_FL_MOD
ファイルの更新系の操作を出力対象にします。
- CT_FL_DEL
ファイルの削除操作を出力対象にします。
- CT_FL_DL
ファイルのダウンロード操作を出力対象にします。
- CT_FL_SYS_DEL
システム（File Sharing クライアント）が実行したファイルの削除処理を出力対象にします。

ファイルの更新系の操作にはファイルの削除操作およびファイルのダウンロード操作も含まれます。CT_FL_MOD を指定した場合、CT_FL_DEL および CT_FL_DL を指定する必要はありません。ファイルの削除操作だけを出力したい場合に CT_FL_DEL を指定し、ファイルのダウンロード操作だけを出力したい場合に CT_FL_DL を指定します。

複数の値を指定する場合、「|」（ストローク）の前後の半角スペースは無視されます。また、同じ値を複数指定した場合、二つ目以降の値は無視されます。

例えば、フォルダの更新系の操作、およびファイルの更新系の操作を出力したい場合は、次のように指定します。

指定例

```
hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption = CT_FR_MOD | CT_FL_MOD
```

フォルダまたはファイルの参照系、更新系の操作の詳細は、「7.11 アクセス履歴の取得」を参照してください。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「ALL」です。キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合、このキーの指定を省略したとき、キーに対する設定値を省略したとき、または範囲外の値を指定したときは、「ALL」が仮定されます。

(q) アクセス履歴を出力するユーザの操作 2 (hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption2)

[ファイル共有] ポートレットのアクセス履歴について、アクセス履歴を出力するユーザの操作およびシステムの処理を指定します。

このキーは、キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合だけ有効になります。

このキーに指定できる値を次に示します。複数の値を組み合わせて指定するには、半角の「|」（ストローク）で値を区切ります。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- ALL
ユーザのすべての操作を出力対象にします。次のように指定した場合と同じになります。
CT_FR_REF | CT_FL_REF | CT_FR_MOD | CT_FL_MOD
- CT_FR_REF
フォルダの参照系の操作を出力対象にします。
- CT_FL_REF
ファイルの参照系の操作を出力対象にします。
- CT_FR_MOD
フォルダの更新系の操作を出力対象にします。
- CT_FL_MOD
ファイルの更新系の操作を出力対象にします。
- CT_FL_DEL
ファイルの削除操作を出力対象にします。
- CT_FL_DL
ファイルのダウンロード操作を出力対象にします。
- CT_FL_SYS_DEL
システム（File Sharing クライアント）が実行したファイルの削除処理を出力対象にします。

ファイルの更新系の操作にはファイルの削除操作およびファイルのダウンロード操作も含まれます。CT_FL_MOD を指定した場合、CT_FL_DEL および CT_FL_DL を指定する必要はありません。ファイルの削除操作だけを出力したい場合に CT_FL_DEL を指定し、ファイルのダウンロード操作だけを出力したい場合に CT_FL_DL を指定します。

複数の値を指定する場合、「|」（ストローク）の前後の半角スペースは無視されます。また、同じ値を複数指定した場合、二つ目以降の値は無視されます。

例えば、フォルダの更新系の操作、およびファイルの更新系の操作を出力したい場合は、次のように指定します。

指定例

```
hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption2 = CT_FR_MOD | CT_FL_MOD
```

フォルダまたはファイルの参照系、更新系の操作の詳細は、「7.11 アクセス履歴の取得」を参照してください。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値はありません。キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合、このキーの指定を省略したとき、キーに対する設定値を省略したとき、または範囲外の値を指定したときは、このプロパティは無視されます。

(r) アクセス履歴のアクセス履歴ファイルへの出力方法 (hptl_clb_cfs_AccessDataStartMode)

J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットのアクセス履歴をはじめて出力するときのアクセス履歴ファイルへの出力方法を指定します。

このキーは、キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合だけ有効になります。

次のどちらかを指定してください。指定値の大文字・小文字は区別されません。

- add

すでに出力されているアクセス履歴ファイルのうち、作成日時が最新のアクセス履歴ファイルにアクセス履歴を追加します。

すでに出力されているアクセス履歴ファイルがない場合は、通番が 1 のアクセス履歴ファイル (hptl_clb_cfs_ac_1.log) にアクセス履歴を出力します。

- new

通番が 1 のアクセス履歴ファイル (hptl_clb_cfs_ac_1.log) にアクセス履歴を出力します。

また、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、キー「hptl_clb_cfs_AccessDataPath」に指定した出力ディレクトリに存在するアクセス履歴ファイルが削除されます。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「add」です。キー「hptl_clb_cfs_AccessData」に「on」を指定した場合、このキーの指定を省略したとき、キーに対する設定値を省略したとき、または範囲外の値を指定したときは、「add」が仮定されます。

(s) 個人フォルダのファイルまたはフォルダ作成時のアクセス権の初期状態 (hptl_clb_cfs_PersonalInheritPerm)

[ファイル共有] ポートレットの操作で個人フォルダにファイルまたはフォルダを作成時に、ファイルまたはフォルダに設定されるアクセス権の初期状態を指定します。アクセス権の初期状態として、親フォルダのアクセス権を引き継ぐかどうかを指定できます。

このプロパティで指定した初期状態が、システムの既定値になります。システムの既定値は、ユーザが [設定] 画面の [全般] タブで [システムの設定に従う] チェックボックスをチェックしているときに有効になります。

次のどちらかを指定してください。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- on

ファイルまたはフォルダの作成時に、親フォルダのアクセス権を引き継ぎます。

- off

ファイルまたはフォルダの作成時に、親フォルダのアクセス権を引き継ぎません。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「off」です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「off」が仮定されます。

(t) [ユーザ追加] 画面の初期状態 (hptl_clb_cfs_UserAddWinSelTab)

[ファイル共有] ポートレットで [ユーザ追加] 画面を表示したときに、選択されているタブの初期状態を指定します。

このプロパティで指定した初期状態が、システムの既定値になります。システムの既定値は、ユーザが [設定] 画面の [全般] タブで [システムの設定に従う] チェックボックスをチェックしているときに有効になります。

次のどれかを指定してください。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- **addresslist**
[宛先台帳] タブが選択された状態で、[ユーザ追加] 画面を表示します。
- **community**
[コミュニティ] タブが選択された状態で、[ユーザ追加] 画面を表示します。
- **searchusers**
[ユーザ検索] タブが選択された状態で、[ユーザ追加] 画面を表示します。
- **enterdirectly**
[直接入力] タブが選択された状態で、[ユーザ追加] 画面を表示します。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「searchusers」です。次の場合は「searchusers」が仮定されます。

- キーの指定を省略した場合
- キーに対する設定値を省略した場合
- 範囲外の値を指定した場合
- [メール] ポートレットがデプロイされていない状態で「addresslist」を指定した場合

ただし、範囲外の値を指定した場合、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(u) **個人フォルダのファイルの配布 URL をメールで送信時の宛先の設定**
(`hptl_clb_cfs_SetPersonalPermForSendURL`)

[ファイル共有] ポートレットで、個人フォルダにあるファイルを選択し [URL をメールで送信] を実行して、配布 URL をメールで送信するときに、ファイルのアクセス権を設定したユーザをメールの宛先に指定するかどうかの初期状態を指定します。なお、アクセス権を設定したユーザをメールの宛先に指定できるのは、ファイルの配布 URL 一つをメールにはり付けた場合だけです。

次のどちらかを指定してください。指定値の大文字・小文字は区別されません。

- **on**
アクセス権を設定したユーザをメールの宛先に指定します。
- **off**
アクセス権を設定したユーザをメールの宛先に指定しません。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「off」です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「off」が仮定されます。ただし、範囲外の値を指定した場合、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(v) グループフォルダにおける下位のフォルダへのアクセス権の設定
(hptl_clb_cfs_GroupFolderPermSettingMode)

[ファイル共有] ポートレットの操作でグループフォルダに設定されたアクセス権の組織またはユーザを削除する場合の、下位のフォルダへのアクセス権設定方法を指定します。

次のどちらかを指定してください。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- topdown

上位フォルダから下位フォルダに向かってアクセス権を設定します。

アクセス権を設定したフォルダや、その下位のファイルおよびフォルダは、すべてのアクセス権の設定が完了したあと、操作できるようになります。

グループフォルダのアクセス権の設定がすべて完了したあとに、ファイルやフォルダを参照させたい場合に指定してください。

アクセス権の設定でエラーが発生した場合、設定前のアクセス権となります。

- bottomup

下位フォルダから上位フォルダに向かってアクセス権を設定します。アクセス権を設定したフォルダから操作できます。

グループフォルダのアクセス権の設定が完了したファイルやフォルダから参照させたい場合に指定してください。

アクセス権の設定でエラーが発生した場合、次に示す状態となります。

- エラーが発生するまでにアクセス権を設定したファイルおよびフォルダは、設定後のアクセス権となります。
- エラーが発生し、アクセス権を設定していないファイルおよびフォルダは、設定前のアクセス権となります。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「topdown」です。

キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「topdown」が仮定されます。ただし、範囲外の値を指定した場合、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(w) エクスポートコマンドでコンテンツデータファイルへ記述するコンテンツデータの最大数
(hptl_clb_cfs_ContentsMaxCount)

ファイルのエクスポートコマンド (cfsexpfile) を実行した場合に、コンテンツデータファイルへ記述できるコンテンツデータの最大数を指定します。1~10,000 の範囲で指定してください。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値はありません。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、2,000 が仮定されます。

(x) エクスポートコマンドのメッセージの通知単位 (hptl_clb_cfs_ContentsMessageCount)

ファイルのエクスポートコマンド (cfsexpfile) を実行した場合に、エクスポートの処理件数がこのキーの指定値に達するたびに、メッセージ KDCF20091-I が標準出力に出力されます。1~5,000 の範囲で指定してください。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値はありません。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、100 が仮定されます。

(y) エクスポートコマンドでコンテンツ格納ディレクトリに格納するコンテンツ数 (hptl_clb_cfs_ContentsUnitCount)

ファイルのエクスポートコマンド (cfsexpfile) を実行した場合に、コンテンツ格納ディレクトリに格納できるコンテンツ数を指定します。1~5,000 の範囲で指定してください。

「hptl_clb_cfs_ContentsMaxCount」より大きな値を指定した場合は、「hptl_clb_cfs_ContentsMaxCount」と同じ値が設定されます。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値はありません。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、100 が仮定されます。

(z) メールの振り分けルールの使用 (hptl_clb_cfs_MailSorting)

メールの振り分けルールを使用して、[メール] ポートレットで送受信したメールをフォルダに格納できるようにするかどうかを指定します。

次のどちらかを指定してください。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

• on

メールの振り分けルールを使用します。「on」を指定すると次のように画面の表示内容が変更されます。

- [設定] 画面の [ワークスペースごとの設定] タブおよび [レイアウトごとの設定] タブに、振り分けルールを設定したフォルダの表示に関する設定項目が表示されます。
- フォルダの [プロパティ全般] 画面に [振り分けルール] タブが表示されます。

• off

メールの振り分けルールを使用しません。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「off」です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「off」が仮定されます。ただし、範囲外の値を指定した場合、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されません。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(aa) 振り分けルールを設定したフォルダのファイル/フォルダ一覧での表示の初期状態 (hptl_clb_cfs_SetMailList)

振り分けルールを設定したフォルダの、ファイル/フォルダ一覧領域での表示方法の初期状態を設定します。

このプロパティで指定した初期状態が、システムの既定値になります。システムの既定値は、ユーザが [設定] 画面の [全般] タブで [システムの設定に従う] チェックボックスをチェックしているときに有効になります。

次のどちらかを指定してください。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- on

振り分けルールを設定したフォルダをファイル/フォルダ一覧領域に表示した場合、振り分けルールを設定したフォルダ用の項目（主題など）が表示されます。

- off

振り分けルールを設定したフォルダをファイル/フォルダ一覧領域に表示した場合、振り分けルールを設定していないフォルダと同じ項目が表示されます。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「off」です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「off」が仮定されます。ただし、範囲外の値を指定した場合、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されません。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(ab) ショートカットの使用 (hptl_clb_cfs_Shortcut)

フォルダへのショートカットを使用するかどうかを指定します。

次のどちらかを指定してください。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- on

フォルダへのショートカットを使用します。「on」を指定すると次のように画面の表示内容が変更されます。

- [ファイル共有] ポートレットの [オプション▼] メニューに [ショートカットへ追加] が表示されます。
- [フォルダの作成] 画面に [フォルダをショートカットへ追加] チェックボックスが表示されます。
- ナビゲーションビューに [ショートカット] が表示されます。

- off

フォルダへのショートカットは使用しません。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「off」です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「off」が仮定されます。ただし、範囲外の値を指定した場合、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されません。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

注意

指定値を「on」する場合は、事前に File Sharing サーバプロセス数を見直して下さい。「付録 G File Sharing サーバプロセス数の設定」を参照してください。

(ac) ごみ箱の使用 (hptl_clb_cfs_TrashCan)

ごみ箱を使用するかどうかを指定します。

次のどちらかを指定してください。なお、指定値の大文字・小文字は区別されません。

- on

ごみ箱を使用します。「on」を指定すると [ファイル共有設定] ポートレットに [オプション▼] メニューが表示されます。また、[ファイル共有] ポートレットに次の項目が表示されます。

- フォルダの [プロパティ全般] 画面の [ごみ箱の使用済みサイズ], [ごみ箱*] ドロップダウンリスト, および [ごみ箱の最大サイズ*] テキストボックス

- off

ごみ箱は使用しません。

環境設定用プロパティファイルの初期設定値は「off」です。キーの指定を省略した場合、キーに対する設定値を省略した場合、または範囲外の値を指定した場合は、「off」が仮定されます。ただし、範囲外の値を指定した場合、J2EE サーバを起動したあと、[ファイル共有] ポートレットに初めてアクセスしたとき、J2EE サーバの起動プロセス標準出力または標準エラー出力に KDCF00032-E のメッセージが出力されます。

メッセージの詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

運用開始後に、ごみ箱を使用するかどうかの設定を変更する場合は、「7.10 ごみ箱の設定」を参照してください。

(3) 環境設定用プロパティファイルの記述例

環境設定用プロパティファイルの記述例を次に示します。記述例の太字の個所を実行環境に応じて変更してください。

```

hptl_clb_cfs_SecurityAdministratorID = admin_user1
hptl_clb_cfs_numOfObjectList         = 20
hptl_clb_cfs_DAVServerName           = hostname
hptl_clb_cfs_DAVPortNumber           = 8888
hptl_clb_cfs_AssignmentModeForNoFreeSpace = alert
hptl_clb_cfs_AssignmentModeForUsedCountMax = alert
hptl_clb_cfs_FetchModeForTotalObjectList = all
hptl_clb_cfs_ADThresholdForMaxUsableSpace = 100
hptl_clb_cfs_numOfObjectListForSearchWindow = 100
hptl_clb_cfs_searchTimeout           = 8000
hptl_clb_cfs_UploadMaxFileSize       = 100
hptl_clb_cfs_CheckPointOfFilesize   = before
hptl_clb_cfs_AccessData              = off
#hptl_clb_cfs_AccessDataPath         =
#hptl_clb_cfs_AccessDataSize         =
#hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption =
#hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption2 =
#hptl_clb_cfs_AccessDataStartMode    =
hptl_clb_cfs_PersonalInheritPerm     = off
hptl_clb_cfs_UserAddWinSelTab        = searchusers
hptl_clb_cfs_SetPersonalPermForSendURL = off
#hptl_clb_cfs_HideItemToOpenWebFolder =
hptl_clb_cfs_GroupFolderPermSettingMode = topdown
#hptl_clb_cfs_ContentsMaxCount      =
#hptl_clb_cfs_ContentsMessageCount  =
#hptl_clb_cfs_ContentsUnitCount     =
hptl_clb_cfs_MailSorting             = off
hptl_clb_cfs_SetMailList            = off
hptl_clb_cfs_Shortcut                = off
hptl_clb_cfs_TrashCan                = off

```

5.3.6 実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini)

実行環境制御ファイルは、オブジェクト操作ツールの実行環境を定義するファイルです。-x CREATE オプションを指定して実行環境セットアップコマンド (dbrtoolsetup) を実行すると、次に示すディレクトリにサンプルファイルがコピーされます。

{オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリ}\etc\EDMOotCtrl.ini

オブジェクト操作ツールの実行環境に応じて編集して使用してください。

(1) 実行環境制御ファイルの記述形式

[セクション名]
エントリ名 = 値

- セクション名は、[] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定してから、次のセクション名を指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- エントリは、「エントリ名 = 値」の形式で指定します。
- エントリは、その値が数値か文字列かによって記述方法が異なります。
 - 数値の場合
任意の 10 進数を -2,147,483,648 ~ 2,147,483,647 の間で記述します。
 - 文字列の場合
指定できる文字列が限られている場合は、そのうちのどれかの文字列を記述します。任意の文字列を指定する場合は、1,039 バイト以内の文字列を「'」(シングルクォーテーション) で囲んで記述します。
- 同一名のエントリを複数指定した場合、最初に指定したセクションが有効になります。
- 印刷可能な ASCII コードで記述してください。
- [;] (セミコロン) または [#] (シャープ) で始まる行は、コメント行と見なされます。
- 空白行は無視されます。
- 行の終端は改行コードまたは EOF です。なお、改行コードは CR+NL (0x0d+0x0a) です。
- ファイルの終端は EOF です。

(2) 実行環境制御ファイルの詳細

実行環境制御ファイルは、次に示すセクションと各セクションに指定するエントリによって構成されます。

- [Session]セクション
- [Log]セクション
- [Output]セクション
- [Reference]セクション

以降、実行環境制御ファイルを構成する各セクションとセクションごとに指定するエントリについて説明します。

(a) [Session]セクション

このセクションには、File Sharing サーバの文書空間に接続するための情報を記述します。セクションを構成するエントリについて、次に説明します。なお、このセクションおよび各エントリの記述は省略できません。省略した場合は、オブジェクト操作ツールの実行時にエラーとなります。

DocSpaceId エントリ

接続先の File Sharing サーバの文書空間識別子を「|」（シングルクォーテーション）で囲んで記述します。

記述例

```
DocSpaceId = '673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d'
```

UserName エントリ

オブジェクト操作ツールの実行ユーザとして、セキュリティ管理者のユーザ名を「|」（シングルクォーテーション）で囲んで記述します。

記述例

```
UserName = 'user01'
```

Password エントリ

セキュリティ管理者が接続先の File Sharing サーバにログインするために使用するパスワードを「|」（シングルクォーテーション）で囲んで記述します。

Password エントリの内容は変更しないでください。提供されるファイルの内容をそのまま使用してください。

(b) [Log]セクション

このセクションには、オブジェクト操作ツールを実行するときに出力されるコマンド実行ログを制御する情報を記述します。セクションを構成するエントリについて、次に説明します。なお、このセクションを省略した場合、各エントリの値はデフォルト値が仮定されます。

Level エントリ

コマンド実行ログの出力レベルを指定します。指定した出力レベルによってコマンド実行ログに出力する出力ログ情報を調節します。

取得される情報の詳細については、「9.1.7 オブジェクト操作ツールのコマンド実行ログ」を参照してください。なお、指定を省略した場合、None が仮定されます。不正な値が指定されている場合は、オブジェクト操作ツールの実行時にエラーとなります。

出力レベルによる出力ログ情報を次の表に示します。

表 5-20 コマンド実行ログの出力レベルと出力ログ情報

出力レベル	出力ログ情報
None	出力なし
Write	<ul style="list-style-type: none"> セッションの確立・切断 オブジェクトの作成・削除 プロパティの設定
Read	<ul style="list-style-type: none"> 出力レベルが「Write」の場合の出力ログ情報 プロパティの取得 問い合わせの実行および結果の取得
Error	<ul style="list-style-type: none"> 出力レベルが「Read」の場合の出力ログ情報 エラー

記述例

```
Level = Read
```

FileCount エントリ

コマンド実行ログを出力するファイルサイズの上限を超えた場合に、切り替えるファイルの数を、2～16の間で記述します。

出力ファイル名は「出力ファイル名プリフィックス_NO.log」で、「出力ファイル名プリフィックス」は Prefix エントリの指定値を示し、「NO」は出力ファイル通番を示します。出力ファイル通番とは、1～FileCount エントリに指定した数（出力ファイル数）です。

コマンド実行ログは、出力ファイル通番が1のファイルから順番に出力されます。あるファイルにコマンド実行ログを出力する場合に、ファイルサイズが FileSize エントリに指定した出力ファイルサイズよりも大きくなると、出力ファイル通番が一つ大きいファイルに出力します。例えば、出力ファイル通番が1であるファイルにコマンド実行ログを出力する場合に、このファイルのサイズの最大量を超えてしまうときは、ファイル出力通番が2のファイルにログを出力します。

FileCount エントリに指定した最大のファイル通番のファイルにコマンド実行ログを出力しようとして、そのファイルのファイルサイズが FileSize エントリに指定した出力ファイルサイズよりも大きくなってしまった場合、出力ファイル通番が1のファイルを初期化してログの出力を続けます。

指定を省略した場合、2が仮定されます。

このエントリで指定できる範囲外の値が指定されている場合は、デフォルト値が仮定されます。なお、数値として指定できる範囲外の値が指定されている場合は、オブジェクト操作ツールの実行時にエラーとなります。

記述例

```
FileCount = 4
```

FileSize エントリ

コマンド実行ログを出力するファイルサイズを 4,096～2,147,483,647（バイト）の間で記述します。デフォルトは 1,048,576 です。省略した場合は、デフォルト値が仮定されます。このエントリで指定できる範囲外の値が指定されている場合は、デフォルト値が仮定されます。なお、数値として指定できる範囲外の値が指定されている場合は、オブジェクト操作ツールの実行時にエラーとなります。

記述例

```
FileSize = 8192
```

Directory エントリ

コマンド実行ログの出力先ディレクトリを、「」(シングルクォーテーション)で囲んで記述します。デフォルトは、「{オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリ}%spool%aclog」です。省略した場合は、デフォルト値が仮定されます。不正な値が指定されている場合は、オブジェクト操作ツールの実行時にエラーとなります。

記述例

```
Directory = 'c:%home%user01%aclog'
```

Prefix エントリ

コマンド実行ログを出力するファイル名として使用するプリフィックスを、「」(シングルクォーテーション)で囲んで記述します。デフォルトは EDMOotAccess です。省略した場合は、デフォルト値が仮定されます。不正な値が指定されている場合は、オブジェクト操作ツールの実行時にエラーとなります。

記述例

```
Prefix= 'Tool'
```

(c) [Output]セクション

このセクションには、コマンドの実行結果の出力を制御するための情報を記述します。セクションを構成するエントリについて、次に説明します。なお、このセクションを省略した場合、各エントリの値はデフォルト値が仮定されます。

LineSize エントリ

コマンドの実行結果を出力するときに、1行当たりの出力サイズを記述します。1,022~2,147,483,645 (バイト) で記述します。デフォルトは 8,190 です。省略した場合は、デフォルト値が仮定されます。このエントリで指定できる範囲外の値が指定されている場合は、デフォルト値が仮定されます。なお、数値として指定できる範囲外の値が指定されている場合は、オブジェクト操作ツールの実行時にエラーとなります。

記述例

```
LineSize = 1048576
```

Format エントリ

一覧取得コマンドの出力形式を選択します。VR0200 または VR0112 を指定します。この指定によって、出力される情報量を選択できます。VR0200 を指定すると詳細な情報が出力され、VR0112 を指定すると簡略化された情報が出力されます。デフォルトは、VR0200 です。

指定する値の詳細は、「8.5.2(2) オブジェクト操作ツールのコマンドの実行結果」を参照してください。

記述例

```
Format = VR0200
```

(d) [Reference]セクション

このセクションには、ファイル実体の格納方法についての情報を記述します。セクションを構成するエントリについて、次に説明します。なお、このセクションを省略した場合、各エントリの値はデフォルト値が仮定されます。

DefaultReferenceType エントリ

ファイル実体の格納先とデータベースで管理する方法の種別 (リファレンス種別) のデフォルトを指定します。

指定できる値は「Relative」です。デフォルト値はありません。

Relative は、ファイル実体を任意のファイルシステム上のファイル保管領域に格納することを示す値です。また、データベースには、ファイル実体の格納先を示すパス情報が登録されます。登録されるパス情報は、ベースパスからの相対パスです。

DefaultContentBasePath エントリ

ファイル実体の格納先のデフォルトのベースパスを、「」 (シングルクォーテーション) で囲んで記述します。デフォルト値はありません。この指定は、コマンドのオプションでベースパスの指定を省略した場合に有効になります。

例えば、ファイル実体がベースパス「C:*dir01*userdir」ディレクトリ下の「user01」ディレクトリに登録されている場合は、ベースパスとして「C:*dir01*userdir」を「」 (シングルクォーテーション) で囲んで指定します。ベースパスは、UNC 形式でも指定できます。例えば、ベースパスをネットワーク上のマシン「SERVER01」下の共有ディレクトリ「userdir」を指定する場合は「*SERVER01*userdir」を「」 (シングルクォーテーション) で囲んで指定します。

なお、このエントリに指定するベースパスと、ファイルの属性情報として管理しているファイル実体格納先の相対パスは、結合されて絶対パスとして使用されます。ベースパスの末尾またはファイル実体格納先の相対パスの先頭にパスの区切り文字が存在しない場合は、File Sharing サーバによって区切り文字が挿入されます。このため、パスの区切り文字は指定しなくてもかまいません。

DefaultDeleteRootPath エントリ

ファイルを削除する場合に、ファイル実体の削除と同時にファイルを格納したディレクトリも削除するときに指定します。削除するディレクトリのルートパスのデフォルトを、「|」（シングルクォーテーション）で囲んで指定します。この指定は、コマンドのオプションで、削除ディレクトリのルートパス指定を省略した場合に有効になります。デフォルト値はありません。

DefaultContentBasePath エントリに指定するベースパスと同じパスを指定してください。

ContentDeleteMode エントリ

ファイルを削除するときに、ファイルの属性情報とファイル実体をまとめて削除するか、ファイルの属性情報だけを削除するかを指定します。このエントリに指定した値とコマンドの-k オプションの指定の組み合わせによって、ファイル実体が削除されるかどうかが決まります。

提供されるサンプルファイルで指定されている「Auto」のままで使用してください。なお、省略した場合のデフォルト値は「Specify」になります。

- Auto
コマンドで-k オプションの指定を省略した場合も、ファイル実体が削除されます。
- Specify
コマンドで-k オプションの指定を省略すると、ファイル実体が削除されません。

(3) 実行環境制御ファイルの記述例

-x CREATE オプションを指定して実行環境セットアップコマンドを実行した場合にコピーされる実行環境制御ファイルは次のとおりです。

[tab]はタブの制御文字を示します。

```
[Session]
DocSpaceId = '673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d'
UserName = 'user'
Password = '3[tab]0'

[Reference]
DefaultReferenceType = Relative
ContentDeleteMode = Auto
```

このファイルの太字の箇所を、それぞれのオブジェクト操作ツールの実行環境に応じて編集します。また、必要なエントリを追加してください。「UserName」は必ず編集してください。

実行環境制御ファイルの記述例を次に示します。

```
;; Session
[Session]
DocSpaceId = '673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d'
UserName = 'user'
Password = '3[tab]0'

;; Log
[Log]
Level = Read
FileCount = 4
FileSize = 8192
Directory = 'c:¥home¥user01¥ac log'
Prefix = 'Tool'

;; Output
[Output]
LineSize = 1048576
Format = VR0200

;; Reference
[Reference]
DefaultReferenceType = Relative
```

```
DefaultContentBasePath = '%%SERVER01%share%REFERENCE_AREA1'
DefaultDeleteRootPath = '%%SERVER01%share%REFERENCE_AREA1'
ContentDeleteMode = Auto
```

5.3.7 クライアントアプリケーション動作定義ファイル (application.ini)

クライアントアプリケーション動作定義ファイルは、File Sharing クライアントの動作を定義するファイルです。

クライアントアプリケーション動作定義ファイルのサンプルファイルの格納先とファイル名を次に示します。

```
{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}%Client%sample%application.ini
```

このファイルを編集したあと、次に示すディレクトリにコピーして使用してください。

なお、編集したファイルには、システム管理者が参照できる権限を設定してください。

```
{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}%Client%etc
```

(1) アプリケーション動作定義ファイルの記述形式

```
[セクション名]
  エントリ名 = 値
```

- セクション名は、[] (角括弧) で囲んで指定します。一つのセクションは、セクション名を指定してから、次のセクション名を指定するまで、またはファイルの終端までの範囲です。
- 同一名のセクションを複数指定した場合、最初に指定したセクションが有効になります。
- 指定できないセクションを指定した場合、その指定は無視されます。
- エントリは、「エントリ名 = 値」の形式で指定します。
- 値が存在しないエントリを指定した場合、そのエントリは無視されます。
- 各エントリの値として指定できるのは、1,023 バイトまでです。
- 各セクション内で同一名のエントリを複数指定した場合、最初に指定したセクションが有効になります。
- 指定できないエントリを指定した場合、その指定は無視されます。
- 印刷可能な ASCII コードで記述してください。
- 「;」 (セミコロン) で始まる行は、コメント行と見なされます。
- 空白行は無視されます。

(2) クライアントアプリケーション動作定義ファイルの詳細

クライアントアプリケーション動作定義ファイルは、[クライアントアプリケーションプロセス名]セクションと、セクションに指定するエントリによって構成されます。

- [cjstartsv]セクション

[ファイル共有] ポートレットの動作環境を設定します。

指定できるエントリを次に示します。

VBProperty エントリ

クライアントアプリケーションプロセス名で指定したプロセスの VisiBroker プロパティを指定します。指定できるプロパティについては、マニュアル「VisiBroker Version 5 Borland (R) Enterprise Server VisiBroker (R) プログラマーズリファレンス」を参照してください。

このエントリの指定は省略できません。このエントリの指定を省略した場合、または TPBroker が不正とみなす VisiBroker プロパティを指定した場合、File Sharing クライアントの操作時に KMBR03302-E のメッセージが出力されます。

(3) クライアントアプリケーション動作定義ファイルの記述例

アプリケーションサーバで Windows をログオフして運用する場合に必要な設定の記述例を次に示します。

```
[cjstartsv]
VBProperty = -Dvbroker.agent.port=14000 -Dvbroker.orb.isNTService=true
[httpsd]
VBProperty = -Dvbroker.agent.port=14000 -Dvbroker.orb.isNTService=true
```

5.3.8 File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)

File Sharing クライアントについて取得する障害情報の種類をカスタマイズする場合は、File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイルを編集します。

File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥etc¥getrascustom.ini

このファイルは、File Sharing クライアントの障害情報の取得コマンド (EDMGetRasCL) で、デフォルトで取得する情報以外に取得したい情報がある場合に指定します。デフォルトで取得する情報については、「8.4 File Sharing クライアントのコマンドの詳細」の「EDMGetRasCL (File Sharing クライアントの障害情報の取得)」を参照してください。

このファイルの記述内容については、File Sharing サーバの障害情報の取得コマンドで使用する getrascustom.ini と同じです。詳細については、「5.2.12 File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)」を参照してください。

また、File Sharing クライアントの障害情報の取得コマンド (EDMGetRasCL) で参照される getrascustom.ini を編集する場合、次の手順で編集してください。

1. getrascustom.ini をローカルディレクトリにコピーします。
2. コピーした getrascustom.ini を編集して保存します。
3. 編集が完了した getrascustom.ini を格納したディレクトリのフルパスを、環境変数 [_HIEDMS_GETRAS_INI] として設定します。

5.3.9 組織/ユーザ情報ファイル

組織/ユーザ情報ファイルは、グループフォルダの運用者とする組織 ID またはユーザ ID と、グループルートフォルダ以下を利用する組織 ID またはユーザ ID とそのアクセス権を定義するファイルです。CSV 形式で保存してください。

組織/ユーザ情報ファイルのファイル名は任意です。

(1) 組織/ユーザ情報ファイルの記述形式

"種別" , "値" , "値"...

- 値は「,」（コンマ）で区切って記述します。
- 「,」（コンマ）が含まれる値を指定する場合は、値を「"」（引用符）で囲んでください。
例えば、値に「A,B」を指定する場合、"A,B"と記述します。
- 「"」（引用符）が含まれる値を指定する場合は、「"」を「"'」として記述してください。
例えば、値に「A"B」を指定する場合、A"'Bと記述します。
- 指定する値を「"」（引用符）で囲む場合、「"」（引用符）で囲んだ文字列の次には、「,」（コンマ）または改行を記述してください。
- 「"」（引用符）以外の文字で始まる値を指定する場合、次に「"」（引用符）または「,」（コンマ）を記述するまでの文字または文字列が値と見なされます。

(2) 組織/ユーザ情報ファイルの詳細

CSV 形式で定義した組織/ユーザ情報ファイルの各行の 1 カラム目は、値の種別を指定します。1 カラム目に種別以外の値を指定すると、エラーになります。

種別ごとに、値の指定方法を次に示します。

MNGORG

グループフォルダの運用者の組織 ID を指定する行を示します。

値は、次の形式で指定します。

"MNGORG", "組織ID1", "組織ID2", ...

作成するグループルートフォルダ以下を運用する組織の組織 ID を、一つ以上指定します。複数の組織 ID を指定する場合は、「,」（コンマ）で区切ります。ただし、「,」（コンマ）の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

同じ組織 ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列（""）の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えた場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合
- 運用者に指定された組織とユーザの合計が 64 を超えた場合

MNGUSER

グループフォルダの運用者のユーザ ID を指定する行を示します。

値は、次の形式で指定します。

"MNGUSER", "ユーザID1", "ユーザID2", ...

作成するグループルートフォルダ以下を運用するユーザ ID を、一つ以上指定します。複数のユーザ ID を指定する場合は、「,」（コンマ）で区切ります。ただし、「,」（コンマ）の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

同じユーザ ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定されたものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列（""）の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えた場合

- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- 運用者に指定された組織とユーザの合計が 64 を超えた場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

ORG

グループフォルダを利用する組織の組織 ID およびアクセス権を指定する行を示します。

値は、次の形式で指定します。

"ORG", "組織ID1:アクセス権", "組織ID2:アクセス権", …

組織 ID と設定するアクセス権を一つ以上指定します。組織 ID とアクセス権は「:」（コロン）で区切ります。複数の組織 ID とアクセス権を指定する場合は、「,」（コンマ）で区切ります。ただし、「,」（コンマ）の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

アクセス権には、次のどちらかを指定します。

c：作成権+参照権

r：参照権

同じ組織 ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定されたものとして処理されます。

ただし、同じ組織 ID に異なるアクセス権を指定した場合は、先に指定した方が有効になります。

なお、「:」（コロン）およびアクセス権の指定を省略した場合、「r」が仮定されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列（""）の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えた場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合
- アクセス権に「c」および「r」以外を指定した場合
- アクセス権を付与する組織とユーザの合計が 64 を超えた場合

USER

グループフォルダを利用するユーザのユーザ ID およびアクセス権を指定する行を示します。

値は、次の形式で指定します。

"USER", "ユーザID1:アクセス権", "ユーザID2:アクセス権", …

作成するグループルートフォルダ以下を利用するユーザ ID とアクセス権を、一つ以上指定します。

ユーザ ID とアクセス権は「:」（コロン）で区切ります。複数のユーザ ID とアクセス権を指定する場合は、「,」（コンマ）で区切ります。ただし、「,」（コンマ）の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

アクセス権には、次のどちらかを指定します。

c：作成権+参照権

r：参照権

同じユーザ ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定されたものとして処理されます。

ただし、同じユーザ ID に異なるアクセス権を指定した場合は、先に指定した方が有効になります。

なお、「:」（コロン）およびアクセス権の指定を省略した場合、「r」が仮定されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列（""）の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えた場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- アクセス権に「c」および「r」以外を指定した場合

- アクセス権を付与する組織とユーザの合計が 64 を超えた場合
- 兼任機能を使用する設定で、兼任ユーザ ID を指定した場合

(3) 組織/ユーザ情報ファイルの記述例

組織/ユーザ情報ファイルの記述例を次に示します。

```
"MNGORG", "node1", "node2"  
"MNGUSER", "10333000"  
"ORG", "node1:r", "node2:r", "node11:r", "node21:r"  
"USER", "10333031:c", "10333032:c"
```


6

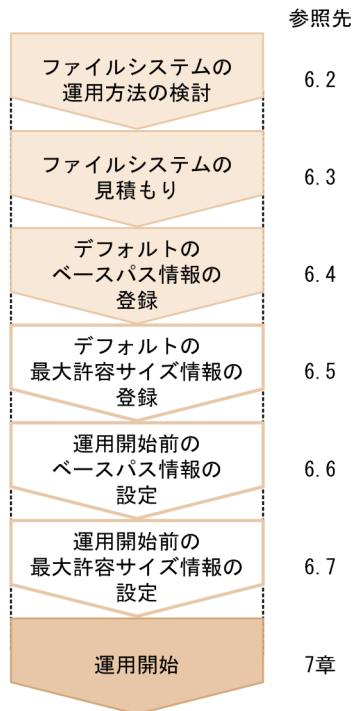
File Sharing の運用開始前の準備

この章では、File Sharing の運用開始前に必要な準備について説明します。




6.1 運用開始までの流れ

ここでは、File Sharing の運用開始前に必要な準備とその流れを説明します。

図 6-1 File Sharing の運用開始までの流れ



(凡例)

-  : 必ず実施します。
-  : 必要に応じて実施します。
-  : File Sharingの運用については、7章を参照してください。

- **ファイルシステムの運用方法の検討**
 ファイルシステムについて、ベースパス情報および最大許容サイズ情報を設定した運用方法を検討します。
- **ファイルシステムの見積もり**
 ベースパス情報に設定する最大使用可能容量、最大予約可能容量、およびファイルシステムのディスク容量を見積もります。
- **デフォルトのベースパス情報の登録**
 デフォルトのベースパス情報を登録します。この設定は、オブジェクト操作ツールを使用します。
- **デフォルトの最大許容サイズ情報の登録**
 最大許容サイズを設定する運用の場合は、デフォルトの最大許容サイズ情報を登録します。この設定は、オブジェクト操作ツールを使用します。
- **運用開始前のベースパス情報の設定**
 デフォルトのベースパス情報を登録したあと、File Sharing を使用する前にベースパス情報を設定します。この設定は、[ファイル共有設定] ポートレットから表示される画面を使用します。
- **運用開始前の最大許容サイズ情報の設定**

最大許容サイズを設定する運用の場合は、デフォルトの最大許容サイズ情報を登録したあと、File Sharing を使用する前に最大許容サイズ情報を設定します。この設定は、[ファイル共有設定] ポートレットから表示される画面を使用します。

6.2 ファイルシステムの運用方法の検討

File Sharing のシステムでは、ファイル実体をファイルシステム上で管理します。このため、管理するファイルの用途やファイルを使用するユーザに応じて、適切な容量を持つディスクにファイル実体を格納するように検討して運用する必要があります。

運用前の準備として、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、およびグループルートフォルダに対して割り当てるベースパスの設定を検討します。また、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、およびグループルートフォルダに設定する最大許容サイズ情報についても検討します。

6.2.1 ベースパス情報の検討

ベースパス情報を検討するために、ベースパス情報とは何か、ベースパス情報を設定する利点、およびベースパス情報を構成する項目について説明します。

(1) ベースパス情報とは

個人フォルダ、コミュニティフォルダ、またはグループフォルダに格納するファイルのファイル実体を、ファイルシステムのどのディレクトリに割り当てて格納するかを検討して、ベースパス情報として設定します。

システムを動作させるために必ず設定するベースパス情報は、次の 3 種類です。

- 個人ルートフォルダ用のデフォルトのベースパス情報
- ワークプレースルートフォルダ用のデフォルトのベースパス情報
- グループルートフォルダ用のデフォルトのベースパス情報

これらのベースパス情報は、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、またはグループルートフォルダを作成するとき、デフォルトの作成先として使用されます。

このほか、ベースパス情報は、個人ルートフォルダおよびワークプレースルートフォルダの場合、Collaboration - Directory Access から取得できる所属組織単位または役職単位で設定することもできます。例えば、「営業部のユーザの個人ルートフォルダで管理するファイル実体は¥¥DATA¥FILE1 に、それ以外のユーザの個人ルートフォルダで管理するファイル実体は¥¥DATA¥FILE2 に格納する」という運用をしたり、「課長の個人ルートフォルダで管理するファイル実体は H:¥に、主任の個人ルートフォルダで管理するファイル実体は I:¥AREA1 に、それ以外の個人ルートフォルダで管理するファイル実体は I:¥AREA2 に格納する」という運用をしたりできます。ただし、一つフォルダの種別に対して、所属組織単位または役職単位のどちらかのベースパス情報しか設定できません。例えば、営業部や設計部などの所属組織に対してベースパス情報を設定したシステムでは、部長や課長などの役職に対してのベースパス情報は設定できません。

また、グループルートフォルダの場合は、Collaboration - Directory Access で設定する、組織 ID を表すディレクトリサーバの属性の値で設定することもできます。例えば、「A 事業所のグループルートフォルダで管理するファイル実体は H:¥DATA1 に、B 事業所のグループルートフォルダで管理するファイル実体は I:¥DATA1 に格納する」という運用ができます。

(2) ベースパス情報を設定する利点

ベースパス情報の割り当て条件や複数のベースパス情報を設定する利点を次に示します。

- ファイル実体格納先の分散

個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、グループルートフォルダそれぞれに対してベースパスを設定できるので、ファイル実体の格納先を分散できます。一つのディスクにファイル実体を集中して格納しないので、複数のユーザからのアクセスが発生した場合に、ディスクへのアクセスを分散できます。

- **容量のゆとりを考慮した適切な格納先の割り当て**

個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、またはグループルートフォルダに対して、容量にゆとりがあるディスクを割り当てられます。また、特定の組織専用または役職専用のベースパス情報を設定することで、ファイルのサイズや数などの特徴に応じて、適切なディスクを割り当てられます。

- **ユーザ数の増加に応じた容量拡張が容易**

運用開始後に、File Sharing のシステムを利用するユーザが増加して既存のベースパスに対する容量を使い切ってしまった場合などに、新しいディスクに対応するベースパス情報を追加して、ファイルシステムの容量を容易に拡張できます。

ベースパスは、次のタイミングで設定されます。

- ポータルを經由して File Sharing に初めてアクセスしたとき
- コミュニティを作成したとき
- グループルートフォルダを作成したとき

ベースパス情報が複数登録されている場合は、ベースパスは次のように設定されます。

最大許容サイズを設定しない運用の場合

- 割り当て条件に該当する情報が設定されている場合は、割り当て条件が設定されているベースパス情報を使用しているユーザ数、コミュニティ数、またはグループルートフォルダ数が最も少ないベースパス情報のパスが、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、またはグループルートフォルダのベースパスに設定されます。
- 割り当て条件に該当する情報が設定されていない場合は、デフォルトのベースパス情報を使用しているユーザ数、コミュニティ数、またはグループルートフォルダ数が最も少ないベースパス情報のパスが、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、またはグループルートフォルダのベースパスに設定されます。

最大許容サイズを設定した運用の場合

- 割り当て条件に該当する情報が設定されている場合は、割り当て条件が設定されているベースパス情報のうち、空き容量が最も多いベースパス情報のパスが、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、またはグループルートフォルダのベースパスに設定されます。
- 割り当て条件に該当する情報が設定されていない場合は、デフォルトのベースパス情報のうち、空き容量が最も多いベースパス情報のパスが、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、またはグループルートフォルダのベースパスに設定されます。

なお、ベースパス情報のパスとして設定したファイル実体を格納するファイルシステムがいっぱいになってしまった場合は、新たにデフォルトのベースパス情報を追加してください。

また、ベースパス情報を使用している個人ルートフォルダ数、ワークプレースルートフォルダ数、およびグループルートフォルダ数は、使用数として管理されます。使用数は、0~2,147,483,647 の範囲で管理します。なお、ベースパス情報の使用数が、上限の 2,147,483,647 に達した場合は、新たにベースパス情報を追加する必要があります。

デフォルト以外のベースパス情報を設定するルートフォルダを作成しようとした場合に、ベースパス情報の最大予約可能容量に対する空き容量がないとき、およびベースパスの使用数が上限に達したときの動作を指

定できます。指定できる動作および動作指定方法については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

ベースパス情報の設定方法については、「6.4 デフォルトのベースパス情報の登録」および「6.6 運用開始前のベースパス情報の設定」を参照してください。

(3) ベースパス情報を構成する項目

ベースパス情報は、次の表に示す項目から構成されます。

表 6-1 ベースパス情報を構成する項目

項番	項目	説明
1	種別	ベースパス情報を設定するルートフォルダの種別のことです。種別には、個人フォルダ、コミュニティフォルダ、またはグループフォルダがあります。
2	名前	ベースパス情報を識別するための名前です。
3	条件種別	ベースパス情報を設定するための条件のことです。 種別が個人フォルダおよびコミュニティフォルダの場合は、条件種別には役職単位または所属組織単位があります。 種別がグループフォルダの場合は、組織 ID 単位があります。
4	条件値	ベースパス情報の条件種別に対する条件値のことです。 種別が個人フォルダおよびコミュニティフォルダの場合は、Collaboration - Directory Access から取得できる役職名または所属組織名を指定します。 種別がグループフォルダの場合は、Collaboration - Directory Access で、組織 ID を表すディレクトリサーバの設定値として指定したディレクトリサーバの属性の値を指定します。
5	パス	個人ルートフォルダ、グループルートフォルダまたはワークプレースルートフォルダの、ファイル実体の格納先とするパスです。
6	最大予約可能容量	条件種別と条件値に該当するルートフォルダの最大許容サイズの和の上限値のことです。
7	予約量	条件種別と条件値に該当するルートフォルダの最大許容サイズの和です。
8	最大予約可能容量に対する空き容量	最大予約可能容量から予約量を引いた容量のことです。
9	最大使用可能容量	パスを設定するボリュームのうちの使用できる容量の上限値のことです。
10	使用量	条件種別と条件値に該当するルートフォルダが使用している容量の和です。
11	最大使用可能容量に対する空き容量	最大使用可能容量から使用量を引いた容量のことです。
12	使用数	ベースパス情報を使用しているルートフォルダ数です。
13	状態	ベースパス情報の状態です。「ファイルのすべての操作を許可」または「ファイルの参照のみ許可」のどちらかを設定できます。

6.2.2 最大許容サイズ情報の検討

最大許容サイズ情報を検討するために、最大許容サイズ情報とは何か、最大許容サイズを設定する利点、および最大許容サイズ情報を構成する項目について説明します。

(1) 最大許容サイズ情報とは

最大許容サイズ情報とは、ルートフォルダで使用できるサイズの上限（最大許容サイズ）を設定するための情報です。最大許容サイズは、ルートフォルダ単位に割り当てられます。最大許容サイズ情報は、運用方法に応じて設定してください。

なお、最大許容サイズを設定した運用の場合、ベースパス情報ごとに File Sharing で使用するディスクの総容量を設定して、空き容量を管理できます。ベースパス情報と最大許容サイズ情報の設定を組み合わせた運用の考え方については、「6.2.3 ファイルシステムの運用の考え方」を参照してください。

最大許容サイズを設定して運用する場合は、少なくとも次の3種類の最大許容サイズ情報を設定する必要があります。

- 個人ルートフォルダ用のデフォルトの最大許容サイズ情報
- ワークプレースルートフォルダ用のデフォルトの最大許容サイズ情報
- グループルートフォルダ用のデフォルトの最大許容サイズ情報

このほか、最大許容サイズは、個人ルートフォルダおよびワークプレースルートフォルダの場合、Collaboration - Directory Access から取得できる所属組織単位または役職単位で設定することもできます。例えば、「営業部のユーザの個人ルートフォルダに対しては 30MB ずつ、それ以外のユーザの個人ルートフォルダに対しては 10MB ずつ割り当てる」という運用をしたり、「課長の個人ルートフォルダには 20MB、それ以外の個人ルートフォルダには 10MB ずつ割り当てる」という運用をしたりできます。

ただし、一つのフォルダの種別に対して、所属組織単位または役職単位のどちらかの最大許容サイズ情報しか設定できません。例えば、営業部や設計部などの所属組織に対して最大許容サイズ情報を設定したシステムでは、部長や課長などの役職に対しての最大許容サイズ情報は設定できません。

また、グループルートフォルダの場合は、Collaboration - Directory Access で設定する、組織 ID を表すディレクトリサーバの属性の値で設定することもできます。例えば、「A 事業所のグループルートフォルダに対しては 10GB ずつ、B 事業所のグループルートフォルダに対しては 5GB ずつ割り当てる」という運用をできます。

(2) 最大許容サイズを設定する利点

最大許容サイズを設定する利点を次に示します。

- ルートフォルダごとの使用量の均等化
ルートフォルダ単位に使用できるサイズを均等に割り当てられます。これによって、特定のユーザが大量のファイルを登録して、共有資源であるディスク容量を使い切ってしまうことを防げます。
- 適切なサイズの割り当て
ルートフォルダの用途に応じて、適切なサイズを割り当てられます。例えば、数人規模の小さな課のコミュニティフォルダよりも数百人規模の部で使用するコミュニティフォルダに対して大きなサイズを割り当てたり、課長の個人ルートフォルダに対して主任や担当者よりも大きなサイズを割り当てたりできます。また、規模の小さな事業所で使用するグループフォルダよりも大規模な事業所で使用するグループフォルダに対して大きなサイズを割り当てられます。これによって、むだの少ないディスク管理が可能になります。
- ディスク管理の容易化
ユーザ数、コミュニティ数またはグループルートフォルダ数とそれぞれのルートフォルダに設定する最大許容サイズを基に、必要なディスク容量が算出できます。これによって、File Sharing のシステムで確保しておく必要があるディスク容量の見積もりが容易になります。

最大許容サイズを設定した運用では、ルートフォルダを作成しようとした場合に、ベースパスを設定するデフォルト以外のベースパス情報で、空き容量が設定する最大許容サイズより小さいときの動作を指定できます。指定できる動作および動作指定方法については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

最大許容サイズ情報の設定方法については、「6.5 デフォルトの最大許容サイズ情報の登録」および「6.7 運用開始前の最大許容サイズ情報の設定」を参照してください。

(3) 最大許容サイズ情報を構成する項目

最大許容サイズ情報は、次の表に示す項目から構成されます。

表 6-2 最大許容サイズ情報を構成する項目

項番	項目	説明
1	種別	最大許容サイズ情報を設定するルートフォルダの種別のことです。種別には、個人フォルダ、コミュニティフォルダ、またはグループフォルダがあります。
2	条件種別	最大許容サイズ情報を設定するための条件のことです。 種別が個人フォルダおよびコミュニティフォルダの場合は、条件種別には役職単位または所属組織単位があります。 種別がグループフォルダの場合は、組織 ID 単位があります。
3	条件値	最大許容サイズ情報の条件種別に対する条件値のことです。 種別が個人フォルダおよびコミュニティフォルダの場合は、Collaboration - Directory Access から取得できる役職名または所属組織名を指定します。 種別がグループフォルダの場合は、Collaboration - Directory Access で、組織 ID を表すディレクトリサーバの設定値として指定したディレクトリサーバの属性の値を指定します。
4	最大許容サイズ	個人ルートフォルダ、グループルートフォルダまたはワークプレースルートフォルダに設定する最大許容サイズのことです。

6.2.3 ファイルシステムの運用の考え方

File Sharing で管理するルートフォルダとファイル実体を格納するファイルシステム上のディレクトリとの関連づけは、ベースパス情報として設定します。これに、最大許容サイズ情報の設定を組み合わせることで、ファイル実体の格納先として適切なファイルシステムを割り当て、運用開始後の拡張に備えることができます。

ここでは、運用の考え方として、最大許容サイズを設定する場合と設定しない場合について説明します。

(1) 最大許容サイズを設定した運用の考え方

最大許容サイズを設定すると、次のような運用ができます。

- 個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、またはグループルートフォルダごとに、使用できるフォルダサイズを制限する。
- 個人ルートフォルダまたはコミュニティルートフォルダの場合、ルートフォルダを作成するユーザが所属する組織または役職に応じて、使用できるフォルダサイズを調整する。
- グループルートフォルダの場合、グループルートフォルダを作成するときに指定する代表組織、または代表ユーザが所属する組織に応じて、使用できるフォルダサイズを調整する。

- 個人ルートフォルダまたはワークプレースルートフォルダの場合、容量を多く使用するルートフォルダに対しては容量にゆとりのある特定のディスクのファイルシステムを割り当て、それ以外のルートフォルダに対してはすべてデフォルトのファイルシステムを割り当てる。
- デフォルト以外のベースパス情報を設定するルートフォルダを作成する場合に、ベースパス情報の最大予約可能容量に対する空き容量がないときにエラーにすることで、ベースパス情報の空き容量不足を確認できる。
- ルートフォルダに設定したデフォルト以外のベースパス情報の使用数が上限に達した場合にエラーにすることで、ベースパス情報の使用数が上限に達したことを認知できる。
- ベースパス情報の最大使用可能容量にしきい値を設定し、使用量がしきい値に達したときに警告が通知されるように設定して、使用量を監視することで、使用量が最大使用可能容量に達する前に確認できる。
- ベースパス情報の予約量および使用量を監視することで、計画的なディスクの運用ができる。

(2) 最大許容サイズを設定しない運用の考え方

File Sharing のシステムを試験的に運用したい場合などには、最大許容サイズを設定しない運用もできます。この場合は、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、およびグループルートフォルダのデフォルトのベースパス情報だけを設定すれば、運用を開始できます。

最大許容サイズを設定しない運用の場合、ベースパス情報で割り当てられたディスク容量がいっぱいになるまで使用できます。

ただし、ベースパス情報に設定したパスのディスクの容量がいっぱいになると、ファイルを格納できなくなります。このような場合は、ベースパス情報を追加し、ディスクの空き容量を確保して対処する必要があります。ディスクの空き容量を確保する対処については、「6.2.4(3)(b) 運用例」を参照してください。

6.2.4 ファイルシステムの運用例

ここでは、ファイルシステムの運用例について説明します。

(1) 最大許容サイズを設定した運用例

最大許容サイズを設定したファイルシステムの運用について説明します。

(a) 運用前の設定

最大許容サイズを設定したファイルシステムの運用例について、次の図に示す例を使用して説明します。

図 6-2 最大許容サイズを設定したファイルシステムの運用の例（個人ルートフォルダおよびワークプレースルートフォルダの場合）

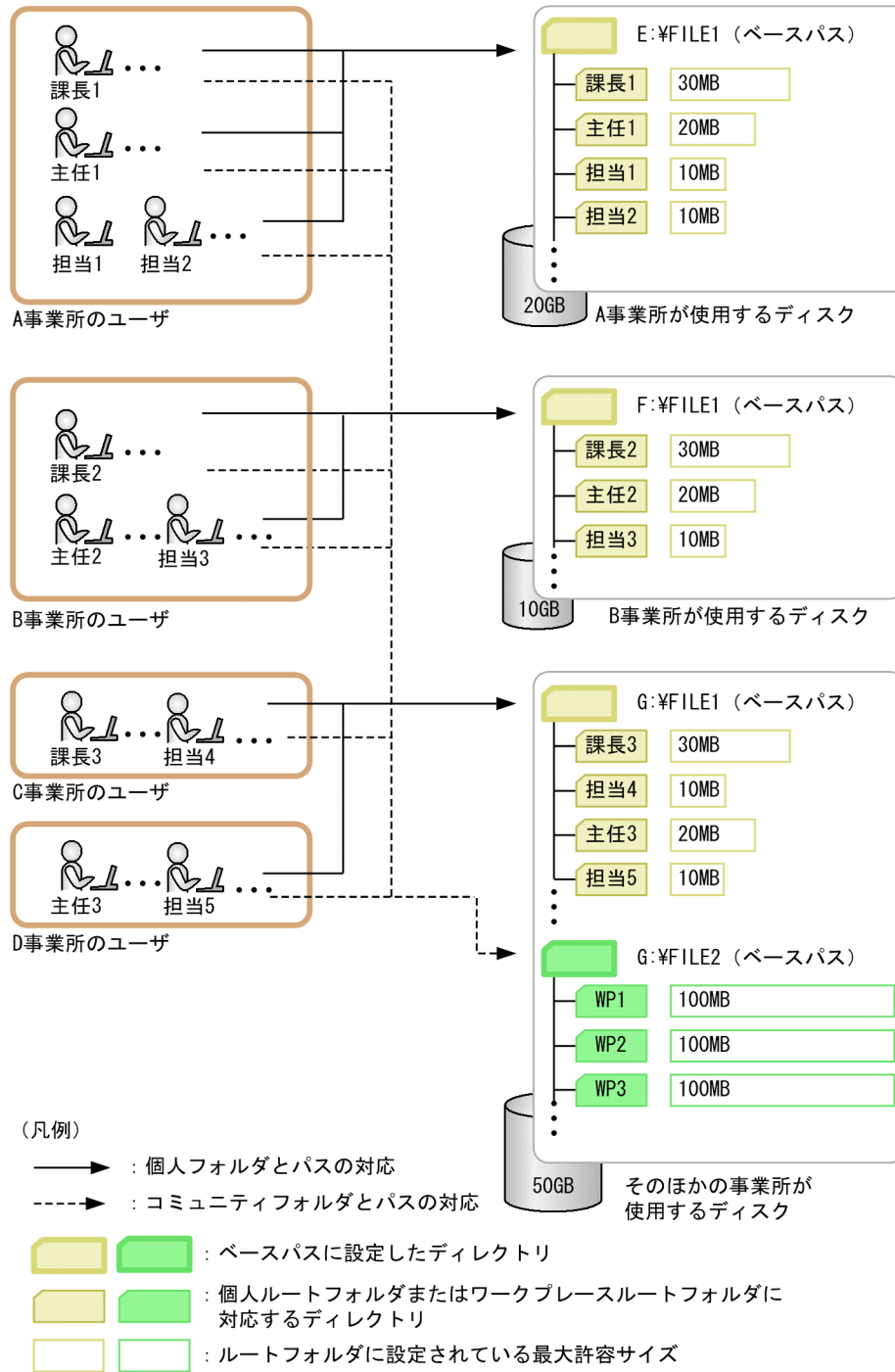
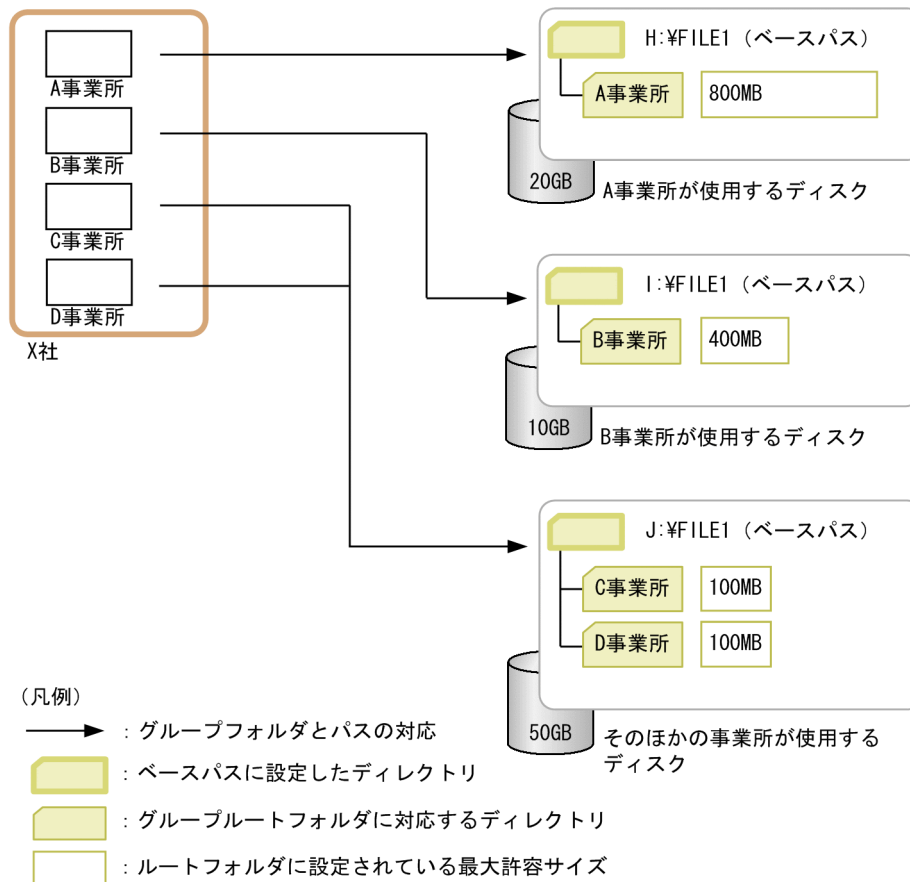


図 6-3 最大許容サイズを設定したファイルシステムの運用の例（グループルートフォルダの場合）



この例では、ベースパス情報として、種別ごとに次のようにディスクを割り当てます。

- 個人フォルダについては、所属組織ごとに設定します。A 事業所と B 事業所は所属人数が多いので個人フォルダ用に専用のディスクを割り当て、そのほかの事業所については、デフォルトのディスクにまとめて割り当てるようにします。
- コミュニティフォルダについては、デフォルトのディスクにまとめて割り当てるようにします。
- グループフォルダについては、組織ごとに設定します。A 事業所と B 事業所は規模が大きいののでグループフォルダ用に専用のディスクを割り当て、そのほかの事業所については、デフォルトのディスクにまとめて割り当てるようにします。

ここでは、次のようにベースパス情報を設定します。

表 6-3 設定するベースパス情報の例

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	所属組織	A 事業所	E:\FILE1	20GB	20GB
2	個人フォルダ	所属組織	B 事業所	F:\FILE1	10GB	10GB
3	個人フォルダ	デフォルト		G:\FILE1	20GB	20GB
4	コミュニティフォルダ	デフォルト		G:\FILE2	30GB	30GB

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
5	グループフォルダ	組織 ID	A 事業所の組織 ID	H:¥FILE1	20GB	20GB
6	グループフォルダ	組織 ID	B 事業所の組織 ID	I:¥FILE1	10GB	10GB
7	グループフォルダ	デフォルト		J:¥FILE1	50GB	50GB

また、最大許容サイズ情報として、ルートフォルダごとに次のように最大許容サイズを割り当てます。

- 個人ルートフォルダには、ユーザの役職ごとに最大許容サイズを割り当てます。この例では、管理するファイルが多い課長や主任には、担当に比べて大きなサイズを割り当てます。
- コミュニティフォルダ下のワークプレースルートフォルダについては、デフォルトのサイズだけを割り当てて使用することにします。
- グループフォルダについては、組織ごとに最大許容サイズを割り当てます。この例では、規模が大きい A 事業所と B 事業所には、比較的大きなサイズを割り当てます。そのほかの事業所には、デフォルトのサイズだけを割り当てて使用することにします。

ここでは、次のように最大許容サイズ情報を設定します。

表 6-4 設定する最大許容サイズ情報の例

項番	種別	条件種別	条件値	最大許容サイズ
1	個人フォルダ	役職	課長	30MB
2	個人フォルダ	役職	主任	20MB
3	個人フォルダ	デフォルト		10MB
4	コミュニティフォルダ	デフォルト		100MB
5	グループフォルダ	組織 ID	A 事業所の組織 ID	800MB
6	グループフォルダ	組織 ID	B 事業所の組織 ID	400MB
7	グループフォルダ	デフォルト		100MB

表 6-3 および表 6-4 のようにベースパス情報と最大許容サイズ情報を設定して運用を開始した場合、個人ルートフォルダを作成しようとするユーザに応じて、ベースパスと最大許容サイズが割り当てられます。例えば、所属している組織が A 事業所、役職が課長というユーザが、個人ルートフォルダを作成した場合、ベースパスとして E:¥FILE1 が、最大許容サイズとして 30MB が割り当てられます。また、グループルートフォルダに設定した組織およびユーザに応じて、ベースパスと最大許容サイズが割り当てられます。例えば、A 事業所のグループルートフォルダの場合、ベースパスとして H:¥FILE1 が、最大許容サイズとして 800MB が割り当てられます。

なお、最大許容サイズを設定した運用の場合、ベースパス情報で設定している最大予約可能容量のうち、最大許容サイズとして割り当てた容量を予約量として管理します。また、最大予約可能容量から予約量を引いた容量を空き容量として管理します。ベースパス情報で設定している最大予約可能容量分のディスク容量は、ユーザで管理する必要があります。

また、デフォルト以外のベースパス情報の最大予約可能容量に対する空き容量がなくなったとき、または使用数が上限に達したとき、エラーとなるように、環境設定用プロパティファイルの

hptl_clb_cfs_AssignmentModeForNoFreeSpace, および
 hptl_clb_cfs_AssignmentModeForUsedCountMax プロパティに「alert」を設定します。環境設定用プロパティファイルの詳細については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

(b) ルートフォルダを作成する領域がなくなった場合の運用例

ルートフォルダを作成する領域がなくなった場合に、ベースパス情報を追加する運用例について説明します。

新しいユーザに対してベースパスを設定しようとした場合、ベースパス情報の最大予約可能容量に対する空き容量がルートフォルダに割り当てる最大許容サイズよりも小さいときは、ルートフォルダを作成しようとしたユーザ（[ファイル共有] ポートレットに初めてログインしたユーザ、[コミュニティ管理] ポートレットでワークスペースを作成したユーザ、またはグループルートフォルダを作成しようとしたユーザ）に対して、ポートレット経由、またはコマンドを実行したときにエラーが通知されます。この場合、システム管理者は次のように対処します。

1. [ベースパス情報操作] 画面からベースパス情報を参照し、最大予約可能容量に対する空き容量がなくなっているベースパス情報があることを確認します。
2. 空き容量不足になったベースパス情報と同じ種別、条件種別および条件値で、最大予約可能容量に対する空き容量がある別のベースパス情報を追加します。

例えば、A 事業所に割り当てたベースパス情報の最大予約可能容量に対する空き容量が不足した場合、A 事業所に対するベースパス情報として、次の表の項番 8 に示すような、ほかのディスク領域に対応するベースパス情報を、[ベースパス情報の追加] 画面から追加します。

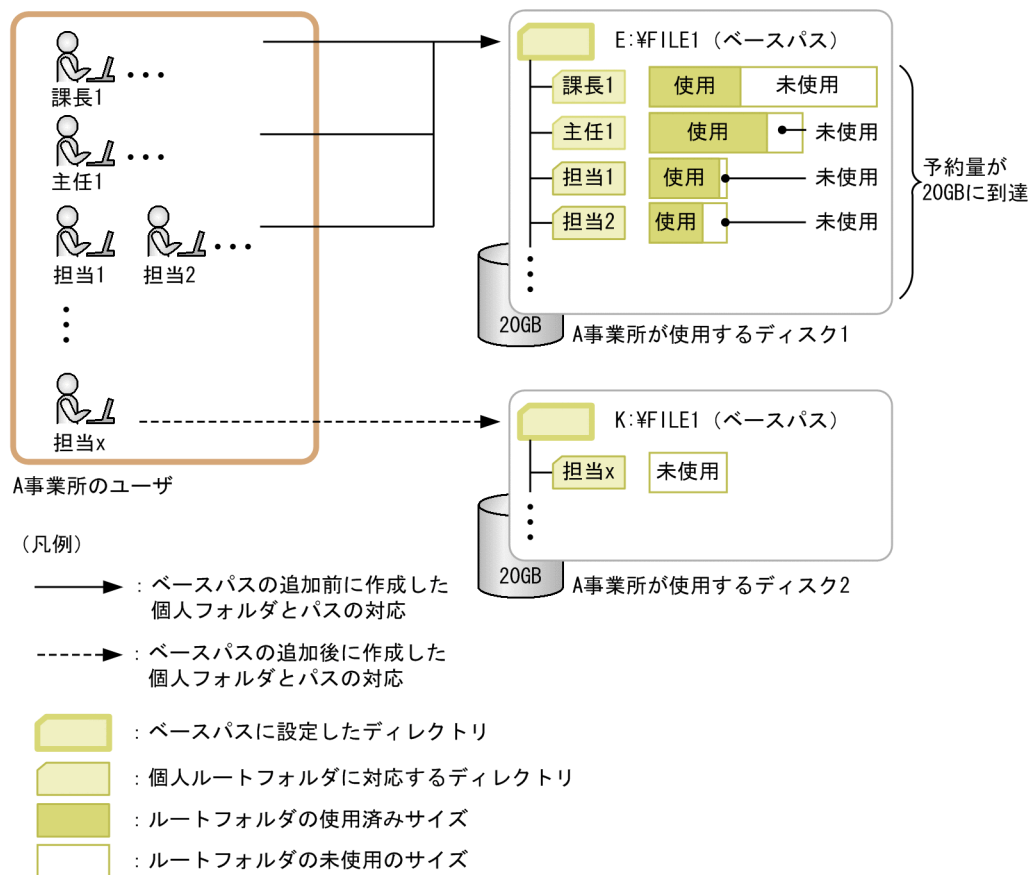
表 6-5 追加するベースパス情報の例（ルートフォルダを作成する領域がなくなった場合）

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	所属組織	A 事業所	E:¥FILE1	20GB	20GB
2	個人フォルダ	所属組織	B 事業所	F:¥FILE1	10GB	10GB
3	個人フォルダ	デフォルト		G:¥FILE1	20GB	20GB
4	コミュニティフォルダ	デフォルト		G:¥FILE2	30GB	30GB
5	グループフォルダ	組織 ID	A 事業所の組織 ID	H:¥FILE1	20GB	20GB
6	グループフォルダ	組織 ID	B 事業所の組織 ID	I:¥FILE1	10GB	10GB
7	グループフォルダ	デフォルト		J:¥FILE1	50GB	50GB
8	個人フォルダ	所属組織	A 事業所	K:¥FILE1	20GB	20GB

なお、この場合、すでに E:¥FILE1 下に個人フォルダを作成しているユーザのベースパスを変更する必要はありません。ルートフォルダの最大許容サイズまで、そのディスクを続けて使用できます。

この運用の例を次の図に示します。

図 6-4 ベースパス情報を追加した運用の例（ルートフォルダを作成する領域がなくなった場合）



(c) ベースパスを割り当てる条件を追加してルートフォルダに異なる領域を割り当てる場合の運用例

デフォルトのベースパスを割り当てて運用していたルートフォルダに対して、ほかのベースパスを設定し直して、異なる領域を割り当てることもできます。

例えば、C事業所のユーザが増えた場合、次の表の項番9に示すようなC事業所専用のディスクを用意して、[ベースパス情報の追加]画面からベースパス情報を追加します。

表 6-6 追加するベースパス情報の例（ベースパスを割り当てる条件を追加してルートフォルダに異なる領域を割り当てる場合）

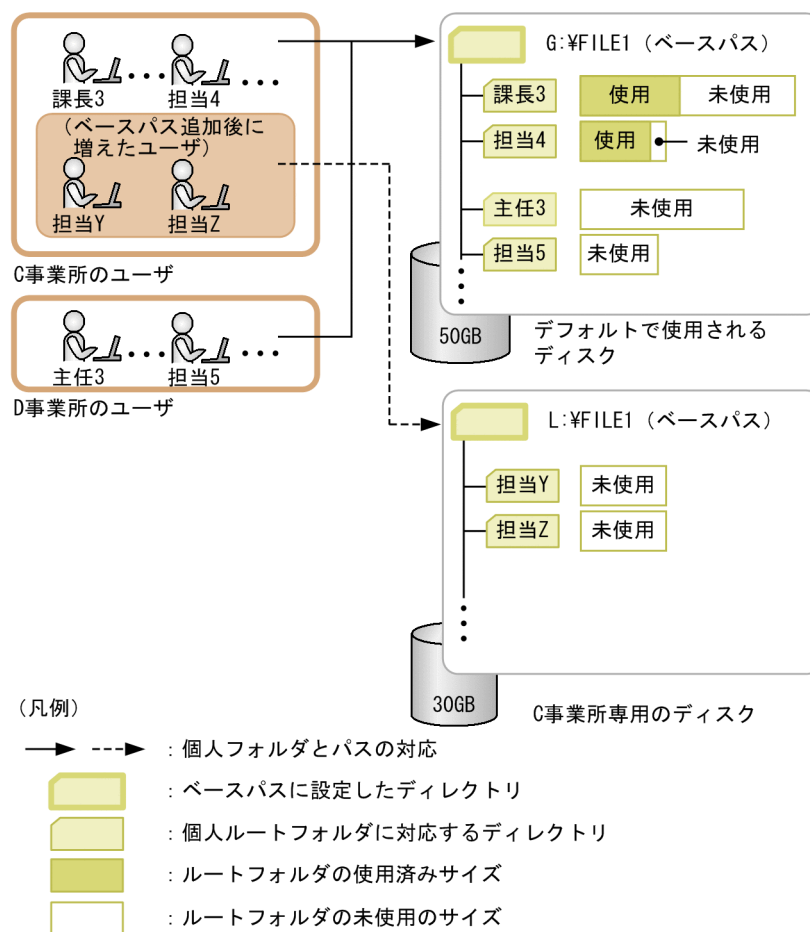
項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	所属組織	A事業所	E:\%FILE1	20GB	20GB
2	個人フォルダ	所属組織	B事業所	F:\%FILE1	10GB	10GB
3	個人フォルダ	デフォルト		G:\%FILE1	20GB	20GB
4	コミュニティフォルダ	デフォルト		G:\%FILE2	30GB	30GB
5	グループフォルダ	組織ID	A事業所の組織ID	H:\%FILE1	20GB	20GB
6	グループフォルダ	組織ID	B事業所の組織ID	I:\%FILE1	10GB	10GB
7	グループフォルダ	デフォルト		J:\%FILE1	50GB	50GB

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
8	個人フォルダ	所属組織	A 事業所	K:¥FILE1	20GB	20GB
9	個人フォルダ	所属組織	C 事業所	L:¥FILE1	30GB	30GB

この場合、ベースパス情報を追加したあとに増えた C 事業所のユーザだけに、新しく追加したベースパス情報が設定されます。

この運用の例を次の図に示します。

図 6-5 ベースパス情報を追加した運用の例（ベースパスを割り当てる条件を追加してルートフォルダに異なる領域を割り当てる場合）



(2) ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張し、使用量を監視する運用例

最大許容サイズを設定した運用で、ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張して、使用量を監視しながら運用する例について説明します。

ルートフォルダを作成すると、ディスクの容量のうち、ルートフォルダに設定されている最大許容サイズ分の容量が予約されます。しかし、ルートフォルダ単位の使用率が低いと、予約されるだけで使用されていない領域ができてしまいます。このような予約されるだけで使用されていない領域が増えて、予約量が最大予約可能容量に達してしまったときは、ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張して、最大使用可能容量よりも大きな値を最大予約可能容量に設定します。

ただし、最大使用可能容量よりも大きな値を最大予約可能容量に設定するときは、ベースパス情報の使用量を監視して、使用量が最大使用可能容量に達する前に最大使用可能容量を拡張する必要があります。

(a) 運用前の設定

運用前の設定では、ベースパス情報として、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、およびグループルートフォルダ共に、デフォルトのベースパスを割り当てることにします。次のようにベースパス情報を設定します。最大使用可能容量には、最大予約可能容量と同じ値を設定します。

表 6-7 設定するベースパス情報の例（ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張し、使用量を監視する場合）

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	デフォルト		E:*FILE1	50GB	50GB
2	コミュニティフォルダ	デフォルト		F:*FILE1	100GB	100GB
3	グループフォルダ	デフォルト		G:*FILE1	100GB	100GB

また、最大許容サイズ情報として、個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、およびグループルートフォルダ共に、デフォルトの最大許容サイズ情報だけを設定して使用することになります。次のように最大許容サイズ情報を設定します。

表 6-8 設定する最大許容サイズ情報の例（ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張し、使用量を監視する場合）

項番	種別	条件種別	条件値	最大許容サイズ
1	個人フォルダ	デフォルト		10MB
2	コミュニティフォルダ	デフォルト		100MB
3	グループフォルダ	デフォルト		50MB

ベースパス情報の使用量が最大使用可能容量の 70%を超えたとき、警告が通知されるように、環境設定用プロパティファイルの `hptl_clb_cfs_ADThresholdForMaxUsableSpace` プロパティに「70」を設定します。環境設定用プロパティファイルの詳細については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (`hptl_clb_cfs.properties`)」を参照してください。

(b) 最大予約可能容量を拡張する場合の運用例

ベースパス情報の最大予約可能容量に対する空き容量がルートフォルダに割り当てる最大許容サイズよりも小さいときは、ルートフォルダを作成しようとしたユーザに対して、エラーが通知されます。

この場合、システム管理者は次のように対処します。

1. [プロパティ設定] 画面を表示するか、またはベースパス情報の取得コマンド (`cfslstad`) を実行して、最大予約可能容量に対する空き容量がないベースパス情報を確認します。
2. 最大予約可能容量に対する空き容量がないベースパス情報がある場合は、その使用量を確認します。
ベースパス情報の使用量がまだ少ない場合、予約されているだけで使用されていない領域が多く、実際に使用できる容量は残っています。予約されているだけで使用されていない領域を有効に使用するため、ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張します。

3. 拡張する最大予約可能容量に設定する値を見積もります。

運用を開始したあとに最大予約可能容量を拡張する場合の見積もり式については、「7.5.1 ベースパス情報の最大予約可能容量の見積もり（最大使用可能容量よりも大きな値を設定する場合）」を参照してください。

この例では、ワークスペースルートフォルダ用のベースパス情報の最大予約可能容量を拡張します。

4. [プロパティ設定] 画面から、ワークスペースルートフォルダ用のベースパス情報の最大予約可能容量の設定を次のように変更します。

表 6-9 変更するベースパス情報の例（最大予約可能容量を拡張する場合）

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	デフォルト		E:*FILE1	50GB	50GB
2	コミュニティフォルダ	デフォルト		F:*FILE1	150GB	100GB
3	グループフォルダ	デフォルト		G:*FILE1	100GB	100GB

このように運用することで、予約されているだけで使用されていない領域が増えても有効にディスクを使用できます。また、ベースパス情報の最大使用可能容量を拡張することなく、最大予約可能容量だけを拡張して、引き続きベースパス情報を使用できます。

ただし、最大使用可能容量よりも大きな値を最大使用可能容量に設定した場合、最大使用可能容量以上の容量を予約されるおそれがあるため、ベースパス情報の使用量を監視する必要があります。

次に、ベースパス情報の使用量を監視する運用例について説明します。

(c) ベースパス情報の使用量を監視し、最大使用可能容量を拡張する場合の運用例

最大使用可能容量よりも大きな値を最大使用可能容量に設定した場合、システム管理者は、ベースパス情報の使用量の確認コマンド（cfschkusdspd）の実行、または [プロパティ設定] 画面で、定期的にベースパス情報の最大使用可能容量に対する使用率を確認します。運用を開始してベースパス情報の最大使用可能容量に対する使用率が環境設定プロパティファイルで設定した値（しきい値）に達している場合は、警告が通知されます。

例えば、ワークスペースルートフォルダ用のベースパス情報の使用率が 70%（使用量：70GB）を超えて、ベースパス情報の使用量の確認コマンド（cfschkusdspd）を実行したときに警告が通知されたとします。

この場合、システム管理者は次のように対処します。

1. ワークスペースルートフォルダ用のベースパス情報が使用しているディスクの容量を拡張します。

この例では、ディスクの容量を 100GB から 150GB に拡張します。

2. [プロパティ設定] 画面から、ワークスペースルートフォルダ用のベースパス情報の最大使用可能容量の設定を次のように変更します。

ディスクの容量を 100GB から 150GB に拡張したため、最大使用可能容量にも 150GB を設定します。

表 6-10 変更するベースパス情報の例（最大使用可能容量を拡張する場合）

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	デフォルト		E:*FILE1	50GB	50GB
2	コミュニティフォルダ	デフォルト		F:*FILE1	150GB	150GB

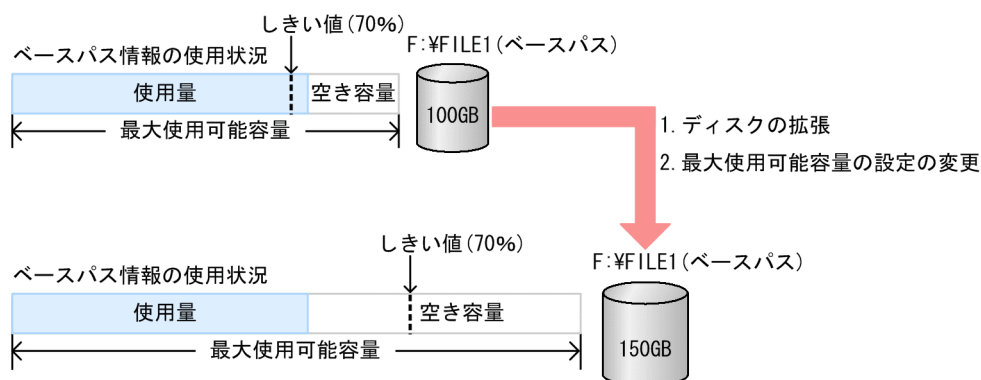
項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
3	グループフォルダ	デフォルト		G:*FILE1	100GB	100GB

ベースパス情報の最大使用可能容量の設定を変更することで、最大使用可能容量に対する使用率が下がります。また、ほかのベースパス情報の使用率が最大使用可能容量のしきい値に達した場合も同様に、ディスクを拡張し、最大使用可能容量の設定を変更して対応します。

このように運用することで、予約されているだけで使用されていない領域を削減できます。

この運用の例を次の図に示します。

図 6-6 ベースパス情報の使用量を監視し、最大使用可能容量を拡張する運用の例



(3) 最大許容サイズを設定しない運用例

最大許容サイズを設定しない場合の運用例について説明します。

(a) 運用前の設定

運用前の設定では、ベースパス情報として、種別ごとにデフォルトのベースパスを割り当てます。次のようにベースパス情報を設定します。

表 6-11 設定するベースパス情報の例（最大許容サイズを設定しない場合）

項番	種別	条件種別	条件値	パス
1	個人フォルダ	デフォルト		G:*FILE1
2	コミュニティフォルダ	デフォルト		H:*FILE1
3	グループフォルダ	デフォルト		I:*FILE1

また、最大許容サイズを設定しない運用のため、デフォルトの最大許容サイズ情報を登録する必要はありません。

(b) 運用例

運用を開始して、ベースパス情報に設定したパスのディスクの容量がいっぱいになると、ファイルを格納できなくなります。このような場合は、次のように対応する必要があります。

1. エクスプローラなどの OS のツールで空き領域がないことを確認します。

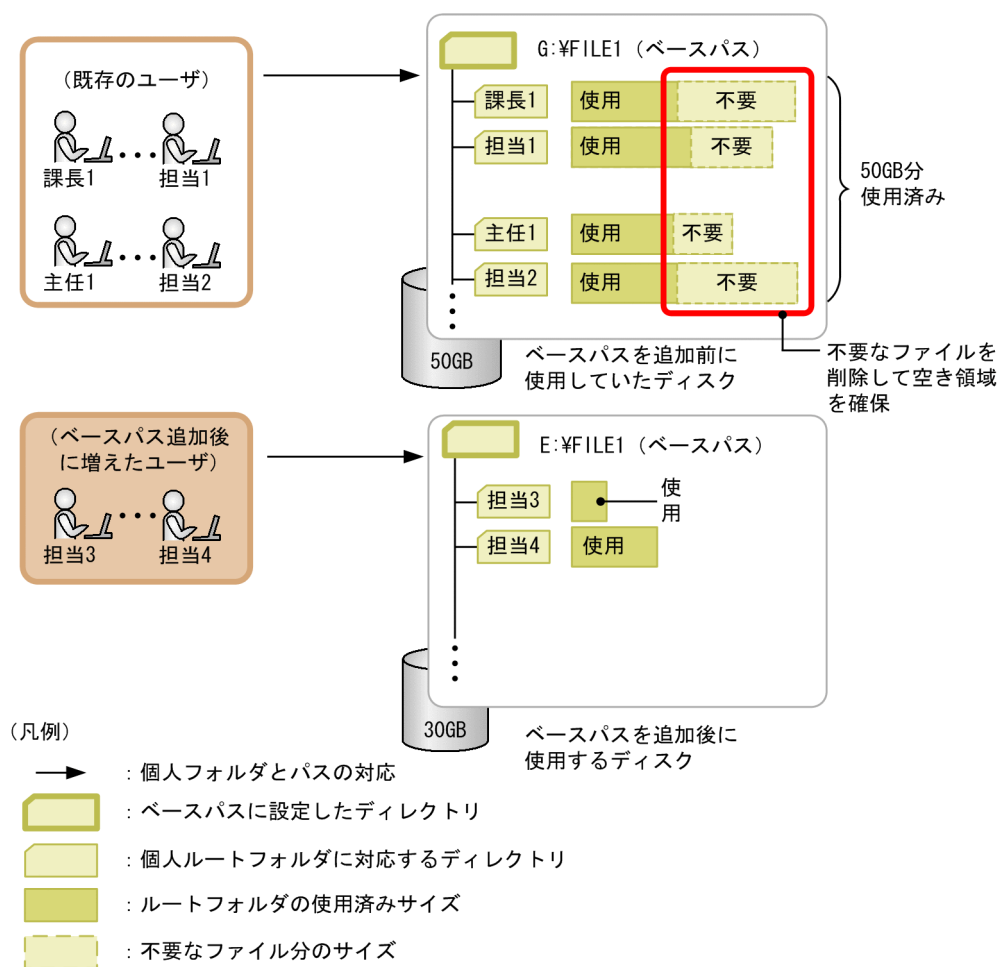
2. 空き容量不足になったベースパスにフォルダを作成するように設定されているユーザに対して、空き容量がある別のディスクに対応するベースパス情報を追加します。

これによって、新しくフォルダを作成するユーザに対して、フォルダを作成してファイル実体を登録するための空き領域を確保できます。ただし、この状態では、既存のユーザがファイルを追加または更新できません。

3. 不要なファイルを削除するなどして、既存のディスクに空き領域を確保します。これによって、ベースパス情報を追加したあとにルートフォルダを作成したユーザは、新しいディスクでファイルの操作を実行できます。また、既存のユーザは、ユーザが使用していた領域から空き領域として確保した分を使用して、ファイルの操作を実行できます。

ディスク容量がいっぱいになった場合の対応の例を、次の図に示します。

図 6-7 最大許容サイズを設定しない運用の例（ディスク容量がいっぱいになった場合の対応）



なお、ベースパス情報を追加したあとに新しく作成されるフォルダは、最も使用数が少ないベースパス情報のパスに作成されます。

また、デフォルト以外のベースパス情報の使用数が上限に達したとき、エラーとなるように、環境設定用プロパティファイルの `hptl_clb_cfs_AssignmentModeForUsedCountMax` プロパティに「alert」を設定します。詳細については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

6.3 ファイルシステムの見積もり

ここでは、最大許容サイズを設定する運用の場合の、ベースパス情報に設定する最大予約可能容量の見積もり、最大使用可能容量とファイルシステムのディスク容量の見積もり、およびファイルシステムの見積もり例について説明します。

また、最大許容サイズを設定しない運用の場合のファイルシステムの容量の見積もりについて、「6.3.4 最大許容サイズを設定しない運用の場合のファイルシステムの容量の見積もり」で説明します。

6.3.1 最大予約可能容量の見積もり

最大予約可能容量には、ベースパス情報を使用するルートフォルダの最大許容サイズの和を見積もって設定します。

最大予約可能容量に設定する値は、次の項目に応じて算出する必要があります。

- ベースパス下にフォルダを作成すると想定されるユーザ数、コミュニティ数またはグループルートフォルダ数
- ベースパス下に作成するルートフォルダの最大許容サイズ

最大予約可能容量は、次の見積もり式で算出できます。運用方法に応じて算出してください。なお、ベースパスが含まれるファイルシステムのディスクには、運用方法に応じて算出した最大予約可能容量分のサイズが必要です。

(1) デフォルトのベースパス情報および最大許容サイズ情報だけを使用する場合の見積もり式

デフォルトのベースパス情報とデフォルトの最大許容サイズ情報だけを登録する場合の最大予約可能容量の見積もり式を次に示します。

- 個人ルートフォルダの場合

$$\text{最大予約可能容量} \geq \text{PDT} \times \text{PN}$$

変数の意味は次のとおりです。

変数	意味
PDT	個人ルートフォルダに割り当てる最大許容サイズです。
PN	想定ユーザ数です。

- ワークスペースルートフォルダの場合

$$\text{最大予約可能容量} \geq \text{WDT} \times \text{CN}$$

変数の意味は次のとおりです。

変数	意味
WDT	ワークスペースルートフォルダに割り当てる最大許容サイズです。
CN	想定コミュニティ数です。

- グループルートフォルダの場合

$$\text{最大予約可能容量} \geq \text{GDT} \times \text{GN}$$

変数の意味は次のとおりです。

変数	意味
GDT	グループルートフォルダに割り当てる最大許容サイズです。
GN	想定グループルートフォルダ数です。

(2) デフォルト以外のベースパス情報と最大許容サイズ情報を設定する場合の見積もり式

デフォルト以外のベースパス情報と最大許容サイズ情報を設定し、割り当て条件を設定する場合の最大予約可能容量の見積もり式を次に示します。

• 個人ルートフォルダの場合

$$\text{最大予約可能容量} \geq \Sigma (\text{PT} \times \text{PN})$$

変数および記号の意味は次のとおりです。

変数および記号	意味
Σ	最大許容サイズ情報ごとに算出した $\text{PT} \times \text{PN}$ の値を集計することを意味します。
PT	個人ルートフォルダに割り当てる最大許容サイズです。
PN	次の条件をすべて満たす想定ユーザ数です。 <ul style="list-style-type: none"> 最大予約可能容量を算出するベースパス情報に設定されている割り当て条件を満たす 変数 PT に対応する最大許容サイズ情報に設定されている割り当て条件を満たす

• ワークプレースルートフォルダの場合

$$\text{最大予約可能容量} \geq \Sigma (\text{WT} \times \text{CN} \times \text{ACN})$$

変数および記号の意味は次のとおりです。

変数および記号	意味
Σ	最大許容サイズ情報ごとに算出した $\text{WT} \times \text{CN} \times \text{ACN}$ の値を集計することを意味します。
WT	ワークプレースルートフォルダに割り当てる最大許容サイズです。
CN	次の条件をすべて満たすコミュニティ作成者の想定数です。 <ul style="list-style-type: none"> 最大予約可能容量を算出するベースパス情報に設定されている割り当て条件を満たす 変数 WT に対応する最大許容サイズ情報に設定されている割り当て条件を満たす
ACN	コミュニティ作成者一人当たりの平均コミュニティ作成数です。

• グループルートフォルダの場合

$$\text{最大予約可能容量} \geq \Sigma (\text{GT} \times \text{GN})$$

変数および記号の意味は次のとおりです。

変数および記号	意味
Σ	最大許容サイズ情報ごとに算出した $\text{GT} \times \text{GN}$ の値を集計することを意味します。
GT	グループルートフォルダに割り当てる最大許容サイズです。

変数および記号	意味
GN	次の条件をすべて満たす想定グループルートフォルダ数です。 <ul style="list-style-type: none"> 最大予約可能容量を算出するベースパス情報に設定されている割り当て条件を満たす 変数 GT に対応する最大許容サイズ情報に設定されている割り当て条件を満たす

(3) 注意事項

運用を開始していない場合、最大予約可能容量には、最大使用可能容量以下の値を設定してください。

最大使用可能容量に、最大予約可能容量よりも小さい値を設定する場合、予約量が最大使用可能容量を超えることがあります。予約量が最大使用可能容量を超えたときは、定期的にベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) を実行して、ベースパス情報の使用量を確認する必要があります。

しかし、運用を開始していない場合は、一日当たりの使用量の平均を算出できないので、ベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) の実行回数を見積もれません。そのため、運用を開始していない場合、最大予約可能容量には、最大使用可能容量以下の値を設定してください。

6.3.2 最大使用可能容量またはファイルシステムのディスク容量の見積もり

ベースパス情報の最大使用可能容量、またはファイル実体を格納するファイルシステムのディスク容量の見積もり方法について説明します。

すでに決められているディスクの容量の範囲内でファイルシステムを運用する場合は、ディスクの容量と利用率を基に、最大使用可能容量を見積もります。

また、ファイルシステムとして使用するディスクの容量が決まっていない場合は、見積もった最大予約可能容量およびディスクの利用率を基に、ディスクの容量を見積もります。最大予約可能容量の見積もりの詳細については、「6.3.1 最大予約可能容量の見積もり」を参照してください。

なお、ディスクの利用率は、100%以下になるように設定してください。

見積もり式

$$\text{ディスクの利用率 (\%)} = (\Sigma \text{MUS} \div \text{VS}) \times 100$$

変数の意味は次のとおりです。

変数	意味
Σ	変数 MUS の値を集計することを意味します。
MUS	ベースパス情報に設定する最大使用可能容量です。
VS	ベースパス情報に設定するパスが含まれるディスクの容量です。

(1) 最大使用可能容量を見積もる場合

すでに決められているディスク容量の範囲内でファイルシステムを運用する場合は、見積もり式を使用して、最大使用可能容量の総和を見積もります。見積もった最大使用可能容量の総和を基に、ベースパス情報ごとに最大使用可能容量を設定してください。

最大使用可能容量の総和を見積もる場合は、見積もり式に次の値を設定して Σ MUS の値を算出します。

- ディスクの利用率 (%) : ディスクの利用率として 100 以下の値を設定します。
- VS : ディスクの容量を設定します。

(2) ファイルシステムのディスク容量を見積もる場合

ファイルシステムとして使用するディスクの容量を見積もる場合は、「6.3.1 最大予約可能容量の見積もり」で算出した最大予約可能容量と同じ値を最大使用可能容量に設定して見積もります。

ファイルシステムのディスク容量を見積もる場合は、見積もり式に次の値を設定して VS の値を算出します。

- ディスクの利用率 (%) : ディスクの利用率として 100 以下の値を設定します。
- Σ MUS : 「6.3.1 最大予約可能容量の見積もり」で算出した最大予約可能容量と同じ値を最大使用可能容量に設定し、最大使用可能容量を集計した値を設定します。

6.3.3 ファイルシステムの見積もり例

ベースパス情報に設定する最大予約可能容量、最大使用可能容量およびファイルシステムのディスク容量の見積もり例を次に示します。

(1) 見積もり例の前提

見積もり例の前提として、事業所ごとの役職別ユーザ数、設定されているベースパス情報および最大許容サイズ情報が、次のような場合を考えます。

表 6-12 見積もり例の前提とする事業所ごとの役職別ユーザ数

項番	事業所	役職	ユーザ数
1	A 事業所	課長	10
2		主任	10
3		担当	50
4	B 事業所	課長	20
5		主任	20
6		担当	40
7	C 事業所	課長	10
8		主任	10
9		担当	10

表 6-13 見積もり例の前提とするベースパス情報

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	所属組織	A 事業所	E:*FILE1	最大予約可能容量 A	最大使用可能容量 A'
2	個人フォルダ	所属組織	B 事業所	F:*FILE1	最大予約可能容量 B	最大使用可能容量 B'

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
3	個人フォルダ	デフォルト		G:*FILE1	最大予約可能容量 C	最大使用可能容量 C'
4	コミュニティフォルダ	デフォルト		G:*FILE2	最大予約可能容量 W	最大使用可能容量 W'
5	グループフォルダ	組織 ID	A 事業所の組織 ID	H:*FILE1	最大予約可能容量 Ga	最大使用可能容量 Ga'
6	グループフォルダ	組織 ID	B 事業所の組織 ID	I:*FILE1	最大予約可能容量 Gb	最大使用可能容量 Gb'
7	グループフォルダ	デフォルト		J:*FILE1	最大予約可能容量 Gz	最大使用可能容量 Gz'

表 6-14 見積もり例の前提とする最大許容サイズ情報

項番	種別	条件種別	条件値	最大許容サイズ
1	個人フォルダ	役職	課長	60MB
2	個人フォルダ	役職	主任	40MB
3	個人フォルダ	デフォルト		20MB
4	コミュニティフォルダ	デフォルト		50MB
5	グループフォルダ	組織 ID	A 事業所の組織 ID	1,600MB
6	グループフォルダ	組織 ID	B 事業所の組織 ID	800MB
7	グループフォルダ	デフォルト		200MB

(2) 最大予約可能容量の見積もり例

個人ルートフォルダ、ワークプレースルートフォルダ、およびグループルートフォルダのベースパス情報に設定する最大予約可能容量の見積もり例について説明します。

使用する見積もり式の詳細については、「6.3.1 最大予約可能容量の見積もり」を参照してください。

(a) 個人ルートフォルダに必要な最大予約可能容量の見積もり

表 6-12, 表 6-13 および表 6-14 を参考に、A 事業所、B 事業所、C 事業所のユーザが使用する個人ルートフォルダに割り当てるベースパス情報に必要な最大予約可能容量を算出します。ここでは、表 6-13 の最大予約可能容量 A, 最大予約可能容量 B, および最大予約可能容量 C を算出します。

見積もり式を次に示します。

最大予約可能容量 A の見積もり式

$$\text{最大予約可能容量 A} \geq (60\text{MB} \times 10\text{人}) + (40\text{MB} \times 10\text{人}) + (20\text{MB} \times 50\text{人}) \\ \geq 2,000\text{MB}$$

最大予約可能容量 B の見積もり式

$$\begin{aligned} \text{最大予約可能容量B} &\geq (60\text{MB} \times 20\text{人}) + (40\text{MB} \times 20\text{人}) + (20\text{MB} \times 40\text{人}) \\ &\geq 2,800\text{MB} \end{aligned}$$

最大予約可能容量 C の見積もり式

$$\begin{aligned} \text{最大予約可能容量C} &\geq (60\text{MB} \times 10\text{人}) + (40\text{MB} \times 10\text{人}) + (20\text{MB} \times 10\text{人}) \\ &\geq 1,200\text{MB} \end{aligned}$$

したがって、A 事業所、B 事業所、そのほかの事業所のユーザが使用する個人ルートフォルダのベースパス情報に設定する最大予約可能容量には、次の容量が必要になります。

- 最大予約可能容量 A：2,000MB 以上
- 最大予約可能容量 B：2,800MB 以上
- 最大予約可能容量 C：1,200MB 以上

(b) ワークスペースルートフォルダに必要な最大予約可能容量の見積もり

表 6-12、表 6-13 および表 6-14 を参考に、ワークスペースルートフォルダに割り当てるデフォルトのベースパス情報に必要な最大予約可能容量を算出します。ここでは、表 6-13 の最大予約可能容量 W を算出します。

種別がコミュニティフォルダのベースパス情報は、デフォルトだけが登録されているので、すべてのワークスペースルートフォルダがデフォルトのベースパスに格納されます。また、最大許容サイズ情報も、デフォルトだけが登録されているので、作成されるワークスペースルートフォルダには、デフォルトの最大許容サイズが割り当てられます。

見積もり式を次に示します。なお、ここでは前提条件として、想定コミュニティ数を 400 とします。

最大予約可能容量 W の見積もり式

$$\begin{aligned} \text{最大予約可能容量W} &\geq 50\text{MB} \times 400\text{個} \\ &\geq 20,000\text{MB} \end{aligned}$$

したがって、ワークスペースルートフォルダに割り当てるデフォルトのベースパス情報に設定する最大予約可能容量として、最大予約可能容量 W には、20,000MB 以上が必要となります。

(c) グループルートフォルダに必要な最大予約可能容量の見積もり

表 6-12、表 6-13 および表 6-14 を参考に、A 事業所、B 事業所、そのほかの事業所のグループルートフォルダに割り当てるデフォルトのベースパス情報に必要な最大予約可能容量を算出します。ここでは、表 6-13 の最大予約可能容量 Ga、最大予約可能容量 Gb、および最大予約可能容量 Gz を算出します。

見積もり式を次に示します。なお、ここでは前提条件として、事業所ごとに、グループルートフォルダを一つずつ作成するとします。

最大予約可能容量 Ga の見積もり式

$$\begin{aligned} \text{最大予約可能容量Ga} &\geq 1,600\text{MB} \times 1\text{個} \\ &\geq 1,600\text{MB} \end{aligned}$$

最大予約可能容量 Gb の見積もり式

$$\begin{aligned} \text{最大予約可能容量Gb} &\geq 800\text{MB} \times 1\text{個} \\ &\geq 800\text{MB} \end{aligned}$$

最大予約可能容量 Gz の見積もり式

$$\begin{aligned} \text{最大予約可能容量 } G_z &\geq 200\text{MB} \times 1\text{個} \\ &> 200\text{MB} \end{aligned}$$

したがって、A 事業所、B 事業所、そのほかの事業所のグループルートフォルダのベースパス情報に設定する最大予約可能容量には、次の容量が必要となります。

- 最大予約可能容量 Ga：1,600MB 以上
- 最大予約可能容量 Gb：800MB 以上
- 最大予約可能容量 Gz：200MB 以上

(3) ファイルシステムに必要なディスク容量の見積もり例

ディスクの容量の見積もり例について説明します。

ここでは、ファイルシステムとして使用するディスクの容量が決まっていないとして、表 6-13 のディスク G の容量を見積もります。ディスク G には、ベースパスとして G:¥FILE1 および G:¥FILE2 が設定されています。なお、ここでは前提条件としてディスク G の利用率を 90% に設定することにします。

「(2) 最大予約可能容量の見積もり例」で算出した最大予約可能容量 C と同じ値を最大使用可能容量 C' に、最大予約可能容量 W と同じ値を最大使用可能容量 W' に設定します。最大使用可能容量 C' および最大使用可能容量 W' は、次の値となります。

- 最大使用可能容量 C'：1,200MB
- 最大使用可能容量 W'：20,000MB

見積もり式は次のようになります。

ディスク G の容量の見積もり式

$$\begin{aligned} 90\% &= (1,200\text{MB} + 20,000\text{MB}) \div \text{VS} \times 100 \\ &= 21,200\text{MB} \div \text{VS} \times 100 \\ \text{VS} &= \text{約}23,556\text{MB} \end{aligned}$$

したがって、ディスク G には、23,556MB 以上の容量が必要となります。

なお、ディスク容量に空きがなくなった場合は、別のディスクを割り当てる必要があります。別のディスクを割り当てるには、新しくベースパス情報を追加します。ベースパス情報の追加が必要になった場合の詳細については、「6.2.4(1) 最大許容サイズを設定した運用例」を参照してください。

6.3.4 最大許容サイズを設定しない運用の場合のファイルシステムの容量の見積もり

ここでは、最大許容サイズを設定しない運用の場合のファイルシステムの容量の見積もりについて説明します。ファイルシステムのディスクの容量の概算は、次の三つの式の合計から求めてください。

- 個人ユーザが利用するファイルサイズの合計 = 平均ファイルサイズ × 平均ファイル数 × 個人ユーザ数
- コミュニティで利用するファイルサイズの合計 = 平均ファイルサイズ × 平均ファイル数 × コミュニティ数
- グループフォルダで利用するファイルサイズの合計 = 平均ファイルサイズ × 平均ファイル数 × グループルートフォルダ数

6.4 デフォルトのベースパス情報の登録

デフォルトのベースパス情報を登録します。この設定は、必ず実行してください。

デフォルトのベースパス情報の登録は、File Sharing クライアントから、オブジェクト操作ツールの独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) を使用して実行します。このコマンドは、セキュリティ管理者が実行します。

(1) プロパティ情報ファイルの準備

デフォルトのベースパス情報を登録するために、プロパティ情報ファイルを準備します。

デフォルトのベースパス情報として、次の 3 種類のベースパス情報を登録します。

- 個人ルートフォルダ用のベースパス情報
- ワークスペースルートフォルダ用のベースパス情報
- グループルートフォルダ用のベースパス情報

デフォルトのベースパス情報は、個人ルートフォルダ用、ワークスペースルートフォルダ用、およびグループルートフォルダ用に、少なくとも一つずつ登録してください。

プロパティ情報ファイルの記述例を次に示します。記述例の太字の個所は、必ず変更してください。

記述例

```

; 個人ルートフォルダ用のベースパス情報
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_Path = 'パス1'
cfsProp_Name = '名前1'
cfsProp_Type = 8
cfsProp_Priority = 9999
cfsProp_Capacity = '最大予約可能容量1'
cfsProp_FreeSpace = '空き容量1'
cfsProp_MaxUsableSpace = '最大使用可能容量1'
cfsProp_UsedCount = 0
cfsProp_ValidFlag = 1
cfsProp_ParameterName = ''
cfsProp_ParameterValue = ''
dbrProp_OwnerPermission = NONE
dbrProp_EveryonePermission = PRP | PWP | PRC | PWC | PV | PL | PD

; ワークスペースルートフォルダ用のベースパス情報
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_Path = 'パス2'
cfsProp_Name = '名前2'
cfsProp_Type = 2
cfsProp_Priority = 9999
cfsProp_Capacity = '最大予約可能容量2'
cfsProp_FreeSpace = '空き容量2'
cfsProp_MaxUsableSpace = '最大使用可能容量2'
cfsProp_UsedCount = 0
cfsProp_ValidFlag = 1
cfsProp_ParameterName = ''
cfsProp_ParameterValue = ''
dbrProp_OwnerPermission = NONE
dbrProp_EveryonePermission = PRP | PWP | PRC | PWC | PV | PL | PD

; グループルートフォルダ用のベースパス情報
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_Path = 'パス3'
cfsProp_Name = '名前3'
cfsProp_Type = 128
cfsProp_Priority = 9999
cfsProp_Capacity = '最大予約可能容量3'
cfsProp_FreeSpace = '空き容量3'
cfsProp_MaxUsableSpace = '最大使用可能容量3'
cfsProp_UsedCount = 0
cfsProp_ValidFlag = 1

```

```
cfsProp_ParameterName = ''
cfsProp_ParameterValue = ''
dbrProp_OwnerPermission = NONE
dbrProp_EveryonePermission = PRP | PWP | PRC | PWC | PV | PL | PD
```

変更方法を次の表に示します。

表 6-15 デフォルトのベースパス情報を登録するためのプロパティ情報ファイルの変更方法

項目名	設定する値
パス 1*1	個人ルートフォルダ下のファイル実体を格納するベースパスを指定します。 なお、パスは UNC 形式またはドライブ名からフルパスで指定できます。ただし、164 バイト以内で指定してください。UNC 形式で指定する場合は、File Sharing サーバでネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini) を設定する必要があります。詳細は、「5.2.11 ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini)」を参照してください。 また、文書空間の文字コード種別が UTF-8 の場合は、印刷可能な ASCII コードで指定してください。
名前 1*2	任意の名前を指定します。この名前は、ベースパス情報を識別するために使用します。「名前 2」、「名前 3」に指定する名前と重複しないようにしてください。
最大予約可能容量 1	「パス 1」で指定したパスに対する最大予約可能容量をバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~2,199,023,255,552 (2TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。 なお、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、-1 を指定してください。
空き容量 1	「最大予約可能容量 1」に指定した値と同じ値を指定します。
最大使用可能容量 1	「パス 1」で指定したパスに対する最大使用可能容量をバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~2,199,023,255,552 (2TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。 なお、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、-1 を指定してください。
パス 2*1	ワークスペースルートフォルダ下のファイル実体を格納するベースパスを指定します。 なお、パスは UNC 形式またはドライブ名からフルパスで指定できます。ただし、164 バイト以内で指定してください。UNC 形式で指定する場合は、File Sharing サーバでネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini) を設定する必要があります。詳細は、「5.2.11 ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini)」を参照してください。 また、文書空間の文字コード種別が UTF-8 の場合は、印刷可能な ASCII コードで指定してください。
名前 2*2	任意の名前を指定します。この名前は、ベースパス情報を識別するために使用します。「名前 1」、「名前 3」に指定する名前と重複しないようにしてください。
最大予約可能容量 2	「パス 2」で指定したパスに対する最大予約可能容量をバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~2,199,023,255,552 (2TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。 なお、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、-1 を指定してください。
空き容量 2	「最大予約可能容量 2」に指定した値と同じ値を指定します。
最大使用可能容量 2	「パス 2」で指定したパスに対する最大使用可能容量をバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~2,199,023,255,552 (2TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。 なお、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、-1 を指定してください。
パス 3*1	グループルートフォルダ下のファイル実体を格納するベースパスを指定します。

項目名	設定する値
パス 3*1	<p>なお、パスは UNC 形式またはドライブ名からフルパスで指定できます。ただし、164 バイト以内で指定してください。UNC 形式で指定する場合は、File Sharing サーバでネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini) を設定する必要があります。詳細は、「5.2.11 ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini)」を参照してください。</p> <p>また、文書空間の文字コード種別が UTF-8 の場合は、印刷可能な ASCII コードで指定してください。</p>
名前 3*2	<p>任意の名前を指定します。この名前は、ベースパス情報を識別するために使用します。「名前 1」、「名前 2」に指定する名前と重複しないようにしてください。</p>
最大予約可能容量 3	<p>「パス 3」で指定したパスに対する最大予約可能容量をバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~2,199,023,255,552 (2TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。</p> <p>なお、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、-1 を指定してください。</p>
空き容量 3	<p>「最大予約可能容量 3」に指定した値と同じ値を指定します。</p>
最大使用可能容量 3	<p>「パス 3」で指定したパスに対する最大使用可能容量をバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~2,199,023,255,552 (2TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。</p> <p>なお、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、-1 を指定してください。</p>

注※1

パスには、種別ごとに一意な値を指定してください。個人ルートフォルダ用のパス、ワークスペースルートフォルダ用のパス、およびグループルートフォルダ用のパスに同じパスを指定することはできません。ただし、複数の個人ルートフォルダ用のパスに同じパスを指定したり、複数のワークスペースルートフォルダ用のパスに同じパスを指定したり、複数のグループルートフォルダ用のパスに同じパスを指定したりすることはできません。

注※2

ベースパス情報の名前には、システムで一意な値を指定してください。複数のベースパス情報を登録する場合は、それぞれ異なる名前にしてください。

(2) コマンドの実行

独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) の実行例を次に示します。プロパティ情報ファイルの内容については、「6.4(1) プロパティ情報ファイルの準備」を参照してください。

実行例

dbrcrtdata プロパティ情報ファイル

独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) の詳細については、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」の「dbrcrtdata (独立データの作成)」を参照してください。

6.5 デフォルトの最大許容サイズ情報の登録

最大許容サイズを設定すると、個人ルートフォルダ、ワークスペースルートフォルダ、またはグループルートフォルダで使用できるフォルダサイズを制限できます。これによって、特定のユーザによって共有資源であるディスク容量を使い切ってしまうことを防げます。

最大許容サイズを設定して運用する場合は、この設定を必ず実行してください。最大許容サイズを設定しない運用の場合、この設定は不要です。

デフォルトの最大許容サイズ情報の登録は、File Sharing クライアントから、オブジェクト操作ツールの独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) を使用して実行します。このコマンドは、セキュリティ管理者が実行します。

(1) プロパティ情報ファイルの準備

デフォルトの最大許容サイズ情報を登録するために、プロパティ情報ファイルを準備します。

デフォルトの最大許容サイズ情報として、次の3種類の最大許容サイズ情報を登録します。

- 個人ルートフォルダ用の最大許容サイズ情報
- ワークスペースルートフォルダ用の最大許容サイズ情報
- グループルートフォルダ用の最大許容サイズ情報

なお、デフォルトの最大許容サイズ情報は、個人ルートフォルダ用、ワークスペースルートフォルダ用、およびグループルートフォルダ用の一つずつ登録してください。複数登録しないでください。

プロパティ情報ファイルの記述例を次に示します。記述例の太字の個所は、必ず変更してください。

記述例

```

; 個人ルートフォルダ用の最大許容サイズ情報
[cfsClass_Quota]
cfsProp_Type = 8
cfsProp_ParameterName = ''
cfsProp_ParameterValue = ''
cfsProp_TotalAvailableSize = '最大許容サイズ1'
dbrProp_OwnerPermission = NONE
dbrProp_EveryonePermission = PRP | PWP | PRC | PWC | PV | PL | PD

; ワークスペースルートフォルダ用の最大許容サイズ情報
[cfsClass_Quota]
cfsProp_Type = 2
cfsProp_ParameterName = ''
cfsProp_ParameterValue = ''
cfsProp_TotalAvailableSize = '最大許容サイズ2'
dbrProp_OwnerPermission = NONE
dbrProp_EveryonePermission = PRP | PWP | PRC | PWC | PV | PL | PD

; グループルートフォルダ用の最大許容サイズ情報
[cfsClass_Quota]
cfsProp_Type = 128
cfsProp_ParameterName = ''
cfsProp_ParameterValue = ''
cfsProp_TotalAvailableSize = '最大許容サイズ3'
dbrProp_OwnerPermission = NONE
dbrProp_EveryonePermission = PRP | PWP | PRC | PWC | PV | PL | PD

```

変更方法を次の表に示します。

表 6-16 デフォルトの最大許容サイズ情報を登録するためのプロパティ情報ファイルの変更方法

項目名	設定する値
最大許容サイズ 1	個人ルートフォルダ用の最大許容サイズをバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~1,099,511,627,776 (1TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。
最大許容サイズ 2	ワークスペースルートフォルダ用の最大許容サイズをバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~1,099,511,627,776 (1TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。
最大許容サイズ 3	グループルートフォルダ用の最大許容サイズをバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1,048,576 (1MB) ~1,099,511,627,776 (1TB) です。ただし、1,048,576 (1MB) で割り切れる値にしてください。

なお、最大許容サイズに設定する値は、ベースパス情報に設定した最大予約可能容量を考慮して決定してください。

ベースパス情報の最大予約可能容量の算出方法の詳細については、「6.3.1 最大予約可能容量の見積もり」を参照してください。

(2) コマンドの実行

独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) の実行例を次に示します。プロパティ情報ファイルの内容については、「6.5(1) プロパティ情報ファイルの準備」を参照してください。

実行例

```
dbrcrtdata プロパティ情報ファイル
```

独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) の詳細については、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」の「dbrcrtdata (独立データの作成)」を参照してください。

6.6 運用開始前のベースパス情報の設定

ここでは、運用開始前のベースパス情報の設定について、設定する画面、ベースパスの割り当てられ方、設定規則および設定例について説明します。

運用開始前のベースパス情報の設定は、[ファイル共有設定] ポートレットから表示される画面を使用して実行します。この設定は、ポータル管理グループに登録しているシステム管理者が実行します。

なお、[ファイル共有設定] ポートレットは、コミュニティのワークスペースからは使用できません。また、ポートレット機能を使用するためには、アプリケーションサーバが起動している必要があります。ポートレット機能を使用する前に、アプリケーションサーバの状態を確認してください。

！ 注意事項

[ファイル共有] ポートレットを使用する（初めてログインする）のは、運用開始前のベースパス情報の設定、および最大許容サイズ情報の設定がすべて終了してからにしてください。デフォルトのベースパス情報および最大許容サイズ情報を登録したあと、デフォルト以外のベースパス情報および最大許容サイズ情報を設定しないでログインすると、作成する個人ルートフォルダ、グループルートフォルダおよびワークスペースルートフォルダには、デフォルトのベースパス情報および最大許容サイズ情報を基にベースパスおよび最大許容サイズが設定されます。

(1) 運用開始前にベースパス情報を設定する画面

デフォルトのベースパス情報を登録したあと、運用開始前にベースパス情報を設定します。運用開始前のベースパス情報の設定では、次に示す画面を使用します。

- [ファイル共有設定] ポートレット
- [ベースパス情報操作] 画面
- [ベースパス情報の追加] 画面
- [プロパティ設定] 画面

これらの画面では、次の表に示すベースパス情報の操作ができます。

表 6-17 運用開始前に画面からできるベースパス情報の操作

項番	操作		操作する画面
1	ベースパス情報の参照		<ul style="list-style-type: none"> • [ファイル共有設定] ポートレット • [ベースパス情報操作] 画面 • [プロパティ設定] 画面
2	ベースパス情報の追加	デフォルトの新規登録	×
		デフォルトの追加	[ベースパス情報の追加] 画面
		デフォルト以外の追加	[ベースパス情報の追加] 画面
3	ベースパス情報の削除	デフォルトの削除 ^{*1}	[ベースパス情報操作] 画面
		デフォルト以外の削除	[ベースパス情報操作] 画面
4	ベースパス情報の変更 ^{*2}		[プロパティ設定] 画面

(凡例)

×：操作できません。

注※1

デフォルトをすべて削除することはできません。少なくとも一つは登録しておく必要があります。

注※2

ベースパス情報の状態、最大予約可能容量、および最大使用可能容量を変更できます。なお、状態、最大予約可能容量、および最大使用可能容量以外の設定を変更したい場合は、変更したいベースパス情報を削除してから、変更したベースパス情報を新しく追加してください。ただし、すでに使用しているベースパス情報は削除できません。

各画面の操作方法、および画面の詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(2) ベースパスの割り当てられ方

個人ルートフォルダ、コミュニティルートフォルダまたはグループルートフォルダを作成するときに、どのようにベースパスが割り当てられるかについて説明します。

(a) 個人ルートフォルダの場合

個人フォルダを使用するユーザが、ポータルを経由して初めて File Sharing にアクセスしたときに、個人ルートフォルダが作成され、ベースパスが割り当てられます。条件種別ごとの割り当てられ方を次に示します。

条件種別が役職のとき

個人フォルダのベースパス情報を役職単位に割り当てる設定の場合、個人フォルダを使用するユーザのユーザ情報で役職に設定されている値と一致する条件値のベースパス情報のベースパスが、個人ルートフォルダに割り当てられます。

条件種別が所属組織のとき

所属組織単位に割り当てる設定の場合、個人フォルダを使用するユーザのユーザ情報で所属組織に設定されている値と一致する条件値のベースパス情報のベースパスが、個人ルートフォルダに割り当てられます。

(b) ワークプレースルートフォルダの場合

ユーザがコミュニティを作成するときに、コミュニティルートフォルダおよびワークプレースルートフォルダが作成され、ワークプレースルートフォルダにベースパスが割り当てられます。条件種別ごとの割り当てられ方を次に示します。

条件種別が役職のとき

コミュニティフォルダのベースパス情報を役職単位に割り当てる設定の場合、コミュニティを作成したユーザのユーザ情報で役職に設定されている値と一致する条件値のベースパス情報のベースパスが、ワークプレースルートフォルダに割り当てられます。

条件種別が所属組織のとき

所属組織単位に割り当てる設定の場合、コミュニティを作成したユーザのユーザ情報で所属組織に設定されている値と一致する条件値のベースパス情報のベースパスが、ワークプレースルートフォルダに割り当てられます。

(c) グループルートフォルダの場合

グループルートフォルダの作成コマンド (cfsrctgrpfldr) を実行してグループルートフォルダを作成したときに、ベースパスが割り当てられます。コマンド実行時の指定で代表組織の組織 ID を指定するか、代表ユーザのユーザ ID を指定するかで、割り当てられ方が異なります。コマンド実行時の指定ごとの割り当てられ方を次に示します。

代表組織の組織 ID を指定するとき

代表組織の組織 ID を指定してグループルートフォルダを作成すると、代表組織の組織 ID または代表組織が属する組織の組織 ID と一致する条件値のベースパス情報のベースパスが割り当てられます。代表組織が属する組織の組織 ID と一致する条件値のベースパス情報が複数ある場合は、いちばん下位にある組織の組織 ID を条件値とするベースパス情報のベースパスが割り当てられます。

代表ユーザのユーザ ID を指定するとき

代表ユーザのユーザ ID を指定してグループルートフォルダを作成すると、代表ユーザが所属する組織の組織 ID と一致する条件値のベースパス情報のベースパスが割り当てられます。代表ユーザが所属する組織の組織 ID と一致する条件値のベースパス情報が複数ある場合は、いちばん下位にある組織の組織 ID を条件値とするベースパス情報のベースパスが割り当てられます。

(3) ベースパス情報の割り当て条件の指定規則

ベースパス情報に設定する割り当て条件の指定規則について説明します。

割り当て条件には、種別ごとに条件種別、条件値、パス、最大予約可能容量および最大使用可能容量を指定します。パス、最大予約可能容量および最大使用可能容量の指定規則については、デフォルトのベースパス情報を登録する場合の指定方法と同じです。デフォルトのベースパス情報の登録については、「6.4 デフォルトのベースパス情報の登録」を参照してください。

条件種別および条件値を指定する場合の規則を次に示します。

条件種別の指定規則

- 種別ごとに条件種別を一つだけ指定できます。
- 個人ルートフォルダまたはワークプレースルートフォルダのベースパス情報を設定する場合、指定できる条件種別は役職または所属組織です。
- グループルートフォルダのベースパス情報を設定する場合、指定できる条件種別は組織 ID です。

条件値の指定規則

- 条件種別に役職を指定する場合、条件値には、ルートフォルダを作成するユーザのユーザ情報から参照できる役職と同じ値を指定します。
ユーザ情報から参照できる役職は、Collaboration - Directory Access のプロパティファイルで指定した役職に相当する属性名です。
- 条件種別に所属組織を指定する場合、条件値には、ルートフォルダを作成するユーザのユーザ情報から参照できる所属組織と同じ値を指定します。
ユーザ情報から参照できる所属組織は、Collaboration - Directory Access のプロパティファイルで指定した所属組織に相当する属性名です。
- 条件種別に組織 ID を指定する場合、条件値には、ルートフォルダを作成するときに指定する代表組織の組織 ID、または代表ユーザが所属する組織の組織 ID を指定します。
組織 ID は、Collaboration - Directory Access のプロパティファイルで指定した組織 ID に相当する属性名です。

(4) 運用開始前のベースパス情報の設定例

運用開始前のベースパス情報の設定例について説明します。

デフォルトのベースパス情報を次のように登録している場合を考えます。デフォルトのベースパス情報の登録方法については、「6.4 デフォルトのベースパス情報の登録」を参照してください。

表 6-18 デフォルトのベースパス情報を登録する例

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	デフォルト		G:*FILE1	20GB	20GB
2	コミュニティフォルダ	デフォルト		G:*FILE2	30GB	30GB
3	グループフォルダ	デフォルト		G:*FILE3	50GB	50GB

デフォルトのベースパス情報を登録したあと、[ベースパス情報の追加] 画面を使用して、デフォルト以外のベースパス情報を追加します。

表 6-19 運用開始前にベースパス情報を追加する例

項番	種別	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人フォルダ	所属組織	A 事業所	E:*FILE1	20GB	20GB
2	個人フォルダ	所属組織	B 事業所	F:*FILE1	10GB	10GB
3	グループフォルダ	組織 ID	A 事業所の組織 ID	H:*FILE1	20GB	20GB
4	グループフォルダ	組織 ID	B 事業所の組織 ID	I:*FILE1	10GB	10GB

個人フォルダの場合、ユーザが所属する組織が A 事業所であれば E:*FILE1、B 事業所であれば F:*FILE1、A 事業所および B 事業所以外であればデフォルトの G:*FILE1 が、個人ルートフォルダに対するベースパスとして割り当てられます。グループフォルダの場合、A 事業所に所属するユーザのユーザ ID または組織の組織 ID を指定して作成するグループルートフォルダには H:*FILE1、B 事業所に所属するユーザのユーザ ID または組織の組織 ID を指定して作成するグループルートフォルダには I:*FILE1、A 事業所および B 事業所以外に所属するユーザまたは組織が作成するグループルートフォルダにはデフォルトの G:*FILE3 が、ベースパスとして割り当てられます。なお、コミュニティフォルダ下のワークスペースルートフォルダについては、デフォルトのベースパス情報だけを設定して使用することになります。

このように設定した場合の運用については、「6.2.3(1) 最大許容サイズを設定した運用の考え方」を参照してください。

6.7 運用開始前の最大許容サイズ情報の設定

ここでは、運用開始前の最大許容サイズ情報の設定について、設定する画面、最大許容サイズの割り当てられ方、設定規則および設定例について説明します。

(1) 運用開始前に最大許容サイズ情報を設定する画面

最大許容サイズを設定する運用の場合、デフォルトの最大許容サイズ情報を登録したあと、運用開始前に最大許容サイズ情報を設定します。運用開始前の最大許容サイズ情報の設定では、次に示す画面を使用します。

- [ファイル共有設定] ポートレット
- [最大許容サイズ情報操作] 画面
- [最大許容サイズ情報の追加] 画面

これらの画面では、次の表に示す最大許容サイズ情報の操作ができます。

表 6-20 運用開始前に画面からできる最大許容サイズ情報の操作

項番	操作		操作する画面
1	最大許容サイズ情報の参照		<ul style="list-style-type: none"> • [ファイル共有設定] ポートレット • [最大許容サイズ情報操作] 画面
2	最大許容サイズ情報の追加	デフォルトの追加	×
		デフォルト以外の追加	[最大許容サイズ情報の追加] 画面
3	最大許容サイズ情報の削除	デフォルトの削除	×
		デフォルト以外の削除	[最大許容サイズ情報操作] 画面

(凡例)

×：操作できません。

なお、最大許容サイズ情報を変更したい場合は、変更したい最大許容サイズ情報を削除してから、変更した最大許容サイズ情報を新しく追加してください。

各画面の操作方法、および画面の詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(2) 最大許容サイズの割り当てられ方

個人ルートフォルダ、コミュニティルートフォルダまたはグループルートフォルダを作成するときに、どのように最大許容サイズが割り当てられるかについて説明します。

(a) 個人ルートフォルダの場合

個人フォルダを使用するユーザが、ポータルを経由して初めて File Sharing にアクセスしたときに、個人ルートフォルダが作成され、最大許容サイズが割り当てられます。条件種別ごとの割り当てられ方を次に示します。

条件種別が役職のとき

最大許容サイズ情報を役職単位に割り当てる設定の場合、個人フォルダを使用するユーザのユーザ情報で役職に設定されている値と一致する条件値の最大許容サイズ情報の最大許容サイズが、個人ルートフォルダに割り当てられます。

条件種別が所属組織のとき

最大許容サイズ情報を所属組織単位に割り当てる設定の場合、個人フォルダを使用するユーザのユーザ情報で所属組織に設定されている値と一致する条件値の最大許容サイズ情報の最大許容サイズが、個人ルートフォルダに割り当てられます。

(b) ワークスペースルートフォルダの場合

ユーザがコミュニティを作成するときに、コミュニティルートフォルダおよびワークスペースルートフォルダが作成され、ワークスペースルートフォルダに最大許容サイズが割り当てられます。条件種別ごとの割り当てられ方を次に示します。

条件種別が役職のとき

最大許容サイズ情報を役職単位に割り当てる設定の場合、コミュニティを作成したユーザのユーザ情報で役職に設定されている値と一致する条件値の最大許容サイズ情報の最大許容サイズが、ワークスペースルートフォルダに割り当てられます。

条件種別が所属組織のとき

最大許容サイズ情報を所属組織単位に割り当てる設定の場合、コミュニティを作成したユーザのユーザ情報で所属組織に設定されている値と一致する条件値の最大許容サイズ情報の最大許容サイズが、ワークスペースルートフォルダに割り当てられます。

(c) グループルートフォルダの場合

グループルートフォルダの作成コマンド (cfsrtgrpfldr) を実行してグループルートフォルダを作成したときに、最大許容サイズが割り当てられます。コマンド実行時の指定で代表組織の組織 ID を指定するか、代表ユーザのユーザ ID を指定するかで、割り当てられ方が異なります。コマンド実行時の指定ごとの割り当てられ方を次に示します。

代表組織の組織 ID を指定するとき

代表組織の組織 ID を指定してグループルートフォルダを作成すると、代表組織の組織 ID または代表組織が属する組織の組織 ID と一致する条件値の最大許容サイズ情報の最大許容サイズが割り当てられます。代表組織が属する組織の組織 ID と一致する条件値の最大許容サイズ情報が複数ある場合は、いちばん下位にある組織の組織 ID を条件値とする最大許容サイズ情報の最大許容サイズが割り当てられます。

代表ユーザのユーザ ID を指定するとき

代表ユーザのユーザ ID を指定してグループルートフォルダを作成すると、代表ユーザが所属する組織の組織 ID と一致する条件値の最大許容サイズ情報の最大許容サイズが割り当てられます。代表ユーザが所属する組織の組織 ID と一致する条件値の最大許容サイズ情報が複数ある場合は、いちばん下位にある組織の組織 ID を条件値とする最大許容サイズ情報の最大許容サイズが割り当てられます。

(3) 最大許容サイズ情報の割り当て条件の指定規則

最大許容サイズ情報に設定する割り当て条件の指定規則について説明します。

割り当て条件には、種別ごとに条件種別、条件値、および最大許容サイズを指定します。最大許容サイズ情報の指定規則については、デフォルトの最大許容サイズ情報を登録する場合の指定方法と同じです。デフォ

ルトの最大許容サイズ情報を登録する方法については、「6.5 デフォルトの最大許容サイズ情報の登録」を参照してください。

条件種別および条件値を指定する場合の規則を次に示します。

条件種別の指定規則

- 種別ごとに条件種別を一つだけ指定できます。
- 個人ルートフォルダまたはワークスペースルートフォルダに最大許容サイズ情報を設定する場合、指定できる条件種別は役職または所属組織です。
- グループルートフォルダに最大許容サイズ情報を設定する場合、指定できる条件種別は組織 ID です。

条件値の指定規則

- 条件種別に役職を指定する場合、条件値には、ルートフォルダを作成するユーザのユーザ情報から参照できる役職と同じ値を指定します。
ユーザ情報から参照できる役職は、Collaboration - Directory Access のプロパティファイルで指定した役職に相当する属性名です。
- 条件種別に所属組織を指定する場合、条件値には、ルートフォルダを作成するユーザのユーザ情報から参照できる所属組織と同じ値を指定します。
ユーザ情報から参照できる所属組織は、Collaboration - Directory Access のプロパティファイルで指定した所属組織に相当する属性名です。
- 条件種別に組織 ID を指定する場合、条件値には、ルートフォルダを作成するときに指定する代表組織の組織 ID、または代表ユーザが所属する組織の組織 ID を指定します。
組織 ID は、Collaboration - Directory Access のプロパティファイルで指定した組織 ID に相当する属性名です。

(4) 最大許容サイズ情報の運用開始前の割り当て条件の設定例

運用開始前の最大許容サイズ情報の設定例について説明します。

デフォルトの最大許容サイズ情報を次のように登録している場合を考えます。デフォルトの最大許容サイズ情報の登録方法については、「6.5 デフォルトの最大許容サイズ情報の登録」を参照してください。

表 6-21 デフォルトの最大許容サイズ情報を登録する例

項番	種別	条件種別	条件値	最大許容サイズ
1	個人フォルダ	デフォルト		10MB
2	コミュニティフォルダ	デフォルト		100MB
3	グループフォルダ	デフォルト		50MB

デフォルトの最大許容サイズ情報を登録したあと、「[最大許容サイズ情報の追加]」画面を使用して、デフォルト以外の最大許容サイズ情報を追加します。

表 6-22 運用開始前に最大許容サイズ情報を追加する例

項番	種別	条件種別	条件値	最大許容サイズ
1	個人フォルダ	役職	課長	30MB
2	個人フォルダ	役職	主任	20MB

項番	種別	条件種別	条件値	最大許容サイズ
3	グループフォルダ	組織 ID	A 事業所の組織 ID	80MB
4	グループフォルダ	組織 ID	B 事業所の組織 ID	40MB

個人フォルダの場合、役職が課長であれば 30MB、主任であれば 20MB、課長または主任以外であればデフォルトの 10MB が、個人ルートフォルダの最大許容サイズとして割り当てられます。グループフォルダの場合、A 事業所に所属するユーザのユーザ ID または組織の組織 ID を指定して作成するグループルートフォルダには 80MB が、B 事業所に所属するユーザのユーザ ID または組織の組織 ID を指定して作成するグループルートフォルダには 40MB が、最大許容サイズとして割り当てられます。なお、コミュニティフォルダ下のワークスペースルートフォルダについては、デフォルトの最大許容サイズだけを設定して使用することになります。

このように設定した場合の運用例については、「6.2.3(1) 最大許容サイズを設定した運用の考え方」を参照してください。

7

File Sharing の運用

この章では、File Sharing の運用方法について説明します。

7.1 File Sharing の運用作業

File Sharing の運用開始後に実行する運用作業について説明します。File Sharing の運用には、日常的に実行する作業と、定期的に行う作業があります。

また、File Sharing で使用する個人フォルダ、コミュニティフォルダ、およびグループフォルダは、利用者やコミュニティの増減によってメンテナンスをする必要があります。運用作業では、これらのフォルダのメンテナンス作業も実行します。

ここでは、次の運用作業について説明します。

- **File Sharing サーバの起動と終了**

File Sharing サーバの起動と終了は、File Sharing を使用するために日常的に行う作業です。File Sharing サーバを構築したマシンで、サービスまたはコマンドを使用して起動、終了します。

- **ファイル転送サービスの開始と停止（ファイル転送機能を使用する場合）**

ファイル転送サービスの開始と停止は、File Sharing サーバと File Sharing クライアントを別マシンで運用している場合に、日常的に行う作業です。File Sharing クライアントを構築したマシンで、サービスまたはコマンドを使用して開始、停止します。

- **データベースの運用**

データベースの運用では、File Sharing で管理しているフォルダとファイルの属性情報のバックアップを取得します。この作業は定期的に行う作業です。

- **ファイルシステムの運用**

ファイルシステムの運用では、File Sharing で管理しているファイルのファイル実体のバックアップを取得します。この作業は定期的に行う作業です。

また、ベースパス情報に設定する値の見積もりや、ベースパス情報の使用量の監視をします。この作業は、必要に応じて実行してください。

- **個人フォルダとコミュニティフォルダの運用**

File Sharing のシステムを使用するユーザ、コミュニティの変化に応じて、不要になったフォルダを削除します。この作業は必要に応じて実行してください。

- **グループフォルダの運用**

グループフォルダを利用する組織やユーザに応じて、グループルートフォルダを作成したり、グループフォルダの運用者を設定したりします。この作業は必要に応じて実行してください。

- **運用開始後のベースパス情報の設定**

- **運用開始後の最大許容サイズ情報の設定**

File Sharing のシステムを使用するユーザ数が増えた場合の容量拡張やそのほかの変化に応じて、ベースパス情報や最大許容サイズ情報の設定を参照、追加および削除します。

- **運用開始後のごみ箱の設定**

ごみ箱を使用するかどうかの設定を変更します。この作業は、必要に応じて実行してください。

- **アクセス履歴の取得**

アクセス履歴を取得する運用の場合、アクセス履歴を取得して File Sharing の利用状況を確認します。

- **監査ログの運用**

監査ログを出力する運用の場合、監査ログファイルに出力された監査ログから File Sharing のシステムに対する操作の履歴を確認できます。

このほか、障害が発生した場合には、障害情報を確認して対処する必要があります。障害発生時の対処については、「9. File Sharing の障害対策」を参照してください。

7.2 File Sharing サーバの起動と終了

ここでは、File Sharing サーバの起動と終了の方法について説明します。

7.2.1 File Sharing サーバの起動方法

File Sharing サーバの起動は、システム構成によって異なります。

ここでは、次に示す場合の起動方法について説明します。

- File Sharing サーバとファイルシステムを同じマシンに配置する場合
- File Sharing サーバとファイルシステムを異なるマシンに配置する場合
- クラスタリングシステムで運用する場合

! 注意事項

File Sharing サーバは、Collaboration - Online Community Management のデータベース、およびディレクトリサーバが起動していることを前提として、起動します。このため、File Sharing サーバを起動する前に、必ず Collaboration - Online Community Management のデータベース、およびディレクトリサーバを起動してください。また、File Sharing サーバが起動している間は、Collaboration - Online Community Management のデータベース、およびディレクトリサーバを停止しないでください。

Collaboration - Online Community Management のデータベース、およびディレクトリサーバを停止したり再起動したりする場合は、File Sharing サーバも停止して、Collaboration - Online Community Management のデータベース、およびディレクトリサーバを起動したあとで再起動してください。

(1) File Sharing サーバとファイルシステムを同じマシンに配置する場合

次の手順に従って、File Sharing サーバを起動してください。

1. File Sharing の前提となる、Collaboration - Online Community Management が使用するデータベースシステムが起動しているかを確認します。起動していない場合は、起動します。
2. File Sharing の前提となるディレクトリサーバが起動しているかを確認します。起動していない場合は、起動します。
3. File Sharing サーバが使用するデータベースシステムを起動します。
4. TPBroker のスマートエージェントを起動します。
操作 1.、操作 2.および操作 3.の順序は問いません。
5. File Sharing サーバを起動します。

次のどちらかの方法で起動してください。

- サービスメニューから起動する方法

コントロールパネルの [管理ツール] - [サービス] の [サービス] ダイアログで、サービス [Collaboration - File Sharing Server] を選択して、[開始] をクリックします。

- File Sharing サーバの起動コマンド (EDMStart) を実行する方法

File Sharing サーバの起動コマンド (EDMStart) を実行します。File Sharing サーバの起動コマンドの使用方法については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMStart (File Sharing サーバの起動)」を参照してください。

(2) File Sharing サーバとファイルシステムを異なるマシンに配置する場合

File Sharing サーバとファイルシステムを異なるマシンに配置する場合、ベースパス情報に設定したベースパスを次のどちらの方法で指定しているかによって、起動手順が異なります。

- UNC 形式で指定している場合
- ネットワークドライブのドライブ名から指定している場合

ベースパス情報の設定については、「6.4 デフォルトのベースパス情報の登録」を参照してください。

複数の File Sharing サーバで構成する複数実行環境を運用する場合に、ファイル実体の格納先として共有ディスクを使用している場合も、次のどちらかの手順で起動してください。なお、ファイル実体の格納先のディレクトリは、File Sharing サーバの起動前にあらかじめ共有設定をし「最大ユーザ数」を複数実行環境以上にしておく必要があります。

(a) ベースパスを UNC 形式で指定している場合

ベースパスを UNC 形式で指定している場合は、あらかじめ、ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini) に、ファイルシステムにアクセスするための情報を設定しておく必要があります。ネットワークリソース情報ファイルについては、「5.2.11 ネットワークリソース情報ファイル (netaccess.ini)」を参照してください。

起動手順を次に示します。

1. File Sharing の前提となる、Collaboration - Online Community Management が使用するデータベースシステムが起動しているかを確認します。起動していない場合は、起動します。
2. File Sharing の前提となるディレクトリサーバが起動しているかを確認します。起動していない場合は、起動します。
3. File Sharing サーバが使用するデータベースシステムを起動します。
4. TPBroker のスマートエージェントを起動します。
操作 1., 操作 2.および操作 3.の順序は問いません。
5. File Sharing サーバを起動します。
起動はサービスメニューから実行します。
サービス [Collaboration - File Sharing Server] のログオン設定で、Administrators 権限を持つユーザを割り当てて、サービスを起動します。

(b) ベースパスをネットワークドライブのドライブ名から指定している場合

ベースパスをネットワークドライブのドライブ名から指定している場合は、あらかじめ、File Sharing サーバとファイルシステムを同一ドメインまたは信頼関係を持つドメイン間で構成しておく必要があります。

起動手順を次に示します。

1. File Sharing の前提となる、Collaboration - Online Community Management が使用するデータベースシステムが起動しているかを確認します。起動されていない場合は、起動します。
2. File Sharing の前提となるディレクトリサーバが起動しているかを確認します。起動していない場合は、起動します。
3. File Sharing サーバが使用するデータベースシステムを起動します。
4. TPBroker のスマートエージェントを起動します。
操作 1., 操作 2.および操作 3.の順序は問いません。

5.各 File Sharing サーバのマシンの同一ドライブに、ファイル実体の格納先となる共有ディスクをネットワークドライブとして割り当てます。

6.File Sharing サーバを起動します。

起動はサービスメニューから実行します。

サービス [Collaboration - File Sharing Server] のログイン設定で、ドメインの Administrators 権限を持つユーザを割り当てて、サービスを起動します。

(3) クラスタリングシステムで運用する場合

クラスタリングシステムで運用する場合、ファイル実体の格納先ディレクトリに、共有ディスク情報を作成する必要があります。

共有ディスクを使用してクラスタリングシステムで運用する場合の起動手順を次に示します。なお、ベースパスをネットワークドライブのドライブ名から指定している場合は、あらかじめ、File Sharing サーバとファイルシステムを同一ドメインまたは信頼関係を持つドメイン間で構成しておく必要があります。

1.File Sharing の前提となる、Collaboration - Online Community Management が使用するデータベースシステムが起動しているかを確認します。起動されていない場合は、起動します。

2.File Sharing の前提となるディレクトリサーバが起動しているかを確認します。起動していない場合は、起動します。

3.File Sharing サーバが使用するデータベースシステムを起動します。

4.TPBroker のスマートエージェントを起動します。

操作 1., 操作 2.および操作 3.の順序は問いません。

5.File Sharing サーバを起動します。

起動はサービスメニューから実行します。

サービス [Collaboration - File Sharing Server] のログイン設定で、Administrators 権限を持つユーザを割り当てて、サービスを起動します。なお、ベースパスをネットワークドライブのドライブ名から指定している場合は、ドメインの Administrators 権限を持つユーザを割り当ててください。

7.2.2 File Sharing サーバの終了方法

次の手順に従って、File Sharing サーバを終了してください。

1.File Sharing サーバを終了します。

次のどちらかの方法で終了してください。

- サービスメニューから終了する方法

コントロールパネルの [管理ツール] - [サービス] の [サービス] ダイアログで、サービス [Collaboration - File Sharing Server] を選択して、[停止] をクリックします。

- File Sharing サーバの終了コマンド (EDMStop) を実行する方法

File Sharing サーバの終了コマンド (EDMStop) を実行します。File Sharing サーバの終了コマンドの使用方法については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMStop (File Sharing サーバの終了)」を参照してください。

2.TPBroker のスマートエージェントを終了します。

3.データベースシステムを終了します。

操作 2.および操作 3.の順序は問いません。

7.3 ファイル転送サービスの開始と停止

ここでは、ファイル転送機能を使用する場合のファイル転送サービスの開始と停止の方法について説明します。

この作業は、File Sharing サーバと File Sharing クライアントを別マシンに構築している場合に実行します。

7.3.1 ファイル転送サービスの開始方法

環境変数「_HIEDMS_FTPMODE」に静的モードを指定した場合、File Sharing クライアントを開始する前にファイル転送サービスを開始する必要があります。環境変数「_HIEDMS_FTPMODE」については、「4.4.2(2) 環境変数の設定」を参照してください。

ファイル転送サービスは、Administrators 権限を持つユーザが、次のどちらかの方法で開始してください。

(1) コマンドによって開始する方法

スタートアップの種類が「手動」の場合に、ファイル転送サービス開始コマンド (FtpSvStart) によって、サービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を開始する方法です。ファイル転送サービス開始コマンド (FtpSvStart) の指定方法については、「8.4 File Sharing クライアントのコマンドの詳細」の「FtpSvStart (ファイル転送サービスの開始)」を参照してください。

(2) サービスメニューから開始する方法

サービスメニューからファイル転送サービスを開始する場合、スタートアップの種類によって開始する方法が異なります。スタートアップの種類が「手動」または「自動」の場合の開始方法について説明します。

- スタートアップの種類が「手動」の場合

スタートアップの種類が「手動」の場合に、コントロールパネルの [管理ツール] - [サービス] の [サービス] ダイアログから開始する方法です。[サービス] ダイアログで、サービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を選択して、[開始] をクリックしてファイル転送サービスを開始してください。スタートアップパラメタでは、起動するファイル転送サービスプロセス数を指定できます。

スタートアップパラメタの指定方法

- 起動プロセス数 (prcnum)

起動するファイル転送サービスプロセス数を「prcnum=起動プロセス数」の形式で指定します。指定できる値の範囲は 1~20 です。このパラメタを省略した場合は、1 が仮定されます。

- スタートアップの種類が「自動」の場合

スタートアップの種類が「自動」の場合、OS 起動時にファイル転送サービスが開始されます。

7.3.2 ファイル転送サービスの停止方法

ファイル転送サービスは Administrators 権限を持つユーザが停止してください。ファイル転送サービスを停止する前に、ファイル転送サービスを使用するアプリケーションが動作中でないことを確認してください。ファイル転送サービスを停止するときは、次のどちらかの方法で停止してください。

(1) コマンドによって停止する方法

ファイル転送サービス停止コマンド (FtpSvStop) によって、サービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を停止する方法です。ファイル転送サービス停止コマンド (FtpSvStop) の指定方法につい

では、「8.4 File Sharing クライアントのコマンドの詳細」の「FtpSvStop (ファイル転送サービスの停止)」を参照してください。

(2) サービスメニューから停止する方法

コントロールパネルの [管理ツール] - [サービス] の [サービス] ダイアログからファイル転送サービスを停止する方法です。[サービス] ダイアログからサービス [Collaboration - File Sharing FTP Service] を選択して、[停止] をクリックしてファイル転送サービスを停止してください。

7.4 データベースの運用

ここでは、データベースの運用方法について説明します。

7.4.1 データベースのバックアップとリストア

File Sharing で使用する表のバックアップおよびリストアは、データベースシステムの機能を利用して実施します。なお、使用できるデータベースシステムは HiRDB のため、データのバックアップとリストアは HiRDB の機能を利用してください。HiRDB でのバックアップの取得方法とリストア方法の詳細については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」を参照してください。

データベースのバックアップおよびリストアは、必ず File Sharing サーバが管理しているファイルシステムのバックアップおよびリストアと同期して実施する必要があります。ファイルシステムのバックアップおよびリストアについては、「7.5.4 ファイルシステムのバックアップとリストア」を参照してください。

また、ハードウェア障害の発生に備えて、File Sharing がインストールされているシステムのレジストリ情報などの環境情報のバックアップも取得するようにしてください。

(1) データベースのバックアップとリストアについて

File Sharing サーバは、データベース上のレコードを組み合わせることで、File Sharing クライアントで扱う論理的なオブジェクトや、オブジェクト間の関連を実現しています。したがって、障害時の回復には、これらの関連の整合性を保持するようにバックアップおよびリストアを行う必要があります。

(2) データベースのバックアップとリストアの方法

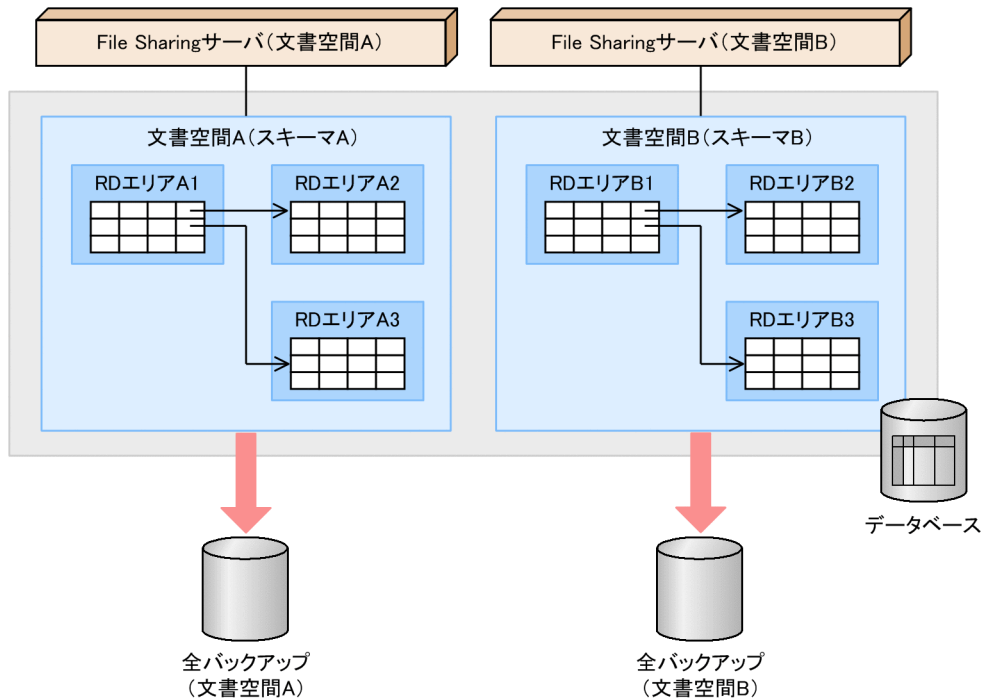
File Sharing サーバでは、オブジェクト間の関連を、文書空間単位に管理しています。また、文書空間はデータベースのスキーマに対応しており、文書空間単位で運用できます。

File Sharing サーバでは、File Sharing クライアントで扱うデータをデータベース上に格納しています。格納しているデータの障害回復には、データベースの機能を利用してください。オブジェクト間の関連の整合性を保持したバックアップとリストアの方法としては、文書空間単位でバックアップとリストアを行う方法と RD エリア単位のバックアップとリストアを行う方法があります。次に、これらの方法を説明します。

(a) 文書空間単位のバックアップとリストア

文書空間単位でのバックアップの取得の概念を次の図に示します。

図 7-1 文書空間単位でのバックアップの取得



文書空間（スキーマ）に属する全データのバックアップを、同期を取って取得します。障害が発生した場合は、全データをバックアップしたデータを基にリストアします。ただし、同期を取って全データのバックアップを取得する運用では、文書空間に属するデータ量が多い場合、バックアップおよびリストアに要する時間の増大や、障害回復までに、停止する業務範囲が大きいなどの問題が発生します。

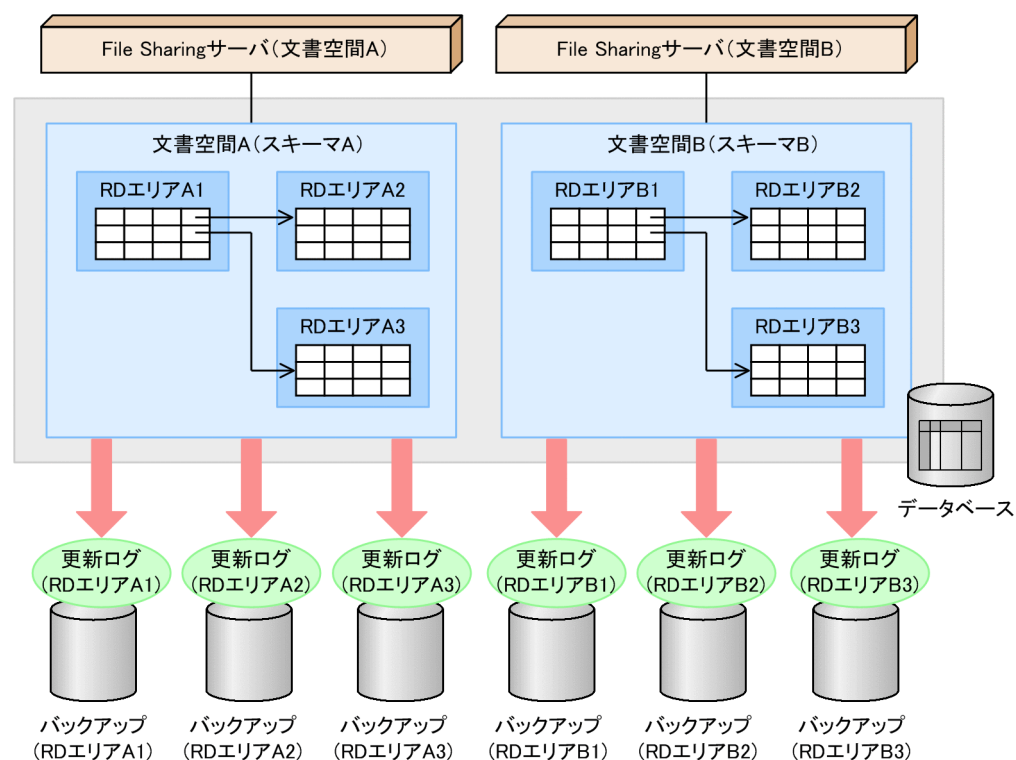
この運用の場合、更新ログの取得方法として次に示す方法のどちらかを選択してください。

- ロールバックおよびロールフォワードに必要なログを取得する。
この方法の場合、バックアップから取得したデータに対して、更新ログでの任意の同期点までの論理的な整合性を保ってリストアします。
- ロールバックに必要なログだけを取得する。
この方法の場合、最後に全データのバックアップを取得した時点までリストアします。

(b) RD エリア単位のバックアップと最新同期点までのリストア

RD エリア単位でのバックアップの取得の概念図を次の図に示します。

図 7-2 RD エリア単位でのバックアップ取得



文書空間を構成する個々の RD エリアまたはディスクのパーティション単位にバックアップします。障害が発生した場合は、バックアップしたデータを基に、障害の発生した RD エリアのデータをリストアします。このとき、ほかの RD エリアのデータとの関連の整合性を保証するため、データベースの更新ログから最新の同期点までリストアします。このため、更新ログの取得方法は、ロールバックおよびロールフォワードに必要なログを取得する設定にしてください。

この方式では、バックアップしたときに RD エリア相互の同期を取る必要がないため、対象データが多い場合にも、日々のバックアップ対象を全体の一部ずつとするなど、柔軟なバックアップの運用ができます。

(3) データベースのバックアップの取得

データベースシステムの機能を利用して、同期を取って、File Sharing が使用している表一式のバックアップを取得してください。バックアップ対象になる表やエリアなどの情報は、データベースの初期設定で使用したデータベース定義文を基に事前に用意してください。

データベースのバックアップおよびリストアは、必ず File Sharing サーバの停止中に実施してください。また、ハードウェア障害の発生に備えて、File Sharing サーバがインストールされているシステムのレジストリ情報などの環境情報のバックアップも取得するようにしてください。

(4) データベースのリストアの方法

取得したバックアップのリストアは、データベースシステムの機能を利用して実行してください。リストアを実行する前には、必ず File Sharing サーバを停止させてください。

7.4.2 ジャーナルファイルの運用

障害が発生した場合は、データベースシステムが取得するジャーナルファイルを利用してデータを回復してください。

なお、使用できるデータベースシステムは HiRDB です。したがって、HiRDB が取得するジャーナルファイルを利用して、データを回復してください。HiRDB のジャーナルファイルの運用方法については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」を参照してください。

7.4.3 データベースのレプリケーション

データベースの内容をほかのデータベースに反映する機能のことを、レプリケーション機能といいます。レプリケーション機能を利用することで、File Sharing が使用するデータベースのデータを抽出して、ほかのデータベースへ反映できます。

なお、使用できるデータベースシステムは HiRDB です。したがって、HiRDB のレプリケーション機能を利用します。HiRDB のレプリケーション機能を利用するには、HiRDB に HiRDB Datareplicator を組み込む必要があります。HiRDB のレプリケーション機能については、マニュアル「HiRDB Datareplicator」を参照してください。

(1) データベースのレプリケーションの方法

データベースシステムのレプリケーション機能を利用して、ほかのデータベースへデータを反映できます。レプリケーションの対象となる表やエリアなどの情報は、データベースの初期設定で使ったデータベース定義文を基に事前に用意してください。

(2) クラス、プロパティとデータベースの表、列との対応関係

データベースシステムの定義系 SQL を利用して、クラス、プロパティとデータベースの表、列との対応が取れます。使用できるデータベースシステムは、HiRDB です。したがって、ここでは HiRDB を利用する場合の対応関係について説明します。

File Sharing 用データベース定義文の作成コマンド (EDMCrtSql) では、メタ情報ファイルに記述されているクラス識別子を、オブジェクトを格納する RDB 表名として設定します。また、メタ情報ファイルに記述されているプロパティ識別子を表の各列名として設定します。

EDMCrtSql コマンドを実行すると、HiRDB の定義系 SQL である COMMENT を使用して、クラスおよびプロパティの説明を各表および列の注釈としてデータベース定義文に出力します。EDMCrtSql コマンドの使用方法については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCrtSql (File Sharing 用データベース定義文の作成)」を参照してください。ユーザは HiRDB のディクショナリの SQL_TABLES 表および SQL_COLUMNS 表を検索して、表や列に付けられている注釈を参照できます。

したがって、レプリケーション機能を利用する場合は、表や列に付けられた注釈を参照して、File Sharing で作成したクラスおよびプロパティとの対応に注意してください。

7.5 ファイルシステムの運用

ここでは、File Sharing サーバが管理しているファイルシステムの運用方法について説明します。

7.5.1 ベースパス情報の最大予約可能容量の見積もり（最大使用可能容量よりも大きな値を設定する場合）

ルートフォルダを作成すると、ディスクの容量のうち、ルートフォルダに設定されている最大許容サイズ分の容量が予約されます。しかし、ルートフォルダ単位の使用率が低いと、予約されるだけで使用されていない領域ができてしまいます。このような予約されるだけで使用されていない領域が増えて、予約量が最大予約可能容量に達してしまったときは、ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張して、最大使用可能容量よりも大きな値を最大予約可能容量に設定します。

運用を開始したあとに、ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張して、最大使用可能容量よりも大きな値を最大予約可能容量に設定する場合の、最大予約可能容量の見積もりについて説明します。

なお、ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張して、最大使用可能容量よりも大きな値を最大予約可能容量に設定する場合の運用の例については、「6.2.4(2) ベースパス情報の最大予約可能容量を拡張し、使用量を監視する運用例」を参照してください。

(1) 最大予約可能容量を見積もる方法（最大使用可能容量よりも大きな値を設定する場合）

最大予約可能容量は、次の手順で見積もります。

1. ベースパス情報の使用量と使用数から、最大使用可能容量の範囲で作成できるルートフォルダの総数を見積もります。

見積もり式を次に示します。

ルートフォルダの総数の見積もり式

$$x = \uparrow UC \times MUS \div US \uparrow$$

2. 見積もったルートフォルダの総数とベースパス情報の予約量から、拡張する最大予約可能容量を見積もります。

見積もり式を次に示します。

最大予約可能容量の見積もり式

$$C = \uparrow RS \div UC \times x \uparrow$$

3. 見積もった最大予約可能容量が、ベースパス情報に設定できる範囲内の値かどうかを確認します。

ディスクを使用しているベースパス情報の最大予約可能容量の合計が、将来的に拡張できるディスク容量の範囲内になっている必要があります。見積もった最大予約可能容量を含めた最大予約可能容量は、次の条件式を満たすようにしてください。

条件式

$$VS \geq \sum C$$

見積もり式と条件式の変数および記号の意味は次のとおりです。

変数および記号	意味
C	ベースパス情報の最大予約可能容量です。

変数および記号	意味
MUS	ベースパス情報の最大使用可能容量です。
RS	ベースパス情報の予約量です。
UC	ベースパス情報の使用数です。
US	ベースパス情報の使用量です。
VS	ベースパス情報に設定するパスが含まれるディスクを将来的に拡張できる容量です。
x	最大使用可能容量の範囲で作成できるルートフォルダの総数です。
Σ	変数 C の値を集計することを意味します。
↑ ↑	小数点以下の値を切り上げることを意味しています。

見積もった最大予約可能容量は、[プロパティ設定] 画面から変更してください。

なお、ベースパス情報の最大予約可能容量に最大使用可能容量よりも大きな値を設定する場合、予約量が最大使用可能容量を超えることがあります。このようなときは、ベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) を定期的に行って、使用量が最大使用可能容量を超えていないかを確認する必要があります。このコマンドの実行回数の見積もりについては、「7.5.2 ベースパス情報の使用量の監視」を参照してください。

(2) 最大予約可能容量の見積もり例（最大使用可能容量よりも大きな値を設定する場合）

最大使用可能容量よりも大きな値を設定する場合の、ベースパス情報の最大予約可能容量の見積もり例について説明します。

(a) 見積もり例の前提

この例での前提を次に示します。

- 次の表に示すベースパス情報が設定されているとします。

項番	種別	名前	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大使用可能容量
1	個人	1 課	所属組織	1G	E:¥FILE1¥1G	30GB	15GB
2	個人	2 課	所属組織	2G	E:¥FILE1¥2G	40GB	20GB
3	個人	3 課	所属組織	3G	E:¥FILE1¥3G	60GB	30GB

- 運用を開始したあとのベースパス情報の予約量、空き容量、使用量および使用数が、次のようになったとします。

名前「2 課」のベースパス情報は、最大使用可能容量に対する空き容量がなくなっています。しかし、最大使用可能容量 40GB に対して使用量は 16GB で、予約だけされて使用されていない領域が残っていることがわかります。

項番	名前	最大予約可能容量	予約量	最大予約可能容量に対する空き容量	最大使用可能容量	使用量	最大使用可能容量に対する空き容量	使用数
1	1 課	30GB	18GB	12GB	30GB	10GB	20GB	36

項番	名前	最大予約可能容量	予約量	最大予約可能容量に対する空き容量	最大使用可能容量	使用量	最大使用可能容量に対する空き容量	使用数
2	2 課	40GB	40GB	0GB	40GB	16GB	24GB	80
3	3 課	60GB	24GB	36GB	60GB	18GB	42GB	48

- ディスクの将来的に拡張できる容量は 200GB とします。

(b) 見積もり例

見積もり例の前提から、最大予約可能容量に対する空き容量が 0GB になっている、名前「2 課」のベースパス情報の最大予約可能容量を見積もります。

手順に従って、最大予約可能容量を算出します。

1. ルートフォルダの総数を算出します。

$$x = \uparrow 80 \text{個} \times 40 \text{GB} \div 16 \text{GB} \uparrow \\ = 200 \text{個}$$

最大使用可能容量 40GB の範囲内で作成できるルートフォルダ数は、200 個であることがわかります。

2. 拡張する最大予約可能容量を算出します。

$$C = \uparrow 40 \text{GB} \div 80 \text{個} \times 200 \text{個} \uparrow \\ = 100 \text{GB}$$

3. 算出した最大予約可能容量が条件式を満たすかどうかを確認します。

$$200 \text{GB} > 30 \text{GB} + 100 \text{GB} + 60 \text{GB} \\ > 190 \text{GB}$$

算出した最大予約可能容量が条件式を満たすため、名前「2 課」のベースパス情報の最大予約可能容量を 100GB に拡張できます。

4. [プロパティ設定] 画面で、名前「2 課」のベースパス情報の最大予約可能容量を 40GB から 100GB に変更します。

[プロパティ設定] 画面からベースパス情報を変更する操作方法については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

7.5.2 ベースパス情報の使用量の監視

ベースパス情報で、最大使用可能容量よりも大きな値を最大予約可能容量に設定している場合、予約量が最大使用可能容量を超えることがあります。このようなときは、ベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) を定期的に行って、使用量が最大使用可能容量を超えていないかを確認する必要があります。

ベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) を定期的に行うために、実行回数を見積もります。実行回数を見積もる方法には、次の二つがあります。それぞれの見積もり方法のメリットおよびデメリットから、コマンドの実行回数を見積もる方法を選択してください。

表 7-1 ベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) の実行回数を見積もり方法

項番	見積もり方法	見積もり時期	見積もり回数	メリット/デメリット
1	最大使用可能容量とボリュームの容量の差を基に見積もる	1日当たりの使用量の平均を確認した時点。	1回	<ul style="list-style-type: none"> 1回見積もったあと、コマンドの実行回数を見直しが不要。 ボリュームの容量と最大使用可能容量の差が小さい場合は、最大使用可能容量に対する空き容量が多いときも、1日当たりのコマンドの実行回数が多くなる。
2	最大使用可能容量に対する空き容量を基に見積もる	最大使用可能容量の空き容量の変化に応じて見積もる。	定期的に見積もる	<ul style="list-style-type: none"> ベースパス情報の使用状況に合った最適な実行回数を見積もれる。 空き容量の変化に応じて、実行回数を見積もり直す必要がある。

それぞれの見積もり方法について説明します。

(1) 最大使用可能容量とボリュームの容量の差を基に見積もる方法

最大使用可能容量とボリュームの容量の差を基に、1日当たり何回コマンドを実行する必要があるかを見積もります。1日当たりの使用量の平均を確認した時点で、見積もってください。見積もり式を次に示します。

見積もり式

$$1日当たりの実行回数（単位：回） = \uparrow \Sigma_1 AvUS \div (VS - \Sigma_2 MUS) \uparrow$$

変数および記号の意味は次のとおりです。

変数および記号	意味
Σ_1	変数 AvUS の値を集計することを意味しています。
AvUS	1日当たりの使用量の平均です。 1日に1回ずつ cfslstad コマンドを実行して1日の使用量を求め、その値を平均することで、1日当たりの使用量の平均を求められます。
VS	ベースパス情報のパスに設定するボリュームの容量です。
Σ_2	変数 MUS の値を集計することを意味しています。
MUS	ベースパス情報の最大使用可能容量です。
$\uparrow \uparrow$	小数点以下の値を切り上げることを意味しています。

見積もり例

最大使用可能容量とボリュームの容量の差を基に1日当たりのコマンドの実行回数を見積もる例を説明します。

この例での前提を次に示します。

- 使用しているボリュームの容量は66GBとします。

- 次の表に示すベースパス情報が設定されているとします。

項番	種別	名前	条件種別	条件値	パス	最大予約可能容量	最大予約可能容量	最大使用可能容量に対する空き容量
1	個人	1 課	所属組織	1G	E:*FILE1*1G	30GB	15GB	7GB
2	個人	2 課	所属組織	2G	E:*FILE1*2G	40GB	20GB	8GB
3	個人	3 課	所属組織	3G	E:*FILE1*3G	60GB	30GB	7GB

- それぞれのベースパス情報の 1 日当たりの使用量の平均を次のとおりとします。

項番	ベースパス情報の名前	1 日当たりの使用量の平均
1	1 課	0.3GB
2	2 課	0.5GB
3	3 課	0.6GB

このとき、コマンドの実行回数は次のように算出できます。

算出式

$$\text{コマンドの実行回数} = \uparrow (0.3 + 0.5 + 0.6) \div (66 - (15 + 20 + 30)) \uparrow = 2 \text{回}$$

したがって、1 日当たり 2 回コマンドを実行する必要があることがわかります。

(2) 最大使用可能容量に対する空き容量を基に見積もる方法

最大使用可能容量に対する空き容量と、1 日当たりの使用量の平均を基に、空き容量が 0 になるまでの日数を算出します。算出した日数から、コマンドの実行回数の推奨値に当てはめて、コマンドの実行回数を見積もります。なお、空き容量が 0 になるまでの日数は、最大使用可能容量の空き容量の変化に応じて、見積もり直す必要があります。見積もり式を次に示します。

見積もり式

$$\text{空き容量が0になるまでの日数 (単位: 日)} = \uparrow \text{FS} \div \text{AvUS} \uparrow$$

変数の意味は次のとおりです。

変数および記号	説明
FS	ベースパス情報の最大使用可能容量に対する空き容量です。
AvUS	1 日当たりの使用量の平均です。 1 日に 1 回ずつ cfslstad コマンドを実行して 1 日の使用量を求め、その値を平均することで、1 日当たりの使用量の平均を求められます。
↑ ↑	小数点以下の値を切り上げることを意味しています。

ベースパス情報ごとに、見積もり式から算出した日数の中でいちばん少ない日数を基に、次の表に示す推奨するコマンドの実行回数を参照してください。

表 7-2 ベースパス情報の使用量の確認コマンド (cfschkusdspc) の推奨する実行回数

空き容量が 0 になるまでの日数	推奨する実行回数
7 日以上	1 日当たり 1 回
2~6 日	1 日当たり 24 回 (1 時間に 1 回)
1 日以下	1 日当たり 48 回 (30 分に 1 回)

見積もり例

最大使用可能容量に対する空き容量と、1 日当たりの使用量の平均を基に、1 日当たりのコマンドの実行回数を見積もる例を説明します。

この例の前提とするベースパス情報の設定および 1 日当たりの使用量は、「(1) 最大使用可能容量とボリュームの容量の差を基に見積もる方法」の見積もり例と同じとします。

まず、それぞれのベースパス情報で、最大使用可能容量に対する空き容量が 0 になるまでの日数を算出します。

1 課のベースパス情報の場合の算出式

$$\begin{aligned} \text{空き容量が0になるまでの日数} &= \uparrow 7 \div 0.3 \uparrow \\ &= 24 \text{日} \end{aligned}$$

2 課のベースパス情報の場合の算出式

$$\begin{aligned} \text{空き容量が0になるまでの日数} &= \uparrow 8 \div 0.5 \uparrow \\ &= 16 \text{日} \end{aligned}$$

3 課のベースパス情報の場合の算出式

$$\begin{aligned} \text{空き容量が0になるまでの日数} &= \uparrow 7 \div 0.6 \uparrow \\ &= 12 \text{日} \end{aligned}$$

算出した結果でいちばん日数が少ないのは 3 課の 12 日です。したがって、表 7-2 を参照すると、1 日 1 回コマンドを実行する必要があることがわかります。

7.5.3 ファイル実体の格納先ディレクトリの運用方法

File Sharing を使用して共有するファイルの実体は、データベース (HiRDB) ではなく File Sharing サーバが管理しているファイルシステムに格納されます。データベースには、ファイルシステム上のファイル実体の格納先と、個人ルートフォルダ、コミュニティルートフォルダ、またはグループルートフォルダを対応づける情報などが格納されます。

File Sharing サーバを運用するマシンのリプレースなどに伴って、ファイルシステム上のファイル実体の格納先を変更するときは、データベース上の情報 (ファイル実体の格納先と、個人ルートフォルダ、コミュニティルートフォルダ、またはグループルートフォルダを対応づける情報) も変更する必要があります。データベース上の情報が変更されていない場合は、[ファイル共有] ポートレットでのファイル操作ができません。

7.5.4 ファイルシステムのバックアップとリストア

File Sharing サーバが管理しているファイルシステムのバックアップおよびリストアは、OS で提供されるシステムツールなどを利用して実施します。

ファイルシステムのバックアップおよびリストアは、必ず File Sharing サーバの停止中に実施してください。また、必ずデータベースのバックアップおよびリストアと同期して実施する必要があります。データ

ベースのバックアップとリストアについては、「7.4.1 データベースのバックアップとリストア」を参照してください。

7.6 個人フォルダとコミュニティフォルダの運用

ここでは、[ファイル共有] ポートレットで操作する、個人フォルダとコミュニティフォルダの運用方法について説明します。個人フォルダとコミュニティフォルダの操作方法については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

個人ルートフォルダとコミュニティルートフォルダの運用・保守には、オブジェクト操作ツールを使用します。オブジェクト操作ツールとは、File Sharing サーバで管理している文書空間およびデータベースに格納されているオブジェクト（フォルダ、ユーザ情報など）をコマンドによって直接操作するためのツールです。

ここでは、オブジェクト操作ツールを使用した運用の手順について説明します。使用するコマンドの詳細は、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」を参照してください。

個人フォルダおよびコミュニティフォルダの作成・削除の契機を次の表に示します。

表 7-3 個人フォルダおよびコミュニティフォルダの作成・削除の契機

種別	ファイルまたはフォルダの種類	作成・削除の契機
個人フォルダ	個人ルートフォルダ	<ul style="list-style-type: none"> 該当するユーザがポータルを経由して初めて File Sharing サーバにログインするときに自動的に作成されます。 セキュリティ管理者^{※1} がオブジェクト操作ツールのコマンドを使用して削除します。手順の詳細は、「7.6.1 個人ルートフォルダの削除」を参照してください。
	そのほかのファイルおよびフォルダ	<p>該当するユーザがポートレットを使用して作成・削除します。</p> <p>また、セキュリティ管理者が個人ルートフォルダの削除と同時に削除することもできます。</p>
コミュニティフォルダ	コミュニティルートフォルダ	<ul style="list-style-type: none"> Collaboration - Online Community Management の [コミュニティ管理] ポートレットでワークスペースが作成されたときに、自動的に作成されます。^{※2} コミュニティ管理者によるコミュニティの削除操作のあとに、セキュリティ管理者^{※1} がオブジェクト操作ツールのコマンドを使用して削除します。手順の詳細は、「7.6.2 コミュニティルートフォルダの削除」を参照してください。
	ワークスペースルートフォルダ	<ul style="list-style-type: none"> Collaboration - Online Community Management の [コミュニティ管理] ポートレットでワークスペースが作成されたときに、コミュニティルートフォルダの下に自動的に作成されます。^{※2} セキュリティ管理者^{※1} がオブジェクト操作ツールのコマンドを使用して削除します。手順の詳細は、「7.6.2 コミュニティルートフォルダの削除」を参照してください。
	そのほかのファイルおよびフォルダ	<p>該当するコミュニティで、ファイルおよびフォルダを作成・削除できる権限が設定されている役割に属するメンバが、ポートレットを使用して作成・削除^{※3} します。</p> <p>また、セキュリティ管理者がコミュニティルートフォルダの削除と同時に削除することもできます。</p>

注※1

セキュリティ管理者の詳細は、「3.5.2 セキュリティ管理者の定義」を参照してください。

注※2

コミュニティの作成時に File Sharing で障害が発生してもコミュニティは作成されますが、コミュニティルートフォルダまたはワークスペースルートフォルダは作成されない場合があります。この場合、そのコミュニティでは File Sharing を使用できなくなるため、障害の要因を取り除いたあとに、そのコミュニティを削除してから再作成してください。

注※3

[コミュニティ管理] ポートレットでコミュニティが削除されたときは、そのコミュニティのワークスペースルートフォルダ以下が「参照不可」になります。[ファイル共有] ポートレットを操作するユーザからは、ワークスペースに属するすべてのファイルとフォルダが削除されたように見えます。しかし、実際は、フォルダ、ファイルの属性情報およびファイル実体は残っているため、それらが不要な場合はデータベース上やファイルシステム上から削除する必要があります。なお、ワークスペースが削除された時点で、そのワークスペースに属するファイルとフォルダに対するアクセス権は、セキュリティ管理者の権限を持つユーザだけに設定されます。

フォルダの運用上の作業

作成済みの個人ルートフォルダまたはコミュニティルートフォルダの情報を取得する場合、`cfslstfldr` コマンドを使用します。`cfslstfldr` コマンドについては、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「`cfslstfldr` (ルートフォルダの情報の一覧表示)」を参照してください。

参考

以降で説明する手順で、OID およびパブリック ACL を扱います。それぞれの意味は次のとおりです。

• OID

すべてのオブジェクトにプロパティとして付けられている識別子です。OID は、文書空間識別子、文書空間特有のオブジェクトの識別子などから構成され、「`dma://`」で始まる URL の形式で定義されています。

OID の例を次に示します。…は、途中の省略を示します。

```
dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/...00000000001
```

• パブリック ACL

File Sharing が管理する複数のファイルやフォルダに対して、同じアクセス権を設定するために使用されるアクセス制御リストです。パブリック ACL には個人用とコミュニティ用の 2 種類があります。それぞれ、個人ルートフォルダまたはワークスペースルートフォルダの作成と同時に自動的に作成されるため、ユーザが個別に作成する必要はありません。

7.6.1 個人ルートフォルダの削除

個人ルートフォルダは、セキュリティ管理者がオブジェクト操作ツールのコマンドを使用して削除します。

個人ルートフォルダを削除するときに行う必要があるのは、次の操作です。

- 個人ルートフォルダおよびその下位に作成されているフォルダとファイルの削除
 - 個人情報の削除
 - 個人用に使用していたパブリック ACL の削除
 - ベースパス情報に設定されている空き容量および使用数の変更
- ただし、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、空き容量の変更は不要です。

削除の手順は次のとおりです。なお、この操作は、[ファイル共有] ポートレット経由で新規に個人ルートフォルダが作成されない状態にしてから、実行してください。

また、この操作は単独で実行してください。同時に実行しないでください。

1. 削除する個人ルートフォルダの OID を `dbrexquery` コマンドで取得します。

`dbrexquery` コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery *問い合わせファイル* > *実行結果ファイル*

実行結果ファイルの名称は任意に指定してください。dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID FROM cfsClass_Folder
WHERE cfsProp_EntityName = 'ユーザID'
AND cfsProp_Type = 8
```

ユーザID には、個人ルートフォルダのプロパティに表示されているフォルダ名を指定してください。

http://xxx.xxx.xxx.xxx:yyyy/personal/ **user01** /...

└── この部分を指定してください。

2. 削除する個人情報の OIID, 最大許容サイズ, およびベースパスを dbrexquery コマンドで取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery *問い合わせファイル*

dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID, cfsProp_TotalAvailableSize, cfsProp_ContentBasePath
FROM cfsClass_Personal
WHERE cfsProp_UserId = 'ユーザID'
```

ユーザID には、個人ルートフォルダのプロパティに表示されているフォルダ名を指定してください。

http://xxx.xxx.xxx.xxx:yyyy/personal/ **user01** /...

└── この部分を指定してください。

実行結果は、「OIID','最大許容サイズ','ベースパス」の順序で、「,」（コンマ）で区切られて出力されます。

3. 手順 2. で取得したベースパスと手順 1. で取得した実行結果ファイル（OIID ファイル）を dbrdelcntr コマンドに指定して個人ルートフォルダを削除します。

このコマンドの実行によって、個人ルートフォルダおよびその下位にあるファイルおよびフォルダがまとめて削除されます。ベースパスには手順 2. で取得した値を、*実行結果ファイル* には手順 1. で取得した実行結果ファイルの名称を指定してください。

dbrdelcntr コマンドの実行例を次に示します。

dbrdelcntr -l DCR -R -k Reference -b ベースパス -y ベースパス *実行結果ファイル*

注意

ベースパスを指定するときには、手順 2. で出力されたベースパスの前後の「|」（シングルクォーテーション）を削除して指定してください。

また、データベースに登録したベースパスに「|」が含まれている場合、手順 2. で出力されるベースパス内の「|」には「|」が一つ追加されて出力されます。ベースパス内に複数の「|」が含まれる場合は、それぞれの「|」に対して一つずつ追加されて出力されます。dbrdelcntr のオプション引数には、追加された「|」を削除して指定してください。

例えば、データベースに登録されている値が「C:¥user's」の場合、出力されるベースパスは「C:¥user's|」になります。この場合、dbrdelcntr のオプション引数には「C:¥user's|」と指定してください。

4. 手順 2. で取得した OIID を dbrdeldata コマンドに指定して個人情報を削除します。

dbrdeldata コマンドの実行例を次に示します。OIID には、手順 2. で取得した値を指定してください。

dbrdeldata *OIID*

5. 削除する個人用パブリック ACL の OIID を dbrexquery コマンドで取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery *問い合わせファイル* > *実行結果ファイル*

実行結果ファイルの名称は任意に指定してください。dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID FROM edmClass_PublicACL
WHERE cfsProp_Name= 'ユーザID'
```

ユーザID には、個人ルートフォルダのプロパティに表示されているフォルダ名を指定してください。

```
http://xxx.xxx.xxx.xxx:yyyy/personal/ user01 /...
```

この部分を指定してください。

6. 手順 5. で取得した実行結果ファイル (OIID ファイル) を dbrdelacl コマンドに指定して個人用パブリック ACL を削除します。

dbrdelacl コマンドの実行例を次に示します。実行結果ファイルには、手順 5. で取得した実行結果ファイルの名称を指定してください。

dbrdelacl 実行結果ファイル

7. 手順 2. で取得したベースパスを基に、削除する個人ルートフォルダが使用しているベースパス情報を検索して、OIID、空き容量および使用数を取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery 問い合わせファイル

dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID, cfsProp_FreeSpace, cfsProp_UsedCount
FROM cfsClass_AssignableDrive
WHERE cfsProp_Path= 'ベースパス' AND cfsProp_Type=8
```

ベースパスには、手順 2. で取得したベースパスを指定してください。

実行結果は、「OIID','空き容量','使用数」の順序で、「,」（コンマ）で区切られて出力されます。

8. 手順 7. で取得したベースパス情報の OIID を dbrsetprop コマンドに指定して、ベースパス情報を変更します。

dbrsetprop コマンドの実行例を次に示します。

dbrsetprop OIID プロパティ情報ファイル

OIID には、手順 7. で取得した OIID を指定してください。

dbrsetprop コマンドに指定するプロパティ情報ファイルの内容を次に示します。なお、最大許容サイズを設定している運用の場合と設定していない運用の場合で、指定する項目が異なります。

```
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_FreeSpace = '空き容量' ※
cfsProp_UsedCount = 使用数
```

注※ 最大許容サイズを設定しない運用の場合は、この行の指定は不要です。

空き容量には、手順 7. で取得した空き容量の値に、手順 2. で取得した最大許容サイズの値を加えたものを指定してください。使用数には、手順 7. で取得した使用数から 1 を引いた値を指定してください。

7.6.2 コミュニティルートフォルダの削除

コミュニティルートフォルダの削除は、コミュニティ管理者によるコミュニティの削除操作のあとに、セキュリティ管理者がオブジェクト操作ツールのコマンドを使用して実施します。

コミュニティルートフォルダを削除するときに行う必要があるのは、次の操作です。

- コミュニティ管理者以外のメンバの削除
- コミュニティの削除
- コミュニティルートフォルダおよびその下位に作成されているフォルダとファイルの削除

- コミュニティ情報の削除
- コミュニティ用のパブリック ACL の削除
- ベースパス情報に設定されている空き容量および使用数の変更
ただし、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、空き容量の変更は不要です。

削除の手順は次のとおりです。なお、この操作は、新規にコミュニティを作成されない状態にしてから、実行してください。

また、この操作は単独で実行してください。同時に実行しないでください。

1. コミュニティ管理者が、コミュニティ管理者以外のメンバをコミュニティから削除します。
コミュニティで生成したファイルなどを残しておきたい場合は、この時点で取得しておいてください。これ以降は、File Sharing で管理するファイルやフォルダにはアクセスできなくなります。
2. コミュニティ管理者が、コミュニティを削除します。
手順 3.以降の操作は、File Sharing のセキュリティ管理者が実施します。
3. セキュリティ管理者が、削除するコミュニティルートフォルダの OIID を dbrexquery コマンドで取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery *問い合わせファイル* > *実行結果ファイル*

実行結果ファイルの名称は任意に指定してください。dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID FROM cfsClass_Folder
WHERE cfsProp_EntityName = 'コミュニティID'
AND cfsProp_Type = 1
```

コミュニティ ID には、コミュニティルートフォルダのプロパティに表示されているフォルダ名を指定してください。

http://xxx.xxx.xxx.xxx:yyyyy/community/**community01**/...

この部分を指定してください。

4. 削除するコミュニティ情報の OIID、最大許容サイズおよびベースパスを dbrexquery コマンドで取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery *問い合わせファイル*

dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID, cfsProp_TotalAvailableSize, cfsProp_ContentBasePath FROM
cfsClass_Community
WHERE cfsProp_CommunityId = 'コミュニティID'
```

コミュニティ ID には、コミュニティルートフォルダのプロパティに表示されているフォルダ名を指定してください。

http://xxx.xxx.xxx.xxx:yyyyy/community/**community01**/...

この部分を指定してください。

実行結果は、「[OIID],[最大許容サイズ],[ベースパス]」の順序で、「,」（コンマ）で区切られて出力されません。

5. 手順 4. で取得したベースパスと手順 3. で取得した実行結果ファイル（OIID ファイル）を dbrdelcntr コマンドに指定してコミュニティルートフォルダを削除します。

このコマンドの実行によって、コミュニティルートフォルダおよびその下位にあるファイルおよびフォルダがまとめて削除されます。ベースパスには、手順 4. で取得した値を、実行結果ファイルには、手順 3. で取得した実行結果ファイルの名称を指定してください。

dbrdelcntr コマンドの実行例を次に示します。

dbrdelcntr -l DCR -R -k Reference -b ベースパス -y ベースパス 実行結果ファイル

注意

ベースパスを指定するときには、手順 4. で出力されたベースパスの前後の「|」（シングルクォーテーション）を削除して指定してください。

また、データベースに登録したベースパスに「|」が含まれている場合、手順 4. で出力されるベースパス内の「|」には「|」が一つ追加されて出力されます。ベースパス内に複数の「|」が含まれる場合は、それぞれの「|」に対して一つずつ追加されて出力されます。dbrdelcntr のオプション引数には、追加された「|」を削除して指定してください。

例えば、データベースに登録されている値が「C:¥user's」の場合、出力されるベースパスは「C:¥user"s」になります。この場合、dbrdelcntr のオプション引数には「C:¥user's」と指定してください。

6. 手順 4. で取得した OIID を dbrdeldata コマンドに指定してコミュニティ情報を削除します。

dbrdeldata コマンドの実行例を次に示します。OIID には、手順 4. で取得した値を指定してください。

dbrdeldata OIID

7. 削除するコミュニティ用パブリック ACL の OIID を dbrexquery コマンドで取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery 問い合わせファイル > 実行結果ファイル

実行結果ファイルの名称は任意に指定してください。dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID FROM edmClass_PublicACL
WHERE cfsProp_Name= 'コミュニティID'
```

コミュニティ ID には、コミュニティルートフォルダのプロパティに表示されているフォルダ名を指定してください。

http://xxx.xxx.xxx.xxx:yyyyy/community/**community01**/...

この部分を指定してください。

8. 手順 7. で取得した実行結果ファイル（OIID ファイル）を dbrdelacl コマンドに指定してコミュニティ用パブリック ACL を削除します。

dbrdelacl コマンドの実行例を次に示します。実行結果ファイルには、手順 7. で取得した実行結果ファイルの名称を指定してください。

dbrdelacl 実行結果ファイル

9. 手順 4. で取得したベースパスを基に、削除するコミュニティに属しているワークスペースルートフォルダのベースパス情報を検索して、OIID、空き容量および使用数を取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery 問い合わせファイル

dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID, cfsProp_FreeSpace, cfsProp_UsedCount
FROM cfsClass_AssignableDrive
WHERE cfsProp_Path= 'ベースパス' AND cfsProp_Type=2
```

ベースパスには、手順 4. で取得した値を指定してください。実行結果は、「OIID','空き容量','使用数」の順序で、「,」（コンマ）で区切られて出力されます。

10. 手順 9. で取得したベースパス情報の OIID を dbrsetprop コマンドに指定して、ベースパス情報を変更します。

dbrsetprop コマンドの実行例を次に示します。

dbrsetprop *OIID* プロパティ情報ファイル

OIID には、手順 9. で取得した OIID を指定してください。

dbrsetprop コマンドに指定するプロパティ情報ファイルの内容を次に示します。なお、最大許容サイズを設定している運用の場合と設定していない運用の場合で、指定する項目が異なります。

```
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_FreeSpace = '空き容量'※
cfsProp_UsedCount = 使用数
```

注※ 最大許容サイズを設定しない運用の場合は、この行の指定は不要です。

空き容量には、手順 9. で取得した空き容量の値に、手順 4. で取得した最大許容サイズの値を加えたものを指定してください。使用数には、手順 9. で取得した使用数から、1 を引いた値を指定してください。

7.7 グループフォルダの運用

ここでは、[ファイル共有] ポートレットで操作する、グループフォルダの運用方法について説明します。グループフォルダの操作方法については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。また、グループフォルダを運用するための注意事項についても説明します。

グループフォルダの運用・保守には、オブジェクト操作ツール、および File Sharing のコマンドを使用します。オブジェクト操作ツールとは、File Sharing サーバで管理している文書空間およびデータベースに格納されているオブジェクト（フォルダ、グループ情報など）をコマンドによって直接操作するためのツールです。

ここでは、オブジェクト操作ツール、および File Sharing クライアント運用コマンドを使用した運用の手順について説明します。使用するコマンドの詳細については、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」および「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」を参照してください。

グループフォルダの作成・削除の契機

グループフォルダの作成・削除の契機を次の表に示します。

表 7-4 グループフォルダの作成・削除の契機

ファイルまたはフォルダの種類	作成・削除の契機
グループルートフォルダ	<ul style="list-style-type: none"> システム管理者がグループルートフォルダの作成コマンド（cfsCRTgrpflDr）を使用して作成します。 システム管理者がグループルートフォルダの非表示化コマンド（cfschggrpflDr）を使用して非表示化したあとに、セキュリティ管理者*がオブジェクト操作ツールのコマンドを使用して削除します。手順の詳細は、「7.7.8 グループルートフォルダの削除」を参照してください。
そのほかのファイルおよびフォルダ	<p>該当するグループで、ファイルおよびフォルダを作成・削除できる権限が設定されているユーザが、ポートレットを使用して作成・削除します。</p> <p>また、セキュリティ管理者がグループルートフォルダの削除と同時に削除することもできます。</p>

注※

セキュリティ管理者の詳細は、「3.5.2 セキュリティ管理者の定義」を参照してください。

7.7.1 グループフォルダの運用例

グループフォルダには、次の特徴があります。

- フォルダ単位にアクセス権を設定できる
- グループルートフォルダの下位のフォルダには、親フォルダに設定されたアクセス権の範囲内でアクセス権を設定できる
- 組織またはユーザをグループフォルダの運用者として設定できる
- システム管理者がグループルートフォルダを作成する

そのため、アクセス権や運用者の設定によって、システム管理者がグループルートフォルダだけを作成し、グループルートフォルダの下位のフォルダはユーザが自由に利用する運用や、運用者またはシステム管理者がグループルートフォルダの下位のフォルダを作成し、作成されたフォルダをユーザが利用する運用もできます。

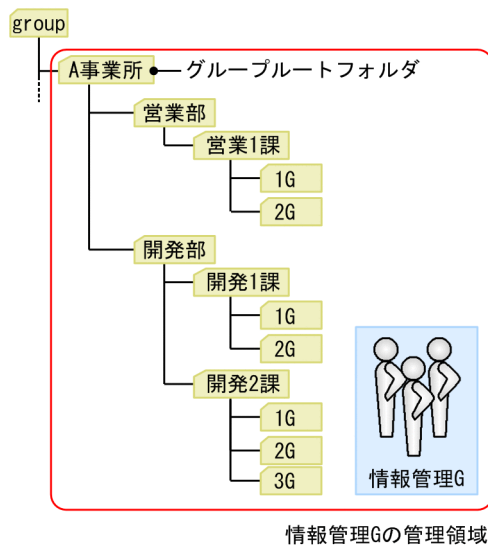
！ 注意事項

グループフォルダの運用者

グループフォルダの運用者とは、運用者として設定されているグループルートフォルダの下位にあるファイルまたはフォルダを、運用者権限で操作できるユーザのことです。運用者権限で操作することで、グループルートフォルダの下位にあるファイルおよびフォルダに対して、参照権、更新権、作成権およびアクセス権変更権を所有します。また、グループルートフォルダのアクセス権を設定できます。

グループフォルダの運用例を、次の図に示します。

図 7-3 グループフォルダを運用する場合のフォルダ構成の例



この図は、グループルートフォルダの下位に、運用者またはシステム管理者が組織の階層に合わせてフォルダを作成し、作成されたフォルダをユーザが利用する例を示しています。

グループルートフォルダの作成

システム管理者がグループルートフォルダ「A事業所」を作成し、「A事業所」を利用する組織またはユーザのアクセス権、および「A事業所」の運用者を設定します。

グループルートフォルダの作成およびアクセス権の設定は、File Sharing クライアント運用コマンドで実行します。

運用に応じたグループフォルダの作成

運用者に設定された組織「情報管理 G」が、グループルートフォルダの下位に、A事業所の階層に従って「営業部」、「開発部」やその下位にフォルダを作成します。また、フォルダに対して、フォルダを利用する組織またはユーザのアクセス権を設定します。

グループルートフォルダの下位へのフォルダの作成は、[ファイル共有] ポートレットから実行します。グループルートフォルダの下位のフォルダに対するアクセス権の設定は、[ファイル共有] ポートレットから実行します。

グループフォルダの利用

運用者によって作成されたフォルダを組織またはユーザが利用します。設定されたアクセス権に従って、フォルダの下位にファイルを登録したり、フォルダを作成したりできます。

[ファイル共有] ポートレットから操作する方法については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

7.7.2 グループフォルダを運用するための作業の一覧

グループフォルダを運用するための作業について、運用する前の準備作業と運用上の作業の一覧を次に示します。

グループフォルダを運用する前の準備作業

グループフォルダを運用する前に準備する作業を次の表に示します。なお、グループルートフォルダの作成、およびグループルートフォルダの情報の参照は、運用開始前のベースパス情報および最大許容サイズ情報の設定が終わったあとの運用開始後に実行できます。

表 7-5 グループフォルダを運用する前の準備作業

運用する前の準備作業	作業内容	運用手段			参照先
		オブジェクト操作ツールのコマンド	File Sharing クライアント運用コマンド	ポートレット	
グループルートフォルダの作成	グループフォルダを運用する前に、グループルートフォルダを作成します。	—	cfscrtgrpfldr	—	7.7.3
グループルートフォルダの情報の参照	作成したグループルートフォルダの情報を一覧で参照できます。	—	cfslstfldr	—	7.7.4

(凡例)

—：実行できません。または、該当しません。

グループフォルダの運用上の作業

グループフォルダの運用上の作業を次の表に示します。

表 7-6 グループフォルダの運用上の作業

運用上の作業	運用の時期と作業内容	運用手段			参照先
		オブジェクト操作ツールのコマンド	File Sharing クライアント運用コマンド	ポートレット	
グループルートフォルダの作成	グループルートフォルダを作成します。	—	cfscrtgrpfldr	—	7.7.3
グループルートフォルダの情報の参照	作成したグループルートフォルダの情報を一覧で参照します。	—	cfslstfldr	—	7.7.4
グループフォルダの利用者の設定	グループフォルダを利用する組織またはユーザが変更になった場合、グループフォルダを利用する組織またはユーザを、追加、変更、削除します。	—	cfsaddgrpprm, cfsmodgrpprm, cfsdelgrpprm	○	7.7.5
グループフォルダの運用者の設定	運用者が変更になった場合、運用者を追加または削除します。	—	cfsaddgrpmngr, cfsdelgrpmngr	—	7.7.6

運用上の作業	運用の時期と作業内容	運用手段			参照先
		オブジェクト操作ツールのコマンド	File Sharing クライアント運用コマンド	ポートレット	
グループフォルダの非表示化	削除予定のグループフォルダをフォルダ一覧で非表示にします。	—	cfschggrpflidr	—	7.7.7
グループルートフォルダの削除	不要になったグループルートフォルダを削除します。	○	—	—	7.7.8

(凡例)

○：実行できます。

—：実行できません。または、該当しません。

7.7.3 グループルートフォルダの作成

グループルートフォルダを作成するには、グループルートフォルダの作成コマンド (cfsCRTgrpflidr) を実行します。

グループルートフォルダの作成コマンド (cfsCRTgrpflidr) を実行して、グループルートフォルダを作成するときに設定する内容を、次に示します。

- グループルートフォルダ名
- グループルートフォルダのコメント
- 代表に設定する組織またはユーザ
- 運用者に設定する組織またはユーザ
- グループルートフォルダを使用する組織およびユーザ
- グループルートフォルダを使用する組織およびユーザのアクセス権

グループルートフォルダの作成コマンド (cfsCRTgrpflidr) の詳細については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfsCRTgrpflidr (グループルートフォルダの作成)」を参照してください。

7.7.4 グループルートフォルダの情報の参照

グループルートフォルダの情報を参照するには、ルートフォルダの情報の一覧表示コマンド (cfsLstflidr) を実行します。

コマンドを実行して取得したルートフォルダの情報から、フォルダ名、ルートフォルダの残りのサイズ、最大許容サイズ、作成者、フォルダの状態、パスなどの内容を確認できます。

ルートフォルダの情報の一覧表示コマンド (cfsLstflidr) の詳細については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfsLstflidr (ルートフォルダの情報の一覧表示)」を参照してください。

7.7.5 グループフォルダの利用者の設定

グループルートフォルダを作成したあと、グループフォルダの利用者の組織 ID またはユーザ ID を追加または削除する場合に使用するコマンドと、設定したアクセス権を変更する場合に使用するコマンドを次に示します。

- グループフォルダのアクセス権の追加コマンド (cfsaddgrpprm)
グループルートフォルダ以下を利用する組織またはユーザを追加する場合に使用します。
グループルートフォルダのアクセス権に、組織またはユーザを追加します。
- グループフォルダのアクセス権の変更コマンド (cfsmodgrpprm)
グループルートフォルダ以下を利用する組織またはユーザを変更する場合に使用します。
グループルートフォルダ以下にアクセス権が設定されている組織またはユーザに対して、次に示す操作を実行できます。
 - 変更前組織に指定した組織とその下位にある組織およびユーザを、変更後組織に指定した組織で置き換えます。
 - 変更前ユーザ ID に指定したユーザ ID を、変更後ユーザ ID に指定したユーザ ID で置き換えます。
- グループフォルダのアクセス権の削除コマンド (cfsdelgrpprm)
グループルートフォルダ以下の利用者から削除する場合に使用します。
グループルートフォルダのアクセス権に設定されている組織 ID またはユーザ ID を削除します。

各コマンドの詳細については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」を参照してください。

7.7.6 グループフォルダの運用者の設定

グループルートフォルダを作成したあと、グループフォルダの運用者の組織 ID またはユーザ ID を追加または削除する場合に使用するコマンドとその内容を次に示します。

- グループフォルダの運用者の追加コマンド (cfsaddgrpmngr)
グループフォルダの運用者を追加する場合に使用します。
グループフォルダの運用者に組織 ID またはユーザ ID を追加します。
- グループフォルダの運用者の削除コマンド (cfsdelgrpmngr)
グループフォルダの運用者から削除する場合に使用します。
グループフォルダの運用者に設定されている組織 ID またはユーザ ID を削除します。

各コマンドの詳細については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」を参照してください。

7.7.7 グループルートフォルダの非表示化

グループルートフォルダを削除する場合に、削除予定のグループルートフォルダを非表示にします。非表示にすることによって、グループルートフォルダの参照権限をなくし、グループフォルダを [ファイル共有] ポートレットから参照できなくします。さらに、グループルートフォルダの状態を使用不可にして、配布 URL から参照できないようにします。

グループルートフォルダを非表示にする場合使用するコマンドと、その内容を次に示します。

- グループルートフォルダの非表示化コマンド (cfschggrpfldr)

グループルートフォルダを削除する場合、削除する前に使用します。

非表示にするグループルートフォルダのグループ ID を指定して実行します。

コマンドの詳細については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」を参照してください。

7.7.8 グループルートフォルダの削除

グループルートフォルダの削除は、セキュリティ管理者がオブジェクト操作ツールのコマンドを使用して実行します。

グループルートフォルダを削除するときに行う必要があるのは、次の操作です。

- 削除予定のグループフォルダの非表示化
グループルートフォルダの非表示化コマンド (cfschggrpfldr) を使用して、削除予定のグループルートフォルダを非表示にしてください。グループルートフォルダの非表示化コマンド (cfschggrpfldr) の詳細については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfschggrpfldr (グループルートフォルダの非表示化)」を参照してください。
- グループルートフォルダおよびその下に作成されているフォルダとファイルの削除
- グループ情報の削除
- グループ用に使用していたパブリック ACL の削除
- ベースパス情報に設定されている空き容量および使用数の変更
ただし、最大許容サイズを設定しない運用の場合は、空き容量の変更は不要です。

グループフォルダの削除の手順を次に示します。

ただし、次に示す手順の実行中に、新規にグループルートフォルダを作成しないでください。

1. 削除予定のグループフォルダを cfschggrpfldr コマンドで非表示にします。

cfschggrpfldr コマンドの実行例を次に示します。

```
cfschggrpfldr -id グループID
```

グループ ID には、グループルートフォルダのプロパティに表示されているフォルダ名を指定するか、またはルートフォルダの情報の一覧表示コマンド (cflstfldr) で取得したフォルダ名を指定してください。

```
http://xxx.xxx.xxx.xxx:yyyy/group/ group01 /...
```

この部分を指定してください。

2. 削除するグループルートフォルダの OIID を dbrexquery コマンドで取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

```
dbrexquery 問い合わせファイル > 実行結果ファイル
```

実行結果ファイルの名称は任意に指定してください。dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID FROM cfsClass_Folder
WHERE cfsProp_EntityName = 'グループID'
AND cfsProp_Type = 128
```

グループ ID には、手順 1. のグループルートフォルダの非表示化コマンド (cfschggrpfldr) で、-id オプションの引数に指定したグループ ID を指定してください。

3. 削除するグループ情報の OIID、最大許容サイズおよびベースパスを dbrexquery コマンドで取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery *問い合わせファイル*

dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID, cfsProp_TotalAvailableSize, cfsProp_ContentBasePath
FROM cfsClass_Group
WHERE cfsProp_GroupId = 'グループID'
```

実行結果は、「OIID','最大許容サイズ','ベースパス」の順序で、「,」（コンマ）で区切られて出力されます。

4. 手順 3. で取得したベースパスと手順 2. で取得した実行結果ファイル（OIID ファイル）を dbrdelcntr コマンドに指定してグループルートフォルダを削除します。

このコマンドの実行によって、グループルートフォルダおよびその下位にあるファイルおよびフォルダがまとめて削除されます。ベースパスには手順 3. で取得した値を、実行結果ファイルには手順 2. で取得した実行結果ファイルの名称を指定してください。

dbrdelcntr コマンドの実行例を次に示します。

dbrdelcntr -l DGR -R -k Reference -b ベースパス -y ベースパス *実行結果ファイル*

注意

ベースパスを指定するときには、手順 3. で出力されたベースパスの前後の「」（シングルクォーテーション）を削除して指定してください。

また、データベースに登録したベースパスに「」が含まれている場合、手順 3. で出力されるベースパス内の「」には「」が一つ追加されて出力されます。ベースパス内に複数の「」が含まれる場合は、それぞれの「」に対して一つずつ追加されて出力されます。dbrdelcntr のオプション引数には、追加された「」を削除して指定してください。

例えば、データベースに登録されている値が「C:¥user's」の場合、出力されるベースパスは「C:¥user"s」になります。この場合、dbrdelcntr のオプション引数には「C:¥user's」と指定してください。

5. 手順 3. で取得した OIID を dbrdeldata コマンドに指定してグループ情報を削除します。

dbrdeldata コマンドの実行例を次に示します。OIID には、手順 3. で取得した値を指定してください。

dbrdeldata *OIID*

6. 削除するグループフォルダ用パブリック ACL の OIID を dbrexquery コマンドで取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery *問い合わせファイル* > *実行結果ファイル*

実行結果ファイルの名称は任意に指定してください。dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID FROM edmClass_PublicACL
WHERE cfsProp_Name like 'グループID%'
```

上記の問い合わせファイル名を「eql.txt」とし、取得する OIID ファイル名を「oiid.txt」とした場合のコマンドの指定例を次に示します。

dbrexquery eql.txt > oiid.txt

7. 手順 6. で取得した実行結果ファイルを dbrdelacl コマンドに指定してグループフォルダ用パブリック ACL を削除します。

dbrdelacl コマンドの実行例を次に示します。実行結果ファイルには、手順 6. で取得した実行結果ファイルの名称を指定してください。

dbrdelacl *実行結果ファイル*

8. 手順 3. で取得したベースパスを基に、削除するグループルートフォルダが使用しているベースパス情報を検索して、OIID、空き容量、および使用数を取得します。

dbrexquery コマンドの実行例を次に示します。

dbrexquery *問い合わせファイル*

dbrexquery コマンドに指定する問い合わせファイルの内容を次に示します。

```
SELECT dmaProp_OIID, cfsProp_FreeSpace, cfsProp_UsedCount
FROM cfsClass_AssignableDrive
WHERE cfsProp_Path = 'ベースパス' AND cfsProp_Type = 128
```

ベースパスには、手順 3. で取得したベースパスを指定してください。

実行結果は、「*OID*','*空き容量*','*使用数*」の順序で、「,」（コンマ）で区切られて出力されます。

9. 手順 8. で取得したベースパス情報の *OID* を dbrsetprop コマンドに指定して、ベースパス情報を変更します。

dbrsetprop コマンドの実行例を次に示します。

dbrsetprop *OID* *プロパティ情報ファイル*

OID には、手順 8. で取得した *OID* を指定してください。

dbrsetprop コマンドに指定するプロパティ情報ファイルの内容を次に示します。なお、最大許容サイズを設定している運用の場合と設定していない運用の場合で、指定する項目が異なります。

```
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_FreeSpace = '空き容量'※
cfsProp_UsedCount = 使用数
```

注※ 最大許容サイズを設定しない運用の場合は、この行の指定は不要です。

空き容量 には、手順 8. で取得した空き容量の値に、手順 3. で取得した最大許容サイズの値を加えたものを指定してください。*使用数* には、手順 8. で取得した使用数から 1 を引いた値を指定してください。

7.7.9 グループフォルダ運用時の注意事項

グループフォルダを運用するときの注意事項について説明します。

- グループフォルダを運用するために使用する File Sharing クライアント運用コマンドは、環境設定用プロパティファイルの hptl_clb_cfs_SecurityAdministratorID プロパティで定義したセキュリティ管理者のユーザ ID で実行します。セキュリティ管理者の定義については、「3.5.2 セキュリティ管理者の定義」を、環境設定用プロパティファイルの設定については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

また、セキュリティ管理者が [ファイル共有] ポートレットにアクセスすると、すべてのグループルートフォルダが表示されます。必要に応じて、システム管理者がセキュリティ管理者のユーザ ID でアクセスして、[ファイル共有] ポートレットから、グループルートフォルダに設定されている運用者およびアクセス権を確認してください。

- CCOM および RCOM で始まる文字列は、File Sharing で使用する特定の用語（予約語）のため、CCOM および RCOM で始まる文字列を組織 ID に指定できません。組織 ID を表すディレクトリサーバの設定については、マニュアル「Collaboration - Directory Access システム管理者ガイド」を参照してください。

7.8 運用開始後のベースパス情報の設定

例えば、運用開始後に、File Sharing のシステムを利用するユーザが増加して既存のベースパス情報に対する容量を使い切ってしまった場合、新しいディスクに対応するベースパス情報の割り当て条件を追加して、ファイルシステムの容量を拡張できます。ベースパス情報を追加した運用例については、「6.2.4(1) 最大許容サイズを設定した運用例」を参照してください。

運用開始後のベースパス情報の設定では、次に示す画面を使用します。

- [ファイル共有設定] ポートレット
- [ベースパス情報操作] 画面
- [ベースパス情報の追加] 画面
- [プロパティ設定] 画面

これらの画面では、次の表に示すベースパス情報の操作ができます。

表 7-7 運用開始後に画面からできるベースパス情報の操作

項番	操作		操作する画面
1	ベースパス情報の参照		<ul style="list-style-type: none"> • [ファイル共有設定] ポートレット • [ベースパス情報操作] 画面 • [プロパティ設定] 画面
2	ベースパス情報の追加	デフォルトの追加	[ベースパス情報の追加] 画面
		デフォルト以外の追加 ^{※1}	[ベースパス情報の追加] 画面
3	ベースパス情報の削除	デフォルトの削除 ^{※2}	[ベースパス情報操作] 画面
		デフォルト以外の削除	[ベースパス情報操作] 画面
4	ベースパス情報の変更 ^{※3}		[プロパティ設定] 画面

注※1

運用中にデフォルト以外のベースパス情報を追加した場合、追加したベースパス情報は、それ以降に作成するフォルダだけに適用され、既存のフォルダに割り当てられているベースパスには影響しません。

注※2

デフォルトをすべて削除することはできません。少なくとも一つは登録しておく必要があります。

注※3

ベースパス情報の状態、最大予約可能容量、および最大使用可能容量を変更できます。なお、状態、最大予約可能容量、および最大使用可能容量以外の設定を変更したい場合は、変更したいベースパス情報を削除してから、変更したベースパス情報を新しく追加してください。ただし、すでに使用しているベースパス情報は削除できません。

各画面の操作方法、および画面の詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

7.9 運用開始後の最大許容サイズ情報の設定

最大許容サイズを設定した運用の場合、必要に応じて最大許容サイズ情報の割り当て条件を追加したり削除したりします。最大許容サイズを設定した運用例については、「6.2.3(1) 最大許容サイズを設定した運用の考え方」を参照してください。

運用開始後の最大許容サイズ情報の設定では、次に示す画面を使用します。

- [ファイル共有設定] ポートレット
- [最大許容サイズ情報操作] 画面
- [最大許容サイズ情報の追加] 画面

これらの画面では、次の表に示す最大許容サイズ情報の操作ができます。

表 7-8 運用開始後に画面からできる最大許容サイズ情報の操作

項番	操作		操作する画面
1	最大許容サイズ情報の参照		<ul style="list-style-type: none"> • [ファイル共有設定] ポートレット • [最大許容サイズ情報操作] 画面
2	最大許容サイズ情報の追加	デフォルトの追加	×
		デフォルト以外の追加※1	[最大許容サイズ情報の追加] 画面
3	最大許容サイズ情報の削除	デフォルトの削除	×
		デフォルト以外の削除※2	[最大許容サイズ情報操作] 画面

(凡例)

×：操作できません。

注※1

運用中に、デフォルト以外の最大許容サイズ情報を追加した場合、追加した最大許容サイズ情報は、それ以降に作成するルートフォルダだけに適用されます。既存のルートフォルダに割り当てられている最大許容サイズには影響しません。

注※2

運用中に、デフォルト以外の最大許容サイズ情報を削除した場合、その最大許容サイズ情報を用いて割り当てられたルートフォルダの最大許容サイズには影響しません。

なお、最大許容サイズ情報を変更したい場合は、変更したい最大許容サイズ情報を削除してから、変更した最大許容サイズ情報を追加してください。

各画面の操作方法、および画面の詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

7.10 ごみ箱の設定

運用開始後に、ごみ箱を使用するかどうかの設定を変更する方法について説明します。

ごみ箱を使用するかどうかは、環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) および [ファイル共有設定] ポートレットを使用して設定します。

7.10.1 ごみ箱を使用する設定に変更する

ごみ箱を使用しない設定から使用する設定に変更する手順は次のとおりです。

1. Collaboration がデプロイされている J2EE サーバが起動している場合は停止します。
2. 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のキー [hptl_clb_cfs_TrashCan] に [on] を指定します。
3. J2EE サーバを起動します。
4. 必要に応じて、個人ルートフォルダ、ワークスペースルートフォルダ、およびグループルートフォルダの [プロパティ全般] 画面で、ごみ箱を使用する設定に変更します。

[プロパティ全般] 画面で、ごみ箱を使用する設定に変更する方法の詳細は、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

7.10.2 ごみ箱を使用しない設定に変更する

ごみ箱を使用する設定から使用しない設定に変更する場合、ユーザが [ファイル共有] ポートレットを使用できないようにアクセス権を設定してから、実行してください。また、設定を変更する前に [ファイル共有設定] ポートレットですべてのルートフォルダのごみ箱を削除してください。

ごみ箱を使用しない設定から使用する設定に変更する手順は次のとおりです。

1. [ファイル共有] ポートレットのアクセス権を設定します。
uCosminexus Portal Framework の機能を使用して、[ファイル共有] ポートレットがシステム管理者にだけ表示されるように、アクセス権を設定します。アクセス権の設定方法の詳細は、マニュアル「uCosminexus Portal Framework 運用管理者ガイド」を参照してください。
2. [ファイル共有設定] ポートレットの [オプション▼] - [すべてのごみ箱を削除する] を選択します。
ごみ箱を削除してよいかどうかを確認するメッセージダイアログが表示されます。
3. [OK] ボタンをクリックします。
すべてのルートフォルダのごみ箱が削除されます。
4. Collaboration がデプロイされている J2EE サーバが起動している場合は停止します。
5. 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のキー [hptl_clb_cfs_TrashCan] に [off] を指定します。
6. J2EE サーバを起動します。

7.11 アクセス履歴の取得

アクセス履歴を取得し、運用する方法について説明します。

アクセス履歴とは、[ファイル共有] ポートレットで、ファイルまたはフォルダに対してユーザが実行した操作やシステムが実行したファイルの削除処理の履歴を記録した情報のことです。ファイルまたはフォルダに対して、「いつ」、「だれが」、「どんな操作をしたか」をアクセス履歴として取得できます。アクセス履歴が出力されるファイルのことをアクセス履歴ファイルといいます。

アクセス履歴を取得することで、次のような運用ができます。

- ユーザがファイル、フォルダを操作した回数を調べたい
アクセス履歴をユーザ ID で絞り込むことで、特定のユーザがファイルやフォルダを操作した回数が調べられます。
- コミュニティフォルダの利用状況を調べたい
アクセス履歴をコミュニティ ID で絞り込むことで、特定のコミュニティフォルダに対するユーザのアクセス回数が調べられます。
- ファイルをダウンロードしたユーザを調べたい
アクセス履歴のユーザ ID を確認することで、ファイルをダウンロードしたユーザが調べられます。

ユーザの 1 回の操作またはシステムの 1 回の処理に対して、1 個のアクセス履歴が出力されます。

アクセス履歴を出力するユーザの操作を次の表に示します。

表 7-9 アクセス履歴を出力するユーザの操作

分類	操作	操作方法
フォルダの参照系の操作	開く	P
	プロパティを参照する	P
	アクセス権を参照する	P
	ファイルとフォルダを検索する	P
フォルダの更新系の操作	作成する	P
	コピーする	P
	移動する*	P
	削除する*	P
	プロパティを更新する	P
	アクセス権を更新する	P
ファイルの参照系の操作	ダウンロードする	P
	プロパティを参照する	P
	アクセス権を参照する	P
	ファイルを添付する	P
ファイルの更新系の操作	登録する	P

分類	操作	操作方法
ファイルの更新系の操作	更新する	P
	コピーする	P
	移動する※	P
	削除する※	P
	ロックする	P
	アンロックし更新を反映する	P
	ロック前に戻す	P
	プロパティを更新する	P
	アクセス権を更新する	P

(凡例)

P：[ファイル共有] ポートレットでの操作を示します。

注※

フォルダまたはファイルを削除する場合、ごみ箱を使用しているかどうかやフォルダまたはファイルの場所によって、操作の区分が次のように異なります。

ごみ箱の使用の有無	フォルダまたはファイルの場所	操作
使用する	ごみ箱の下位フォルダまたは下位ファイル	削除する
	ごみ箱以外のフォルダの下位フォルダまたは下位ファイル	移動する
使用しない	—	削除する

(凡例) —：該当しません。

また、アクセス履歴には、ユーザが操作したファイルやフォルダ、またはシステムが削除したファイルを示す情報として OIID が出力されます。OIID からユーザが操作したファイルやフォルダ、またはシステムが削除したファイルの名前や情報を取得するには、アクセス履歴ファイルを入力ファイルに指定して File Sharing クライアント運用コマンドを実行します。File Sharing クライアント運用コマンドについては、「8.7 File Sharing クライアント運用コマンドの概要」を参照してください。

なお、アクセス履歴を取得するためには、必要なディスク容量の確保と File Sharing クライアントでの環境設定が必要です。ディスク容量の見積もりについては、「2.3.2(3) アクセス履歴を取得する場合のディスク容量」を参照してください。File Sharing クライアントでの環境設定については、「4.6 アクセス履歴を取得するための設定」を参照してください。

7.11.1 アクセス履歴ファイルの出力先ディレクトリとファイル名

ここでは、アクセス履歴ファイルの出力先ディレクトリとファイル名について説明します。また、アクセス履歴ファイルの切り替えファイル数についても説明します。

なお、アクセス履歴ファイルの文字コードは UTF-8 です。

(1) 出力ディレクトリ

アクセス履歴ファイルの出力先を次に示します。

{環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のキー hptl_clb_cfs_AccessDataPath に指定したディレクトリ}%cfs

(2) ファイル名

アクセス履歴ファイルのファイル名を次の表に示します。

表 7-10 アクセス履歴ファイルのファイル名

アクセス履歴	ファイル名	説明
[ファイル共有] ポートレット	hptl_clb_cfs_ac_NO.log*	hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption に指定した操作または処理に対するアクセス履歴が出力されます。
	hptl_clb_cfs_ac2_NO.log*	hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption2 に指定した操作または処理に対するアクセス履歴が出力されます。

注※ NO はファイルの通し番号を示します。

(3) 切り替えファイル数

アクセス履歴の出力がファイルサイズの上限を超えた場合に、切り替えるファイルの数は 16 です。切り替えるファイルの数の上限を超えると、最初のファイルに戻って出力されます。このとき、ファイルは上書きされます。

7.11.2 アクセス履歴として取得できる情報

ここでは、アクセス履歴の出力形式、出力される項目、出力例について説明します。

(1) 出力形式と出力される項目

アクセス履歴は、アクセス履歴ファイルに 1 行ずつ出力されます。

各項目は半角スペースで区切って出力されます。また、出力される値に半角スペースを含む場合は、[""] (引用符) で囲んで出力されます。

アクセス履歴の形式を次の図に示します。

図 7-4 アクセス履歴の出力形式

1	2	3	4	5	6	7
0091	2007/01/17	14:12:04.779	CFS	00000C08	000012B0	KDCF00100-I
	hostname	COM01	WPL01	10333000	FROPEN	P - 8d3280b9-0f25-050C
	8	9	10	11	12	13 14 15

出力される各項目の詳細を次の表 7-11 に示します。図 7-4 の番号と表 7-11 の項番が対応しています。

表 7-11 アクセス履歴として出力される項目の詳細

項番	項目	内容
1	番号	アクセス履歴の通番が 4 けたで出力されます。
2	日付	アクセス履歴の出力日付が yyyy/mm/dd の形式で出力されます。 yyyy：西暦年号（4 けた） mm：月（2 けた） dd：日（2 けた）
3	時刻	アクセス履歴の出力時刻が hh:mm:ss.sss の形式で出力されます。 hh：時（2 けた） mm：分（2 けた） ss：秒（2 けた） sss：ミリ秒（3 けた）
4	アプリケーション識別子	「CFS」が出力されます。
5	プロセス ID	プロセス ID が出力されます。
6	スレッド識別子	スレッド識別子が出力されます。
7	メッセージ ID	メッセージ ID が出力されます。 アクセス履歴ファイルに出力されるメッセージの詳細は、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。
8	アプリケーションサーバ識別子	アプリケーションサーバのホスト名または IP アドレスが出力されます。
9	コミュニティ ID	操作または処理対象がコミュニティフォルダのファイルまたはフォルダの場合、コミュニティ ID が出力されます。 操作または処理対象が個人フォルダ、グループフォルダのファイルまたはフォルダの場合は「-」が出力されます。
10	ワークスペース ID	操作または処理対象がコミュニティフォルダのファイルまたはフォルダの場合、ワークスペース ID が出力されます。 操作または処理対象が次に示すファイルまたはフォルダの場合は、「-」が出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> 個人フォルダのファイルまたはフォルダ グループフォルダのファイルまたはフォルダ コミュニティルートフォルダ*
11	ユーザ ID	操作を実行したユーザのユーザ ID が出力されます。
12	操作識別子	ユーザが実行した操作またはシステムが実行した処理を示す識別子が出力されます。 操作識別子の詳細は、表 7-12 を参照してください。
13	操作元識別子	ユーザが操作を実行した方法またはシステムが処理を実行した方法として、次に示す値が出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> P：[ファイル共有] ポートレットでの操作を示します。
14	グループ ID	操作または処理対象がグループフォルダのファイルまたはフォルダの場合、グループ ID が出力されます。 操作または処理対象が個人フォルダ、コミュニティフォルダのファイルまたはフォルダの場合は「-」が出力されます。

項番	項目	内容
15	付加情報	付加情報が出力されます。付加情報の内容は、ユーザが実行した操作またはシステムが実行した処理によって異なります。付加情報の詳細は、表 7-12 を参照してください。

注※

操作元識別子が [ファイル共有] ポートレットの場合、次に示す画面でコミュニティルートフォルダを操作したときだけ「-」が出力されます。それ以外の画面でコミュニティルートフォルダを操作した場合は、ワークスペース ID が出力されます。

- [フォルダへ移動] 画面
- [フォルダへコピー] 画面
- [フォルダ選択] 画面

各画面については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

ユーザが実行する操作ごとに、操作識別子の詳細を次の表に示します。また、出力される付加情報の内容についても説明します。

表 7-12 アクセス履歴の操作識別子の詳細

分類	操作	操作識別子	付加情報※ ¹
		[ファイル共有] ポートレット	
フォルダの参照系の操作	開く	FROPEN	• 付加情報 1: フォルダの OIID
	プロパティを参照する	FRPROPREF	• 付加情報 1: フォルダの OIID
	アクセス権を参照する	FRPERMREF	• 付加情報 1: フォルダの OIID
	ファイルとフォルダを検索する	SEARCH	• 付加情報 1: 検索する場所に指定したフォルダの OIID
フォルダの更新系の操作	作成する	FRCREATE	• 付加情報 1: 作成したフォルダの OIID • 付加情報 2: 作成先フォルダの OIID
	コピーする	FRCOPY	• 付加情報 1: コピーしたフォルダの OIID • 付加情報 2: コピー元フォルダの OIID • 付加情報 3: コピー先フォルダの OIID
	移動する	FRMOVE	• 付加情報 1: 移動したフォルダのフォルダ名 • 付加情報 2: 移動元フォルダの OIID • 付加情報 3: 移動先フォルダの OIID
	削除する	FRDELETE	• 付加情報 1: 削除したフォルダのフォルダ名 • 付加情報 2: 削除元フォルダの OIID
	プロパティを更新する	FRPROPMOD	• 付加情報 1: フォルダの OIID

分類	操作	操作識別子	付加情報※1
		[ファイル共有] ポートレット	
フォルダの更新系の操作	アクセス権を更新する	FRPERMMOD	• 付加情報 1: フォルダの OIID
ファイルの参照系の操作	ダウンロードする	FLDOWNLOAD	• 付加情報 1: ファイルの OIID
	プロパティを参照する	FLPROPPREF	• 付加情報 1: ファイルの OIID
	アクセス権を参照する	FLPERMREF	• 付加情報 1: ファイルの OIID
	ファイルを添付する	FLATTACH	• 付加情報 1: ファイルの OIID
ファイルの更新系の操作	登録する	FLREGISTER	• 付加情報 1: 登録したファイルの OIID • 付加情報 2: 登録先フォルダの OIID
	更新する	FLMODIFY	• 付加情報 1: ファイルの OIID
	コピーする	FLCOPY	• 付加情報 1: コピーしたファイルの OIID • 付加情報 2: コピー元フォルダの OIID • 付加情報 3: コピー先フォルダの OIID
	移動する※2	FLMOVE	• 付加情報 1: 移動したファイルのファイル名または OIID※3 • 付加情報 2: 移動元フォルダの OIID • 付加情報 3: 移動先フォルダの OIID
	削除する※2	FLDELETE	• 付加情報 1: 削除したファイルのファイル名 • 付加情報 2: 削除元フォルダの OIID • 付加情報 3: 削除したファイルの OIID
	ロックする	FLLOCK	• 付加情報 1: ファイルの OIID
	アンロックし更新を反映する	FLUNLOCK	• 付加情報 1: ファイルの OIID
	ロック前に戻す	FLRETURN	• 付加情報 1: ファイルの OIID
	プロパティを更新する	FLPROPMOD	• 付加情報 1: ファイルの OIID
	アクセス権を更新する	FLPERMMOD	• 付加情報 1: ファイルの OIID

(凡例)

—: 該当する操作はありません。

注※1

操作がエラーになり付加情報を出力できない場合は、「-」を出力します。

注※2

hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption, hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption2, AccessDataFilteringOption または AccessDataFilteringOption2 に CT_FL_SYS_DEL を指定している場合、システムが削除した次のファイルの情報も出力されます。

- ユーザが削除したフォルダの下位ファイル
- ユーザがファイルまたはフォルダを移動する場合、システムが削除したファイル
- ごみ箱を使用する場合、ごみ箱に格納するファイルと格納済みのファイルのサイズの合計がごみ箱の最大サイズを超えたときに、システムが削除したファイル

注※3

同一のルートフォルダ内で移動する場合は、OIID が出力されます。

異なるルートフォルダ間で移動する場合は、ファイル名が出力されます。

(2) 出力例

アクセス履歴ファイルの出力例を次に示します。なお、…は、途中の省略を示します。

```
0091 2007/01/17 14:12:04.779 CFS 00000C08 000012B0 KDCF00100-I hostname COM01 WPL01
10333000 FROPEN P - 8d3280b9-0f25-...50C
0092 2007/01/17 14:12:04.936 CFS 00000C08 000012B0 KDCF00100-I hostname COM01 WPL01
10333000 FLDOWNLOAD P - 8d3280b9-0f25-...42F
0093 2007/01/17 14:12:04.936 CFS 00000C08 000012B0 KDCF00100-I hostname - - 10333000
FROPEN P 0000000000AA067B 8d3280b9-0f25-...51C
```

出力例の説明

この例は、[ファイル共有] ポートレットのアクセス履歴が3件出力されています。それぞれのアクセス履歴について説明します。

- 1件目のアクセス履歴は、コミュニティフォルダのフォルダを開く操作を実行したことを示します。
- 2件目のアクセス履歴は、コミュニティフォルダのファイルをダウンロードする操作を実行したことを示します。
- 3件目のアクセス履歴は、グループフォルダのフォルダを開く操作を実行したことを示します。

7.11.3 アクセス履歴の運用例

ここでは、アクセス履歴ファイルに出力された OIID から、ユーザが操作したファイル名、フォルダ名またはシステムが削除したファイル名やファイル、フォルダの情報を取得する例について説明します。

(1) アクセス履歴ファイルの OIID からファイル名、フォルダ名を取得する例

アクセス履歴ファイルの付加情報には、ユーザが操作したファイルもしくはフォルダ、またはシステムが削除したファイルを示す OIID が出力されます。OIID を基にファイル名またはフォルダ名を取得するには、アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換コマンド (cfsoiid2name) を実行します。

コマンドを実行して、OIID からファイル名またはフォルダ名を取得する手順を次に示します。

手順

1. ファイル名またはフォルダ名を取得したいアクセス履歴ファイルを出力先ディレクトリとは異なるディレクトリにコピーします。

File Sharing サーバが稼働中の場合、アクセス履歴ファイルを参照、更新、および削除できません。必ず異なるディレクトリにコピーしてください。

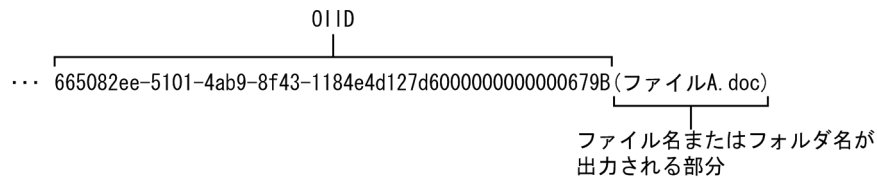
2. コピーしたファイルを入力ファイルに指定して、OIID の変換コマンド (cfsoiid2name) を実行します。

OIID がファイル名またはフォルダ名に変換されたアクセス履歴ファイルが出力されます。

OIID の変換コマンド (cfsoiid2name) については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfsoiid2name (アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換)」を参照してください。

3. 出力されたファイルから、ファイル名およびフォルダ名を参照します。

OIID をファイル名またはフォルダ名に変換したときの出力形式を次の図に示します。OIID の部分に、「(ファイル名)」または「(フォルダ名)」が付加されて出力されます。



(2) アクセス履歴ファイルの OIID からファイル、フォルダの情報を取得する例

アクセス履歴ファイルに出力された OIID を基に、ファイルまたはフォルダの情報を取得することもできます。ファイルまたはフォルダの情報を取得するには、アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得コマンド (cfslstprop) を実行します。コマンドを実行すると取得できる情報の詳細は、「8.8

File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得)」を参照してください。

コマンドを実行して、OIID からファイルまたはフォルダの情報を取得する手順を次に示します。

手順

1. OIID からファイルまたはフォルダの情報を取得したいアクセス履歴ファイルを出力先ディレクトリとは異なるディレクトリにコピーします。
File Sharing サーバが稼働中の場合、アクセス履歴ファイルを参照、更新、および削除できません。必ず異なるディレクトリにコピーしてください。
2. コピーしたファイルを入力ファイルに指定して、ファイル、フォルダの情報の取得コマンド (cfslstprop) を実行します。
ファイルまたはフォルダの情報がファイルに出力されます。
ファイル、フォルダの情報の取得コマンド (cfslstprop) については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得)」を参照してください。
3. 出力されたファイルから、ファイルまたはフォルダの情報を参照します。
出力されたファイルの形式については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得)」を参照してください。

参考 OIID 指定ファイルからファイルまたはフォルダの情報を取得する方法

アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得コマンド (cfslstprop) では、OIID 指定ファイルを入力ファイルとしてコマンドを実行することもできます。

OIID 指定ファイルとは、情報を取得したいファイルまたはフォルダの OIID を記述したファイルのことです。OIID 指定ファイルの記述方法については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得)」を参照してください。

OIID 指定ファイルからファイルまたはフォルダの情報を取得する場合は、アクセス履歴ファイルの OIID からファイル、フォルダの情報を取得する方法の手順の 2. で OIID 指定ファイルを指定してください。

7.11.4 注意事項

- アクセス履歴として出力できるのは、ユーザが直接操作したファイルおよびフォルダの情報です。ただし、次に示すキーまたはエントリで CT_FL_SYS_DEL を指定している場合、システムが削除したファイルの情報も出力できます。

- hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption キー
- hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption2 キー
- AccessDataFilteringOption エントリ
- AccessDataFilteringOption2 エントリ

- J2EE サーバまたは Hitachi Web Server を停止した場合は、必要に応じて出力されたアクセス履歴ファイルを退避してください。

退避しない場合、J2EE サーバまたは Hitachi Web Server を再起動したあと、通番 1 のアクセス履歴ファイルにアクセス履歴が追加されるか、またはすべてのアクセス履歴ファイルが削除されて通番 1 のアクセス履歴ファイルに出力されます。

J2EE サーバまたは Hitachi Web Server を再起動したときにアクセス履歴を出力する動作は、環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のキー「hptl_clb_cfs_AccessDataStartMode」に指定します。

環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) の詳細は、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

- File Sharing の稼働中にマシン時間を変更しないでください。マシン時間を過去の日付に戻すと、すでに出力されたアクセス履歴ファイルが上書きされます。
- J2EE サーバまたは Hitachi Web Server の稼働中は、アクセス履歴ファイルに対して次に示す操作をしないでください。
 - ファイルを参照する
 - ファイルを更新する
 - ファイルを削除する
 - ファイルのアクセス権を変更する
 - ファイルの更新時間を変更する
 - ファイル名を変更する

7.12 監査ログの運用

File Sharing では、監査ログを出力する設定にした場合、次に示す情報が監査ログファイルに出力されます。

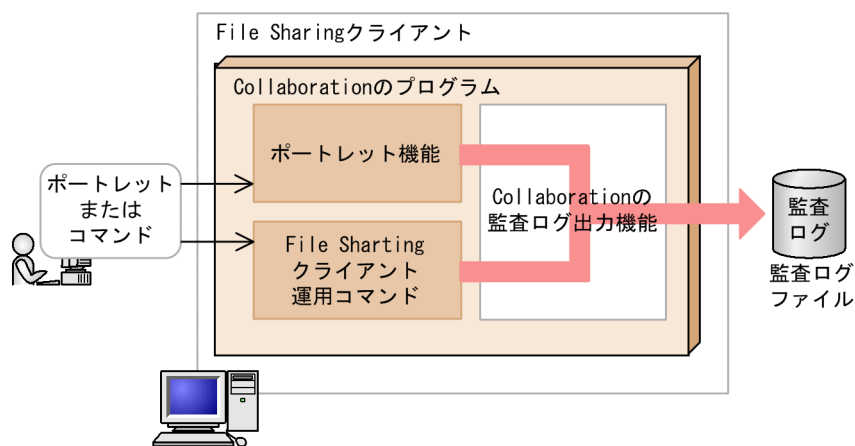
- File Sharing のポートレットに対する操作履歴、それに伴うプログラムの動作履歴
- File Sharing クライアント運用コマンドの実行履歴、それに伴うプログラムの動作履歴

監査者は、これらの情報（監査ログ）を調査することで、「いつ」「だれが」「何を実施したか」を知ることができます。

7.12.1 File Sharing で出力される監査ログの流れ

File Sharing で出力される監査ログの流れを次に示します。

図 7-5 File Sharing で出力される監査ログの流れ



(凡例)

→ : File SharingのポートレットまたはFile Sharingクライアント運用コマンドの操作による制御の流れ

→ : File SharingのポートレットまたはFile Sharingクライアント運用コマンドの操作による監査ログ出力の流れ

■ : File Sharingクライアントの機能

□ : Collaborationで提供する監査ログを出力する機能

説明

ポートレットに対する操作履歴やコマンドの実行履歴については、Collaborationの監査ログ出力機能で統一した形式に整形されたあと、Collaborationの監査ログファイルにメッセージとして出力されます。

ポートレットを操作したとき、またはコマンドを実行したときに監査ログを出力するための設定については、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

7.12.2 File Sharing の監査ログの取得対象となる監査事象

監査ログは、監査事象が発生したタイミングで出力されます。監査事象とは、監査ログが出力される契機となった事象（ポートレットに対する操作、コマンドの実行、および各操作に伴うプログラムの処理）のことです。

File Sharing の監査ログの取得対象となるのは、次の監査事象に関する操作です。

表 7-13 File Sharing の監査ログの取得対象となる監査事象

監査事象	説明	監査ログの出力の有無	
		P	C
AccessControl	アクセス制限されているリソースに対する操作で認証が成功または失敗したことを示す事象	○	○
AnomalyEvent	ポートレットまたはコマンドの引数の入力値チェックで異常が発生したことを示す事象	○	○
ConfigurationAccess	設定情報（アクセス権限や構成情報）に対する操作が成功または失敗したことを示す事象	○	○
ContentAccess	File Sharing が使用するデータ（フォルダ、ファイルなど）に対する操作が成功または失敗したことを示す事象	○	○
Failure	プロパティファイルの操作やプロパティファイルの障害対象キーの読み込みによる異常を示す事象	○	○
StartStop	コマンドが開始または終了したことを示す事象	×	○

(凡例)

- P：File Sharing のポートレットに対する操作。
- C：File Sharing クライアント運用コマンドの実行。
- ：監査事象に対する監査ログが出力されます。
- ×：監査事象に対する監査ログは出力されません。

7.12.3 監査ログが出力される操作

File Sharing の監査事象と監査ログが出力される操作の対応について説明します。

(1) ポートレットの監査事象

監査事象と監査ログが出力されるポートレットの操作の対応を次の表に示します。

表 7-14 監査事象と監査ログが出力されるポートレットの操作の対応

監査事象	操作
AccessControl	最大許容サイズ情報への操作全般
	ベースパス情報への操作全般
	フォルダへの操作全般
	ファイルへの操作全般
AnomalyEvent	不正な値の指定
ConfigurationAccess	フォルダのアクセス権の参照
	フォルダのアクセス権の更新
	ファイルのアクセス権の参照
	ファイルのアクセス権の更新

監査事象	操作
ContentAccess	フォルダの表示
	フォルダの作成
	フォルダのコピー
	フォルダの移動*
	フォルダの削除*
	フォルダのプロパティの参照
	フォルダのアクセス権の参照
	フォルダのプロパティの更新
	フォルダのアクセス権の更新
	フォルダの検索
	ファイルのコピー
	ファイルの移動*
	ファイルの削除*
	ファイルのプロパティの参照
	ファイルのアクセス権の参照
	ファイルのプロパティの更新
	ファイルのアクセス権の更新
	ファイルの登録
	ファイルのダウンロード
	ファイルのロック
	ファイルをアンロックして更新
	ファイルを本文に添付
	最大許容サイズ情報の削除
	最大許容サイズ情報の追加
	ベースパス情報の削除
	ベースパス情報のプロパティの参照
	ベースパス情報のプロパティの更新
	ベースパス情報の追加
Failure	プロパティファイルの読み込み
	プロパティファイルの障害対象キーの読み込み

注

AnomalyEvent および Failure は、エラーが発生した時に出力されます。

注※

フォルダまたはファイルを削除する場合、ごみ箱を使用しているかどうかやフォルダまたはファイルの場所によって、操作の区分が次のように異なります。

ごみ箱の使用の有無	フォルダまたはファイルの場所	操作
使用する	ごみ箱の下位フォルダまたは下位ファイル	フォルダの削除またはファイルの削除
	ごみ箱以外のフォルダの下位フォルダまたは下位ファイル	フォルダの移動またはファイルの移動
使用しない	—	フォルダの削除またはファイルの削除

(凡例) —：該当しません。

(2) コマンドの監査事象

監査事象と監査ログが出力されるコマンド実行による操作の対応を次の表に示します。

表 7-15 監査事象と監査ログが出力されるコマンド実行による操作の対応

監査事象	操作
AccessControl	<p>次のコマンドの実行によるアクセス制御されているリソースへの操作</p> <ul style="list-style-type: none"> • cfsaddgrpmngr (グループフォルダの運用者の追加) • cfsaddgrpprm (グループフォルダのアクセス権の追加) • cfschggrpflidr (グループルートフォルダの非表示化) • cfschkusdspc (ベースパス情報の使用量の確認) • cfsrtgrpflidr (グループルートフォルダの作成) • cfsdelgrpmngr (グループフォルダの運用者の削除) • cfsdelgrpprm (グループフォルダのアクセス権の削除) • cfsexpfile (ファイルのエクスポート) • cfslstad (ベースパス情報の取得) • cfslstflidr (ルートフォルダの情報の一覧表示) • cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得) • cfslstqt (最大許容サイズ情報の取得) • cfsmodgrpprm (グループフォルダのアクセス権の変更) • cfsoiid2name (アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換)
AnomalyEvent	<p>次のコマンドに誤ったオプションを指定</p> <ul style="list-style-type: none"> • cfsaddgrpmngr (グループフォルダの運用者の追加) • cfsaddgrpprm (グループフォルダのアクセス権の追加) • cfschgcode (ファイルの文字コードセットの変換) • cfschggrpflidr (グループルートフォルダの非表示化) • cfschkusdspc (ベースパス情報の使用量の確認) • cfsrtgrpflidr (グループルートフォルダの作成) • cfsdelgrpmngr (グループフォルダの運用者の削除)

監査事象	操作
AnomalyEvent	<ul style="list-style-type: none"> • cfsdelgrprrm (グループフォルダのアクセス権の削除) • cfsexpfile (ファイルのエクスポート) • cfslstad (ベースパス情報の取得) • cfslstfldr (ルートフォルダの情報の一覧表示) • cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル, フォルダの情報の取得) • cfslstqt (最大許容サイズ情報の取得) • cfsmodgrprrm (グループフォルダのアクセス権の変更) • cfsoid2name (アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換)
ConfigurationAccess	<p>次のコマンドの実行によるアクセス権限の設定情報に対する操作</p> <ul style="list-style-type: none"> • cfsaddgrprrm (グループフォルダの運用者の追加) • cfsaddgrprrm (グループフォルダのアクセス権の追加) • cfsdelgrprrm (グループフォルダの運用者の削除) • cfsdelgrprrm (グループフォルダのアクセス権の削除) • cfsexpfile (ファイルのエクスポート) ※1 • cfsmodgrprrm (グループフォルダのアクセス権の変更)
ContentAccess	<p>次のコマンドの実行によるリソースへの操作</p> <ul style="list-style-type: none"> • cfsaddgrprrm (グループフォルダの運用者の追加) • cfsaddgrprrm (グループフォルダのアクセス権の追加) • cfschggrpfldr (グループルートフォルダの非表示化) • cfschkusdspc (ベースパス情報の使用量の確認) • cfsrtgrpfldr (グループルートフォルダの作成) • cfsdelgrprrm (グループフォルダの運用者の削除) • cfsdelgrprrm (グループフォルダのアクセス権の削除) • cfsexpfile (ファイルのエクスポート) • cfslstad (ベースパス情報の取得) • cfslstfldr (ルートフォルダの情報の一覧表示) • cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル, フォルダの情報の取得) • cfslstqt (最大許容サイズ情報の取得) • cfsmodgrprrm (グループフォルダのアクセス権の変更) • cfsoid2name (アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換)
Failure	<p>次のコマンドの実行によるプロパティファイルに対する操作またはプロパティファイルの障害対象キーの読み込み操作</p> <ul style="list-style-type: none"> • cfsaddgrprrm (グループフォルダの運用者の追加) • cfsaddgrprrm (グループフォルダのアクセス権の追加) • cfschgcode (ファイルの文字コードセットの変換) • cfschggrpfldr (グループルートフォルダの非表示化) • cfschkusdspc (ベースパス情報の使用量の確認) • cfsrtgrpfldr (グループルートフォルダの作成)

監査事象	操作
Failure	<ul style="list-style-type: none"> • cfsdelgrpmngr (グループフォルダの運用者の削除) • cfsdelgrpprm (グループフォルダのアクセス権の削除) • cfsexpfile (ファイルのエクスポート) • cfslstad (ベースパス情報の取得) • cfslstfldr (ルートフォルダの情報の一覧表示) • cfslstqt (最大許容サイズ情報の取得) • cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得) • cfsmodgrpprm (グループフォルダのアクセス権の変更) • cfsoiid2name (アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換)
StartStop	<p>次のコマンドの実行によるリソースへの操作の開始と終了</p> <ul style="list-style-type: none"> • cfsaddgrpmngr (グループフォルダの運用者の追加) • cfsaddgrpprm (グループフォルダのアクセス権の追加) • cfschgcode (ファイルの文字コードセットの変換) • cfschggrpfldr (グループルートフォルダの非表示化) • cfschkusdspc (ベースパス情報の使用量の確認) • cfsrtgrpfldr (グループルートフォルダの作成) • cfsdelgrpmngr (グループフォルダの運用者の削除) • cfsdelgrpprm (グループフォルダのアクセス権の削除) • cfsexpfile (ファイルのエクスポート) • cfslstad (ベースパス情報の取得) • cfslstfldr (ルートフォルダの情報の一覧表示) • cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得) • cfslstqt (最大許容サイズ情報の取得) • cfsmodgrpprm (グループフォルダのアクセス権の変更) • cfsoiid2name (アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換)

注

AnomalyEvent および Failure は、エラーが発生した時に出力されます。

注※1

-l perm オプションを指定して、cfsexpfile コマンドを実行した場合にだけ出力されます。

7.12.4 監査ログに出力されるオブジェクト情報と動作情報

監査ログに出力されるオブジェクト情報と動作情報を次に示します。

(1) 監査ログに出力されるオブジェクト情報

監査ログに出力されるオブジェクト情報を次の表に示します。

表 7-16 監査ログに出力されるオブジェクト情報（ポートレットの操作の場合）

オブジェクト情報	意味
Basepath	ベースパス情報
Basepath.property	ベースパス情報のプロパティ
File	ファイル
File.permission	ファイルのアクセス権
File.property	ファイルのプロパティ
Folder	フォルダ
Folder.permission	フォルダのアクセス権
Folder.property	フォルダのプロパティ
Quota	最大許容サイズ情報

表 7-17 監査ログに出力されるオブジェクト情報（コマンド実行による操作の場合）

オブジェクト情報	意味
Basepath	ベースパス情報
File	ファイル
File.permission	ファイルのアクセス権
Folder	フォルダ
Folder.permission	フォルダのアクセス権

(2) 監査ログに出力される動作情報

監査ログに出力される動作情報を次の表に示します。

表 7-18 監査ログに出力される動作情報（ポートレットの操作の場合）

動作情報	意味
Add	最大許容サイズ情報の追加
	ベースパス情報の追加
Attach	ファイルを本文に添付
Copy	フォルダのコピー
	ファイルのコピー
Create	フォルダの作成
Delete	フォルダの削除
	ファイルの削除
	最大許容サイズ情報の削除

動作情報	意味
Delete	ベースパス情報の削除
Download	ファイルのダウンロード
Enforce	操作の実施
Lock	ファイルのロック
Modify	フォルダのアクセス権の更新
	ファイルのアクセス権の更新
	フォルダのプロパティの更新
	ファイルのプロパティの更新
	ベースパス情報のプロパティの更新
Move	フォルダの移動
	ファイルの移動
Occur	エラーの発生
Open	フォルダの表示
Refer	フォルダのアクセス権の参照
	ファイルのアクセス権の参照
	フォルダのプロパティの参照
	ファイルのプロパティの参照
	ベースパス情報のプロパティの参照
Register	ファイルの登録
Return	ファイルをロック前に戻す
Search	フォルダの検索
	ファイルの検索
Unlock	ファイルをアンロックして更新

表 7-19 監査ログに出力される動作情報（コマンド実行による操作の場合）

動作情報	意味
Add	ベースパス情報の登録
	グループルートフォルダのアクセス権の追加
	グループルートフォルダの運用者の追加
Create	グループルートフォルダの作成
Delete	ベースパス情報の削除
	グループルートフォルダのアクセス権の削除

動作情報	意味
Delete	グループルートフォルダの運用者の削除
Modify	フォルダのアクセス権の更新
	ファイルのアクセス権の更新
	グループルートフォルダの非表示化
	グループルートフォルダのアクセス権の変更
Occur	エラーの発生
Refer	アクセス権の参照
	ベースパス情報の一覧の取得
	最大使用可能容量の確認
	OIID からフォルダ名への変換
	OIID からファイル名への変換
	OIID に対応するオブジェクトの情報の取得
Start	コマンドの開始
Stop	コマンドの終了

7.12.5 監査ログを出力するための設定

ポートレットの操作時やコマンドの実行による操作時の監査ログを出力する場合は、Collaboration の監査ログ出力機能を使用するための設定が必要です。

Collaboration の監査ログ出力機能を使用するための設定については、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

7.12.6 監査ログの出力項目と出力形式

File Sharing で出力する監査ログの出力項目と出力形式について説明します。

(1) 監査ログの出力項目

ポートレットを操作したときまたはコマンドを実行したときに出力される監査ログの出力項目名を次に示します。出力項目の詳細は、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

- seqnum (通番)
- msgid (メッセージ ID)
- date (日付・時刻)
- progid (プログラム名)
- compid (コンポーネント名)
- pid (プロセス ID)
- ocp:host (発生場所 (ホスト名の場合))

- ocp:ipv4 (発生場所 (IPv4 アドレスの場合))
- ctgry (監査事象の種別)
- result (監査事象の結果)
- subj:uid (サブジェクト識別情報)
- subj:pid (サブジェクト識別情報)
- obj (オブジェクト情報)
- obj:arg (オブジェクト情報) ※1
- obj:command (オブジェクト情報) ※1
- obj:file (オブジェクト情報) ※1
- obj:id (オブジェクト情報) ※1
- obj:name (オブジェクト情報) ※1
- obj:param (オブジェクト情報) ※1
- obj:rc (オブジェクト情報) ※1
- op (動作情報) ※2
- objloc (オブジェクトロケーション情報)
- objloc:destination (オブジェクトロケーション情報) ※1
- objloc:source (オブジェクトロケーション情報) ※1
- auth (権限情報)
- msg (自由記述)

注※1

オブジェクト情報およびオブジェクトロケーション情報の詳細は、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

注※2

動作情報については、「7.12.4(2) 監査ログに出力される動作情報」を参照してください。

(2) 監査ログの出力形式

監査ログは、テキスト形式で、メッセージとして出力されます。

監査ログのメッセージの種類を次の表に示します。メッセージの詳細は、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

表 7-20 監査ログとして出力されるメッセージ

分類	メッセージ ID
File Sharing のポートレットの操作時に出力されるメッセージ	KDCF00500~KDCF00599
コマンド実行時に出力されるメッセージ	KDCF20500~KDCF20599

監査ログは次の形式で出力されます。

CALFHM 1.0, 出力項目1=値1, 出力項目2=値2, 出力項目3=値3, . . . 出力項目n=値n

先頭の「CALFHM 1.0」は、ヘッダ情報です。監査ログに共通で出力されます。出力項目の詳細は、「7.12.6(1) 監査ログの出力項目」を参照してください。

なお、出力項目の値に、エスケープ対象の文字が含まれている場合は、文字列の前後を「"」（引用符）で囲んで出力されます。

エスケープ対象の文字を次に示します。

- 引用符「"」（%x22）※
注※
引用符「"」（%x22）の場合は、直前に引用符「"」（%x22）が一つ付けられます。
- コンマ「,」（%x2C）
- 半角スペース「SP」（%x20）
- 制御文字「NUL（空文字）」～「US（ユニットセパレータ）」、「DEL（削除）」（%x00～%x1F, %x7F）

なお、改行文字の「CR（復帰）」（%x0D）および「LF（改行）」（%x0A）は、エスケープ対象の文字に含まれません。

出力例

【ファイル共有】ポートレットを操作したときに出力される監査ログの例を次に示します。

```
CALFHM 1.0, seqnum=14, msgid=KDCF00500-I, date=2013-12-27T12:13:32.058+09:00,
progid=Collaboration, compid=Filesharing_Portlet, pid=1685884, ocp:host=hostname,
ctgry=AccessControl, result=Success, subj:uid=username, obj=File,
obj:id=665082ee-5101-4ab9-8f43-1184e4d127d6000000000000003F7, op=Enforce,
objloc:source=8d3280b9-0f25-4551-8f04-414416ae43f8000000000000003DC, auth="General User",
msg=ユーザがファイルにアクセスしました。(成功)
```

出力例の説明

uidに示すユーザ（username）が、obj:idに示す OIID のファイルのアクセスに成功したことを示しています。

7.12.7 監査ログの運用時の注意事項

監査ログの運用時の注意事項を次に示します。

- 監査ログとして出力されるのは、ユーザが直接操作したファイルおよびフォルダの情報だけです。例えば、ユーザのフォルダを削除する操作によってフォルダの下位ファイルも削除された場合、下位ファイルの削除は監査ログとして出力されません。
- 監査事象の種類や重要度によって監査ログの出力量を制御することができますが、「いつ」「だれが」「何を実施したか」という情報を調査することを考慮した場合、すべての操作履歴を取得することを推奨します。

8

File Sharing のコマンド

この章では, File Sharing で使用するコマンドの種類と文法について説明します。

8.1 File Sharing サーバのコマンドの概要

ここでは、File Sharing サーバで使用するコマンドについて説明します。

8.1.1 File Sharing サーバのコマンド一覧

File Sharing サーバで使用するコマンドは、システム運用コマンド、データベース運用コマンド、システム導入支援コマンド、およびトラブルシュートコマンドに分けられます。これらのコマンドを実行できるユーザは、システム管理者だけです。また、Windows Server 2008 x86、Windows Server 2008 x64 および Windows Server 2008 R2 では、ユーザアカウント制御(UAC)が有効な場合、コマンド実行時にユーザアカウント制御ダイアログが表示されます。この場合は [OK] ボタンをクリックして、管理者権限で実行してください。

File Sharing サーバで使用するコマンドの一覧を次の表に示します。

表 8-1 File Sharing サーバのコマンド一覧

種類	コマンド	機能	実行のタイミング	排他モード
システム運用コマンド	EDMRefresher	サービスプロセスのリフレッシュ	起動中	—
	EDMStart	File Sharing サーバの起動	停止中	—
	EDMStop	File Sharing サーバの終了	起動中	—
	EDMUsrView	文書空間に接続しているユーザー一覧出力	起動中	—
データベース運用コマンド	EDMAddMeta ^{*1}	メタ情報の追加	停止中	EX
	EDMCrtSimMeta ^{*1}	クラス定義情報ファイルの作成	停止中	SH
	EDMCrtSql ^{*1}	File Sharing 用データベース定義文の作成	停止中	SH
	EDMDelMeta	メタ情報の削除	停止中	EX
	EDMInitMeta ^{*1}	メタ情報の初期設定	停止中	EX
	EDMPrintMeta	メタ情報ファイルの出力	停止中	EX
	EDMRegEnvId	File Sharing サーバ実行環境の情報の登録	停止中	EX
システム導入支援コマンド	EDMCBuildDocSpace	文書空間の構築	停止中 ^{*2}	—
	EDMCDefDocSpace	文書空間の定義	停止中 ^{*2}	—
トラブルシュートコマンド	EDMChkTbl	データベースの表・列の確認	停止中 ^{*3}	—
	EDMGetRas	File Sharing サーバの障害情報の取得	起動中または停止中	—

(凡例)

起動中：

File Sharing サーバの起動中にコマンドを実行することを示します。

停止中：

File Sharing サーバの停止中にコマンドを実行することを示します。

— :

該当しません。

EX :

排他モードが EX, SH のコマンドは同時に実行できません。

該当するコマンドを実行中の場合, EDMStart コマンドは失敗します。

SH :

排他モードが EX のコマンドは同時に実行できません。排他モードが SH のコマンドは同時に実行できます。

該当するコマンドを実行中の場合, EDMStart コマンドは失敗します。

注※1

システム導入支援機能を使用しない場合などに使用するコマンドです。

注※2

次のコマンドとは同時に実行できません。

- EDMAddMeta
- EDMChkTbl
- EDMCrtSimMeta
- EDMCrtSql
- EDMDelMeta
- EDMInitMeta
- EDMPrintMeta
- EDMRegEnvId

注※3

次のコマンドとは同時に実行できません。

- EDMAddMeta
- EDMCBuildDocSpace
- EDMCDefDocSpace
- EDMDelMeta
- EDMInitMeta
- EDMPrintMeta
- EDMRegEnvId

8.1.2 File Sharing サーバのコマンドの形式

ここでは, File Sharing サーバで使用するコマンドの入力形式, 使用方法および注意事項について説明します。

(1) File Sharing サーバで使用するコマンドの入力形式

コマンドの入力形式を次に示します。

コマンド名称 [オプション…]

(a) コマンド名称

コマンド名称は、実行するコマンドのファイル名です。

(b) オプション

オプションの入力形式の規則を次に示します。なお、説明文で使用する「\$」はコマンドプロンプト、「cmd」はコマンド名を表します。

オプションの形式

オプションはマイナス記号で始まる文字列で、次に示すように、引数を取らないか、または1個の引数を取ります。

形式1：-オプションフラグ

形式2：-オプションフラグ<空白またはタブ>フラグ引数

(凡例)

オプションフラグ：1文字の英数字で、英大文字・小文字は区別されます。

フラグ引数：オプションフラグに対する引数です。

オプションの指定規則

- フラグ引数を取らないオプションフラグは、一つのマイナス記号のあとにまとめて指定できません。
誤った指定例：\$ cmd -abc
正しい指定例：\$ cmd -a -b -c
- フラグ引数を必要とするオプションフラグのフラグ引数は省略できません。
例えば、オプションフラグ-aがフラグ引数を取る場合、次のように入力すると-bはフラグ引数と見なされます。
\$ cmd -a -b
- オプションフラグとフラグ引数の間には空白またはタブが必要です。
誤った指定例：\$ cmd -afile
正しい指定例：\$ cmd -a file
- 同じオプションフラグを2回以上指定できません。例えば、「\$ cmd -a 1 -a 2」とは入力できません。
- マイナス記号だけのオプションは入力できません。例えば、「\$ cmd -」と入力すると「-」はコマンド引数と見なされます。

(2) File Sharing サーバで使用するコマンドの入出力

(a) 入力

入力は、すべてコマンドのオプション、引数の並びです。

(b) 出力

コマンド処理が正常に終了した場合の出力は、すべて標準出力に対して実行します。また、終了コードの一覧を次の表に示します。

表 8-2 終了コード一覧

終了コード	意味
0	正常終了

終了コード	意味
1	警告つき正常終了
2	引数エラー
それ以外	そのほかのエラー

コマンド処理がエラーになった場合（終了コードが0以外）は、メッセージをすべて標準エラー出力に出力します。引数エラーになった場合（終了コードが2）は、標準エラー出力にコマンドの使用方法 (USAGE) を出力します。出力形式は次のとおりです。

出力形式

Usage:xxxx yyyy

- xxxx：コマンド名称が出力されます。
- yyyy：コマンドの指定形式が表示されます。

出力例

```
Usage:command -a -b option_arg_1 [-c] [-d option_arg_2] ...
      {-e | -f option_arg_3}
```

(3) コマンドの実行可能ファイルに対するアクセス権限

コマンドの実行可能ファイルにアクセスしてコマンドを実行できるユーザはシステム管理者だけです。

8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細

ここでは、File Sharing サーバのコマンドの文法について説明します。なお、各コマンドは、アルファベット順に説明します。

EDMRefresher コマンド、EDMStop コマンド、および EDMUsrView コマンドは、File Sharing サーバの起動中に実行してください。これ以外のコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。

使用できるデータベースシステムは HiRDB です。したがって、コマンドの文法は HiRDB を使用する場合の記述形式になっています。

EDMAddMeta (メタ情報の追加)

形式

```
EDMAddMeta -g
            -f 定義情報ファイル名
            [-o データベース定義文格納ファイル名
            [-i インデクス情報ファイル名
            -r RDエリア定義情報ファイル名] ]
```

機能

引数に指定した定義情報ファイルの内容をメタ情報に反映します。このコマンドを実行すると、自動的に動作環境メタ情報ファイルも更新されます。

オプション

-g

ユニークな識別子を自動設定することを意味します。必ず指定してください。

-f 定義情報ファイル名

定義情報ファイル名を指定します。文書空間の文字コード種別に合わせて、次のどちらかの値を必ず指定してください。

- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsMeta_UTF-8.ini
文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合に指定します。
- {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsMeta_SJIS.ini
文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合に指定します。

定義情報ファイルの詳細については、「5.2.7 定義情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。

-o データベース定義文格納ファイル名

作成したデータベース定義文を格納するファイルのパス名を指定します。

-i インデクス情報ファイル名

-o オプションを指定した場合だけ指定できるオプションです。

インデクス情報ファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。

-r RD エリア定義情報ファイル名

-o オプションを指定した場合だけ指定できるオプションです。

RD エリア定義情報ファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。
- このコマンドを実行する前に、データベースを起動しておいてください。
- このコマンドを実行する前には、EDMInitMeta コマンドでメタ情報をデータベースに登録しておく必要があります。
- データベースの初期設定をする場合は、EDMCrtSql コマンドを実行する前に、このコマンドを実行してください。
- このコマンドで追加した定義を削除するには、EDMDelMeta コマンドを実行してください。または、コマンド実行前に取得したデータベースのバックアップをリストアしてください。したがって、コマンドを実行する前にはデータベースのバックアップを取得してください。

EDMCBuildDocSpace (文書空間の構築)

形式

```
EDMCBuildDocSpace [-m { print | exec }]
                  [-o 出力ディレクトリ名]
```

機能

文書空間定義コマンド (EDMCDefDocSpace) の実行によって作成された定義情報を使用して、文書空間を新規に構築します。

このコマンドの実行で出力される情報は、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env

このコマンドの実行で出力される情報は次のとおりです。

出力情報

- データベース定義文格納ファイル (EDMtable.txt)
データベース定義文を記述したファイルです。必要に応じて、システム管理者がファイルを編集してください。ファイルを編集する場合、このコマンドで、-m print オプションを指定して実行してください。
- クラス定義情報ファイル (文書空間識別子.ini)
出力されるファイル名は、文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名です。詳細については、「5.3.1 クラス定義情報ファイル」を参照してください。

オプション

-m { print | exec }

このコマンドを実行するモードを指定します。

なお、このオプションを省略した場合、「print」が仮定されます。

print

データベース定義文格納ファイルおよびクラス定義情報ファイルを出力します。

このオプションを指定してデータベース定義文格納ファイルを出力した場合は、HiRDB のデータベース定義ユーティリティを使用してデータベース定義を実行してください。

exec

データベース定義文格納ファイルおよびクラス定義情報ファイルを出力し、データベース定義を実行します。

-o 出力ディレクトリ名

データベース定義文格納ファイルおよびクラス定義情報ファイルを任意のディレクトリ下へ出力する場合は、ファイルを格納するディレクトリのパス名を相対パスまたは絶対パスで指定します。

このオプションの指定の有無に関係なく、「{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server ¥env」にデータベース定義文格納ファイル (EDMtable.txt) およびクラス定義情報ファイル (文書空間識別子.ini) が出力されます。

注意事項

- このコマンドを実行する前に、データベースを起動しておいてください。
- このコマンドを実行する前に、文書空間定義コマンド (EDMCDefDocSpace) を実行して、文書空間を構築するための定義情報を作成してください。文書空間定義コマンドを実行して定義する内容については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCDefDocSpace (文書空間の定義)」を参照してください。
- 指定する出力ディレクトリ名のパス長は、末尾のパスの区切り文字を含まないで 218 バイト以内で指定してください。
- コマンドの実行で出力されるファイル名と同一名のファイルがある場合には、出力ファイル名.bak の名称でバックアップファイルが作成されます。このバックアップファイルは、出力ファイルをカスタマイズしたあとコマンドを再度実行した場合に、カスタマイズした内容を確認したいときなどに使用します。ただし、バックアップファイルをそのまま使用して、HiRDB のデータベース定義ユーティリティを実行しないでください。コマンド実行時にバックアップファイルがある場合、バックアップファイルは上書きされます。
- このコマンドを実行するときには、DocumentSpace 構成定義ファイルに次のエントリを必ず指定してください。
 - Process エントリ
 - SerialId エントリ
 - DbType エントリ
 - PdHost エントリ
 - PdNamePort エントリ
 - PdUser エントリ
- 文書空間定義コマンド (EDMCDefDocSpace) の実行で出力される RD エリア定義情報ファイル中の RD エリア名は、見積もり情報定義ファイルで指定したクラスやインデックスの数に応じて、「文書空間情報ファイルで指定した RD エリア名+通番」の名称に変更されている場合があります。この RD エリア名を変更する場合には、「{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env」の RD エリア定義情報ファイルの内容をカスタマイズしてから、このコマンドを実行してください。

- このコマンドの実行で出力されるデータベース定義文格納ファイルをカスタマイズする場合は、`-m print` オプションを指定してコマンドを実行してください。その後、出力されたデータベース定義文格納ファイルの内容を変更してください。変更したデータベース定義は、HiRDB のデータベース定義ユーティリティを使用して実行します。
- 文書空間定義コマンド (`EDMCDefDocSpace`) の実行で出力されるインデクス情報ファイルは、編集しないでください。インデクスの定義を変更する場合には、文書空間定義コマンド (`EDMCDefDocSpace`) の入力情報となる見積もり情報定義ファイルを変更し、再度、文書空間定義コマンド (`EDMCDefDocSpace`) を実行します。
- セキュリティ定義ファイルは、ユーザが編集してください。セキュリティ定義ファイルの変更は、このコマンドおよび文書空間の構築コマンド (`EDMCBuildDocSpace`) の実行には影響しません。

EDMCDefDocSpace (文書空間の定義)

形式

```
EDMCDefDocSpace -f 見積もり情報定義ファイル名
                 -s 文書空間情報ファイル名
                 [-e { all | resource }]
```

機能

文書空間を新規に構築する場合に必要な定義情報を作成します。

このコマンドを実行すると、文書空間を構築するための定義情報やデータベースの容量を見積もるための基礎情報が出力されます。出力された情報を基に、文書空間の構築コマンド (`EDMCBuildDocSpace`) を実行すると、文書空間を構築できます。

このコマンドの実行で出力される情報は、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env

このコマンドの実行で出力される情報は次のとおりです。

出力情報

- 見積もり基礎情報ファイル (`EDMestimate.csv`)
データベースの見積もり基データとして使用するファイルです。詳細については、「5.2.15 見積もり基礎情報ファイル」を参照してください。
- 定義情報ファイル (`EDMdefine.txt`)
文書空間の構築コマンド (`EDMCBuildDocSpace`) の入力情報となるファイルです。詳細については、「5.2.7 定義情報ファイル」の「(1) システム導入支援機能を使用する場合」を参照してください。
- RD エリア定義情報ファイル (`EDMrdarea.txt`)
文書空間の構築コマンド (`EDMCBuildDocSpace`) の入力情報となるファイルです。詳細については、「5.2.8 RD エリア定義情報ファイル」の「(1) システム導入支援機能を使用する場合」を参照してください。
- インデクス情報ファイル (`EDMindex.txt`)
文書空間の構築コマンド (`EDMCBuildDocSpace`) の入力情報となるファイルです。詳細については、「5.2.9 インデクス情報ファイル」の「(1) システム導入支援機能を使用する場合」を参照してください。

オプション

-f 見積もり情報定義ファイル名

見積もり情報定義ファイルは、構築する文書空間に追加するクラスを定義するファイルです。見積もり情報定義ファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。このファイルのサンプルファイルは、文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合は「{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsEstimatedef_UTF-8.csv」に、文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合は「{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsEstimatedef_SJIS.csv」に、提供されています。サンプルファイル中の見積もりに必要な情報だけを編集して、使用してください。

詳細については、「5.2.13 見積もり情報定義ファイル」を参照してください。

-s 文書空間情報ファイル名

文書空間情報ファイルは、文書空間のアクセス制御情報や使用する RD エリア名を定義するファイルです。文書空間情報ファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。このファイルのサンプルファイルは、「{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsDocinfo.txt」に提供されています。サンプルファイル中で必要な情報だけを編集して、使用してください。

詳細については、「5.2.14 文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt)」を参照してください。

-e { all | resource }

文書空間定義時の実行モードを指定します。

なお、このオプションを省略した場合、「all」が仮定されます。

all

データベース容量見積もりの基礎情報および文書空間を構築するための定義情報を出力するときに指定します。

resource

データベース容量見積もりの基礎情報だけを出力するときに指定します。

注意事項

- コマンドの実行で出力されるファイル名と同一名のファイルがある場合には、出力ファイル名.bak の名称でバックアップファイルが作成されます。このバックアップファイルは、出力ファイルをカスタマイズしたあとコマンドを再度実行した場合に、カスタマイズした内容を確認したいときなどに使用します。ただし、バックアップファイルをそのまま使用して文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) を実行しないでください。このコマンド実行時にバックアップファイルがある場合は、バックアップファイルは上書きされます。
- このコマンドを実行するときには、DocumentSpace 構成定義ファイルに次のエントリを必ず指定してください。
 - SerialId エントリ
 - Process エントリ
 - DbType エントリ
 - PdHost エントリ
 - PdNamePort エントリ
 - PdUser エントリ

- このコマンドの実行で出力されるインデクス情報ファイルは、編集しないでください。インデクスの定義を変更する場合には、このコマンドの入力情報となる見積もり情報定義ファイルを変更し、再度、このコマンドを実行します。
- セキュリティ定義ファイルは、ユーザが編集してください。セキュリティ定義ファイルの変更は、このコマンドおよび文書空間の構築コマンド (EDMCBuildDocSpace) の実行には影響しません。
- -e オプションに resource を指定して見積もり基礎情報ファイルを出力した場合は、-e オプションに all を指定して文書空間を構築するための定義情報を事前に作成していても、再度、-e オプションに all を指定してこのコマンドを実行し、文書空間を構築するための定義情報を作成してください。データベース容量見積もりの基礎情報と文書空間を構築するための定義情報が不整合とならないようにするためです。

EDMChkTbl (データベースの表・列の確認)

形式

```
EDMChkTbl [-p]
           -f メタ情報ファイル名
```

機能

定義されているクラス・プロパティとデータベースに作成している表・列の定義が一致しているかどうかを確認します。一致していない場合、標準エラー出力にメッセージを出力します。

なお、このコマンドの実行時には、DocumentSpace 構成定義ファイルの DbType エントリに指定された値を参照します。DbType エントリに「HIRDB」が指定されているかどうかを確認してから実行してください。

オプション

-p

データベースに格納しているメタ情報を基にクラス・プロパティの定義と、データベースに作成している表・列の定義が一致しているかどうかを確認する場合に指定します。このオプションを指定する場合、-f オプションにはオブジェクト定義を記述しているメタ情報ファイル名だけを指定します。このオプションを省略する場合、-f オプションに指定するメタ情報ファイルとデータベースに作成している表・列の定義が一致しているかどうかを確認します。

-f メタ情報ファイル名

オブジェクト定義が記述されているメタ情報ファイルを指定します。メタ情報ファイル名は、-p オプションを省略する場合、コマンドを実行するディレクトリからの相対パス、絶対パス、またはカレントディレクトリで指定します。すべてのメタ情報ファイルは、-f オプションに指定するオブジェクト定義を記述するメタ情報ファイルと同じディレクトリに格納されている必要があります。

なお、-p オプションを指定する場合、オブジェクト定義を記述しているメタ情報ファイル名だけを指定します。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。
- このコマンドを実行する前に、データベースを起動しておいてください。

- このコマンドを実行する前に、メタ情報の登録とデータベースの表の作成を完了しておく必要があります。
- 次のコマンドの実行中は、このコマンドを実行しないでください。
 - EDMAddMeta コマンド
 - EDMCBuildDocSpace コマンド
 - EDMCDefDocSpace コマンド
 - EDMDelMeta コマンド
 - EDMInitMeta コマンド
 - EDMPrintMeta コマンド
 - EDMRegEnvId コマンド
- このコマンドの実行中に、メッセージ「Ignore: An error occurred in initialization of a trace object.」が標準エラー出力に出力される場合があります。このメッセージが出力された場合、コマンドの処理は続行されますが、トレースファイルは出力されません。このメッセージが出力された場合、メモリ不足が原因と考えられるため、ほかの実行中のアプリケーションを終了させるか、または実メモリを増設してから、このコマンドを再度実行してください。
- このコマンドの実行中に、メッセージ「Ignore: An error occurred in initialization of a message object.」が標準エラー出力に出力される場合があります。このメッセージが出力された場合、コマンドの処理は続行されますが、メッセージが正しく表示されないことがあります。このメッセージが出力された場合、メモリ不足が原因と考えられるため、ほかの実行中のアプリケーションを終了させるか、または実メモリを増設してから、このコマンドを再度実行してください。

EDMCrtSimMeta (クラス定義情報ファイルの作成)

形式

EDMCrtSimMeta

機能

メタ情報ファイルから、File Sharing クライアントで使用するクラス定義情報ファイルを作成します。クラス定義情報ファイルは、接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files

なお、クラス定義情報ファイルについては、「5.3.1 クラス定義情報ファイル」を参照してください。

オプション

ありません。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。

EDMCrtSql (File Sharing 用データベース定義文の作成)

形式

```
EDMCrtSql -o データベース定義文格納ファイル名
          -t HIRDB
          -c
          -i インデクス情報ファイル名
          -r RDエリア定義情報ファイル名
          -u NO
```

機能

データベースに登録されているメタ情報を基に、File Sharing 用のデータベースを初期設定するために必要なデータベース定義文を作成します。

オプション

-o データベース定義文格納ファイル名

作成したデータベース定義文を格納するファイルのパス名を指定します。

-t HIRDB

必ずこの値を指定してください。

-c

表名、列名に対して注釈を付ける SQL 文を出力することを意味します。必ず指定してください。

-i インデクス情報ファイル名

インデクス定義をするための情報を記述したファイルのパス名を指定します。必ず次に示すファイルを指定してください。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsIndex.ini

インデクス情報ファイルについては、「5.2.9 インデクス情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。

-r RD エリア定義情報ファイル名

RD エリア定義情報ファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。このファイルに記述されている RD エリア名を実行環境に応じて変更してください。サンプルファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsRdarea.ini

RD エリア定義情報ファイルについては、「5.2.8 RD エリア定義情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。

-u NO

コンテンツ格納用 RD エリアに対するデータベースの更新ログ取得方式がログレスモード(更新ログを取得しない)であることを意味します。必ずこの値を指定してください。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。
- このコマンドを実行する前に、データベースを起動しておいてください。
- このコマンドを実行する前には、EDMInitMeta コマンドおよびEDMAddMeta コマンドで、メタ情報をデータベースに登録しておく必要があります。
- このコマンドは、データベース自身の定義であるエリア定義は実行しません。必要なエリアの定義は、出力されるデータベース定義文に追加してください。

EDMDelMeta (メタ情報の削除)

形式

```
EDMDelMeta { -p プロパティ名
              -q クラス名
              -o データベース定義文格納ファイル名
              | -t }
```

機能

EDMInitMeta コマンドとEDMAddMeta コマンドで登録したメタ情報をデータベース (HiRDB) から削除します。このコマンドでメタ情報を削除すると、自動的に動作環境メタ情報ファイルも更新されます。

オプション

-p プロパティ名

プロパティ名を指定します。

-q クラス名

クラス名を指定します。

-o データベース定義文格納ファイル名

作成したデータベース定義文を格納するファイルのパス名を指定します。

-t

メタ情報の表をすべて削除することを意味します。必ず指定してください。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。
- このコマンドを実行する前に、データベースを起動しておいてください。
- このコマンドを実行したあと、EDMCrtSql コマンドで作成したデータベース定義文の CREATE TABLE に対応する表を DROP TABLE で削除する必要があります。

EDMGetRas (File Sharing サーバの障害情報の取得)

形式

```
EDMGetRas -d 出力先ディレクトリ名
           [-l 収集種別 ]
           [-s 開始時刻 ]
```

機能

File Sharing のシステムで障害が発生した場合に、障害調査に必要な情報を取得します。なお、このコマンドで取得できるのは、File Sharing サーバの情報です。

このコマンドを実行して取得できる情報（ファイル）は、次のとおりです。なお、環境変数「DOCBROKERDIR」は、File Sharing サーバの実行環境ディレクトリを表す環境変数です。

- 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ¥spool 下の全ファイル
- 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ¥etc 下の全ファイル
- 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ¥tmp 下の全ファイル
- 環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」で指定したディレクトリ下の全ファイル
- 詳細エラーログファイル（File Sharing サーバと File Sharing クライアントが同一マシンにある場合）
- OS 情報
- 環境情報
- イベントログ（Application.log, System.log）
- TPBroker のトレース（環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ¥.¥log 下の全ファイル）
- File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル（getrascustom.ini）の[Path]セクションで指定されたファイル
- File Sharing サーバの内部情報

それぞれの情報の詳細については、「9.3.1 File Sharing サーバで発生した障害情報の取得」を参照してください。

オプション

-d 出力先ディレクトリ名

障害情報の出力先ディレクトリ名をフルパスで指定します。このコマンドで収集した障害情報を、指定したディレクトリに出力します。

出力先ディレクトリの名称は任意です。また、このコマンドを実行するユーザに対して、出力先ディレクトリにフルコントロールの権限を設定してください。

出力先ディレクトリとして、収集対象となるディレクトリの下位のディレクトリ（例えば、環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ¥spool¥mytmp）を指定した場合、障害情報は正しく取得できません。

-l 収集種別

収集する障害情報の種別を 1～3 で指定します。指定が省略された場合には、収集種別 1 で動作します。

収集種別ごとに取得できる情報の種類について、次の表に示します。なお、それぞれの情報の詳細については、「9.3.1 File Sharing サーバで発生した障害情報の取得」を参照してください。

表 8-3 EDMGetRas コマンドで収集種別ごとに取得できる情報の種類

収集種別	取得できる情報
1	環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ%spool 下の全ファイル 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ%etc 下の全ファイル 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ%tmp 下の全ファイル 環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」で指定したディレクトリ下の全ファイル※1 詳細エラーログファイル※1 OS 情報 環境情報 イベントログ (Application.log, System.log) TPBroker のトレース (環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ%.*log 下の全ファイル) ※1 getrascustom.ini※2 の[Path]セクションで指定されたファイル File Sharing サーバの内部情報
2	環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ%spool 下の全ファイル 環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」で指定したディレクトリ下の全ファイル※1 詳細エラーログファイル※1 イベントログ (Application.log, System.log) TPBroker のトレース (環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ%.*log 下の全ファイル) ※1 getrascustom.ini※2 の[Path]セクションで指定されたファイル File Sharing サーバの内部情報
3	環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ%spool 下の全ファイル 環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」で指定したディレクトリ下の全ファイル※1 詳細エラーログファイル※1 イベントログ (Application.log, System.log) getrascustom.ini※2 の[Path]セクションで指定されたファイル File Sharing サーバの内部情報

注※1

環境変数の設定によっては取得できません。詳細については、「9.3.1 File Sharing サーバで発生した障害情報の取得」を参照してください。

注※2

詳細については、「5.2.12 File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)」を参照してください。

-s 開始時刻

トレースファイルを収集する場合に、指定した時刻からコマンドを実行した時刻までに更新されたファイルだけを収集するときに指定します。

このオプションが有効になるのは、取得する障害情報のうち、次のファイルです。

- 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ%spool 下の全ファイル
- 環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」で指定したディレクトリ下の全ファイル

- TPBroker のトレース（環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ¥.¥log 下の全ファイル）
- 詳細エラーログファイル

指定が省略された場合、更新時刻に関係なく、すべてのファイルが収集対象になります。

開始時刻は、次の書式で指定してください。

開始時刻の書式

"YYYY/MM/DD[△hh:mm]"

- 開始時刻は「"」（引用符）で囲んで指定してください。
- △には、半角の空白を指定します。
- YYYY には、西暦年号を指定します。0001～9999 の範囲の数字を指定してください。
- MM には、月を指定します。01～12 の範囲の数字を指定してください。
- DD には、日を指定します。01～31 の範囲の数字を指定してください。
- hh には、時を指定します。00～23 の範囲の数字を指定してください。
- mm には、分を指定します。00～59 の範囲の数字を指定してください。

開始時刻の指定例

指定例を次に示します。

例 1（省略なし）：

```
-s "2000/12/24 10:30"
```

2000 年 12 月 24 日 10:30AM からコマンドを実行した時刻までに更新されたファイルが対象になります。

例 2（[△hh:mm]を省略）：

```
-s "2000/12/24"
```

2000 年 12 月 24 日 00:00AM からコマンドを実行した時刻までに更新されたファイルが対象になります。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバが停止中または起動中のどちらの場合でも実行できます。
- 収集対象となるディレクトリ（環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ¥spool など）が存在しない、またはアクセス権（コマンド実行者に対する、読み出し、実行権限）がなかった場合には、その処理はスキップされ、以降の処理が続行されます。getrascustom.ini の [Path] セクションに指定した場合も同様です。

EDMInitMeta（メタ情報の初期設定）

形式

```
EDMInitMeta -d
             -f メタ情報ファイル名
             -r ユーザ表用RDエリア名
             -i ユーザインデクス用RDエリア名
             -v Both
             -A
             -u DisplayName
             -R
             -C { SJIS | UTF-8 }
```

機能

File Sharing 用データベース定義文の作成のメタ情報を表にして、DocumentSpace 構成定義ファイルで指定されているデータベース (HiRDB) に登録します。また、動作環境メタ情報ファイルを次に示すディレクトリに作成します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files

オプション

-d

メタ情報をデータベースに再登録することを意味します。これによって、既存のメタ情報がデータベースから削除されて、新規にメタ情報が登録されます。必ず指定してください。

-f *メタ情報ファイル名*

メタ情報ファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。必ず次に示すファイルを指定してください。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥edms.ini

-r *ユーザ表用 RD エリア名*

メタ情報の表の行を格納するユーザ用 RD エリア名を指定します。

-i *ユーザインデクス用 RD エリア名*

メタ情報の表に定義されるインデクスを格納するユーザ用 RD エリア名を指定します。

-v Both

必ずこの値を指定してください。

-A

アクセス制御機能を使用することを意味します。必ず指定してください。

-u *DisplayName*

データベース定義の名称定義の方法として、クラス名、プロパティ名などを使用することを意味します。必ずこの値を指定してください。

-R

必ず指定してください。

-C { SJIS ; UTF-8 }

文書空間の文字コード種別を指定します。

なお、このオプションを省略した場合、「SJIS」が仮定されます。

SJIS

文書空間の文字コード種別を Shift-JIS とします。

UTF-8

文書空間の文字コード種別を UTF-8 とします。

文書空間の文字コード種別を変更する場合は、事前にデータベースの文字コード種別を変更しておいてください。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。
- このコマンドを実行する前に、データベースを起動しておいてください。
- このコマンドを実行すると、メタ情報ファイル一つに対して一つの表を作成します。作成される表には、「EDMS_META_XXXX」という名称が付けられます。「XXXX」には、メタ情報ファイル名から拡張子を除いた文字列が設定されます。例えば、「edms.ini」に対する表は「EDMS_META_edms」という名称が付けられます。

EDMPrintMeta (メタ情報ファイルの出力)

形式

```
EDMPrintMeta  -F
               [-l 出力先ディレクトリ名]
```

機能

データベースに登録済みのメタ情報を基に、動作環境メタ情報ファイルを出力します。

オプション

-F

すべてのメタ情報ファイルを出力することを意味します。必ず指定してください。

-l 出力先ディレクトリ名

メタ情報ファイルの出力先を指定します。このオプションを省略した場合、次に示すディレクトリに出力します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。
- このコマンドを実行する前に、データベースを起動しておいてください。
- 出力するメタ情報ファイルのセクションは、アルファベット順に並びます。この順序は、最初のメタ情報ファイルと異なります。

EDMRefresher (サービスプロセスのリフレッシュ)

形式

```
EDMRefresher  [-t 猶予時間]
```

機能

すべてのサービスプロセスをリフレッシュします。リフレッシュとは、File Sharing サーバを停止することなく、File Sharing クライアントからの要求に対して文書空間へのサービスを供給しながら、サービスプロセスを順次再起動することです。

サービスプロセスは、EDMStart コマンドで起動した順に、一つずつリフレッシュされます。各サービスプロセスがリフレッシュ対象になったとき、次のどちらかの条件を満たしていると、リフレッシュされます。

- 接続中のユーザがない場合
この場合、猶予時間内であっても、サービスプロセスがリフレッシュされます。
- コマンド実行後、猶予時間が経過した場合
この場合、接続中のユーザは強制的に File Sharing サーバとの接続を切断されます。

オプション

-t 猶予時間

接続中のユーザがログアウトするための猶予時間を秒で設定します。0~7,200 の値を指定してください。指定を省略した場合は、600 を仮定します。0 を指定した場合、接続中のユーザがログアウトするのを待たないで、直ちにリフレッシュします。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの起動中に実行してください。
- このコマンドは、多重実行できません。
- 複数のサービスプロセスがある場合、コマンド実行中にログインしたユーザが、リフレッシュ後のサービスプロセスに接続することは保証されません。リフレッシュ前のサービスプロセスに接続した場合、リフレッシュ実行時に File Sharing サーバへの接続が強制的に切断されるおそれがあります。
- このコマンドの実行中にユーザが文書空間に接続した場合、エラーになることがあります。
- File Sharing サーバへの接続が強制的に切断された場合、エラーになることがあります。

EDMRegEnvId (File Sharing サーバ実行環境の情報の登録)

形式

```
EDMRegEnvId -r [-i 実行環境識別子]
             -u 実行環境識別子
             -d
             -p
             -l [-o出力先ファイル名 ]
```

機能

File Sharing サーバの実行環境についての情報（実行環境識別子、環境変数「DOCBROKERDIR」に指定している実行環境ディレクトリのパス、およびホスト名）をデータベース中の表に登録します。また、登録した実行環境の更新、削除、および登録されている実行環境のファイル出力をします。

なお、このコマンドで登録した実行環境識別子は、該当する実行環境下で作成されるすべてのオブジェクトの OIID に付加されます。

オプション

-r

File Sharing サーバの実行環境の情報を登録する場合に指定します。

このオプションを指定すると、データベース中の表に実行環境識別子のレコードが挿入 (INSERT) されます。また、実行環境の情報が、実行環境ファイルとして出力されます。

-i 実行環境識別子

登録する実行環境識別子を指定します。1~254 の範囲で、10 進数の値で指定してください。

このオプションを省略した場合は、1~254 の範囲で未使用の識別子のうち、最小値の識別子が自動的に採番されます。

-u 実行環境識別子

実行環境の情報を更新する場合に指定します。実行環境を別のマシンに移動したり、実行環境ディレクトリのパスを変更したりした場合は、-u オプションを指定してこのコマンドを実行してください。

このオプションを指定すると、引数に指定した実行環境識別子に対応するレコードのカラム (環境変数 [DOCBROKERDIR] に指定している実行環境ディレクトリのパス、およびホスト名) が更新されます。また、実行環境の情報が、実行環境ファイルとして出力されます。

-d

実行環境を削除する場合に指定します。ただし、このコマンドを実行した実行環境の OIID 通番レコードが 0 件の場合だけ削除できます。

-p

実行環境ファイルを、次に示すディレクトリに出力する場合に指定します。

{File Sharing サーバの実行環境ディレクトリ}¥etc

このオプションを指定すると、コマンドを実行した実行環境の情報が、実行環境ファイルとして出力されます。

このオプションは、実行環境ファイルが壊れた場合などに使用します。

-l

登録されている実行環境の一覧を表示する場合に指定します。

-o 出力先ファイル名

-l オプションで取得した実行環境の一覧をファイルに出力する場合に指定します。出力先のファイル名を、相対パスまたは絶対パスで指定します。指定されたファイルがすでに存在する場合、上書きされます。指定先のファイルにアクセス権限がない場合、エラーになります。

実行例

-l オプションおよび -o オプションを指定して実行した場合の、出力ファイルの例を次に示します。

```
ID=0  HOST-NAME=-----  ENVDIR=-----
ID=10 HOST-NAME=Host1    ENVDIR=c:¥program files¥hitachi¥collaboration¥filesharing¥server
ID=20 HOST-NAME=Host2    ENVDIR=d:¥program files¥hitachi¥collaboration¥filesharing¥server
```

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。
- このコマンドを実行する前に、データベースを起動しておいてください。
- このコマンドを実行する前に、EDMPrintMeta -F を実行しておいてください。
- 実行環境識別子としてすでに登録されている識別子を指定して、実行環境を登録しようとする、メッセージが出力されて、処理が停止されます。次のどちらかの方法で、実行環境識別子が重複しないように登録してください。
 - すでに登録されている実行環境識別子を確認し、未登録の実行環境識別子を指定して、このコマンドを実行する。
すでに登録されている実行環境識別子を確認するには、-l オプション（ファイル出力する場合は、-l オプションおよび-o オプション）を指定して、このコマンドを実行してください。
 - -i オプションを省略して、このコマンドを実行する。
1~254 の範囲で未使用の識別子のうち、最小値の識別子が自動的に採番されます。
- 一度登録された実行環境識別子は削除・変更できません。ただし、実行環境識別子が 0 以外の実行環境については、実行環境でオブジェクトを作成していない場合に（実行環境の OIID 通番レコードが 0 件の場合に）、-d オプションを指定してこのコマンドを実行することで、実行環境識別子を削除できます。また、実行環境識別子の削除後、-r オプションを指定してこのコマンドを実行することで、実行環境識別子を変更できます。

EDMStart (File Sharing サーバの起動)

形式

EDMStart

機能

File Sharing サーバを起動します。

オプション

ありません。

注意事項

- このコマンドは、File Sharing サーバの停止中に実行してください。

EDMStop (File Sharing サーバの終了)

形式

EDMStop [-l { FORCE | KILL }]

機能

File Sharing サーバを終了します。

オプション

`-l { FORCE | KILL }`

終了時のモードを指定します。省略した場合は、通常終了します。

FORCE

File Sharing サーバを強制的に終了します。通常の終了処理がエラーになり、File Sharing サーバが終了できない場合に、このオプションを指定してください。

KILL

File Sharing サーバを強制的に終了します。-l FORCE オプションを指定して File Sharing サーバを終了しようとした場合に、エラーになって File Sharing サーバが終了しないとき、このオプションを指定します。

注意事項

- -l KILL オプションを指定して実行すると、File Sharing サーバのプロセスがアクセスしている DLL の終了処理をしないまま、File Sharing サーバが終了します。したがって、DLL が管理しているグローバルデータの整合性が取れなくなる場合があります。システムの動作を保証するために、-l KILL オプションを指定して実行したあとには、必ずマシンを再起動してください。
- -l KILL オプションを指定して実行しても File Sharing サーバの全プロセスが終了しない場合は、再度-l KILL オプションを指定してこのコマンドを実行してください。
- EDMStop コマンドを実行した時に File Sharing クライアントからの要求に対して File Sharing サーバが処理を実行中の場合、EDMStop コマンドは File Sharing サーバの処理の終了を待ちます。一定時間内に File Sharing サーバの処理が終了しない場合、KMBR08005-E を出力して EDMStop コマンドが終了します。
- このコマンドは、File Sharing サーバの起動中に実行してください。

EDMUsrView (文書空間に接続しているユーザー一覧出力)

形式

```
EDMUsrView {-l directory name
             |-v [directory name]
               [-c connect pass time]
               [-t transaction pass time]
               [-h host name]
               [-p application name]
             }
```

機能

文書空間に接続しているユーザのユーザ情報を取得します。このコマンドを実行すると、取得したユーザ情報を保存したり、表示したりできます。

オプション

オプションには、**機能オプション**と**表示オプション**があります。次にそれぞれのオプションについて説明していきます。

機能オプション

機能オプションは、1 文字の機能文字で表されます。このコマンドでは、`-l` オプションおよび `-v` オプションを指定できます。この機能文字の指定によって、ユーザ情報の保存やユーザ情報の表示を選択できます。

`-l` *directory name*

接続中のユーザのユーザ情報をサービスプロセスごとにファイルに出力します。

引数に *directory name* を指定します。この引数は省略できません。引数である *directory name* には、ファイルを出力するディレクトリを絶対パスで、存在するディレクトリを指定してください。ディレクトリが存在しない場合、エラーになります。また、引数に指定するディレクトリにはシステム管理者に対して書き込み権が必要です。書き込み権がない場合はファイルを出力できません。なお、このコマンドの実行者には、引数に指定するディレクトリの読み取り権が必要です。

出力ファイルの形式を次に示します。

"サービスプロセス通番_サービスプロセス ID.log"

このファイルは、指定されたディレクトリの下に作成された、`usr_YYYYMMDDhhmmssxxx` ディレクトリ (`YYYYMMDDhhmmssxxx` はコマンド実行時間) に格納されます。

なお、出力ファイルの内容については、「ユーザ情報の出力形式」を参照してください。

`-v` [*directory name*]

接続中のユーザのユーザ情報の表示、またはこのコマンドで作成されたファイルの情報を、指定した表示オプションの内容に従って表示します。引数である *directory name* には、`-l` オプションを指定してこのコマンドを実行することで作成されたディレクトリ (`usr_YYYYMMDDhhmmssxxx` ディレクトリ) を絶対パスで指定します。ディレクトリが存在しない場合、エラーになります。引数を省略した場合、コマンド実行時に File Sharing サーバに接続しているユーザのユーザ情報を表示します。表示されるユーザ情報は、表示オプションの指定に従います。

表示されるユーザ情報の出力形式については、「ユーザ情報の出力形式」を参照してください。

表示オプション

機能オプションとして `-v` オプションを指定した場合、有効になります。表示オプションには、`-c connect pass time`、`-t transaction pass time`、`-h host name`、および `-p application name` があります。

`-c` *connect pass time*

ユーザ情報を取得した時間とユーザ情報のレコード内容 (コネクト開始時間) を比較して、`connect pass time` の条件を満たしているユーザ情報を表示します。`connect pass time` は、次に示す書式で指定できます。

`time1-time2`

二つの値である `time1` および `time2` によって時間の範囲を指定します。`time1` および `time2` の値は、「時:分:秒」の形式で指定してください。なお、省略して指定する場合の例を次に示します。

例

- `-c 24-48` : 24 時間以上、48 時間以内
- `-c 12-` : 12 時間以上

- -c 0:30-1 : 30 分以上, 1 時間以内
- -c 0:300- : 300 分以上
- -c 0-12 : 12 時間以内

-t *transaction pass time*

ユーザ情報を取得した時間とユーザ情報のレコード内容"トランザクション開始時間"を比較し、transaction pass time に該当しているユーザ情報を表示します。transaction pass time は、次に示す書式で指定できます。

time1-time2

二つの値である time1 および time2 によって時間の範囲を指定します。time1 および time2 の値は、「時:分:秒」の形式で指定してください。なお、省略して指定する場合の例を次に示します。

例

- -t 24-48 : 24 時間以上, 48 時間以内
- -t 12- : 12 時間以上
- -t 0:30-1 : 30 分以上, 1 時間以内
- -t 0:300- : 300 分以上
- -t 0-12 : 12 時間以内

-h *host name*

host name とユーザ情報のレコード内容 (ホスト名) が一致するユーザ情報を表示します。

-p *application name*

application name とユーザ情報のレコード内容 (アプリケーション名) が一致するユーザ情報を表示します。

ユーザ情報の出力形式

ユーザ情報は、1 ユーザに対して 1 レコードがファイルに出力されます。1 レコードは、[,] (コンマ) で区切られていて、左から順に次のように出力されます。

```
"サービスプロセス通番","サービスプロセス ID","ホスト名","アプリケーション名","AP プロセス ID","コネク  
ト開始時間","セッション ID (ユーザ名)","トランザクション開始時間","HiRDB クライアントアプリケーション  
プログラム名 (DB コネクション名) "
```

ユーザ名が特定できない契機では、括弧内には何も出力されません。接続しているユーザがない場合は、次のように出力されます。

```
"サービスプロセス通番","サービスプロセス ID"," (NO USER) "
```

ユーザ情報が取得できなかった場合は、次のように出力されます。

```
"サービスプロセス通番","サービスプロセス ID"," (INFORMATION NOT FOUND) "
```

実行例

このコマンドの実行例を次に示します。

機能オプションに-lを指定した場合の実行例

```
EDMUsrView -l C:%tmp
KMBR03352-I File Sharingに接続しているユーザの一覧を出力します。
出力先ディレクトリ名のプリフィックスはusr_20040503132732886となります。
KMBR03353-I File Sharingに接続しているユーザの一覧を出力しました。
```

機能オプションに-vを指定した場合の実行例

```
EDMUsrView -v C:%tmp%usr_20040503132732886
KMBR03352-I File Sharingに接続しているユーザの一覧を出力します。

0001,3302,Host1,App1,3304,2005/08/03 13:26:38.403,00000ce63833a9ba0005349a(User1),,
0002,3303,Hos t 2,App2,3305,2005/08/03 13:29:40.312,000070c1387024fe0007e057(User2),,

KMBR03353-I File Sharingに接続しているユーザの一覧を出力しました。
```

注意事項

機能オプションに-lを指定した場合

- このオプションを指定したコマンドは多重実行できません。
- File Sharing サーバからの応答待ち時間を環境変数「_HIEDMS_USRVIEW_TIMEOUT」に指定できます（デフォルト 60 秒）。
- File Sharing サーバからの応答待ち時間を超過した場合、このコマンドはタイムアウトによって異常終了しますが、取得したユーザ情報およびこのコマンドによって作成されたディレクトリは消去しません。
- SIG_INT による割り込みが発生した場合、取得できたユーザ情報およびコマンドによって作成されたディレクトリを消去します。

機能オプションに-vを指定した場合

- 引数 directory name を省略した場合の注意事項を示します。
 - コマンドは、多重実行できません。
 - File Sharing サーバが起動している必要があります。
 - File Sharing サーバからの応答待ち時間を環境変数「_HIEDMS_USRVIEW_TIMEOUT」に指定できます（デフォルト 60 秒）。
 - File Sharing サーバからの応答待ち時間を超過した場合、コマンドはタイムアウトによって異常終了し、取得できたユーザ情報だけが表示されます。
- 引数 directory name を指定した場合の注意事項を示します。
 - コマンドは、多重実行できます。
 - File Sharing サーバが停止していても、コマンドを実行できます。
 - 指定されたディレクトリ下に、取得ユーザ情報管理ファイル.usrview.info が存在しない場合、エラーになります。
 - connect pass time, および transaction pass time に指定できる時間の上限は、9999:9999:9999 です。これ以上の値を指定したり不正な文字列を指定したりした場合、「connect pass time is invalid parameter」, または「transaction pass time is invalid parameter」が表示されて、Usage エラーになります。また、「::0-」など、省略のしかたが不正な場合についても同様のエラーになります。

8.3 File Sharing クライアントのコマンドの概要

ここでは、File Sharing クライアントのコマンドのうち、トラブルシュートで使用するコマンドとファイル転送で使用するコマンドについて説明します。

なお、File Sharing クライアントで実行するコマンドのうち、File Sharing システムのメンテナンスで使用するオブジェクト操作ツールのコマンドについては、「8.5 オブジェクト操作ツールのコマンドの概要」および「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」を参照してください。

8.3.1 File Sharing クライアントのコマンド一覧

File Sharing クライアントのコマンドの一覧を次の表に示します。これらのコマンドを実行できるユーザは、システム管理者だけです。また、システム管理者はコマンドを管理者権限で実行してください。Windows Server 2008 x86, Windows Server 2008 x64 および Windows Server 2008 R2 では、ユーザアカウント制御(UAC)が有効な場合、コマンド実行時にユーザアカウント制御ダイアログが表示されません。この場合は [OK] ボタンをクリックして、管理者権限で実行してください。

表 8-4 File Sharing クライアントのコマンド一覧

種類	コマンド	機能
トラブルシュートコマンド	EDMGetRasCL	File Sharing クライアントの障害情報の取得
ファイル転送サービスコマンド	FtpSvStart	ファイル転送サービスの開始
	FtpSvStop	ファイル転送サービスの終了

8.3.2 File Sharing クライアントのコマンドの形式

File Sharing クライアントのコマンドの形式は、File Sharing サーバで使用するコマンドと同様です。「8.1.2 File Sharing サーバのコマンドの形式」を参照してください。ただし、ファイル転送サービスのコマンドの場合、終了ステータスが異なります。ファイル転送サービスの終了ステータスを、次の表に示します。

表 8-5 ファイル転送サービスの終了ステータス一覧

終了コード	意味
0	正常終了
2	コマンドライン不正
3	エラー発生

8.4 File Sharing クライアントのコマンドの詳細

ここでは、File Sharing クライアントのコマンドの文法について説明します。なお、各コマンドは、アルファベット順に説明します。

EDMGetRasCL (File Sharing クライアントの障害情報の取得)

形式

```
EDMGetRasCL -d 出力先ディレクトリ名
              [-l 収集種別 ]
              [-s 開始時刻 ]
```

機能

File Sharing のシステムで障害が発生した場合に、障害調査に必要な情報を取得します。なお、このコマンドで取得できるのは、File Sharing クライアントの情報です。

このコマンドを実行して取得できる情報（ファイル）は、次のとおりです。

- 環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ%spool 下の全ファイル
- 環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ%etc 下の全ファイル
- 環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ%tmp 下の全ファイル
- クライアントおよびファイル転送サービスのトレースファイル
- 詳細エラーログファイル
- OS 情報
- 環境情報
- イベントログ (Application.log, System.log)
- TPBroker のトレース (環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ%.*log 下の全ファイル)
- File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini) の [Path] セクションで指定されたファイル
- File Sharing クライアントの内部情報

それぞれの情報の詳細については、「9.3.2 File Sharing クライアントで発生した障害情報の取得」を参照してください。

オプション

-d 出力先ディレクトリ名

障害情報の出力先ディレクトリ名をフルパスで指定します。このコマンドで収集した障害情報を、指定したディレクトリに出力します。

出力先ディレクトリの名称は任意です。また、このコマンドを実行するユーザに対して、出力先ディレクトリにフルコントロールの権限を設定してください。

出力先ディレクトリとして、収集対象となるディレクトリの下位のディレクトリ（例えば、環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥spool¥mytmp）を指定した場合、障害情報は正しく取得できません。

-l 収集種別

収集する障害情報の種別を 1～3 で指定します。指定が省略された場合には、収集種別 1 で動作します。

収集種別ごとに取得できる情報の種類について、次の表に示します。なお、それぞれの情報の詳細については、「9.3.2 File Sharing クライアントで発生した障害情報の取得」を参照してください。

表 8-6 EDMGetRasCL コマンドで収集種別ごとに取得できる情報の種類

収集種別	取得できる情報
1	環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥spool 下の全ファイル※ ¹ 環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥etc 下の全ファイル※ ¹ 環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥tmp 下の全ファイル※ ¹ クライアントおよびファイル転送サービスのトレースファイル 詳細エラーログファイル※ ¹ OS 情報 環境情報 イベントログ (Application.log, System.log) TPBroker のトレース (環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ¥.¥log 下の全ファイル) ※ ¹ getrascustom.ini※ ² の[Path]セクションで指定されたファイル File Sharing クライアントの内部情報
2	環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥spool 下の全ファイル※ ¹ クライアントおよびファイル転送サービスのトレースファイル 詳細エラーログファイル※ ¹ イベントログ (Application.log, System.log) TPBroker のトレース (環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ¥.¥log 下の全ファイル) ※ ¹ getrascustom.ini※ ² の[Path]セクションで指定されたファイル File Sharing クライアントの内部情報
3	環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥spool 下の全ファイル※ ¹ クライアントおよびファイル転送サービスのトレースファイル 詳細エラーログファイル※ ¹ イベントログ (Application.log, System.log) getrascustom.ini※ ² の[Path]セクションで指定されたファイル File Sharing クライアントの内部情報

注※1

環境変数の設定によっては取得できません。詳細については、「9.3.2 File Sharing クライアントで発生した障害情報の取得」を参照してください。

注※2

詳細については、「5.3.8 File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)」を参照してください。

-s 開始時刻

トレースファイルを収集する場合に、指定した時刻からコマンドを実行した時刻までに更新されたファイルだけを収集するときに指定します。

このオプションが有効になるのは、取得する障害情報のうち、次のファイルです。

- 環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ%spool 下の全ファイル
- クライアントおよびファイル転送サービスのトレースファイル
- 詳細エラーログファイル
- TPBroker のトレース（環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ%..%log 下の全ファイル）

指定が省略された場合、更新時刻に関係なく、すべてのファイルが収集対象になります。

開始時刻は、次の書式で指定してください。

開始時刻の書式

"YYYY/MM/DD[△hh:mm]"

- 開始時刻は「"」（引用符）で囲んで指定してください。
- △には、半角の空白を指定します。
- YYYY には、西暦年号を指定します。0001～9999 の範囲の数字を指定してください。
- MM には、月を指定します。01～12 の範囲の数字を指定してください。
- DD には、日を指定します。01～31 の範囲の数字を指定してください。
- hh には、時を指定します。00～23 の範囲の数字を指定してください。
- mm には、分を指定します。00～59 の範囲の数字を指定してください。

開始時刻の指定例

指定例を次に示します。

例 1 (省略なし) :

-s "2000/12/24 10:30"

2000 年 12 月 24 日 10:30AM からコマンドを実行した時刻までに更新されたファイルが対象になります。

例 2 ([△hh:mm]を省略) :

-s "2000/12/24"

2000 年 12 月 24 日 00:00AM からコマンドを実行した時刻までに更新されたファイルが対象になります。

注意事項

- 収集対象となるディレクトリ（環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ%spool など）が存在しなかったり、アクセス権（コマンド実行者に対する、読み出し、実行権限）がなかったりした場合には、その処理はスキップされ、以降の処理が続行されます。getrascustom.ini の[Path]セクションに指定した場合も同様です。
- このコマンドは、Collaboration を起動するユーザが実行してください。

FtpSvStart (ファイル転送サービスの開始)

形式

FtpSvStart [-n *起動プロセス数*]

機能

静的モードでファイル転送サービスを開始します。

オプション

-n *起動プロセス数*

ファイル転送サービスプロセスの起動プロセス数を指定します。指定できる値は、1~20 です。ファイル転送サービスプロセスは、1 プロセス当たり複数の File Sharing クライアントに対してサービスを提供できます。ただし、ファイル転送サービスプロセスがダウンした場合、ダウンしたプロセスが割り当てられていたすべての File Sharing クライアントはファイル転送サービスが受けられなくなります。したがって、メモリの使用効率と障害が発生したときの影響を考慮してファイル転送サービスプロセスの数を決定してください。なお、ファイル転送サービス使用時のメモリ所要量の見積もりについては、「4.4.2(4) ファイル転送サービスのメモリ所要量の見積もり」を参照してください。

このオプションを省略した場合は、1 が仮定されます。

注意事項

- このコマンドを実行できるのは、Administrators 権限を持つユーザだけです。
- このコマンドは、静的モードで開始されたファイル転送サービスを使用する File Sharing クライアント（環境変数「_HIEDMS_FTPMODE」に STATIC を指定している File Sharing クライアント）を実行する前に実行してください。
- 同一のファイル転送サービス実行環境で、すでに静的モードでファイル転送サービスを開始している場合、このコマンドを再度実行することはできません。

FtpSvStop (ファイル転送サービスの停止)

形式

FtpSvStop [-l { FORCE | KILL }]

機能

静的モードで開始されたファイル転送サービスを停止します。

オプション

-l { FORCE | KILL }

終了時のモードを指定します。省略した場合は、通常終了します。

FORCE

ファイル転送サービスを強制的に停止します。通常の停止処理がエラーになり、ファイル転送サービスが停止できない場合に、このオプションを指定してください。

KILL

ファイル転送サービスを強制的に停止します。-l FORCE オプションを指定した場合にエラーになってファイル転送サービスが停止できないとき、このオプションを指定してください。

注意事項

- このコマンドを実行できるのは、Administrators 権限を持つユーザだけです。
- -l KILL オプションを指定して実行すると、ファイル転送サービスがアクセスしている DLL の終了処理をしないまま、ファイル転送サービスが終了します。したがって、DLL が管理しているグローバルデータの整合性が取れなくなる場合があります。システムの動作を保証するために、-l KILL オプションを指定して実行したあとには、必ずマシンを再起動してください。
- -l KILL オプションを指定して実行してもファイル転送サービスの全プロセスが終了しない場合は、再度-l KILL オプションを指定してこのコマンドを実行してください。
- このコマンドを複数同時に実行すると、タイムアウトが発生する場合があります。
- ファイル転送サービスを停止する前に、ファイル転送サービスを使用する File Sharing クライアントが動作中でないことを確認してください。

8.5 オブジェクト操作ツールのコマンドの概要

ここでは、オブジェクト操作ツールのコマンドについて説明します。オブジェクト操作ツールのコマンドは、File Sharing クライアントで実行します。

オブジェクト操作ツールのコマンドは File Sharing のメンテナンス用のコマンドで、次に示す処理をするときに実行します。

- オブジェクト操作ツールの実行環境のセットアップ
- ベースパス情報の設定
ベースパス情報の設定については、「6.4 デフォルトのベースパス情報の登録」を参照してください。
- 最大許容サイズ情報の設定
最大許容サイズ情報の設定については、「6.5 デフォルトの最大許容サイズ情報の登録」を参照してください。
- 個人ルートフォルダ、コミュニティルートフォルダ、またはグループルートフォルダの削除
これらの処理の手順については、「7.6 個人フォルダとコミュニティフォルダの運用」または「7.7 グループフォルダの運用」を参照してください。

8.5.1 オブジェクト操作ツールのコマンド一覧

オブジェクト操作ツールのコマンドの一覧を次の表に示します。これらのコマンドを実行できるユーザは、システム管理者だけです。また、Windows Server 2008 x86, Windows Server 2008 x64 および Windows Server 2008 R2 では、ユーザアカウント制御(UAC)が有効な場合、コマンド実行時にユーザアカウント制御ダイアログが表示されます。この場合は [OK] ボタンをクリックして、管理者権限で実行してください。

表 8-7 オブジェクト操作ツールのコマンド一覧

コマンド	機能
dbrcrtdata	独立データの作成
dbrdelacl	パブリック ACL の削除
dbrdelcntr	フォルダの削除
dbrdeldata	独立データの削除
dbrexquery	問い合わせの実行
dbrgetprop	プロパティの取得
dbrsetprop	プロパティの設定
dbrtoolsetup	実行環境のセットアップ

8.5.2 オブジェクト操作ツールのコマンドの形式

ここでは、オブジェクト操作ツールのコマンドの入力形式および実行結果について説明します。

(1) オブジェクト操作ツールで使用するコマンドの入力形式

コマンドの入力形式を次に示します。

コマンド名称 オプション コマンド引数

(a) コマンド名称

コマンド名称は、実行するコマンドのファイル名です。

(b) オプション

オプションの入力形式の規則を次に示します。なお、説明文で使用する「\$」はコマンドプロンプト、「cmd」はコマンド名を表します。

オプションの形式

オプションはマイナス記号で始まる文字列で、次に示すように、引数を取らないか、または 1 個の引数を取ります。

形式 1：-オプションフラグ

形式 2：-オプションフラグ<空白またはタブ>フラグ引数

(凡例)

オプションフラグ：1 文字の英数字で、英大文字・小文字は区別されます。

フラグ引数：オプションフラグに対する引数です。

オプションの指定規則

- フラグ引数を取らないオプションフラグは、一つのマイナス記号のあとにまとめて指定できます。したがって、次の二つは同じ指定となります。

```
$ cmd -abc
```

```
$ cmd -a -b -c
```

- フラグ引数を必要とするオプションフラグのフラグ引数は省略できません。

例えば、オプションフラグ-a がフラグ引数を取る場合、次のように入力すると-b はフラグ引数と見なされます。

```
$ cmd -a -b
```

- オプションフラグとフラグ引数の間には空白またはタブを指定しても指定しなくてもどちらでもかまいません。したがって、次の二つは同じ指定となります。

```
$ cmd -afile
```

```
$ cmd -a file
```

- オプションの引数に空白およびタブを含めて指定する場合は、前後を「"」（引用符）で囲んでください。次に示す例は、オプションの引数として「1 2」を指定しています。

```
$ cmd -a "1 2"
```

- 同じオプションフラグを 2 回以上指定できません。例えば、「\$ cmd -a 1 -a 2」とは入力できません。

- 二つのマイナス (--) はオプションの最後を示す区切り記号と見なされます。したがって、次に示す例では「-b」はコマンド引数と見なされます。

```
$ cmd -a -- -b
```

- マイナス記号だけのオプションは入力できません。例えば、「\$ cmd -」と入力すると「-」はコマンド引数と見なされます。

- オプションはコマンド引数より前に指定してください。次に示す例で、-a がオプションの引数を必要としない場合、「file」および「-b」をコマンド引数と見なします。

```
$ cmd - a file -b
```


(c) コマンド引数

コマンド引数は、コマンド操作の直接の対象となるものを指定します。指定するコマンド引数は、各コマンドによって異なります。

詳細は各コマンドの説明を参照してください。

(d) オプションおよびコマンド引数に指定する内容について

オブジェクト操作ツールのコマンドのオプションおよびコマンド引数には、識別子、ファイルなどの記述形式が決まっている内容を指定します。このような識別子、ファイルの種類を次の表に示します。

表 8-8 オプションおよびコマンド引数に指定する識別子とファイル

種類	説明	記述方法
OIID	すべてのオブジェクトにプロパティとして付けられている識別子です。文書空間識別子、文書空間特有のオブジェクトの識別子などから構成され、「dma://」で始まる URL の形式で定義されています。	dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/... 0000000001 ...は、途中の省略を示します。
OIID ファイル	複数のオブジェクトを一括して操作する場合に、操作対象となるオブジェクトの OIID を記述するファイルです。	実行する処理に応じて、OIID の一覧を記述します。
問い合わせファイル	問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) で実行する問い合わせ式を記述するファイルです。	実行する処理に応じて、オブジェクトを検索するための問い合わせ式を記述します。 次に示す個所を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> 7.6.1 個人ルートフォルダの削除 7.6.2 コミュニティルートフォルダの削除 7.7.8 グループルートフォルダの削除
プロパティ情報ファイル	次のようにプロパティを設定、参照または更新する場合に記述するファイルです。 <ul style="list-style-type: none"> オブジェクトを作成する時にプロパティの初期値を設定する場合 オブジェクトに設定されているプロパティを参照する場合 オブジェクトに設定されているプロパティを更新する場合 	実行する処理に応じて、オブジェクトに設定するプロパティ情報を記述します。 次に示す個所を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> 6.4(1) プロパティ情報ファイルの準備 6.5(1) プロパティ情報ファイルの準備 7.6.1 個人ルートフォルダの削除 7.6.2 コミュニティルートフォルダの削除 7.7.8 グループルートフォルダの削除

(2) オブジェクト操作ツールのコマンドの実行結果

オブジェクト操作ツールのコマンドの戻り値と実行結果について説明します。

(a) 戻り値

戻り値は、オブジェクト操作ツールのすべてのコマンドで共通です。コマンドの終了状態によって、次の表に示す値を返却します。

表 8-9 戻り値一覧

戻り値	意味
0	正常終了
1	警告つき正常終了
2	引数不正による異常終了
それ以外	そのほかの異常終了

(b) 実行結果

- 実行結果は 1 オブジェクトにつき 1 行で標準出力に出力されます。
- 各項目は「,」（コンマ）で区切って出力されます。
- メッセージは標準エラー出力に出力されます。
- 実行環境制御ファイルで、[Output]セクションの Format エントリに指定した値によって、出力情報の情報量が異なります。Format エントリに VR0200 を指定すると詳細な情報が出力され、VR0112 を指定すると簡略化された情報が出力されます。

8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細

ここでは、オブジェクト操作ツールのコマンドの文法について説明します。なお、各コマンドは、アルファベット順に説明します。

dbrcrtdata (独立データの作成)

形式

dbrcrtdata *プロパティ情報ファイル*

機能

プロパティ情報ファイルに記述された内容に従って、ベースパス情報または最大許容サイズ情報の独立データを作成します。プロパティ情報ファイルに複数のセクションを記述することで、複数の独立データを一括して作成できます。

独立データが作成されると、作成した独立データの OIID が標準出力に出力されます。

オプション

なし

コマンド引数

プロパティ情報ファイル

作成する独立データのクラス名および設定するプロパティを記述したプロパティ情報ファイルのファイルパスを指定します。

ベースパス情報を作成する場合のクラス名は、cfsClass_AssignableDrive です。最大許容サイズ情報を作成する場合のクラス名は、cfsClass_Quota です。

ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。

dbrdelacl (パブリック ACL の削除)

形式

dbrdelacl { *OIID* | *OIIDファイル* }

機能

パブリック ACL を削除します。OIID ファイルに複数の OIID を指定すると、複数のパブリック ACL を一括して削除できます。

オプション

ありません。

コマンド引数

OIID

削除するパブリック ACL の OIID を指定します。

OIID ファイル

削除するパブリック ACL の OIID を記述した OIID ファイルのファイルパスを指定します。OIID ファイルには、複数の OIID が指定できます。

OIID ファイルのファイル名はオブジェクトの OIID 形式以外であれば任意です。ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。ただし、「dma://」で始まるパスは指定できません。

dbrdelcntr (フォルダの削除)

形式

```
dbrdelcntr  -l DCR  -R
              -k Reference
              -b ベースパス
              -y 削除ディレクトリのルートパス
              { OIID | OIIDファイル }
```

機能

フォルダを削除します。フォルダと同時にフォルダに格納しているファイルも削除できます。

また、OIID ファイルに複数の OIID を指定すると、複数のフォルダを一括して削除できます。

オプション

-l DCR

操作対象となるフォルダに対して、直接型の下位オブジェクトを削除します。

-R

操作対象となるフォルダの下位フォルダに対して、直接型の下位オブジェクトを再帰的に削除します。

-k Reference

フォルダと同時に削除するフォルダに格納されているファイルを削除します。-b オプションおよび-y オプションの指定内容または実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini) の内容に従って、ファイル実体が削除されます。

一つのフォルダ下にリファレンス種別、ベースパスまたは削除ディレクトリのルートパスが異なるファイルが格納されている場合、このコマンドですべてのファイルを削除することはできません。

-b ベースパス

フォルダに格納されたファイルを削除する場合に、削除するファイルのファイル実体格納先のベースパスを指定します。例えば、ベースパスが「C:*tmp*userdir」の場合は「C:*tmp*userdir」を指定します。また、ベースパスは、UNC 形式でも指定できます。例えば、ベースパスをネットワーク上のマシン「SERVER01」下の共有ディレクトリ「userdir」に格納したい場合は「**SERVER01*userdir」と指定します。

なお、このオプションに指定するベースパスと、データベースに格納されているファイル実体格納先を示す情報（ベースパスからの相対パス）は、結合されて絶対パスとして使用されます。ベースパスの末尾またはファイル実体格納先パスの先頭にパスの区切り文字が存在しない場合は、File Sharing サーバによって区切り文字が挿入されます。このため、パスの区切り文字は指定しなくてもかまいません。

このオプションを省略した場合は、実行環境制御ファイル（EDMOotCtrl.ini）の[Reference]セクションのDefaultContentBasePath エントリに指定したベースパスが有効になります。

-y 削除ディレクトリのルートパス

フォルダに格納されたファイルを削除する場合に、ファイル実体と同時に削除するディレクトリのルートパスを指定します。-b オプションに指定したベースパスと同じパスを指定してください。

このオプションを省略した場合は、実行環境制御ファイル（EDMOotCtrl.ini）の[Reference]セクションのDefaultDeleteRootPath エントリに指定した削除ディレクトリのルートパスが有効になります。

コマンド引数

OIID

削除するフォルダの OIID を指定します。

OIID ファイル

削除するフォルダの OIID を記述した OIID ファイルのファイルパスを指定します。OIID ファイルには、複数の OIID が指定できます。

OIID ファイルのファイル名はオブジェクトの OIID 形式以外であれば任意です。ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。ただし、「dma://」で始まるパスは指定できません。

注意事項

- ファイル実体を格納したベースパスは、システム管理者が管理する必要があります。間違えて、異なるベースパスを指定した場合でも、ファイルの属性情報だけが削除されて正常終了します。ファイル実体はファイルシステムに残ります。このため、必要に応じて手動で削除してください。
- ファイル実体の操作でエラーが発生すると、データベース上のファイルの属性情報とファイルシステムのファイル実体の状態が不整合になることがあります。この場合、メッセージ KMBR30201-E が、要因コード「3,86」で出力されます。この場合は、再度コマンドを実行して、ファイルを削除してください。
- ファイル実体の格納先になるディレクトリは、File Sharing サーバマシンから参照でき、File Sharing サーバからアクセスできる設定にしておいてください。詳細は、「3.10 ファイルシステムを使用するための設定」を参照してください。
- 実行環境制御ファイル（EDMOotCtrl.ini）の[Reference]セクションのContentDeleteMode エントリには Auto を指定してください。実行環境制御ファイルについての詳細は、「5.3.6 実行環境制御ファイル（EDMOotCtrl.ini）」を参照してください。

dbrdeldata（独立データの削除）

形式

```
dbrdeldata { OIID | OIIDファイル }
```

機能

次の情報の独立データを削除します。

- 個人情報
- コミュニティ情報
- グループ情報
- ベースパス情報
- 最大許容サイズ情報

OIID ファイルに複数の OIID を指定すると、複数の独立データを一括して削除できます。

オプション

ありません。

コマンド引数

OIID

削除する独立データの OIID を指定します。

OIID ファイル

削除する独立データの OIID を記述した OIID ファイルのファイルパスを指定します。OIID ファイルには、複数の OIID が指定できます。

OIID ファイルのファイル名はオブジェクトの OIID 形式以外であれば任意です。ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。ただし、「dma://」で始まるパスは指定できません。

dbrexquery (問い合わせの実行)

形式

`dbrexquery` *問い合わせファイル*

機能

問い合わせファイルに記述された問い合わせ式を実行します。実行結果は標準出力に出力されます。

実行結果の出力形式を次に示します。

- 1 オブジェクトにつき 1 行で標準出力に出力されます。
- 指定したプロパティが「,」（コンマ）で区切って出力されます。

オプション

ありません。

コマンド引数

問い合わせファイル

実行する問い合わせ式を記述したファイルのファイルパスを指定します。問い合わせファイルのファイル名は任意です。ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。

dbrgetprop (プロパティの取得)

形式

```
dbrgetprop { OIID | OIIDファイル } プロパティ情報ファイル
```

機能

プロパティ情報ファイルに記述した内容に従って、オブジェクトのプロパティを取得します。OIID ファイルに複数の OIID を指定すると、複数のオブジェクトのプロパティを一括して取得できます。

オプション

ありません。

コマンド引数

OIID

プロパティを取得するオブジェクトの OIID を指定します。

OIID ファイル

プロパティを取得するオブジェクトの OIID を記述した OIID ファイルのファイルパスを指定します。OIID ファイルには、複数の OIID が指定できます。

OIID ファイルのファイル名はオブジェクトの OIID 形式以外であれば任意です。ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。ただし、「dma://」で始まるパスは指定できません。

プロパティ情報ファイル

取得するオブジェクトのクラス名および設定するプロパティを記述したプロパティ情報ファイルのファイルパスを指定します。ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。

dbrsetprop (プロパティの設定)

形式

```
dbrsetprop { OIID | OIIDファイル } プロパティ情報ファイル
```

機能

プロパティ情報ファイルに記述した内容に従ってオブジェクトのプロパティを設定します。OIID ファイルに複数の OIID を指定することで、複数のオブジェクトのプロパティを一括して設定できます。

オプション

ありません。

コマンド引数

OIID

プロパティを設定するオブジェクトの OIID を指定します。

OIID ファイル

プロパティを設定するオブジェクトの OIID を記述した OIID ファイルのファイルパスを指定します。OIID ファイルには、複数の OIID が指定できます。

OIID ファイルのファイル名はオブジェクトの OIID 形式以外であれば任意です。ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。ただし、「dma://」で始まるパスは指定できません。

プロパティ情報ファイル

設定するオブジェクトのクラス名および設定するプロパティを記述したプロパティ情報ファイルのファイルパスを指定します。ファイルパスは、絶対パスまたは相対パスのどちらでも指定できます。

dbrrtoolsetup (実行環境のセットアップ)

形式

```
dbrrtoolsetup [-x { CREATE | UPDATE } ] 実行環境ディレクトリ
```

機能

オブジェクト操作ツールの実行環境をセットアップします。

オプション

`-x { CREATE | UPDATE }`

セットアップの処理種別を指定します。このオプションを省略した場合は、UPDATE が仮定されます。

CREATE

「実行環境ディレクトリ¥etc」に、デフォルトの実行環境制御ファイルおよびクラス情報定義ファイルをコピーしてオブジェクト操作ツール実行環境を作成します。このオプションは最初にオブジェクト操作ツールを使用する場合に指定します。

UPDATE

オブジェクト操作ツールの実行環境を更新する場合に指定します。オブジェクト操作ツールの実行環境は、「実行環境ディレクトリ¥etc」です。次の場合は必ずこのオプションを指定してコマンドを実行してください。

- 実行環境制御ファイルまたはクラス定義情報ファイルを変更した場合
- File Sharing クライアントをバージョンアップした場合

コマンド引数

実行環境ディレクトリ

オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリのディレクトリパスを指定します。ディレクトリパスは絶対パスで指定してください。

注意事項

- オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリに指定したディレクトリが存在しない場合、エラーとなります。コマンド実行前にディレクトリが存在することを確認してください。
- -x CREATE オプションを指定してコマンドを実行すると、次の図に示すディレクトリおよびファイルが作成されます。

図 8-1 オブジェクト操作ツールの実行環境作成時のディレクトリ構成

%DBRTOOLS DIR% ※	実行環境ディレクトリ
├ adm	管理情報格納ディレクトリ
├ etc	ユーザ情報格納ディレクトリ
│ └ EDM0otCtrl.ini	実行環境制御ファイル
│ └ 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d.ini	クラス定義情報ファイル
├ spool	保守情報格納ディレクトリ
│ └ aclog	コマンド実行ログ格納ディレクトリ
└ tmp	テンポラリ情報ディレクトリ

注※ 「%DBRTOOLS DIR%」は、オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリを指定した環境変数です。

- すでに-x CREATE オプションを指定したコマンドの実行によってオブジェクト操作ツールの実行環境が作成されている状態で、再度-x CREATE オプションを指定して実行すると、コマンドは処理をスキップして正常終了します。
- -x UPDATE オプションを指定してコマンドを実行できるユーザは、オブジェクト操作ツールの実行環境に設定されているアクセス権に依存します。
- 実行環境制御ファイルまたはクラス定義情報ファイルを変更後、-x UPDATE オプションを指定してコマンドを実行しなかった場合、オブジェクト操作ツールの実行が遅くなったり、エラーとなったりすることがあります。
- このコマンドの実行に対するコマンド実行ログは出力されません。
- オブジェクト操作ツールの実行環境を使用しなくなった場合は、オブジェクト操作ツールの実行環境ディレクトリ下のディレクトリおよびファイルを削除してください。

8.7 File Sharing クライアント運用コマンドの概要

ここでは、File Sharing クライアント運用コマンドについて説明します。File Sharing クライアント運用コマンドは、File Sharing クライアントで実行します。

8.7.1 File Sharing クライアント運用コマンドの一覧

File Sharing クライアント運用コマンドの一覧を次の表に示します。

表 8-10 File Sharing クライアント運用コマンドの一覧

コマンド	機能
cfsaddgrpmngr	グループフォルダの運用者の追加
cfsaddgrpprm	グループフォルダのアクセス権の追加
cfschgcode	ファイルの文字コードセットの変換
cfschggrpfldr	グループルートフォルダの非表示化
cfschkusdspc	ベースパス情報の使用量の確認
cfsctgrpfldr	グループルートフォルダの作成
cfsdelgrpmngr	グループフォルダの運用者の削除
cfsdelgrpprm	グループフォルダのアクセス権の削除
cfsexpfile	ファイルのエクスポート
cfslstad	ベースパス情報の取得
cfslstfldr	ルートフォルダの情報の一覧表示
cfslstprop	アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得
cfslstqt	最大許容サイズ情報の取得
cfsmodgrpprm	グループフォルダのアクセス権の変更
cfsoid2name	アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換

8.7.2 File Sharing クライアント運用コマンドの形式

ここでは、File Sharing クライアント運用コマンドの入力形式、実行条件、および実行結果について説明します。

(1) File Sharing クライアント運用コマンドの入力形式

コマンドの入力形式を次に示します。

コマンド名称 オプション

(a) コマンド名称

コマンド名称は、実行するコマンドのファイル名です。

(b) オプション

オプションの入力形式の規則を次に示します。なお、説明文で使用する「\$」はコマンドプロンプト、「cmd」はコマンド名を表します。

オプションの形式

オプションはマイナス記号で始まる文字列で、次に示すように、引数を取らないか、または1個の引数を取ります。

形式1：-オプションフラグ

形式2：-オプションフラグ<空白またはタブ>フラグ引数

(凡例)

オプションフラグ：1文字以上の英数字で、英大文字・小文字は区別されます。

フラグ引数：オプションフラグに対する引数です。

オプションの指定規則

- フラグ引数を必要とするオプションフラグのフラグ引数は省略できません。

例えば、オプションフラグ-aがフラグ引数を取る場合、次のように入力すると-bはフラグ引数と見なされます。

```
$ cmd -a -b
```

- フラグ引数には、全角文字と次に示す半角文字を指定できます。

- 半角記号
- 半角英字
- 半角数字
- 半角カナ文字

ただし、次に示す特殊文字はフラグ引数に指定しないでください。特殊文字をフラグ引数に指定する場合、Windowsの仕様を確認してから指定してください。

特殊文字：

["], [&], [^], [(], [)], [!], [*], [<], [>]

また、フラグ引数に空白またはタブを含めて指定する場合は、フラグ引数を[""] (引用符) で囲んでください。

- 同じオプションフラグを2回以上指定できません。例えば、「\$ cmd -a 1 -a 2」とは入力できません。
- フラグ引数に[,] (コンマ) を含めて指定する場合は、[,] (コンマ) の前に[¥] をエスケープ文字として入力してください。

例

フラグ引数に「00,02」を指定する例を次に示します。

```
$ cmd -a "00¥,02"
```

(2) 実行条件

コマンドを実行する条件を次に示します。

- [ファイル共有] ポートレットが動作する環境であること。
- File Sharing サーバが起動していること。

- コマンドを実行するユーザのユーザ ID が環境設定用プロパティファイルの `hptl_clb_cfs_SecurityAdministratorID` プロパティで指定されていること。

(3) File Sharing クライアント運用コマンドの実行結果

File Sharing クライアント運用コマンドの戻り値と実行結果について説明します。

(a) 戻り値

戻り値は、すべての File Sharing クライアント運用コマンドで共通です。コマンドの終了状態によって、次の表に示す値を返却します。

表 8-11 戻り値一覧

戻り値	意味
0	正常終了
1	引数不正による異常終了、またはそのほかの異常終了

(b) 実行結果

- メッセージは標準エラー出力に出力されます。
- トレースおよびエラーログは、コマンドトレースファイルおよびコマンドエラーログファイルに出力されます。

8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細

ここでは、File Sharing クライアント運用コマンドの文法について説明します。なお、各コマンドは、アルファベット順に説明します。

cfsaddgrpmngr (グループフォルダの運用者の追加)

形式 1

```
cfsaddgrpmngr -id グループID
               {-moid 組織ID [,組織ID] ... |
               -muid ユーザID [,ユーザID] ... |
               -moid 組織ID [,組織ID] ... -muid ユーザID [,ユーザID] ...}
```

形式 2

```
cfsaddgrpmngr -id グループID
               -f 組織/ユーザ情報ファイル
```

機能

グループフォルダの運用者に組織 ID またはユーザ ID を追加します。

オプション

-id グループID

グループフォルダの運用者を追加するグループルートフォルダのグループ ID を指定します。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したグループ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したグループ ID の長さが 16 バイトを超えている場合
- 指定したグループ ID のグループルートフォルダがない場合
- 指定したグループルートフォルダがすでに非表示になっている場合

-moid 組織ID [,組織ID] ...

-id オプションで指定したグループルートフォルダに、グループフォルダの運用者として追加する組織の組織 ID を、一つ以上指定します。複数の組織 ID を指定する場合は、[,] (コンマ) で区切ります。ただし、[,] (コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

グループフォルダの運用者に設定済みの組織 ID を指定すると、警告メッセージが表示され、組織 ID は追加されません。

同じ組織 ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列 ("") の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合
- 運用者に指定された組織とユーザの合計が 64 を超えた場合

`-muid ユーザID [,ユーザID] ...`

`-id` オプションで指定したグループルートフォルダに、グループフォルダの運用者として追加するユーザのユーザ ID を、一つ以上指定します。複数のユーザ ID を指定する場合は、[,] (コンマ) で区切ります。ただし、[,] (コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

グループフォルダの運用者に設定済みのユーザ ID を指定すると、警告メッセージが表示され、ユーザ ID は追加されません。

同じユーザ ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- グループフォルダの運用者に指定された組織とユーザの合計が 64 を超えた場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

`-f 組織/ユーザ情報ファイル`

組織/ユーザ情報ファイルには、グループフォルダの運用者に追加する組織 ID またはユーザ ID を CSV 形式で記述します。組織/ユーザ情報ファイルを相対パスまたは絶対パスで指定してください。

グループフォルダの運用者を追加する場合の、組織/ユーザ情報ファイルの記述例を次に示します。

例

```
"MNGORG", "node1", "node2"
"MNGUSER", "10000000"
```

組織/ユーザ情報ファイルの詳細については、「5.3.9 組織/ユーザ情報ファイル」を参照してください。

注意事項

- `-moid` と `-muid` のうち、少なくともどちらか一方を指定してください。
- グループフォルダの運用者に組織 ID またはユーザ ID を追加しても、すぐには運用者権限でフォルダとファイルを操作できません。運用者権限で操作するには、[グループルートフォルダのアクセス権] 画面で、[このグループフォルダを運用者権限で操作する] チェックボックスをチェックしたあと [OK] ボタンをクリックして、[グループルートフォルダのアクセス権] 画面を閉じてください。

cfsaddgrpprm (グループフォルダのアクセス権の追加)

形式 1

```
cfsaddgrpprm -id グループID
               {-oid 組織ID [{:c | r}] [,組織ID [{:c | r}] ] ... |
               -uid ユーザID [{:c | r}] [,ユーザID [{:c | r}] ] ... |
               -oid 組織ID [{:c | r}] [,組織ID [{:c | r}] ] ... -uid ユーザID [{:c | r}] [,ユー
               ザID [{:c | r}] ] ... }
```

形式 2

```
cfsaddgrpprm -id グループID
               -f 組織/ユーザ情報ファイル
```

機能

グループルートフォルダ以下のアクセス権に組織 ID またはユーザ ID を追加します。

オプション

-id グループ ID

アクセス権に組織 ID またはユーザ ID を追加するグループルートフォルダのグループ ID を指定します。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したグループ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したグループ ID の長さが 16 バイトを超えている場合
- 指定したグループ ID のグループルートフォルダがない場合
- 指定したグループルートフォルダがすでに非表示になっている場合

-oid 組織 ID [:{c | r}] [組織 ID [:{c | r}]] …

グループルートフォルダ以下のアクセス権に追加する組織の組織 ID とアクセス権を、一つ以上指定します。組織 ID とアクセス権は「:」（コロン）で区切ります。複数の組織 ID とアクセス権を指定する場合は、「,」（コンマ）で区切ります。ただし、「:」（コロン）および「,」（コンマ）の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

アクセス権には、次のどちらかを指定します。

c：作成権+参照権

r：参照権

グループルートフォルダのアクセス権に設定済みの組織 ID を指定すると、警告メッセージが表示され、組織 ID は追加されません。

同じ組織 ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。ただし、同じ組織 ID に異なるアクセス権を指定した場合は、先に指定した方が有効になります。

なお、「:」（コロン）およびアクセス権の指定を省略した場合、「r」が仮定されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列 ("") の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合
- アクセス権に「c」および「r」以外を指定した場合
- アクセス権を付与する組織とユーザの合計が 64 を超えた場合

-uid ユーザ ID [:{c | r}] [ユーザ ID [:{c | r}]] …

グループルートフォルダのアクセス権に追加するユーザのユーザ ID とアクセス権を、一つ以上指定します。ユーザ ID とアクセス権は「:」（コロン）で区切ります。複数のユーザ ID とアクセス権を指定する場合は、「,」（コンマ）で区切ります。ただし、「:」（コロン）および「,」（コンマ）の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

アクセス権には、次のどちらかを指定します。

c：作成権+参照権

r：参照権

グループルートフォルダのアクセス権に設定済みのユーザ ID を指定すると、警告メッセージが表示され、ユーザ ID は追加されません。

同じユーザ ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。ただし、同じユーザ ID に異なるアクセス権を指定した場合は、先に指定した方が有効になります。

なお、「:」（コロン）およびアクセス権の指定を省略した場合、「r」が仮定されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- アクセス権に「c」および「r」以外を指定した場合
- アクセス権を付与する組織とユーザの合計が 64 を超えた場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

-f 組織/ユーザ情報ファイル

組織/ユーザ情報ファイルには、グループルートフォルダ以下のアクセス権に追加する組織 ID またはユーザ ID を CSV 形式で記述します。組織/ユーザ情報ファイルを相対パスまたは絶対パスで指定してください。

グループルートフォルダ以下にアクセス権を追加する場合の、組織/ユーザ情報ファイルの記述例を次に示します。

例

```
"ORG", "node1", "node2", "node11", "node21"
"USER", "10000000", "10000001"
```

組織/ユーザ情報ファイルの詳細については、「5.3.9 組織/ユーザ情報ファイル」を参照してください。

注意事項

- -oid と -uid のうち、少なくともどちらか一方を指定してください。
- オプションで指定した組織 ID またはユーザ ID は、グループルートフォルダおよびグループルートフォルダのアクセス権を引き継ぐフォルダのアクセス権に追加されます。グループルートフォルダのアクセス権を引き継がない設定のフォルダのアクセス権には追加されません。

cfschgcode (ファイルの文字コードセットの変換)

形式

```
cfschgcode -c utf-8
            -i 入力ファイル
            -o 出力ファイル
```


機能

ファイルの文字コードセットを変換します。

オプション

-c utf-8

エンコードする文字コードセットを指定します。

utf-8

入力ファイルを UTF-8 にエンコードします。

-i 入力ファイル

エンコードするファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。

-o オプションで指定したパスと同じパスを指定すると、コマンドはエラーになります。

-o 出力ファイル

エンコードされたデータを格納するファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。

-i オプションで指定したパスと同じパスを指定すると、コマンドはエラーになります。

出力ファイルのファイル名は任意です。

注意事項

- コマンドの実行を中断した場合、中断するまでにエンコードされたデータを格納した状態のファイルが残ります。

cfschggrpfldr (グループルートフォルダの非表示化)

形式

```
cfschggrpfldr -id グループID
```

機能

指定したグループルートフォルダの参照権限をなくし、グループルートフォルダとその下位のファイルおよびフォルダを、[ファイル共有] ポートレットから参照できないようにします (非表示化)。さらに、グループルートフォルダの状態を使用不可にして、配布 URL からもファイルを参照できないようにします。

オプション

-id グループ ID

非表示化するグループルートフォルダのグループ ID を指定します。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したグループ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したグループ ID の長さが 16 バイトを超えている場合
- 指定したグループ ID のグループルートフォルダがない場合

- 指定したグループルートフォルダがすでに非表示になっている場合

注意事項

- いったん非表示にしたグループルートフォルダは、元に戻せません。
- 非表示にしたあとで、グループルートフォルダを削除する場合は、「7.7.8 グループルートフォルダの削除」の手順に従ってください。

cfschkusdspc (ベースパス情報の使用量の確認)

形式

```
cfschkusdspc [{-name 名前 [,名前] …|-type {p|c|g}}]
```

機能

ベースパス情報の使用量が最大使用可能容量を超過していないかどうかを確認し、超過している場合はベースパス情報の状態を「ファイルの参照のみ許可」に変更します。

オプション

-name 名前 [,名前] …

使用量を確認するベースパス情報の名前を指定します。-name オプションと-type オプションの指定を両方とも省略した場合は、すべてのベースパス情報を確認します。

ベースパス情報の名前を複数指定する場合は、「,」(コンマ) で区切ります。ただし、「,」(コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

同じ名前を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したベースパス情報の名前が存在しない場合
ただし、名前を複数指定し、その中に存在しない名前があるときは、存在する名前のベースパス情報の使用量だけが確認されます。
- 名前の指定が 256 個以上の場合

-type {p|c|g}

使用量を確認するベースパス情報のフォルダの種別を指定します。-type オプションと-name オプションの指定を両方とも省略した場合は、すべてのベースパス情報を確認します。

p

個人フォルダのベースパス情報の使用量を確認します。

c

コミュニティフォルダのベースパス情報の使用量を確認します。

g

グループフォルダのベースパス情報の使用量を確認します。

「p」、「c」および「g」以外の種別を指定すると、コマンドはエラーになります。

cfscrtgrpflidr (グループルートフォルダの作成)

形式 1

```
cfscrtgrpflidr -name 名前
                [-nameen 名前(英語)]
                [-cmt コメント]
                {-roid 代表組織の組織ID | -ruid 代表ユーザのユーザID}
                [-moid 運用者の組織ID [, 運用者の組織ID] ...]
                [-muid 運用者のユーザID [, 運用者のユーザID] ...]
                [-oid 組織ID [{:c | r}] [, 組織ID [{:c | r}] ] ...]
                [-uid ユーザID [{:c | r}] [, ユーザID [{:c | r}] ] ...]
```

形式 2

```
cfscrtgrpflidr -name 名前
                [-nameen 名前(英語)]
                [-cmt コメント]
                {-roid 代表組織の組織ID | -ruid 代表ユーザのユーザID}
                -f 組織/ユーザ情報ファイル
```

機能

グループルートフォルダを作成します。

オプション

-name 名前

作成するグループルートフォルダのフォルダ名を指定します。入力した値の前後に半角の空白またはタブがある場合は、削除されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した名前が空文字列 ("") の場合
- 指定した名前の長さが 255 文字を超えている場合
- 半角の空白とタブだけの名前を指定した場合
- 指定した名前のグループルートフォルダがすでにある場合

-nameen 名前(英語)

作成するグループルートフォルダのフォルダ名 (英語) を指定します。指定を省略すると、-name オプションで指定した値が登録されます。入力した値の前後に半角の空白またはタブがある場合は、削除されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した名前が空文字列 ("") の場合
- 指定した名前の長さが 255 文字を超えている場合
- 半角の空白とタブだけの名前を指定した場合

-cmt コメント

作成するグループルートフォルダのコメントを指定します。指定を省略すると、空文字列 ("") が登録されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したコメントが空文字列 ("") の場合
- 指定したコメントの長さが 255 文字を超えている場合

-roid 代表組織の組織 ID

グループルートフォルダの代表組織の組織 ID を指定します。代表組織の組織 ID は、次の項目の検索条件として使用されます。

- グループルートフォルダ作成時に設定される最大許容サイズとベースパス

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列 ("") の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合

-ruid 代表ユーザのユーザ ID

グループルートフォルダの代表ユーザのユーザ ID を指定します。代表ユーザのユーザ ID は、次の項目の検索条件として使用されます。

- グループルートフォルダ作成時に設定される最大許容サイズとベースパス

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

-moid 運用者の組織 ID [運用者の組織 ID] …

作成するグループルートフォルダに、グループフォルダの運用者として設定する組織の組織 ID を、一つ以上指定します。複数の組織 ID を指定する場合は、[,] (コンマ) で区切ります。ただし、[,] (コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

同じ組織 ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列 ("") の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合
- 運用者に指定された組織とユーザの合計が 64 を超えた場合

-muid 運用者のユーザ ID [運用者のユーザ ID] …

作成するグループルートフォルダに、グループフォルダの運用者として設定するユーザのユーザ ID を、一つ以上指定します。複数のユーザ ID を指定する場合は、[,] (コンマ) で区切ります。ただし、[,] (コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

同じユーザ ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- 運用者に指定された組織とユーザの合計が 64 を超えた場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

`-oid 組織 ID [:{c | r}] [組織 ID [:{c | r}]] …`

作成するグループルートフォルダ以下を利用する組織の組織 ID とアクセス権を、一つ以上指定します。組織 ID とアクセス権は「:」(コロン) で区切ります。複数の組織 ID とアクセス権を指定する場合は、「,」(コンマ) で区切ります。ただし、「:」(コロン) および「,」(コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

アクセス権には、次のどちらかを指定します。

c : 作成権 + 参照権

r : 参照権

同じ組織 ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。ただし、同じ組織 ID に異なるアクセス権を指定した場合は、先に指定した方が有効になります。

なお、「:」(コロン) およびアクセス権の指定を省略した場合、「r」が仮定されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列 ("") の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合
- アクセス権に「c」および「r」以外を指定した場合
- アクセス権を付与する組織とユーザの合計が 64 を超えた場合

`-uid ユーザ ID [:{c | r}] [ユーザ ID [:{c | r}]] …`

作成するグループルートフォルダ以下を利用するユーザのユーザ ID とアクセス権を、一つ以上指定します。ユーザ ID とアクセス権は「:」(コロン) で区切ります。複数のユーザ ID とアクセス権を指定する場合は、「,」(コンマ) で区切ります。ただし、「:」(コロン) および「,」(コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

アクセス権には、次のどちらかを指定します。

c : 作成権 + 参照権

r : 参照権

同じユーザ ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。ただし、同じユーザ ID に異なるアクセス権を指定した場合は、先に指定した方が有効になります。

なお、「:」(コロン) およびアクセス権の指定を省略した場合、「r」が仮定されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- アクセス権に「c」および「r」以外を指定した場合
- アクセス権を付与する組織とユーザの合計が 64 を超えた場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

-f 組織/ユーザ情報ファイル

次の情報を記述したファイルを CSV 形式で記述します。

- グループフォルダの運用者に設定する組織 ID
- グループフォルダの運用者に設定するユーザ ID
- グループルートフォルダ以下を利用する組織 ID と設定するアクセス権
- グループルートフォルダ以下を利用するユーザ ID と設定するアクセス権

組織/ユーザ情報ファイルを相対パスまたは絶対パスで指定してください。

グループルートフォルダを作成する場合の、組織/ユーザ情報ファイルの記述例を次に示します。

例

```
"MNGORG", "node1", "node2"
"MNGUSER", "10000000"
"ORG", "node1:r", "node2:r", "node11:r", "node21:r"
"USER", "10000001:c", "10000002:c"
```

組織/ユーザ情報ファイルの詳細については、「5.3.9 組織/ユーザ情報ファイル」を参照してください。

注意事項

- グループフォルダの運用者に組織 ID またはユーザ ID を追加しても、すぐには運用者権限でフォルダとファイルを操作できません。運用者権限で操作するには、[グループルートフォルダのアクセス権] 画面で、[このグループフォルダを運用者権限で操作する] チェックボックスをチェックしたあと [OK] ボタンをクリックして、[グループルートフォルダのアクセス権] 画面を閉じてください。
- 誤って作成したルートフォルダは、ほかのコマンドを使って情報を修正するか、または「7.7.8 グループルートフォルダの削除」の手順に従って削除してください。

cfsdelgrpmngr (グループフォルダの運用者の削除)

形式 1

```
cfsdelgrpmngr -id グループID
                {-moid 組織ID [, 組織ID] ... |
                -muid ユーザID [, ユーザID] ... |
                -moid 組織ID [, 組織ID] ... -muid ユーザID [, ユーザID] ...}
```

形式 2

```
cfsdelgrpmngr -id グループID
                -f 組織/ユーザ情報ファイル
```

機能

グループフォルダの運用者に設定されている組織 ID またはユーザ ID を削除します。

オプション

-id グループ ID

グループフォルダの運用者を削除するグループルートフォルダのグループ ID を指定します。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したグループ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したグループ ID の長さが 16 バイトを超えている場合
- 指定したグループ ID のグループルートフォルダがない場合
- 指定したグループルートフォルダが非表示になっている場合

-moid 組織 ID [組織 ID] …

-id オプションで指定したグループルートフォルダに設定されているグループフォルダの運用者から削除する組織の組織 ID を、一つ以上指定します。複数の組織 ID を指定する場合は、[,] (コンマ) で区切ります。ただし、[,] (コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

グループフォルダの運用者に設定されていない組織 ID を指定すると、警告メッセージが表示され、組織 ID は削除されません。

同じ組織 ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列 ("") の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合

-muid ユーザ ID [ユーザ ID] …

-id オプションで指定したグループルートフォルダに設定されているグループフォルダの運用者から削除するユーザのユーザ ID を、一つ以上指定します。複数のユーザ ID を指定する場合は、[,] (コンマ) で区切ります。ただし、[,] (コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

グループフォルダの運用者に設定されていないユーザ ID を指定すると、警告メッセージが表示され、ユーザ ID は削除されません。

同じユーザ ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

-f 組織/ユーザ情報ファイル

組織/ユーザ情報ファイルには、グループフォルダの運用者から削除する組織 ID またはユーザ ID を CSV 形式で記述します。組織/ユーザ情報ファイルを相対パスまたは絶対パスで指定してください。

グループフォルダの運用者を削除する場合の、組織/ユーザ情報ファイルの記述例を次に示します。

例

```
"MNGORG", "node1", "node2"
"MNGUSER", "10000000"
```

組織/ユーザ情報ファイルの詳細については、「5.3.9 組織/ユーザ情報ファイル」を参照してください。

注意事項

- -moid と -muid のうち、少なくともどちらか一方を指定してください。

cfsdelgrpprm (グループフォルダのアクセス権の削除)

形式 1

```
cfsdelgrpprm -id グループID
               {-oid 組織ID [,組織ID] ... | -uid ユーザID [,ユーザID] ...}
```

形式 2

```
cfsdelgrpprm -id グループID
               -f 組織/ユーザ情報ファイル
```

機能

グループルートフォルダ以下のアクセス権に設定されている組織 ID またはユーザ ID を削除します。

オプション**-id グループID**

アクセス権から組織 ID またはユーザ ID を削除するグループルートフォルダのグループ ID を指定します。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したグループ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したグループ ID の長さが 16 バイトを超えている場合
- 指定したグループ ID のグループルートフォルダがない場合
- 指定したグループルートフォルダが非表示になっている場合

-oid 組織 ID [,組織 ID] ...

-id オプションで指定したグループルートフォルダ以下のアクセス権から削除する組織の組織 ID を、一つ以上指定します。複数の組織 ID とアクセス権を指定する場合は、「,」（コンマ）で区切ります。ただし、「,」（コンマ）の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

グループルートフォルダのアクセス権に設定されていない組織 ID を指定すると、警告メッセージが表示され、組織 ID は削除されません。

同じ組織 ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列 ("") の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合

-uid ユーザ ID [,ユーザ ID] ...

-id オプションで指定したグループルートフォルダ以下のアクセス権から削除するユーザのユーザ ID を、一つ以上指定します。複数のユーザ ID を指定する場合は、[,] (コンマ) で区切ります。ただし、[,] (コンマ) の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

グループルートフォルダのアクセス権に設定されていないユーザ ID を指定すると、警告メッセージが表示され、ユーザ ID は削除されません。

同じユーザ ID を複数指定してもエラーにはなりません。一つだけ指定したものとして処理されます。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

-f 組織/ユーザ情報ファイル

組織/ユーザ情報ファイルには、グループルートフォルダ以下のアクセス権から削除する組織 ID またはユーザ ID を CSV 形式で記述します。組織/ユーザ情報ファイルを相対パスまたは絶対パスで指定してください。

グループルートフォルダ以下のアクセス権から組織 ID またはユーザ ID を削除する場合の、組織/ユーザ情報ファイルの記述例を次に示します。

例

```
"ORG", "node1", "node2", "node11", "node21"
"USER", "10000000", "10000001"
```

組織/ユーザ情報ファイルの詳細については、「5.3.9 組織/ユーザ情報ファイル」を参照してください。

注意事項

- -oid と -uid のうち、どちらか一方だけを指定してください。
- -oid オプションで指定した組織とその下位組織およびユーザが、グループルートフォルダとその下位のフォルダのアクセス権から削除されます。
- -uid オプションで指定したユーザが、グループルートフォルダとその下位のフォルダのアクセス権から削除されます。
- アクセス権を削除すると、所有者がアクセスできなくなるファイルまたはフォルダがある場合は、エラーになります。

cfsexpfile (ファイルのエクスポート)

形式 1

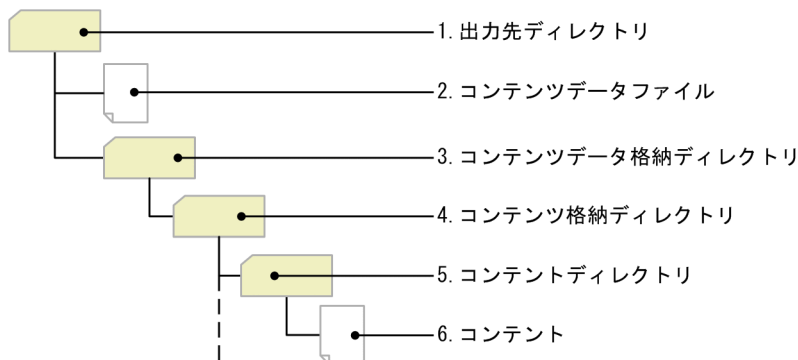
```
cfsexpfile [-d 出力先ディレクトリのパス]
            [-type { p | c | g }
              [-i ルートフォルダ情報格納ファイル
                [-idx [開始行] [,終了行] ] ] ]
            [-date [開始アクセス日時] [,終了アクセス日時] ]
            [-c { win-31j | utf-8 } ]
```

形式 2

```
cfsexpfile [-d 出力先ディレクトリのパス]
            -l perm [-k folder]
            [-type { p | c | g }
              [-i ルートフォルダ情報格納ファイル
                [-idx [開始行] [,終了行] ] ] ]
            [-c { win-31j | utf-8 } ]
```

機能

File Sharing に登録されているファイルを次に示す構成で出力します。ただし、ごみ箱のファイルは削除済みの扱いになるため出力しません。



各ディレクトリまたはファイルの意味は次のとおりです。

項番	ディレクトリまたはファイル	説明
1	出力先ディレクトリ	コンテンツデータファイルとコンテンツデータ格納ディレクトリを格納するためのディレクトリです。 -d オプションでパスを指定します。
2	コンテンツデータファイル	出力したファイルの情報を記述したファイルです。
3	コンテンツデータ格納ディレクトリ	コンテンツ格納ディレクトリを格納するためのディレクトリです。 ディレクトリ名は「コンテンツデータファイル名から拡張子を除いた名称」となります。
4	コンテンツ格納ディレクトリ	コンテンツディレクトリを格納するためのディレクトリです。環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のキー「hptl_clb_cfs_ContentsUnitCount」への指定値*単位で格納されます。 ディレクトリ名は 1~2,147,483,647 の数字です。
5	コンテンツディレクトリ	ファイルの実体を格納するためのディレクトリです。

項番	ディレクトリまたはファイル	説明
5	コンテンツディレクトリ	ディレクトリ名はファイルの OIID の最後から 16 バイト分の文字列です。
6	コンテンツ	出力したファイルの実体です。ファイル名は実際のファイル名です。

注※

「hptl_clb_cfs_ContentsUnitCount」に「hptl_clb_cfs_ContentsMaxCount」より大きな値を指定した場合は、「hptl_clb_cfs_ContentsMaxCount」と同じ値が設定されます。

オプション

-d 出力先ディレクトリのパス

ファイルの出力先となるディレクトリを相対パスまたは絶対パスで指定します。指定するディレクトリのパスに半角スペース、またはタブが含まれる場合、パスを半角ダブルクォーテーション「"」で囲んでください。このオプションを省略した場合は、コマンドを実行したカレントディレクトリに出力されます。

-l perm

出力するファイルの種別を指定します。このオプションを省略した場合、コンテンツデータファイルおよびコンテンツが出力されます。

perm

アクセス権一覧ファイルが出力されます。

「perm」以外を指定した場合、コマンドはエラーになります。

-k folder

アクセス権一覧ファイルを出力するオブジェクトの単位を指定します。このオプションを省略した場合、「folder」が仮定されます。

folder

アクセス権一覧ファイルがフォルダ単位で出力されます。

「folder」以外を指定した場合、コマンドはエラーになります。

なお、個人フォルダのアクセス権一覧ファイルは出力できません。-type オプションに「p」を指定した場合、このオプションを指定してもアクセス権一覧ファイルは出力されません。また、-type オプションを省略した場合、このオプションを指定するとコミュニティフォルダおよびグループフォルダのアクセス権一覧ファイルが出力されます。

-type {p|c|g}

ファイルを出力するフォルダの種別を指定します。このオプションで指定した種別のフォルダ下のファイルが出力されます。

-i オプションを指定している場合は、-i オプションで指定したルートフォルダ情報格納ファイル内にあるフォルダの種別を指定してください。このオプションを省略した場合、すべての種別のフォルダ下のファイルが出力されます。

p

個人フォルダのファイルが出力されます。

c

コミュニティフォルダのファイルが出力されます。

g

グループフォルダのファイルが出力されます。

「p」, 「c」 および 「g」 以外を指定した場合、コマンドはエラーとなります。

-i ルートフォルダ情報格納ファイル

ルートフォルダの情報の一覧表示コマンド (cfslstfldr) で出力されるファイルのファイルパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。指定したファイル内にあるルートフォルダ下のファイルが出力されます。指定したルートフォルダ情報格納ファイルが存在しない場合、このオプションの指定は無視されます。

このオプションを省略した場合、すべてのルートフォルダのファイルが出力されます。

-idx **〔開始行〕** **〔終了行〕**

開始行

-i オプションで指定したルートフォルダ情報格納ファイルの読み込みの開始行を、1~2,147,483,647 の範囲で指定します。指定したファイルの行より大きい値を指定した場合、何も出力されません。

終了行

-i オプションで指定したルートフォルダ情報格納ファイルの読み込みの終了行を 1~2,147,483,647 の範囲で指定します。指定したファイルの行より大きい値を指定した場合、すべての行が出力されます。

出力されるファイルの対象行は、開始行と終了行の組み合わせによって、次の表のようになります。

開始行	終了行	
	指定なし	指定あり
指定なし	—	「ルートフォルダ情報格納ファイルの行 ≤ 終了行で指定した行」に該当するルートフォルダ情報格納ファイルのルートフォルダ下のファイル
指定あり	「開始行で指定した行 ≤ ルートフォルダ情報格納ファイルの行」に該当するルートフォルダ情報格納ファイルのルートフォルダ下のファイル	「開始行で指定した行 ≤ ルートフォルダ情報格納ファイルの行 ≤ 終了行で指定した行」に該当するルートフォルダ情報格納ファイルのルートフォルダ下のファイル

(凡例) — : オプションとして指定できない。

次のどれかの場合はエラーとなります。

- 開始行または終了行に指定する値が 1~2,147,483,647 の範囲外の値を指定した場合
- 開始行または終了行に指定する値が 1~2,147,483,647 までの整数値でない値を指定した場合
- 開始行または終了行の両方を省略した場合
- 開始行と終了行の両方を指定し、終了行で指定する値が開始行で指定する値より小さいとき

-date **〔開始アクセス日時〕** **〔終了アクセス日時〕**

ファイルのアクセス日時 (コンテンツを更新した日時) を 「yyyy/MM/ddTHH:mm:ss」 形式で指定します。コマンド実行日時以前の日付を指定してください。指定できる日付の範囲は 1970/1/1T00:00:00~2038/01/19T03:14:07 です。

オプションを省略した場合、終了アクセス日時をコマンド実行時の日時とする。

開始アクセス日時

指定した開始アクセス日時以降のファイルが出力されます。

終了アクセス日時

指定した終了アクセス日時以前のファイルが出力されます。

日付の指定方法は次のとおりです。

項目	意味	指定値の範囲	備考
<i>yyyy</i>	(年) 西暦	1970~2038	—
<i>MM</i>	月	01~12	01~09を指定する場合、十の位の「0」を省略できます。
<i>dd</i>	日	01~31	
T	「yyyy/MM/dd」と時刻「HH:mm:ss」の区切り文字	—	—
<i>HH</i>	時	00~23	01~09を指定する場合、十の位の「0」は省略できません。
<i>mm</i>	分	00~59	
<i>ss</i>	秒	00~59	

(凡例) — : 該当なし

「*THH:mm:ss*」は省略できます。開始アクセス日時を省略した場合は「T00:00:00」が仮定されます。終了アクセス日時を省略した場合は「T23:59:59」が仮定されます。

出力されるファイルの対象範囲は、開始アクセス日時と終了アクセス日時の組み合わせによって、次の表のようになります。

開始アクセス日時	終了アクセス日時	
	指定なし	指定あり
指定なし	—	「ファイルのアクセス日時 ≤ 終了アクセス日時で指定した日時」を満たすファイル
指定あり	「開始アクセス日時で指定した日時 ≤ ファイルのアクセス日時 ≤ コマンド実行日時」を満たすファイル	「開始アクセス日時で指定した日時 ≤ ファイルのアクセス日時 ≤ 終了アクセス日時で指定した日時」を満たすファイル

(凡例) — : オプションとして指定できない。

次のどれかの場合はエラーとなります。

- 開始アクセス日時または終了アクセス日時に指定した値が不正な場合
- 開始アクセス日時または終了アクセス日時に指定した値がコマンドの実行日時よりあとの日時になっている場合
- 開始アクセス日時または終了アクセス日時の両方を省略した場合
- 開始アクセス日時と終了アクセス日時の両方を指定し、終了アクセス日時で指定する値が開始アクセス日時で指定する値より前になっているとき

```
-c { win-31j | utf-8 }
```

ファイル書き込み時の文字コードセットを指定します。このオプションを省略した場合、「win-31j」が仮定されます。

win-31j

文字コードセットは Windows-31J となります。

utf-8

文字コードセットは UTF-8 となります。

「win-31j」および「utf-8」以外を指定すると、コマンドはエラーになります。

出力ファイルの形式

次に示すファイルを出力すると、ファイルの 1 行目にヘッダが出力されます。各ファイルの内容については、「付録 F ファイルのエクスポートコマンド (cfsexpfile) で使用するファイル」を参照してください。

- コンテンツデータファイル
- コンテント
- アクセス権一覧ファイル

注意事項

- このコマンドは処理の成功、失敗に関係なく、環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のキー「hptl_clb_cfs_ContentsMessageCount」に設定された数のファイルまたはアクセス権を処理するたび、メッセージ KDCF20091-I を標準出力に出力します。メッセージ出力後もコマンドの処理は続行されます。
- コマンドの実行を中断した場合、中断するまでに出力したファイルが残ります。
- コマンドを実行する前に、cfsClass_Parameter のキー def_url に URL を登録する必要があります。コマンドの実行に必要な URL を登録する方法の詳細は、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

cfslstad (ベースパス情報の取得)

形式

```
cfslstad [-type {p|c|g}]
         [-c {win-31j | utf-8}]
         [-e o]
         -o ベースパス情報格納ファイル
```

機能

ベースパス情報を取得します。出力される情報を次の表に示します。

表 8-12 ベースパス情報の取得コマンド (cfslstad) で出力される情報

出力情報	説明
OIID	ベースパス情報の OIID です。-e オプションに「o」を指定した場合に出力されます。
種別	ベースパス情報のフォルダの種別です。次のどれかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 個人フォルダ

出力情報	説明
種別	<ul style="list-style-type: none"> • グループフォルダ • コミュニティフォルダ
名前	ベースパス情報の名前です。
条件種別	ベースパス情報に設定されている条件種別です。
条件値	ベースパス情報に設定されている条件値です。
パス	ベースパス情報に設定されているパスです。
最大予約可能容量	ベースパス情報に設定されている最大予約可能容量です。単位は KB です。1KB で割り切れない場合、小数点以下を切り上げます。 最大許容サイズを設定していない場合は、「-1」が出力されます。
予約量	最大予約可能容量に対する予約量です。単位は KB です。1KB で割り切れない場合、小数点以下を切り上げます。 最大許容サイズを設定していない場合は、「-1」が出力されます。
最大使用可能容量	ベースパス情報に設定されている最大使用可能容量です。単位は KB です。1KB で割り切れない場合、小数点以下を切り上げます。 最大許容サイズを設定していない場合は、「-1」が出力されます。
使用量	最大使用可能容量に対する使用量です。単位は KB です。1KB で割り切れない場合、小数点以下を切り上げます。 最大許容サイズを設定していない場合は、「-1」が出力されます。
使用数	ベースパス情報を使用しているルートフォルダの数です。
状態	ベースパス情報の状態です。次のうちのどちらかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 「ファイルのすべての操作を許可」 • 「ファイルの参照のみ許可」

オプション

`-type {p|c|g}`

取得するベースパス情報のフォルダの種別を指定します。指定を省略すると、すべてのベースパス情報を取得します。

p

個人フォルダのベースパス情報を取得します。

c

コミュニティフォルダのベースパス情報を取得します。

g

グループフォルダのベースパス情報を取得します。

[p], [c] および [g] 以外の種別を指定すると、コマンドはエラーになります。

`-c { win-31j | utf-8 }`

ベースパス情報格納ファイルの文字コードセットを指定します。

なお、このオプションを省略した場合、「win-31j」が仮定されます。

win-31j

文字コードセットを Windows-31J とします。

utf-8

文字コードセットを UTF-8 とします。

文書空間の文字コード種別が UTF-8 で、出力される情報に日本語および英語以外の言語の文字を含む場合、「win-31j」を指定して実行すると文字化けが発生します。そのときは、「utf-8」を指定して再度実行してください。

「win-31j」および「UTF-8」以外の文字コードセットを指定すると、コマンドはエラーになります。

-e o

ベースパス情報の OIID を出力する場合に指定します。指定を省略すると、ベースパス情報の OIID は出力されません。「o」以外のオプション値を指定すると、コマンドはエラーになります。

-o ベースパス情報格納ファイル

ベースパス情報を格納するファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。

なお、指定したファイル名と同じ名前のファイルがあった場合、上書きされます。

ベースパス情報格納ファイルのファイル名は任意です。

出力形式

- ベースパス情報として、一つのベースパスに対して 1 レコードがファイルに出力されます。1 レコードは、「,」（コンマ）で区切られていて、左から順に次のように出力されます。出力形式を次に示します。

出力形式

”種別”, ”名前”, ”条件種別”, ”条件値”, ”パス”, ”最大予約可能容量”, ”予約量”, ”最大使用可能容量”, ”使用量”, ”使用数”, ”状態”

- -type オプションの指定の有無によって、出力される情報のソート順序が異なります。
-type オプションを指定した場合、最優先されるキーが条件種別の昇順、2 番目に条件値の昇順、3 番目に使用数の昇順でソートされて出力されます。
-type オプションの指定を省略した場合、最優先されるキーが種別の昇順（コミュニティフォルダ、個人フォルダ、グループフォルダの順）、2 番目に条件種別の昇順、3 番目に条件値の昇順、4 番目に使用数の昇順でソートされて出力されます。
- 取得したベースパス情報に不正な値が設定されている場合、「不正な値です」と表示されます。「不正な値です」と表示された場合は、[ベースパス情報操作] 画面で不正な値を設定したベースパス情報を削除してから、再度 [ベースパス情報の追加] 画面で正しい値のベースパス情報を追加してください。
ベースパス情報を削除する方法、ベースパス情報を追加する方法、および各画面の詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

出力例

出力例を次に示します。

”コミュニティフォルダ”, ”課長用”, ”役職”, ”課長”, ”D:¥FILES1”, ”104857600”, ”5242880”, ”52428800”, ”524288”, ”1”, ”ファイルのすべての操作を許可”

cfslstfldr (ルートフォルダの情報の一覧表示)

形式

```
cfslstfldr -type {p|c|g}
           [-c {win-31j | utf-8}]
           -o ルートフォルダ情報格納ファイル
```

機能

作成済みのルートフォルダの情報を取得します。出力される情報を次に示します。

表 8-13 ルートフォルダの情報の一覧表示コマンド (cfslstfldr) で出力される情報

出力情報	説明
名前	[ファイル共有] ポートレット上で表示されるルートフォルダの名前です。
名前(英語)	[ファイル共有] ポートレット上で表示されるルートフォルダの英語名です。
フォルダ名	[ファイル共有] ポートレット上で表示されるルートフォルダのフォルダ名です。 <ul style="list-style-type: none"> 個人ルートフォルダの場合、ユーザ ID が出力されます。 グループルートフォルダの場合、グループ ID が出力されます。 コミュニティルートフォルダの場合、コミュニティ ID が出力されます。
残りのサイズ	ルートフォルダの残りのサイズです。単位は KB です。 最大許容サイズを設定していない場合は、「-1」が出力されます。
最大許容サイズ	ルートフォルダに設定されている最大許容サイズです。単位は KB です。 最大許容サイズを設定していない場合は、「-1」が出力されます。
作成者	ルートフォルダの作成者のユーザ ID です。
作成日時	ルートフォルダを作成した日時です。
状態	ルートフォルダの状態です。次のうちのどちらかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> 「使用可能」 「使用不可」
パス	ベースパス情報に設定されているパスです。

オプション

`-type {p|c|g}`

情報を取得するルートフォルダの種別を指定します。

p

個人フォルダの情報を取得します。

c

コミュニティフォルダの情報を取得します。

g

グループフォルダの情報を取得します。

「p」、 「c」 および 「g」 以外の種別を指定すると、コマンドはエラーになります。

`-c { win-31j | utf-8 }`

ルートフォルダ情報格納ファイルの文字コードセットを指定します。

なお、このオプションを省略した場合、「win-31j」が仮定されます。

win-31j

文字コードセットを Windows-31J とします。

utf-8

文字コードセットを UTF-8 とします。

文書空間の文字コード種別が UTF-8 で、出力される情報に日本語および英語以外の言語の文字を含む場合、「win-31j」を指定して実行すると文字化けが発生します。そのときは、「utf-8」を指定して再度実行してください。

「win-31j」および「UTF-8」以外の文字コードセットを指定すると、コマンドはエラーになります。

-o ルートフォルダ情報格納ファイル

ルートフォルダの情報を格納するファイル名を相対パスまたは絶対パスで指定します。

ルートフォルダ情報格納ファイルのファイル名は任意です。

出力形式

ルートフォルダの情報として、一つのルートフォルダに対して 1 レコードがファイルに出力されます。1 レコードは、「,」(コンマ) で区切られていて、左から順に次のよう出力されます。出力形式を次に示します。

出力形式

"名前", "名前(英語)", "フォルダ名", "残りのサイズ", "最大許容サイズ", "作成者", "作成日時", "状態", "パス"

出力例

出力例を次に示します。

"事業所A", "DivisionA", "000000000000001E", "713767", "1536000", "10333000", "2004/05/17 20:57:38", "使用可能", "G:¥hitachi"

cfslstprop (アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得)

形式

```
cfslstprop -ftype { o | a }
           [-c { win-31j | utf-8 }]
           -i 入力ファイル
           -o 出力ファイル
```

機能

アクセス履歴ファイルに出力された OIID に対応するファイルまたはフォルダの情報を取得します。出力される情報を次に示します。

表 8-14 アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得コマンド (cfsfstprop) で出力される情報

出力情報	説明
No.	入力ファイルがアクセス履歴ファイルの場合、アクセス履歴ファイルに出力されたアクセス履歴の番号が出力されます。 入力ファイルが OIID 指定ファイルの場合、OIID 指定ファイルの行番号が出力されます。
OIID	ファイルまたはフォルダの OIID です。 OIID は「dma://」で始まる URL 形式の 133 バイトの識別子です。
種別	次に示す値のどちらかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> • File：ファイルを示します。 • Folder：フォルダを示します。
パス	ファイルまたはフォルダが格納されているフォルダのパスが出力されます。
ファイル/フォルダ名	ファイル名またはフォルダ名です。
名前	[ファイル共有] ポートレット上でのファイルまたはフォルダの名前です。
名前(英語)	[ファイル共有] ポートレット上でのファイルまたはフォルダの英語名です。
種類	ファイルの種類です。 ファイルの場合だけ出力される項目です。
サイズ	ファイルのサイズです。単位はバイトです。 ファイルの場合だけ出力される項目です。
作成者	ファイルまたはフォルダの作成者のユーザ ID です。
作成日時	ファイルまたはフォルダの作成日時です。
更新者	ファイルまたはフォルダの更新者のユーザ ID です。
更新日時	ファイルまたはフォルダの更新日時です。
ロックユーザ	ファイルをロックしたユーザのユーザ ID です。 ロックされているファイルの場合だけ出力される項目です。
ロック日時	ファイルをロックした日時です。 ロックされているファイルの場合だけ出力される項目です。
ロックファイル更新日時	ロックされたファイルが更新された日時です。 ロックされているファイルの場合だけ出力される項目です。
コメント	ファイルまたはフォルダのコメントです。

オプション

`-ftype { o | a }`

入力ファイルの種類を指定します。

o

入力ファイルが OIID 指定ファイルの場合に指定します。

a

入力ファイルがアクセス履歴ファイルの場合に指定します。

`-c { win-31j | utf-8 }`

入力ファイルおよび出力ファイルの文字コードセットを指定します。

なお、このオプションを省略した場合、「win-31j」が仮定されます。

win-31j

文字コードセットを Windows-31J とします。

utf-8

文字コードセットを UTF-8 とします。

入力ファイルの文字コード種別が UTF-8 で、出力される情報に日本語および英語以外の言語の文字を含む場合、「win-31j」を指定して実行すると文字化けが発生します。そのため、「utf-8」を指定して再度実行してください。

「win-31j」および「UTF-8」以外の文字コードセットを指定すると、コマンドはエラーになります。

-i 入力ファイル

OIID が記述されているファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。次のどちらかを指定してください。

- **OIID 指定ファイル**
OIID 指定ファイルは、ファイルまたはフォルダの OIID を記述するファイルです。
- **アクセス履歴ファイル**
アクセス履歴ファイルまたは `cfsoiid2name` コマンドの出力ファイルを指定します。
ただし、File Sharing を稼働中の場合、アクセス履歴の出力先ディレクトリにあるアクセス履歴ファイルは指定しないでください。必ず異なるディレクトリにコピーしたファイルに対して、コマンドを実行してください。

-o 出力ファイル

ファイルまたはフォルダの情報を出力するファイルを相対パスまたは絶対パスで指定します。

OIID 指定ファイルの記述形式と記述例

OIID 指定ファイルの記述形式を次に示します。

- 複数の OIID を指定できます。
 - OIID は「`|`」（シングルクォート）で囲んで指定することもできます。
 - OIID の前後の空白およびタブは無視されます。
 - OIID として指定できるのは、次のどちらかです。
 - OIID
 - OIID の下位 52 バイト
- OIID については、「付録 P 用語解説」の OIID の説明を参照してください。

OIID 指定ファイルの記述例を次に示します。

機能

最大許容サイズ情報を取得します。

出力される情報を次に示します。

表 8-15 最大許容サイズ情報取得コマンド (cfslstqt) で出力される情報

出力情報	説明
OIID	最大許容サイズ情報の OIID です。
種別	最大許容サイズ情報に設定されているルートフォルダの種別です。次のどれかが出力されます。 <ul style="list-style-type: none"> 個人フォルダ グループフォルダ コミュニティフォルダ
条件種別	最大許容サイズ情報に設定されている条件種別です。
条件値	最大許容サイズ情報に設定されている条件値です。
最大許容サイズ	個人ルートフォルダ、グループルートフォルダまたはワークスペースルートフォルダに設定されている最大許容サイズです。 単位は KB です。1KB で割り切れない場合は小数点以下を切り上げます。

オプション

`-type {p|c|g}`

取得する最大許容サイズ情報の種別を指定します。なお、このオプションを省略した場合、すべての最大許容サイズ情報を取得します。

p

個人フォルダの最大許容サイズ情報を取得します。

c

コミュニティフォルダの最大許容サイズ情報を取得します。

g

グループフォルダの最大許容サイズ情報を取得します。

[p], [c] および [g] 以外の種別を指定すると、コマンドはエラーになります。

`-c {win-31j|utf-8}`

最大許容サイズ情報格納ファイルの文字コードセットを指定します。なお、このオプションを省略した場合、[win-31j] が仮定されます。

win-31j

文字コードセットを Windows-31J とします。

utf-8

文字コードセットを UTF-8 とします。

文書空間の文字コード種別が UTF-8 で、出力される情報に日本語および英語以外の言語の文字を含む場合、「win-31j」を指定して実行すると文字化けが発生します。そのときは、「utf-8」を指定して再度実行してください。

「win-31j」および「utf-8」以外の文字コードセットを指定すると、コマンドはエラーになります。

-e o

最大許容サイズ情報の OIID を出力する場合に指定します。指定を省略すると、最大許容サイズ情報の OIID は出力されません。「o」以外のオプション値を指定すると、コマンドはエラーになります。

-o **最大許容サイズ情報格納ファイル**

最大許容サイズ情報を格納するファイル名を、相対パスまたは絶対パスで指定します。

出力形式

- 最大許容サイズ情報として、一つの最大許容サイズに対して 1 レコードがファイルに出力されます。1 レコードは、「,」（コンマ）で区切られていて、-e オプションが指定されていない場合は、左から順に次のように出力されます。

出力形式

"種別","条件種別","条件値","最大許容サイズ"

-e オプションが指定されている場合は、左から順に次のように出力されます。

出力形式

"OIID","種別","条件種別","条件値","最大許容サイズ"

- type オプションの指定の有無によって、出力される情報のソート順序が異なります。
-type オプションを指定した場合、最優先されるキーが条件種別の昇順、2 番目に条件値の昇順でソートして出力されます。
-type オプションを省略した場合、最優先されるキーが種別の昇順（コミュニティフォルダ、個人フォルダ、グループフォルダの順）、2 番目に条件種別の昇順、3 番目に条件値の昇順でソートして出力されます。
- 取得した最大許容サイズ情報に不正な値が設定されている場合、「不正な値です」と表示されます。「不正な値です」と表示された場合は、[最大許容サイズ情報操作] 画面で不正な値を設定した最大許容サイズ情報を削除してから、再度 [最大許容サイズ情報の追加] 画面で正しい値の最大許容サイズ情報を追加してください。

最大許容サイズ情報を削除、追加する方法および各画面の詳細については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

出力例

出力例を次に示します。

- e オプションが指定されていない場合の出力例

"種別","条件種別","条件値","最大許容サイズ"
"コミュニティフォルダ","役職","課長","1048576"

- e オプションが指定されている場合の出力例

"OIID","種別","条件種別","条件値","最大許容サイズ"

```
"dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/673d2/be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d/05458226-f24b-4019-8fc6-9f45473c30000000000000000021","コミュニティフォルダ","役職","課長","1048576"
```

注意事項

-o オプションで指定するファイル名のパスに全角・半角スペースまたはタブが含まれる場合、パスを「」(引用符)で囲んでください。

cfsmodgrpprm (グループフォルダのアクセス権の変更)

形式

```
cfsmodgrpprm -id グループID
                {-oid 変更前組織ID,変更後組織ID | -uid 変更前ユーザID,変更後ユーザID}
```

機能

グループルートフォルダ以下のアクセス権に設定されている組織またはユーザに対して、次に示す操作を実行します。

- 変更前組織 ID に指定された組織 ID の組織とその下位の組織および下位のユーザを、変更後組織 ID に指定された組織に置き換えます。
- 変更前ユーザ ID に指定されたユーザを、変更後ユーザ ID に指定されたユーザに置き換えます。

オプション

-id *グループID*

アクセス権に設定されている組織またはユーザを変更するグループルートフォルダのグループ ID を指定します。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したグループ ID が空文字列 ("") の場合
- 指定したグループ ID の長さが 16 バイトを超えている場合
- 指定したグループ ID のグループルートフォルダがない場合
- 指定したグループルートフォルダが非表示になっている場合

-oid *変更前組織ID* *変更後組織ID*

-id オプションで指定したグループルートフォルダ以下のアクセス権から変更する、変更前組織の組織 ID と変更後組織の組織 ID を「,」(コンマ)で区切って指定します。ただし、「,」(コンマ)の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定した組織 ID が空文字列 ("") の場合
- 指定した組織 ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定した組織 ID がディレクトリサーバにない場合
- 変更前組織 ID に、アクセス権に設定されていない組織を指定した場合
- 変更前組織 ID と変更後組織 ID に同じ値を指定した場合

-uid 変更前ユーザ ID 変更後ユーザ ID

-id オプションで指定したグループルートフォルダ以下のアクセス権から変更する、変更前ユーザのユーザ ID と変更後ユーザのユーザ ID を「,」（コンマ）で区切って指定します。ただし、「,」（コンマ）の前後には、空白およびタブを指定しないでください。

次に示す条件の場合、コマンドはエラーになります。

- 指定したユーザ ID が空文字列（""）の場合
- 指定したユーザ ID の長さが 254 バイトを超えている場合
- 指定したユーザ ID がディレクトリサーバにない場合
- 変更前ユーザ ID に、アクセス権が設定されていないユーザ ID を指定した場合
- 変更前ユーザ ID と変更後ユーザ ID に同じ値を設定した場合
- 兼任機能使用時に兼任ユーザ ID を指定した場合

注意事項

- ファイルおよびフォルダの所有者は変更できません。
- -oid と -uid のうち、どちらか一方だけを指定してください。
- アクセス権を変更すると、所有者がアクセスできなくなるファイルまたはフォルダがある場合は、エラーになります。
- 組織 ID またはユーザ ID の変更は、次の順で実行されます。

1. グループルートフォルダのアクセス権から変更前組織 ID を削除
2. グループルートフォルダのアクセス権に変更後組織 ID を追加

変更前組織を削除すると、変更前組織とその下位の組織および下位のユーザが削除されます。

- アクセス権の変更によって、同一の組織またはユーザに対して異なるアクセス権が設定された場合、強い方のアクセス権が適用されます。

アクセス権の強弱を次に示します。

削除権 > 更新権 > 作成権 > 参照権

例えば、グループルートフォルダ A を利用する組織として、次の組織とアクセス権が設定されていたとします。

- 組織「営業 1 課」：作成権
- 組織「総務部」：参照権

このコマンドを実行して、組織「総務部」を組織「営業 1 課」に置き換えた場合、グループルートフォルダ A に設定されている組織とアクセス権は、次のようになります。

- 組織「営業 1 課」：作成権
- 組織「営業 1 課」：参照権

組織「営業 1 課」に対して作成権と参照権が設定されますが、同一の組織に複数のアクセス権が設定された場合、強い方のアクセス権が適用されます。そのため、組織「営業 1 課」に対して作成権が適用されます。

cfsoiid2name (アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換)

形式

```
cfsoiid2name [-c {win-31j | utf-8}]
             -i 入力ファイル
             -o 出力ファイル
```

機能

アクセス履歴ファイルに出力された OIID に対応するファイル名またはフォルダ名を OIID に付加します。

オプション

-c { win-31j ; utf-8 }

入力ファイルおよび出力ファイルの文字コードセットを指定します。

なお、このオプションを省略した場合、「win-31j」が仮定されます。

win-31j

文字コードセットを Windows-31J とします。

utf-8

文字コードセットを UTF-8 とします。

入力ファイルの文字コード種別が UTF-8 で、出力される情報に日本語および英語以外の言語の文字を含む場合、「win-31j」を指定して実行すると文字化けが発生します。そのため、「utf-8」を指定して再度実行してください。

「win-31j」および「UTF-8」以外の文字コードセットを指定すると、コマンドはエラーになります。

-i 入力ファイル

OIID を変換するアクセス履歴ファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。

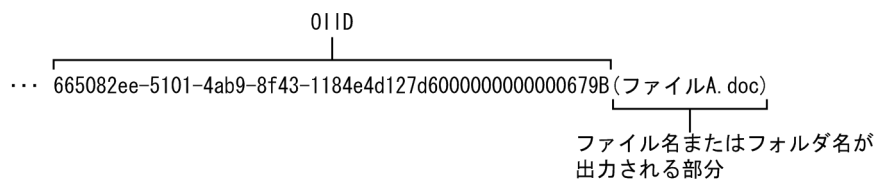
ただし、File Sharing を稼働中の場合、アクセス履歴の出力先ディレクトリにあるアクセス履歴ファイルは指定しないでください。必ず異なるディレクトリにコピーしたファイルを指定してください。

-o 出力ファイル

OIID を変換した結果を出力するファイルのパスを相対パスまたは絶対パスで指定します。

出力形式

- 出力ファイルは、入力ファイルに指定したアクセス履歴ファイルと同じ形式で出力されます。
- 出力ファイルには、OIID が次の形式で出力されます。OIID の部分に、「(ファイル名)」または「(フォルダ名)」が付加されて出力されます。



- ファイル名またはフォルダ名に半角スペースを含む場合は、ファイル名またはフォルダ名が「"」（引用符）で囲んで出力されます。
- アクセス履歴として不正な値が出力されている場合、「Invalid value」が出力されます。
- アクセス履歴ファイルに出力された OIID に対応するファイルもしくはフォルダが存在しない場合、またごみ箱に移動されている場合は OIID がそのまま出力されます。ファイル名またはフォルダ名情報は付加されません。

出力例

出力例を次に示します。

```
0091 2007/01/17 14:12:04.779 CFS 00000C08 000012B0 KDCF00100-I hostname - COM01 WPL01 10333000
FROPEN P - 8d3280b9-0f25-4551-8f04-414416ae43f80000000000000050C("フォルダ A")
0092 2005/10/17 14:12:04.936 CFS 00000C08 000012B0 KDCF00100-I hostname - COM01 WPL01 10333000
FLDOWNLOAD P - 665082ee-0f25-4551-8f04-414416ae43f80000000000009013(ファイルB.doc)
```

注意事項

- File Sharing を稼働中の場合、アクセス履歴の出力先ディレクトリにあるアクセス履歴ファイルを-i オプションに指定しないでください。
- コマンドの実行を中断した場合、中断までに出力されたファイルが残ります。

9

File Sharing の障害対策

この章では、File Sharing の障害対策について説明します。

なお、トランザクションの処理など、データベースシステムの機能に依存している対処方法については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」、またはマニュアル「HiRDB UAP 開発ガイド」を参照してください。

9.1 障害発生時に利用できる情報

ここでは、障害が発生したときに利用できる情報について説明します。

9.1.1 メッセージ

File Sharing サーバの運用中のメッセージは、イベントビューアのログ・アプリケーションに出力されます。コマンド実行中のメッセージについては、標準エラー出力に出力されます。運用中およびコマンド実行中のメッセージの詳細は、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

なお、[ファイル共有] ポートレットの操作中に表示されるメッセージの詳細は、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。また、File Sharing クライアント運用コマンドで出力されるメッセージについては、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

9.1.2 File Sharing クライアントの詳細メッセージ

File Sharing クライアントの実行時のエラーに対処するために、詳細なエラー情報（詳細メッセージ）が出力されます。詳細メッセージの内容については、マニュアル「Collaboration - File Sharing メッセージ」を参照してください。

詳細メッセージは、詳細エラーログファイルに出力されます。

File Sharing クライアントの環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG」が ON のとき、DBR_DETAIL_ERRORLOG_DIR で指定されたディレクトリの下に「EDMErrTraceCLXXXXX_1.log」として出力されます。XXXXX はプロセス ID を示します。詳細エラーログファイルには、エラーが発生しない場合もログが出力されますので、必要に応じて詳細エラーログファイルを削除するようにしてください。

File Sharing クライアントの環境変数については、「4.3 File Sharing クライアントの実行環境の作成」を参照してください。

9.1.3 トレースファイル

発生した障害の切り分けや、原因究明のためにトレースファイルが出力されます。

File Sharing で出力されるトレースファイルには、出力先や出力内容の設定方法によって、次の表に示す種類があります。

表 9-1 File Sharing で出力されるトレースファイル

該当する機能		出力先および出力内容の設定方法
File Sharing サーバ		環境変数で設定します。
File Sharing サーバ	組織情報取得ライブラリ	ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル（cfsauth.ini）で設定します。
File Sharing クライアント	ポートレット機能（File Sharing サーバへのアクセス処理）および File Sharing クライアント運用コマンド	File Sharing クライアントの「動作環境定義ファイル」で設定します。

該当する機能		出力先および出力内容の設定方法
File Sharing クライアント	ポートレット機能 (uCosminexus Portal Framework と連携する処理)	uCosminexus Portal Framework で設定します。
	ポートレット機能以外	環境変数で設定します。

(1) File Sharing サーバのトレースファイル

File Sharing サーバのトレースファイルについて説明します。

(a) 出力先ディレクトリ

File Sharing サーバのトレースファイルは、環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」に指定したディレクトリに出力されます。デフォルトの出力先ディレクトリを次に示します。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥spool¥server

(b) 出力ファイル名

File Sharing サーバのトレースファイルの出力ファイル名は、環境変数で指定できません。「EDMRasTrace0x"PID"_"NO".log」のファイル名で出力されます。なお、「PID」はプロセス識別子で、「NO」はファイル通番です。

(c) 出力方法および出力内容

File Sharing サーバのトレースファイルの出力方法および出力内容については、次に示す環境変数で設定します。

- **_HIEDMS_TRACE_KEEP_DAYS (トレースファイルの保存日数)**

File Sharing サーバのトレースファイルは、環境変数「_HIEDMS_TRACE_KEEP_DAYS」に指定した日数だけ保存されます。1~365 の日数を指定します。デフォルトは 70 (日) です。File Sharing サーバの起動時、トレースファイルの出力先ディレクトリに、環境変数「_HIEDMS_TRACE_KEEP_DAYS」で指定した保存日数を超えるトレースファイルが存在する場合、これらのファイルは削除されます。

- **_HIEDMS_TRACE_NUM (切り替えファイル数)**

トレースを出力するファイルサイズの上限を超えた場合に、切り替えるファイルの数を指定できます。環境変数「_HIEDMS_TRACE_NUM」に、切り替えることができるファイルの数を 2~16 の値で指定します。デフォルトは 2 です。切り替えるファイルの数の上限を超えると、最初のファイルに戻って出力します。このとき、ファイルは上書きされます。

- **_HIEDMS_TRACE_SIZE (ファイルサイズ)**

トレースを出力するファイルのサイズを、環境変数「_HIEDMS_TRACE_SIZE」に 4,096~2,147,483,647 の値で指定します。デフォルトは 1,048,576 (1MB) です。

- **_HIEDMS_TRACE_LEVEL (トレースの出力レベル)**

トレースの出力レベルを変更できます。環境変数「_HIEDMS_TRACE_LEVEL」にトレースレベルを指定します。デフォルトは 10 です。トレースレベルと出力情報について、次の表に示します。

表 9-2 トレースレベルと出力情報

トレースレベル	出力情報
-1※	• トレースヘッダ

トレースレベル	出力情報
0	<ul style="list-style-type: none"> エラーなどの必須情報 File Sharing サーバの開始/終了
10 (デフォルト)	<ul style="list-style-type: none"> トレースレベルが0の場合に出力される情報 ユーザインターフェースの情報 ほかのプログラムとのインターフェースの情報 データベースへの接続/切断

注※

トレースレベルが-1の場合、環境変数「_HIEDMS_TRACE_NUM」にデフォルトの値、または2以上の値が指定されていても、トレースを出力するファイルの数は一つです。

(2) 組織情報取得ライブラリのトレースファイル

組織情報取得ライブラリのトレースファイルについて説明します。組織情報取得ライブラリのトレースファイルについては、ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini) で設定します。

(a) 出力ディレクトリとファイル名

組織情報取得ライブラリのトレースファイルの出力先およびファイル名は、ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの[DIRECTORY]セクションを構成する TraceFileName エントリに指定します。エントリの指定方法については、「5.2.5 ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini)」を参照してください。

(b) 出力方法

組織情報取得ライブラリを取得する場合の制御情報は、ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの[DIRECTORY]セクションを構成する次のエントリの指定方法に依存します。

- TraceFileSize エントリ
- TraceNumFiles エントリ
- TraceLevel エントリ

トレースファイルの管理方法に従って、最適な設定をしてください。各エントリの指定方法については、「5.2.5 ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini)」を参照してください。

(c) 出力情報

組織情報取得ライブラリのトレースファイルの出力情報について説明します。なお、トレースファイルの出力形式については、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

トレースファイルに、結果コード、詳細コード1および詳細コード2が次の形式で出力されます。

rc = xxx, dc1 = yyy, dc2 = zzz

(凡例)

- rc：結果コードです。
- dc1：詳細コード1です。
- dc2：詳細コード2です。

トレースファイル中の「message-id」に” Error” と出力された行から、結果コード、詳細コード1および詳細コード2を取得してください。

トレースファイルの出力情報と、要因別の対策を次の表に示します。

表 9-3 組織情報取得ライブラリのトレースファイルの要因別の対策一覧

結果コード	詳細コード	要因	対策
0x0	0x1	<p>次の要因が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 存在しない組織情報を検知しました。 組織情報の検索の途中で、異常を検知しました。 	<p>ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの設定で、次に示す内容が現在のディレクトリサーバ上のデータと一致していることを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ユーザの所属組織を表す属性名 ユーザの所属組織の格納方法 組織検索時に使用するベースDN 組織検索時に使用するスコープ 組織を示すディレクトリサーバ上のオブジェクトクラス 組織のオブジェクトクラスでキーとなる属性名 上位組織を表す属性名 上位組織の格納方法 <p>ディレクトリサーバ上の組織情報について、次の内容を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ユーザの「所属組織」に設定されている組織が、ディレクトリサーバ上で矛盾していないか。 組織情報の「上位組織」に設定されている情報が、ディレクトリサーバ上で矛盾していないか。 <p>組織情報が格納されているディレクトリサーバの状態について、次の内容を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ディレクトリサーバに接続するクライアント数が上限値に達していないか。 ディレクトリサーバがビジー状態になっていないか。 ディレクトリサーバが起動し、正しく動作しているか。 ディレクトリサーバでメモリ不足が発生していないか。
	0x1 以外	正常終了です。	—
0x1	0x0	正常終了です。	—

結果コード	詳細コード	要因	対策
0x4	0x0	ディレクトリサーバ検索に使用できるコネクションハンドルが、コネクションプールに存在しません。	ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルのコネクション数を見直してください。
0x6	0x1 以外	内部の不正を検知しました。	エラー発生時のトレースファイルを取得して、システム管理者に連絡してください。
0x7	0x0	メモリの確保に失敗しました。	メモリの容量が十分かどうか確認してください。不足している場合は、メモリを増設してください。
0x8	0x0	ディレクトリサーバ接続の初期化に失敗しました。	ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルで、次の設定を見直してください。 <ul style="list-style-type: none"> • Server エントリに指定した接続先ディレクトリサーバ • Port エントリに指定した接続先ポート番号
0x9	0x0	次の要因が考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> • ディレクトリサーバ検索時に不正なデータを検知しました。 • 検索の途中で、異常を検知しました。 	ディレクトリサーバ上のデータについて、次に示す内容を確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> • ログインユーザのユーザ ID が存在しているか。 • ログインユーザのユーザ ID が複数存在していないか。 • 同一組織が複数存在していないか。 また、ユーザ情報が格納されているディレクトリサーバの状態について、次に示す内容を確認してください。 <ul style="list-style-type: none"> • ディレクトリサーバに接続するクライアント数が上限値に達していないか。 • ディレクトリサーバが検知状態になっていないか。 • ディレクトリサーバが起動し、正しく動作しているか。 • ディレクトリサーバでメモリ不足が発生していないか。
0xa	ディレクトリサーバリターンコード	ディレクトリサーバ操作時に、エラーが発生しました。 ユーザ情報および組織情報の取得先であるディレクトリサーバの設定が原因の場合 <ul style="list-style-type: none"> • ディレクトリサーバまたはポート番号の設定が誤っています。 	ディレクトリサーバの環境を見直して、再度実行してください。 それでも同様のエラーが発生する場合は、エラー発生時のトレースファイルを取得して、システム管理者に連絡してください。

結果コード	詳細コード	要因	対策
0xa	ディレク トリサー バリター ンコード	<ul style="list-style-type: none"> ・バインド DN またはバインドパスワードの設定が誤っています。 ・オブジェクトクラスの設定が誤っています。 ・エントリを特定する属性名, ユーザ ID 属性名, 所属組織属性名, または組織単位属性名の設定が誤っています。 <p>ディレクトリサーバまたはネットワークが原因の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ディレクトリサーバが停止しています。 ・ディレクトリサーバの IP アドレスが取得できません。 ・ディレクトリサーバと通信できません。 ・ディレクトリサーバの負荷が高い状態です。 ・ディレクトリサーバのメモリが不足しています。 ・組織情報取得ライブラリがサポートしないディレクトリサーバを利用しています。 ・ディレクトリサーバの検索時間タイムアウトが発生しました。 <p>ディレクトリサーバ上のデータが原因の場合</p> <ul style="list-style-type: none"> ・設定された条件では, データに対するアクセス権がありません。 ・ユーザまたは組織が重複しているために, ユーザまたは組織を検索したときに, 複数のデータが検索されました。 	<p>ディレクトリサーバの環境を見直して, 再度実行してください。</p> <p>それでも同様のエラーが発生する場合は, エラー発生時のトレースファイルを取得して, システム管理者に連絡してください。</p>
0xb	トレース API の種 別番号	<p>詳細コード 2 の要因で, 詳細コード 1 の API がエラーを返しました。</p>	<p>ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルで, 次の設定を見直してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ TraceFileSize エントリに指定したトレースファイルのサイズ ・ TraceNumFiles エントリに指定したトレースファイルの面数 ・ TraceLevel エントリに指定したトレースファイルのレベル ・ TraceFileName エントリに指定したトレースファイル名
0x2, 0x3, 0x5, 0xc	任意	<p>内部の不正を検知しました。</p>	<p>エラー発生時のトレースファイルを取得して, システム管理者に連絡してください。</p>

(凡例) - : 該当しません。

(3) File Sharing クライアントのポートレット機能 (File Sharing サーバへのアクセス処理) および File Sharing クライアント運用コマンドのトレースファイル

File Sharing クライアントのポートレット機能および File Sharing クライアント運用コマンドのうち、File Sharing サーバへのアクセス処理のトレースファイルについては、動作環境定義ファイルで設定します。

(a) 出力先ディレクトリ

File Sharing サーバへのアクセス処理のトレースファイルの出力先は、動作環境定義ファイルで設定できます。設定方法については、「5.3.4 動作環境定義ファイル (conf.properties)」を参照してください。デフォルトの出力先ディレクトリを次に示します。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥log

(b) 出力ファイル名

File Sharing サーバへのアクセス処理のトレースファイルの出力ファイル名は、「DBJComTrace0xPID_NO.log」です。「PID」はプロセス識別子で、「NO」はファイル通番です。

(c) 出力内容

次の内容が出力されます。

- File Sharing クライアントの内部メソッドの開始と終了
- 発生したすべてのエラーメッセージ
- キャッチした例外
- ログイン時に指定したユーザ識別子

(4) File Sharing クライアントのポートレット機能 (uCosminexus Portal Framework と連携する処理) のトレースファイル

File Sharing クライアントのポートレット機能のうち、uCosminexus Portal Framework と連携する処理のトレースファイルについては、uCosminexus Portal Framework で設定します。uCosminexus Portal Framework でのログ出力の詳細は、マニュアル「uCosminexus Portal Framework システム管理者ガイド」を参照してください。

(5) File Sharing クライアントのポートレット機能以外のトレースファイル

File Sharing クライアントのポートレット機能および File Sharing クライアント運用コマンド以外のトレースファイルについて説明します。

(a) 出力先ディレクトリ

File Sharing クライアントのポートレット機能以外のトレースファイルの出力先は、環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」に必ず指定してください。なお、指定されなかった場合は、次に示す優先順位で決まります。

1. {File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥spool¥client
2. {File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥spool¥client
3. File Sharing クライアントが提供する機能の実行環境ディレクトリ、または File Sharing クライアントが提供するライブラリを呼び出すプログラムの実行時ディレクトリ

(b) 出力ファイル名

トレースファイルの出力ファイル名は、環境変数に指定できません。
「EDMRasTraceCL0x"*PID*"_"*NO*".log」のファイル名で出力されます。なお、「*PID*」はプロセス識別子で、「*NO*」はファイル通番です。

(c) 出力方法および出力内容

File Sharing クライアントのポートレット機能以外のトレースファイルの出力方法および出力内容は、File Sharing サーバと同様の環境変数で設定します。

なお、環境変数「`_HIEDMS_TRACE_KEEP_DAYS`（トレースファイルの保存日数）」は、File Sharing サーバだけに有効です。ただし、File Sharing サーバと File Sharing クライアントを同一のマシンで運用する場合で、File Sharing クライアントと File Sharing サーバのトレースファイルの出力先が同一のときは、File Sharing クライアントのトレースファイルも、環境変数「`_HIEDMS_TRACE_KEEP_DAYS`」の指定内容に従って削除されます。

設定する環境変数の詳細は、「9.1.3(1) File Sharing サーバのトレースファイル」の「(c) 出力方法および出力内容」を参照してください。

9.1.4 RAS 収集

RAS 収集機能とは、Collaboration のシステム全体の実行経過を記録したトレースファイルを取得する機能です。詳細は、マニュアル「Collaboration 導入ガイド」を参照してください。

なお、RAS 収集でのトレース情報の収集対象は File Sharing クライアントです。同一のマシンで File Sharing サーバを運用していても、File Sharing サーバのトレース情報は対象外となります。トレース情報の収集対象を次に示します。

- File Sharing クライアントで出力するトレースファイル
- File Sharing クライアントで使用する定義ファイル
 - クラス定義情報ファイル
 - レンディション定義ファイル
 - 動作環境定義ファイル

(1) RAS 収集用プロパティファイルの設定

統合 RAS 収集コマンドで指定するプロパティファイル（CollaboRAS.properties）には、各コンポーネントの conf ファイルの絶対パスを記述します。File Sharing のキー名には「CFS」を指定して、File Sharing 用 conf ファイルの絶対パスを記述してください。

(2) File Sharing 用 conf ファイルの設定

RAS 収集用プロパティファイルに指定する、File Sharing 用 conf ファイル（hptl_clb_cfs_ras.conf）には、jar ファイルに格納するファイルの絶対パスを記述します。

(a) File Sharing 用 conf ファイルの記述形式

- 収集対象の各ファイル（File Sharing クライアントで出力するトレースファイルと定義ファイル）のパス名は絶対パス名で指定してください。
- conf ファイル内の先頭が「#」で始まる行はコメント行として扱います。

- conf ファイルには取得するファイルの存在するディレクトリ名またはファイル名を指定してください。
- パス名にはワイルドカード (*) は指定できません。
- 同一 conf ファイル内に同じファイルを 2 回指定した場合、または別ドライブで同じファイル名を指定した場合は、あとから指定したファイルで jar ファイルの内容が上書きされます。
- 日本語を含む値を指定する場合も native2ascii コマンドを実行する必要はありません。実行環境の文字コードに合わせてファイルを保存してください。

(b) File Sharing 用 conf ファイルの記述例

```
C:\Program Files\Hitachi\Collaboration\filesharing\Client\spool\client
C:\Program Files\Hitachi\Collaboration\filesharing\Client\etc
```

9.1.5 文書空間へのアクセスログ

File Sharing では、文書空間へのアクセスを記録したアクセスログファイルが出力できます。指定した出力レベルに応じて、Write レベル、Read レベル、Error レベルのアクセスログ情報が出力されます。文書空間にアクセスする処理を実行しているときに障害が発生した場合、必要に応じて確認してください。

なお、アクセスログを出力するための設定は、File Sharing サーバの文書空間に定義しておく必要があります。

(1) 出力先ディレクトリとファイル名

アクセスログファイルの出力先ディレクトリとファイル名を次に示します (NO: 出力ファイル通番)。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}\Server\spool\aclog\EDMAccess_NO.log
```

(2) 出力方法

アクセスログを取得する場合の制御情報は、DocumentSpace 構成定義ファイルの[Entry0001]セクションを構成する次のエントリの指定方法に依存します。

- AcLogUse
- AcLogLevel
- AcLogFileCount
- AcLogFileSize

アクセスログの管理方法に従って、最適な設定をしてください。各エントリの指定方法については、「5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)」を参照してください。

ポイント

File Sharing サーバを再起動した場合、継続して最終更新ファイルにアクセスログを出力します。

(3) 出力形式

アクセスログファイルの出力形式を次に示します。

```
yyyy/mm/dd hh:mm:ss. ms UserID LogInformation
```

なお、LogInformation 内は、スペースで区切られて出力されます。カラム位置は調整されません。次に、アクセスログの各項目を説明します。

yyyy/mm/dd

アクセスした日付（年，月，日）を示します。

hh:mm:ss. ms

アクセスした時間（時，分，秒，ミリ秒）を示します。

UserID

アクセスしたユーザのユーザ識別子を示します。

LogInformation

出力ログ情報を示します。

(4) 出力情報

File Sharing サーバの処理に対して出力される出力ログ情報について説明します。

(a) 出力ログ情報の一覧

出力ログ情報の一覧を次の表に示します。

表 9-4 アクセスログの出力ログ情報

操作	出力ログ情報	出力レベル
セッションの確立	CONNECT <文書空間識別子>	W, R, E
セッションの切断	DISCONNECT	W, R, E
オブジェクトの作成	CREATE OBJECT <OIID>	W, R, E
オブジェクトの削除	DELETE OBJECT <OIID>	W, R, E
オブジェクト間の関連づけの設定	LINK <上位オブジェクトの OIID> <下位オブジェクトの OIID>	W, R, E
オブジェクト間の関連づけの解除	UNLINK <上位オブジェクトの OIID> <下位オブジェクトの OIID>	W, R, E
プロパティの取得	GET PROPERTIES <OIID>	R, E
プロパティの設定	SET PROPERTIES <OIID>	W, R, E
ファイルのダウンロード	DOWNLOAD CONTENT <OIID>	R, E
ファイルのアップロード	UPLOAD CONTENT <OIID>	W, R, E
オブジェクトの上位フォルダ一覧の取得	LIST PARENTS <OIID>	R, E
下位オブジェクト一覧の取得	LIST CHILDREN <OIID>	R, E
問い合わせの実行	EXECUTE SEARCH <From 句のクラス識別子の並び (16 個まで) >	R, E
問い合わせ結果の取得	GET RESULT	R, E
エラー	ERROR	E

(凡例)

W :

Write レベルです。セッションの確立／切断、オブジェクトの作成、削除、更新、オブジェクト間の関連づけなどのアクセスレベルについて、アクセスログへの出力を指定します。

R :

Read レベルです。Write レベルの出力に加えて、プロパティ参照、検索などのアクセスレベルについて、アクセスログへの出力を指定します。

E :

Error レベルです。Read レベルの出力に加えて、該当する処理でエラーが発生した場合についてもアクセスログへの出力を指定します。

(b) 出力ログ情報の詳細

文書空間識別子

文書空間の定義 (DocumentSpace 構成定義ファイル SerialId エントリ) で設定した値です。

OIID

操作したオブジェクトの OIID です。

上位オブジェクトの OIID

オブジェクト間の関連づけを設定・解除した上位フォルダの OIID です。

下位オブジェクトの OIID

オブジェクト間の関連づけを設定・解除した下位オブジェクトの OIID です。

From 句のクラス識別子の並び (16 個まで)

検索を実行する場合、検索条件として指定する From 句のクラス識別子 (36 バイト) です。このクラス識別子は、連続して 16 個まで出力されます。出力されたそれぞれのクラス識別子の間には、半角スペース (1 バイト) が入ります。出力形式 (△を半角スペースとします) を次に示します。

クラス識別子△クラス識別子△・・・△クラス識別子

9.1.6 エラーログ

File Sharing サーバで発生したエラー情報は、エラーログファイルとして出力されます。エラー情報とは、出力されるメッセージのうち「error」で示されるメッセージのことです。障害が発生した場合に、必要に応じて確認してください。

(1) 出力先ディレクトリとファイル名

エラーログファイルの出力先ディレクトリとファイル名を次に示します (NO : 出力ファイル通番)。

{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥spool¥errlog¥EDMError_NO.log

(2) 出力方法

エラーログを取得する場合の制御情報は、DocumentSpace 構成定義ファイルの [DocSpace] セクションを構成する次のエントリの指定方法に依存します。

- ErrLogFileCount エントリ
- ErrLogFileSize エントリ

エラーログの管理方法に従って、最適な設定をしてください。各エントリの指定方法については、「5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)」を参照してください。

(3) 出力形式

エラーログファイルの出力形式を次に示します。

```
yyyy/mm/dd hh:mm:ss.ms Pid Tid ClassName MethodName LogInformation
```

なお、LogInformation 内は、スペースで区切られて出力されます。カラム位置は調整されません。次に、エラーログの各項目を説明します。

yyyy/mm/dd

エラーが発生した日付（年，月，日）を示します。

hh:mm:ss.ms

エラーが発生した時間（時，分，秒，ミリ秒）を示します。

Pid

エラーが発生したサーバプロセスのプロセス識別子を示します。

Tid

エラーが発生したサーバプロセスのスレッド識別子を示します。

ClassName

メッセージを出力したクラス名を示します。

MethodName

メッセージを出力したメソッド名を示します。

LogInformation

出力されたエラーメッセージを示します。

9.1.7 オブジェクト操作ツールのコマンド実行ログ

File Sharing クライアントのオブジェクト操作ツールでは、セッションの確立・切断、およびオブジェクト操作情報をコマンド実行ログとして出力できます。オブジェクト操作ツールの実行時に障害が発生した場合に、必要に応じて確認してください。

ポイント

コマンド実行ログがどのように出力されるかはオブジェクト操作ツールの実行環境に依存します。オブジェクト操作ツール全体でコマンド実行ログの出力を制御することはできません。コマンド実行ログの出力はオブジェクト操作ツール実行下の実行環境制御ファイルの記述によって制御されます。

(1) 出力方法

コマンド実行ログは、実行環境制御ファイルの[Log]セクションに定義されている内容に従って出力されます。

[Log]セクションの指定方法については、「5.3.6 実行環境制御ファイル (EDMOotCtrl.ini)」を参照してください。

(2) 出力先ディレクトリ

Directory エントリに指定したディレクトリです。コマンド実行ログを出力しようとしたディレクトリが存在しない場合はエラーメッセージが出力されてコマンド実行ログは出力されません。オブジェクト操作ツール実行前にディレクトリが存在することを確認してください。

(3) 出力先ファイル

Prefix エントリに指定したプリフィックスを持つ次に示す名称のファイルに出力します。

出力ファイル名プリフィックス_NO.log

「NO」は出力ファイル通番を示します。出力ファイル通番とは、1～FileCount エントリに指定した数（出力ファイル数）です。

(4) 出力形式

コマンド実行ログの出力形式を次に示します。

yyyy/mm/dd hh:mm:ss Cmd ProcessID LogInformation

yyyy/mm/dd

コマンドを実行した日付（年，月，日）を示します。

hh:mm:ss

コマンドを実行した時間（時，分，秒）を示します。

Cmd

実行したコマンド名を示します。

ProcessID

実行したコマンドのプロセス ID を 16 進数で示します。

LogInformation

実行した操作に対応するログ情報を示します。

(5) 出力情報

操作に対応する出力ログ情報について説明します。

(a) 出力ログ情報の一覧

出力ログ情報の一覧を次の表に示します。

表 9-5 コマンド実行ログの出力ログ情報

操作	出力ログ情報	出力レベル
エラー	ERROR	E
オブジェクトの作成	CREATE OBJECT <オブジェクト種別> <OIID>	W, R, E
オブジェクトの削除	DELETE OBJECT <オブジェクト種別> <OIID>	W, R, E
セッションの確立	CONNECT <文書空間 ID> <ユーザ名>	W, R, E
セッションの切断	DISCONNECT	W, R, E

操作	出力ログ情報	出力レベル
問い合わせの実行	EXECUTE SEARCH	R, E
問い合わせ結果の取得	GET RESULT	R, E
プロパティの取得	GET PROPERTIES <オブジェクト種別> <OIID>	R, E
プロパティの設定	SET PROPERTIES <オブジェクト種別> <OIID>	W, R, E

(凡例)

W : Write レベルです。

R : Read レベルです。

E : Error レベルです。

(b) 出力ログ情報の詳細

オブジェクト種別

操作を行ったオブジェクトのオブジェクト種別です。

OIID

操作を行ったオブジェクトの OIID です。

文書空間 ID

実行環境制御ファイルで、Session セクションの DocSpaceId エントリに指定した値です。

ユーザ名

実行環境制御ファイルで、Session セクションの UserName エントリに指定した値です。

(6) コマンド実行ログの出力例

出力レベルに Error を指定した場合のコマンド実行ログの出力例を次に示します。セッションを確立するまでにエラーが発生した場合、セッションの確立・切断の情報は出力されません。また、オブジェクトを操作するときの情報は、操作が正常に終了した場合だけ出力されます。エラーが発生すると、オブジェクトを操作したときの情報は、エラー情報に置き換えられて出力されます。

```

2004/05/18 17:00:00 dbrexquery 0000021D CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user
2004/05/18 17:00:00 dbrexquery 0000021D EXECUTE SEARCH
2004/05/18 17:00:00 dbrexquery 0000021D GET RESULT
2004/05/18 17:00:00 dbrexquery 0000021D DISCONNECT
2004/05/18 17:01:00 dbrdelcntr 0000022E CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user
2004/05/18 17:01:00 dbrdelcntr 0000022E DELETE VTC dma:///...00001
2004/05/18 17:01:00 dbrdelcntr 0000022E DISCONNECT
2004/05/18 17:02:00 dbrexquery 0000023F CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user
2004/05/18 17:02:00 dbrexquery 0000023F EXECUTE SEARCH
2004/05/18 17:02:00 dbrexquery 0000023F GET RESULT
2004/05/18 17:02:00 dbrexquery 00000230 DISCONNECT
2004/05/18 17:03:00 dbrdeldata 00000240 CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user
2004/05/18 17:03:00 dbrdeldata 00000240 DELETE IP dma:///...00002
2004/05/18 17:03:00 dbrdeldata 00000240 DISCONNECT
2004/05/18 17:04:00 dbrexquery 00000251 CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user
2004/05/18 17:04:00 dbrexquery 00000251 EXECUTE SEARCH
2004/05/18 17:04:00 dbrexquery 00000251 GET RESULT
2004/05/18 17:04:00 dbrexquery 00000251 DISCONNECT
2004/05/18 17:05:00 dbrdelacl 00000262 CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user
2004/05/18 17:05:00 dbrdelacl 00000262 DELETE ACL dma:///...00003
2004/05/18 17:05:00 dbrdelacl 00000262 DISCONNECT
2004/05/18 17:06:00 dbrgetprop 00000273 CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user
2004/05/18 17:06:00 dbrgetprop 00000273 GET PROPERTIES IP dma:///...00004
2004/05/18 17:06:00 dbrgetprop 00000273 DISCONNECT
2004/05/18 17:07:00 dbrsetprop 00000284 CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user
2004/05/18 17:07:00 dbrsetprop 00000284 SET PROPERTIES IP dma:///...00004
2004/05/18 17:07:00 dbrsetprop 00000284 DISCONNECT
2004/05/18 17:08:00 dbrexquery 00000295 CONNECT 673d2be0-d1fd-11d0-ab59-08002be29e1d user

```

```
2004/05/18 17:08:00 dbrexquery 00000295 ERROR  
2004/05/18 17:08:00 dbrexquery 00000295 DISCONNECT
```

9.2 障害発生個所による対処

ここでは、障害が発生した場合に考えられる要因とその対処方法について説明します。

9.2.1 File Sharing サーバシステムでの障害

File Sharing サーバのマシンで障害が発生した場合に考えられる障害の要因と対処について説明します。

(1) 障害の要因

CPU 障害, メモリ障害, OS 障害などによって, File Sharing サーバがダウンするような場合があります。

(2) File Sharing サーバでの対処

File Sharing サーバは, データベースに格納されていないセッションおよびメモリ中のオブジェクトを破棄します。File Sharing クライアントへは, TPBroker から異常が通知されます。

なお, コミットされていない仕掛かり中のトランザクションの処理については, データベースシステムの機能に依存します。

(3) ユーザの対処

次のように対処してください。

1. 障害が発生しているサーバから出力されるメッセージなどを参照して, 障害を取り除いてください。
2. その後, File Sharing サーバを再起動してください。

9.2.2 データベースでの障害

データベースで障害が発生した場合に考えられる障害の要因と対処について説明します。

(1) 障害の要因

次の要因が考えられます。

- 媒体障害 (ディスク障害やジャーナル障害などの発生)
- システムの停止 (通信障害や異常終了によるシステムの停止)

(2) File Sharing サーバでの対処

File Sharing サーバは次のような処理を実行します。

- データベースに格納されていないオブジェクトの状態は維持します。
- トランザクションの状態は変更しません。

ただし, データベースシステム上のトランザクションの処理については, データベースシステムの機能に依存します。

(3) ユーザの対処

次のように対処してください。

1. File Sharing サーバを停止してください。

2. 障害が発生しているサーバから出力されるメッセージなどを参照して、障害を取り除いてください。
3. 障害が発生しているデータ格納媒体を復旧してください。
4. File Sharing サーバを再起動してください。

なお、File Sharing クライアントはトランザクションをロールバックするため、File Sharing クライアントでの処理は不要です。

9.2.3 ファイルシステムでの障害

File Sharing サーバのファイルシステムで障害が発生した場合に考えられる障害の要因と対処について説明します。

(1) 障害の要因

次の要因が考えられます。

- オブジェクトとファイルの不整合
- 媒体障害
- 空き容量不足

(2) File Sharing サーバでの対処

登録、削除、参照などのファイル操作に失敗します。

(3) ユーザの対処

障害が発生した場合は、次のように対処してください。

1. File Sharing サーバを停止してください。
2. 障害が発生しているサーバから出力されるメッセージなどを参照して、障害を取り除いてください。
3. 障害が発生しているデータ格納媒体を復旧してください。
4. File Sharing サーバを再起動してください。

なお、File Sharing クライアントはトランザクションをロールバックするため、File Sharing クライアントでの処理は不要です。

9.2.4 セッション障害

セッションに関して障害が発生した場合に考えられる障害の要因と対処について説明します。

(1) 障害の要因

通信障害、CORBA 層の障害、File Sharing クライアントの障害などによってセッションが切断される場合があります。

なお、CORBA 層で障害を検知できない場合は、DocumentSpace 構成定義ファイルの SessionTimeout エントリでタイムアウト時間の最大値を指定して、タイムアウトを発生させることもできます。SessionTimeout エントリの詳細は、「5.2.3 (3) DocumentSpace 構成定義ファイルの詳細」を参照してください。

(2) File Sharing サーバでの対処

File Sharing サーバは次のような処理を実行します。

- データベースに格納されていないセッションおよびメモリ中のオブジェクトを破棄します。
- コミットされていない仕掛かり中のトランザクションをロールバックします。

(3) ユーザの対処

次のように対処してください。

1. 障害が発生している File Sharing サーバから出力されるメッセージなどを参照して、障害を取り除いてください。File Sharing クライアントの障害の場合は、File Sharing クライアントの障害を取り除いてください。
2. セッションが切断された File Sharing クライアントから、再度ログインしてください。

9.2.5 定義情報の障害

定義情報に関して障害が発生した場合に考えられる障害の要因と対処について説明します。

(1) 障害の要因

定義情報の格納媒体の障害や定義内容に誤った定義がされている場合があります。

(2) File Sharing サーバでの対処

File Sharing サーバの起動に失敗します。「(3) ユーザの対処」を参照して、障害の要因を取り除いてください。

(3) ユーザの対処

次のように対処してください。

1. 障害が発生している File Sharing サーバから出力されるメッセージなどを参照して、障害を取り除いてください。
2. 定義情報の格納媒体に障害が発生している場合は、バックアップから定義情報を回復してください。
3. File Sharing サーバを再起動してください。

なお、定義されているクラス・プロパティとデータベースに作成されている表・列の定義が一致しているかどうかを確認する場合には、データベースの表・列の確認コマンド (EDMChkTbl) を使用できます。詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMChkTbl (データベースの表・列の確認)」を参照してください。

9.2.6 ログの障害

ログに関して障害が発生した場合に考えられる障害の要因と対処について説明します。

(1) 障害の要因

ログ情報が出力される媒体の障害が考えられます。

(2) File Sharing サーバでの対処

エラーメッセージを出力して、処理は継続します。

(3) ユーザの対処

次のように対処してください。

1. File Sharing サーバを停止してください。
2. 出力されているエラーメッセージなどを参照して、障害を取り除いてください。
3. File Sharing サーバを再起動してください。

9.2.7 File Sharing サーバでの障害

File Sharing サーバで障害が発生した場合に考えられる障害の要因と対処について説明します。

(1) 障害の要因

サーバ監視プロセスまたはサービスプロセスの異常終了が考えられます。

(2) File Sharing サーバでの対処

File Sharing サーバは次のような処理を実行します。

- サーバ監視プロセスが異常終了した場合

File Sharing サーバはすべてのプロセスを停止して、データベースに格納されていないセッションおよびメモリ中のオブジェクトを破棄します。File Sharing クライアントへは、TPBroker から異常が通知されます。

なお、コミットされていない仕掛かり中のトランザクションの処理については、データベースシステムの機能に依存します。

- サービスプロセスが異常終了した場合

File Sharing サーバはサービスプロセスを再起動します。

異常終了したサービスプロセスに接続していたすべての File Sharing クライアントに対しては、データベースに格納されていないオブジェクトを破棄して、TPBroker から異常が通知されます。

なお、コミットされていない仕掛かり中のトランザクションの処理については、データベースシステムの機能に依存します。

(3) ユーザの対処

次のように対処してください。

1. 出力されているエラーメッセージなどを参照して、障害を取り除いてください。
2. サーバ監視プロセスが異常終了した場合は、File Sharing サーバを再起動してください。

9.3 障害情報の取得

ここでは、File Sharing の運用中に障害が発生した場合に、障害内容を分析するために使用するトラブルシュート情報の取得方法について説明します。

File Sharing サーバの障害情報は、File Sharing サーバが提供するコマンド (EDMGetRas) によって取得できます。File Sharing クライアントの障害情報は、File Sharing クライアントが提供するコマンド (EDMGetRasCL) によって取得できます。

9.3.1 File Sharing サーバで発生した障害情報の取得

File Sharing の運用中に障害が発生した場合、障害の種類を切り分けたり障害の原因を究明したりするために、トレースなどのトラブルシュート情報を取得する必要があります。

File Sharing サーバで発生した障害に関する障害情報を取得するには、File Sharing サーバの障害情報取得コマンド (EDMGetRas) を使用できます。このコマンドを使用すると、必要なトラブルシュート情報を、指定したディレクトリに退避できます。

ここでは、File Sharing サーバの障害情報取得コマンド (EDMGetRas) を実行して取得できる情報の種類、構成および取得情報のカスタマイズ方法について説明します。

(1) 取得できる障害情報の種類

File Sharing サーバの障害情報取得コマンド (EDMGetRas) で取得できる障害情報について説明します。これらの情報のうち、どの情報を取得するかは、File Sharing サーバの障害情報取得コマンド (EDMGetRas) 実行時にオプションとして指定する収集種別によって指定できます。

なお、環境変数「DOCBROKERDIR」は、File Sharing サーバの実行環境ディレクトリを表す環境変数です。実行環境が一つの場合は、{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}*Server になります。複数実行環境の場合は、「3.12 複数の実行環境を構築する場合の設定」で示した手順で設定したディレクトリになります。

- 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ*%pool 下の全ファイルシステム保守情報を取得できます。
- 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ*%etc 下の全ファイルユーザ環境情報を取得できます。
- 環境変数「DOCBROKERDIR」で指定したディレクトリ*%tmp 下の全ファイルテンポラリファイルを取得できます。
- 環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」で指定したディレクトリ下の全ファイルトレースファイルを取得できます。

このディレクトリ下のファイルは、環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」が設定されている場合だけ取得できます。なお、この環境変数が設定されていない場合、トレースファイルは、{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}*Server*%pool 下に出力されています。

- 詳細エラーログファイル

File Sharing サーバと File Sharing クライアントが同じマシンにある場合、File Sharing クライアントが出力する詳細エラーログファイルを取得できます。

環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG_DIR」が設定されている場合だけ取得できます。

- OS 情報

次の情報を取得できます。

- ver コマンドの実行結果情報
- 環境変数「SystemRoot」で指定したディレクトリ%system32%drivers%etc%Hosts
- 環境情報
set コマンドによって出力される情報を取得できます。
- イベントログ (Application.log, System.log)
システムログおよびアプリケーションログを取得できます。
- TPBroker のトレース (環境変数「VBROKER_ADM」で指定したディレクトリ%.log 下の全ファイル)
TPBroker のトレース情報を取得できます。この情報は、TPBroker の環境変数「VBROKER_ADM」が設定されている場合だけ取得できます。なお、この環境変数が設定されていない場合、取得できません。
- File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini) の[Path]セクションで指定されたファイル
getrascustom.ini の[Path]セクションで指定されたファイルを取得できます。
詳細については、「5.2.12 File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)」を参照してください。
- File Sharing サーバの内部情報
File Sharing サーバの内部情報を取得できます。

(2) 障害情報が出力されるファイル

障害情報は、コマンド実行時にオプションとして指定した出力先ディレクトリ下に作成される、次のディレクトリに格納されます。

EDM_<コンピュータ名>_<YYYYMMDDhhmmss>ディレクトリ

また、EDMGetRas コマンド内で発行される OS コマンドの実行結果は、コマンド実行時にオプションとして指定した出力先ディレクトリ下に作成される、次のファイルに出力されます。

EDM_<コンピュータ名>_<YYYYMMDDhhmmss>.txt

ディレクトリ名およびファイル名の文字列の意味は次のとおりです。

<コンピュータ名>

コマンドを実行したコンピュータ名を表す文字列です。

<YYYYMMDDhhmmss>

コマンドを実行した時刻を表す文字列です。

YYYY：西暦年号（4 けた）、MM：月（2 けた）、DD：日（2 けた）、hh：時（2 けた）、mm：分（2 けた）、ss：秒（2 けた）で構成されます。

9.3.2 File Sharing クライアントで発生した障害情報の取得

File Sharing の運用中に障害が発生した場合、障害の種類を切り分けたり障害の原因を究明したりするために、トレースなどのトラブルシューティング情報を取得する必要があります。

File Sharing クライアントで発生した障害に関する障害情報を取得するには、File Sharing クライアントの障害情報取得コマンド (EDMGetRasCL) を使用できます。このコマンドを使用すると、必要なトラブルシューティング情報を指定したディレクトリに退避できます。

ここでは、File Sharing クライアントの障害情報取得コマンド (EDMGetRasCL) を実行して取得できる障害情報の種類、構成および取得情報のカスタマイズ方法について説明します。

(1) 取得できる障害情報の種類

File Sharing クライアントの障害情報取得コマンド (EDMGetRasCL) で取得できる障害情報について、次に示します。

なお、これらの情報のうち、どの情報を取得するかは、File Sharing クライアントの障害情報取得コマンド (EDMGetRasCL) 実行時にオプションとして指定する収集種別によって指定できます。

- **環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥spool 下の全ファイル**
 ファイル転送サービスの保守情報を取得できます。
 このディレクトリ下のファイルは、環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」が設定されている場合だけ取得できます。
- **環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥etc 下の全ファイル**
 ファイル転送サービスのユーザ環境情報を取得できます。
 このディレクトリ下のファイルは、環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」が設定されている場合だけ取得できます。
- **環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」で指定したディレクトリ¥tmp 下の全ファイル**
 ファイル転送サービスのテンポラリファイルを取得できます。
 このディレクトリ下のファイルは、環境変数「_HIEDMS_FTPDIR」が設定されている場合だけ取得できます。
- **クライアントおよびファイル転送サービスのトレースファイル**
 クライアントおよびファイル転送サービスのトレースファイルを取得できます。
 取得するトレースファイルは、次の順序で検索されます。
 1. 環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」に指定したディレクトリ¥client
 2. 環境変数「DOCBROKERDIR」に指定したディレクトリ¥spool¥client
 3. {File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥spool¥client
 4. カレントディレクトリ¥client

環境変数「_HIEDMS_TRACE_DIR」を設定していない場合は、File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini) に出力先を指定することをお勧めします。
- **詳細エラーログファイル**
 クライアントが出力する詳細エラーログファイルを取得できます。
 環境変数「DBR_DETAIL_ERRORLOG_DIR」が設定されている場合だけ取得できます。
- **OS 情報**
 次の情報を取得できます。
 - ver コマンドの実行結果情報
 - 環境変数「SystemRoot」で指定したディレクトリ¥system32¥drivers¥etc¥Hosts
- **環境情報**

set コマンドによって出力される情報を取得できます。

- イベントログ (Application.log, System.log)
システムログおよびアプリケーションログを取得できます。
- TPBroker のトレース (環境変数 [VBROKER_ADM] で指定したディレクトリ¥.¥log 下の全ファイル)
TPBroker のトレース情報を取得できます。この情報は、TPBroker の環境変数 [VBROKER_ADM] が設定されている場合だけ取得できます。なお、この環境変数が設定されていない場合、取得できません。
- File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini) の [Path] セクションで指定されたファイル
getrascustom.ini の [Path] セクションで指定されたファイルを取得できます。
詳細については、「5.3.8 File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル (getrascustom.ini)」を参照してください。
- FileSharing クライアントの内部情報
File Sharing クライアントの内部情報を取得できます。

(2) 障害情報が出力されるファイル

障害情報は、コマンド実行時にオプションとして指定した出力先ディレクトリ下に作成される、次のディレクトリに格納されます。

EDMCL_<コンピュータ名>_<YYYYMMDDhhmmss>ディレクトリ

また、EDMGetRasCL コマンド内で発行される OS コマンドの実行結果は、コマンド実行時にオプションとして指定した出力先ディレクトリ下に作成される、次のファイルに出力されます。

EDM_<コンピュータ名>_<YYYYMMDDhhmmss>.txt

ディレクトリ名およびファイル名の文字列の意味は次のとおりです。

<コンピュータ名>

コマンドを実行したコンピュータ名を表す文字列です。

<YYYYMMDDhhmmss>

コマンドを実行した時刻を表す文字列です。

YYYY：西暦年号 (4 けた)、MM：月 (2 けた)、DD：日 (2 けた)、hh：時 (2 けた)、mm：分 (2 けた)、ss：秒 (2 けた) で構成されます。

付録

付録 A ディレクトリ構成

File Sharing サーバおよび File Sharing クライアントのディレクトリ構成について説明します。

付録 A.1 File Sharing サーバのディレクトリ構成

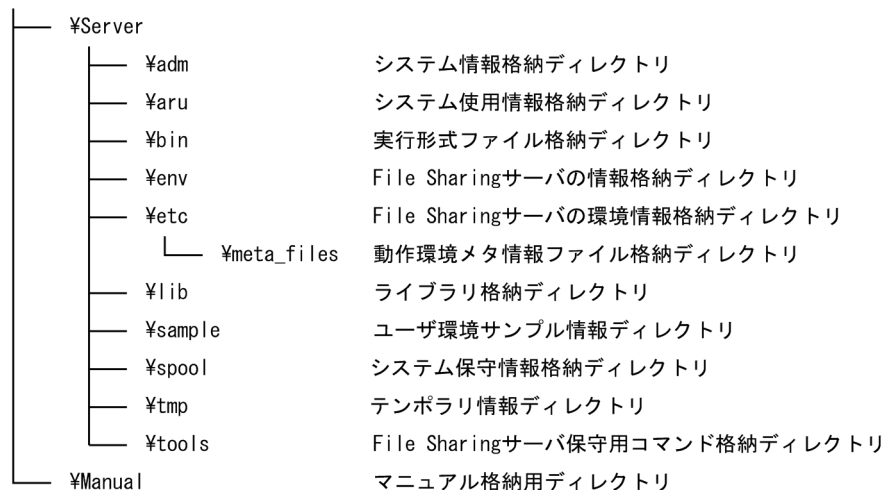
File Sharing サーバのディレクトリ構成を次の図に示します。

デフォルトのインストールディレクトリは、使用している OS によって次のように異なります。

- Windows Server 2008 R2, Windows Server 2008 x64, Windows Server 2012, Windows Server 2012 R2 の場合
{OS (Windows) のインストールドライブ}:¥Program Files(x86)¥Hitachi¥Collaboration¥filesharing
- そのほかの OS (Windows) を使用している場合
{OS (Windows) のインストールドライブ}:¥Program Files¥Hitachi¥Collaboration¥filesharing

図 A-1 File Sharing サーバのディレクトリ構成

File Sharingサーバのインストールディレクトリ



次に、各ディレクトリについて説明します。

システム情報格納ディレクトリ

システム情報を格納するディレクトリです。デフォルトの環境情報ファイルが格納されます。

システム使用情報格納ディレクトリ

システムで使用する情報が格納されるディレクトリです。

実行形式ファイル格納ディレクトリ

運用コマンドや実行形式のファイルを格納するディレクトリです。

File Sharing サーバの情報格納ディレクトリ

File Sharing サーバの動作環境に関する情報を格納するディレクトリです。

File Sharing サーバの環境情報格納ディレクトリ

動作環境メタ情報ファイル、および DocumentSpace 構成定義ファイルなどのユーザが定義する環境定義ファイルを格納するディレクトリです。

File Sharing サーバ環境情報の格納ディレクトリに格納される各種ファイルを次の表に示します。

表 A-1 File Sharing サーバの環境情報格納ディレクトリのファイル一覧

種別	ファイル名	説明	変更の可否
環境定義ファイル	cfsauth.ini	ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル	○
	docaccess.ini	セキュリティ定義ファイル	○
	docspace.ini	DocumentSpace 構成定義ファイル	○
	edms.ini	オブジェクト定義ファイル	○
	getrascustom.ini	File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル	○
	netaccess.ini	ネットワークリソース情報ファイル	○
	process.ini	サービスプロセス定義ファイル	○
	slocalreg.ini	System Object INI ファイル	○
その他		File Sharing サーバの実行時に必要とするファイルおよびディレクトリ	×

(凡例)

- ：変更できます。
- ×：変更できません。

ライブラリ格納ディレクトリ

File Sharing サーバが使用するライブラリファイルを格納するディレクトリです。

ユーザ環境サンプル情報ディレクトリ

File Sharing サーバを動作させるための関連プログラムの設定に必要なサンプルを提供するディレクトリです。

システム保守情報格納ディレクトリ

ログ情報などのシステム保守情報を格納するディレクトリです。

File Sharing サーバの起動中は、このディレクトリ下を操作しないでください。File Sharing サーバが異常終了することがあります。

テンポラリ情報ディレクトリ

File Sharing サーバの稼働中の作業領域として動的に利用するディレクトリです。

サーバ保守用コマンド格納ディレクトリ

サーバ保守用コマンドを格納するディレクトリです。

マニュアル格納用ディレクトリ

マニュアルのデータを格納するディレクトリです。

付録 A.2 File Sharing クライアントのディレクトリ構成

File Sharing クライアントのディレクトリ構成を次の図に示します。

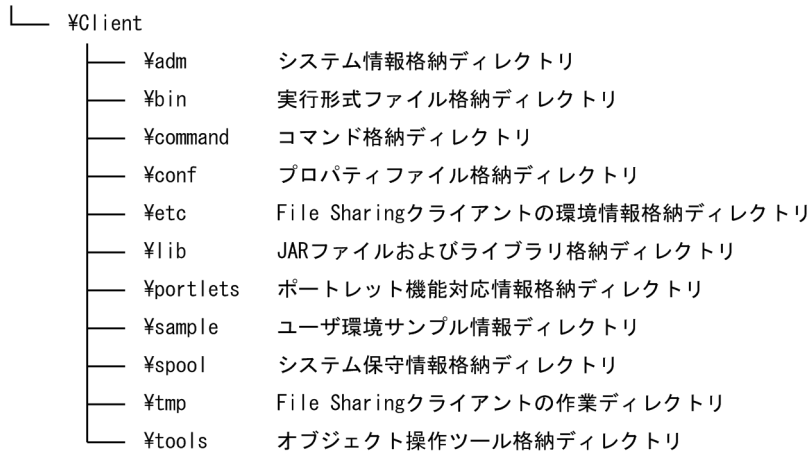
デフォルトのインストールディレクトリは、使用している OS によって次のように異なります。

- Windows Server 2008 R2, Windows Server 2008 x64, Windows Server 2012, Windows Server 2012 R2 の場合
 {OS (Windows) のインストールドライブ}:\Program Files(x86)\Hitachi\Collaboration\filesharing

- そのほかの OS (Windows) を使用している場合
 {OS (Windows) のインストールドライブ}:¥Program Files¥Hitachi¥Collaboration¥fileshearing

図 A-2 File Sharing クライアントのディレクトリ構成

File Sharingクライアントのインストールディレクトリ



次に、各ディレクトリについて説明します。

システム情報格納ディレクトリ

システム情報を格納するディレクトリです。デフォルトの環境情報ファイルが格納されます。

実行形式ファイル格納ディレクトリ

ファイル転送機能で使用するコマンドなどの実行形式のファイルを格納するディレクトリです。

コマンド格納ディレクトリ

File Sharing クライアント運用コマンドを格納するディレクトリです。

プロパティファイル格納ディレクトリ

プロパティファイルを格納するディレクトリです。プロパティファイルでは、Collaboration のシステムの中で File Sharing クライアントが動作するために必要な設定をします。

表 A-2 File Sharing クライアントのプロパティファイル格納ディレクトリのファイル一覧

種別	ファイル名	説明	変更の可否
プロパティファイル	hptl_clb_cfs.properties	File Sharing 固有の環境設定用プロパティファイル	○
	hptl_clb_cfs_ras.conf	File Sharing の RAS 収集用 conf ファイル	○

(凡例)

○：変更できます。

File Sharing クライアントの環境情報格納ディレクトリ

動作環境定義ファイルやレンディション定義ファイルなど、ユーザが定義する環境定義ファイルを格納するディレクトリです。

表 A-3 File Sharing クライアントの環境情報格納ディレクトリのファイル一覧

種別	ファイル名	説明	変更の可否
環境定義ファイル	ftpsv.ini	ファイル転送サービス環境定義ファイル	○

種別	ファイル名	説明	変更の可否
環境定義ファイル	mime.properties	レンディション定義ファイル	○
	conf.properties	動作環境定義ファイル	○
	getrascustom.ini	File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル	○
その他		File Sharing クライアントの実行時に必要とするファイルおよびディレクトリ	×

(凡例)

- ：変更できます。
- ×：変更できません。

JAR ファイルおよびライブラリ格納ディレクトリ

File Sharing クライアントが使用する JAR ファイルおよびライブラリファイルを格納するディレクトリです。

ポートレット機能対応情報格納ディレクトリ

ポートレット機能で使用する par ファイルを格納するディレクトリです。

ユーザ環境サンプル情報ディレクトリ

クラス定義情報ファイル、オブジェクト操作ツールの実行環境制御ファイルといったデータベース操作に必要な定義ファイルのサンプルなどを提供するディレクトリです。

システム保守情報格納ディレクトリ

ログ情報などのシステム保守情報を格納するディレクトリです。

File Sharing クライアントの起動中は、このディレクトリ下を操作しないでください。File Sharing クライアントが異常終了することがあります。

File Sharing クライアントの作業ディレクトリ

File Sharing クライアントの稼働中の作業領域として動的に利用するディレクトリです。

オブジェクト操作ツール格納ディレクトリ

オブジェクト操作ツールの格納先ディレクトリです。オブジェクト操作ツールのコマンドを格納します。

付録 B クラスタリングシステムでの運用

File Sharing サーバをクラスタリングシステムで運用すると、障害が発生した場合のシステムの可用性やシステムのパフォーマンスを高めることができます。ここでは、File Sharing サーバをクラスタリングシステムで運用する方法について説明します。

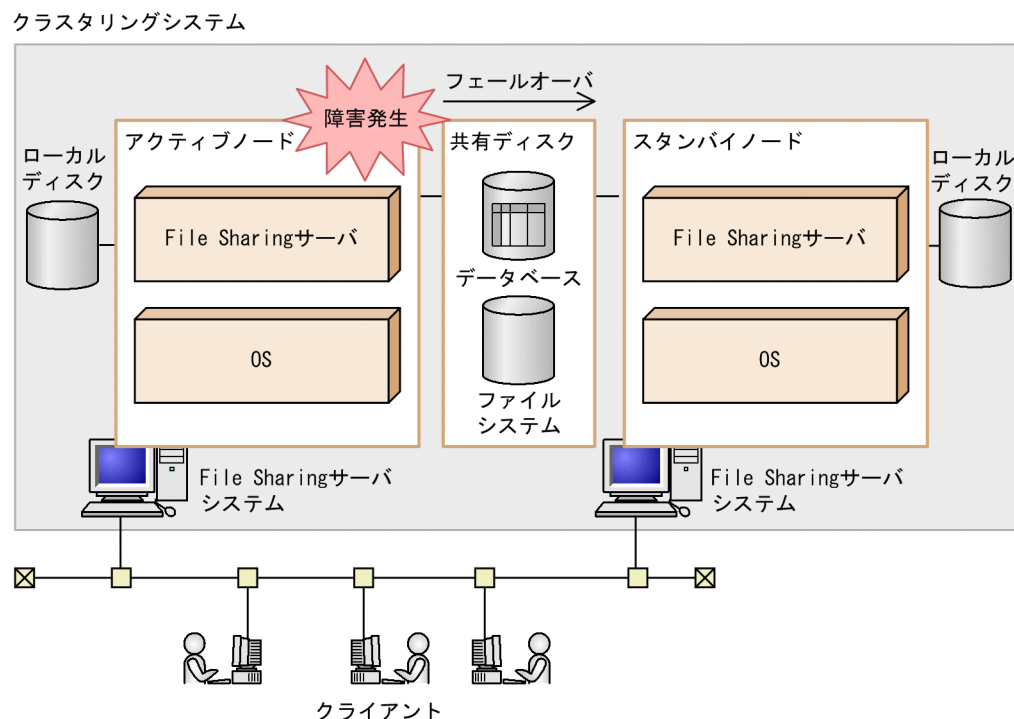
付録 B.1 Microsoft Cluster Server を使用したクラスタリングシステムでの運用

File Sharing サーバは、Microsoft Cluster Server を使用したクラスタリングシステムで運用できます。

クラスタリングシステムでは、システムにアクティブノードとスタンバイノードを用意しており、アクティブノードのサーバに障害が発生したときに、スタンバイノードのサーバに短時間で自動的に切り替えられます。これによって、File Sharing サーバの稼働率を向上させることができます。なお、Microsoft Cluster Server の詳細については、Microsoft Cluster Server に関するマニュアルを参照してください。また、File Sharing サーバの前提プログラムおよび関連プログラムをクラスタリングシステム構成で運用する場合の詳細については、各プログラムのマニュアルを参照してください。

Microsoft Cluster Server を使用して、File Sharing サーバをクラスタリングシステムで構成した例を、次の図に示します。

図 B-1 Microsoft Cluster Server を使用したクラスタリングシステム構成例



Microsoft Cluster Server を使用したクラスタリングシステム構成例の特徴を次に示します。

- 共有ディスク上に、HiRDB のシステムファイル、ディクショナリ、および RD エリアを設定します。File Sharing サーバが参照するデータベース、およびファイル実体を格納するファイルシステムは、共有ディスク上で運用します。

付録 B.2 クラスタリングシステムで運用するための環境設定

File Sharing サーバをクラスタリングシステムで運用するための環境設定について説明します。環境設定の手順は次のとおりです。なお、下記の作業に入る前に、Microsoft Cluster Server をインストールしておく必要があります。

- File Sharing サーバのインストールと環境設定
- Microsoft Cluster Server の環境設定

(1) File Sharing サーバのインストール

アクティブノードおよびスタンバイノードそれぞれのローカルディレクトリに、File Sharing サーバをインストールします。

File Sharing サーバのインストール方法については、「2.6 インストールとアンインストール」を参照してください。

(2) File Sharing サーバの環境設定

アクティブノードおよびスタンバイノードで File Sharing サーバの環境を設定します。設定する項目を次に示します。なお、各項目の設定方法については、「3. File Sharing サーバシステムの設定」、および「5. File Sharing の環境設定で必要なファイル」を参照してください。

- 文書空間の定義
- アクセス制御機能を使用するための設定
- File Sharing サーバでデータベースシステムを使用するための設定
- 環境変数の設定

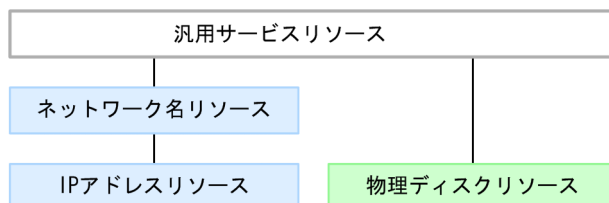
環境変数「OSAGENT_PORT」には、TPBroker が提供する osagent のポート番号を指定します。スタンバイノードの環境変数「OSAGENT_PORT」には、アクティブノードの環境変数「OSAGENT_PORT」と同じ値を指定してください。

(3) Microsoft Cluster Server の環境設定

Microsoft Cluster Server のクラスタドミニストレータで、グループおよびリソースを設定します。作成した複数のリソースのうち、あるリソースがオンラインになるために、ほかのリソースがオンラインになっている必要がある場合、リソース間に依存関係を設定する必要があります。

汎用サービスリソースに対しては、次の図に示す依存関係を設定します。

図 B-2 リソース間の依存関係



クラスタドミニストレータでのグループおよびリソースの設定の手順を次に示します。

1. グループを定義します。

グループを定義する手順については、「(a) グループの定義」を参照してください。

2.物理ディスクリソースを作成します。

物理ディスクリソースを作成する手順については、「(b) 物理ディスクリソースの作成」を参照してください。

3.IP アドレスリソースを作成します。

IP アドレスリソースを作成する手順については、「(c) IP アドレスリソースの作成」を参照してください。

4.ネットワーク名リソースを作成します。

ネットワーク名リソースを作成する手順については、「(d) ネットワーク名リソースの作成」を参照してください。

5.File Sharing サーバの汎用サービスリソースを作成します。

File Sharing サーバの汎用サービスリソースを作成する手順については、「(e) File Sharing サーバの汎用サービスリソースの作成」を参照してください。

6.各リソースのプロパティを設定します。

各リソースのプロパティを設定する手順については、「(f) プロパティの設定」を参照してください。

(a) グループの定義

クラスタアドミニストレータで、グループを定義する手順を次に示します。

1.クラスタアドミニストレータの [ファイル] メニューの [新規作成] から [グループ] を選択します。

2.「名前」および「説明」を入力します。

「名前」および「説明」の設定例を次に示します。

設定例

- 「名前」：CollaborationFileSharing
- 「説明」：CollaborationFileSharing グループ

3.優先所有者を定義します。

グループのフェールバック許可を設定した場合、優先所有者に設定された順序でフェールバックされます。優先所有者を設定していない場合は、フェールバックされません。

例えば、node-A と node-B のうち、node-A を優先的に所有者にしたい場合は、node-A、node-B の順序で設定してください。

(b) 物理ディスクリソースの作成

物理ディスクリソースを作成します。すでに作成している場合は、「(a) グループの定義」で作成したグループに移動させてください。作成していない場合は、クラスタアドミニストレータで作成したあと、「(a) グループの定義」で作成したグループに移動させてください。

(c) IP アドレスリソースの作成

クラスタアドミニストレータで、IP アドレスリソースを作成する手順を次に示します。

1.クラスタアドミニストレータの [ファイル] メニューの [新規作成] から [リソース] を選択します。

2.「名前」、「説明」、「リソースの種類」、および「グループ」を設定します。

「名前」、「説明」、「リソースの種類」、および「グループ」の設定例を次に示します。

設定例

- 「名前」：CollaborationFileSharing_IP
- 「説明」：汎用サービスリソースと依存関係を設定する IP アドレスリソース

- 「リソースの種類」：IP アドレス
 - 「グループ」：CollaborationFileSharing
「(a) グループの定義」で作成したグループを設定します。
3. 「実行所有者」画面では、デフォルトで実行できる所有者にすべてのノードがすでに設定されているので、そのまま次に進みます。
 4. 「依存関係」画面では、何も設定する必要はないので、そのまま次に進みます。
 5. 「TCP/IP アドレスパラメタ」画面で、「ネットワーク」、「アドレス」、および「サブネットマスク」を設定します。
「ネットワーク」、「アドレス」、および「サブネットマスク」の設定例を次に示します。

設定例

- 「ネットワーク」：Service_Network
IP アドレスをバインドするネットワークカードを設定します。
なお、「ネットワーク」には、インストール時に設定した名称が、プルダウンメニューに表示されません。
- 「アドレス」：192.0.0.2
アクティブノードおよびスタンバイノードで共通して使用する仮想 IP アドレスを設定します。
- 「サブネットマスク」：255.255.255.0
サブネットに使用するサブネットマスクを設定します。

(d) ネットワーク名リソースの作成

クラスタアドミニストレータで、ネットワーク名リソースを作成する手順を次に示します。

1. クラスタアドミニストレータの [ファイル] メニューの [新規作成] から [リソース] を選択します。
2. 「名前」、「説明」、「リソースの種類」、および「グループ」を設定します。
「名前」、「説明」、「リソースの種類」、および「グループ」の設定例を次に示します。

設定例

- 「名前」：CollaborationFileSharing_Network
 - 「説明」：汎用サービスリソースと依存関係を設定するネットワーク名リソース
 - 「リソースの種類」：ネットワーク名
 - 「グループ」：CollaborationFileSharing
「(a) グループの定義」で作成したグループを設定します。
3. 「実行所有者」画面では、デフォルトで実行できる所有者にすべてのノードがすでに設定されているので、そのまま次に進みます。
 4. 「依存関係」画面で、ネットワーク名リソースがオンラインになる前に、オンラインにする必要があるリソースを登録します。
ここでは、IP アドレスリソースを登録する必要があります。
 5. 「ネットワーク名パラメタ」画面で、クライアントから接続する名前を設定します。この名前は、クライアントから通常のサーバ名と同じようにアクセスできます。
「名前」の設定例を次に示します。

設定例

- 「名前」：CLUSTER

(e) File Sharing サーバの汎用サービスリソースの作成

クラスタアドミニストレータで、File Sharing サーバの汎用サービスリソースを作成する手順を次に示します。

1. クラスタアドミニストレータの [ファイル] メニューの [新規作成] から [リソース] を選択します。
2. 「名前」, 「説明」, 「リソースの種類」, および「グループ」を設定します。
「名前」, 「説明」, 「リソースの種類」, および「グループ」の設定例を次に示します。

設定例

- 「名前」: CollaborationFileSharing リソース
 - 「説明」: CollaborationFileSharing
 - 「リソースの種類」: 汎用サービス
 - 「グループ」: CollaborationFileSharing
「(a) グループの定義」で作成したグループを入力します。
3. 「実行所有者」画面では、デフォルトで実行できる所有者にすべてのノードがすでに設定されているので、そのまま次に進みます。
 4. 「依存関係」画面で、File Sharing サーバの汎用サービスリソースがオンラインになる前に、オンラインにする必要があるリソースを登録します。
ここでは、次のリソースを登録する必要があります。
 - 物理ディスクリソース
 - IP アドレスリソース
 - ネットワーク名リソース
 5. 「汎用サービスパラメータ」画面で、「起動パラメータ」および「サービス名」を設定します。
「サービス名」の設定例を次に示します。

設定例

- 「起動パラメータ」: 空白
 - 「サービス名」: Collaboration - File Sharing Server
6. 「レジストリの複製」画面で、File Sharing サーバサービスのルートレジストリキーを設定します。
ここでは、「SOFTWARE\HITACHI\Collaboration - File Sharing Server」と設定します。

(f) プロパティの設定

プロパティでは、異常が発生した場合の処理方法および連続異常終了の監視方法を設定します。

異常が発生した場合の処理方法の設定

異常が発生した場合に、アクティブノードで再実行するか、すぐにスタンバイノードに処理を移すかの設定ができます。クラスタアドミニストレータで、File Sharing サーバの各リソースを選択して、[プロパティ] - [詳細設定] で設定します。すぐにスタンバイノードに処理を移すときは、「グループに適用する」チェックボックスをオンにして、「しきい値」を「0」にします。

連続異常終了の監視方法の設定

File Sharing サーバの連続異常終了の監視方法を、グループのリソースのプロパティで設定できます。クラスタアドミニストレータで、CollaborationFileSharing グループのリソースを選択して、[プロパティ] - [詳細設定] で、「グループに適用する」チェックボックスをオンにして、「しきい値」および「期間」に適切な値を設定してください。

付録 B.3 クラスタリングシステムでの File Sharing サーバの起動と終了

クラスタリングシステムで運用する場合、File Sharing サーバの起動および終了は、Microsoft Cluster Server のクラスタアドミニストレータで実行してください。クラスタアドミニストレータでの起動と終了は、[Collaboration - File Sharing Server] サービスをオンラインにする、またはオフラインにすることで実行します。

なお、File Sharing サーバで提供するユティリティなどを使用した File Sharing サーバの起動および終了は、Microsoft Cluster Server の機能外の操作になります。

付録 C インストール時のトラブル

ここでは、File Sharing サーバのインストール中に発生するおそれがあるトラブルへの対処方法として、インストール中に表示されるメッセージとその対処方法について説明します。

保守員への連絡について

対処方法での「保守員に連絡してください」とは、購入時の契約に基づいて、システム管理者が弊社問い合わせ窓口へ連絡することを示します。

付録 C.1 媒体からのインストール時のトラブル

File Sharing サーバのインストーラからのインストール時に、インストールが続行できないエラーが発生した場合、インストーラはエラーダイアログを表示して、インストールを中断します。エラーダイアログに表示されるメッセージと対処方法を次に示します。

(1) メッセージの形式

メッセージに表示されるテキスト

パラメタの内容

パラメタの説明（パラメタのないメッセージでは記載していません）

対策

メッセージへの対処方法

(2) メッセージ一覧

%s1 ファイルのバックアップファイルの作成処理でエラーが発生しました。

ディレクトリ名:%s2

パラメタの内容

%s1：次のどちらかのファイル名が表示されます。

- slocalreg.ini
- smgrreg.ini

%s2：ディレクトリの絶対パス名が表示されます。

対策

保守員に連絡してください。

%s が起動しています。サービスを停止してインストールしてください。

パラメタの内容

%s：次のサービス名が表示されます。

- File Sharing Server

対策

File Sharing Server サービスを停止してください。

%s でエラーが発生しました。

パラメタの内容

%s：次の情報が表示されます。

- Collaboration - File Sharing Server の存在確認

対策

保守員に連絡してください。

%s のインストールに必要な空き領域がありません。

パラメタの内容

%s：HCCLib または VC++ランタイムライブラリのファイル名が表示されます。

対策

インストールに必要な空き領域を確保してください。

HCCLib のインストールディレクトリ'%s'が作成できませんでした。

パラメタの内容

%s：HCCLib のインストールディレクトリ名が表示されます。

対策

インストールディレクトリの書き込みが禁止になっています。書き込み禁止の原因を取り除いてからインストールを行ってください。

VC++ランタイムライブラリのインストールディレクトリ'%s'が作成できませんでした。

パラメタの内容

%s：VC++ランタイムライブラリのインストールディレクトリ名が表示されます。

対策

インストールディレクトリの書き込みが禁止になっています。書き込み禁止の原因を取り除いてからインストールを行ってください。

インストール環境が不正です。Collaboration - File Sharing Server をアンインストール後、再インストールを行ってください。

対策

File Sharing サーバをアンインストールしてから、再インストールしてください。

インストール先ディレクトリ%Server%etc 下の%s1 ファイルの編集処理でエラーが発生しました。

バックアップファイル名:%s2

パラメタの内容

%s1：次のどちらかのファイル名が表示されます。

- slocalreg.ini
- smgrreg.ini

%s2：%s1 ファイルのバックアップファイルの絶対パス名が表示されます。

対策

バックアップファイルから回復し、保守員に連絡してください。

インストール先のフォルダ名が 128 バイトを超えています。

対策

128 バイトを超えない値を指定してからインストールを行ってください。

インストールに必要な空き領域がありません。

対策

インストールに必要な空き領域を確保してください。

コード 9999 媒体不良の可能性があります。購入元にご連絡ください。

対策

購入元に連絡してください。

このプログラムのインストールには Administrators 権限を必要とします。

対策

Administrators 権限のあるユーザでインストールしてください。

このプログラムは VGA またはそれ以上の解像度を必要とします。

対策

画面の解像度が 640×480 以上の環境でインストールしてください。

このプログラムは Windows Server 2003 以降の OS を必要とします。

対策

Windows Server 2003 以降の OS でインストールしてください。

コピー元のファイル<%s>がオープンできませんでした。

パラメタの内容

%s : HCCLib または VC++ランタイムライブラリのファイル名が表示されます。

対策

媒体不良の可能性があります。保守員に連絡してください。

サービスの登録でエラーが発生しました。 %s

パラメタの内容

%s : サービスを登録する関数が返すエラーコードを、メッセージに変換した文字列が表示されます。

対策

メッセージを基にエラーを取り除いてからインストールを再実行してください。

既に DocumentBroker Server がインストールされているため、 Collaboration - File Sharing Server はインストールできません。

対策

ほかのシステム管理者 (Administrators) の権限を持つユーザ ID でログインしてインストールしてください。

既に新しいバージョン %s がインストールされているためインストールできません。

パラメタの内容

%s：バージョン番号が表示されます。

対策

現在インストールされている新しいバージョンをアンインストールしてください。

セットアップはインストールを実行するために必要な、ファイル<_PLABEL.DT2>を見つけることができません。

対策

_PLABEL.DT2 ファイルが存在するかどうかを確認してから、保守員に連絡してください。

操作に誤りがある可能性があります。HCD_INST.EXE よりインストールを行ってください。

対策

HCD_INST.EXE からインストールしてください。

バージョン表記%s が間違っています。

パラメタの内容

%s：取得したバージョン情報が表示されます。

対策

媒体不良の可能性があります。保守員に連絡してください。

ファイル<%s>のコピー中に特定できないエラーが発生しました。

パラメタの内容

%s：HCCLib または VC++ランタイムライブラリのファイル名が表示されます。

対策

保守員に連絡してください。

ファイル<%s1>の%s2 中にエラーが発生しました。

パラメタの内容

%s1：エラーになったファイルの絶対パス名が表示されます。

%s2：「オープン」「読み込み」「クローズ」のどれかが表示されます。

対策

%s1 に指定されているファイルの書き込みが禁止されています。書き込みが禁止となっている原因を取り除いてからインストールしてください。

ファイル<%s>をコピーできませんでした。

パラメタの内容

%s：HCCLib または VC++ランタイムライブラリのファイル名が表示されます。

対策

インストールディレクトリの書き込みが禁止になっています。書き込み禁止の原因を取り除いてからインストールを行ってください。

ファイルのコピーに必要なメモリが不足しています。

対策

不要なプログラムを停止してからインストールを行ってください。

付録 C.2 リモートインストール時のトラブル

リモートインストールでのインストール時に、インストールが中断した場合、インストーラは JP1/NETM/DM の終了コードを返します。

終了コード、エラーの原因および対処方法を次に示します。

終了コード	エラーの原因	対処方法
81	すでにインストールされている製品のインストール環境が不正です。	Collaboration - File Sharing Server をアンインストールしてから、再インストールしてください。
	_PLABEL.DT2 ファイルが見つかりません。	媒体に _PLABEL.DT2 ファイルが存在するか確認し、保守員に連絡してください。
83	画面の解像度が 640×480 より低いです。	画面の解像度が 640×480 以上の環境でインストールしてください。
	Windows Server 2003 以降の OS 以外でインストールしています。	Windows Server 2003 以降の OS でインストールしてください。
	Administrators 権限のないユーザでインストールしています。	Administrators 権限のあるユーザでインストールをしてください。
	インストールするバージョンが存在しないバージョンです。	媒体不良の可能性があります。保守員に連絡してください。
85	ファイルがコピーできませんでした。	保守員に連絡してください。
	ファイルのオープン、書き込み、クローズのどれかでエラーが発生しました。	ドライブ、ディレクトリまたはファイルの書き込みが禁止されている原因を取り除いてから、インストールしてください。
86	インストールに必要な空き領域がありません。	インストールに必要な空き領域を確保してください。
88	リモートインストールの対象となる製品が、リモートインストーラによって新規インストールが許されていないため、インストールできません。	リモートインストーラのシステム管理者に連絡してください。
8B	媒体不良の可能性があります。	購入元に連絡してください。
	Collaboration - File Sharing Server の存在確認でエラーが発生しました。	保守員に連絡してください。
8C	操作が誤っている可能性があります。	HCD_INST.EXE からインストールしてください。
	すでに新しいバージョンがインストールされているため、インストールできません。	製品をインストールするためには、現在インストールされている新しいバージョンの製品をアンインストールしてください。

終了コード	エラーの原因	対処方法
8C	インストール先フォルダ名の長さが、128 バイトを超えています。	インストール先フォルダ名の長さを 128 バイト以下にしてください。
95	コンポーネント情報の取得に失敗しました。	保守員に連絡してください。
9A	HNTRLib2 のインストール処理でエラーが発生した。	インストールに必要な空き領域を確保してください。

付録 D システム導入支援機能を使用しない場合の設定

ここでは、システム導入支援機能を使用しない場合に設定する項目および設定方法について説明します。

システム導入支援機能とは、ユーザ用 RD エリアの容量の見積もりおよび新規に文書空間を構築するための設定を支援する機能です。システム導入支援機能を使用すると、システム導入支援機能を使用しない場合に比べて、設定の手順を減らすことができます。システム導入支援機能を使用する場合の設定については、2章および3章を参照してください。

システム導入支援機能を使用しない場合、システム導入支援機能を使用する場合と異なる設定が必要です。システム導入支援機能を使用しない場合に、システム導入支援機能を使用する場合と異なる設定をする項目と、参照先の対応を次の表に示します。

表 D-1 システム導入支援機能を使用しない場合と使用する場合の参照先の対応

項目	システム導入支援機能を使用しない場合の参照先	システム導入支援機能を使用する場合の参照先
ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり	付録 D.1	2.4.2
HiRDB の環境設定	付録 D.2	3.7.2
データベースサーバを使用するための File Sharing サーバの設定	付録 D.3	3.9

システム導入支援機能を使用しない場合の設定について、次に説明します。

付録 D.1 ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり

システム導入支援機能を使用しない場合のユーザ用 RD エリアの容量の見積もりについて説明します。

(1) ユーザ用 RD エリアが使用するデータベースリソースの所要量

ここでは、ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるための目安として、File Sharing の表ごとに、各レコードのデータサイズ、および各表に格納するレコード数の見積もり方法を説明した一覧を示します。この一覧を参照して、どのように RD エリアの容量を見積もるかについては、「(2) ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり方法」で説明します。

ユーザ用 RD エリア分のデータベースリソースの所要量を次の表に示します。

表 D-2 ユーザ用 RD エリア分のデータベースリソースの所要量

表名	列数	データサイズ (バイト)	レコード数または見積もり方法
cfsClass_AssignableDrive	20	2,582 + 1	ベースパス情報の総数
cfsClass_Community	19	2,322 + 1	コミュニティ総数
cfsClass_File_CH	37	4,299 + 1×4 + 0	ファイル総数
cfsClass_File_DV	33	3,604 + 1×4	ファイル総数

表名	列数	データサイズ (バイト)	レコード数または見積もり方法
cfsClass_Folder	36	3,995 + 1×4 + 0	フォルダ総数
cfsClass_Group	18	2,066 + 1	グループルートフォルダの総数
cfsClass_Parameter	13	1,548	パラメタ定義数
cfsClass_Personal	18	2,066 + 1	個人フォルダを利用するユーザの総数
cfsClass_Quota	14	1,546 + 1	最大許容サイズを設定する場合： 最大許容サイズ情報の総数 最大許容サイズを設定しない場合： 0
dmaClass_DCRelationship	4	172	フォルダ総数+ファイル総数- (個人ルートフォルダの総数+コミュニティルートフォルダの総数+グループルートフォルダの総数)
dmaClass_VerDescription	6	180	ファイル総数
dmaClass_VersionSeries	11	656	ファイル総数
edmClass_ACL	6	84+263× (m + n) 上限値：33,748 下限値：84	ほかのユーザに参照権を設定する個人フォルダのファイル数+コミュニティルートフォルダの総数×2+グループルートフォルダの総数
edmClass_BindRelationship	2	68	個人ルートフォルダの総数×2+個人フォルダで管理するフォルダの総数×2+個人フォルダで管理するファイルの総数×4+コミュニティフォルダで管理するフォルダの総数+コミュニティフォルダで管理するファイルの総数×2+グループルートフォルダの総数×2+グループフォルダで管理するフォルダの総数×2+グループフォルダで管理するファイルの総数×4
edmClass_ContentReference	8	1,112	ファイル総数
edmClass_OIID	3	20	実行環境の数
edmClass_PublicACL	14	344 + 780 + 263× (m + n) + 1 上限値：35,824 下限値：2,148	個人ルートフォルダの総数+個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数+コミュニティルートフォルダの総数+グループルートフォルダの総数×3+グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数
EDMS_META_dmaclass	5	527	1,800
EDMS_META_dmaprop	5	527	3,200
EDMS_META_dmaproto	5	527	500
EDMS_META_dsclass	5	527	1,566
EDMS_META_dsprop	5	527	1,500

表名	列数	データサイズ (バイト)	レコード数または見積り方法
EDMS_META_dsqop	5	527	1,500
EDMS_META_edmclass	5	527	1,517
EDMS_META_edmnmclass	5	527	108
EDMS_META_edmnmprop	5	527	235
EDMS_META_edmprop	5	527	3,505
EDMS_META_edmqop	5	527	600
EDMS_META_edms	5	527	969
EDMS_META_edmsys	5	527	100
EDMS_META_edmsysclass	5	527	400
EDMS_META_edmsysprop	5	527	200
EDMS_META_ssysobj	5	527	50
EDMS_METAINI	3	158	2,431
EDMS_METAMETA	3	33	1
EDMSMETAREGENVID	6	558	実行環境の数

(凡例)

l :

- 文書空間の文字コード種別が UTF-8 の場合は 1,024 です。
- 文書空間の文字コード種別が Shift-JIS の場合は 512 です。

m :

上限値は 64 です。

- 個人フォルダの場合は、参照権を設定するユーザ数の平均です。
- コミュニティフォルダの場合は、更新権または作成／削除権を設定する役割数の全体の平均です。
- グループフォルダの場合は、参照権、作成権、更新権または削除権を設定する組織数とユーザ数の平均です。

n :

上限値は 64 です。

- 個人フォルダの場合は 1 です。
- コミュニティフォルダの場合は、アクセス権変更権を設定する役割数の全体の平均です。
- グループフォルダの場合は、アクセス権変更権を設定する組織数とユーザ数の平均と、グループフォルダの運用者数の平均の和です。

o :

- 文書空間の文字コード種別が UTF-8 の場合は 10,304 です。
- 文書空間の文字コード種別が Shift-JIS の場合は 5,152 です。

(2) ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり方法

ここでは、ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるための方法について説明します。ここで算出した値を基にして、実際に使用するディスク占有量を算出してください。ディスク占有量の算出方法については、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照してください。

ユーザ用 RD エリアの容量を見積もるためには、あらかじめ File Sharing の運用方法について検討しておく必要があります。

次のことを検討してください。

- **【ファイル共有】ポートレットで使用する言語**

【ファイル共有】ポートレットで日本語および英語だけを使用する運用か、日本語および英語以外の言語も使用する運用かを検討してください。

【ファイル共有】ポートレットで日本語および英語だけを使用する運用の場合、文書空間の文字コード種別は UTF-8（推奨）または Shift-JIS になります。また、日本語および英語以外の言語も使用する運用の場合、文書空間の文字コード種別は UTF-8 になります。

- **ルートフォルダ単位に使用できるサイズを制限するかどうか**

ルートフォルダ単位に使用できるサイズ（最大許容サイズ）を制限するかどうかは、運用の考え方によって決めてください。

- **管理するファイル、フォルダおよび情報の数**

次の項目について、それぞれ検討してください。

- ユーザ総数（個人ルートフォルダの総数）
- 個人フォルダで管理するファイルの総数
- 個人フォルダで管理するフォルダの総数
- 個人フォルダで管理するほかのユーザに参照権を設定するファイルの総数
- 個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数
- コミュニティ総数（コミュニティルートフォルダの総数）
- コミュニティフォルダで管理するファイルの総数
- コミュニティフォルダで管理するフォルダの総数
- グループルートフォルダの総数
- グループフォルダで管理するファイルの総数
- グループフォルダで管理するフォルダの総数
- グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数
- ベースパス情報（ファイル実体の格納先パス情報）の設定数
- 最大許容サイズ情報の設定数（最大許容サイズを設定する運用の場合）

- **複数の実行環境を配置したシステムにするかどうか**

複数の実行環境を配置したシステムにするかどうかは、運用の考え方によって決めてください。

これらの検討結果と「(1) ユーザ用 RD エリアが使用するデータベースリソースの所要量」の表 D-2 の内容を参考にして、値を算出してください。

(a) 各表に格納するレコードの総数

表 D-2 のデータサイズおよびレコード数の見積もり方法を参考にして、File Sharing が管理するフォルダとファイルの数などから、各表に格納するレコードの総数を算出してください。

(b) 各表に定義する列の総数

表 D-2 に示す列数をそのまま使用して算出してください。

(c) 各列のデータサイズ

表 D-2 に示すデータサイズをそのまま使用して算出してください。

(d) インデクス

オブジェクトのプロパティに定義されるインデクスの算出については、データベース定義文出力コマンド (EDMCrtSql) によって出力されるデータベース定義文を参考にしてください。

なお、表 D-2 に示す EDMS_META_ で始まる名称の表には、次に示す複数列インデクスが一つ定義されません。

- UNIQUE 指定あり
- キー長 (136)

表 D-2 に示す EDMSMETAREGENVID の表には、次に示す単一列インデクスが一つ定義されます。

- UNIQUE 指定あり
- キー長 (2)

これを考慮してインデクスを算出してください。

(3) ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり例

ここでは、ユーザ用 RD エリア容量の見積もり例について説明します。

見積もり例では、次の値を前提とします。なお、この例は、最大許容サイズを設定する場合の例です。

表 D-3 ユーザ用 RD エリアの容量の見積もりの前提

項目	前提とする値
文書空間の文字コード種別	UTF-8
ファイルの総数	192,200
フォルダの総数	38,440
個人ルートフォルダの総数 (ユーザ総数)	1,000
個人フォルダで管理するファイルの総数	100,000
個人フォルダで管理するフォルダの総数	13,400
個人フォルダで管理するほかのユーザに参照権を設定するファイルの総数	500
個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数	1,000

項目	前提とする値
コミュニティルートフォルダの総数（コミュニティ総数）	200
コミュニティフォルダで管理するファイルの総数	46,100
コミュニティフォルダで管理するフォルダの総数	12,600
グループルートフォルダの総数	40
グループフォルダで管理するファイルの総数	46,100
グループフォルダで管理するフォルダの総数	12,440
グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数	240
ベースパス情報の設定数	3
最大許容サイズ情報の設定数（最大許容サイズを設定する運用の場合）	3
パラメタ管理数	1

なお、ユーザ用 RD エリアは、ユーザ表用 RD エリアとユーザインデクス用 RD エリアから構成されます。ここでは、ユーザ表用 RD エリアに格納する、クラスに対応する表と File Sharing のメタ情報に対応する表の容量を算出します。それぞれの表のインデクスの容量については、算出した表の容量を基に、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照して算出してください。

(a) クラスに対応する表の容量の算出

クラスに対応する表の容量は、File Sharing で管理・共有するファイル数や使用するフォルダ数などによって決まります。また、アクセス権の設定方法によって、必要な容量は異なります。

クラスに対応する表には、次の情報を格納します。

- ファイルの属性情報
- フォルダの属性情報
- フォルダとファイルまたはフォルダを関連づける情報
- コミュニティ情報
- 個人情報
- グループ情報
- アクセス制御情報
- ベースパス情報
- 最大許容サイズ情報（最大許容サイズを設定する運用の場合）
- パラメタ情報
- そのほかの情報（実行環境の情報）

次に、それぞれの情報を格納するために必要な容量を、前提とする値に従って算出していきます。

ファイルの属性情報を格納するために必要な容量の算出

ファイルの総数（192,200 個）を基に、ファイルの属性情報を格納するための表に必要な容量を算出します。ファイルの属性情報は、次の表に格納されます。

- cfsClass_File_CH
- cfsClass_File_DV
- dmaClass_VerDescription
- dmaClass_VersionSeries
- edmClass_ContentReference

算出例を次の表に示します。

表 D-4 ファイルの属性情報を格納するために必要な容量の算出例

表名	見積もり方法	見積もり式	容量 (バイト)
cfsClass_File_CH	データサイズ×総ファイル数	18,699 バイト× 192,200	3,593,947,800
cfsClass_File_DV		7,700 バイト× 192,200	1,479,940,000
dmaClass_VerDescription		180 バイト×192,200	34,596,000
dmaClass_VersionSeries		656 バイト×192,200	126,083,200
edmClass_ContentReference		1,112 バイト× 192,200	213,726,400

合計は、5,448,293,400 バイト (約 5,196MB) になります。これが、ファイルの属性情報を格納するために必要な容量です。

フォルダの属性情報, およびフォルダとファイルまたはフォルダを関連づける情報を格納するために必要な容量の算出

フォルダの総数 (38,440 個) を基に、フォルダの属性情報を格納するための表に必要な容量を算出します。フォルダの属性情報は、表 cfsClass_Folder に格納されます。

また、フォルダには、そのフォルダで管理するファイルまたはフォルダとの関連づけについての情報を格納するための容量が必要です。関連づけについての情報は、表 dmaClass_DCRelationship に格納されます。この情報は、関連づけの対象になるファイルまたはフォルダの数だけ必要です。このため、ファイルとフォルダの総数から、ルートフォルダである個人ルートフォルダ数、コミュニティルートフォルダ数、およびグループルートフォルダ数を引いた数だけ必要です。

算出例を次の表に示します。

表 D-5 フォルダの属性情報, およびフォルダとファイルまたはフォルダを関連づける情報を格納するために必要な容量の算出例

表名	見積もり方法	見積もり式	容量 (バイト)
cfsClass_Folder	データサイズ×フォルダの総数	18,395 バイト× 38,440	707,103,800
dmaClass_DCRelationship	データサイズ×(フォルダの総数+ファイル総数-(個人ルートフォルダの総数+コミュニティルートフォルダの総数+グループルートフォルダの総数))	172 バイト× (38,440+192,200- (1,000+200+40))	39,456,800

合計は、746,560,600 バイト（約 712MB）になります。これが、フォルダの属性情報、およびフォルダとファイルまたはフォルダを関連づける情報を格納するために必要な容量です。

コミュニティ情報、個人情報、およびグループ情報を格納するために必要な容量の算出

- コミュニティ総数（200 個）を基に、コミュニティ情報を格納するための表に必要な容量を算出します。コミュニティ情報は、表 cfsClass_Community に格納されます。
- 個人フォルダを利用するユーザの総数（1,000 人）を基に、個人情報を格納するための各表に必要な容量を算出します。個人情報は、表 cfsClass_Personal に格納されます。
- グループルートフォルダの総数（40 個）を基に、グループ情報を格納するための表に必要な容量を算出します。グループ情報は、表 cfsClass_Group に格納されます。

算出例を次の表に示します。

表 D-6 コミュニティ情報、個人情報、およびグループ情報を格納するために必要な容量の算出例

表名	見積もり方法	見積もり式	容量（バイト）
cfsClass_Community	データサイズ×コミュニティ総数	3,346 バイト×200	669,200
cfsClass_Personal	データサイズ×ユーザ総数	3,090 バイト×1,000	3,090,000
cfsClass_Group	データサイズ×グループフォルダの総数	3,090 バイト×40	123,600

合計は、3,882,800 バイト（約 3.7MB）になります。これが、コミュニティ情報、個人情報、およびグループ情報を格納するために必要な容量です。

アクセス制御情報を格納するために必要な容量の算出

File Sharing では、ファイルまたはフォルダに対するアクセス権を次の単位で設定できます。

- 個人フォルダ単位
- コミュニティルートフォルダおよびワークスペースルートフォルダ単位
- グループフォルダ単位

これらのアクセス制御情報は、表 edmClass_ACL、表 edmClass_PublicACL および表 edmClass_BindRelationship を基に作成した表に格納されます。

これらの表の容量を算出するためには、まず算出式の m と n の値を決めます。m と n は、個人フォルダ、コミュニティフォルダ、およびグループフォルダで分けて考える必要があります。

個人フォルダ

m は参照権を設定するユーザ数です。ここでは、16 とします。n は 1（固定）です。

これによって、個人フォルダのアクセス制御情報を格納する表 edmClass_ACL のデータサイズは、 $84 + 263 \times (16 + 1) = 4,555$ バイトになります。表 edmClass_PublicACL のデータサイズは、 $344 + 780 + 263 \times (16 + 1) + 1,024 = 6,619$ バイトになります。

コミュニティフォルダ

m は更新権または作成／削除権を設定する役割数の全体の平均になります。ここでは、16 とします。n は、アクセス権変更権を設定する役割数の全体の平均になります。ここでは、2 とします。

これによって、コミュニティフォルダのアクセス制御情報を格納する表 edmClass_ACL のデータサイズは、 $84 + 263 \times (16 + 2) = 4,818$ バイトになります。表 edmClass_PublicACL のデータサイズは、 $344 + 780 + 263 \times (16 + 2) + 1,024 = 6,882$ バイトになります。

グループフォルダ

m は参照権、作成権、更新権または削除権を設定する組織またはユーザ数の平均になります。ここでは、16 とします。n は、アクセス権変更権を設定する組織数とユーザ数の平均と、グループフォルダの運用者数の平均の和になります。ここでは、5 とします。

これによって、グループフォルダのアクセス制御情報を格納する表 edmClass_ACL のデータサイズは、 $84+263 \times (16+5)=5,607$ バイトになります。表 edmClass_PublicACL のデータサイズは、 $344+780+263 \times (16+5)+1,024=7,671$ バイトになります。

算出例を次の表に示します。

表 D-7 アクセス制御情報を格納するために必要な容量の算出例

表名	フォルダの種類	見積もり方法	見積もり式	容量 (バイト)
edmClass_ACL	個人フォルダ	データサイズ×個人フォルダで管理するほかのユーザに参照権を設定するファイル数	4,555 バイト×500	2,277,500
	コミュニティフォルダ	データサイズ×コミュニティルートフォルダの総数	4,818 バイト×200	963,600
	グループフォルダ	データサイズ×グループルートフォルダの総数	5,607 バイト×40	224,280
edmClass_PublicACL	個人フォルダ	データサイズ×(個人ルートフォルダの総数+個人フォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数)	6,619 バイト×(1,000+1,000)	13,238,000
	コミュニティフォルダ	データサイズ×コミュニティルートフォルダの総数	6,882 バイト×200	1,376,400
	グループフォルダ	データサイズ×(グループルートフォルダの総数×3+グループフォルダで管理する親フォルダのアクセス権を引き継がないフォルダの総数)	7,671 バイト×(40×3+240)	2,761,560
edmClass_BindRelationship	—	データサイズ×(個人ルートフォルダの総数×2+個人フォルダで管理するフォルダの総数×2+個人フォルダで管理するファイルの総数×4+コミュニティフォルダで管理するフォルダの総数+コミュニティフォルダで管理する	68 バイト×(1,000×2+13,400×2+100,000×4+12,600+46,100×2+40×2+12,440×2+46,100×4)	50,521,280

表名	フォルダの種類	見積もり方法	見積もり式	容量 (バイト)
edmClass_BindRelationship	—	ファイルの総数×2+グループルートフォルダの総数×2+グループフォルダで管理するフォルダの総数×2+グループフォルダで管理するファイルの総数×4)	68 バイト×(1,000×2+13,400×2+100,000×4+12,600+46,100×2+40×2+12,440×2+46,100×4)	50,521,280

(凡例) —：区別はありません。

合計は、71,362,620 バイト (約 68MB) になります。これが、アクセス制御情報を格納するために必要な容量です。

ベースパス情報を格納するために必要な容量の算出

ベースパス情報の設定数 (3 個) を基に、ベースパス情報を格納するための表に必要な容量を算出します。ベースパス情報は、表 cfsClass_AssignableDrive に格納されます。

算出例を次の表に示します。

表 D-8 ベースパス情報を格納するために必要な容量の算出例

表名	見積もり方法	見積もり式	容量 (バイト)
cfsClass_AssignableDrive	データサイズ×ベースパス情報の設定数	3,606 バイト×3	10,818

最大許容サイズ情報を格納するために必要な容量の算出例 (最大許容サイズを設定する運用の場合)

最大許容サイズ情報の設定数 (3 個) を基に、最大許容サイズ情報を格納するための表に必要な容量を算出します。最大許容サイズ情報は、表 cfsClass_Quota に格納されます。

算出例を次の表に示します。

表 D-9 最大許容サイズ情報を格納するために必要な容量の算出例

表名	見積もり方法	見積もり式	容量 (バイト)
cfsClass_Quota	データサイズ×最大許容サイズ情報の設定数	2,570 バイト×3	7,710

パラメタ情報を格納するために必要な容量の算出

パラメタ情報を格納するための表に必要な容量を算出します。パラメタ情報は、表 cfsClass_Parameter に格納されます。

表 cfsClass_Parameter に必要な容量は 1,548 バイト固定です。

そのほかに必要な容量の算出

実行環境の情報を格納するための表に必要な容量を算出します。実行環境の情報は、表 edmClass_OIID に格納されます。

算出方法は、「データサイズ×実行環境の数」です。ここでは、実行環境が一つの場合を想定します。20 バイト×1 = 20 バイトが、そのほかに必要な容量になります。

情報ごとに算出した値を合計すると、クラスに対応する表の容量が算出できます。ここでは、6,270,119,516 バイトとなり、約 5,980MB の容量が必要となります。

(b) File Sharing のメタ情報に対応する表の容量の算出

File Sharing のメタ情報に対応する表の容量は、表 D-2 に示した表のうち、「EDMS_META_」で始まる表、および表 EDMSMETAREGENVID のデータサイズとレコード数から算出します。

File Sharing で利用する「EDMS_META_」で始まる表に必要な容量は、固定です。表 D-2 の表ごとに、データサイズにレコード数を掛けたものの総容量を算出します。これに、「558 バイト (表 EDMSMETAREGENVID のデータサイズ) × 実行環境数」を加えると、メタ情報に対応する表の容量を算出できます。ここでは、実行環境を 1 として、558 バイトを加えます。

メタ情報に対応する表の総容量は、9,738,939 バイトになり、約 9.2MB になります。

付録 D.2 HiRDB の環境設定

システム導入支援機能を使用しない場合の HiRDB の環境設定について説明します。

File Sharing を運用するために必要な RD エリアなどを作成します。HiRDB の環境設定については、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照してください。なお、ユーザ用 RD エリアについては、「付録 D.1 ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり」で算出した値に従って作成してください。

RD エリアを確保するには、HiRDB のデータベース構成変更ユーティリティ (pdmod) を使用します。コマンドの形式を次に示します。

形式

```
pdmod -a 制御文を記述したファイル名
```

次に、コマンドの引数に指定するファイル (制御文を記述したファイル) の記述例を示します。この記述例は、HiRDB/Single Server を使用する場合の例です。また、File Sharing が使用する RD エリアの容量を約 200MB と想定しています。この容量には、HiRDB のシステムで使用する RD エリアの容量は含みません。

この記述例を使用する場合は、実行環境に応じて次に示す箇所の変更が必要です。

- RD エリア名
- ページ長
- セグメントサイズ
- HiRDB ファイルシステム領域名
- HiRDB ファイル名
- HiRDB ファイル内セグメント数

記述例

```
create rdarea CFS_METATBL for user used by PUBLIC
  page 30720 characters
  storage control segment 20 pages
  file name "C:¥DB¥CFS_METATBL¥CFS_METATBL"
  initial 50 segments
;

create rdarea CFS_METAIDX for user used by PUBLIC
  page 16384 characters
  storage control segment 20 pages
  file name "C:¥DB¥CFS_METAIDX¥CFS_METAIDX"
  initial 50 segments
;
```

```

create rdarea CFS_SYSTBL for user used by PUBLIC
page 16384 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_SYSTBL1¥CFS_SYSTBL1"
initial 4000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_SYSTBL2¥CFS_SYSTBL2"
initial 4000 segments
;

create rdarea CFS_SYSIDX for user used by PUBLIC
page 8192 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_SYSIDX1¥CFS_SYSIDX1"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_SYSIDX2¥CFS_SYSIDX2"
initial 8000 segments
;

create rdarea CFS_USRTBL for user used by PUBLIC
page 8192 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_USRTBL1¥CFS_USRTBL1"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_USRTBL2¥CFS_USRTBL2"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_USRTBL3¥CFS_USRTBL3"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_USRTBL4¥CFS_USRTBL4"
initial 8000 segments
;

create rdarea CFS_USRIDX for user used by PUBLIC
page 8192 characters
storage control segment 20 pages
file name "C:¥DB¥CFS_USRIDX1¥CFS_USRIDX1"
initial 8000 segments
file name "C:¥DB¥CFS_USRIDX2¥CFS_USRIDX2"
initial 8000 segments
;

create rdarea CFS_DOC01 for LOB used by PUBLIC
file name "C:¥DB¥CFS_BLOB¥CFS_DOC01"
initial 10 segments
;

create rdarea CFS_SGML01 for LOB used by PUBLIC
file name "C:¥DB¥CFS_BLOB¥CFS_SGML01"
initial 10 segments
;

```

参考

例に示した制御文を記述した場合、次の表に示す構成で RD エリアが作成されます。

表 D-10 記述例で作成する RD エリアの構成

RD エリア名	ページ長 (バイト)	セグメン トサイズ	HiRDB ファイルシステム領 域名	HiRDB ファイル名	HiRDB ファ イル内セグ メント数
CFS_METATBL	30,720	20	C:¥DB¥CFS_METATBL	CFS_METATBL	50
CFS_METAIDX	16,384	20	C:¥DB¥CFS_METAIDX	CFS_METAIDX	50
CFS_SYSTBL	16,384	20	C:¥DB¥CFS_SYSTBL1	CFS_SYSTBL1	4,000
			C:¥DB¥CFS_SYSTBL2	CFS_SYSTBL2	4,000
CFS_SYSIDX	8,192	20	C:¥DB¥CFS_SYSIDX1	CFS_SYSIDX1	8,000
			C:¥DB¥CFS_SYSIDX2	CFS_SYSIDX2	8,000
CFS_USRTBL	8,192	20	C:¥DB¥CFS_USRTBL1	CFS_USRTBL1	8,000

RD エリア名	ページ長 (バイト)	セグメント サイズ	HiRDB ファイルシステム領 域名	HiRDB ファイル名	HiRDB ファ イル内セグ メント数
CFS_USRTBL	8,192	20	C:%DB%CFS_USRTBL2	CFS_USRTBL2	8,000
			C:%DB%CFS_USRTBL3	CFS_USRTBL3	8,000
			C:%DB%CFS_USRTBL4	CFS_USRTBL4	8,000
CFS_USRIDX	8,192	20	C:%DB%CFS_USRIDX1	CFS_USRIDX1	8,000
			C:%DB%CFS_USRIDX2	CFS_USRIDX2	8,000
CFS_DOC01	—	—	C:%DB%CFS_BLOB	CFS_DOC01	10
CFS_SGML01	—	—	C:%DB%CFS_BLOB	CFS_SGML01	10

(凡例) — : 指定しません。

この例では、それぞれの RD エリアが、次の用途で使用されることを想定しています。

- CFS_METATBL
メタ情報の表を格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、メタ情報の初期設定コマンド (EDMInitMeta) の `-r` オプションに指定します。
- CFS_USRTBL
ファイルやフォルダの属性情報などの表を格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、RD エリア定義情報ファイルの [TableArea] セクションの RD エリア名に定義します。
- CFS_METAIDX
メタ情報の表に定義するインデクスを格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、メタ情報の初期設定コマンド (EDMInitMeta) の `-i` オプションに指定します。
- CFS_USRIDX
ファイルやフォルダの属性情報などの表に定義するインデクスを格納します。ここで作成した RD エリアの名称を、RD エリア定義情報ファイルの [IndexArea] セクションの RD エリア名に定義します。
- CFS_DOC01
表 `dmaClass_ContentTransfer` のために確保する RD エリアです。実際に格納するデータはありません。ここで作成した RD エリアの名称を、RD エリア定義情報ファイルの [LobArea] セクションの `dmaClass_ContentTransfer` クラス用の RD エリア名として定義します。
- CFS_SGML01
表 `edmClass_SgmlInterpretation` のために確保する RD エリアです。実際に格納するデータはありません。ここで作成した RD エリアの名称を、RD エリア定義情報ファイルの [LobArea] セクションの `edmClass_ConceptualSgmlDocument` クラス用の RD エリア名として定義します。

メタ情報の初期設定コマンド (EDMInitMeta) については、「付録 D.3(2)(b) メタ情報の初期設定コマンド (EDMInitMeta) の実行」を参照してください。RD エリア定義情報ファイルについては、「5.2.8 RD エリア定義情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。

付録 D.3 データベースサーバを使用するための File Sharing サーバの設定

システム導入支援機能を使用しない場合の、データベースサーバを使用するための File Sharing サーバの設定について説明します。

(1) 設定に必要なファイル

システム導入支援機能を使用しない場合、データベースサーバを使用するための File Sharing サーバの設定に次のファイルを使用します。

- メタ情報ファイル
「5.2.6 メタ情報ファイル」を参照してください。
- 定義情報ファイル
「5.2.7 定義情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。
- RD エリア定義情報ファイル
「5.2.8 RD エリア定義情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。
- インデクス情報ファイル
「5.2.9 インデクス情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。

(2) データベースサーバを使用するための File Sharing サーバの設定方法

ここでは、データベースの初期設定方法について説明します。

(a) スキーマの定義

スキーマを定義するためには、HiRDB のデータベース定義ユーティリティ (pddef) を使用して、定義系 SQL の CREATE SCHEMA を実行します。スキーマを定義する場合は、スキーマ定義権限が必要です。データベース定義ユーティリティ (pddef) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。CREATE SCHEMA の文法については、マニュアル「HiRDB SQL リファレンス」を参照してください。

(b) メタ情報の初期設定コマンド (EDMInitMeta) の実行

メタ情報をデータベースに登録するために、メタ情報の初期設定コマンド (EDMInitMeta) を実行します。[ファイル共有] ポートレットで日本語および英語だけを使用する運用の場合は、文書空間の文字コード種別として UTF-8 (推奨) または Shift-JIS を指定してください。また、日本語および英語以外の言語も使用する運用の場合は、文書空間の文字コード種別として UTF-8 を指定してください。

コマンドの実行例を次に示します。

- 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合

```
EDMInitMeta -d
-f {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}%Server%etc%edms.ini
-r CFS_METATBL※1
-i CFS_METAIDX※1
-v Both
-A
-u DisplayName
-R
-C UTF-8
```

- 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合

```
EDMInitMeta -d
-f {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}%Server%etc%edms.ini
-r CFS_METATBL※1
-i CFS_METAIDX※2
-v Both
-A
-u DisplayName
```

```
-R
-C SJIS
```

注※1

「付録 D.2 HiRDB の環境設定」で作成したメタ情報の表を格納する RD エリア名を指定してください。

注※2

「付録 D.2 HiRDB の環境設定」で作成したメタ情報の表に定義するインデクスを格納する RD エリア名を指定してください。

入力ファイルとして指定するメタ情報ファイルについては「5.2.6 メタ情報ファイル」を参照してください。メタ情報の初期設定コマンドの詳細は、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMInitMeta (メタ情報の初期設定)」を参照してください。動作環境メタ情報ファイルは、この時点で作成されます。

(c) メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の実行

メタ情報に定義情報ファイルの内容を追加するために、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) を実行します。コマンドの実行例を次に示します。

- 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合

```
EDMAddMeta -g
            -f {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsMeta_UTF-8.ini
```

- 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を指定する場合

```
EDMAddMeta -g
            -f {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsMeta_SJIS.ini
```

入力ファイルとして指定する定義情報ファイル (CfsMeta_UTF-8.ini または CfsMeta_SJIS.ini) については、「5.2.7 定義情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。メタ情報の追加コマンドの詳細は、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMAddMeta (メタ情報の追加)」を参照してください。この時点で、動作環境メタ情報ファイルも更新されます。

(d) File Sharing 用データベース定義文の作成コマンド (EDMCrtSql) の実行

データベース定義文を出力するために、File Sharing 用データベース定義文の作成コマンド (EDMCrtSql) を実行します。なお、コマンドの -r オプションで指定する RD エリア定義情報ファイルは、ファイル内に記載されている RD エリアの名を、「付録 D.2 HiRDB の環境設定」で作成した RD エリアの名に編集しておく必要があります。

コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMCrtSql
-o {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env¥Server¥CfsSql.txt※
-t HIRDB
-c
-i {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsIndex.ini
-r {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥sample¥CfsRdarea.ini
-u NO
```

注※

任意のファイルパスを指定できます。

入力ファイルとして指定する RD エリア定義情報ファイル (CfsRdarea.ini) については「5.2.8 RD エリア定義情報ファイル」の「(2) システム導入支援機能を使用しない場合」を参照してください。File Sharing 用データベース定義文の作成コマンドの詳細は、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCrtSql (File Sharing 用データベース定義文の作成)」を参照してください。

(e) クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) の実行

クラス定義情報ファイルを出力するために、クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) を実行します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMCrtSimMeta
```

クラス定義情報ファイルは、接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で、次に示すディレクトリに出力されます。

```
{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files¥文書空間識別子.ini
```

クラス定義情報ファイル (文書空間識別子.ini) については、「5.3.1 クラス定義情報ファイル」を参照してください。クラス定義情報ファイルの作成コマンドの詳細は、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCrtSimMeta (クラス定義情報ファイルの作成)」を参照してください。

(f) データベース定義ユーティリティの実行

データベース定義文を入力ファイルとして、HiRDB でデータベース定義ユーティリティ (pddef) を実行して定義を追加します。

データベース定義ユーティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

```
pddef < {File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥env¥Server¥CfsSql.txt
```

データベース定義ユーティリティ (pddef) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

付録 E 文書空間の文字コード種別を Shift-JIS から UTF-8 に変更する手順

[ファイル共有] ポートレットで日本語および英語だけを使用する運用の場合に、運用の途中で日本語および英語以外の言語も使用する運用に変更したいときは、文書空間の文字コード種別を Shift-JIS から UTF-8 に変更します。ここでは、文書空間の文字コード種別を Shift-JIS から UTF-8 に変更するための手順について説明します。なお、この手順では、データベースのデータをアンロードするため、アンロードデータファイル用のディスク容量を準備しておく必要があります。

次の手順で実行します。

1. データベースのバックアップを取得します。データベースサーバで実行します。
2. データベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義を設定します。データベースサーバで実行します。
3. ベースパス情報のパスを確認します。File Sharing クライアントで実行します。
4. 必要に応じて、ベースパス情報のパスを変更します。
5. File Sharing サーバを構築したときにシステム導入支援機能を使用したかどうかを確認します。
6. 表データをアンロードします。データベースサーバで実行します。
7. データベースの文字コード種別を UTF-8 に変更します。データベースサーバで実行します。
8. データベースを再初期化します。データベースサーバで実行します。
9. データベースサーバでの環境設定をします。
10. File Sharing サーバで、データベースサーバを使用するための設定をします。
11. 文書空間を構築します。File Sharing サーバで実行します。
12. アンロードデータファイルの文字コードを変換します。File Sharing クライアントで実行します。
13. 表データをリロードします。データベースサーバで実行します。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) データベースのバックアップの取得

データベースサーバで、データベースのバックアップを取得します。データベースのバックアップの取得方法については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」を参照してください。

(2) データベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義の設定

HiRDB のシステム共通定義の `pd_indexlock_mode` オペランドに、インデクスキー値無排他を指定しているか (「NONE」を指定しているか、またはオペランドの指定を省略しているか) を確認します。インデクスキー値無排他を指定していない場合は、インデクスキー値無排他を指定してください。

システム共通定義を変更する方法については、マニュアル「HiRDB システム定義」を参照してください。

(3) ベースパス情報のパスの確認

ベースパス情報のパスが、印刷可能な ASCII コードで構成されているかどうかを確認します。

(a) ベースパス情報を取得する

File Sharing クライアントで、問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) を実行して、すべてのベースパス情報のプロパティを取得します。問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) の詳細については、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」の「dbrexquery (問い合わせの実行)」を参照してください。

コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、入力ファイルに問い合わせファイル (eql_1.txt) を指定し、出力ファイルに検索結果ファイル (search_1.txt) を指定して、ベースパス情報のプロパティを取得しています。

```
dbrexquery eql_1.txt > search_1.txt
```

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) で、引数に指定する内容を次に示します。

• 問い合わせファイル

問い合わせファイル (eql_1.txt) には、次の内容を記述してください。

記述例

```
SELECT "cfsProp_Type", "cfsProp_Path", "dmaProp_OIID"
FROM "cfsClass_AssignableDrive" ORDER BY "cfsProp_Type";
```

• 検索結果ファイル

検索結果ファイル (search_1.txt) には、ベースパス情報ごとにフォルダ種別 (cfsProp_Type)、ベースパス情報のパス (cfsProp_Path)、ベースパス情報の OIID (dmaProp_OIID) が [,] (コンマ) で区切られて出力されます。また、一つのベースパス情報につき、1 行で出力されます。

検索結果ファイル (search_1.txt) の出力例を次に示します。

出力例

```
2,'D:¥community','dma:///07a17522----0001D1'
2,'D:¥community','dma:///07a17522----0001D2'
2,'D:¥community','dma:///07a17522----0001D3'
:
8,'D:¥personal','dma:///07a17522----0001D4'
8,'D:¥personal','dma:///07a17522----0001D5'
8,'D:¥personal','dma:///07a17522----0001D6'
:
128,'D:¥group','dma:///07a17522----0001D7'
128,'D:¥group','dma:///07a17522----0001D8'
128,'D:¥group','dma:///07a17522----0001D9'
:
```

ファイルに出力される値について説明します。

表 E-1 検索結果ファイル (search_1.txt) に出力される値

項番	プロパティ	説明
1	cfsProp_Type	ベースパス情報のフォルダ種別を示す値です。 <ul style="list-style-type: none"> 8：フォルダ種別が個人フォルダであることを示します。 2：フォルダ種別がコミュニティフォルダであることを示します。 128：フォルダ種別がグループフォルダであることを示します。
2	cfsProp_Path	ベースパス情報のパスです。
3	dmaProp_OIID	ベースパス情報の OIID です。

(b) パスを構成する文字を確認する

検索結果ファイル (search_1.txt) に出力されたベースパス情報のパスが、次に示す印刷可能な ASCII コードだけで構成されているかどうかを確認します。

表 E-2 ベースパス情報のパスで使用できる印刷可能な ASCII コード

種別	文字
記号	半角スペース, !, ", #, \$, %, &, ', (,), *, +, ,, -, ., /, :, ;, <, =, >, ?, @, [, ¥, \ (半角のバックスラッシュ),], ^, _ , ` , {, , }, ~
数字	0~9
英字	A~Z, a~z

ベースパス情報のパスが表 E-2 に示す文字だけで構成されている場合は、ベースパス情報のパスを変更する必要はありません。「(6) 表データのアンロード」以降の手順へ進んでください。

ベースパス情報のパスに、表 E-2 に示す文字以外の文字が含まれている場合は、手順「(4) ベースパス情報のパスの変更」を実行して、ベースパス情報のパスが印刷可能な ASCII コードだけで構成されるように、パスを変更します。

(4) ベースパス情報のパスの変更

ベースパス情報のパスを変更するには、変更後のパス名を決定したあと、実際に次に示す項目を変更します。

- ファイル実体の格納先のディレクトリ名
- ベースパス情報のパス
- ルートフォルダに設定されているベースパス

これらの変更が終わったら、再度「(3) ベースパス情報のパスの確認」の手順を実行して、ベースパス情報のパスが印刷可能な ASCII コードで構成されていることを確認してください。

(a) 変更後のパス名を決定する

表 E-2 に示す文字以外の文字が含まれているパスを、表 E-2 に示す印刷可能な ASCII コードだけになるように、パス名を決定してください。

例えば、ベースパス情報のパスが「D:¥個人」の場合は、「個人」の部分を変更する必要があります。変更後のパス名「D:¥PERSONAL_FILE」のように、決定してください。

(b) ファイル実体の格納先のディレクトリ名を変更する

変更後のパス名が決定したら、ファイルサーバ上のファイル実体の格納先であるフォルダのフォルダ名を、決定したフォルダ名に変更します。エクスプローラやコマンドプロンプトを使用して実行してください。

(c) ベースパス情報のパスを変更する

File Sharing クライアントで、プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) を実行して、ベースパス情報のパスを変更します。プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) の詳細については、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」の「dbrsetprop (プロパティの設定)」を参照してください。

コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、OIID が「dma:///07a17522-...0001D1」のベースパス情報のパスに対して、プロパティ情報ファイル (prop_1.txt) で指定したパスを設定します。

```
dbrsetprop dma:///07a17522-...0001D1 prop_1.txt
```

プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) で、引数に指定する内容を次に示します。

- **ベースパス情報の OIID**

「(3)(a) ベースパス情報を取得する」で取得した検索結果ファイル (search_1.txt) に出力された OIID を指定します。

- **プロパティ情報ファイル**

プロパティ情報ファイル (prop_1.txt) には、次の内容を記述します。記述例の太字の個所に、変更後のパスを記述してください。

記述例

この例では、変更後のパス名として「D:¥PERSONAL_FILE」を指定しています。

```
[cfsClass AssignableDrive]
cfsProp_Path = 'D:¥PERSONAL_FILE'
```

「cfsProp_Path」の値に、「(a) 変更後のパス名を決定する」で決定した変更後のパス名を「|」（シングルクォーテーション）で囲んで記述します。

ベースパス情報のパスを変更したあと、各ルートフォルダに設定されているベースパスを変更します。変更するベースパス情報のフォルダ種別に応じて、次に示す個所を参照してください。

- 「(d) 個人ルートフォルダに設定されているベースパスを変更する」
- 「(e) ワークプレースルートフォルダに設定されているベースパスを変更する」
- 「(f) グループルートフォルダに設定されているベースパスを変更する」

(d) 個人ルートフォルダに設定されているベースパスを変更する

File Sharing クライアントで、ルートフォルダに設定されているベースパスを変更します。

まず、問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) を実行して、ベースパスを変更する個人情報の OIID を取得します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、入力ファイルに問い合わせファイル (eql_personal.txt) を指定し、出力ファイルに実行結果ファイル (oiid_personal.txt) を指定しています。

```
dbrexquery eql_personal.txt > oiid_personal.txt
```

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) で、引数に指定する内容を次に示します。

- **問い合わせファイル**

問い合わせファイル (eql_personal.txt) には、次の内容を記述します。記述例の太字の個所に、変更するベースパスを記述してください。

記述例

この例では、変更するベースパスとして「D:¥個人」を記述しています。

```
SELECT "dmaProp_OIID" FROM "cfsClass Personal"
WHERE "cfsProp_ContentBasePath" = 'D:¥個人';
```

- 実行結果ファイル

実行結果ファイル (oiid_personal.txt) には、問い合わせファイルで指定したベースパスが設定されている個人ルートフォルダの OIID が出力されます。

次に、プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) を実行して、ルートフォルダに設定されているベースパスを変更します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
dbrsetprop oiid_personal.txt prop_personal.txt
```

プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) で、引数に指定する内容を次に示します。

- 実行結果ファイル

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) の実行で取得した実行結果ファイル (oiid_personal.txt) を指定します。

- プロパティ情報ファイル

プロパティ情報ファイル (prop_personal.txt) の内容を次に示します。「cfsProp_Path」の値に、変更後のパスを「|」（シングルクォーテーション）で囲んで記述します。記述例の太字の個所に、変更後のパスを記述してください。また、実行結果ファイル (oiid_personal.txt) に出力された OIID の数分のセクションを記述してください。

記述例

この例では、変更後のパス名として「D:¥PERSONAL_FILE」を記述しています。

また、この例では、OIID 二つ分のセクションを記述しています。セクションは、OIID の数分だけ記述してください。

```
[cfsClass_Personal]          ...セクション1の始まり
cfsProp_ContentBathPath = 'D:¥PERSONAL_FILE' ...セクション1の終わり

[cfsClass_Personal]          ...セクション2の始まり
cfsProp_ContentBathPath= 'D:¥PERSONAL_FILE' ...セクション2の終わり
```

(e) ワークスペースルートフォルダに設定されているベースパスを変更する

File Sharing クライアントで、ルートフォルダに設定されているベースパスを変更します。

まず、問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) を実行して、ベースパスを変更するコミュニティ情報の OIID を取得します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、入力ファイルに問い合わせファイル (eqL_community.txt) を指定し、出力ファイルに実行結果ファイル (oiid_community.txt) を指定しています。

```
dbrexquery eqL_community.txt > oiid_community.txt
```

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) で、引数に指定する内容を次に示します。

- 問い合わせファイル

問い合わせファイル (eqL_community.txt) には、次の内容を記述します。記述例の太字の個所に、変更するベースパスを記述してください。

記述例

この例では、変更するベースパスとして「D:¥コミュニティ」を記述しています。

```
SELECT "dmaProp_OIID" FROM "cfsClass_Community"
WHERE "cfsProp_ContentBasePath" = 'D:¥コミュニティ';
```

- 実行結果ファイル

実行結果ファイル (oiid_community.txt) には、問い合わせファイルで指定したベースパスが設定されているワークスペースルートフォルダの OIID が出力されます。

次に、プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) を実行して、ルートフォルダに設定されているベースパスを変更します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
dbrsetprop oiid_community.txt prop_community.txt
```

プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) で、引数に指定する内容を次に示します。

- 実行結果ファイル

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) の実行で取得した実行結果ファイル (oiid_community.txt) を指定します。

- プロパティ情報ファイル

プロパティ情報ファイル (prop_community.txt) の内容を次に示します。

「cfsProp_ContentBasePath」の値に、変更後のパスを「」(シングルクォーテーション)で囲んで記述します。記述例の太字の個所に、変更後のパスを記述してください。また、実行結果ファイル (oiid_community.txt) に出力された OIID の数分のセクションを記述してください。

記述例

この例では、変更後のパス名として「D:¥COMMUNITY_FILE」を記述しています。

また、この例では、OIID 二つ分のセクションを記述しています。セクションは、OIID の数分だけ記述してください。

[cfsClass_Community]	…セクション1の始まり
cfsProp_ContentBasePath = 'D:¥COMMUNITY_FILE'	…セクション1の終わり
[cfsClass_Community]	…セクション2の始まり
cfsProp_ContentBasePath = 'D:¥COMMUNITY_FILE'	…セクション2の終わり

(f) グループルートフォルダに設定されているベースパスを変更する

File Sharing クライアントで、ルートフォルダに設定されているベースパスを変更します。

まず、問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) を実行して、ベースパスを変更するグループ情報の OIID を取得します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、入力ファイルに問い合わせファイル (eql_group.txt) を指定し、出力ファイルに実行結果ファイル (oiid_group.txt) を指定しています。

```
dbrexquery eql_group.txt > oiid_group.txt
```

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) で、引数に指定する内容を次に示します。

- 問い合わせファイル

問い合わせファイル (eql_group.txt) には、次の内容を記述します。記述例の太字の個所に、変更するベースパスを記述してください。

記述例

この例では、変更するベースパスとして「D:¥グループ」を記述しています。

```
SELECT "dmaProp_OIID" FROM "cfsClass_Group"
WHERE "cfsProp_ContentBasePath" = 'D:¥グループ';
```

- 実行結果ファイル

実行結果ファイル (oiid_group.txt) には、問い合わせファイルで指定したベースパスが設定されているワークプレースルートフォルダの OIID が出力されます。

次に、プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) を実行して、ルートフォルダに設定されているベースパスを変更します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
dbrsetprop oiid_group.txt prop_group.txt
```

プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) で、引数に指定する内容を次に示します。

- 実行結果ファイル

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) の実行で取得した実行結果ファイル (oiid_group.txt) を指定します。

- プロパティ情報ファイル

プロパティ情報ファイル (prop_group.txt) の内容を次に示します。「cfsProp_ContentBasePath」の値に、変更後のパスを「|」（シングルクォーテーション）で囲んで記述します。記述例の太字の個所に、変更後のパスを記述してください。また、実行結果ファイル (oiid_group.txt) へ出力された OIID の数分のセクションを記述してください。

記述例

この例では、変更後のパス名として「D:¥GROUP_FILE」を記述しています。

また、この例では、OIID 二つ分のセクションを記述しています。セクションは、OIID の数分だけ記述してください。

```
[cfsClass_Group]          ...セクション1の始まり
cfsProp_ContentBasePath = 'D:¥GROUP_FILE'  ...セクション1の終わり

[cfsClass_Group]          ...セクション2の始まり
cfsProp_ContentBasePath = 'D:¥GROUP_FILE'  ...セクション2の終わり
```

(5) システム導入支援機能を使用したかどうかの確認

File Sharing サーバを構築したときに、システム導入支援機能を使用したかどうかを確認します。データベースに表 EDMSMETAdocinfo が存在するかどうかを確認することで、システム導入支援機能を使用したかどうかわかります。

表 EDMSMETAdocinfo が存在する場合

システム導入支援機能を使用して構築しています。

表 EDMSMETAdocinfo が存在しない場合

システム導入支援機能を使用しないで構築しています。

システム導入支援機能を使用したかどうかの情報は、次の個所で使用します。

- 「(6)(a) アンロードデータファイル用のディスク容量の見積もり」
- 「(13)(a) 表データをリロードする前の準備」の列構成情報ファイルの作成

(6) 表データのアンロード

データベースサーバで、データベース再編成ユーティリティ (pdorg) を実行して、表データをアンロードします。

(a) アンロードデータファイル用のディスク容量の見積もり

表データをアンロードするために、アンロードデータファイルに必要なディスク容量を見積もります。見積もり方法の詳細については、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」を参照してください。

なお、見積もりでは、次の情報を基にしてください。File Sharing サーバを構築するときにシステム導入支援機能を使用しているかどうかによって、基にする情報が異なります。

システム導入支援機能を使用して構築している場合

「2.4.2(2)(b) 見積もり情報定義ファイルの編集」で編集した見積もり情報定義ファイルを基に見積もってください。

システム導入支援機能を使用しないで構築している場合

「表 D-2 ユーザ用 RD エリア分のデータベースリソースの所要量」を基に見積もってください。

見積もった分のディスク容量を準備しておいてください。

(b) 表データをアンロードする前の準備

表データをアンロードする前に、次のことを実施しておいてください。

- File Sharing サーバを停止します。
- データベースサーバを起動しておきます。
- アンロードする表の RD エリアを閉塞しておきます。

アンロードする対象の RD エリアを閉塞するには、データベースサーバで RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) を実行します。コマンドの `-r` オプションには、使用している環境に合わせて、閉塞する RD エリア名を指定してください。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、RD エリア [CFS_METATBL], [CFS_METAIDX], [CFS_SYSTBL], [CFS_SYSIDX], [CFS_USRTBL], [CFS_USRIDX], [CFS_DOC01] および [CFS_SGML01] が閉塞されます。

```
pdhold -r
CFS_METATBL, CFS_METAIDX, CFS_SYSTBL, CFS_SYSIDX, CFS_USRTBL, CFS_USRIDX, CFS_DOC01, CFS_SGML01
```

RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

- データベース再編成ユーティリティ (pdorg) 実行時に使用する制御文ファイルを作成しておきます。制御文ファイル (C:%work%file%pdorg1.txt) には、表データをアンロードするファイル (アンロードデータファイル) のファイル名を記述します。データをアンロードする表ごとに、制御文ファイルを作成してください。制御文ファイルの記述例を次に示します。

記述例

この例では、アンロードデータファイルの格納ディレクトリとファイル名として「C:%work%file%unfile1」を記述しています。

```
unload C:%work%file%unfile1
```

データベース再編成ユーティリティ (pdrorg) の制御文ファイルの作成については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(c) 表データをアンロードする

データベースサーバで、データベース再編成ユーティリティ (pdrorg) を実行して、表データをアンロードします。データをアンロードする表を次に示します。

- 1.cfsClass_AssignableDrive
- 2.cfsClass_Community
- 3.cfsClass_File_CH
- 4.cfsClass_File_DV
- 5.cfsClass_Folder
- 6.cfsClass_Group
- 7.cfsClass_Personal
- 8.cfsClass_Quota
- 9.dmaClass_DCRelationship
- 10.dmaClass_VerDescription
- 11.dmaClass_VersionSeries
- 12.edmClass_ACL
- 13.edmClass_BindRelationship
- 14.edmClass_ContentReference
- 15.edmClass_OIID
- 16.edmClass_PublicACL

データベース再編成ユーティリティ (pdrorg) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、制御文ファイル「C:¥work¥file¥pdrorg1.txt」を指定し、表"cfsClass_AssignableDrive"のデータがアンロードされます。

```
pdrorg -k unld -t ¥"cfsClass_AssignableDrive¥" -W dat -n 16 C:¥work¥file¥pdrorg1.txt
```

データベース再編成ユーティリティ (pdrorg) で、次に示すオプションは必ず指定してください。

- -k unld
- -t 表の名称
- -W dat
- 制御文ファイル名

データベース再編成ユーティリティ (pdrorg) のそのほかのオプションの指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(d) RD エリアの閉塞を解除する

表データのアンロードが終わったら、RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) を実行して、RD エリアの閉塞を解除します。コマンドの `-r` オプションには、閉塞を解除する RD エリア名を指定してください。RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、RD エリア [CFS_METATBL], [CFS_METAIDX], [CFS_SYSTBL], [CFS_SYSIDX], [CFS_USRTBL], [CFS_USRIDX], [CFS_DOC01] および [CFS_SGML01] の閉塞が解除されます。

```
pdrels -r CFS_METATBL, CFS_METAIDX, CFS_SYSTBL, CFS_SYSIDX, CFS_USRTBL, CFS_USRIDX, CFS_DOC01, CFS_SGML01
```

RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(7) データベースの文字コード種別の変更

データベースサーバで、HiRDB の動作環境の設定コマンド (pdntenv) を実行して、データベースの文字コード種別を UTF-8 に変更します。なお、HiRDB の動作環境の設定コマンド (pdntenv) を実行する前に、HiRDB および HiRDB のサービスを停止しておいてください。

HiRDB の動作環境の設定コマンド (pdntenv) で、オプションには `-c utf-8` を指定してください。HiRDB の動作環境の設定コマンド (pdntenv) の実行例を次に示します。

実行例

```
pdntenv -c utf-8
```

HiRDB の動作環境の設定コマンド (pdntenv) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(8) データベースの再初期化

データベースサーバで、HiRDB の開始コマンド (pdstart) を実行して、再度データベースを初期設定します。なお、HiRDB の開始コマンド (pdstart) を実行する前に、HiRDB のサービスを開始しておいてください。

HiRDB の開始コマンド (pdstart) で、オプションには `-i` を指定してください。HiRDB の開始コマンド (pdstart) の実行例を次に示します。

実行例

```
pdstart -i
```

HiRDB の開始コマンド (pdstart) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(9) データベースサーバでの環境設定

データベースサーバで、環境設定をします。データベースサーバでの環境設定については、「3.7 データベースサーバでの環境設定」を参照してください。

(10) データベースサーバを使用するための設定

File Sharing サーバで、データベースサーバを使用するための設定をします。データベースサーバを使用するための設定については、「3.8 データベースサーバを使用するための設定」を参照してください。

(11) 文書空間の構築

File Sharing サーバで、文書空間を構築します。文書空間の構築方法については、「3.9 文書空間の構築」を参照してください。

(12) アンロードデータファイルの文字コードの変換

File Sharing クライアントで、文字コードセットの変換コマンド (cfschgcode) を実行して、アンロードデータファイルの文字コードを UTF-8 に変換します。

文字コードセットの変換コマンド (cfschgcode) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、入力ファイルに指定したアンロードデータファイル「C:¥work¥file¥unfile1」の文字コードが UTF-8 に変換され、文字コード変換後のファイル「C:¥work¥encoded_file¥unfile1」が出力されます。

```
cfschgcode -c utf-8 -i C:¥work¥file¥unfile1 -o C:¥work¥encoded_file¥unfile1
```

文字コードセットの変換コマンド (cfschgcode) の詳細については、「8.8 File Sharing クライアント運用コマンドの詳細」の「cfschgcode (ファイルの文字コードセットの変換)」を参照してください。

(13) 表データのリロード

データベースサーバで、データベース作成ユーティリティ (pdload) を実行して、表データをリロードします。

(a) 表データをリロードする前の準備

- 列構成情報ファイルを作成しておきます。

データベース作成ユーティリティ (pdload) 実行時に使用する列構成情報ファイルを作成します。ただし、File Sharing サーバを新規に構築したときの File Sharing サーバのバージョンによって、列構成情報ファイルが必要となる表が異なります。新規構築時のバージョンごとに、列構成情報ファイルが必要となる表を次の表に示します。

表 E-3 列構成情報ファイルが必要となる表 (文書空間の文字コード種別を Shift-JIS から UTF-8 に変更する場合)

新規構築時の File Sharing サーバのバージョン		列構成情報ファイルが必要となる表
<ul style="list-style-type: none"> Groupmax Collaboration - File Server 07-10 		<ul style="list-style-type: none"> cfsClass_AssignableDrive cfsClass_File_CH cfsClass_Folder cfsClass_Personal
<ul style="list-style-type: none"> Groupmax Collaboration - File Server 07-20 	システム導入支援機能を使用して構築した場合	cfsClass_AssignableDrive

新規構築時の File Sharing サーバのバージョン		列構成情報ファイルが必要となる表
<ul style="list-style-type: none"> Groupmax Collaboration - File Server 07-20 	システム導入支援機能を使用しないで構築した場合	<ul style="list-style-type: none"> cfsClass_AssignableDrive cfsClass_Personal
<ul style="list-style-type: none"> Groupmax Collaboration - File Server 07-30 以降 		—

(凡例)

— : 該当しません。

各表の列構成情報ファイルの内容については、「(d) 列構成情報ファイル」を参照してください。

- リロードする表の RD エリアを閉塞しておきます。
リロードする対象の RD エリアを閉塞するには、データベースサーバで RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) を実行します。コマンドの `-r` オプションには、使用している環境に合わせて、閉塞する RD エリア名を指定してください。RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。
- データベース作成ユーティリティ (pload) 実行時に使用する制御文ファイルを作成しておきます。
制御文ファイル (C:%work%file%pload1.txt) には、「(12) アンロードデータファイルの文字コードの変換」で文字コードを変換したファイルのファイル名を記述します。データをリロードする表ごとに、制御文ファイルを作成してください。制御文ファイルの記述例を次に示します。

記述例

この例では、文字コードを変換したデータファイルの格納ディレクトリとファイル名として「C:%work%encoded_file%unfile1」を記述しています。

```
source C:%work%encoded_file%unfile1
idxwork C:%work%file%idxwork
sort C:%work%file%sortwork,8192
```

制御文ファイルの記述内容については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

- 制御文ファイルに idxwork 文を記述する場合は、idxwork 文で指定するディレクトリを作成しておきます。
- 制御文ファイルに sort 文を記述する場合は、sort 文で指定するディレクトリを作成しておきます。

(b) 表データをリロードする

データベースサーバで、データベース作成ユーティリティ (pload) を実行して、表データをリロードします。

データベース作成ユーティリティ (pload) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、制御文ファイル「C:%work%file%pload1.txt」を指定し、表 "cfsClass_AssignableDrive" のデータをリロードしています。

```
pload -d -c C:%work%column_inf1.txt -i c -l n -n 16 -z -o %"cfsClass_AssignableDrive%" C:%work%file%pload1.txt
```

データベース作成ユーティリティ (pload) で、次に示すオプションは必ず指定してください。

- d
- c 列構成情報ファイル名

列構成情報ファイル (C:*work*column_infl.txt) が必要となる表の場合だけ、このオプションを指定します。列構成情報ファイルが必要となる表については、表 E-3 を参照してください。

- -z
- 表の識別子
- 制御文ファイル名

データベース作成ユーティリティ (pload) のそのほかのオプションの指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(c) RD エリアの閉塞を解除する

表データのリロードが終わったら、RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) を実行して、RD エリアの閉塞を解除します。コマンドの-r オプションには、閉塞を解除する RD エリア名を指定してください。

RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(d) 列構成情報ファイル

表ごとに列構成情報ファイルに記述する内容を次に示します。

- cfsClass_AssignableDrive の場合

```

"dmaProp_OIID"
"dmaProp_This"
"edmProp_OwnerId"
"edmProp_PrimaryGroupId"
"edmProp_OwnerPermission"
"edmProp_PrimGrpPermission"
"edmProp_EveryonePermission"
"edmProp_PACLs_edmProp_ACLElm"
"edmProp_ACLStatus"
"cfsProp_Path"
"cfsProp_Name"
"cfsProp_Type"
"cfsProp_Priority"
"cfsProp_Capacity"
"cfsProp_FreeSpace"
"cfsProp_UsedCount"
"cfsProp_ParameterName"
"cfsProp_ParameterValue"
"edmProp_ClassType"
"cfsProp_MaxUsableSpace"
"cfsProp_ValidFlag"

```

- cfsClass_File_CH の場合

```

"dmaProp_OIID"
"dmaProp_This"
"dmaProp_Parent"
"dmaProp_ParentContainer"
"dmaProp_PrimVerSeries"
"edmProp_OwnerId"
"edmProp_PrimaryGroupId"
"edmProp_OwnerPermission"
"edmProp_PrimGrpPermission"
"edmProp_EveryonePermission"
"edmProp_PACLs_edmProp_ACLElm"
"edmProp_ACLStatus"
"cfsProp_Creator"
"cfsProp_CreateTime"
"cfsProp_Modifier"
"cfsProp_ModifyTime"
"cfsProp_Accessor"
"cfsProp_AccessTime"
"cfsProp_Type"
"cfsProp_Language"
"cfsProp_Comment"
"cfsProp_DisplayName"

```

```

"cfsProp_DisplayName_En"
"cfsProp_EntityName"
"cfsProp_ContentType"
"cfsProp_ContentSize"
"cfsProp_CheckoutUser"
"cfsProp_CheckoutTime"
"edmProp_ClassType"
"cfsProp_Identifier"
"cfsProp_TemporaryModifyTime"
"cfsProp_PolicyId"
"cfsProp_ProtectStatus"
"cfsProp_SortingoutRule"
"cfsProp_DeleteTime"
"cfsProp_OriginalFolder"
"cfsProp_OriginalFolderPath"

```

- cfsClass_Folder の場合

```

"dmaProp_OIID"
"dmaProp_This"
"dmaProp_Parent"
"dmaProp_ParentContainer"
"dmaProp_CurrentOfSeriesCnt"
"edmProp_OwnerId"
"edmProp_PrimaryGroupId"
"edmProp_OwnerPermission"
"edmProp_PrimGrpPermission"
"edmProp_EveryonePermission"
"edmProp_PACLs_edmProp_ACLELm"
"edmProp_ACLStatus"
"cfsProp_Creator"
"cfsProp_CreateTime"
"cfsProp_Modifier"
"cfsProp_ModifyTime"
"cfsProp_Accessor"
"cfsProp_AccessTime"
"cfsProp_Type"
"cfsProp_Language"
"cfsProp_Comment"
"cfsProp_DisplayName"
"cfsProp_DisplayName_En"
"cfsProp_EntityName"
"cfsProp_ContentType"
"cfsProp_ContentSize"
"edmProp_ClassType"
"cfsProp_CheckoutUser"
"cfsProp_CheckoutTime"
"cfsProp_TemporaryModifyTime"
"cfsProp_PolicyId"
"cfsProp_ProtectStatus"
"cfsProp_SortingoutRule"
"cfsProp_DeleteTime"
"cfsProp_OriginalFolder"
"cfsProp_OriginalFolderPath"

```

- cfsClass_Personal の場合

```

"dmaProp_OIID"
"dmaProp_This"
"edmProp_OwnerId"
"edmProp_PrimaryGroupId"
"edmProp_OwnerPermission"
"edmProp_PrimGrpPermission"
"edmProp_EveryonePermission"
"edmProp_PACLs_edmProp_ACLELm"
"edmProp_ACLStatus"
"cfsProp_ContentBasePath"
"cfsProp_UserId"
"cfsProp_ValidFlag"
"cfsProp_UsedSize"
"cfsProp_TotalAvailableSize"
"edmProp_ClassType"
"cfsProp_UseTrashCan"
"cfsProp_TrashCanRate"
"cfsProp_TrashCanUsedSize"

```

付録 F ファイルのエクスポートコマンド (cfsexpfile) で使用するファイル

ここでは、cfsexpfile コマンドで使用するファイルについて説明します。

付録 F.1 コンテンツデータファイル

出力するファイルの情報を記述したファイルです。

(1) ファイル名

ファイル名は次の形式となります。

[cfsexpfile] + 「_」 + 年月日時分秒 + 「.csv」

年月日時分秒には、コマンドの実行日時が次の形式で出力されます。

「年 (4 けた)」 + 「月 (2 けた)」 + 「日 (2 けた)」 + 「時 (2 けた<24h 表示>)」 + 「分 (2 けた)」 + 「秒 (2 けた)」

なお、次の場合には、二つ目以降のファイル名に「2」以降の通番が与えられます。

- 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のキー「hptl_clb_cfs_ContentsMaxCount」によって、出力するコンテンツデータファイルを分割する場合「.csv」の前に「[n]」(n は「2」以上の整数) の通番が与えられます。
- 同時に cfsexpfile コマンドが実行された場合「.csv」の前に「(n)」(n は「2」以上の整数) の通番が与えられます。

(2) ファイルフォーマット

ファイルのフォーマットを次に示します。

- 1 行目は項目名のヘッダとする。
- 1 ファイルにつき 1 行とし、改行またはファイルの終端を行の終端とする。
- 各項目は半角コンマ「,」で区切る。
- 各項目は半角ダブルクォーテーション「"」で囲む。
- 行の先頭が「#」の場合はコメント行として扱う。
- 項目内に半角ダブルクォーテーション「"」がある場合は、「"""」(半角ダブルクォーテーション二つ) で表記する。
- 1 行の最大バイト数は 11,264 バイトとする。

出力例を次に示します。

```
#"OID","フォルダ","コンテンツ格納ディレクトリ","フォルダパス","フォルダパス (英語)","ファイル名","名前","名前 (英語)","種類","サイズ","作成者ID","作成者名","作成者名 (英語)","作成日時","更新者ID","更新者名","更新者名 (英語)","更新日時","ロックユーザ","ロック日時","ロックファイル更新日時","コメント","コンテンツロケーション","URL"
"dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/69b60ee9-f37b-410b-905f-2c314ff8f667/8d3280b9-0f25-4551-8f04-414416ae43f8000000000006432","dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/69b60ee9-f37b-410b-905f-2c314ff8f667/8d3280b9-0f25-4551-8f04-414416ae43f8000000000006440","1","/personal/10333000ja","/personal/10333000en","Append.pdf","AppendJP","AppendEn","text/plane","1024","10333000","10333000ja","10333000en","2006/01/01"
```

```
11:45:47", "10333000", "10333000ja", "10333000en", "2006/01/03 20:31:33", "10333000", "2006/07/14
14:45:47", "2006/07/14 14:49:50", "コメント",
"D:¥CFSFILES¥personal¥default_00¥10333000¥0C¥00000050C¥00000000000006431¥00000000000006435¥1307526285546", "http://
collbo.itg.hitachi.co.jp/Portal/portal/action/Plain/portlet/hptlclbcfs/url/
L2FkcG9ydGxldHMvahB0bGNsYmNmcy9kaXNwYXRjaA--/?
cfsCommand=DownloadDoc&cfsCtype=File&cfs0id=0001000000006432&cfsCheckid=db691c8ccc5c9ab94bdae74a19b4801c"
```

(3) ファイルに出力される項目

コンテンツデータファイルの1行目にはヘッダが出力されます。ヘッダは行の先頭に「#」が付加され、コメント行として出力されます。

コンテンツデータファイルに出力されるプロパティ、およびヘッダに出力される項目名を次の表に示します。

項番	プロパティ	ヘッダに出力される項目名
1	OID	"OID"
2	フォルダ	"フォルダ"
3	コンテンツ格納ディレクトリ	"コンテンツ格納ディレクトリ"
4	フォルダパス	"フォルダパス"
5	フォルダパス (英語)	"フォルダパス (英語) "
6	ファイル名	"ファイル名"
7	名前	"名前"
8	名前(英語)	"名前(英語)"
9	種類	"種類"
10	サイズ	"サイズ"
11	作成者 ID	"作成者 ID"
12	作成者名	"作成者名"
13	作成者名 (英語)	"作成者名 (英語) "
14	作成日時	"作成日時"
15	更新者 ID	"更新者 ID"
16	更新者名	"更新者名"
17	更新者名 (英語)	"更新者名 (英語) "
18	更新日時	"更新日時"
19	ロックユーザ	"ロックユーザ"
20	ロック日時	"ロック日時"
21	ロックファイル更新日時	"ロックファイル更新日時"
22	コメント	"コメント"
23	コンテンツロケーション	"コンテンツロケーション"

項番	プロパティ	ヘッダに出力される項目名
24	配布 URL	"URL"

付録 F.2 コンテンツ

出力したファイルの実体です。ファイル名は実際のファイル名です。

付録 F.3 アクセス権一覧ファイル

Cfsexpfile コマンドが File Sharing のアクセス権一覧をフォルダごとに出力するファイルです。

フォルダの種別によって出力内容が異なります。

個人フォルダの場合

フォルダの OIID およびアクセス権が出力されません。

コミュニティフォルダの場合

ルートフォルダの OIID およびアクセス権が出力されます。

グループフォルダの場合

フォルダの OIID およびアクセス権が出力されます。

(1) ファイル名

ファイル名は次の形式となります。

[cfspemrlist] + 「_」 + 年月日時分秒 + 「.csv」

年月日時分秒には、コマンドの実行日時が次の形式で出力されます。

「年 (4 けた)」 + 「月 (2 けた)」 + 「日 (2 けた)」 + 「時 (2 けた<24h 表示>)」 + 「分 (2 けた)」 + 「秒 (2 けた)」

同時にコマンドが実行された場合は、二つ目以降のファイル名に対し、「.csv」の前に「(n)」(n は「2」以上の整数) の通番が与えられます。

(2) ファイルフォーマット

ファイルフォーマットを次に示します。

- 1 行目は項目名のヘッダとする。
- コミュニティ ID, ワークスペース ID およびロール ID の組み合わせ, 組織 ID, またはユーザ ID につき 1 行とし, 改行またはファイルの終端を行の終端とする。
- 各項目は半角コンマ「,」で区切る。
- 各項目は半角ダブルクォーテーション「"」で囲む。
- 項目内に半角ダブルクォーテーション「"」がある場合は、「"」(半角ダブルクォーテーション二つ) で表記する。

出力例を次に示します。

```
#"OIID", "コミュニティID", "ワークスペースID", "ロールID", "組織ID", "ユーザID", "権限"
"dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/69b60ee9-
```

```
f37b-410b-905f-2c314ff8f667/8d3280b9-0f25-4551-8f04-414416ae43f8000000000000050C", "", "", "", "96", "", "5"
"dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/69b60ee9-
f37b-410b-905f-2c314ff8f667/8d3280b9-0f25-4551-8f04-414416ae43f8000000000000050E", "COM000010", "WPL00001", "ROL11
", "", "", "63"
"dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/69b60ee9-
f37b-410b-905f-2c314ff8f667/8d3280b9-0f25-4551-8f04-414416ae43f8000000000000050F", "COM000010", "WPL00001", "ROL12
", "", "", "5"
```

(3) ファイルに出力される項目

アクセス権一覧ファイルの 1 行目にはヘッダが出力されます。ヘッダは先頭に「#」が付加され、コメント行として出力されます。

アクセス権一覧ファイルに出力されるプロパティ、およびヘッダに出力される項目名を次の表に示します。

項番	プロパティ	ヘッダに出力される項目名
1	OIID	"OIID"
2	コミュニティ ID	"コミュニティ ID"
3	ワークプレース ID	"ワークプレース ID"
4	ロール ID	"ロール ID "
5	組織 ID	"組織 ID "
6	ユーザ ID	"ユーザ ID "
7	権限*	"権限"

注※

File Sharing のアクセス権に対応する数値が出力されます。File Sharing のアクセス権と、各アクセス権に対応する数値を次の表に示します。

コミュニティフォルダの権限と値

項番	参照	更新	作成/削除	値
1	○			5
2	○	○		47
3	○	○	○	127

グループフォルダの権限と値

項番	参照	作成	更新	削除	所有者	値
1	○					5
2	○	○				21
3	○	○	○			63
4	○	○	○	○		127
5					○	127

付録 G File Sharing サーバプロセス数の設定

File Sharing サーバでは次に示す条件ごとのモデルケースを提供しています。この設定は特定のモデルケースを想定していますので、実際にご使用の環境とは異なる場合があります。

ユーザ数

- 500 人
- 1,000 人
- 5,000 人

機能

- Collaboration - File Sharing のショートカットを使用する／しない。
- Collaboration - Mail の振り分けを使用する／しない。

Collaboration - File Sharing のショートカットについては「Collaboration - File Sharing システム管理者ガイド」を、Collaboration - Mail の振り分けについては「Collaboration - Mail システム管理者ガイド」を参照してください。

モデルケースに従ったプロセス数を次の表に示します。

表 G-1 File Sharing サーバプロセス数

項番	ユーザ数 (人)	全 File Sharing サーバプロセス数 ^{※1}			
		ショートカット off		ショートカット on	
		振り分け off	振り分け on	振り分け off	振り分け on
1	500	2	2	2	3
2	1,000	2	4	2	5
3	5,000	7	19	10	22 ^{※2}

注※1 File Sharing サーバ 1 台あたりのプロセス数は上記を File Sharing サーバ台数で割ってください。

注※2 File Sharing サーバでのプロセス数の最大値は 20 であるため、File Sharing サーバが 2 台必要となります。

！ 注意事項

File Sharing サーバのプロセス数を変更した場合、1 プロセスあたり次のリソースが増加します。プロセスの増加量に合わせて見直しを実施してください。

次の表にリソース増加量を示します。

表 G-2 File Sharing サーバプロセス数増加によるリソース増加

項番	項目	1 プロセスあたりの増加量	備考
1	メモリ所要量	18MB	1 プロセスで使用するメモリ量
2	ディスク占有量	(_HIEDMS_TRACE_NUM の指定値) × (_HIEDMS_TRACE_SIZE の指定値) byte	File Sharing サーバの環境変数に 指定している値 1 プロセスによって出力するログ 量

項番	項目	1 プロセスあたりの増加量	備考
3	HiRDB 常駐プロセス数※	1 + (DBConnectionPoolCount の指定値)	{File Sharing サーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥docspace.ini に指定している値 1 プロセスによって使用する HiRDB のプロセス数
4	HiRDB 最大起動プロセス数※	(DBConnectionPoolDynamic の指定値)	

注※ 変更方法については「HiRDB システム運用ガイド」を参照してください。

付録 H File Sharing 01-10 からの移行手順

ここでは、File Sharing を 01-10 からリビジョンアップする*場合の移行手順について説明します。

注※

File Sharing を 01-10 からリビジョンアップするとは、次の製品をリビジョンアップすることです。

- Groupmax Collaboration - File Server 07-10
→ Groupmax Collaboration - File Server 07-83
- Groupmax Collaboration Portal 07-10
→ Groupmax Collaboration Portal 07-86
- Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-10
→ Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-86

なお、移行手順を実施する前に、File Sharing 01-10 の環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のバックアップを取得しておいてください。

File Sharing の移行は、次の手順で実行します。

1. メタ情報を追加します。File Sharing サーバで実行します。
2. クラス定義情報ファイルを設定します。File Sharing サーバで実行します。
3. ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルに、ディレクトリサーバの接続情報を追加します。File Sharing サーバで実行します。
4. DocumentSpace 構成定義ファイルに値を設定します。File Sharing サーバで実行します。
5. グループフォルダ用の最大許容サイズ情報のデフォルト値を登録します。File Sharing クライアントで実行します。
グループフォルダを使用しない場合、または最大許容サイズを設定しない運用の場合、この設定は不要です。
6. グループフォルダ用のベースパス情報のデフォルト値を登録します。File Sharing クライアントで実行します。
グループフォルダを使用しない場合も必要な設定です。
7. 環境設定用プロパティファイルに、設定を追加します。File Sharing クライアントで実行します。
8. File Sharing 01-20 からの移行を実施します。
File Sharing 01-20 からの移行手順については、「付録 I File Sharing 01-20 からの移行手順」を参照してください。
9. File Sharing 01-30 からの移行を実施します。
File Sharing 01-30 からの移行手順については、「付録 J File Sharing 01-30 からの移行手順」を参照してください。
10. File Sharing 01-32 からの移行を実施します。
File Sharing 01-32 からの移行手順については、「付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順」を参照してください。
11. File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行を実施します。
File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。
12. File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。

File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。

13. File Sharing 01-82 からの移行を実施します。

File Sharing 01-82 からの移行手順については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

なお、File Sharing 01-30 から、File Sharing 01-20 以前での「使用可能容量」という用語を「最大予約可能容量」に変更しています。そのため、以降の手順での「使用可能容量」を「最大予約可能容量」に読み替えてください。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) メタ情報の追加

File Sharing サーバで、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) を実行したあと、HiRDB のデータベース定義ユティリティ (pddef) を実行して、ファイルのロック機能を使用するためのメタ情報、およびグループ情報クラスのメタ情報を追加します。

メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の実行例を次に示します。

実行例

```
EDMAddMeta -g
            -f 定義情報ファイル名
            -r RDエリア定義情報ファイル名
            -i インデクス情報ファイル名
            -o データベース定義文格納ファイル名
```

引数に指定する各ファイルの内容については、次の個所を参照してください。

- 「(a) 定義情報ファイル」
- 「(b) RD エリア定義情報ファイル」
- 「(c) インデクス情報ファイル」

また、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMAddMeta (メタ情報の追加)」を参照してください。

次に、データベースサーバで、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) で出力されたデータベース定義文格納ファイルを入力ファイルとして、HiRDB のデータベース定義ユティリティ (pddef) を実行します。

データベース定義ユティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

```
pddef < データベース定義文格納ファイル名
```

データベース定義ユティリティ (pddef) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(a) 定義情報ファイル

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server Meta Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2005, Hitachi, Ltd.
#####
```

```
#####
# String
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_STRING]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Like
=obj=dsqop.ini@edmQueryOperator_XLike

#####
# Integer
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_INTEGER32]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_AddInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_SubtractInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_NegateInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_AbsoluteValueInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_MultiplyInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_DivideInteger32

#####
# Boolean
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_BOOLEAN]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
```

```

=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualBoolean
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalBoolean
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InBoolean

#####
# Variable Array
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_OBJECT_VARIABLE_ARRAY]
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_CheckoutUser

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_CheckoutTime

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TemporaryModifyTime
dmaProp_DescriptiveText=text=Temporary Modify Time
dmaProp_Ids=guid=b6526469-b5c9-4e16-9ee5-2df5cca787bc
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32

[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Identifier
dmaProp_DescriptiveText=text=Identifier
dmaProp_Ids=guid=21c60c96-6422-4768-a59a-f20128b940a1
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255

[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TemporaryModifyTime

#####
# cfsClass_Group
#####
[AddSubClass]
dmaProp_DisplayName=text=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Group
dmaProp_DescriptiveText=text=cfsClass_Group
dmaProp_Ids=guid=7952b90f-f655-4536-b5b4-01b634a55dbd

[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_GroupId
dmaProp_DescriptiveText=text=GroupId
dmaProp_Ids=guid=821017f4-c244-487f-91e4-9a0f5cd3a8bb
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255

[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ContentBasePath

[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ValidFlag

[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_UsedSize

[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TotalAvailableSize

```

(b) RD エリア定義情報ファイル

ファイル内で指定する RD エリア名は、作成した RD エリアの名称に合わせて編集してください。

```

#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server RD Area Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2005, Hitachi, Ltd.

```

```
#####
#####
# Area Definition for Table
#####
[TableArea]
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Group,area=CFS_USRTBL

#####
# Area Definition for Index
#####
[IndexArea]
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Group,prop=dmaProp_OIID,area=CFS_USRIDX
class=edmClass_IndependentPersistence/
cfsClass_Group,prop=ThisPropertyDescription,area=CFS_USRIDX
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Group,prop=edmProp_OwnerId,area=CFS_USRIDX
class=edmClass_IndependentPersistence/
cfsClass_Group,prop=edmProp_PrimaryGroupId,area=CFS_USRIDX
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Group,prop=cfsProp_GroupId,area=CFS_USRIDX
```

(c) インデクス情報ファイル

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server Index Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2005, Hitachi, Ltd.
#####

[Index]
#####
# cfsClass_Group
#####
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Group,UNIQUE,prop=cfsProp_GroupId,EXCEPT
```

(2) クラス定義情報ファイルの設定

File Sharing サーバで、クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) を実行して、クラス定義情報ファイルを出力します。

クラス定義情報ファイルの作成コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMCrtSimMeta
```

クラス定義情報ファイルは、接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files¥文書空間識別子.ini

出力されたクラス定義情報ファイルを、File Sharing クライアントの環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーしてください。環境変数「EDMCLASSDEFPATH」の詳細は「4.3 File Sharing クライアントの実行環境の作成」を参照してください。

クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCrtSimMeta (クラス定義情報ファイルの作成)」を参照してください。

(3) ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルへのディレクトリサーバの接続情報の追加

File Sharing サーバで、ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルに、ディレクトリサーバの接続情報として、[DIRECTORY]セクションを追加します。設定した内容を有効にするには、File Sharing サーバの再起動が必要です。

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}%Server%etc%cfsauth.ini

[DIRECTORY]セクションについては、「5.2.5(3)(b) [DIRECTORY]セクション」を参照してください。

(4) DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini) の設定

File Sharing サーバで、DocumentSpace 構成定義ファイルの[Entry0001]セクションの次に示すエントリに、値を設定します。

- XdkShmemSize エントリ
- ErrChkFlagOfObjectOperation エントリ
- EnbFncFlagOfObjectOperation エントリ

指定する内容を次に示します。

指定例

```
XdkShmemSize = 4000000
:
ErrChkFlagOfObjectOperation = 0x0000007f
EnbFncFlagOfObjectOperation = 0x0000007f
```

各エントリに値を設定したあと、File Sharing サーバを再起動してください。

DocumentSpace 構成定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}%Server%etc%docspace.ini

DocumentSpace 構成定義ファイルの詳細については、「5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)」を参照してください。

(5) グループフォルダ用最大許容サイズ情報のデフォルト値の登録

最大許容サイズを設定する運用の場合、File Sharing クライアントで、オブジェクト操作ツールの独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) を実行して、グループフォルダ用の最大許容サイズ情報のデフォルト値を登録します。独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) にプロパティ情報ファイルを指定して実行します。独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) の詳細については、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」の「dbrcrtdata (独立データの作成)」を参照してください。

独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) の実行例を次に示します。

実行例

```
dbrcrtdata プロパティ情報ファイル
```

プロパティ情報ファイルの内容を次に示します。

記述例

```
[cfsClass_Quota]
cfsProp_Type=128
cfsProp_ParameterName='
cfsProp_ParameterValue='
cfsProp_TotalAvailableSize= 最大許容サイズ
dbrProp_OwnerPermission=NONE
dbrProp_EveryonePermission=PRP|PWP|PRC|PWC|PV|PL|PD
```

記述例の太字の個所を変更します。

最大許容サイズには、1,048,576～1,099,511,627,776 の範囲で、かつ 1,048,576 (1MB) で割り切れる値を指定します。単位はバイトです。

(6) グループフォルダ用ベースパス情報のデフォルト値の登録

File Sharing クライアントで、オブジェクト操作ツールの独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) を実行して、グループフォルダ用のベースパス情報のデフォルト値を登録します。独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) にプロパティ情報ファイルを指定して実行します。独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) の詳細については、「8.6 オブジェクト操作ツールのコマンドの詳細」の「dbrcrtdata (独立データの作成)」を参照してください。

独立データの作成コマンド (dbrcrtdata) の実行例を次に示します。

実行例

```
dbrcrtdata プロパティ情報ファイル
```

プロパティ情報ファイルの内容を次に示します。

記述例

```
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_Path='パス'
cfsProp_Name='名前'
cfsProp_Type=128
cfsProp_Priority=9999
cfsProp_Capacity='使用可能容量'
cfsProp_FreeSpace='空き容量'
cfsProp_UsedCount=0
cfsProp_ParameterName=''
cfsProp_ParameterValue=''
dbrProp_OwnerPermission=NONE
dbrProp_EveryonePermission=PRP|PWP|PRC|PWC|PV|PL|PD
```

プロパティ情報ファイルには、次の値を指定します。記述例の太字の個所を変更してください。

- **パス**

グループルートフォルダ下のファイル実体を格納するベースパスを指定します。文書空間の文字コード種別に UTF-8 を指定する場合は、印刷可能な ASCII コードで指定してください。

- **名前**

任意の名前を指定します。この名前は、ベースパス情報を識別するために使用します。システムで一意的となる名前を指定してください。

- **使用可能容量**

ベースパスに対する使用可能容量を、1,048,576～2,199,023,255,552 の範囲で、かつ 1,048,576 (1MB) で割り切れる値を指定します。単位はバイトです。

次の見積もり式で求めた値を指定します。

見積もり式

$$\text{使用可能容量} \geq \text{GDT} \times \text{GN}$$

変数の意味は次のとおりです。

変数	意味
GDT	グループルートフォルダに設定する最大許容サイズです。
GN	想定グループルートフォルダ数です。

- 空き容量

使用可能容量に指定した値と同じ値を指定します。

(7) 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) の設定

File Sharing クライアントで、環境設定用プロパティファイルのキー `hptl_clb_cfs_FetchModeForTotalObjectList` に値を設定します。設定した内容を有効にするには、J2EE サーバの再起動が必要です。

なお、File Sharing 01-10 以前と同じ動作に設定するには、キーに対する設定値に「defined」を指定するか、またはキーの指定を省略してください。

また、バックアップを基に、移行前のバージョンの環境設定用プロパティファイルの内容を反映してください。

プロパティファイルのサンプルファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥conf¥hptl_clb_cfs.properties

このファイルを編集したあと、次に示すディレクトリにコピーして使用してください。

{Collaboration Portal インストールディレクトリ}¥clb_home¥conf

環境設定用プロパティファイルおよび指定するキーの詳細については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

(8) File Sharing 01-20 からの移行手順の実施

File Sharing 01-20 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 I File Sharing 01-20 からの移行手順」を参照してください。

(9) File Sharing 01-30 からの移行手順の実施

File Sharing 01-30 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 J File Sharing 01-30 からの移行手順」を参照してください。

(10) File Sharing 01-32 からの移行手順の実施

File Sharing 01-32 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順」を参照してください。

(11) File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順の実施

File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。

(12) File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順の実施

File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。

(13) File Sharing 01-82 からの移行手順の実施

File Sharing 01-82 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

付録I File Sharing 01-20 からの移行手順

ここでは、File Sharing を 01-20 からリビジョンアップする*場合の移行手順について説明します。

注※

File Sharing を 01-20 からリビジョンアップするとは、次の製品をリビジョンアップすることです。

- Groupmax Collaboration - File Server 07-20
→ Groupmax Collaboration - File Server 07-90
- Groupmax Collaboration Portal 07-20
→ Groupmax Collaboration Portal 07-91
- Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-20
→ Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-91

[ファイル共有] ポートレットで日本語および英語だけを使用する運用にしたい場合は、「付録 I.1 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を設定する場合」を参照してください。日本語および英語以外の言語も使用する運用にしたい場合は、「付録 I.2 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定する場合」を参照してください。

なお、移行手順を実施する前に、File Sharing 01-20 の環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のバックアップを取得しておいてください。

付録 I.1 文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を設定する場合

File Sharing 01-20 からのリビジョンアップで、文書空間の文字コード種別に Shift-JIS を設定する場合の手順について説明します。なお、この手順では、データベースのデータをアンロードするため、アンロードデータファイル用のディスク容量を準備しておく必要があります。

次の手順で実行します。

1. メタ情報のバックアップを取得します。File Sharing サーバで実行します。
2. データベースのバックアップを取得します。データベースサーバで実行します。
3. データベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義を設定します。データベースサーバで実行します。
4. メタ情報を追加します。File Sharing サーバで実行します。
5. File Sharing サーバを構築したときにシステム導入支援機能を使用したかどうかを確認します。
6. 表データをアンロードします。データベースサーバで実行します。
7. 表中の行を削除します。データベースサーバで実行します。
8. メタ情報を削除します。File Sharing サーバで実行します。
9. 変更するメタ情報を追加します。File Sharing サーバで実行します。
10. 列の定義長を変更します。データベースサーバで実行します。
11. cfsProp_Type 列に定義されたインデクスを削除します。データベースサーバで実行します。
12. 表および列の定義を確認します。File Sharing サーバで実行します。
13. 表データをリロードします。データベースサーバで実行します。
14. クラス定義情報ファイルを設定します。File Sharing サーバで実行します。
15. 排他制御用プールサイズを確認します。データベースサーバで実行します。

必要な排他制御用プールサイズを確保できない場合は、手順 16.および手順 17.を実行する代わりに、次に示す手順を実行してください。

- (27) cfsProp_Language に空文字を設定（排他制御用プールサイズを確保できない場合）
- (28) 名前(英語)の設定値の置換（排他制御用プールサイズを確保できない場合）

16. cfsProp_Language に空文字を設定します。データベースサーバで実行します。

17. 名前(英語)に「default」または「No Name」が設定されているファイルおよびフォルダについて、名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換します。データベースサーバで実行します。

18. DocumentSpace 構成定義ファイルに値を設定します。File Sharing サーバで実行します。

19. File Sharing サーバを起動します。

20. ベースパス情報の最大使用可能容量および状態のプロパティにデータを登録します。File Sharing クライアントで実行します。

21. 環境設定用プロパティファイルに、設定を追加します。File Sharing クライアントで実行します。

22. File Sharing 01-30 からの移行を実施します。

File Sharing 01-30 からの移行手順については、「付録 J File Sharing 01-30 からの移行手順」を参照してください。

23. File Sharing 01-32 からの移行を実施します。

File Sharing 01-32 からの移行手順については、「付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順」を参照してください。

24. File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行を実施します。

File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。

25. File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。

File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。

26. File Sharing 01-82 からの移行を実施します。

File Sharing 01-82 からの移行手順については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) メタ情報のバックアップの取得

File Sharing サーバで、メタ情報ファイルの出力コマンド (EDMPrintMeta) を実行してメタ情報ファイルを出力し、メタ情報のバックアップを取得します。メタ情報ファイルの出力コマンド (EDMPrintMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMPrintMeta (メタ情報ファイルの出力)」を参照してください。

コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMPrintMeta -F
              -l 出力先ディレクトリ名
```

(2) データベースのバックアップの取得

データベースサーバで、データベースのバックアップを取得します。次に示す表の RD エリアのバックアップを取得してください。

- 1.cfsClass_AssignableDrive
- 2.cfsClass_Community
- 3.cfsClass_File_CH
- 4.cfsClass_File_DV
- 5.cfsClass_Folder
- 6.cfsClass_Group
- 7.cfsClass_Personal
- 8.cfsClass_Quota
- 9.edmClass_PublicACL

データベースのバックアップの取得方法については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」を参照してください。

(3) データベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義の設定

詳細については、「付録 E(2) データベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義の設定」を参照してください。

(4) メタ情報の追加

File Sharing サーバで、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) を実行したあと、HiRDB のデータベース定義ユーティリティ (pddef) を実行して、ベースパス情報のメタ情報を追加します。

メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の実行例を次に示します。

実行例

```
EDMAddMeta -g
            -f 定義情報ファイル名
            -o データベース定義文格納ファイル名
```

引数に指定する定義情報ファイルの内容については、「(a) 定義情報ファイル」を参照してください。メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMAddMeta (メタ情報の追加)」を参照してください。

次に、データベースサーバで、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) で出力されたデータベース定義文格納ファイルを入力ファイルとして、HiRDB のデータベース定義ユーティリティ (pddef) を実行します。

データベース定義ユーティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

```
pddef < データベース定義文格納ファイル名
```

HiRDB のデータベース定義ユーティリティ (pddef) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(a) 定義情報ファイル

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server Meta Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2006, Hitachi, Ltd.
#####

#####
# String
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_STRING]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Like
=obj=dsqop.ini@edmQueryOperator_XLike

[AddProperty/cfsClass_AssignableDrive]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_MaxUsableSpace
dmaProp_DescriptiveText=text=MaxUsableSpace
dmaProp_Ids=guid=1f7f58d6-f927-4468-94f9-d96388b3078b
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255

[AddProperty/cfsClass_AssignableDrive]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ValidFlag
```

(5) システム導入支援機能を使用したかどうかの確認

File Sharing サーバを構築したときに、システム導入支援機能を使用したかどうかを確認します。データベースに表 EDMSMETAdocinfo が存在するかどうかを確認することで、システム導入支援機能を使用したかどうかわかります。

表 EDMSMETAdocinfo が存在する場合

システム導入支援機能を使用して構築しています。

表 EDMSMETAdocinfo が存在しない場合

システム導入支援機能を使用しないで構築しています。

システム導入支援機能を使用したかどうかの情報は、次の個所で使用します。

- 「(6)(a) アンロードデータファイル用のディスク容量の見積もり」
- 「(11)cfsProp_Type 列に定義されたインデックスの削除」

(6) 表データのアンロード

データベースサーバで、データベース再編成ユーティリティ (pdrg) を実行して、表データをアンロードします。

(a) アンロードデータファイル用のディスク容量の見積もり

詳細については、「付録 E(6)(a) アンロードデータファイル用のディスク容量の見積もり」を参照してください。

(b) 表データをアンロードする前の準備

表データをアンロードする前に、次のことを実施しておいてください。

- File Sharing サーバを停止します。
- データベースサーバを起動しておきます。
- アンロードする表の RD エリアを閉塞しておきます。

アンロードする対象の RD エリアを閉塞するには、データベースサーバで RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) を実行します。コマンドの `-r` オプションには、使用している環境に合わせて、閉塞する RD エリア名を指定してください。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、RD エリア [CFS_METATBL], [CFS_METAIDX], [CFS_SYSTBL], [CFS_SYSIDX], [CFS_USRTBL], [CFS_USRIDX], [CFS_DOC01] および [CFS_SGML01] が閉塞されます。

```
pdhold -r
CFS_METATBL, CFS_METAIDX, CFS_SYSTBL, CFS_SYSIDX, CFS_USRTBL, CFS_USRIDX, CFS_DOC01, CFS_SGML01
```

RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

- データベース再編成ユーティリティ (pdrg) 実行時に使用する制御文ファイルを作成しておきます。制御文ファイル (C:%work%file%pdrg1.txt) には、表データをアンロードするファイル (アンロードデータファイル) のファイル名を記述します。データをアンロードする表ごとに、制御文ファイルを作成してください。制御文ファイルの記述例を次に示します。

記述例

この例では、アンロードデータファイルの格納ディレクトリとファイル名として「C:%work%file%unfile1」を記述しています。

```
unload C:%work%file%unfile1
```

制御文ファイルの作成については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(c) 表データをアンロードする

データベースサーバで、データベース再編成ユーティリティ (pdrg) を実行して、表データをアンロードします。データをアンロードする表を次に示します。

- 1.cfsClass_AssignableDrive
- 2.cfsClass_Community
- 3.cfsClass_File_CH

4. cfsClass_File_DV
5. cfsClass_Folder
6. cfsClass_Group
7. cfsClass_Personal
8. cfsClass_Quota
9. edmClass_PublicACL

データベース再編成ユーティリティ (pdrg) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、制御文ファイル「C:¥work¥file¥pdrg1.txt」を指定し、表"cfsClass_AssignableDrive"のデータがアンロードされます。

```
pdrg -k unld -t ¥"cfsClass_AssignableDrive¥" -W bin -n 16 C:¥work¥file¥pdrg1.txt
```

データベース再編成ユーティリティ (pdrg) で、次に示すオプションは必ず指定してください。

- -k unld
- -t 表の名称
- -W bin
- 制御文ファイル名

データベース再編成ユーティリティ (pdrg) のその他のオプションの指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(d) RD エリアの閉塞を解除する

表データのアンロードが終わったら、RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) を実行して、RD エリアの閉塞を解除します。コマンドの-r オプションには、閉塞を解除する RD エリア名を指定してください。RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、RD エリア「CFS_METATBL」、「CFS_METAIDX」、「CFS_SYSTBL」、「CFS_SYSIDX」、「CFS_USRTBL」、「CFS_USRIDX」、「CFS_DOC01」および「CFS_SGML01」の閉塞が解除されます。

```
pdrels -r CFS_METATBL, CFS_METAIDX, CFS_SYSTBL, CFS_SYSIDX, CFS_USRTBL, CFS_USRIDX, CFS_DOC01, CFS_SGML01
```

RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(7) 表中の行の削除

データベースサーバで SQL 文を実行して、表中の行を削除します。行を削除する表を次に示します。

1. cfsClass_AssignableDrive
2. cfsClass_Community
3. cfsClass_File_CH
4. cfsClass_File_DV
5. cfsClass_Folder

- 6. cfsClass_Group
- 7. cfsClass_Personal
- 8. cfsClass_Quota
- 9. edmClass_PublicACL

表中の行を削除するために実行する SQL 文を次に示します。HiRDB SQL Executer などを使用して、SQL 文を実行してください。

実行例

```
PURGE TABLE "cfsClass_AssignableDrive";
PURGE TABLE "cfsClass_Community";
PURGE TABLE "cfsClass_File_CH";
PURGE TABLE "cfsClass_File_DV";
PURGE TABLE "cfsClass_Folder";
PURGE TABLE "cfsClass_Group";
PURGE TABLE "cfsClass_Personal";
PURGE TABLE "cfsClass_Quota";
PURGE TABLE "edmClass_PublicACL";
```

(8) メタ情報の削除

File Sharing サーバで、メタ情報の削除コマンド (EDMDelMeta) を実行して、メタ情報を削除します。メタ情報の削除コマンド (EDMDelMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMDelMeta (メタ情報の削除)」を参照してください。

メタ情報の削除コマンド (EDMDelMeta) の実行例を次に示します。なお、-o オプションを指定して出力されるデータベース定義文格納ファイルは、これ以降の手順で使用しません。

項番	実行例
1	EDMDelMeta -p "cfsProp_Comment" -q "cfsClass_Folder" -o データベース定義文格納ファイル名
2	EDMDelMeta -p "cfsProp_DisplayName" -q "cfsClass_Folder" -o データベース定義文格納ファイル名
3	EDMDelMeta -p "cfsProp_DisplayName_En" -q "cfsClass_Folder" -o データベース定義文格納ファイル名
4	EDMDelMeta -p "cfsProp_EntityName" -q "cfsClass_Folder" -o データベース定義文格納ファイル名
5	EDMDelMeta -p "cfsProp_Comment" -q "cfsClass_File_CH" -o データベース定義文格納ファイル名
6	EDMDelMeta -p "cfsProp_DisplayName" -q "cfsClass_File_CH" -o データベース定義文格納ファイル名
7	EDMDelMeta -p "cfsProp_DisplayName_En" -q "cfsClass_File_CH" -o データベース定義文格納ファイル名
8	EDMDelMeta -p "cfsProp_EntityName" -q "cfsClass_File_CH" -o データベース定義文格納ファイル名
9	EDMDelMeta -p "cfsProp_Comment" -q "cfsClass_File_DV" -o データベース定義文格納ファイル名
10	EDMDelMeta -p "cfsProp_DisplayName" -q "cfsClass_File_DV" -o データベース定義文格納ファイル名
11	EDMDelMeta -p "cfsProp_DisplayName_En" -q "cfsClass_File_DV" -o データベース定義文格納ファイル名
12	EDMDelMeta -p "cfsProp_EntityName" -q "cfsClass_File_DV" -o データベース定義文格納ファイル名

項番	実行例
13	EDMDelMeta -p "cfsProp_ContentBasePath" -q "cfsClass_Personal" -o データベース定義文格納ファイル名
14	EDMDelMeta -p "cfsProp_ContentBasePath" -q "cfsClass_Community" -o データベース定義文格納ファイル名
15	EDMDelMeta -p "cfsProp_ContentBasePath" -q "cfsClass_Group" -o データベース定義文格納ファイル名
16	EDMDelMeta -p "cfsProp_ParameterValue" -q "cfsClass_Quota" -o データベース定義文格納ファイル名
17	EDMDelMeta -p "cfsProp_Path" -q "cfsClass_AssignableDrive" -o データベース定義文格納ファイル名
18	EDMDelMeta -p "cfsProp_Name" -q "cfsClass_AssignableDrive" -o データベース定義文格納ファイル名
19	EDMDelMeta -p "cfsProp_ParameterValue" -q "cfsClass_AssignableDrive" -o データベース定義文格納ファイル名
20	EDMDelMeta -p "cfsProp_Name" -q "edmClass_PublicACL" -o データベース定義文格納ファイル名

(9) 変更するメタ情報の追加

File Sharing サーバで、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) を実行して、変更するメタ情報を追加します。メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMAddMeta (メタ情報の追加)」を参照してください。

メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の実行例を次に示します。

実行例

```
EDMAddMeta -g
            -f 定義情報ファイル名
            -o データベース定義文格納ファイル名
```

引数に指定する定義情報ファイルの内容については、「(a) 定義情報ファイル」を参照してください。なお、-o オプションを指定して出力されるデータベース定義文格納ファイルは、これ以降の手順で使用しません。

(a) 定義情報ファイル

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server Meta Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2006, Hitachi, Ltd.
#####

#####
# String
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_STRING]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualString
```

```

=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Like
=obj=dsqop.ini@edmQueryOperator_Xlike

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Comment
dmaProp_DescriptiveText=text=Comment
dmaProp_Ids=guid=e155b98b-3846-40af-9a99-51501ff8e3f4
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DisplayName
dmaProp_DescriptiveText=text=Display Name
dmaProp_Ids=guid=2cf34ee6-992c-44b5-8bce-265021000801
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DisplayName_En
dmaProp_DescriptiveText=text=English Display Name
dmaProp_Ids=guid=e9682699-4449-4b18-856c-7ba1fd62db78
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512
[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_EntityName
dmaProp_DescriptiveText=text=Entity Name
dmaProp_Ids=guid=d34a5b04-3a12-440e-87c9-ff181f23ec9a
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512

[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Comment

[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DisplayName

[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DisplayName_En

[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_EntityName

[AddProperty/cfsClass_File_DV]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Comment

[AddProperty/cfsClass_File_DV]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DisplayName

[AddProperty/cfsClass_File_DV]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DisplayName_En

[AddProperty/cfsClass_File_DV]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_EntityName

[AddProperty/edmClass_PublicACL]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Name
dmaProp_DescriptiveText=text= Name
dmaProp_Ids=guid= abf1eba0-163a-48a8-87c7-1849a7a30fd4
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512

[AddProperty/cfsClass_Personal]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ContentBasePath
dmaProp_DescriptiveText=text= ContentBasePath
dmaProp_Ids=guid=f4d662d8-7676-48bf-b5af-c4ad3ca8c292
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512

```

```
[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ContentBasePath

[AddProperty/cfsClass_Community]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ContentBasePath
[AddProperty/cfsClass_Quota]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ParameterValue
dmaProp_DescriptiveText=text= ParameterValue
dmaProp_Ids=guid=5d9952fb-c031-4d24-b221-8dfe97882187
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512

[AddProperty/cfsClass_AssignableDrive]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Path
dmaProp_DescriptiveText=text= Path
dmaProp_Ids=guid=bb7b8c35-01d1-423e-8bde-7bc809e6a62
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512

[AddProperty/cfsClass_AssignableDrive]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Name

[AddProperty/cfsClass_AssignableDrive]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ParameterValue
```

(10) 列の定義長の変更

データベースサーバで、データベース定義ユーティリティ (pddef) を実行して、列の定義長を変更します。データベース定義ユーティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、SQL 文を記述したファイル (cfs_pddef_altertable.sql) を入力として、データベース定義ユーティリティ (pddef) を実行しています。

```
pddef < C:\work\cfs_pddef_altertable.sql
```

データベース定義ユーティリティ (pddef) の入力ファイル (cfs_pddef_altertable.sql) に記述する内容を次に示します。

記述例

```
ALTER TABLE "cfsClass_Folder" CHANGE "cfsProp_Comment" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_Folder" CHANGE "cfsProp_DisplayName" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_Folder" CHANGE "cfsProp_DisplayName_En" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_Folder" CHANGE "cfsProp_EntityName" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_File_CH" CHANGE "cfsProp_Comment" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_File_CH" CHANGE "cfsProp_DisplayName" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_File_CH" CHANGE "cfsProp_DisplayName_En" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_File_CH" CHANGE "cfsProp_EntityName" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_File_DV" CHANGE "cfsProp_Comment" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_File_DV" CHANGE "cfsProp_DisplayName" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_File_DV" CHANGE "cfsProp_DisplayName_En" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_File_DV" CHANGE "cfsProp_EntityName" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_Personal" CHANGE "cfsProp_ContentBasePath" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_Community" CHANGE "cfsProp_ContentBasePath" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_Group" CHANGE "cfsProp_ContentBasePath" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_Quota" CHANGE "cfsProp_ParameterValue" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_AssignableDrive" CHANGE "cfsProp_Path" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_AssignableDrive" CHANGE "cfsProp_Name" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "cfsClass_AssignableDrive" CHANGE "cfsProp_ParameterValue" MVARCHAR(512);
ALTER TABLE "edmClass_PublicACL" CHANGE "cfsProp_Name" MVARCHAR(512);
```

(11) cfsProp_Type 列に定義されたインデクスの削除

cfsProp_Type 列に定義されたインデクスを削除するために、データベースサーバで SQL 文を実行します。HiRDB SQL Executer などを使用して、SQL 文を実行してください。

実行する SQL 文を次に示します。なお、File Sharing サーバを構築したときにシステム導入支援機能を使用したかどうかによって、実行する SQL 文が異なります。

システム導入支援機能を使用して構築した場合の実行例

```
DROP INDEX "cfsClass_Folder04";
DROP INDEX "cfsClass_File_CH04";
DROP INDEX "edmClass_PublicACL02";
```

システム導入支援機能を使用しないで構築した場合の実行例

```
DROP INDEX "cfsClass_Folder06";
DROP INDEX "cfsClass_File_CH06";
DROP INDEX "edmClass_PublicACL05";
```

(12) 表および列の定義の確認

File Sharing サーバで、データベースの表・列の確認コマンド (EDMChkTbl) を実行して、定義したクラスおよびプロパティがデータベースの表および列と一致しているかを確認します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMChkTbl -p -f edms.ini
```

定義が一致している場合は、コマンドを実行してもエラーメッセージが出力されません。定義が一致していない場合は、コマンドを実行すると標準エラー出力にメッセージが出力されます。エラーが出力された場合は、メタ情報の初期設定コマンド (EDMInitMeta) を実行して、「(1) メタ情報のバックアップの取得」で取得したメタ情報のバックアップを基にメタ情報を再登録し、「(2) データベースのバックアップの取得」で取得したデータベースのバックアップからデータベースを復元してください。そのあと、再度「(4) メタ情報の追加」以降の手順を実行します。

データベースの表・列の確認コマンド (EDMChkTbl) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMChkTbl (データベースの表・列の確認)」を参照してください。

また、メタ情報の初期設定コマンド (EDMInitMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMInitMeta (メタ情報の初期設定)」を参照してください。

(13) 表データのリロード

データベースサーバで、データベース作成ユーティリティ (pdload) を実行して、表データをリロードします。表データをリロードするときは、表のインデクスも作成してください。

(a) 表データをリロードする前の準備

- リロードする表の RD エリアを閉塞しておきます。
リロードする対象の RD エリアを閉塞するには、データベースサーバで RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) を実行します。コマンドの -r オプションには、使用している環境に合わせて、閉塞する RD エリア名を指定してください。RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。
- データベース作成ユーティリティ (pdload) 実行時に使用する制御文ファイルを作成しておきます。
制御文ファイル (C:*work*file*pdload1.txt) には、「(6) 表データのアンロード」でアンロードしたアンロードデータファイルのファイル名を記述します。データをリロードする表ごとに、制御文ファイルを作成してください。制御文ファイルの記述例を次に示します。

記述例

この例では、アンロードデータファイルの格納ディレクトリとファイル名として「C:¥work¥file¥unfile1」を記述しています。

```
source C:¥work¥file¥unfile1
idxwork C:¥work¥file¥idxwork
sort C:¥work¥file¥sortwork,8192
```

制御文ファイルの記述内容については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

- 制御文ファイルに idxwork 文を記述する場合は、idxwork 文で指定するディレクトリを作成しておきます。
- 制御文ファイルに sort 文を記述する場合は、sort 文で指定するディレクトリを作成しておきます。

(b) 表データをリロードする

データベースサーバで、データベース作成ユーティリティ (pload) を実行して、表データをリロードします。

データベース作成ユーティリティ (pload) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、制御文ファイル「C:¥work¥file¥pload1.txt」を指定し、表"cfsClass_AssignableDrive"のデータをリロードしています。

```
pload -d -b -i c -l n -W -n 16 -o ¥"cfsClass_AssignableDrive¥" C:¥work¥file¥pload1.txt
```

データベース作成ユーティリティ (pload) で、次に示すオプションは必ず指定してください。

- -d
- -b
- -W
- 表の識別子
- 制御文ファイル名

データベース作成ユーティリティ (pload) のその他のオプションの指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(c) RD エリアの閉塞を解除する

表データのリロードが終わったら、RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) を実行して、RD エリアの閉塞を解除します。コマンドの-r オプションには、閉塞を解除する RD エリア名を指定してください。

RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(14) クラス定義情報ファイルの設定

File Sharing サーバで、クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) を実行して、クラス定義情報ファイルを出力します。

コマンドの実行例を次に示します。

実行例

EDMCrtSimMeta

クラス定義情報ファイルは、接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files¥文書空間識別子.ini

出力されたクラス定義情報ファイルを、File Sharing クライアントの環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーしてください。環境変数「EDMCLASSDEFPATH」の詳細は「4.3 File Sharing クライアントの実行環境の作成」を参照してください。

クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCrtSimMeta (クラス定義情報ファイルの作成)」を参照してください。

(15) データベースの排他制御用プールサイズの確認

次の手順を実施するために、データベースサーバで排他制御用プールサイズを確保します。

- cfsProp_Language に空文字を設定
- 名前(英語)の設定値を置換

これらの手順では、SQL 文を実行して表の行を更新します。行を更新する表を次に示します。

- cfsClass_Folder
- cfsClass_File_CH
- cfsClass_File_DV

表の行を更新するためには、必要なデータベースの排他制御用プールサイズを確保する必要があります。そのため、必要な排他制御用プールサイズを見積もり、不足している場合は拡張してください。

排他制御用プールサイズの見積もりと拡張について説明します。なお、以降の手順では、データベースサーバで SQL 文を実行します。HiRDB SQL Executer などを使用して、SQL 文を実行してください。

(a) 排他制御用プールサイズの見積もり

排他制御用プールサイズの見積もり式を次に示します。

排他制御用プールサイズの見積もり式

排他制御用プールサイズ $\geq 0.2 \times$ 表の更新する行数

「表の更新する行数」には、各表で更新する行数のうち最大の行数を仮定してください。各表で更新する行数を求めるために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名" WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- 表名 :
「cfsClass_Folder」, 「cfsClass_File_CH」, および 「cfsClass_File_DV」をそれぞれ指定します。各表の更新する行数が求められます。

注意 見積もった排他制御用プールサイズを確保できない場合

見積もった排他制御用プールサイズを確保できない場合は、表の更新する行を分割して、cfsProp_Language に空文字を設定する手順と、名前(英語)の設定値を置換する手順を実施します。排他制御用プールサイズを確保できない場合の手順については、「付録 I.1(27) cfsProp_Language に空文字を設定 (排他制御用プールサイズを確保できない場合)」および「付録 I.1(28) 名前(英語)の設定値の置換 (排他制御用プールサイズを確保できない場合)」を参照してください。

(b) 排他制御用プールサイズの拡張

見積もった大きさの排他制御用プールサイズを設定します。排他制御用プールサイズの設定については、マニュアル「HiRDB システム定義」を参照してください。

(16) cfsProp_Language に空文字を設定

cfsProp_Language に空文字を設定するために、データベースサーバで SQL 文を実行します。HiRDB SQL Executer などを使用して、SQL 文を実行してください。

実行する SQL 文を次に示します。

実行例

```
UPDATE "cfsClass_Folder" SET "cfsProp_Language" = '';
UPDATE "cfsClass_File_CH" SET "cfsProp_Language" = '';
UPDATE "cfsClass_File_DV" SET "cfsProp_Language" = '';
```

(17) 名前(英語)の設定値の置換

データベースサーバで、SQL 文を実行します。SQL 文を実行して、名前(英語)に「default」または「No Name」が設定されているファイルおよびフォルダについて、名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換します。HiRDB SQL Executer などを使用して、SQL 文を実行してください。

実行する SQL 文を次に示します。

実行例

```
UPDATE "cfsClass_Folder" set "cfsProp_DisplayName_En" = "cfsProp_DisplayName"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'default' OR "cfsProp_DisplayName_En" = 'No Name';
UPDATE "cfsClass_File_CH" set "cfsProp_DisplayName_En" = "cfsProp_DisplayName"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'default' OR "cfsProp_DisplayName_En" = 'No Name';
UPDATE "cfsClass_File_DV" set "cfsProp_DisplayName_En" = "cfsProp_DisplayName"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'default' OR "cfsProp_DisplayName_En" = 'No Name';
```

(18) DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini) の設定

File Sharing サーバで、DocumentSpace 構成定義ファイルの[Entry0001]セクションのEnbFncFlagOfObjectOperation エントリの値に、0x000000ff を設定します。

指定する内容を次に示します。

指定例

```
EnbFncFlagOfObjectOperation = 0x000000ff
```

DocumentSpace 構成定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}%Server%etc%docspace.ini

DocumentSpace 構成定義ファイルの詳細については、「5.2.3 DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)」を参照してください。

(19) File Sharing サーバの起動

File Sharing サーバを起動します。File Sharing サーバを起動する方法については、「7.2.1 File Sharing サーバの起動方法」を参照してください。

(20) ベースパス情報の最大使用可能容量および状態の設定

File Sharing クライアントで、オブジェクト操作ツールのコマンドを実行して、ベースパス情報の最大使用可能容量および状態のプロパティにデータを登録します。

次に示すデータを登録する手順を実行すると、ベースパス情報の最大予約可能容量と同じ値が最大使用可能容量に設定されます。最大使用可能容量に設定された値を変更したい場合は、「ファイル共有設定」ポートレットから表示される「プロパティ設定」画面から変更してください。

(a) データを登録するベースパス情報の OIID を取得する

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) を実行して、データを登録するベースパス情報の OIID を取得します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、入力ファイルに問い合わせファイル (eql.txt) を指定し、出力ファイルに実行結果ファイル (oiid.txt) を指定して、OIID を取得しています。

```
dbrexquery eql.txt > oiid.txt
```

問い合わせの実行コマンド (dbrexquery) で、引数に指定する内容を次に示します。

- 問い合わせファイル

問い合わせファイル (eql.txt) には、次の内容を記述します。

記述例

```
SELECT dmaProp_OIID FROM cfsClass_AssignableDrive
```

- 実行結果ファイル

実行結果ファイル (oiid.txt) には、ベースパス情報の OIID が出力されます。

(b) プロパティを取得する

プロパティの取得コマンド (dbrgetprop) を実行して、プロパティに設定されている値を取得します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

この例では、入力ファイルに実行結果ファイル (oiid.txt) およびプロパティ情報ファイル 1 (prop1.txt) を指定し、出力ファイルにプロパティ情報ファイル 2 (prop2.txt) を指定して、プロパティを取得しています。

```
dbrgetprop oiid.txt prop1.txt > prop2.txt
```

プロパティの取得コマンド (dbrgetprop) で、引数に指定する内容を次に示します。

- 実行結果ファイル

「(a) データを登録するベースパス情報の OIID を取得する」で取得した実行結果ファイル (oiid.txt) を指定します。

• プロパティ情報ファイル 1

プロパティ情報ファイル 1 (prop1.txt) には、次の内容を記述します。「(a) データを登録するベースパス情報の OIID を取得する」で取得した実行結果ファイル (oiid.txt) へ出力された OIID の数分のセクションを記述してください。

記述例

この例では、OIID 二つ分のセクションを記述しています。セクションは、OIID の数分だけ記述してください。

[cfsClass_AssignableDrive]	…セクション1の始まり
cfsProp_Capacity	
cfsProp_ValidFlag	…セクション1の終わり
[cfsClass_AssignableDrive]	…セクション2の始まり
cfsProp_Capacity	
cfsProp_ValidFlag	…セクション2の終わり

• プロパティ情報ファイル 2

プロパティ情報ファイル 2 (prop2.txt) には、次のような情報が出力されます。

出力例

この例では、OIID 二つ分の情報が出力されています。

```
# Properties by dbrgetprop 2005/11/10 19:18:19
# dma:///07a17522-a626-11d0- ... -8fc6-9f45473c30000000000000000001
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_Capacity='最大予約可能容量1'
cfsProp_ValidFlag=状態1

# dma:///07a17522-a626-11d0- ... -8fc6-9f45473c30000000000000000002
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_Capacity='最大予約可能容量2'
cfsProp_ValidFlag=状態2
```

プロパティ情報ファイル 2 へ出力される内容について、説明します。

- **最大予約可能容量**：実行結果ファイル (oiid.txt) に指定した OIID のベースパス情報に設定されている最大予約可能容量が出力されます。
- **状態**：実行結果ファイル (oiid.txt) に指定した OIID のベースパス情報に設定されている状態が出力されます。

(c) プロパティ情報ファイル 2 (prop2.txt) を編集する

「(b) プロパティを取得する」で取得したプロパティ情報ファイル 2 (prop2.txt) を、テキストエディタなどを使用して編集します。編集したファイルは、名前を「prop3.txt」として保存してください。

編集する内容を次に示します。

1. ファイル内の「cfsProp_Capacity」を「cfsProp_MaxUsableSpace」に置換する
2. 状態 (cfsProp_ValidFlag の値) に「1」を設定する

編集後のファイルの例を次に示します。記述例の太字の個所が編集した個所です。

プロパティ情報ファイル 3 (prop3.txt) の記述例

この例では、OIID 二つ分の情報が出力されています。

```
# Properties by dbrgetprop 2005/11/10 19:18:19
# dma:///07a17522-a626-11d0- ... -8fc6-9f45473c30000000000000000001
[cfsClass_AssignableDrive]
```

```

cfsProp_MaxUsableSpace='最大予約可能容量1'
cfsProp_ValidFlag=1

# dma:///07a17522-a626-11d0- ... -8fc6-9f45473c30000000000000000002
[cfsClass_AssignableDrive]
cfsProp_MaxUsableSpace='最大予約可能容量2'
cfsProp_ValidFlag=1

```

(d) プロパティにデータを登録する

実行結果ファイル (oidd.txt) および「(c) プロパティ情報ファイル 2 (prop2.txt) を編集する」で編集したファイル (prop3.txt) を入力として、プロパティの設定コマンド (dbrsetprop) を実行して、プロパティにデータを登録します。コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
dbrsetprop oidd.txt prop3.txt
```

(21) 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) の設定

この設定は任意です。

File Sharing 01-30 で追加された機能を使用する場合、File Sharing クライアントで、環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) の次に示すキーに値を設定します。設定した内容を有効にするには、J2EE サーバの再起動が必要です。

- hptl_clb_cfs_ADThresholdForMaxUsableSpace
- hptl_clb_cfs_numOfObjectListForSearchWindow
- hptl_clb_cfs_searchTimeOut
- hptl_clb_cfs_UploadMaxFileSize
- hptl_clb_cfs_CheckPointOfFileize

また、バックアップを基に、移行前のバージョンの環境設定用プロパティファイルの内容を反映してください。

プロパティファイルのサンプルファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

```
{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥conf¥hptl_clb_cfs.properties
```

このファイルを編集したあと、次に示すディレクトリにコピーして使用してください。

```
{Collaboration Portal インストールディレクトリ}¥clb_home¥conf
```

環境設定用プロパティファイルおよび指定するキーの詳細については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

(22) File Sharing 01-30 からの移行手順の実施

File Sharing 01-30 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 J File Sharing 01-30 からの移行手順」を参照してください。

(23) File Sharing 01-32 からの移行手順の実施

File Sharing 01-32 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順」を参照してください。

(24) File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順の実施

File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。

(25) File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順の実施

File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。詳細については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。

(26) File Sharing 01-82 からの移行手順の実施

File Sharing 01-82 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

(27) cfsProp_Language に空文字を設定（排他制御用プールサイズを確保できない場合）

排他制御用プールサイズを確保できない場合、フォルダの種別ごと、ファイルの種別ごとに分割して cfsProp_Language に空文字を設定することで、表の更新する行を減らします。それでも更新する行が多い場合は、さらにフォルダまたはファイルの作成日時ごとに分割して、cfsProp_Language に空文字を設定します。

cfsProp_Language に空文字を設定するときに更新される表と、フォルダまたはファイルの種別を示す値を次の表に示します。表に示す値を基に、SQL 文を実行してください。

表 I-1 cfsProp_Language に空文字を設定する手順で更新する表と指定する種別

項番	フォルダまたはファイル		表名	種別
1	フォルダ	個人ルートフォルダ	cfsClass_Folder	8
2		個人フォルダのフォルダ	cfsClass_Folder	16
3		コミュニティルートフォルダ	cfsClass_Folder	1
4		ワークスペースルートフォルダ	cfsClass_Folder	2
5		コミュニティフォルダのフォルダ	cfsClass_Folder	4
6		グループルートフォルダ	cfsClass_Folder	128
7		グループフォルダのフォルダ	cfsClass_Folder	256
8	ファイル	個人フォルダのファイル	cfsClass_File_CH	64
9			cfsClass_File_DV	64
10		コミュニティフォルダのファイル	cfsClass_File_CH	32
11			cfsClass_File_DV	32
12		グループフォルダのファイル	cfsClass_File_CH	512
13			cfsClass_File_DV	512

(a) フォルダの種別ごと、ファイルの種別ごとに空文字を設定する

cfsProp_Language に空文字を設定する SQL 文をフォルダの種別ごと、ファイルの種別ごとに分割して実行します。手順を次に示します。

1. 各表の更新する行数を求めます。

各表の更新する行数を求めるために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_Type" = 種別
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- 表名：表 I-1 に示す表名を指定します。
- 種別：表 I-1 に示す種別を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」の更新する行数を求める場合は、表 I-1 の項番 1~7 の種別を指定した 7 個の SQL 文を実行します。種別ごとに求めた行数の合計が、表「cfsClass_Folder」の更新する行数です。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して更新する行数を求めてください。

2. 更新する行数が、排他制御用プールサイズの見積もり式を満たすかどうか確認します。

手順 1. で求めた各表の更新する行数のうち最大の行数を仮定して、見積もり式を満たすかどうかを確認します。見積もり式については、「(15) データベースの排他制御用プールサイズの確認」を参照してください。

見積もり式を満たす場合は、手順 3. に進みます。

更新する行数が多く、見積もり式を満たさない場合は、「(b) 作成日時ごとに空文字を設定する」の手順に進みます。

3. 表ごとに、cfsProp_Language の値に空文字を設定します。

cfsProp_Language の値に空文字を設定するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。

```
UPDATE "表名"
SET "cfsProp_Language" = '' where "cfsProp_Type" = 種別;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- 表名：表 I-1 に示す表名を指定します。
- 種別：表 I-1 に示す種別を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」の cfsProp_Language の値に空文字を設定する場合は、表 I-1 の項番 1~7 の種別を指定した 7 個の SQL 文を実行します。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して cfsProp_Language の値に空文字をしてください。

4. cfsProp_Language の値に空文字が設定できたことを確認します。

cfsProp_Language の値に空文字が設定できたことを確認するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。すべての cfsProp_Language の値に空文字が設定できている場合、SQL 文の実行結果が 0 件になります。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_Language" <> ''
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- 表名：表 I-1 に示す表名を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」について確認する場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して確認してください。

なお、手順 4.で cfsProp_Language の値に空文字を設定できたことを確認した場合は、「(b) 作成日時ごとに空文字を設定する」の手順を実施する必要はありません。

(b) 作成日時ごとに空文字を設定する

フォルダの種別ごと、ファイルの種別ごとに分割しても更新する行が多い場合は、さらにフォルダまたはファイルの作成日時ごとに分割して、cfsProp_Language に空文字を設定します。

手順を次に示します。

1. フォルダまたはファイルの種別ごとに、更新する行数が排他制御用プールサイズの見積もり式を満たすような作成日時を求めます。

作成日時を求めるために SQL 文を実行します。

見積もり式を満たす行数が得られるまで、指定する作成日時を変更して繰り返し SQL 文を実行してください。また、表 I-1 の種別ごとに作成日時を求めてください。

実行する SQL 文を次に示します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別
AND "cfsProp_Language" <> ''
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- **表名**：表 I-1 に示す表名を指定します。
- **作成日時**：通算秒数（万国標準時（UTC）の 1970 年 1 月 1 日の 00 時 00 分 00 秒からの経過時間を秒単位で表した数値）を指定します。
- **種別**：表 I-1 に示す種別を指定します。

例えば、個人ルートフォルダについて、見積もり式を満たすような作成日時を求める場合は、表 I-1 の項番 1 の表名および種別を指定して SQL 文を実行します。

表 I-1 の項番 2～10 についても、SQL 文を実行して見積もり式を満たすような作成日時を求めてください。

2. 手順 1.で求めた作成日時を基に、作成日時以前に作成されたフォルダまたはファイルの cfsProp_Language の値に空文字を設定します。

cfsProp_Language の値に空文字を設定するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。

```
UPDATE "表名"
SET "cfsProp_Language" = ''
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別
AND "cfsProp_Language" <> '';
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- **表名**：表 I-1 に示す表名を指定します。
- **作成日時**：手順 1.で求めた作成日時を通算秒数で指定します。
- **種別**：表 I-1 に示す種別を指定します。

例えば、個人ルートフォルダの cfsProp_Language の値に空文字を設定する場合は、表 I-1 の項番 1 の表名および種別と、手順 1. で求めた作成日時を指定して、SQL 文を実行してください。

表 I-1 の項番 2～10 についても、SQL 文を実行して cfsProp_Language の値に空文字を設定してください。

3. 手順 1. の SQL 文で指定する作成日時が手順 2. の実行日時になるまで、手順 1. および手順 2. を繰り返します。

4. フォルダまたはファイルの cfsProp_Language の値に空文字が設定されていることを確認します。

空文字が設定されていることを確認するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。すべての cfsProp_Language の値に空文字が設定されている場合、実行結果は 0 件になります。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別
AND "cfsProp_Language" <> ''
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- 表名：表 I-1 に示す表名を指定します。
- 作成日時：手順 1. で求めた作成日時を通算秒数で指定します。
- 種別：表 I-1 に示す種別を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」について確認する場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して確認してください。

(28) 名前(英語)の設定値の置換 (排他制御用プールサイズを確保できない場合)

排他制御用プールサイズを確保できない場合、フォルダまたはファイルの名前(英語)に設定されている値ごとに分割して名前(英語)の設定値で置換することで、表の更新する行を減らします。それでも更新する行が多い場合は、さらにフォルダまたはファイルの作成日時ごとに分割して、名前(英語)の設定値で置換します。

フォルダまたはファイルの名前(英語)の設定値が「default」の場合と「No Name」の場合に分割して、名前(英語)の設定値で置換します。

名前(英語)の設定値を名前(英語)の設定値で置換するときに更新される表を次の表に示します。

表 I-2 名前(英語)の設定値を置換する手順で更新する表

項番	フォルダまたはファイル	表名
1	フォルダ	cfsClass_Folder
2	ファイル	cfsClass_File_CH
3		cfsClass_File_DV

(a) 名前(英語)に「default」が設定されているフォルダまたはファイルを名前(英語)の設定値で置換する

名前(英語)に「default」が設定されているフォルダまたはファイルについて、名前(英語)の設定値を名前(英語)の設定値で置換します。手順を次に示します。

1. 各表の更新する行数を求めます。

各表の更新する行数を求めるには、SQL 文を実行します。
実行する SQL 文を次に示します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'default'
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- 表名：表 I-2 に示す表名を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」の更新する行数を求める場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して更新する行数を求めてください。

2. 更新する行数が、排他制御用プールサイズの見積もり式を満たすかどうか確認します。

手順 1. で求めた各表の更新する行数のうち最大の行数を仮定して、見積もり式を満たすかどうかを確認します。見積もり式については、「(15) データベースの排他制御用プールサイズの確認」を参照してください。

見積もり式を満たす場合は、手順 3. に進みます。

更新する行数が多く、見積もり式を満たさない場合は、「(c) 作成日時ごとに名前を設定値で置換する」の手順に進みます。

3. 表ごとに、名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換します。

名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。

```
UPDATE "表名"
SET "cfsProp_DisplayName_En" = "cfsProp_DisplayName"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'default';
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- 表名：表 I-2 に示す表名を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」の名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換する場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換してください。

4. 名前(英語)の設定値が名前の設定値で置換できたことを確認します。

名前(英語)の設定値が名前の設定値で置換できたことを確認するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。名前(英語)の設定値が名前の設定値で置換できている場合、SQL 文の実行結果が 0 件になります。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'default'
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- 表名：表 I-2 に示す表名を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」について確認する場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して確認してください。

なお、手順 4.で「default」を名前の設定値で置換できたことを確認した場合は、「(c) 作成日時ごとに名前の設定値で置換する」の手順を実施して「default」を名前の設定値で置換する必要はありません。

(b) 名前(英語)に「No Name」が設定されているフォルダまたはファイルを名前の設定値で置換する

名前(英語)に「No Name」が設定されているフォルダまたはファイルについて、名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換します。手順を次に示します。

1. 各表の更新する行数を求めます。

各表の更新する行数を求めるには、SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'No Name'
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- **表名**：表 I-2 に示す表名を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」の更新する行数を求める場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して更新する行数を求めてください。

2. 更新する行数が、排他制御用プールサイズの見積もり式を満たすかどうか確認します。

手順 1.で求めた各表の更新する行数のうち最大の行数を仮定して、見積もり式を満たすかどうかを確認します。見積もり式については、「(15) データベースの排他制御用プールサイズの確認」を参照してください。

見積もり式を満たす場合は、手順 3.に進みます。

更新する行数が多く、見積もり式を満たさない場合は、「(c) 作成日時ごとに名前の設定値で置換する」の手順に進みます。

3. 表ごとに、名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換します。

名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。表ごとに SQL 文を実行してください。

```
UPDATE "表名"
SET "cfsProp_DisplayName_En" = "cfsProp_DisplayName"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'No Name';
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- **表名**：表 I-2 に示す表名を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」の名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換する場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換してください。

4. 名前(英語)の設定値が名前の設定値で置換できたことを確認します。

名前(英語)の設定値が名前の設定値で置換できたことを確認するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。名前(英語)の設定値が名前の設定値で置換できている場合、SQL 文の実行結果が 0 件になります。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = 'No Name'
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- **表名**：表 I-2 に示す表名を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」について確認する場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して確認してください。

なお、手順 4 で「No Name」を名前の設定値で置換できたことを確認した場合は、「(c) 作成日時ごとに名前を設定値で置換する」の手順を実施して「No Name」を名前を設定値で置換する必要はありません。

(c) 作成日時ごとに名前を設定値で置換する

名前(英語)の設定値で分割しても更新する行が多い場合は、さらにフォルダまたはファイルの作成日時ごとに分割して、名前(英語)の設定値を名前を設定値で置換します。

なお、名前(英語)の設定値が「default」のフォルダまたはファイルについて、名前を設定値で置換する場合は、以降の手順で「設定値」に「default」を指定してください。

また、名前(英語)の設定値が「No Name」のフォルダまたはファイルについて、名前を設定値で置換する場合は、以降の手順で「設定値」に「No Name」を指定してください。

手順を次に示します。

1. 更新する行数が排他制御用プールサイズの見積もり式を満たすような作成日時を求めます。

作成日時を求めるために SQL 文を実行します。

見積もり式を満たす行数が得られるまで、指定する作成日時を変更して繰り返し SQL 文を実行してください。

実行する SQL 文を次に示します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_DisplayName_En" = '設定値'
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- **表名**：表 I-2 に示す表名を指定します。
- **作成日時**：通算秒数（万国標準時（UTC）の 1970 年 1 月 1 日の 00 時 00 分 00 秒からの経過時間を秒単位で表した数値）を指定します。
- **設定値**：「default」または「No Name」を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」で名前(英語)に「default」が設定されているフォルダまたはファイルの作成日時を求める場合は、表名に「cfsClass_Folder」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して見積もり式を満たすような作成日時を求めてください。

2. 手順 1. で求めた作成日時を基に、作成日時以前に作成されたフォルダまたはファイルの名前(英語)の設定値を名前を設定値で置換します。

名前(英語)の設定値を名前を設定値で置換するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。

```
UPDATE "表名"
SET "cfsProp_DisplayName_En" = "cfsProp_DisplayName"
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_DisplayName_En" = '設定値';
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- **表名**：表 I-2 に示す表名を指定します。
- **作成日時**：手順 1. で求めた作成日時を通算秒数で指定します。
- **設定値**：「default」または「No Name」を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」で、名前(英語)の設定値「default」を名前(英語)の設定値で置換する場合は、表名に「cfsClass_Folder」、設定値に「default」を指定してください。また、名前(英語)の設定値「No Name」を名前(英語)の設定値で置換する場合は、設定値に「No Name」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して名前(英語)の設定値を名前(英語)の設定値で置換してください。

3. 手順 1. で指定する作成日時が手順 2. の実行日時になるまで、手順 1. および手順 2. を繰り返します。

4. 名前(英語)の設定値が名前(英語)の設定値で置換できたことを確認します。

名前(英語)の設定値が名前(英語)の設定値で置換できたことを確認するために SQL 文を実行します。

実行する SQL 文を次に示します。名前(英語)の設定値が名前(英語)の設定値で置換できている場合、SQL 文の実行結果が 0 件になります。

```
SELECT COUNT(*) FROM "表名"
WHERE "cfsProp_DisplayName_En" = '設定値'
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

SQL 文で指定する値を次に示します。

- **表名**：表 I-2 に示す表名を指定します。
- **設定値**：「default」または「No Name」を指定します。

例えば、表「cfsClass_Folder」で、名前(英語)の設定値「default」を名前(英語)の設定値で置換した場合は、表名に「cfsClass_Folder」、設定値に「default」を指定してください。

表「cfsClass_File_CH」および表「cfsClass_File_DV」についても、SQL 文を実行して確認してください。

付録 I.2 文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定する場合

File Sharing 01-20 からのリビジョンアップで、文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定する場合の手順について説明します。なお、この手順では、データベースのデータをアンロードするため、アンロードデータファイル用のディスク容量を準備しておく必要があります。

次の手順で実行します。

1. データベースのバックアップを取得します。データベースサーバで実行します。
2. データベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義を設定します。データベースサーバで実行します。
3. ベースパス情報のパスを確認します。File Sharing クライアントで実行します。
4. 必要に応じて、ベースパス情報のパスを変更します。
5. File Sharing サーバを構築したときにシステム導入支援機能を使用したかどうかを確認します。
6. 表データをアンロードします。データベースサーバで実行します。
7. データベースの文字コード種別を UTF-8 に設定します。データベースサーバで実行します。
8. データベースを再初期化します。データベースサーバで実行します。
9. データベースサーバでの環境設定をします。
10. File Sharing サーバで、データベースサーバを使用するための設定をします。

11. 文書空間を構築します。File Sharing サーバで実行します。
12. アンロードデータファイルの文字コードを変換します。File Sharing クライアントで実行します。
13. 表データをリロードします。データベースサーバで実行します。
14. 排他制御用プールサイズを確認します。データベースサーバで実行します。
必要な排他制御用プールサイズを確保できない場合は、手順 15.および手順 16.を実行する代わりに、次に示す手順を実行してください。
 - 付録 I.1(27) cfsProp_Language に空文字を設定（排他制御用プールサイズを確保できない場合）
 - 付録 I.1(28) 名前(英語)の設定値の置換（排他制御用プールサイズを確保できない場合）
15. cfsProp_Language に空文字を設定します。データベースサーバで実行します。
16. 名前(英語)に「default」または「No Name」が設定されているファイルおよびフォルダについて、名前(英語)の設定値を名前の設定値で置換します。データベースサーバで実行します。
17. DocumentSpace 構成定義ファイルに値を設定します。File Sharing サーバで実行します。
18. クラス定義情報ファイルを File Sharing クライアントの環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーします。
19. File Sharing サーバを起動します。
20. ベースパス情報の最大使用可能容量および状態のプロパティにデータを登録します。File Sharing クライアントで実行します。
21. 環境設定用プロパティファイルに、設定を追加します。File Sharing クライアントで実行します。
22. File Sharing 01-30 からの移行を実施します。
File Sharing 01-30 からの移行手順については、「付録 J File Sharing 01-30 からの移行手順」を参照してください。
23. File Sharing 01-32 からの移行を実施します。
File Sharing 01-32 からの移行手順については、「付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順」を参照してください。
24. File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行を実施します。
File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。
25. File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。
File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。詳細については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。
26. File Sharing 01-82 からの移行を実施します。
File Sharing 01-82 からの移行手順については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) データベースのバックアップの取得

詳細については、「付録 E(1) データベースのバックアップの取得」を参照してください。

(2) データベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義の設定

詳細については、「付録 E(2) データベースサーバ (HiRDB) のシステム共通定義の設定」を参照してください。

(3) ベースパス情報のパスの確認

詳細については、「付録 E(3) ベースパス情報のパスの確認」を参照してください。

(4) ベースパス情報のパスの変更

詳細については、「付録 E(4) ベースパス情報のパスの変更」を参照してください。

(5) システム導入支援機能を使用したかどうかの確認

File Sharing サーバを構築したときに、システム導入支援機能を使用したかどうかを確認します。データベースに表 EDMSMETAdocinfo が存在するかどうかを確認することで、システム導入支援機能を使用したかがわかります。

表 EDMSMETAdocinfo が存在する場合

システム導入支援機能を使用して構築しています。

表 EDMSMETAdocinfo が存在しない場合

システム導入支援機能を使用しないで構築しています。

システム導入支援機能を使用したかどうかの情報は、次の個所で使用します。

- 「(6) 表データのアンロード」のアンロードデータファイル用のディスク容量の見積もり
- 「(13)(a) 表データをリロードする前の準備」の列構成情報ファイルの作成

(6) 表データのアンロード

詳細については、「付録 E(6) 表データのアンロード」を参照してください。

(7) データベースの文字コード種別の変更

詳細については、「付録 E(7) データベースの文字コード種別の変更」を参照してください。

(8) データベースの再初期化

詳細については、「付録 E(8) データベースの再初期化」を参照してください。

(9) データベースサーバでの環境設定

詳細については、「3.7 データベースサーバでの環境設定」を参照してください。

(10) データベースサーバを使用するための設定

詳細については、「3.8 データベースサーバを使用するための設定」を参照してください。

(11) 文書空間の構築

詳細については、「3.9 文書空間の構築」を参照してください。

(12) アンロードデータファイルの文字コードの変換

詳細については、「付録 E(12) アンロードデータファイルの文字コードの変換」を参照してください。

(13) 表データのリロード

データベースサーバで、データベース作成ユーティリティ (pload) を実行して、表データをリロードします。

(a) 表データをリロードする前の準備

- 列構成情報ファイルを作成しておきます。

データベース作成ユーティリティ (pload) 実行時に使用する列構成情報ファイルを作成します。ただし、File Sharing サーバを新規に構築したときの File Sharing サーバのバージョンによって、列構成情報ファイルが必要となる表が異なります。新規構築時のバージョンごとに、列構成情報ファイルが必要となる表を次の表に示します。

表I-3 列構成情報ファイルが必要となる表 (文書空間の文字コード種別に UTF-8 を設定する場合)

新規構築時の File Sharing サーバのバージョン		列構成情報ファイルが必要となる表
• Groupmax Collaboration - File Server 07-10		<ul style="list-style-type: none"> cfsClass_AssignableDrive cfsClass_File_CH cfsClass_Folder cfsClass_Personal
• Groupmax Collaboration - File Server 07-20	システム導入支援機能を使用して構築した場合	cfsClass_AssignableDrive
	システム導入支援機能を使用しないで構築した場合	<ul style="list-style-type: none"> cfsClass_AssignableDrive cfsClass_Personal

(凡例)

— : 該当しません。

各表の列構成情報ファイルの内容については、「(d) 列構成情報ファイル」を参照してください。

- リロードする表の RD エリアを閉塞しておきます。
リロードする対象の RD エリアを閉塞するには、データベースサーバで RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) を実行します。コマンドの `-r` オプションには、使用している環境に合わせて、閉塞する RD エリア名を指定してください。RD エリアの閉塞コマンド (pdhold) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。
- データベース作成ユーティリティ (pload) 実行時に使用する制御文ファイルを作成しておきます。
制御文ファイル (C:%work%file%pload1.txt) には、「(12) アンロードデータファイルの文字コードの変換」で文字コードを変換したファイルのファイル名を記述します。データをリロードする表ごとに、制御文ファイルを作成してください。制御文ファイルの記述例を次に示します。

記述例

この例では、文字コードを変換したデータファイルの格納ディレクトリとファイル名として「C:%work%encoded_file%unfile1」を記述しています。

```
source C:%work%encoded_file%unfile1
idxwork C:%work%file%idxwork
sort C:%work%file%sortwork,8192
```

制御文ファイルの記述内容については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

- 制御文ファイルに idxwork 文を記述する場合は、idxwork 文で指定するディレクトリを作成しておきます。
- 制御文ファイルに sort 文を記述する場合は、sort 文で指定するディレクトリを作成しておきます。

(b) 表データをリロードする

データベースサーバで、データベース作成ユーティリティ (pload) を実行して、表データをリロードします。

データベース作成ユーティリティ (pload) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、制御文ファイル「C:¥work¥file¥pload1.txt」を指定し、表"cfsClass_AssignableDrive"のデータをリロードしています。

```
pload -d -c C:¥work¥column_inf1.txt -i c -l n -n 16 -z -o ¥"cfsClass_AssignableDrive¥" C:¥work¥file¥pload1.txt
```

データベース作成ユーティリティ (pload) で、次に示すオプションは必ず指定してください。

- -d
- -c 列構成情報ファイル名
列構成情報ファイル (C:¥work¥column_inf1.txt) が必要となる表の場合だけ、このオプションを指定します。列構成情報ファイルが必要となる表については、表 I-3 を参照してください。
- -z
- 表の識別子
- 制御文ファイル名

データベース作成ユーティリティ (pload) のそのほかのオプションの指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(c) RD エリアの閉塞を解除する

表データのリロードが終わったら、RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) を実行して、RD エリアの閉塞を解除します。コマンドの-r オプションには、閉塞を解除する RD エリア名を指定してください。

RD エリアの閉塞解除コマンド (pdrels) の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(d) 列構成情報ファイル

表ごとに列構成情報ファイルに記述する内容を次に示します。

- cfsClass_AssignableDrive の場合

```
"dmaProp_OIID"  
"dmaProp_This"  
"edmProp_OwnerId"  
"edmProp_PrimaryGroupId"  
"edmProp_OwnerPermission"  
"edmProp_PrimaryGroupPermission"  
"edmProp_EveryonePermission"  
"edmProp_PACLS_edmProp_ACLelm"  
"edmProp_ACLStatus"  
"cfsProp_Path"  
"cfsProp_Name"  
"cfsProp_Type"  
"cfsProp_Priority"
```

```

"cfsProp_Capacity"
"cfsProp_FreeSpace"
"cfsProp_UsedCount"
"cfsProp_ParameterName"
"cfsProp_ParameterValue"
"edmProp_ClassType"

```

- cfsClass_File_CH の場合

```

"dmaProp_OIID"
"dmaProp_This"
"dmaProp_Parent"
"dmaProp_ParentContainer"
"dmaProp_PrimVerSeries"
"edmProp_OwnerId"
"edmProp_PrimaryGroupId"
"edmProp_OwnerPermission"
"edmProp_PrimGrpPermission"
"edmProp_EveryonePermission"
"edmProp_PACLs_edmProp_ACLEm"
"edmProp_ACLStatus"
"cfsProp_Creator"
"cfsProp_CreateTime"
"cfsProp_Modifier"
"cfsProp_ModifyTime"
"cfsProp_Accessor"
"cfsProp_AccessTime"
"cfsProp_Type"
"cfsProp_Language"
"cfsProp_Comment"
"cfsProp_DisplayName"
"cfsProp_DisplayName_En"
"cfsProp_EntityName"
"cfsProp_ContentType"
"cfsProp_ContentSize"
"cfsProp_CheckoutUser"
"cfsProp_CheckoutTime"
"edmProp_ClassType"
"cfsProp_Identifier"
"cfsProp_TemporaryModifyTime"

```

- cfsClass_Folder の場合

```

"dmaProp_OIID"
"dmaProp_This"
"dmaProp_Parent"
"dmaProp_ParentContainer"
"dmaProp_CurrentOfSeriesCnt"
"edmProp_OwnerId"
"edmProp_PrimaryGroupId"
"edmProp_OwnerPermission"
"edmProp_PrimGrpPermission"
"edmProp_EveryonePermission"
"edmProp_PACLs_edmProp_ACLEm"
"edmProp_ACLStatus"
"cfsProp_Creator"
"cfsProp_CreateTime"
"cfsProp_Modifier"
"cfsProp_ModifyTime"
"cfsProp_Accessor"
"cfsProp_AccessTime"
"cfsProp_Type"
"cfsProp_Language"
"cfsProp_Comment"
"cfsProp_DisplayName"
"cfsProp_DisplayName_En"
"cfsProp_EntityName"
"cfsProp_ContentType"
"cfsProp_ContentSize"
"edmProp_ClassType"
"cfsProp_CheckoutUser"
"cfsProp_CheckoutTime"
"cfsProp_TemporaryModifyTime"

```

- cfsClass_Personal の場合

```

"dmaProp_OIID"
"dmaProp_This"
"edmProp_OwnerId"
"edmProp_PrimaryGroupId"

```

```
"edmProp_OwnerPermission"  
"edmProp_PrimGrpPermission"  
"edmProp_EveryonePermission"  
"edmProp_PACLs_edmProp_ACLelm"  
"edmProp_ACLStatus"  
"cfsProp_ContentBasePath"  
"cfsProp_UserId"  
"cfsProp_ValidFlag"  
"cfsProp_UsedSize"  
"cfsProp_TotalAvailableSize"  
"edmProp_ClassType"
```

(14) データベースの排他制御用プールサイズの確認

詳細については、「付録 I.1(15) データベースの排他制御用プールサイズの確認」を参照してください。

(15) cfsProp_Language に空文字を設定

詳細については、「付録 I.1(16) cfsProp_Language に空文字を設定」を参照してください。

(16) 名前(英語)の設定値の置換

詳細については、「付録 I.1(17) 名前(英語)の設定値の置換」を参照してください。

(17) DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini) の設定

詳細については、「付録 I.1(18) DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini) の設定」を参照してください。

(18) クラス定義情報ファイルのコピー

クラス定義情報ファイルを、File Sharing クライアントの環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーしてください。環境変数「EDMCLASSDEFPATH」の詳細については、「4.3 File Sharing クライアントの実行環境の作成」を参照してください。

(19) File Sharing サーバの起動

File Sharing サーバを起動します。File Sharing サーバ起動する方法については、「7.2.1 File Sharing サーバの起動方法」を参照してください。

(20) ベースパス情報の最大使用可能容量および状態の設定

詳細については、「付録 I.1(20) ベースパス情報の最大使用可能容量および状態の設定」を参照してください。

(21) 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) の設定

詳細については、「付録 I.1(21) 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) の設定」を参照してください。

(22) File Sharing 01-30 からの移行手順の実施

File Sharing 01-30 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 J File Sharing 01-30 からの移行手順」を参照してください。

(23) File Sharing 01-32 からの移行手順の実施

File Sharing 01-32 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順」を参照してください。

(24) File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順の実施

File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。

(25) File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順の実施

File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。詳細については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。

(26) File Sharing 01-82 からの移行手順の実施

File Sharing 01-82 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

付録 J File Sharing 01-30 からの移行手順

ここでは、File Sharing を 01-30 からリビジョンアップする*場合の移行手順について説明します。

注※

File Sharing を 01-30 からリビジョンアップするとは、次の製品をリビジョンアップすることです。

- Groupmax Collaboration - File Server 07-30
→ Groupmax Collaboration - File Server 07-90
- Groupmax Collaboration Portal 07-30
→ Groupmax Collaboration Portal 07-91
- Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-30
→ Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-91

なお、移行手順を実施する前に、File Sharing 01-30 の環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のバックアップを取得しておいてください。

File Sharing の移行は次の手順で実行します。

1. データベースのバックアップを取得します。データベースサーバで実行します。
2. cfsProp_EntityName 列に定義されたインデックスを削除します。データベースサーバで実行します。
3. cfsProp_EntityName 列と cfsProp_Type 列で複数列インデックスを定義します。データベースサーバで実行します。
4. ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルに、設定を追加します。File Sharing サーバで実行します。
5. 環境設定用プロパティファイルに、設定を追加します。File Sharing クライアントで実行します。
6. File Sharing 01-32 からの移行を実施します。
File Sharing 01-32 からの移行手順については、「付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順」を参照してください。
7. File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行を実施します。
File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。
8. File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。
File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。
9. File Sharing 01-82 からの移行を実施します。
File Sharing 01-82 からの移行手順については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) データベースのバックアップの取得

詳細については、「付録 E(1) データベースのバックアップの取得」を参照してください。

(2) cfsProp_EntityName 列に定義されたインデクスの削除

cfsProp_EntityName 列に定義されたインデクスを削除するために、データベースサーバで SQL 文を実行します。HiRDB SQL Executer などを使用して、SQL 文を実行してください。

cfsProp_EntityName 列に定義されたインデクスの名前を検索します。データベース定義ユーティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、SQL 文を記述したファイル (cfs_pddef_searchindex.sql) を入力として、データベース定義ユーティリティ (pddef) を実行しています。

```
pddef < C:\cfs_pddef_searchindex.sql
```

データベース定義ユーティリティ (pddef) の入力ファイル (cfs_pddef_searchindex.sql) に記述する内容を次に示します。

記述例

```
SELECT INDEX_NAME
FROM MASTER.SQL_INDEX_COLINF
WHERE TABLE_NAME = 'cfsClass_Folder'
AND COLUMN_NAME = 'cfsProp_EntityName';
```

検索したインデクスの名前を指定して cfsProp_EntityName 列に定義されたインデクスを削除します。

```
DROP INDEX "インデクスの名前";
```

(3) 複数列インデクスの定義

cfsProp_EntityName 列と cfsProp_Type 列で複数列インデクスを定義します。データベース定義ユーティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、SQL 文を記述したファイル (cfs_pddef_createindex.sql) を入力として、データベース定義ユーティリティ (pddef) を実行しています。

```
pddef < C:\cfs_pddef_createindex.sql
```

データベース定義ユーティリティ (pddef) の入力ファイル (cfs_pddef_createindex.sql) に記述する内容を次に示します。

記述例

```
CREATE INDEX "cfsClass_FolderMulti01"
ON "cfsClass_Folder" ("cfsProp_EntityName", "cfsProp_Type")
IN (RDエリアの名称);
```

RD エリアの名称は、次に示すファイルの値を指定します。なお、File Sharing サーバを構築したときにシステム導入支援機能を使用したかどうかによって、ファイルが異なります。

システム導入支援機能を使用して構築した場合

文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt) の UsrIdxName エントリに指定した RD エリアの名称。

システム導入支援機能を使用しないで構築した場合

RD エリア定義情報ファイルの[IndexArea]セクションで、cfsClass_Folder クラスの cfsProp_EntityName プロパティに指定した RD エリアの名称。

(4) ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの設定

この設定は任意です。

File Sharing 01-32 で追加された機能を使用する場合、File Sharing サーバで、ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの次に示すエントリに値を設定します。設定した内容を有効にするには、File Sharing サーバの再起動が必要です。

[DIRECTORY]セクション

- AdditionalPostMode エントリ
- MainPostUidAttr エントリ
- NumOrgSearchUnit エントリ

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥cfsauth.ini

ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルおよび指定するエントリの詳細については、「5.2.5 ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル (cfsauth.ini)」を参照してください。

(5) 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) の設定

この設定は任意です。

File Sharing 01-32 で追加された機能を使用する場合、File Sharing クライアントで、環境設定用プロパティファイルの次に示すキーに値を設定します。設定した内容を有効にするには、J2EE サーバの再起動が必要です。

- hptl_clb_cfs_AccessData
- hptl_clb_cfs_AccessDataPath
- hptl_clb_cfs_AccessDataSize
- hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption
- hptl_clb_cfs_AccessDataStartMode
- hptl_clb_cfs_PersonalInheritPerm
- hptl_clb_cfs_UserAddWinSelTab
- hptl_clb_cfs_SetPersonalPermForSendURL

また、バックアップを基に、移行前のバージョンの環境設定用プロパティファイルの内容を反映してください。

プロパティファイルのサンプルファイルの格納ディレクトリとファイル名を次に示します。

{File Sharing クライアントのインストールディレクトリ}¥Client¥conf¥hptl_clb_cfs.properties

このファイルを編集したあと、次に示すディレクトリにコピーして使用してください。

{Collaboration Portal インストールディレクトリ}¥clb_home¥conf

環境設定用プロパティファイルおよび指定するキーの詳細については、「5.3.5 環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties)」を参照してください。

(6) File Sharing 01-32 からの移行手順の実施

File Sharing 01-32 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順」を参照してください。

(7) File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順の実施

File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。

(8) File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順の実施

File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。詳細については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。

(9) File Sharing 01-82 からの移行手順の実施

File Sharing 01-82 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

付録 K File Sharing 01-32 からの移行手順

ここでは、File Sharing を 01-32 からリビジョンアップする*場合の移行手順について説明します。

注※

File Sharing を 01-32 からリビジョンアップするとは、次の製品をリビジョンアップすることです。

- Groupmax Collaboration - File Server 07-32
→ Groupmax Collaboration - File Server 07-90
- Groupmax Collaboration Portal 07-32
→ Groupmax Collaboration Portal 07-91
- Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-32
→ Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-91

なお、移行手順を実施する前に、File Sharing 01-32 の環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のバックアップを取得しておいてください。

File Sharing の移行は次の手順で実行します。

1. データベースのバックアップを取得します。データベースサーバで実行します。
2. cfsProp_Identifier 列にインデクスを定義します。
3. File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行を実施します。
File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。
4. File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。
File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。
5. File Sharing 01-82 からの移行を実施します。
File Sharing 01-82 からの移行手順については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) データベースのバックアップの取得

詳細については、「付録 E(1) データベースのバックアップの取得」を参照してください。

(2) インデクスの定義

cfsProp_Identifier 列にインデクスを定義するために、データベースサーバで SQL 文を実行します。HiRDB SQL Executer などを使用して、SQL 文を実行してください。データベース定義ユーティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、SQL 文を記述したファイル (cfs_pddef_createindex.sql) を入力として、データベース定義ユーティリティ (pddef) を実行しています。

```
pddef < C:%cfs_pddef_createindex.sql
```

データベース定義ユティリティ (pddef) の入力ファイル (cfs_pddef_createindex.sql) に記述する内容を次に示します。

記述例

```
CREATE INDEX "インデックスの名前" ON "cfsClass_File_CH"
("cfsProp_Identifier") IN (RDエリアの名称);
```

インデックスの名前は、次に示す値を指定します。なお、File Sharing サーバを構築したときにシステム導入支援機能を使用したかどうかによって、指定する値が異なります。また、定義するインデックスの名前が重複しないことを、インデックスを定義する前に確認します。

システム導入支援機能を使用して構築した場合

cfsClass_File_CH04 を指定します。

システム導入支援機能を使用しないで構築した場合

cfsClass_File_CH09 を指定します。

●インデックスの名前の確認方法

定義するインデックスの名前を検索します。データベース定義ユティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

この例では、SQL 文を記述したファイル (cfs_pddef_searchindex.sql) を入力として、データベース定義ユティリティ (pddef) を実行しています。

```
pddef < C:\cfs_pddef_searchindex.sql
```

データベース定義ユティリティ (pddef) の入力ファイル (cfs_pddef_searchindex.sql) に記述する内容を次に示します。

記述例

```
SELECT COUNT(*) FROM MASTER.SQL_INDEX_COLINF
WHERE INDEX_NAME='インデックスの名前';
```

RD エリアの名称は、次に示すファイルの値を指定します。

なお、File Sharing サーバを構築したときにシステム導入支援機能を使用したかどうかによって、ファイルが異なります。

システム導入支援機能を使用して構築した場合

文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt) の UsrIdxName エントリに指定した RD エリアの名称。

システム導入支援機能を使用しないで構築した場合

RD エリア定義情報ファイルの [IndexArea] セクションで、cfsClass_File_CH クラスの cfsProp_EntityName プロパティに指定した RD エリアの名称。

(3) File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順の実施

File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順」を参照してください。

(4) File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順の実施

File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。詳細については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。

(5) File Sharing 01-82 からの移行手順の実施

File Sharing 01-82 以降からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

付録 L File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順

ここでは、File Sharing を 01-35 または 01-36 からリビジョンアップする*場合の移行手順について説明します。

注※

File Sharing を 01-35 または 01-36 からリビジョンアップするとは、次の製品をリビジョンアップすることです。

- Groupmax Collaboration - File Server 07-35 または 07-36
→ Groupmax Collaboration - File Server 07-90
- Groupmax Collaboration Portal 07-35 または 07-36
→ Groupmax Collaboration Portal 07-91
- Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-35 または 07-36
→ Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-91

なお、移行手順を実施する前に、File Sharing 01-35 または 01-36 の環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のバックアップを取得しておいてください。

File Sharing の移行は次の手順で実行します。

1. メタ情報のバックアップを取得します。File Sharing サーバで実行します。
2. データベースのバックアップを取得します。データベースサーバで実行します。
3. メタ情報を追加します。File Sharing サーバで実行します。
4. クラス定義情報ファイルを設定します。File Sharing サーバで実行します。
5. File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。
File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。
6. File Sharing 01-82 からの移行を実施します。
File Sharing 01-82 からの移行手順については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) メタ情報のバックアップの取得

File Sharing サーバで、メタ情報ファイルの出力コマンド (EDMPrintMeta) を実行してメタ情報ファイルを出力し、メタ情報のバックアップを取得します。メタ情報ファイルの出力コマンド (EDMPrintMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMPrintMeta (メタ情報ファイルの出力)」を参照してください。

コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMPrintMeta -F
              -l 出力先ディレクトリ名
```

(2) データベースのバックアップの取得

詳細については、「付録 E(1) データベースのバックアップの取得」を参照してください。

(3) メタ情報の追加

File Sharing サーバで、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) を実行したあと、HiRDB のデータベース定義ユーティリティ (pddef) を実行して、ベースパス情報のメタ情報を追加します。

File Sharing サーバで、メタ情報を追加します。メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の実行例を次に示します。

実行例

```
EDMAddMeta -g
            -f 定義情報ファイル名
            -o データベース定義文格納ファイル名
```

引数に指定する定義情報ファイルの内容については、「(a) 定義情報ファイル」を参照してください。メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMAddMeta (メタ情報の追加)」を参照してください。

次に、データベースサーバで、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) で出力されたデータベース定義文格納ファイルを入力ファイルとして、HiRDB のデータベース定義ユーティリティ (pddef) を実行します。

データベース定義ユーティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

```
pddef < データベース定義文格納ファイル名
```

HiRDB のデータベース定義ユーティリティについては、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(a) 定義情報ファイル

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server Meta Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2008, Hitachi, Ltd.
#####

#####
# String
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_STRING]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterString
```

```

=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Like
=obj=dsqop.ini@edmQueryOperator_XLike

#####
# Integer
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_INTEGER32]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_AddInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_SubtractInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_NegateInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_AbsoluteValueInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_MultiplyInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_DivideInteger32

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_PolicyId
dmaProp_DescriptiveText=text=PolicyId
dmaProp_Ids=guid=3e157845-a8d9-47d8-b405-e01a98b48489
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ProtectStatus
dmaProp_DescriptiveText=text=Protect Status
dmaProp_Ids=guid=9350b252-e552-4a3c-9d29-75a9d3ab54a8
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32

[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_PolicyId

[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_ProtectStatus

```

(4) クラス定義情報ファイルの設定

File Sharing サーバで、クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) を実行して、クラス定義情報ファイルを出力します。

クラス定義情報ファイルの作成コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMCrtSimMeta
```

クラス定義情報ファイルは、接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}%Server%etc%meta_files%文書空間識別子.ini

出力されたクラス定義情報ファイルを、File Sharing クライアントの環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーしてください。環境変数「EDMCLASSDEFPATH」の詳細は「4.3 File Sharing クライアントの実行環境の作成」を参照してください。

クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCrtSimMeta (クラス定義情報ファイルの作成)」を参照してください。

(5) File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順の実施

File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行を実施します。詳細については、「付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順」を参照してください。

(6) File Sharing 01-82 からの移行手順の実施

File Sharing 01-82 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

付録 M File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順

ここでは、File Sharing を 01-50, 01-52 または 01-70 からリビジョンアップする※場合の移行手順について説明します。

注※

File Sharing を 01-50, 01-52 または 01-70 からリビジョンアップするとは、次の製品をリビジョンアップすることです。

- Groupmax Collaboration - File Server 07-50 または 07-70
→ Groupmax Collaboration - File Server 07-90
- Groupmax Collaboration Portal 07-50, 07-51, 07-52, 07-70, 07-71 または 07-72
→ Groupmax Collaboration Portal 07-91
- Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-50, 07-52, 07-70, 07-71
または 07-72
→ Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-91

なお、移行手順を実施する前に、File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 の環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のバックアップを取得しておいてください。

File Sharing の移行は次の手順で実行します。

1. 環境変数を確認します。

2. File Sharing 01-82 からの移行を実施します。

File Sharing 01-82 からの移行手順については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) 環境変数の確認

OS を Windows Server 2003, Windows Server 2003 R2 または Windows Server 2003 R2 x64 から Windows Server 2008 x86, Windows Server 2008 x64, Windows Server 2008 R2, Windows Server 2012 または Windows Server 2012 R2 にアップグレードをした場合、環境変数 PATH に次のディレクトリパスが指定されていないことを確認します。指定されている場合は、このディレクトリパスを削除してください。

ディレクトリパス

`{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥bin`

(2) File Sharing 01-82 からの移行手順の実施

File Sharing 01-82 からの移行手順を実施します。詳細については、「付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順」を参照してください。

付録 N File Sharing 01-82 からの移行手順

ここでは、File Sharing を 01-82 からリビジョンアップする*場合の移行手順について説明します。

注※

File Sharing を 01-82 からリビジョンアップするとは、次の製品をリビジョンアップすることです。

- Groupmax Collaboration - File Server 07-82
→ Groupmax Collaboration - File Server 07-90
- Groupmax Collaboration Portal 07-82, 07-83 または 07-84
→ Groupmax Collaboration Portal 07-91
- Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-82, 07-83 または 07-84
→ Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing 07-91

なお、移行手順を実施する前に、File Sharing 01-82 の環境設定用プロパティファイル (hptl_clb_cfs.properties) のバックアップを取得しておいてください。

File Sharing の移行は次の手順で実行します。

1. メタ情報のバックアップを取得します。File Sharing サーバで実行します。
2. データベースのバックアップを取得します。データベースサーバで実行します。
3. メタ情報を追加します。File Sharing サーバで実行します。
4. クラス定義情報ファイルを設定します。File Sharing サーバで実行します。
5. アクセス日時を更新します。データベースサーバで実行します。
6. 削除日時および振り分けルールを設定します。データベースサーバで実行します。

以降、各手順の詳細について説明します。

(1) メタ情報のバックアップの取得

File Sharing サーバで、メタ情報ファイルの出力コマンド (EDMPrintMeta) を実行してメタ情報ファイルを出力し、メタ情報のバックアップを取得します。メタ情報ファイルの出力コマンド (EDMPrintMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMPrintMeta (メタ情報ファイルの出力)」を参照してください。

コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMPrintMeta -F  
             -l 出力先ディレクトリ名
```

(2) データベースのバックアップの取得

詳細については、「付録 E(1) データベースのバックアップの取得」を参照してください。

(3) メタ情報の追加

File Sharing サーバで、メタ情報を追加します。メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の実行例を次に示します。

実行例

```
EDMAddMeta -g
            -f 定義情報ファイル名
            -o データベース定義文格納ファイル名
            -i インデクス情報ファイル名
            -r RDエリア定義情報ファイル名
```

引数に指定する定義情報ファイルの内容は、文書空間の文字コードの種別によって異なります。それぞれの個所を参照してください。

- 文書空間の文字コードが Shift-JIS の場合
〔a) 定義情報ファイル (Shift-JIS)〕
- 文書空間の文字コードが UTF-8 の場合
〔b) 定義情報ファイル (UTF-8)〕

また、インデクス情報ファイルの内容は〔c) インデクス情報ファイル〕を参照してください。RD エリア定義情報ファイルの内容は〔d) RD エリア定義情報ファイル〕を参照してください。

メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMAddMeta (メタ情報の追加)」を参照してください。

次に、データベースサーバで、メタ情報の追加コマンド (EDMAddMeta) で出力されたデータベース定義文格納ファイルを入力ファイルとして、HiRDB のデータベース定義ユーティリティ (pddef) を実行します。

データベース定義ユーティリティ (pddef) の実行例を次に示します。

実行例

```
pddef < データベース定義文格納ファイル名
```

HiRDB のデータベース定義ユーティリティについては、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

(a) 定義情報ファイル (Shift-JIS)

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server Meta Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2012, Hitachi, Ltd.
#####

#####
# String
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_STRING]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterString
```

```

=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Like
=obj=dsqop.ini@edmQueryOperator_XLike

#####
# Integer
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_INTEGER32]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_AddInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_SubtractInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_NegateInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_AbsoluteValueInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_MultiplyInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_DivideInteger32

#####
# cfsClass_Parameter
#####
[AddSubClass]
dmaProp_DisplayName=text=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Parameter
dmaProp_DescriptiveText=text=cfsClass_Parameter
dmaProp_Ids=guid=50e47df8-c5e3-407b-a812-42ce48da8510

[AddProperty/cfsClass_Parameter]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Key
dmaProp_DescriptiveText=text=Key
dmaProp_Ids=guid=70defab3-7a9a-4412-b101-f07a28875101
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255

[AddProperty/cfsClass_Parameter]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Explain
dmaProp_DescriptiveText=text=Explain
dmaProp_Ids=guid=bf8acf8a-04c2-4a4a-88d9-fed3b894ab51
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255

[AddProperty/cfsClass_Parameter]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Value
dmaProp_DescriptiveText=text=Value
dmaProp_Ids=guid=d46c0ff2-07a5-46bd-9c83-3893aa5a7a0d
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512

[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_SortingoutRule
dmaProp_DescriptiveText=text=Sorting out Rule
dmaProp_Ids=guid=8221a979-90c0-4294-91ae-17c5017ac61c
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32

```



```
[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DeleteTime
dmaProp_DescriptiveText=text>Delete Time
dmaProp_Ids=guid=7b023804-d168-418e-b4f4-b166b2a6b98a
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32
```

```
[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_OriginalFolder
dmaProp_DescriptiveText=text=Original Folder
dmaProp_Ids=guid=a3bc1d5f-0501-44de-9976-969c1c580e0d
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255
```

```
[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_OriginalFolderPath
dmaProp_DescriptiveText=text=Original Folder Path
dmaProp_Ids=guid=2385ad81-cae0-4741-b166-f4a7876b0d92
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=5152
```

```
[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_SortingoutRule
```

```
[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DeleteTime
```

```
[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_OriginalFolder
```

```
[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_OriginalFolderPath
```

```
[AddProperty/cfsClass_Personal]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_UseTrashCan
dmaProp_DescriptiveText=text=Use Trash Can
dmaProp_Ids=guid=ddb7e7a72-40a2-4a40-aa5b-a8156fd7afb4
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32
```

```
[AddProperty/cfsClass_Personal]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanRate
dmaProp_DescriptiveText=text=Trash Can Rate
dmaProp_Ids=guid=4b159c6d-17d8-4fcb-bffc-4c1b951ff59f
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32
```

```
[AddProperty/cfsClass_Personal]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanUsedSize
dmaProp_DescriptiveText=text=Trash Can Used Size
dmaProp_Ids=guid=1205d8ed-6f8a-4443-9e67-e44ba89d6b49
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255
```

```
[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_UseTrashCan
```

```
[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanRate
```

```
[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanUsedSize
```

```
[AddProperty/cfsClass_Community]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_UseTrashCan
```

```
[AddProperty/cfsClass_Community]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanRate
```

```
[AddProperty/cfsClass_Community]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanUsedSize
```

(b) 定義情報ファイル (UTF-8)

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server Meta Definition File
```

```

# All Rights Reserved. Copyright (C) 2012, Hitachi, Ltd.
#####

#####
# String
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_STRING]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InString
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Like
=obj=dsqop.ini@edmQueryOperator_Xlike

#####
# Integer
#####
[AssumeProperty/DMA_DATATYPE_INTEGER32]
dmaProp_Cardinality=int=DMA_CARDINALITY_SINGLE
dmaProp_IsSelectable=bool=1
dmaProp_IsSearchable=bool=1
dmaProp_IsOrderable=bool=1
dmaProp_IsHidden=bool=0
dmaProp_IsValueRequired=bool=0
dmaProp_QueryOperatorDescriptions
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_And
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Or
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Not
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_IsNull
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_Exists
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Cross
=obj=dsqop.ini@dmaJoinOperator_Inner
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_EqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_UnequalInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_GreaterOrEqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_LessOrEqualInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_InInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_AddInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_SubtractInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_NegateInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_AbsoluteValueInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_MultiplyInteger32
=obj=dsqop.ini@dmaQueryOperator_DivideInteger32

#####
# cfsClass_Parameter
#####
[AddSubClass]
dmaProp_DisplayName=text=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Parameter
dmaProp_DescriptiveText=text=cfsClass_Parameter
dmaProp_Ids=guid=50e47df8-c5e3-407b-a812-42ce48da8510

[AddProperty/cfsClass_Parameter]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Key
dmaProp_DescriptiveText=text=Key

```

```
dmaProp_Ids=guid=70defab3-7a9a-4412-b101-f07a28875101
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255
```

```
[AddProperty/cfsClass_Parameter]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Explain
dmaProp_DescriptiveText=text=Explain
dmaProp_Ids=guid=bf8acf8a-04c2-4a4a-88d9-fed3b894ab51
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255
```

```
[AddProperty/cfsClass_Parameter]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_Value
dmaProp_DescriptiveText=text=Value
dmaProp_Ids=guid=d46c0ff2-07a5-46bd-9c83-3893aa5a7a0d
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=512
```

```
[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_SortingoutRule
dmaProp_DescriptiveText=text=Sorting out Rule
dmaProp_Ids=guid=8221a979-90c0-4294-91ae-17c5017ac61c
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32
```

```
[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DeleteTime
dmaProp_DescriptiveText=text>Delete Time
dmaProp_Ids=guid=7b023804-d168-418e-b4f4-b166b2a6b98a
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32
```

```
[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_OriginalFolder
dmaProp_DescriptiveText=text=Original Folder
dmaProp_Ids=guid=a3bc1d5f-0501-44de-9976-969c1c580e0d
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255
```

```
[AddProperty/cfsClass_Folder]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_OriginalFolderPath
dmaProp_DescriptiveText=text=Original Folder Path
dmaProp_Ids=guid=2385ad81-cae0-4741-b166-f4a7876b0d92
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=10304
```

```
[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_SortingoutRule
```

```
[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_DeleteTime
```

```
[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_OriginalFolder
```

```
[AddProperty/cfsClass_File_CH]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_OriginalFolderPath
```

```
[AddProperty/cfsClass_Personal]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_UseTrashCan
dmaProp_DescriptiveText=text=Use Trash Can
dmaProp_Ids=guid=ddb7e7a72-40a2-4a40-aa5b-a8156fd7afb4
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32
```

```
[AddProperty/cfsClass_Personal]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanRate
dmaProp_DescriptiveText=text=Trash Can Rate
dmaProp_Ids=guid=4b159c6d-17d8-4fcb-bffc-4c1b951ff59f
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_INTEGER32
```

```
[AddProperty/cfsClass_Personal]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanUsedSize
dmaProp_DescriptiveText=text=Trash Can Used Size
dmaProp_Ids=guid=1205d8ed-6f8a-4443-9e67-e44ba89d6b49
dmaProp_DataType=int=DMA_DATATYPE_STRING
dmaProp_MaximumLengthString=int=255
```

```
[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_UseTrashCan

[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanRate

[AddProperty/cfsClass_Group]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanUsedSize

[AddProperty/cfsClass_Community]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_UseTrashCan

[AddProperty/cfsClass_Community]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanRate

[AddProperty/cfsClass_Community]
dmaProp_DisplayName=text=cfsProp_TrashCanUsedSize
```

(c) インデクス情報ファイル

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server Index Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2012, Hitachi, Ltd.
#####

[Index]
#####
# cfsClass_Parameter
#####
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Parameter, UNIQUE, prop=cfsProp_Key, EXCEPT
```

(d) RD エリア定義情報ファイル

```
#####
# Collaboration - File Sharing Server
# File Sharing Server RD Area Definition File
# All Rights Reserved. Copyright (C) 2012, Hitachi, Ltd.
#####

#####
# Area Definition for Table
#####
[TableArea]
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Parameter, area=CFS_USRTBL

#####
# Area Definition for Index
#####
[IndexArea]
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Parameter, prop=dmaProp_OIID, area=CFS_USRIDX
class=edmClass_IndependentPersistence/
cfsClass_Parameter, prop=ThisPropertyDescription, area=CFS_USRIDX
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Parameter, prop=edmProp_OwnerId, area=CFS_USRIDX
class=edmClass_IndependentPersistence/
cfsClass_Parameter, prop=edmProp_PrimaryGroupId, area=CFS_USRIDX
class=edmClass_IndependentPersistence/cfsClass_Parameter, prop=cfsProp_Key, area=CFS_USRIDX
```

(4) クラス定義情報ファイルの設定

File Sharing サーバで、クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) を実行して、クラス定義情報ファイルを出力します。

クラス定義情報ファイルの作成コマンドの実行例を次に示します。

実行例

```
EDMCrtSimMeta
```

クラス定義情報ファイルは、接続する文書空間識別子にサフィックス「.ini」を付加したファイル名で、次に示すディレクトリに出力されます。

{File Sharingサーバのインストールディレクトリ}¥Server¥etc¥meta_files¥文書空間識別子.ini

出力されたクラス定義情報ファイルを、File Sharing クライアントの環境変数「EDMCLASSDEFPATH」に指定したディレクトリにコピーしてください。環境変数「EDMCLASSDEFPATH」の詳細は「4.3 File Sharing クライアントの実行環境の作成」を参照してください。

クラス定義情報ファイルの作成コマンド (EDMCrtSimMeta) の詳細については、「8.2 File Sharing サーバのコマンドの詳細」の「EDMCrtSimMeta (クラス定義情報ファイルの作成)」を参照してください。

(5) アクセス日時を更新

cfsClass_File_CH および cfsClass_File_DV の「cfsProp_AccessTime」の値を更新します。

(a) 排他制御用プールサイズを設定する

アクセス日時を更新する前に、次の見積もり式を満たすように排他制御用プールサイズを設定します。

排他制御用プールサイズの見積もり式

$$\text{排他制御用プールサイズ} \geq \uparrow 1/a \uparrow^{\ast 1} \times \text{更新対象行数}^{\ast 2}$$

注※1

a：1KB の排他制御用プールサイズが必要になる排他要求の件数

HiRDB の種類によって異なります。マニュアル「ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム定義 (Windows(R)用)」を参照してください。

注※2

更新対象行数には、表 cfsClass_File_CH と表 cfsClass_File_DV の行数のうち、大きい方を仮定します。表の行数は次の SQL 文を実行して取得します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "更新対象表名" WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

「更新対象表名」には「cfsClass_File_CH」または「cfsClass_File_DV」を指定してください。

排他制御用プールサイズの見積もりおよび設定方法の詳細については、マニュアル「ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム定義」を参照してください。

上記の見積もり式を満たすように排他制御用プールサイズを設定したら、「(b) アクセス日時を更新する (排他制御用プールサイズを変更した場合)」を参照してアクセス日時を更新します。

排他制御用プールサイズを変更できない場合のアクセス日時の更新手順については、「(c) アクセス日時を更新する (排他制御用プールサイズを変更できない場合)」を参照してください。

(b) アクセス日時を更新する (排他制御用プールサイズを変更した場合)

データベースサーバで次の SQL 文を実行して、cfsClass_File_CH および cfsClass_File_DV の「cfsProp_AccessTime」の値に 0 (1970/01/01 00:00:00) を設定します。

```
Update "cfsClass_File_CH" set "cfsProp_AccessTime" = 0;
Update "cfsClass_File_DV" set "cfsProp_AccessTime" = 0;
```

(c) アクセス日時を更新する (排他制御プールサイズを変更できない場合)

排他制御用プールサイズを変更できない場合は、「(a) 排他制御用プールサイズを設定する」に示す見積もり式を満たすように更新対象行数を絞り込んで、アクセス日時を更新します。

更新対象行数は「種別」、「作成日時」の優先順で絞り込みます。

更新対象行数を種別で絞り込む場合

データベースサーバで SQL 文を実行して、cfsClass_File_CH および cfsClass_File_DV の「cfsProp_AccessTime」の値に 0 (1970/01/01 00:00:00) を設定します。

このとき、SQL 文に種別の条件を指定して更新対象行数を減らします。

種別と SQL 文に指定する条件の対応を次に示します。

表 N-1 種別と SQL 文に指定する条件の対応

項番	種別	条件
1	個人フォルダのファイル	cfsProp_Type = 64
2	コミュニティフォルダのファイル	cfsProp_Type = 32
3	グループフォルダのファイル	cfsProp_Type = 512

実行する SQL 文を次に示します。

```
UPDATE "cfsClass_File_CH"
SET "cfsProp_AccessTime" = 0 where "cfsProp_Type" = 64;
UPDATE "cfsClass_File_CH"
SET "cfsProp_AccessTime" = 0 where "cfsProp_Type" = 32;
UPDATE "cfsClass_File_CH"
SET "cfsProp_AccessTime" = 0 where "cfsProp_Type" = 512;

UPDATE "cfsClass_File_DV"
SET "cfsProp_AccessTime" = 0 where "cfsProp_Type" = 64;
UPDATE "cfsClass_File_DV"
SET "cfsProp_AccessTime" = 0 where "cfsProp_Type" = 32;
UPDATE "cfsClass_File_DV"
SET "cfsProp_AccessTime" = 0 where "cfsProp_Type" = 512;
```

更新対象行数を作成日時で絞り込む場合

次の操作を cfsClass_File_CH と cfsClass_File_DV の両方に対して実行します。

1. データベースサーバで次の SQL 文を実行して、更新対象行数が「(a) 排他制御用プールサイズを設定する」に示す見積もり式を満たす数になるような「作成日時」を求めます。

```
SELECT COUNT(*) FROM "更新対象表名"
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

「更新対象表名」、「作成日時」および「種別」には、それぞれ次の値を指定します。

更新対象表名：「cfsClass_File_CH」または「cfsClass_File_DV」

作成日時：任意の日時 (UTC (万国標準時) の 1970/01/01 からの通算秒数)

種別：個人フォルダのファイルの場合「64」、コミュニティフォルダのファイルの場合「32」、グループフォルダのファイルの場合「512」

2. データベースサーバで次の SQL 文を実行して、1. で求めた作成日時以前に作成されたオブジェクトのアクセス日時を更新します。

```
UPDATE "更新対象表名"
SET "cfsProp_AccessTime" = 0
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別;
```

「更新対象表名」、「作成日時」および「種別」には、1.で指定した値を指定します。

3. 「作成日時」に指定する日時がこの手順を実行している日時になるまで、1.と2.の手順を繰り返します。
4. データベースサーバで次の SQL 文を実行して、1.で指定した種別のすべてのオブジェクトのアクセス日時を更新できたことを確認します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "更新対象表名"
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別
AND "cfsProp_AccessTime" <> 0
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

「更新対象表名」および「種別」には、1.で指定した値を指定します。

「作成日時」には、この手順を実行している日時を指定します。

該当する行数が0件であれば、1.で指定した種別のすべてのオブジェクトのアクセス日時が更新されています。

5. すべての種別のオブジェクトに対して、1.から4.の手順を実行します。

(6) 削除日時および振り分けルールの設定

(a) 排他制御用プールサイズを設定する

削除日時および振り分けルールを設定する前に、次の見積もり式を満たすように排他制御用プールサイズを設定します。

排他制御用プールサイズの見積もり式

$$\text{排他制御用プールサイズ} \geq \uparrow 1/a \uparrow^{\ast 1} \times \text{更新対象行数}^{\ast 2}$$

注※1

a：1KBの排他制御用プールサイズが必要になる排他要求の件数

HiRDBの種類によって異なります。マニュアル「ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム定義 (Windows(R)用)」を参照してください。

注※2

更新対象行数には、表 cfsClass_File_CH と表 cfsClass_Folder の行数のうち、大きい方を仮定します。表の行数は次の SQL 文を実行して取得します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "更新対象表名" WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

「更新対象表名」には「cfsClass_File_CH」または「cfsClass_Folder」を指定してください。

排他制御用プールサイズの見積もりおよび設定方法の詳細については、マニュアル「ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム定義」を参照してください。

上記の見積もり式を満たすように排他制御用プールサイズを設定したら、「(b) 削除日時および振り分けルールを設定する (排他制御用プールサイズを変更した場合)」を参照して削除日時および振り分けルールを更新します。

排他制御用プールサイズを変更できない場合の削除日時および振り分けルールの更新手順については、「(c) 削除日時および振り分けルールを設定する (排他制御用プールサイズを変更できない場合)」を参照してください。

(b) 削除日時および振り分けルールを更新する (排他制御用プールサイズを変更した場合)

データベースサーバで次の SQL 文を実行して、cfsClass_File_CH および cfsClass_Folder の「cfsProp_DeleteTime」の値に0を設定します。

```
Update "cfsClass_File_CH" set "cfsProp_DeleteTime" = 0;
Update "cfsClass_Folder" set "cfsProp_DeleteTime" = 0;
```

データベースサーバで次の SQL 文を実行して、cfsClass_File_CH および cfsClass_Folder の「cfsProp_SortingoutRule」の値に 0 を設定します。

```
Update "cfsClass_File_CH" set "cfsProp_SortingoutRule" = 0;
Update "cfsClass_Folder" set "cfsProp_SortingoutRule" = 0;
```

(c) 削除日時および振り分けルールを設定する（排他制御用プールサイズを変更できない場合）

排他制御用プールサイズを変更できない場合は、「(a) 排他制御用プールサイズを設定する」に示す見積もり式を満たすように更新対象行数を絞り込んで、削除日時および振り分けルールを更新します。

更新対象行数は「種別」、「作成日時」の優先順で絞り込みます。

更新対象行数を種別で絞り込む場合

データベースサーバで SQL 文を実行して、cfsClass_File_CH および cfsClass_Folder の「cfsProp_DeleteTime」および「cfsProp_SortingoutRule」の値に 0 を設定します。

このとき、SQL 文に種別の条件を指定して更新対象行数を減らします。

種別と SQL 文に指定する条件の対応を次に示します。

表 N-2 種別と SQL 文に指定する条件の対応

項番		ファイルまたはフォルダ	表名	種別
1	フォルダ	個人ルートフォルダ	cfsClass_Folder	8
2		個人フォルダのフォルダ		16
3		コミュニティルートフォルダ		1
4		ワークプレースルートフォルダ		2
5		コミュニティフォルダのフォルダ		4
6		グループルートフォルダ		128
7		グループフォルダのフォルダ		256
8	ファイル	個人フォルダのファイル	cfsClass_File_CH	64
9		コミュニティフォルダのファイル		32
10		グループフォルダのファイル		512

実行する SQL 文を次に示します。

```
UPDATE "cfsClass_File_CH"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 64;
UPDATE "cfsClass_File_CH"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 32;
UPDATE "cfsClass_File_CH"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 512;

UPDATE "cfsClass_Folder"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 8;
UPDATE "cfsClass_Folder"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 16;
UPDATE "cfsClass_Folder"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 1;
UPDATE "cfsClass_Folder"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 2;
UPDATE "cfsClass_Folder"
```

```
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 4;
UPDATE "cfsClass_Folder"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 128;
UPDATE "cfsClass_Folder"
SET "更新対象列名" = 0 where "cfsProp_Type" = 256;
```

「更新対象列名」には、次の値を指定します。

更新対象列名：「cfsProp_DeleteTime」または「cfsProp_SortingoutRule」

更新対象行数を作成日時で絞り込む場合

次の操作を cfsClass_File_CH と cfsClass_Folder の両方に対して実行します。

1. データベースサーバで次の SQL 文を実行して、更新対象行数が「(a) 排他制御用プールサイズを設定する」に示す見積もり式を満たす数になるような「作成日時」を求めます。

```
SELECT COUNT(*) FROM "更新対象表名"
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

「更新対象表名」、「作成日時」および「種別」には、それぞれ次の値を指定します。

更新対象表名：「表 N-2 種別と SQL 文に指定する条件の対応」に示す表名

作成日時：任意の日時 (UTC (万国標準時) の 1970/01/01 からの通算秒数)

種別：「表 N-2 種別と SQL 文に指定する条件の対応」に示す種別

2. データベースサーバで次の SQL 文を実行して、1.で求めた作成日時以前に作成されたオブジェクトの削除日時および振り分けルールを更新します。

```
UPDATE "更新対象表名"
SET "更新対象列名" = 0
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別;
```

「更新対象表名」、「作成日時」および「種別」には、1.で指定した値を指定します。

「更新対象列名」には、次の値を指定します。

更新対象列名：「cfsProp_DeleteTime」または「cfsProp_SortingoutRule」

3. 「作成日時」に指定する日時がこの手順を実行している日時になるまで、1.と2.の手順を繰り返します。
4. データベースサーバで次の SQL 文を実行して、1.で指定した種別のすべてのオブジェクトの削除日時および振り分けルールを更新できたことを確認します。

```
SELECT COUNT(*) FROM "更新対象表名"
WHERE "cfsProp_CreateTime" < 作成日時
AND "cfsProp_Type" = 種別
AND "更新対象列名" IS NULL
WITHOUT LOCK NOWAIT;
```

「更新対象表名」、「種別」および「更新対象列名」には、2.で指定した値を指定します。

「作成日時」には、この手順を実行している日時を指定します。

該当する行数が0件であれば、1.で指定した種別のすべてのオブジェクトの削除日時および振り分けルールが更新されています。

5. すべての種別のオブジェクトに対して、1.から4.の手順を実行します。

(7) uCosminexus Enterprise Search と連携し全文検索機能を使用する場合の設定

uCosminexus Enterprise Search と連携し全文検索機能を使用する場合は Web サービスの設定が必要です。

詳細は、マニュアル「Collaboration - Bulletin board システム管理者ガイド」の uCosminexus Enterprise Search と連携する場合の設定に関する説明を参照してください。

付録 O このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

付録 O.1 関連マニュアル

Collaboration のマニュアル体系を次に示します。

- Collaboration がどのようなものか、イメージをつかみたいときに

Collaboration
ファーストステップガイド

- 機能概要や操作方法を知りたいときに

Collaboration
ユーザーズガイド

Collaboration -
Online Community Management
ユーザーズガイド

Collaboration -
Directory Access
ユーザーズガイド

Collaboration - Mail
ユーザーズガイド

Collaboration - Schedule
ユーザーズガイド

Collaboration - Forum
ユーザーズガイド

Collaboration -
File Sharing
ユーザーズガイド

Collaboration -
Bulletin board
ユーザーズガイド

- システムの構築や環境設定の方法を知りたいときに

Collaboration
導入ガイド

- システムの移行方法を知りたいときに

Collaboration
移行ガイド

Collaboration -
Online Community Management
システム管理者ガイド

Collaboration -
Directory Access
システム管理者ガイド

Collaboration - Mail
システム管理者ガイド

Collaboration - Schedule
システム管理者ガイド

Collaboration - Forum
システム管理者ガイド

Collaboration -
File Sharing
システム管理者ガイド

Collaboration -
File Sharing
メッセージ

Collaboration -
Bulletin board
システム管理者ガイド

(凡例)

■ : Collaboration 共通、または Collaboration 全体の情報を記載しているマニュアルを示します。

□ : Collaboration のコンポーネントごとの情報を記載しているマニュアルを示します。

Collaboration のマニュアルおよびその他の関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

- Collaboration ファーストステップガイド (3020-3-H02)
Collaboration 製品を初めてお使いいただく方のためのご紹介マニュアルです。Collaboration でできることや、ポートレットの基本的な使用方法について説明しています。
- Collaboration ユーザーズガイド (3020-3-H22)

Collaboration の概要、ログイン・ログアウトおよび画面のレイアウト変更の操作方法について説明しています。

また、トップメニュー、ナビゲーションビュー、[新着情報] ポートレット、[リンク集] ポートレットの機能および操作方法について説明しています。

- Collaboration 導入ガイド (3020-3-H01)

Collaboration 製品を導入するための、システム構築、環境設定、および運用方法について説明しています。

- Collaboration 移行ガイド (3020-3-H44)

Collaboration のシステムの移行方法について説明しています。

エンドユーザ向けマニュアル

- Collaboration - Online Community Management ユーザーズガイド (3020-3-H04)

コミュニティ管理の機能および操作方法について説明しています。

- Collaboration - Directory Access ユーザーズガイド (3020-3-H06)

ユーザ検索の機能および操作方法について説明しています。

- Collaboration - Mail ユーザーズガイド (3020-3-H08)

メールの機能および操作方法について説明しています。

- Collaboration - Schedule ユーザーズガイド (3020-3-H10)

スケジュールの機能および操作方法について説明しています。

- Collaboration - Forum ユーザーズガイド (3020-3-H12)

電子会議室の機能および操作方法について説明しています。

- Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド (3020-3-H15)

ファイル共有の機能および操作方法について説明しています。

- Collaboration - Bulletin board ユーザーズガイド (3020-3-H24)

電子掲示板の機能および操作方法について説明しています。

システム管理者向けマニュアル

- Collaboration - Online Community Management システム管理者ガイド (3020-3-H03)

コミュニティ管理を利用するための環境設定および運用方法について説明しています。

- Collaboration - Directory Access システム管理者ガイド (3020-3-H05)

ユーザ検索を利用するための環境設定および運用方法について説明しています。

- Collaboration - Mail システム管理者ガイド (3020-3-H07)

メールを利用するための環境設定および運用方法について説明しています。

- Collaboration - Schedule システム管理者ガイド (3020-3-H09)

スケジュールを利用するための環境設定および運用方法について説明しています。

- Collaboration - Forum システム管理者ガイド (3020-3-H11)

電子会議室を利用するための環境設定および運用方法について説明しています。

- Collaboration - File Sharing メッセージ (3020-3-H14)

ファイル共有のメッセージの形式、メッセージおよび対処方法について説明しています。

- Collaboration - Bulletin board システム管理者ガイド (3020-3-H23)

電子掲示板を利用するための環境設定および運用方法について説明しています。

関連製品のマニュアル (HiRDB)

- ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム導入・設計ガイド (Windows(R)用) (3020-6-452)
HiRDB のシステムの構築方法、データベースの作成方法、およびシステムとデータベースの設計方法について説明しています。
- ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム定義 (Windows(R)用) (3020-6-453)
HiRDB のシステムの環境の定義について説明しています。
- ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム運用ガイド (Windows(R)用) (3020-6-454)
HiRDB のシステム運用方法、ユーザ権限の付与について知りたい場合やデータベースのバックアップ、リストアおよびジャーナルファイルの運用について説明しています。
- ノンストップデータベース HiRDB Version 9 コマンドリファレンス (Windows(R)用) (3020-6-455)
HiRDB のユティリティについて説明しています。
- ノンストップデータベース HiRDB Version 9 UAP 開発ガイド (3020-6-456)
データベースのバックアップ、リストアおよびジャーナルファイルの運用について説明しています。
- ノンストップデータベース HiRDB Version 9 SQL リファレンス (3020-6-457)
HiRDB の SQL の文法、ユーザ権限の付与で使用する GRANT 文の文法や詳細な注意事項、および HiRDB のデータ型の値の範囲について説明しています。
- HiRDB データ連動機能 HiRDB Datareplicator Version 8 (3020-6-360)
- HiRDB データ連動拡張機能 HiRDB Datareplicator Extension Version 8 (3020-6-361)
データベースのレプリケーション機能について説明しています。

関連製品のマニュアル (その他)

- uCosminexus Portal Framework システム管理者ガイド (3020-3-H71)
uCosminexus Portal Framework の機能およびポータルの構築方法について説明しています。
- uCosminexus Portal Framework 運用管理者ガイド (3020-3-H72)
ポータルの運用方法について説明しています。
- uCosminexus Portal Framework ポートレット開発ガイド (3020-3-H73)
ポートレットの開発方法および開発時に使用する API について説明しています。
- uCosminexus Enterprise Search 環境設定ガイド (3020-3-H90)
uCosminexus Enterprise Search の環境設定の方法について説明しています。
- uCosminexus Enterprise Search 運用ガイド (3020-3-H91)
uCosminexus Enterprise Search の運用方法について説明しています。
- uCosminexus Enterprise Search ユーザーズガイド (3020-3-H92)
uCosminexus Enterprise Search の使用方法について説明しています。
- uCosminexus Enterprise Search メッセージ (3020-3-H93)
uCosminexus Enterprise Search のメッセージについて説明しています。
- VisiBroker Version 5 Borland (R) Enterprise Server VisiBroker (R) デベロッパーズガイド (3020-3-U28)
- VisiBroker Version 5 Borland (R) Enterprise Server VisiBroker (R) プログラマーズリファレンス (3020-3-U29)

VisiBroker の使用方法について説明しています。VisiBroker のスマートエージェントを起動および接続する場合に参照してください。

- Hitachi Web Server (3020-3-U17)
Hitachi Web Server の環境設定について説明しています。
- TPBroker Version 5 トランザクショナル分散オブジェクト基盤 TPBroker ユーザーズガイド (3020-3-U19)
TPBroker の機能、環境設定、運用方法について説明しています。TPBroker システムを構築する場合に参照してください。
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用) (3020-3-L38)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2 (Windows(R)用) (3020-3-L39)
JP1/NETM/DM を利用して、File Sharing サーバをリモートインストールする場合に参照してください。

関連マニュアルの略称

このマニュアルで使用する関連マニュアルの略称を次に示します。

マニュアル名	略称
ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム導入・設計ガイド (Windows(R)用)	HiRDB システム導入・設計ガイド
ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム定義 (Windows(R)用)	HiRDB システム定義
ノンストップデータベース HiRDB Version 9 システム運用ガイド (Windows(R)用)	HiRDB システム運用ガイド
ノンストップデータベース HiRDB Version 9 コマンドリファレンス (Windows(R)用)	HiRDB コマンドリファレンス
ノンストップデータベース HiRDB Version 9 UAP 開発ガイド	HiRDB UAP 開発ガイド
ノンストップデータベース HiRDB Version 9 SQL リファレンス	HiRDB SQL リファレンス
HiRDB データ連動機能 HiRDB Datareplicator Version 8	HiRDB Datareplicator
HiRDB データ連動拡張機能 HiRDB Datareplicator Extension Version 8	
TPBroker Version 5 TPBroker ユーザーズガイド	TPBroker ユーザーズガイド
JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用)	JP1/NETM/DM システム運用
JP1 Version 8 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2 (Windows(R)用)	

付録 O.2 このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名を次のように表記しています。

表記	製品名
File Sharing	Collaboration - File Sharing または File Sharing クライアント <ul style="list-style-type: none"> • Groupmax Collaboration Portal のファイル共有機能 • Groupmax Collaboration Web Client - Forum/File Sharing のファイル共有機能

表記		製品名
File Sharing	Collaboration - File Sharing Server または File Sharing サーバ	• Groupmax Collaboration - File Server
HiRDB または HiRDB サーバ	HiRDB/Parallel Server	HiRDB Server Version 9
	HiRDB/Single Server	HiRDB Server Version 9(32)
HiRDB/Run Time		HiRDB/Run Time Version 9
JPI/NETM/Audit		JPI/NETM/Audit - Manager

付録 O.3 英略語

このマニュアルで使用する英略語を次に示します。

英略語	英字での表記
ACE	Access Control Element
ACL	Access Control List
AIIM	Association for Information and Image Management International
ASCII	American Standard Code for Information Interchange
BLOB	Binary Large Object
BOA	Basic Object Adapter
CORBA	Common Object Request Broker Architecture
CPU	Central Processing Unit
CR	Carriage Return
DAP	Directory Access Protocol
DB	Database
DLL	Dynamic Linking Library
DMA	Document Management Alliance
DN	Distinguished Name
EOF	End of File
GIF	Graphics Interchange Format
GUID	Globally Unique Identifier
HTML	Hypertext Markup Language
ID	Identifier
JIS	Japanese Industrial Standards
LDAP	Lightweight Directory Access Protocol

英略語	英字での表記
MIME	Multipurpose Internet Mail Extensions
OIID	Object Instance Identifier
OMG	Object Management Group
ORB	Object Request Broker
OS	Operating System
POA	Portable Object Adapter
RAS	Reliability, Availability, Serviceability
SGML	Standard Generalized Markup Language
TCP/IP	Transmission Control Protocol/Internet Protocol
UNC	Universal Naming Convention
UOC	User Own Coding
URI	Uniform Resource Identifier
URL	Uniform Resource Locator
UTF-8	8-bit UCS Transformation Format
WOW64	Windows On Windows 64

付録 O.4 KB (キロバイト) などの単位表記について

1KB (キロバイト), 1MB (メガバイト), 1GB (ギガバイト), 1TB (テラバイト) はそれぞれ $1,024$ バイト, $1,024^2$ バイト, $1,024^3$ バイト, $1,024^4$ バイトです。

付録 P 用語解説

File Sharing で使用する用語について説明します。

(英字)

CORBA (Common Object Request Broker Architecture)

OMG (Object Management Group) が提唱するオブジェクト間の通信メカニズムを提供する ORB (Object Request Broker) の標準アーキテクチャです。

DN (Distinguished Name)

LDAP に対応するディレクトリサーバでは、組織とユーザの階層をツリー構造で管理します。DN は、このツリー上にある各エントリを一意に識別するための識別名です。

DocumentSpace 構成定義ファイル (docspace.ini)

文書空間の構成を定義するために使用するファイルです。

LDAP (Lightweight Directory Access Protocol)

TCP/IP 上で動作する解放型 DAP を提供し、X.500 のデータモデルを保持するためのプロトコルです。ディレクトリサーバにアクセスするために使用します。

MIME 形式

MIME::text/plain, MIME::text/html など、File Sharing を使用して共有するファイルのレンディションタイプを表す形式です。なお、File Sharing では、「MIME::」は省略して指定します。

OIID (Object Instance Identifier)

すべてのオブジェクトにプロパティとして付けられている識別子です。OIID は、文書空間識別子、文書空間特有のオブジェクトの識別子などから構成され、次に示すように「dma://」で始まる URL の形式で定義されています。なお、…は、途中の省略を示します。

```
dma:///07a17522-a626-11d0-b11f-0020af27a837/...00000000001
```

OIID 指定ファイル

アクセス履歴ファイルに出力された OIID からファイルまたはフォルダの情報を取得するために使用するファイルです。

RD エリア

データベースの表、インデクスおよびデータディクショナリを格納するデータ領域のことです。データの格納単位の一つで、1~16 個の HiRDB ファイルから構成されます。

(ア行)

アクセス権

オブジェクトを作成したり、すでに作成されているオブジェクトにアクセスしたりする権利です。

アクセス制御機能

File Sharing サーバのファイルシステムや文書空間でのオブジェクトの作成や、管理されているオブジェクトに対する操作を、ユーザやグループごとに許可または制限する機能です。

アクセス履歴

[ファイル共有] ポートレットで、ユーザがファイルまたはフォルダにアクセスした履歴を記録した情報のことです。ファイルまたはフォルダに対して、「いつ」、「だれが」、「どんな操作をしたか」をアクセス履歴として取得できます。

アクセス履歴ファイル

アクセス履歴が出力されるファイルです。

インデクス情報ファイル

プロパティに定義するインデクスの情報が記述されているファイルです。

運用者権限

グループルートフォルダの下位にあるファイルおよびフォルダに対して、参照権、更新権、作成権およびアクセス権変更権を所有します。また、グループルートフォルダのアクセス権を設定することもできます。

オブジェクト操作ツール

File Sharing のシステムの運用・保守のために使用するツールです。

(力行)

監査ログ

監査ログとは、ユーザの File Sharing のポートレットに対する操作、コマンド実行による操作履歴のことです。監査ログはファイルに出力されます。監査者が監査ログを調査することで、「いつ」「だれが」「何をしたか」を知ることができます。

クラス定義情報ファイル

File Sharing サーバで定義されているクラス名やプロパティ名とユニークな識別子とを対応づけるファイルです。EDMCrtSimMeta コマンドで作成します。

グループ

グループとは、File Sharing でファイルを共有する組織やユーザの集まりのことです。

グループフォルダ

階層型の組織またはユーザでファイルを共有し、管理するためのフォルダのことです。

グループフォルダの運用者

グループルートフォルダとその下位にあるファイルまたはフォルダに対して、運用者権限で操作できる組織やユーザのことです。

グループルートフォルダ

グループフォルダを作成する場合に、グループフォルダの上位にシステム管理者が作成するフォルダのことです。

兼任

兼任とは、一人のユーザが複数の組織に所属したり、役職に就いたりすることです。

本来所属している組織のユーザを「主体ユーザ」と呼びます。

それ以外の組織に所属しているユーザを「兼任ユーザ」と呼びます。

兼任機能

兼任機能とは、主体ユーザと兼任ユーザを関連づけて、一人のユーザと見なす機能です。このため、主体ユーザのユーザ ID から兼任ユーザの情報を取得できます。

個人フォルダ

ユーザ個人が所有するファイルおよびフォルダを格納するためのフォルダの総称です。

個人ルートフォルダ

ポータルを経由して初めて File Sharing サーバにログインするときに、自動的に作成されるフォルダです。1 人のユーザーにつき、一つの個人ルートフォルダが作成されます。個人ルートフォルダの直下には、ファイルとフォルダの両方を登録できます。

コミュニティフォルダ

コミュニティで共有するファイルおよびフォルダを一元管理するためのフォルダの総称です。

コミュニティルートフォルダ

【コミュニティ管理】ポートレットでワークスペースを作成するときに、ワークスペースルートフォルダとともに自動的に作成されるフォルダです。一つのコミュニティにつき、一つのコミュニティルートフォルダが作成されます。コミュニティルートフォルダの直下には、ワークスペースルートフォルダだけが作成されます。

(サ行)

最大許容サイズ情報

ルートフォルダに割り当てる最大許容サイズを設定した情報です。

【最大許容サイズ情報操作】画面

システム管理者が、File Sharing で管理する個人ルートフォルダ、グループルートフォルダ、およびワークスペースルートフォルダの最大許容サイズ情報を参照、追加および削除するための画面です。

【最大許容サイズ情報操作】画面の操作方法については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

最大使用可能容量（ベースパス情報）

ベースパス情報の使用量の上限です。最大許容サイズを設定する運用の場合に、システム管理者が設定します。

最大予約可能容量（ベースパス情報）

ベースパス情報の予約量の上限です。最大許容サイズを設定する運用の場合に、システム管理者が設定します。

システム管理者

File Sharing を運用、管理および保守するユーザーです。

システム導入支援機能

データベース容量の見積もり、および新規に文書空間を構築するための設定を支援する機能です。

実行環境制御ファイル

オブジェクト操作ツールの実行環境を定義するファイルです。

使用量（ベースパス情報）

ベースパス情報のパスがベースパスとして設定されているルートフォルダについて、各ルートフォルダの使用済みサイズを合計した値のことで。

セキュリティ運用者

File Sharing のアクセス制御の運用情報の管理者です。セキュリティ定義ファイルを保守します。

セキュリティ管理者

File Sharing に登録されたすべてのファイルおよびフォルダに対して、全アクセス権限を所有するユーザーです。セキュリティ定義ファイルに定義します。

セキュリティ定義ファイル

アクセス制御の運用情報を定義するファイルです。セキュリティ管理者を定義します。

セッション

文書空間に接続している間のことです。文書空間に接続することを、セッションの確立といいます。文書空間との接続を解除することを、セッションの切断といいます。

組織情報取得ライブラリ

指定した組織の上位組織の属性情報、または指定したユーザが所属する組織の属性情報をディレクトリサーバから取得するためのライブラリです。ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルに、組織情報取得ライブラリおよびディレクトリサーバの設定を定義します。

(夕行)

定義情報ファイル

オブジェクトを定義するファイルです。このファイルに定義されている情報は、メタ情報として追加されます。

動作環境メタ情報ファイル

File Sharing を起動するときに参照するメタ情報です。[File Sharing Server のインストールディレクトリ]*Server*etc *meta_files] に格納されます。

独立データ

ほかのオブジェクトに依存しない独立したオブジェクトです。個人情報、コミュニティ情報、最大許容サイズ情報、およびベースパス情報が該当します。

(八行)

パーソナライズ情報

Collaboration のポータル画面のレイアウトや設定内容など、ユーザがカスタマイズした情報です。File Sharing の場合は、[ファイル共有] ポートレットの [設定] 画面で設定した内容がパーソナライズ情報に当たります。

ファイル

File Sharing で扱うファイルを管理するための属性情報とファイル実体によって構成される概念です。属性情報はデータベースに格納されて管理されます。ファイル実体はファイルシステムに格納されて管理されます。

[ファイル共有設定] ポートレット

システム管理者が、File Sharing で管理する個人ルートフォルダ、グループルートフォルダ、およびワークスペースルートフォルダのベースパス情報や最大許容サイズ情報をポータル上で操作するための画面です。

[ファイル共有設定] ポートレットの操作方法については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

[ファイル共有] ポートレット

File Sharing が管理するファイルおよびフォルダをポータル上で操作するための画面です。Web ブラウザを使用して操作できます。

ファイル転送機能

File Sharing サーバに接続する File Sharing クライアントが異なるマシン上に存在する場合に、File Sharing サーバと File Sharing クライアントの間でファイルを転送する機能です。

フォルダ

File Sharing で扱うフォルダを管理するための属性情報とフォルダに格納するファイルとの関連づけについての情報で構成される概念です。これらの情報はデータベースに格納されて管理されます。

File Sharing で扱うフォルダには、個人フォルダとコミュニティフォルダがあります。

文書空間

File Sharing サーバが管理するメモリ空間です。File Sharing が管理するファイルの属性情報やフォルダなどのオブジェクトの構成が定義されているリポジトリとしても位置づけられます。

文書空間情報ファイル

システム導入支援機能を使用する場合に使用する、文書空間のアクセス制御情報や使用する RD エリア名を定義するファイルです。このファイルは、EDMCDefDocSpace（文書空間の定義）コマンドの入力ファイルとなります。

ベースパス

ファイル実体の格納先として指定するファイルシステム上のディレクトリパスのことです。

ベースパス情報

ベースパスについて設定した情報です。

[ベースパス情報操作] 画面

システム管理者が、File Sharing で管理する個人ルートフォルダ、グループルートフォルダ、およびワークスペースルートフォルダのベースパス情報を参照、追加および削除するための画面です。

[ベースパス情報操作] 画面の操作方法については、マニュアル「Collaboration - File Sharing ユーザーズガイド」を参照してください。

(マ行)

見積もり基礎情報ファイル

データベース容量を見積もるときの基データとして使用するファイルです。このファイルは、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) を実行すると、出力されます。

見積もり情報定義ファイル

システム導入支援機能を使用する場合に、データベース容量の見積もりに使用する情報を定義するファイルです。このファイルは、文書空間の定義コマンド (EDMCDefDocSpace) の入力ファイルとなります。

メタ情報ファイル

File Sharing で使用するクラスやプロパティなどについての定義情報（メタ情報）が記述されている初期設定用のファイルです。File Sharing サーバは、このメタ情報を基にデータベース定義文を出力します。

(ヤ行)

予約量（ベースパス情報）

ベースパス情報のパスがベースパスとして設定されているルートフォルダについて、各ルートフォルダの最大許容サイズを合計した値のことです。

(ラ行)

リファレンスファイル管理機能

File Sharing サーバから接続するファイルシステムの任意のディレクトリでファイルを管理し、ファイルのプロパティおよびファイルの格納先の情報をデータベースで管理する機能です。

レンディション

ファイルの実体（Word やテキストエディタなどのアプリケーションプログラムで作成されたファイル）と、ファイルの形式を表すレンディションタイプ（MIME 形式）などの情報を併せた概念です。

レンディションタイプ

Word などのアプリケーションで編集したファイル、HTML 形式のファイル、GIF などの画像データのファイルといった、File Sharing を使用して共有するファイルの形式を表す文字列です。レンディションごとに設定できます。

レンディション定義ファイル

ファイルの拡張子とレンディションタイプ（MIME 形式）の対応を定義するファイルです。File Sharing を使用して共有するファイルの拡張子によってレンディションタイプ（MIME 形式）を自動的に判別して設定する場合に参照されます。

(ワ行)

ワークプレースルートフォルダ

[コミュニティ管理] ポートレットでワークプレースを作成するときに、コミュニティルートフォルダの直下に自動的に作成されるフォルダです。ワークプレースルートフォルダの直下には、ファイルとフォルダの両方を登録できます。

索引

記号

_HIEDMS_TRACE_KEEP_DAYS 341
_HIEDMS_TRACE_LEVEL 341
_HIEDMS_TRACE_NUM 341
_HIEDMS_TRACE_SIZE 341

A

AccessControl エントリ 124
AcLogFileCount エントリ 93
AcLogFileSize エントリ 93
AcLogLevel エントリ 92
AcLogUse エントリ 92
APErrorLogNumber 136
APErrorLogSize 137
application.ini 157
APTraceLevel 135
APTraceNumber 136
APTracePath 135
APTraceSize 136
AP エラーログおよびコマンドエラーログの切り替え
ファイル数 136
AP エラーログおよびコマンドエラーログの最大サイ
ズ 137
AP トレースおよびコマンドトレースの切り替えファ
イル数 136
AP トレースおよびコマンドトレースの出力ディレク
トリのパス 135
AP トレースおよびコマンドトレースの出力レベル
135
AP トレースファイルおよびコマンドトレースファイ
ルの最大サイズ 136
Area Name エントリ 129
AvBindPublicACLCount エントリ 124
AvCntrCountPerCntr エントリ 117
AvCntrTreeHeight エントリ 117
AvColumn Length エントリ 129
AvContentSize エントリ 117
AvContent Size エントリ 129
AvLength エントリ 117
AvLocalACECount エントリ 124
AvSecurityACECount エントリ 125

B

BelongOrgAttr エントリ 102

BindDn エントリ 101
BindPwd エントリ 101
BufferSize エントリ 110

C

cfsaddgrpmngr 307
cfsaddgrpprm 308
cfsauth.ini 96
cfschgcode 310
cfschggrpfldr 311
cfschkusdspc 312
cfsctrgpffdrr 313
cfsdelgrpmngr 316
cfsdelgrpprm 318
cfsexpfile 320
cfslstad 324
cfslstfldr 327
cfslstprop 328
cfslstqt 331
cfsmodgrpprm 334
cfsoiid2name 336
Collaboration のサーバ 5
Column Count エントリ 129
Column Length エントリ 129
Column Name エントリ 129
conf.properties 134
conf ファイルの記述例 348
ConnectionScope エントリ 110
CORBA 487
Count エントリ 89

D

Data Type エントリ 129
DBConnectionPoolCount エントリ 91
DBConnectionPoolDynamic エントリ 91
DBConnectionPoolOver エントリ 91
DBConnectionPoolTiming エントリ 91
DBConnectionPoolWaitTimeOut エントリ 92
DBConnectionScope エントリ 92
DBR_CON_TIMEOUT 67
DBR_CONNECTSV_ENVID 67
DBR_DETAIL_ERRORLOG 67
DBR_DETAIL_ERRORLOG_DIR 67
DBR_DETAIL_ERRORLOG_NUM 68
DBR_DETAIL_ERRORLOG_SIZE 68

dbrcrtdata 297
 dbrdelacl 297
 dbrdelcntr 298
 dbrdeldata 299
 dbrexquery 300
 dbrgetprop 301
 dbrsetprop 301
 dbrtoolsetup 302
 DbType エントリ 91
 DB コネクションプール 46
 DB コネクション割り当て待ち時間の監視 46
 DefaultDocSpaceId 134
 Directory エントリ 154
 DN 487
 docaccess.ini 95
 docspace.ini 86
 DocSpaceCharacterSet エントリ 125
 DocSpaceId エントリ 153
 DocSpaceVBProperty エントリ 89
 DocTblName エントリ 126
 DocumentSpace 構成定義ファイル 86, 487
 DocumentSpace 構成定義ファイルの記述例 94

E

EDMAddMeta 266
 EDMCBuildDocSpace 267
 EDMCDefDocSpace 269
 EDMChkTbl 271
 EDMCLASSDEFPATH 68
 EDMCrtSimMeta 272
 EDMCrtSql 273
 EDMDaemon.exe 11
 EDMDelMeta 274
 EDMGetRas 275
 EDMGetRasCL 288
 EDMInitMeta 277
 EDMOotCtrl.ini 152
 EDMPrintMeta 279
 EDMRefresher 279
 EDMRegEnvId 280
 edms.ini 86
 EDMService.exe 12
 EDMSrvCtrl.exe 11
 EDMSrvMgr.exe 12
 EDMStart 282
 EDMStart.exe 11
 EDMStop 282
 EDMStop.exe 11
 EDMUsrView 283

EnbFncFlagOfObjectOperation エントリ 94
 ErrChkFlagOfObjectOperation エントリ 94
 ErrLogFileCount エントリ 89
 ErrLogFileSize エントリ 89

F

FileCount エントリ 154
 File Sharing 2
 File Sharing 01-10 からの移行手順 416
 File Sharing 01-20 からの移行手順 424
 File Sharing 01-30 からの移行手順 456
 File Sharing 01-32 からの移行手順 460
 File Sharing 01-35 または 01-36 からの移行手順 463
 File Sharing 01-50, 01-52 または 01-70 からの移行手順 467
 File Sharing 01-82 からの移行手順 468
 File Sharing クライアント 5
 File Sharing クライアントで使用するファイル 131
 File Sharing クライアントで発生した障害情報の取得 360
 File Sharing クライアントの一時ディレクトリディスク容量 21
 File Sharing クライアントのインストールとアンインストール 40
 File Sharing クライアントの環境変数 67
 File Sharing クライアントの実行環境の作成 67
 File Sharing クライアントの障害情報取得カスタマイズファイル 158
 File Sharing クライアントの障害情報の取得 288
 File Sharing クライアントのディレクトリ構成 365
 File Sharing クライアントのメモリ所要量 20
 File Sharing クライアントを構成するプログラム 9
 File Sharing サーバ 6
 File Sharing サーバシステムでの障害 355
 File Sharing サーバ実行環境の情報の登録 280
 File Sharing サーバで使用するファイル 86
 File Sharing サーバでの障害 358
 File Sharing サーバで発生した障害情報の取得 359
 File Sharing サーバのアンインストール 38
 File Sharing サーバのインストール 37
 File Sharing サーバの起動 282
 File Sharing サーバの起動方法 206
 File Sharing サーバのコマンド 262
 File Sharing サーバの終了 282
 File Sharing サーバの終了方法 208
 File Sharing サーバの障害情報取得カスタマイズファイル 112
 File Sharing サーバの障害情報の取得 275

File Sharing サーバのディスク占有量 21
 File Sharing サーバのディレクトリ構成 364
 File Sharing サーバのプロセス構成 11
 File Sharing サーバのメモリ所要量 20
 File Sharing サーバのリモートインストール 38
 File Sharing サーバプロセス数の設定 414
 File Sharing サーバを構成するプログラム 9
 File Sharing で出力される監査ログの流れ 249
 File Sharing の監査ログの取得対象となる監査事象 249
 File Sharing のシステム構成 8
 File Sharing 用 conf ファイル 347
 File Sharing 用データベース定義文の作成 273
 FileSize エントリ 154
 Format エントリ 155
 FtpBufferSize エントリ 94
 FtpProcessVBProperty エントリ 132
 FtpSessionMax エントリ 132
 FtpSv.exe 70
 ftpsv.ini 131
 FtpSvMng.exe 70
 FtpSvStart 291
 FtpSvStart.exe 70
 FtpSvStop 291
 FtpSvStop.exe 70
 FtpSvSvc.exe 70
 FtpVBProperty エントリ 132

G

getrascustom.ini 112, 158

H

HiRDB 50
 HiRDB の環境設定 50
 HiRDB のユーザ権限の設定 53
 Host エントリ 99
 hptl_clb_cfs_AccessData 143
 hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption 144
 hptl_clb_cfs_AccessDataFilteringOption2 145
 hptl_clb_cfs_AccessDataPath 143
 hptl_clb_cfs_AccessDataSize 143
 hptl_clb_cfs_AccessDataStartMode 146
 hptl_clb_cfs_ADThresholdForMaxUsableSpace 141
 hptl_clb_cfs_AssignmentModeForNoFreeSpace 139
 hptl_clb_cfs_AssignmentModeForUsedCountMax 140

hptl_clb_cfs_CheckPointOfFileize 142
 hptl_clb_cfs_ContentsMaxCount 148
 hptl_clb_cfs_ContentsMessageCount 149
 hptl_clb_cfs_ContentsUnitCount 149
 hptl_clb_cfs_DownloadDocDir 139
 hptl_clb_cfs_FetchModeForTotalObjectList 140
 hptl_clb_cfs_GroupFolderPermSettingMode 148
 hptl_clb_cfs_MailSorting 149
 hptl_clb_cfs_numOfObjectList 138
 hptl_clb_cfs_numOfObjectListForSearchWindow 141
 hptl_clb_cfs_PersonalInheritPerm 146
 hptl_clb_cfs_ReadFileDir 139
 hptl_clb_cfs_searchTimeOut 141
 hptl_clb_cfs_SecurityAdministratorID 138
 hptl_clb_cfs_SetMailList 149
 hptl_clb_cfs_SetPersonalPermForSendURL 147
 hptl_clb_cfs_Shortcut 150
 hptl_clb_cfs_TrashCan 150
 hptl_clb_cfs_UploadMaxFileSize 142
 hptl_clb_cfs_UserAddWinSelTab 146
 hptl_clb_cfs.properties 137
 HTML マニュアル 37

I

Index Name エントリ 128
 InstanceCount エントリ 116

J

J2EE サーバの VM 起動オプション 75
 J2EE サーバの起動プロセス標準出力および標準エラー出力の出力先 137
 JP1/NETM/DM 38

K

Key Kind エントリ 129

L

LDAP 487
 Level エントリ 153
 LineSize エントリ 155

M

MainPostUidAttr エントリ 104
 MetaIdxName エントリ 126
 MetaTblName エントリ 126

Microsoft Cluster Server を使用したクラスタリング
システムでの運用 368
mime.properties 133
MIME 形式 133, 487

N

netaccess.ini 109
NumOfConnect エントリ 100
NumOrgSearchUnit エントリ 104

O

OIID 223, 487
OIID 指定ファイル 330
OIID 指定ファイル [用語解説] 487
OperationTimeout エントリ 100
OrgBaseDn エントリ 102
OrgKeyAttr エントリ 103
OrgObjectClass エントリ 102
OrgScope エントリ 102
OuAttr エントリ 103

P

ParentOrgAttr エントリ 103
Password エントリ 100, 111, 153
PdHost エントリ 91
pdmod 50
PdNamePort エントリ 91
PdUser エントリ 91
Port エントリ 99, 101
Prefix エントリ 154
process.ini 108
ProcessVBProperty エントリ 90
Process エントリ 90
PromptOutput 137
PublicACLCount エントリ 124

R

RAS 収集 347
RAS 収集用プロパティファイル 347
RD エリア 487
RD エリア定義情報ファイル 106
RD エリア定義情報ファイルの記述例 107
Record Count エントリ 128
Record Length エントリ 129
ReferenceFile エントリ 125
RootCntrCount エントリ 117

S

Schema エントリ 99
SearchTimeout エントリ 100
SecurityAdmin エントリ 96
SelectServerInMultiServer エントリ 94
SerialId エントリ 90
Server エントリ 101
SessionMax エントリ 90
SessionTimeOut エントリ 90
SgmlTblName エントリ 126
slocalreg.ini 86
SysIdxName エントリ 126
SysTblName エントリ 126
System Object INI ファイル 86
System Object INI ファイルの記述例 86

T

Table Name エントリ 128
TPBroker システムの構築 44
TPBroker での環境設定 [File Sharing クライアント
の場合] 66
TPBroker での環境設定 [File Sharing サーバの場合]
44
TraceFileName エントリ 101
TraceFileSize エントリ 100
TraceLevel エントリ 100
TraceNumber 135
TraceNumFiles エントリ 100
TracePath 134
TraceSize 135
TypeOfBelongOrgAttr エントリ 102
TypeOfOu エントリ 103
TypeOfParentOrgAttr エントリ 103

U

UOCLibrary エントリ 90
UserAuthentication エントリ 90
UserBaseDn エントリ 101
UserIdAttr エントリ 102
UserKeyAttr エントリ 102
UserName エントリ 110, 153
UserObjectClass エントリ 101
UserScope エントリ 102
User エントリ 99
usrconf.cfg 75
UsrIdxName エントリ 126
UsrTblName エントリ 126

V

- VarrayElementCheck エントリ 94
- VBProperty エントリ 109, 133, 158
- VM 起動オプション 75

W

- Web ブラウザ 10

X

- XdkShmemManage エントリ 93
- XdkShmemSize エントリ 93

あ

- アクセス権 487
- アクセス制御機能 487
- アクセス制御機能に関する設定 48
- アクセス履歴のアクセス履歴ファイルへの出力方法 146
- アクセス履歴の出力 143
- アクセス履歴の取得 240
- アクセス履歴ファイルが使用できるディスク容量 143
- アクセス履歴ファイルに出力された OIID の変換 336
- アクセス履歴ファイルに出力されたファイル、フォルダの情報の取得 328
- アクセス履歴ファイルの出力先ディレクトリ 143
- アクセス履歴ファイル [用語解説] 488
- アクセス履歴 [用語解説] 487
- アクセス履歴を出力するユーザの操作 144
- アクセス履歴を出力するユーザの操作 145
- アクセス履歴を取得するための設定 77
- アクセス履歴を取得する場合のディスク容量 22
- アクセスログ 348
- アプリケーションサーバの設定 75
- アンインストール 38
- アンインストール時の注意事項 38

い

- 一時コネクションの割り当て 46
- インストール 37
- インストール開始画面 37
- インストール先 37
- インストール時のトラブル 374
- インストール情報 37
- インデクス情報ファイル 107, 488

う

- 運用 203

- 運用者権限 488

え

- エクスポートコマンドでコンテンツ格納ディレクトリに格納するコンテンツ数 149
- エクスポートコマンドでコンテンツデータファイルへ記述するコンテンツデータの最大数 148
- エクスポートコマンドのメッセージの通知単位 149
- エラーログ 350

お

- オブジェクト 6
- オブジェクト操作ツール 488
- オブジェクト操作ツールの実行ユーザ 78
- オブジェクト操作ツールの設定 78
- オブジェクト定義ファイル 86
- オブジェクト定義ファイルの記述例 86

か

- 環境設定に必要なファイル 81
- 環境設定用プロパティファイル 137
- 環境設定用プロパティファイルの記述例 151
- 環境変数 67
- 環境変数の設定 72, 73, 78
- 監査ログ 488
- 監査ログが出力される操作 250
- 監査ログに出力されるオブジェクト情報 254
- 監査ログに出力される動作情報 254
- 監査ログの運用 249
- 監査ログの運用時の注意事項 259
- 監査ログの出力形式 257, 258
- 監査ログの出力項目 257
- 監査ログの取得対象となる監査事象 250
- 監査ログを出力するための設定 257
- 管理用ディレクトリ 56

き

- 起動プロセス 11
- 基本プロセス構成 11

く

- クライアントアプリケーション動作定義ファイル 157
- クラス 6
- クラスタリングシステムで運用するための環境設定 369
- クラスタリングシステムでの File Sharing サーバの起動と終了 373

クラスタリングシステムでの運用 368
 クラス定義情報ファイル 131, 488
 クラス定義情報ファイルの作成 272
 グループ 488
 グループフォルダ 488
 グループフォルダにおける下位のフォルダへのアクセス権の設定 148
 グループフォルダの運用 229
 グループフォルダの運用者 488
 グループフォルダの運用者の設定 233
 グループフォルダの運用例 229
 グループフォルダの利用者の設定 233
 グループフォルダを運用するための作業の一覧 231
 グループルートフォルダ 488
 グループルートフォルダの削除 234
 グループルートフォルダの非表示化 233

け

検索結果のページ当たりの表示件数 141
 検索のタイムアウト時間 141
 兼任機能〔用語解説〕 488
 兼任ユーザ〔用語解説〕 488
 兼任〔用語解説〕 488

こ

更新インストール 38
 個人フォルダ 488
 個人フォルダとコミュニティフォルダの運用 222
 個人フォルダのファイルの配布 URL をメールで送信時の宛先の設定 147
 個人フォルダのファイルまたはフォルダ作成時のアクセス権の初期状態 146
 個人ルートフォルダ 489
 個人ルートフォルダの削除 223
 コマンド 261
 コマンド一覧 262, 287, 293
 コマンド実行ログ 351
 コマンド実行ログの出力例 353
 コマンドの形式 263, 287
 ごみ箱の使用 150
 コミュニティフォルダ 489
 コミュニティルートフォルダ 489
 コミュニティルートフォルダの削除 225
 コンポーネント間データ転送時のダウンロード用一時ディレクトリ 139

さ

サーバ監視プロセス 11

サービス起動制御プロセス 11
 サービスプロセス 12, 46
 サービスプロセス監視プロセス 12
 サービスプロセス定義ファイル 108
 サービスプロセス定義ファイルの記述例 109
 サービスプロセスの設定 60
 サービスプロセスのリフレッシュ 279
 最大許容サイズ 170
 最大許容サイズ情報 489
 [最大許容サイズ情報操作] 画面 489
 最大許容サイズ情報の設定〔運用開始後〕 238
 最大許容サイズ情報の設定〔運用開始前〕 198
 最大使用可能容量に対する空き容量〔ベースパス情報〕 168
 最大使用可能容量〔ベースパス情報〕 168
 最大使用可能容量〔用語解説〕 489
 最大予約可能容量に対する空き容量〔ベースパス情報〕 168
 最大予約可能容量の見積もり 182
 最大予約可能容量〔ベースパス情報〕 168
 最大予約可能容量〔用語解説〕 489

し

システム運用コマンド 262
 システム管理者 489
 システム管理者の決定 36
 システム構成 8
 システム導入支援機能 489
 システム導入支援機能を使用しない場合の設定 380
 システム導入支援コマンド 262
 実行環境制御ファイル 152, 489
 実行環境制御ファイルの記述例 156
 実行環境のセットアップ 302
 ジャーナルファイルの運用 213
 主体ユーザ〔用語解説〕 488
 種別〔最大許容サイズ情報〕 170
 種別〔ベースパス情報〕 168
 障害情報取得カスタマイズファイル 112, 158
 障害対策 339
 障害発生個所による対処 355
 障害発生時に利用できる情報 340
 条件種別〔最大許容サイズ情報〕 170
 条件種別〔ベースパス情報〕 168
 条件値〔最大許容サイズ情報〕 170
 条件値〔ベースパス情報〕 168
 詳細メッセージ 340
 使用数〔ベースパス情報〕 168
 使用するベースパス情報の使用数が上限値の場合の動作 140

状態 [ベースパス情報] 168
 使用量 [ベースパス情報] 168
 使用量 [用語解説] 489
 ショートカットの使用 150

す

スマートエージェントの設定 44

せ

セキュリティ運用者 48, 489
 セキュリティ管理者 48, 138, 489
 セキュリティ定義ファイル 95, 490
 セキュリティ定義ファイルの記述例 96
 セッション 490
 セッション障害 356
 セットアップタイプ 37
 前提 OS 10
 前提プログラム 8

そ

属性情報 3
 組織/ユーザ情報ファイル 158
 組織情報取得ライブラリ 490
 組織情報取得ライブラリのトレースファイルの要因別の対策一覧 343

て

定義情報の障害 357
 定義情報ファイル 105, 490
 停止プロセス 11
 ディスク占有量の見積もり 21
 ディレクトリ構成 364
 データベース運用コマンド 262
 データベースサーバ 6
 データベースサーバでの環境設定 50
 データベースサーバを使用するための設定 54
 データベースでの障害 355
 データベースの運用 211
 データベースの表・列の確認 271
 データベース容量の見積もり 24
 データベース容量の見積もり時の注意事項 35
 デフォルトの最大許容サイズ情報の登録 192
 デフォルトのベースパス情報の登録 189

と

問い合わせの実行 300
 統合インストーラ 40

動作環境定義ファイル 134
 動作環境メタ情報ファイル 364, 490
 独立データ 490
 独立データの削除 299
 トラブルシュートコマンド 262
 トレース出力ディレクトリのパス 134
 トレースの切り替えファイル数 135
 トレースの出力レベル 341
 トレースファイル 340
 トレースファイルの最大サイズ 135
 トレースファイルの保存日数 341

な

名前 [ベースパス情報] 168

ね

ネットワークリソース情報ファイル 109

は

パーソナライズ情報 490
 パーソナライズ情報の見積もり 19
 媒体からのインストール時のトラブル 374
 パス [ベースパス情報] 168
 バックアップとリストア 211, 220
 バックアップの取得 213
 パブリック ACL 223
 パブリック ACL の削除 297

ふ

ファイル 3, 490
 ファイル/フォルダ一覧などの表示結果の取得件数 140
 [ファイル共有設定] ポートレット 490
 [ファイル共有] ポートレット 490
 [ファイル共有] ポートレットでの [ファイルの新規登録] および [ファイルの更新] の操作時にファイルサイズをチェックするタイミング 142
 [ファイル共有] ポートレットでの [ファイルの新規登録] および [ファイルの更新] の操作で扱えるファイルサイズの上限 142
 ファイルシステムでの障害 356
 ファイルシステムの運用 215
 ファイルシステムの見積もり 182
 ファイルシステムの容量の見積もり [最大許容サイズを設定しない運用の場合] 188
 ファイル実体 3
 ファイル実体の格納先ディレクトリの運用方法 220
 ファイル転送機能 490

ファイル転送機能の概要 69
 ファイル転送機能のための File Sharing クライアントでの環境設定 72
 ファイル転送機能のための File Sharing サーバでの環境設定 73
 ファイル転送機能を使用する場合の設定 69
 ファイル転送サービス開始プロセス（静的モードの場合） 70
 ファイル転送サービス開始モード 69
 ファイル転送サービス環境定義ファイル 131
 ファイル転送サービス環境定義ファイルの記述例 133
 ファイル転送サービス監視プロセス（静的モードの場合） 70
 ファイル転送サービス停止プロセス（静的モードの場合） 71
 ファイル転送サービスの開始 291
 ファイル転送サービスの開始方法 209
 ファイル転送サービスの開始モードの設定 73
 ファイル転送サービスの停止 291
 ファイル転送サービスの停止方法 209
 ファイル転送サービスの登録 72
 ファイル転送サービスのプロセス構成 69
 ファイル転送サービスのメモリ所要量の見積もり 73
 ファイル転送サービスプロセス 70
 ファイルの種類 82
 ファイル分割転送機能の設定 74
 フォルダ 3, 491
 フォルダの削除 298
 複数の実行環境を構築する場合の設定 61
 振り分けルールを設定したフォルダのファイル/フォルダ一覧での表示の初期状態 149
 プロセス構成 11
 プロセスの関連 12
 プロパティ 6
 プロパティの取得 301
 プロパティの設定 301
 文書空間 7, 491
 文書空間識別子の定義 45
 文書空間情報ファイル 491
 文書空間情報ファイル (CfsDocinfo.txt) 121
 文書空間情報ファイルの編集 27
 文書空間に接続しているユーザー一覧出力 283
 文書空間の構築 55, 267
 文書空間の定義 46, 269
 文書空間の文字コード種別を Shift-JIS から UTF-8 に変更する手順 396
 文書空間を定義する前の準備 46

 へ

ベースパス 56, 491
 ベースパス情報 56, 491
 [ベースパス情報操作] 画面 491
 ベースパス情報の空き容量がない場合の動作 139
 ベースパス情報の最大使用可能容量のしきい値 141
 ベースパス情報の最大予約可能容量の見積もり [最大使用可能容量よりも大きな値を設定する場合] 215
 ベースパス情報の使用量の監視 217
 ベースパス情報の設定 [運用開始後] 237
 ベースパス情報の設定 [運用開始前] 194

 ほ

ポートレット機能使用時のダウンロード用一時ディレクトリ 139
 ポートレット機能の設定 75
 保守員への連絡 374

 み

見積もり基礎情報ファイル 127, 491
 見積もり情報定義ファイル 113, 491
 見積もり情報定義ファイルの編集 27

 め

メールの振り分けルールの使用 149
 メタ情報の削除 274
 メタ情報の初期設定 277
 メタ情報の追加 266
 メタ情報ファイル 105, 491
 メタ情報ファイルの出力 279
 メッセージ 340
 メモリ所要量とディスク占有量の見積もり 20
 メモリ所要量の見積もり 20

 ゆ

[ユーザ追加]画面の初期状態 146
 ユーザ認証に関する設定 49
 ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイル 96
 ユーザ認証ライブラリ環境定義ファイルの記述例 104
 ユーザ用 RD エリアの容量の見積もり 24

 よ

予約量 [ベースパス情報] 168
 予約量 [用語解説] 491

り

- リストアの方法 213
- リファレンス種別 155
- リファレンスファイル管理機能 492
- リモートインストール 38
- リモートインストール時のトラブル 378

れ

- レプリケーション 214
- レンディション 492
- レンディションタイプ 492
- レンディション定義ファイル 133, 492
- レンディション定義ファイルの記述例 134
- レンディション定義ファイルの注意事項 134

ろ

- ログの障害 357

わ

- ワークプレースルートフォルダ 492